

西新町遺跡Ⅲ

—福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第12次調査報告 2—

福岡県文化財調査報告書第157集

2001

福岡県教育委員会

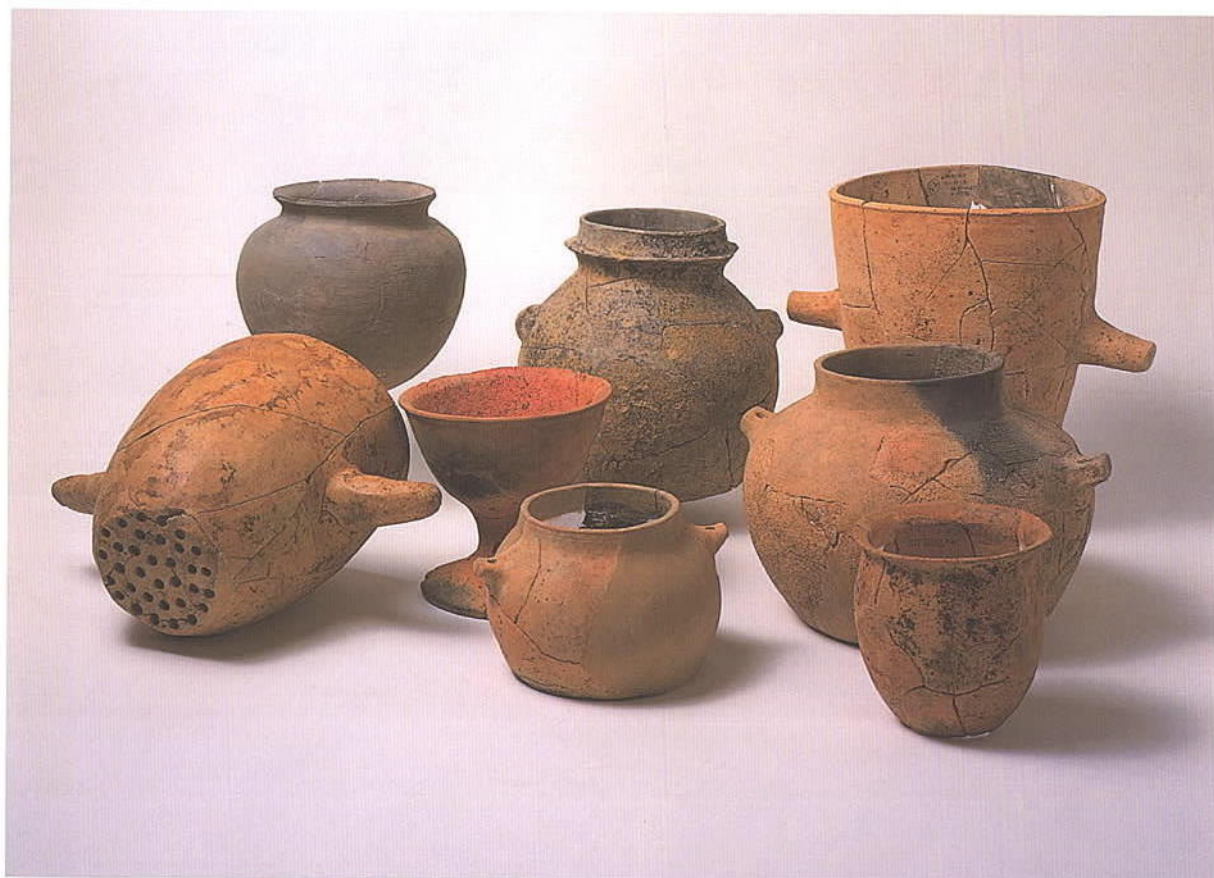
西新町遺跡Ⅲ

—福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第12次調査報告 2—

福岡県文化財調査報告書第157集

2001

福岡県教育委員会



西新町遺跡第12次調査出土半島系土器



1 玉鑄型



2 各種石錘



1 玉未製品



2 玉原石

卷頭図版4



21号竖穴住居跡出土土器

序

本書は福岡県教育委員会が平成10年度に実施した福岡県立修猷館高等学校改築事業に係る福岡市早良区所在西新町遺跡第12次調査の発掘調査報告書で、昨年度刊行の『西新町遺跡』Ⅱに続くものです。本書では『西新町遺跡』Ⅱで取り上げられることができなかった古墳時代前期の集落の遺構・遺物及びその写真図版と近世～現代にかかると遺構・遺物について報告したものです。

今回の調査では県下のみならず全国的にも極めて珍しい形態の竈が検出された他、多数の朝鮮半島系土器が出土し、また国内の各地から土器がもたらされていた事実が確認されました。

また、これまで西新町遺跡ではほとんど取り上げられなかった近世以降の遺構と遺物について報告しております。この中では近世高取焼の普及を示す窯道具が含まれているほか、多数の陶磁器類など良好な資料が得られました。

修猷館高等学校の改築工事は継続中で、現在新たな地点での発掘調査が行われており資料も増加しております。報告書も順次刊行する予定です。

本書が学校教育ならびに生涯学習の資料として活用され、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いに存じます。最後になりましたが発掘調査および整理作業、報告書の作成にあたりまして御協力いただきました多くの方々に対し、深甚の謝意を表します。

平成13年3月30日

福岡県教育委員会
教育長 光安 常喜

例 言

- 1 本書は平成10年度に福岡県教育委員会が実施した福岡県立修猷館高等学校改築事業に係る西新町遺跡第12次調査の発掘調査報告書で、福岡県文化財調査報告書第154集（『西新町遺跡』Ⅱ）に続く2冊目となる。
- 2 本書に掲載した遺跡は福岡市早良区西新6-1-10に所在する西新町遺跡である。
- 3 本報告書では、第12次調査の成果のうち福岡県文化財調査報告書第154集で報告できなかった古墳時代の竪穴住居跡の一部とその出土土器・石器、近世の遺構とその出土遺物、包含層出土遺物について報告したものである。また、図版には近世遺構写真と福岡県文化財調査報告書第154集で報告済みのものも含む出土遺物写真を掲載した。
- 4 本書の図版、挿図、表番号は福岡県文化財調査報告書第154集と一連のものであり、図版中の遺物番号は挿図番号-図版番号である。
- 5 本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、遺物写真は石丸洋・北岡伸一と調査担当者が撮影した。
- 6 本書に掲載した遺構図は調査担当者の他、林潤也、松崎卓郎、福本寛、辻田淳一郎、坂元雄紀の協力を得た。
- 7 金属器の処理は九州歴史資料館学芸第二課長横田義章、出土遺物の整理・復元は岩瀬正信の指導のもと九州歴史資料館で行った。
- 8 出土遺物の実測は平田春美、棚町陽子、田中典子、久富美智子、坂田順子、若松三枝子、堀江圭子、藤原さとみ、江口幸子、堀之内久美子、中村洋子、栗林明美、寺岡和子、中川真理子、荒川妙、辻田淳一郎、岸本圭、今井涼子、岡寺良、加藤和歳、平尾和久と調査担当者が行った。また、図面整理、図版作成にあたり大谷周平、押方梢、河野牧子、船越陽、古澤義久、藤原史彦、横溝舞の協力を得た。
- 9 遺構の製図は豊福弥生、原カヨ子が、遺物の製図は豊福、原と調査担当者が行った。
- 10 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章	重藤 輝行
第2章	森井 啓次
第3章第1節	森井
第2節	重藤
第3節	重藤・森井・大庭 孝夫（文末に分担記載）
第4節	森井
第4章	唐木田 芳文（西南学院大学名誉教授）
第5章	重藤
第6章	重藤
- 11 本書の編集は重藤・大庭の協力を得て森井が行った。

目 次

卷頭図版
序
例言
目次
図版目次
挿図目次
表目次

第1章	はじめに	1
第1節	整理の経過	1
第2節	整理の関係者	1
第3節	『西新町遺跡』Ⅱ補遺・訂正	2
第2章	歴史時代以降の西新町遺跡とその周辺	5
第1節	古代	5
第2節	中世～近世	6
第3章	調査の内容	9
第1節	整理・報告書作成の方針	9
第2節	弥生・古墳時代後期～古代の遺物	10
第3節	古墳時代の遺構と遺物	12
1.	古墳時代の住居跡と出土土器	12
2.	古墳時代の土坑と出土土器	116
3.	包含層・遺構面等出土古墳時代土器	130
4.	漁撈具	151
5.	石器	151
第4節	近世以降の遺構と遺物	163
第4章	西新町遺跡の玉原石	198
第5章	考察	207
第1節	西新町遺跡における古墳時代集落の展開に関する予察	207
第2節	西新町遺跡における朝鮮半島系土器について	217
第6章	おわりに	226

図版目次

- 卷頭図版 1 西新町遺跡第12次調査出土半島系土器
- 卷頭図版 2 1 玉鑄型
2 各種石錘
- 卷頭図版 3 1 玉末製品
2 玉原石
- 卷頭図版 4 21号竪穴住居跡出土土器
- 図版61 1 3区北1区近世遺構全景(東から)
2 3区南3区近世遺構全景(南から)
3 3区中3区近世遺構全景(東から)
- 図版62 1 41号土坑(北から)
2 41号土坑鏡片出土状況(東から)
3 48号土坑(西から)
- 図版63 1 2号土坑(北西から)
2 2号土坑獣骨出土状況(北西から)
3 42号土坑(南から)
- 図版64 1 45号土坑(北から)
2 56号土坑(北から)
3 103号土坑(東から)
- 図版65 1～3号竪穴住居跡出土土器
- 図版66 3・4号竪穴住居跡出土土器
- 図版67 4～6・8号竪穴住居跡出土土器
- 図版68 8・9号竪穴住居跡出土土器
- 図版69 10・12～14号竪穴住居跡出土土器
- 図版70 15・17・18号竪穴住居跡出土土器
- 図版71 18・19・21号竪穴住居跡出土土器
- 図版72 21号竪穴住居跡出土土器
- 図版73 21・22号竪穴住居跡出土土器
- 図版74 22・23号竪穴住居跡出土土器
- 図版75 23号竪穴住居跡出土土器
- 図版76 23～26号竪穴住居跡出土土器
- 図版77 26・27・29・30号竪穴住居跡出土土器
- 図版78 29・30・35号竪穴住居跡出土土器
- 図版79 35～37号竪穴住居跡出土土器
- 図版80 36～39号竪穴住居跡出土土器
- 図版81 39～43号竪穴住居跡出土土器
- 図版82 43～45・48号竪穴住居跡出土土器
- 図版83 48・50・63号竪穴住居跡出土土器
- 図版84 63～65号竪穴住居跡出土土器
- 図版85 65・66・68・71号竪穴住居跡出土土器
- 図版86 68・71・72号竪穴住居跡出土土器
- 図版87 72・73号竪穴住居跡出土土器
- 図版88 72・74～76号竪穴住居跡出土土器
- 図版89 76～79号竪穴住居跡出土土器
- 図版90 79～81号竪穴住居跡出土土器

- 图版91 81号竖穴住居跡出土土器
图版92 81・82号竖穴住居跡出土土器
图版93 82・84~86号竖穴住居跡出土土器
图版94 86・87・89号竖穴住居跡出土土器
图版95 89号竖穴住居跡出土土器
图版96 89~91号竖穴住居跡出土土器
图版97 91~93号竖穴住居跡出土土器
图版98 93号竖穴住居跡出土土器
图版99 93・95・96号竖穴住居跡出土土器
图版100 96・97号竖穴住居跡出土土器
图版101 97号竖穴住居跡出土土器（1）
图版102 97号竖穴住居跡出土土器（2）
图版103 97・98号竖穴住居跡出土土器
图版104 98~100号竖穴住居跡出土土器
图版105 100・101号竖穴住居跡出土土器
图版106 101号竖穴住居跡出土土器
图版107 101・102号竖穴住居跡出土土器
图版108 102~105号竖穴住居跡出土土器
图版109 105・107号竖穴住居跡出土土器
图版110 108・109号竖穴住居跡出土土器
图版111 109・110号竖穴住居跡出土土器
图版112 110~114号竖穴住居跡出土土器
图版113 113・114・116号竖穴住居跡出土土器
图版114 116号竖穴住居跡出土土器（1）
图版115 116号竖穴住居跡出土土器（2）
图版116 116・117・119号竖穴住居跡出土土器
图版117 119号竖穴住居跡出土土器
图版118 119~121号竖穴住居跡出土土器
图版119 121・122号竖穴住居跡出土土器
图版120 122・124・125・128号竖穴住居跡出土土器
图版121 128・130号竖穴住居跡出土土器
图版122 131・135号竖穴住居跡出土土器
图版123 136・138・139号竖穴住居跡出土土器
图版124 139・140号竖穴住居跡出土土器
图版125 140・142号竖穴住居跡出土土器
图版126 142・144~146号竖穴住居跡出土土器
图版127 146・147号竖穴住居跡出土土器
图版128 147・149~151・153号竖穴住居跡出土土器
图版129 154~156号竖穴住居跡出土土器
图版130 156・157号竖穴住居跡出土土器
图版131 159・161・162・165・168・170号竖穴住居跡出土土器
图版132 41号土坑出土土器（1）
图版133 41号土坑出土土器（2）
图版134 41号土坑出土土器（3）
图版135 41号土坑出土土器（4）
图版136 41号土坑出土土器（5）

図版137	包含層・近世遺構等出土古墳時代土器（1）
図版138	包含層・近世遺構等出土古墳時代土器（2）
図版139	包含層・近世遺構等出土古墳時代土器（3）
図版140	包含層・近世遺構等出土古墳時代土器（4）
図版141	包含層・近世遺構等出土古墳時代土器（5）
図版142	竪穴住居跡出土半島系土器（1）
図版143	竪穴住居跡（2）・41号土坑出土半島系土器
図版144	包含層・近世遺構等出土半島系土器
図版145	『西新町遺跡』Ⅱ補遺掲載等半島系土器
図版146	鉄器・青銅器・玉類（1）
図版147	玉類（2）
図版148	玉類（3）・ガラス玉鑄型・縄文時代～弥生時代中期の石器
図版149	漁撈具（1）
図版150	漁撈具（2）・石器（1）
図版151	石器（2）
図版152	石器（3）
図版153	石器（4）・土器のヘラケズリ実験
図版154	2・13号土坑出土遺物
図版155	14・38・42号土坑・45号土坑（1）出土遺物
図版156	45号土坑（2）・56号土坑（1）出土遺物
図版157	56号土坑（2）・61・78・82・84号土坑出土遺物
図版158	86号土坑出土遺物（1）
図版159	86号土坑（2）・87号土坑（1）・89・91号土坑（1）出土遺物
図版160	87号土坑出土遺物（2）
図版161	87号土坑（3）・92号土坑（1）出土遺物
図版162	92号土坑出土遺物（2）
図版163	91号土坑（2）・93・101・103号土坑（1）出土遺物
図版164	103号土坑（2）・129号土坑（1）出土遺物
図版165	129号土坑（2）・139号土坑・その他土坑・溝・住居混入遺物
図版166	土坑・溝・住居混入・ピット遺構面出土遺物
図版167	出土瓦・遺構面出土遺物
図版168	瓦・土人形・玩具等出土遺物・近世土錘

挿図目次

第252図	『西新町遺跡』Ⅱ補遺（1）（1／3、1／4）	3
第253図	『西新町遺跡』Ⅱ補遺（2）（1／3、1／4）	4
第254図	周辺遺跡分布図（1／50,000）	7
第255図	調査区位置図（1／1,500）	9
第256図	調査区区割図（1／600）	10
第257図	古墳時代遺構配置図（1／250）	折込
第258図	近世～近代遺構配置図（1／250）	折込
第259図	弥生土器・須恵器実測図（1／3、1／4）	11
第260図	116号竪穴住居跡実測図（1／60）	12
第261図	116号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3、1／4）	13

第262図	116号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	15
第263図	116号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3、1/4)	16
第264図	116号竪穴住居跡出土土器実測図 (4) (1/3、1/4)	17
第265図	116号竪穴住居跡出土土器実測図 (5) (1/3)	18
第266図	118号住居跡実測図 (1/60).....	19
第267図	117・118号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	20
第268図	119・160号竪穴住居跡実測図 (1/60)	21
第269図	119号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	22
第270図	119号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/6)	23
第271図	119号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3、1/4)	24
第272図	119号竪穴住居跡出土土器実測図 (4) (1/3)	25
第273図	119 (5)・120号竪穴住居跡出土土器実測図実測図 (1/3、1/4).....	26
第274図	120号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	27
第275図	121号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	28
第276図	121号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	29
第277図	121号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	31
第278図	122~124号竪穴住居跡実測図 (1/60)	33
第279図	122号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	34
第280図	122号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/4、1/3)	35
第281図	122号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3、1/4)	36
第282図	123・124号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	37
第283図	125号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30).....	38
第284図	125号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	40
第285図	125号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	41
第286図	125号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/6)	42
第287図	125号竪穴住居跡出土土器実測図 (4) (1/3、1/4)	43
第288図	126・127号竪穴住居跡実測図 (1/60)	44
第289図	126・127号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	45
第290図	128号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	46
第291図	128号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30).....	47
第292図	128号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	48
第293図	128号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	49
第294図	128号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)	50
第295図	130号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	51
第296図	130号住居跡カマド実測図 (1/30).....	51
第297図	129・130 (1) 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4).....	52
第298図	130号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)	53
第299図	131号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30).....	54
第300図	131号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	55
第301図	131 (2)・132号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4).....	56
第302図	132・133・136号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	58
第303図	133号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	59
第304図	133号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	60
第305図	134号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	61
第306図	134号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4).....	62
第307図	135号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	62

第308図	135号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4、1/6)	63
第309図	135号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)	64
第310図	136・137号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	65
第311図	137号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	66
第312図	138・167号竪穴住居跡実測図 (1/60)	66
第313図	138号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4).....	67
第314図	139号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	68
第315図	139号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/4)	70
第316図	139号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	71
第317図	139号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3、1/4)	72
第318図	139号竪穴住居跡出土土器実測図 (4) (1/3)	73
第319図	139号竪穴住居跡出土土器実測図 (5) (1/3、1/4)	75
第320図	140号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	76
第321図	140号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	77
第322図	140号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	78
第323図	140号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3、1/4)	79
第324図	141号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	80
第325図	141・142号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	81
第326図	142~145号竪穴住居跡実測図 (1/60)	83
第327図	143・144 (1) 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/2、1/3、1/4)	84
第328図	144 (2)・145号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4).....	85
第329図	146・147・166号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	88
第330図	146号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4、1/6)	89
第331図	146号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/2、1/3、1/4)	90
第332図	147号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	92
第333図	147号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)	93
第334図	148~150号竪穴住居跡実測図 (1/60)	94
第335図	148・149号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	95
第336図	151・153号竪穴住居跡実測図 (1/60)	96
第337図	150・151・153号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4).....	97
第338図	154号竪穴住居跡実測図 (1/60).....	98
第339図	154号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4).....	99
第340図	155号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30).....	100
第341図	155号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	101
第342図	155号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	102
第343図	156号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4).....	104
第344図	156号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60、1/30).....	106
第345図	157号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4).....	108
第346図	158・159号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	109
第347図	160・161号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	111
第348図	162~165・168・170号竪穴住居跡実測図 (1/60)	113
第349図	162・163・165・166・168・170号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	114
第350図	41号土坑実測図 (1/100).....	116
第351図	41号土坑出土土器実測図 (1) (1/4).....	118
第352図	41号土坑出土土器実測図 (2) (1/3、1/4).....	119

第353图	41号土坑出土土器实测图 (3) (1 / 3).....	120
第354图	41号土坑出土土器实测图 (4) (1 / 3、 1 / 4).....	121
第355图	41号土坑出土土器实测图 (5) (1 / 3、 1 / 4).....	123
第356图	41号土坑出土土器实测图 (6) (1 / 4).....	124
第357图	41号土坑出土土器实测图 (7) (1 / 4).....	125
第358图	41号土坑出土土器实测图 (8) (1 / 3、 1 / 4).....	126
第359图	41号土坑出土土器实测图 (9) (1 / 3).....	127
第360图	41号土坑出土土器实测图 (10) (1 / 3、 1 / 4).....	128
第361图	48号土坑实测图 (1 / 40)	130
第362图	41号土坑出土土器实测图 (11) · 48号土坑出土土器实测图 实测图 (1 / 3、 1 / 4)	131
第363图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (1) (1 / 3、 1 / 4).....	132
第364图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (2) (1 / 4).....	133
第365图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (3) (1 / 3、 1 / 4).....	134
第366图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (4) (1 / 3).....	135
第367图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (5) (1 / 3、 1 / 4).....	137
第368图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (6) (1 / 3、 1 / 4).....	138
第369图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (7) (1 / 3).....	140
第370图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (8) (1 / 3).....	141
第371图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (9) (1 / 3).....	143
第372图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (10) (1 / 3、 1 / 4).....	145
第373图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (11) (1 / 3).....	147
第374图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (12) (1 / 3).....	148
第375图	包含層 · 近世遺構等出土古墳時代土器实测图 (13) (1 / 3).....	149
第376图	古墳時代金属器实测图 (1 / 2)	150
第377图	漁撈具实测图 (1 / 2)	152
第378图	石器实测图 (1) (1 / 2).....	154
第379图	石器实测图 (2) (1 / 2).....	155
第380图	石器实测图 (3) (1 / 2).....	157
第381图	石器实测图 (4) (1 / 2).....	158
第382图	石器实测图 (5) (1 / 2).....	159
第383图	石器实测图 (6) (1 / 2).....	161
第384图	2号土坑实测图 (1 / 30)	163
第385图	42 · 56 · 86 · 87号土坑实测图 (1 / 30)	164
第386图	101 · 129 · 137号土坑实测图 (1 / 30).....	166
第387图	139 · 140号土坑实测图 (1 / 30)	167
第388图	2号土坑出土遺物实测图 (1 / 3)	169
第389图	13 · 14 · 38 · 42号土坑出土遺物实测图 (1 / 3、 1 / 4)	171
第390图	45号土坑出土遺物实测图 (1) (1 / 3).....	172
第391图	45号土坑出土遺物实测图 (2) (1 / 3).....	173
第392图	56 · 61 · 78 · 82 · 84号土坑出土遺物实测图 (1 / 3)	174
第393图	86号土坑出土遺物实测图 (1) (1 / 3).....	176
第394图	86 (2) · 89 · 91号土坑出土遺物实测图 (1 / 3).....	177
第395图	87号土坑出土遺物实测图 (1 / 3)	179
第396图	92号土坑出土遺物实测图 (1 / 3)	181
第397图	91 · 93 · 101号土坑出土遺物实测图 (1 / 3).....	183

第398図	103号土坑出土遺物実測図（1／3、1／4）	184
第399図	129号土坑出土遺物実測図（1／3、1／4）	186
第400図	139号土坑出土遺物実測図（1／3）	187
第401図	136・149号土抗・大土抗・溝・攪乱出土遺物実測図（1／3）	188
第402図	ピット出土遺物実測図（1／3）	189
第403図	遺構面・包含層出土遺物実測図（1／3）	191
第404図	瓦実測図（1／3）	192
第405図	窯道具実測図（1／3）	193
第406図	土人形・玩具等実測図（1／4、2／3）	195
第407図	土錘実測図（1／2）	196
第408図	玉原石の偏光顕微鏡写真（1）	203
第409図	玉原石の偏光顕微鏡写真（2）	204
第410図	蛇紋岩・淡色部のX線回析パターン	205
第411図	蛇紋岩・黒色部のX線回析パターン	206
第412図	西新町遺跡の範囲と調査位置（1／4,000）	207
第413図	西新町12次出土小形丸底壺・外反口縁鉢の型式分類（1／3）	209
第414図	西新町遺跡竪穴住居跡変遷図（1）（1／750）	212
第415図	西新町遺跡竪穴住居跡変遷図（2）（1／750）	213
第416図	西新町遺跡出土半島系土器（1）（1／4）	218
第417図	西新町遺跡出土半島系土器（2）（1／4）	219
第418図	西新町遺跡出土半島系土器（3）（1／4）	221
第419図	半島系土器の類例（1／6）	223

表目次

表2	土錘計測表	197
表3	西新町遺跡12次調査における小形丸底壺・外反口縁鉢の共伴	209
表4	早良平野・福岡平野の遺跡における小形丸底壺・外反口縁鉢の共伴	210
表5	西新町遺跡出土半島系土器一覧表	221

第1章 はじめに

第1節 整理の経過

西新町遺跡12次の整理報告書作成は教育庁総務部文化財保護課が教育庁企画部施設課から執行委任を受けて平成11年度、12年度の2ケ年に分けて実施することとした。平成11年度には福岡県文化財調査報告書第154集として『西新町遺跡』Ⅱを刊行したが、本年度は昨年度報告できなかった古墳時代の遺構とその出土遺物の一部、近世の遺構と遺物、包含層出土遺物について整理を行い、報告する。

ただ、古墳時代の遺構、遺物を優先的に整理したために、近世の遺構と遺物は概要的な報告にとどめざるを得なかった。近世遺構、遺物も古墳時代遺構、遺物に劣らず多量であり、全体的な報告書の作成は当面のところ無理であるが、今後の報告書作成で可能なかぎり補足していきたい。

第2節 整理の関係者

平成12年度の西新町遺跡第12次調査報告書作成のための整理事業の関係者は次のとおりである。

西新町遺跡第12次整理関係者

	平成12年度
(総括)	
福岡県教育委員会	教育長 光安 常喜
	教育次長 榊原 英夫
教育企画部	部長 寺島 寛治
施設課	課長 安野 義勝
	参事兼課長補佐 清田 嘉治
	課長技術補佐 井本 喜三郎
	施設係長 平 信二
	主任技師 山本 哲也
総務部	部長 岩本 誠
文化財保護課	課長 柳田 康雄
	参事 井上 裕弘
	参事兼課長技術補佐 橋口 達也
	参事兼課長技術補佐 川述 昭人
	課長補佐兼管理係長 平野 義峰
(庶務)	事務主査 吉武 祐二
	主任主事 鎮守 俊明
	主任主事 佐藤 雅二
(整理・報告書作成)	参事補佐兼調査第1係長 佐々木隆彦
	主任技師 森井 啓次 (報告書作成)
	主任技師 岸本 圭 (整理担当)
	参事補佐兼調査第2係長 児玉 真一
	技師 大庭 孝夫 (整理担当・報告書作成)
北筑後教育事務所生涯学習課	主任技師 重藤 輝行 (報告書作成)

第3節 『西新町遺跡』Ⅱ補遺・訂正

昨年度の報告書を刊行後、1～115号竪穴住居跡出土遺物の整理を行ったところ、報告漏れの土器がいくつか見つかった。いずれも無視できない資料であるので、ここで補足しておきたい。

1～3は1号竪穴住居跡出土の半島系土器壺で、1は41号土坑出土の破片、3は2号竪穴住居跡出土の破片とも接合する。3も含めて、いずれも本来は41号土坑に帰属する可能性が高いものである。1は口縁が短く外反し、外面は縄蓆文タタキの後、胴中部～肩部に沈線を巡らしている。灰褐色を呈し、焼成は良好。2は肩部～頸部の破片で、肩部外面は細かな平行タタキ後細い沈線を密に巡らす。灰褐色を呈し、焼成は比較的陶質に近い。3は肩部～頸部の破片で、外面にはやや細かな格子タタキを施し、タタキによる稜線が水平方向に巡る。肩部内面には無文当て具痕か、凹みが巡っている。黄褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

4～6は3号竪穴住居跡出土土器。4は褐色～橙褐色の高杯口縁部で内外ハケメ後、外面横ミガキ、内面暗文風放射状ミガキ仕上げ。口縁下内外に整形時の指圧痕が残る点が目を引く。5は脚付鉢で、鉢部外面縦ハケ、内面あるいはミガキ仕上げで、脚内外はナデ。淡黄褐色を呈し、鉢部内面にコゲ状付着物が観察される。6は外面ハケメ、内面ハケ後縦ミガキの単口縁鉢。淡黄褐色。

7～11は13号竪穴住居跡出土土器。7は甕口縁部で、口縁が直線的に外傾し、端部が上方に拡張されるので庄内系か。わずかに残る胴部外面にタタキ痕も見られ、内面ケズリは頸部まで及んでいる。8は小形丸底壺で13号住居跡を壊した攪乱より出土した。胴部外面ハケ、胴部内面ケズリで、口縁部は内面ハケメ後内外ナデ仕上げ。ミガキの残らない粗製品で淡黄褐色を呈する。9は高杯杯部片。内外摩滅が進行するものの、外面横ミガキ、内面暗文風放射状ミガキが残る。10も高杯杯部片で内外斜めハケ後外面横ミガキ、内面暗文風ミガキ。11は床面から出土した単口縁鉢で、外面ケズリ後不定方向のミガキ、内面は暗文風のミガキである。7は灰褐色を呈し、外面に煤が厚く付着し、8は淡黄褐色。9・10は淡橙褐色、11は淡黄褐色。

12は24号竪穴住居跡出土の布留系甕。口縁部外面にやや太いかすかな凹みが数ヶ所残る。淡黄褐色を呈する。

13は26～28号竪穴住居跡付近より出土した半島系鉢の口縁部片。口縁は短く外反し、球形の胴部に続くようである。胴部外面にやや大きい斜格子タタキを施した後、細い沈線を巡らす。黄褐色軟質で、土師器の焼きに近い。

14は29～31号竪穴住居跡間の遺構面から出土した在地系の直口壺口縁部片。口縁内面ナデ、胴部内面斜めハケで、淡褐色を呈する。

15は40号竪穴住居跡出土高杯底部片。内外ハケ後外面横ミガキ、内面暗文風縦ミガキ。黄褐色。

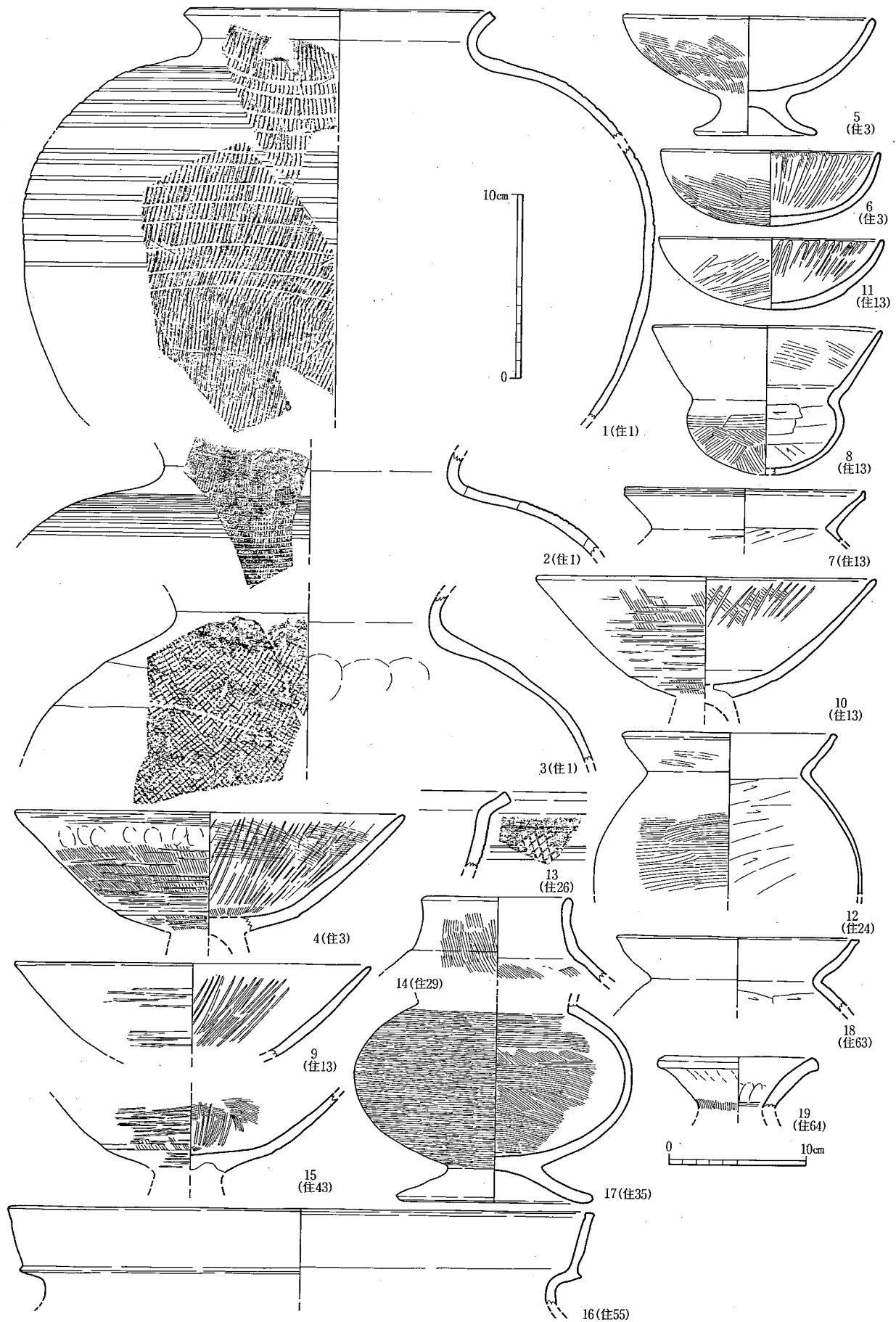
16は55号竪穴住居跡出土の山陰系二重口縁壺口縁部で、口径42.5cmに達する大形品。白黄褐色。

17は35号竪穴住居跡出土の脚付壺胴～脚部片で、残存部分は全周している。胴部外面横ミガキ、内面ハケメ、脚部内外横ナデで仕上げた精製品である。橙褐色を呈する。

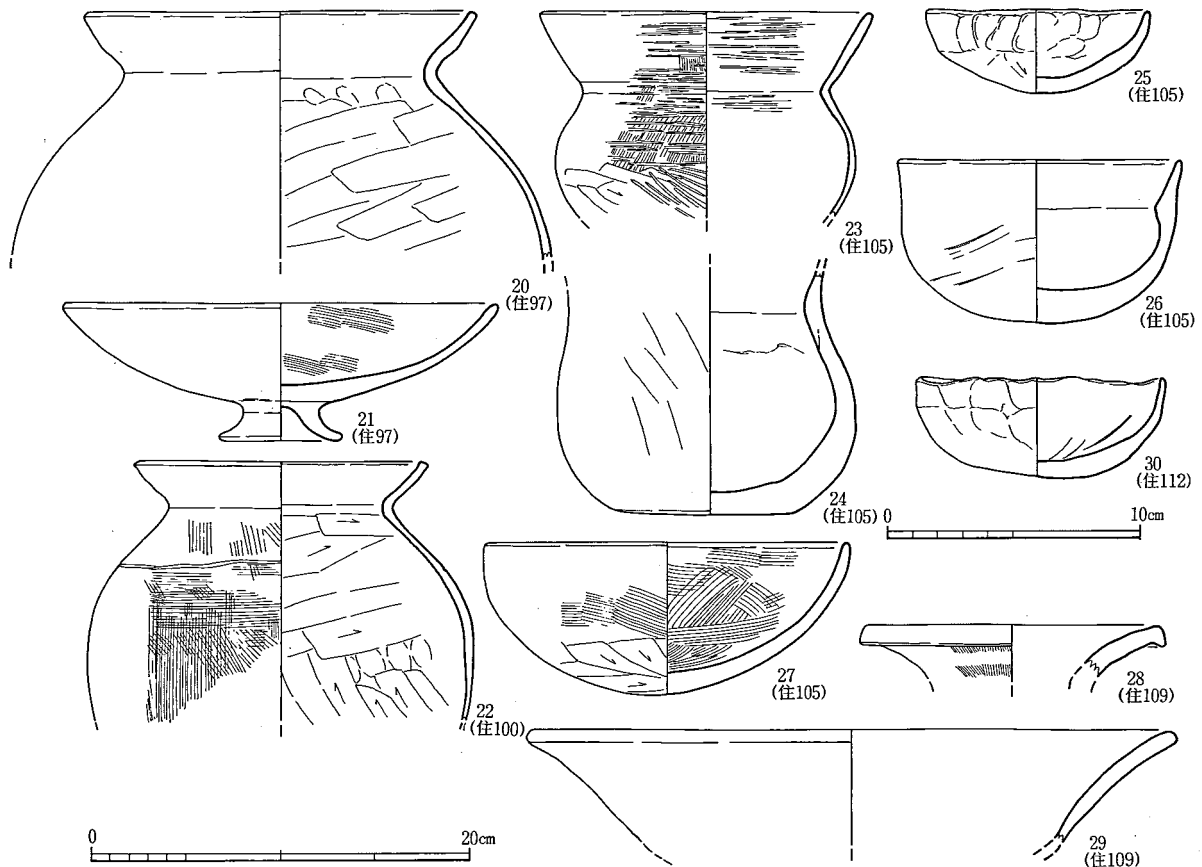
18は63号竪穴住居跡出土の布留系甕。口縁端部が水平な面をなし、凹む点が特徴的。淡黄褐色。

19は64号竪穴住居跡出土の器台口縁部、口縁内外ナデ、くびれ部の内外はハケが残る。淡黄褐色。

20・21は97号竪穴住居跡出土土器。20は布留系甕である。外面は摩滅し、淡黄褐色を呈する。21はカマド内から出土した山陰系脚付鉢。外面～脚部内面は摩滅のため調整不明で、鉢部内面はハケ



第252図 『西新町遺跡』Ⅱ補遺(1) (7・12・14・16・18・19は1/4、他は1/3)



第253図 『西新町遺跡』Ⅱ補遺(2) (22・28は1/4、他は1/3)

仕上げ。淡黄褐色を呈する。鉢部と脚部の接合線が外面に残る。淡黄褐色を呈し、二次加熱のためか全体的に焼成が甘い。出土状況は十分に確認していないが、完存するのでカマド廃棄時の祭祀に伴い、意図的に配置されたものと考えられる。

22は100号竪穴住居跡出土の布留系甕。胴部外面ハケメは肩部横ハケ、胴中部縦ハケ、胴中部斜めハケの順と確認できる。胴部内面上部と下部の方向の異なるケズリが重ならない部分があり、そこに指圧痕が残る。灰黄褐色で煤の付着は見られない。

23～27は105号竪穴住居跡出土土器。23は小形丸底壺で、外面ハケメ後胴下部ケズリを施し、さらに外面～口縁内面をミガキ仕上げする。胴部内面はナデで橙褐色を呈する。24は深い胴部の鉢で、口縁端を欠損するが外反すると思われる。外面工具によるナデ、内面ナデで接合痕を残す。灰黄褐色を呈し、胴下部外面に煤が付着。25は単口縁鉢で内外手捏ね風の粗いナデ仕上げ。灰黄褐色を呈す。26は外反気味の口縁部をなす。胴部外面板ナデ、他ナデ仕上げで、灰黄褐色。27は内外ハケメ後外面下部ケズリで灰黄褐色を呈する粗製品。

28・29は109号竪穴住居跡出土土器。28は淡橙褐色の器台口縁部。外面ハケメ、内面ナデ調整。29は在地系高杯口縁部か。内外摩滅し、淡褐色を呈する。外面の凹凸がやや顕著である。

20は112号竪穴住居跡出土の単口縁鉢。内外やや粗いナデで仕上げ、灰黄褐色。

なお、『西新町遺跡』Ⅱでは、151号竪穴住居跡、152号竪穴住居跡の位置を間違えていた。それにより第40図タイトルの「13・14・151号」を「13・14・152号」に修正したい。また、第19図での両者の位置も本書第257図のように修正したい。

第2章 歴史時代以降の西新町遺跡とその周辺

早良平野における古墳時代までの歴史的状況は『西新町遺跡』Ⅱにおいて概観した。本稿では歴史時代以後の早良平野の状況について福岡市教育委員会による発掘調査の成果を基にして記述する。

本文中では略しているが、全て福岡市埋蔵文化財調査報告書のシリーズ番号、刊行年である。

第1節 古代

西新町遺跡においては古代から中世にいたる顕著な遺構はほとんどみられず、僅かに土坑墓が散見されるに過ぎない。古墳時代初頭における華やかな集落と同様、活発な人類の活動の足跡をみせるのは近世以降ということになる。

古代から中世における早良平野の中心となる遺跡は、早良郡衙に比定されている有田遺跡であろう。有田・小田部遺跡は旧石器時代～現代まで連綿と続く遺跡群であり、重要遺跡として200次を超える発掘調査が実施されており、特筆すべきは郡衙の中心と推定される建物群が検出された(189次調査)ことである。数多くの掘立柱建物群が検出されており、まとまりからA～D群に分けられている。うちA群は群で最も古いと考えられる遺構群であるが詳細な時期は不明な点が多い。建物の柱穴から5世紀代の陶質土器が出土しており時期的には先行する遺跡である。この遺構の存在が郡衙へと展開する下地となったのであろうか。

B群は三重の柵列に囲まれた掘立柱建物(倉庫群)からなる遺構群でA群に次ぐ遺構群と考えられている。やはり時期的に不明な点があるが、6世紀末～7世紀前半頃に比定されている。

C群が早良郡衙関連遺構とされる一群であり、遺構群のまとまりから西方建物群と東方建物群の2群に細分される。郡庁と考えられる遺構も本群に含まれ(第189次調査)、庇附建物とそれを囲む回廊状の柱穴列が検出されている。C1群：7世紀末～8世紀前半／C2群：8世紀前半代／D群は8世紀半ばであり、C群が郡衙正倉と考えられており、東方建物群(87次・134次・187次調査)が館もしくは御厨に比定されている。

この他にも、早良平野では石丸遺跡、吉武遺跡、東入部遺跡群において郡衙クラスの建物が検出されており、関連が注目される。

それに対して、郡衙に関連するとみられる古代寺院に関してはあまり顕著な遺跡は知られてはいない。

奈良時代～平安時代にかけて存続したと考えられている城ノ原廃寺が古くから知られるが、詳細に関しては調査が行われていない為不明である。他に寺院跡は発見されていないが、吉武遺跡群内で仏像に垂下したと考えられる金銅製の勾玉や八綾鏡が出土しており、寺院が存在していた可能性が指摘されている。

生産遺構は数多く、下山門の斜ヶ浦瓦窯跡では、「警護」銘を有する瓦を焼成し、鴻臚館の建物に葺いた瓦を焼成したと見られる。製鉄遺跡では岩本遺跡(343集・1993)で11世紀末～12世紀中頃と考えられる掘立柱建物跡、12世紀後半～14世紀前半と考えられる掘立柱建物6棟が検出された他、製鉄関連遺構として11世紀末～12世紀の時期の遺構が確認されており、下山門敷町遺跡では製鉄遺構があり、関連すると見られる掘立柱建物跡12棟が検出されている。

東入部遺跡群では第4次調査(381集：1994)で8世紀後半の大型建物群と製鉄関連遺構群が確

認されており、官営工場の可能性が指摘されている他、第7次調査（516集：1997）で製鉄遺構・掘立柱建物が確認されている。金武城田遺跡（186集：1988）では製鉄遺構17基、掘立柱建物など8世紀代の工房群が確認されている。他に吉武遺跡群内に含まれている都地遺跡（434集：1996）では縄目文瓦と墨書土器の他、製鉄関連の遺構、鉄滓、鋳型などが出土しており注目される。他に飯盛・羽根戸・有田の各遺跡で製鉄遺構が確認されている。

居館に関しては橋本榎田遺跡で条里溝・掘立柱建物跡が検出され、これらは10世紀後半と考えられる（第657集：2000）。清末遺跡では12世紀大型建物跡が造られた後、14世紀初頭に居館が築造されたものと考えられている（第310集：1992）。3次調査では（424集：1995）掘立柱建物12棟の他に井戸・土坑・居館環濠等が発掘調査で明らかになっている。

また、早良平野は比較的条里の遺構が良好に残っており、遺跡で確認されたものに田村遺跡（5・7・8・11次）の他、重留遺跡（2・3次）、四箇船石遺跡（1次）では岩本遺跡（1次）につながる一連の溝遺構が確認されている。拾六町平田遺跡は『和名抄』による「額田郷」に比定される地域で、橋本榎田遺跡（542集：1997）は「額田駅」の遺構である可能性があり、注目される遺跡のひとつである。

第2節 中世～近世

中世においても西新町遺跡では土坑墓が確認されているものの、他に顕著な遺構は確認されていない。遺跡の北が旧の海岸線にあたるが、海岸線には元寇防塁が構築されていた。近年、西新町遺跡の北に接する西南学院大学の校舎建て替えに伴う発掘調査で元寇防塁の基礎が確認され、また博多の奈良屋小学校の校舎解体に伴う調査でも防塁石垣とみられる石組遺構が確認されたことから、今後も未確認で埋没した防塁跡が検出されるであろう。海岸線では現在、箱崎松原・西新百道・生の松原・今津長浜等の指定を受けた元寇防塁遺構が残存する。うち西新と今宿は整備されている。

藤崎遺跡においては、東西に直線的にのび、元寇防塁とほぼ平行するとされる13世紀後半を前後する溝（8次1号溝）や蛇行しながら延びる溝（138集：1986）があり、元寇防塁の第二次防御線とする可能性が指摘されている。

中世城郭跡は多くが確認されているわけではないが、発掘調査が行われている遺跡としては、小田部遺跡で大友系武将である小田部氏の居城とされる小田部城跡が存在し濠跡と考えられる溝状遺構が検出されている（657集：2000）。その他、建物群（第100次調査）が検出されているが、本丸と推定される地点は旧村落内にあり、調査が進んでおらず詳細不明である。小田部氏は油山西側の荒平山山頂に存在した安楽平城の城主であるが、その里城が有田村にあることが『筑前国続風土記拾遺』に記されており、これにあたりと考えられる。その他、吉武遺跡群内では細川若狭ノ守の館跡とされる都地（館）城の土塁の一部が調査されている。土塁が内側に巡らされ、外側に周溝を有する型式の居館跡で、溝から土塁までの高さは現存で4mである。また城に伴うと考えられる溝状遺構も検出されている（434集：1995）。居館跡として、一町屋敷跡では方形の土塁で囲んだ遺構（拾六町亀田遺跡に隣接。もしくは含む）が存在するが、調査が行われていないので詳細に関しては不明である。

村落遺跡としては良好な中世集落が確認されている田村遺跡があり、早良平野に関しては条里の復元も行われている。他に次郎丸遺跡、原遺跡などで調査が行われて村落の存在が確認されている



1. 西新町遺跡
2. 藤崎遺跡
3. 元寇防塁
4. 原遺跡
5. 有田遺跡群
6. 小田部城跡
7. クエゾノ遺跡
8. 田村遺跡
9. 吉武遺跡群
10. 都地城跡
11. 金武城田遺跡
12. 重留遺跡
13. 三郎丸遺跡
14. 岩本遺跡
15. 東入部遺跡
16. 清末遺跡
17. 長峰遺跡
18. 下山門乙女田遺跡
19. 下山門敷町遺跡
20. 石丸 A 遺跡
21. 石丸 B 遺跡
22. 拾六町平田遺跡
23. 橋本榎田遺跡
24. 下山門製鉄遺跡
25. 城ノ原廃寺
26. 斜ヶ浦瓦窯跡
27. 斜ヶ浦製鉄遺跡
28. 城ノ口製鉄遺跡
29. 一町屋敷遺跡

第254図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

他、東入部遺跡で大型建物が検出されている。

寺院跡では、背振山の山岳信仰に関連した遺構が入部の山間部に数多く認められているが、中でも、長峰遺跡（185集：1988）では遺構には伴わないが懸仏が出土。山岳信仰が盛んであった地域であり、山岳寺院の類が付近に存在していた可能性がある。

長峰遺跡に近い位置には峯遺跡・脇山遺跡・内野遺跡（653集：2000）などで中世を中心とした遺構や遺物が確認されており、いずれも中世背振山における上宮東門寺を中心とした一山組織の存在からこの地域一帯が中世に灌漑開墾が開始されたことが関係している。

室町時代後半に確実な遺構は伴っていないものの、下山門乙女田遺跡（170集：1987）で土製仏像片の出土をみている。この調査においては掘立柱建物跡等は検出されているが、寺院跡とみられる遺構に関しては確認されていないが、付近に寺院の存在があることが推定されている。調査地点周辺から室町時代末の木製仏像が出土したことが報告されている。

近世以降に関しては、博多遺跡群全域で遺構が検出され、福岡城が存在しているものの、その他の集落遺跡において報告されている例が少なく、発掘調査から得られている情報は極めて少ない。

西新町遺跡に関してもこれまで報告されていないが、多くの陶磁器類が以前から出土している。報告されている遺跡としては隣接する藤崎遺跡が西新町遺跡と似た状況で、遺跡として一連の遺跡と考えると問題ないと考えられる。本地域周辺において近世遺構として特筆されるものは近世高取焼系の窯である東皿山・西皿山の存在であり、文献から紅葉八幡宮付近に存在していたとされるが、発掘調査で遺構としては確認されていない。しかし西新町遺跡や藤崎遺跡のほぼ全域で窯道具が出土していることは皿山に近いことと無関係ではあるまい。また、今回の調査では全てを報告できなかったが、高取系の陶器の中に未製品もしくは不良品が含まれてることも裏付けとなろう。包含層・攪乱出土遺物として陶磁器類、土錘、窯道具、土人形が出土しているが、遺構としては土坑、井戸などが検出されているのみで特筆される遺構はほとんど認められない。今後の調査による進展が期待される。

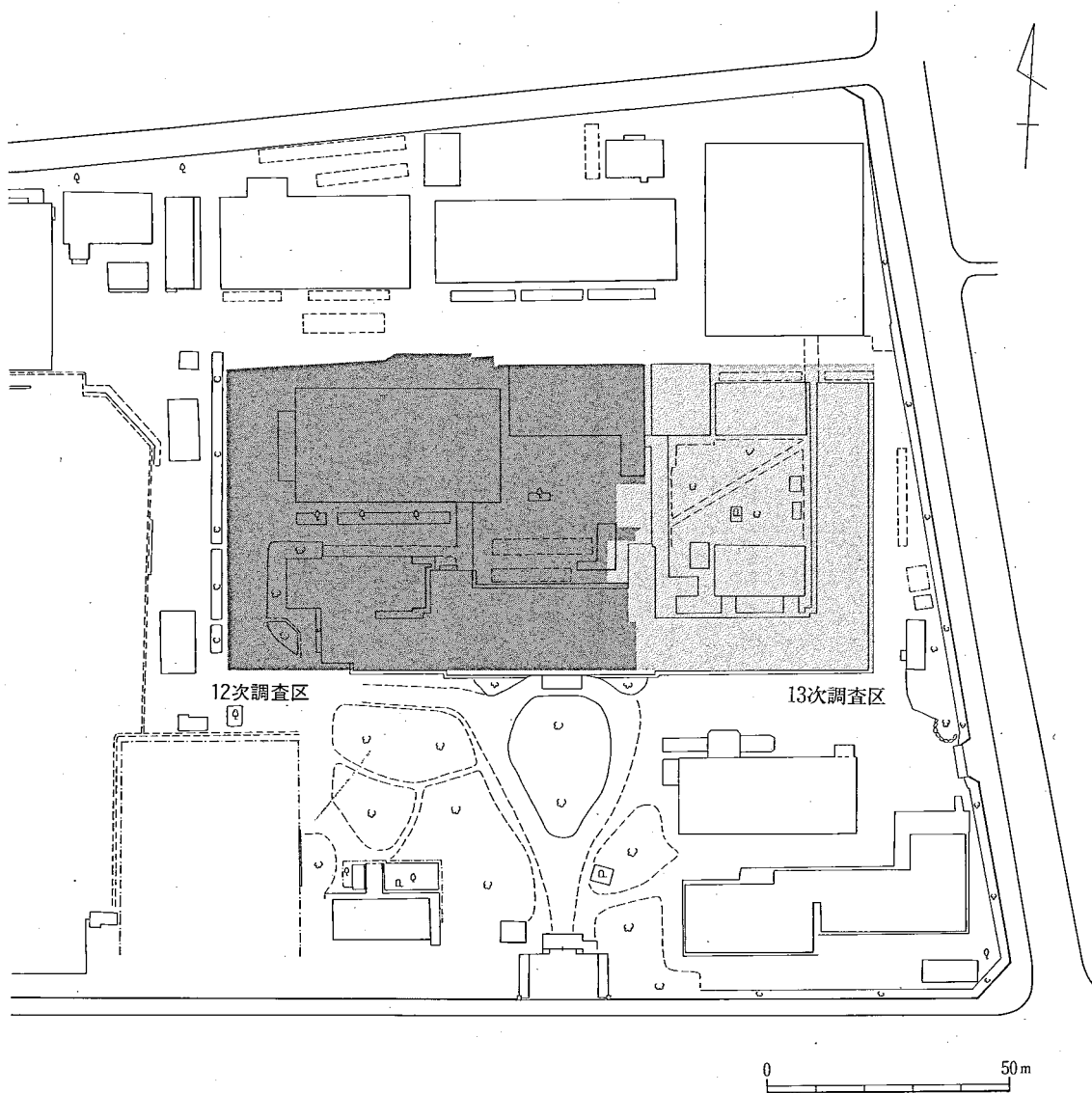
第3章 調査の内容

第1節 整理・報告書作成の方針

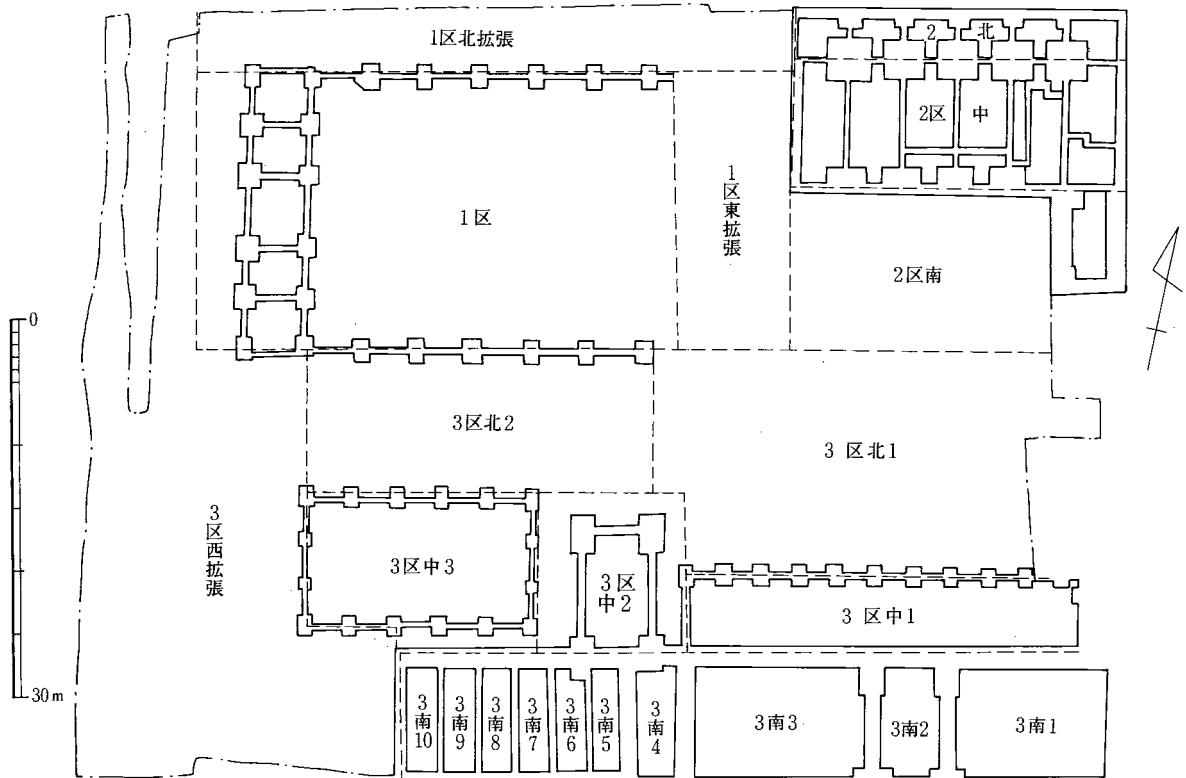
本年度は一昨年度調査を行った西新町遺跡12次調査の報告を昨年に引き続き実施した。

本書では昨年度報告できなかった古墳時代住居跡（116～170号竪穴住居跡）の遺構と遺物を中心として弥生時代・古墳時代後期～古代の遺物および近世の遺構・遺物についての整理を実施し報告する。本書で12次調査に関しては報告を終了することとなるが、今年度は同じく県立修猷館高等学校改築事業に係る調査として西新町遺跡第13次調査を実施しており、多大の成果を上げている。13次調査の調査報告は2001年度刊行の予定である。

なお、調査区割に関しては昨年同様であり、昨年度報告において掲載しているが本書でも再掲する。挿図番号及び表番号は同じ調査であることから『西新町遺跡』Ⅱから通し番号とした。



第255図 調査区位置図（1/1,500）



第256図 調査区區割図 (1/600)

第2節 弥生時代・古墳時代後期～古代の遺物

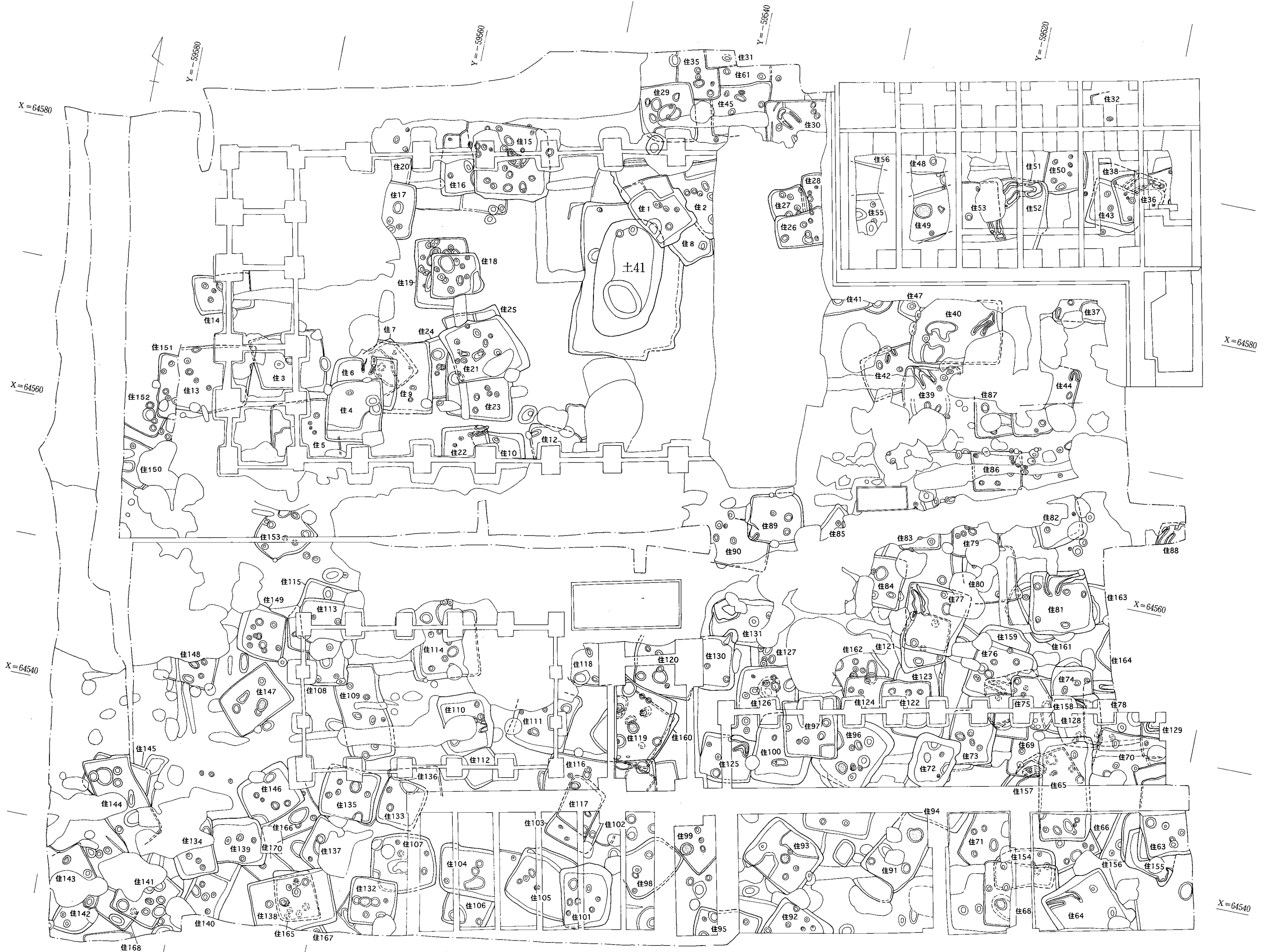
ここでは古墳時代前期のものを含む各種遺構、包含層から出土した弥生土器、須恵器について報告する(第259図)。弥生土器は『西新町遺跡』Ⅱで本来ならまとめて報告すべきものであったが、刊行後の遺物整理中にいくつか報告漏れとして見つかったので、それらをここで補足しておきたい。

1・3～6は弥生中期の甕口縁部である。1は中期前半に位置づけられるが、他は後半のもの。3は外面～口縁内面に丹塗を施し、口縁上面には分割暗文を巡らしている。2の底部片も弥生中期後半。8は断面M字状突帯を貼付し、丹塗のもので、弥生中期後半と考えられるが、器形、部位ともに不明。

7は平底で、外面斜めハケ仕上げの甕底部片。外面の調整からして弥生後期後半のものか。内面は工具痕が残る。これらの弥生土器はいずれも遊離して出土したものであるが、周辺の弥生時代遺構に由来するものと思われる。

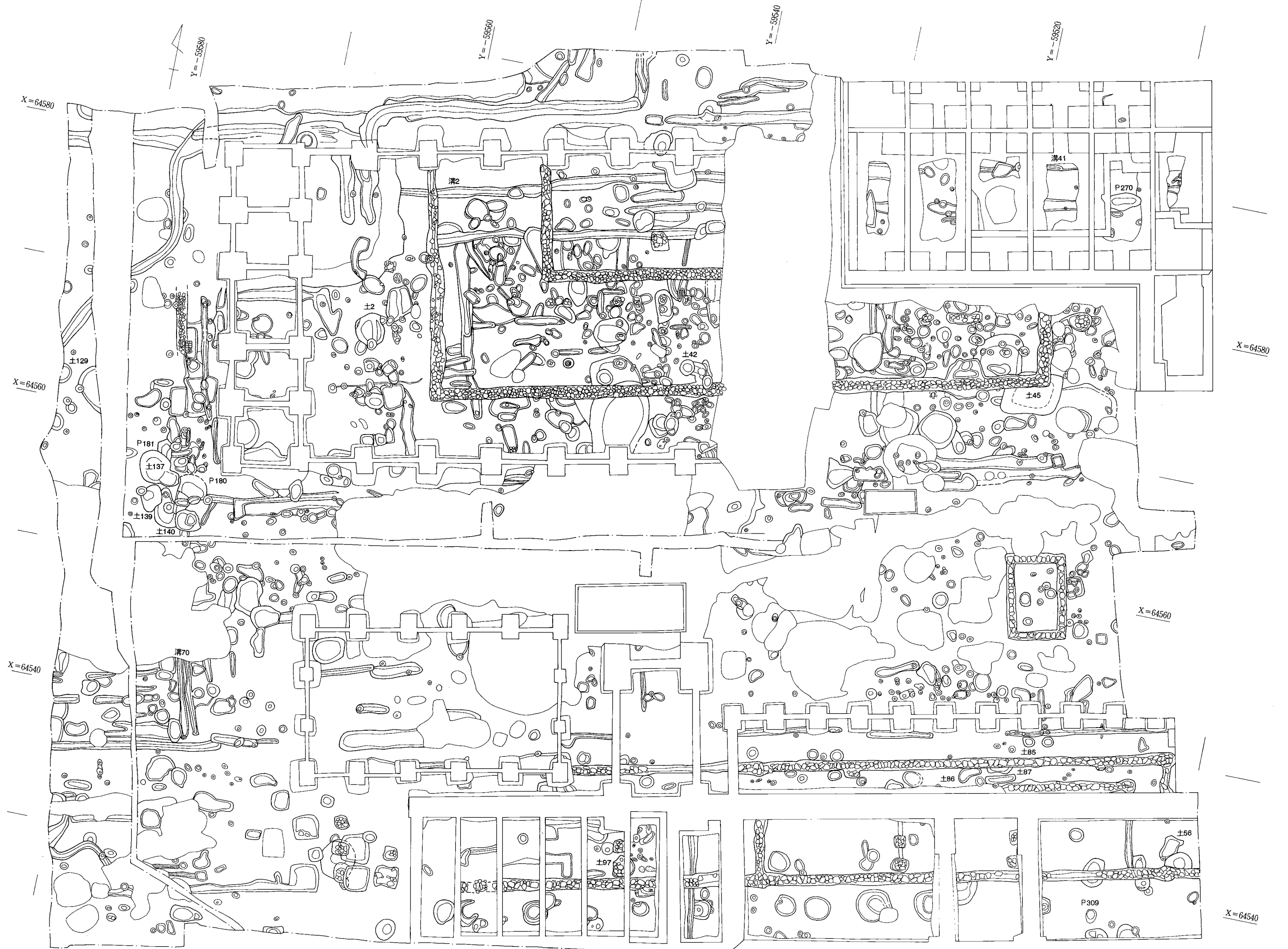
9～20は須恵器であるが、その当時の遺構からの出土品ではない。9は杯蓋で天井部外面のケズリの範囲が狭い。10は杯身で底部外面はヘラ切り未調整。いずれも6世紀末～7世紀初頭のものか。11・12は須恵器壺胴部片で、天地、傾きは不安である。11は外面擬格子タタキ、内面当て具痕。12は外面は平行タタキ後カキメ、内面当て具痕。13・14は口縁にかえりを持つ杯蓋である。ただ、14は焼成良好で、端部等の仕上げが一般の須恵器に比べシャープであるので、近世陶器の可能性も考えられる。15～20は高台付杯身である。いずれも奈良時代のもの。

これらの須恵器は遺構から出土したものでなく、古墳時代前期の土師器と比べると極めて量が少ない。また、中世の陶磁器もほとんど出土していないので、古墳時代中期以降近世に至るまでの



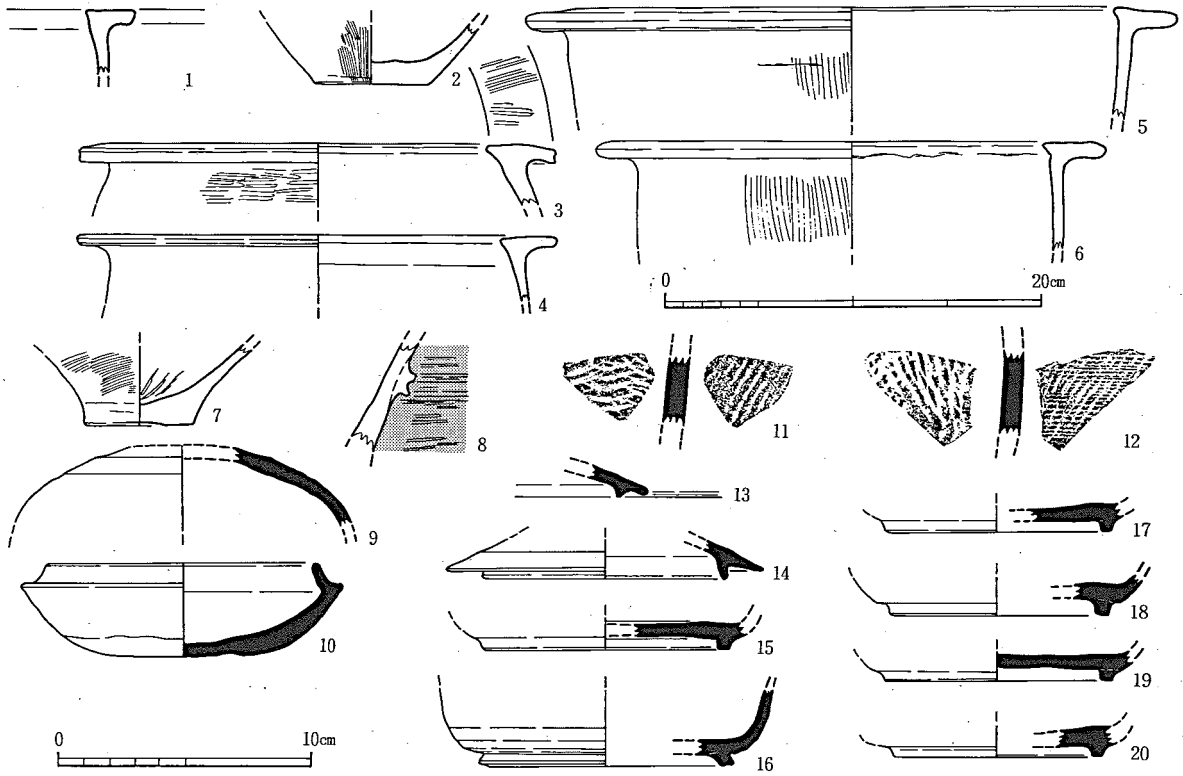
第257図 古墳時代遺構配置図 (1/250)

0 20m



第258図 近世～近代遺構配置図 (1/250)

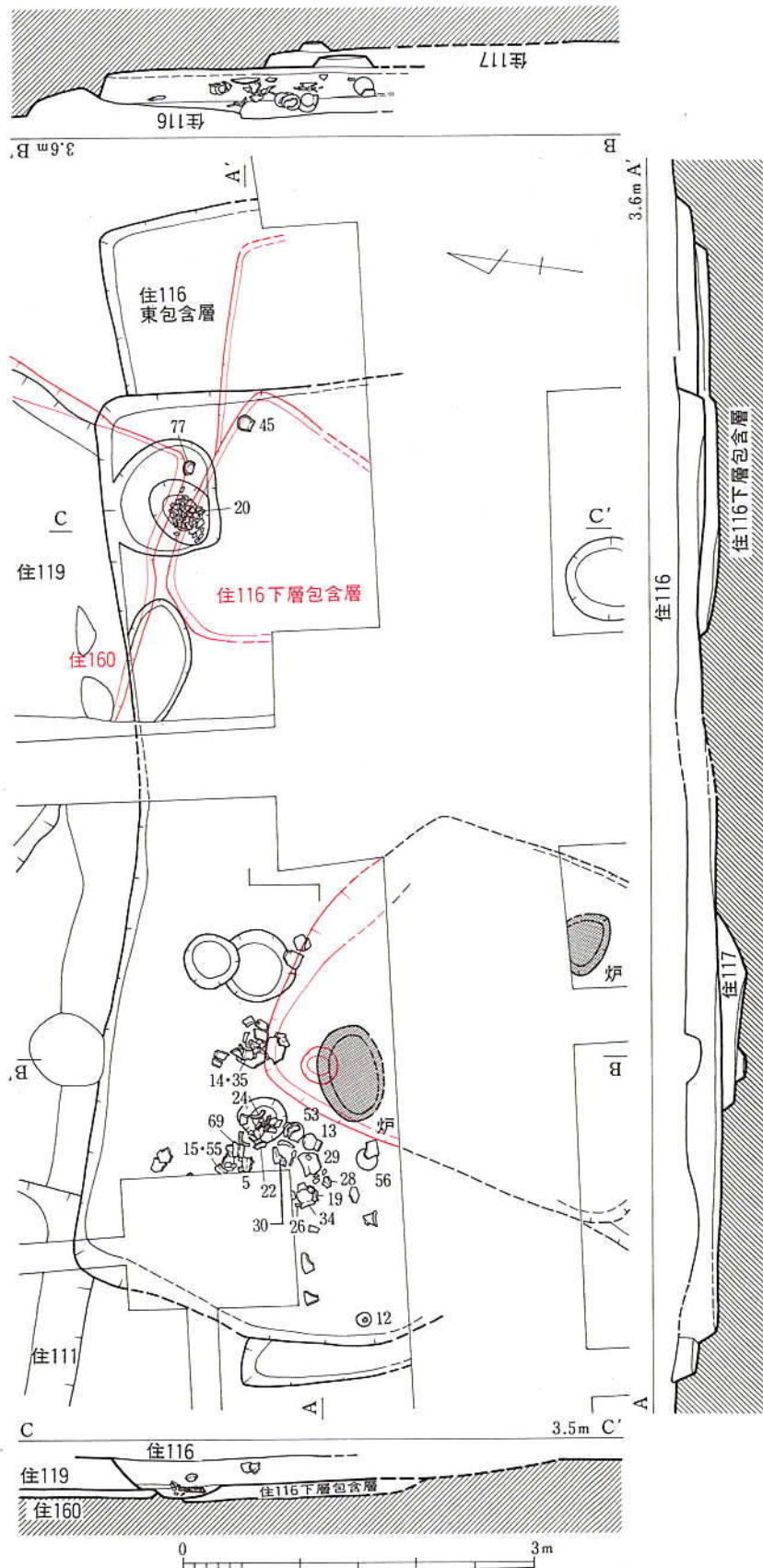
0 20m



第259図 弥生土器・須恵器実測図（7～20は1/3、他は1/4）

間、西新町遺跡は生活、居住の場所ではなくなったことを端的に示すものである。また、ここに示したものが本調査で出土した図化可能な須恵器のほぼすべてであり、半島系土器中の「陶質土器」と比べると極めて少量である。したがって古墳時代前期の遺構を中心として西新町遺跡より出土する多くの「陶質」の土器の中に、古墳時代中期～中世のものが含まれる可能性は極めて低いと考えてよいだろう。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

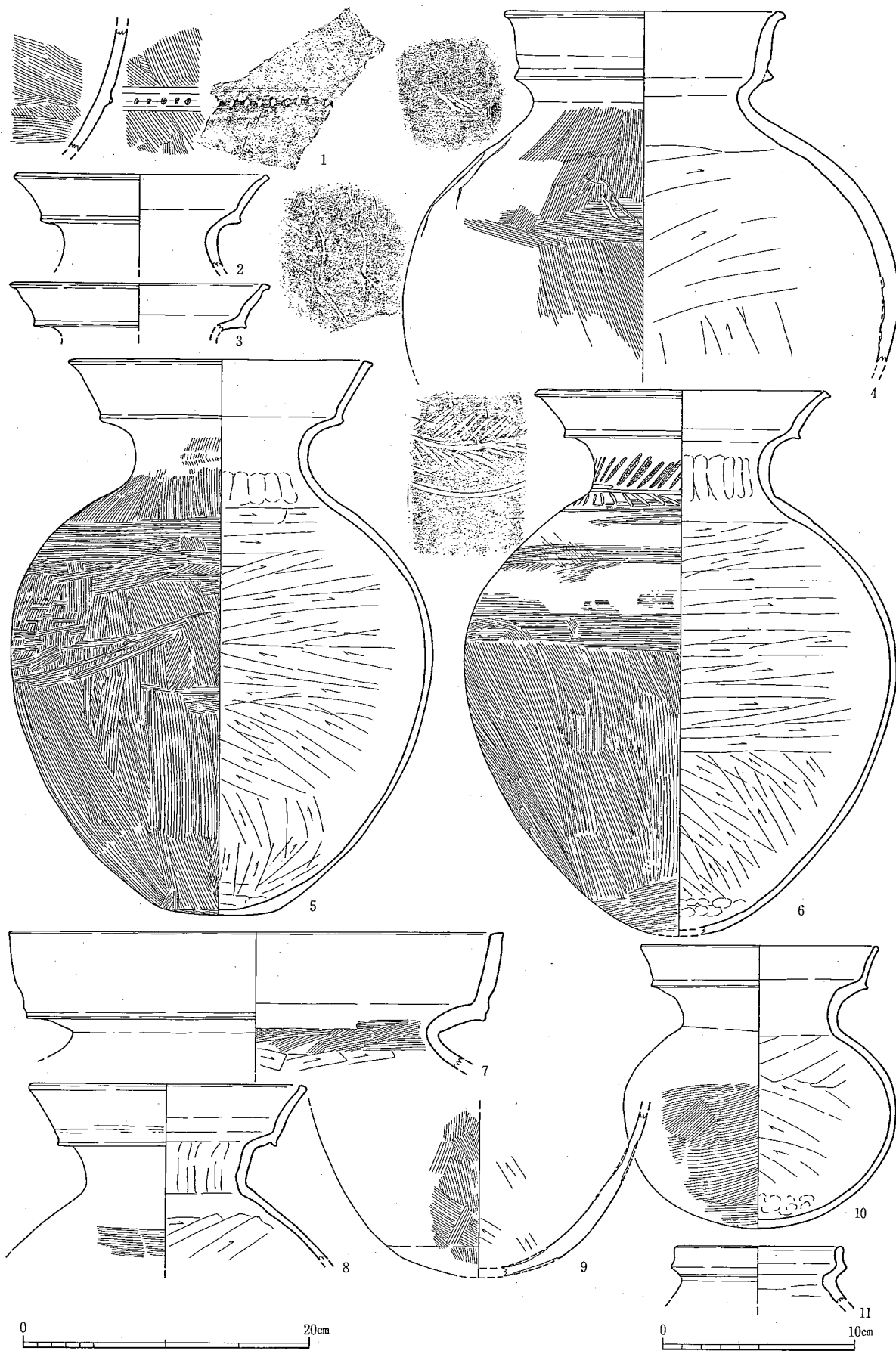


第260図 116号竪穴住居跡実測図 (1/60)

1. 古墳時代の住居跡と出土土器

116号竪穴住居跡 (図版48、第260図)

3中2区に位置し、北東隅が119号・160号竪穴住居跡を切り、西部のちょうど炉の下層で117号竪穴住居跡の北西隅が検出されたので、付近では最も新しいと考えられる竪穴住居跡である。発掘時には東西8mあまりの非常に長い長方形の平面形と理解していた。ただ、南辺は基礎の下にあたるため検出できず、ちょうど中央を分断するように残る校舎基礎の東西で北辺の方向が食い違っている。さらに炉跡も西に偏在しているので、2棟の住居が切合っていたと解釈する余地もある。住居跡の西側で多数の土器が出土し、西部覆土として取り上げたが、その一括性は確かと考えられる。図示した土器(5・9・12・13・19・22・24・26・28・29・30・34・35・53・55・56・69)の他に、7・8・10・11・14・17・25・27・31・33・41・42・49・50・54・57・62・67・78・82・89・92がこれにあたる。一方、覆土上面から出土した土器(3・32・37・39・43・



第261图 116号竖穴住居跡出土土器実測図(1) (10・11は1/3、他は1/4)

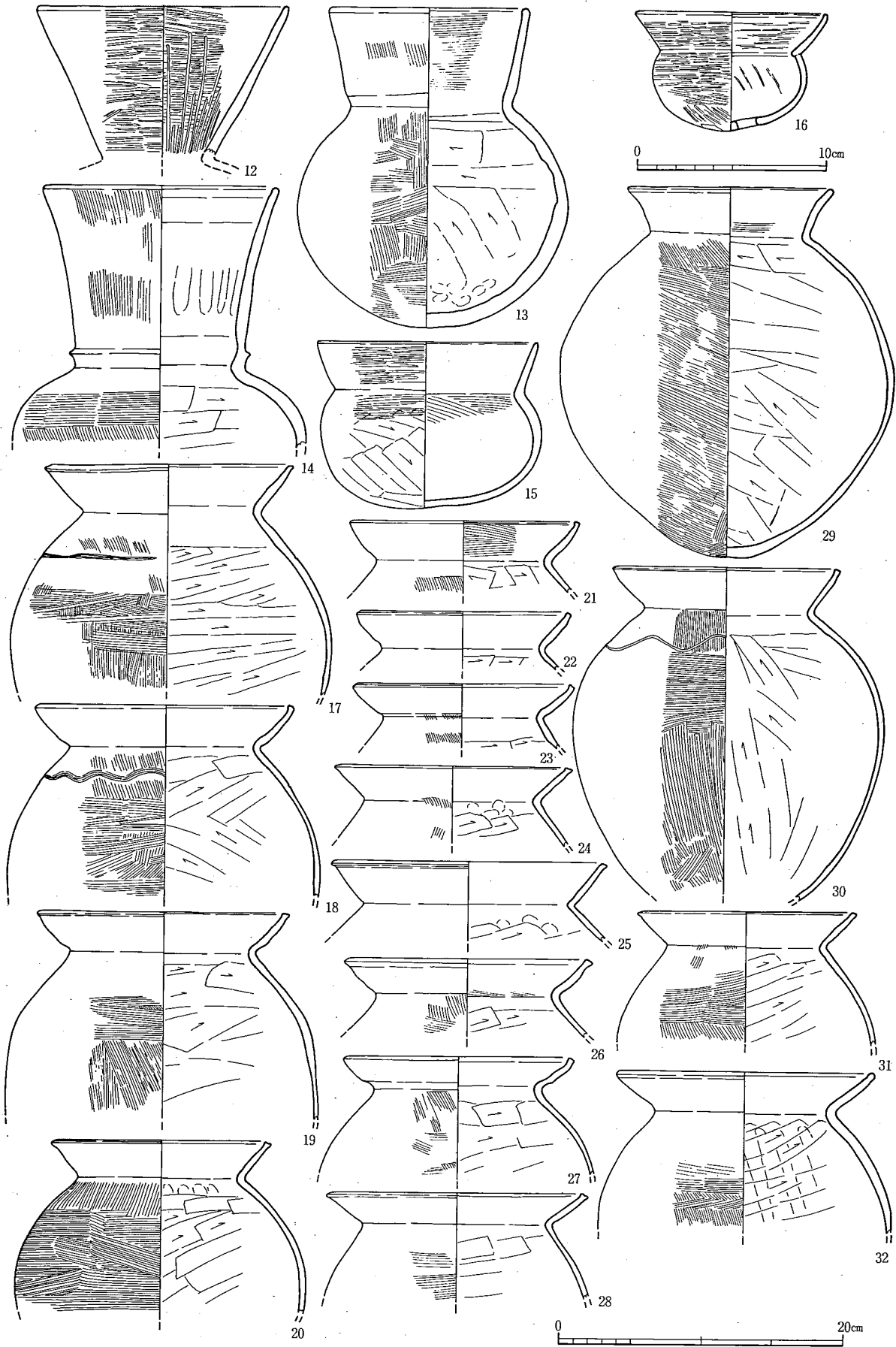
44・46・51・58・59・63・64・66・68・71～74・79・88・90・91・94・95)には北側に隣接する119号・160号住居跡に本来帰属するはずのものが混入した恐れがある。覆土は斑状に黄褐色細砂の混じる暗褐色細砂。なお、東壁の外の包含層を「住116東包含層」、住居東部下層のくぼみを「住116下層包含層」として遺物を取り上げた。土器の他に鉄器(第237図2・10)、土製勾玉(第240図40)が出土している。

出土土器(図版113～116、第261～265図) 1は断面三角形の刻目突帯を巡らす在地系壺の胴部片で、他の土器と異なり、橙褐色を呈す。2～8は大形の山陰系二重口縁壺である。一次口縁の突出が顕著なもの(4)と一次口縁下部に明瞭な稜をなすもの(2・3・5・6)、やや稜のやや甘いもの(7)があるが、下方に垂下させる8は畿内系としたほうがよいかもしれない。5は平底気味の底部をなし、縦ハケ後、胴上部に横、斜めハケを施している。6は頸部に2条の沈線を巡らした後、その上下に斜行の櫛歯刺突文を巡らしている。7は比較的大形で、8は一次口縁の外面上部に接合のためか皺が巡っている。9は大形の壺底部片で山陰系二重口縁壺に伴うものか。いずれも淡黄褐色。10は中形の山陰系二重口縁壺であるが、太い頸部と球形の胴部が特徴的である。11は小形で口縁部の内傾する山陰系二重口縁壺。10・11は灰黄褐色～黄褐色を呈する。

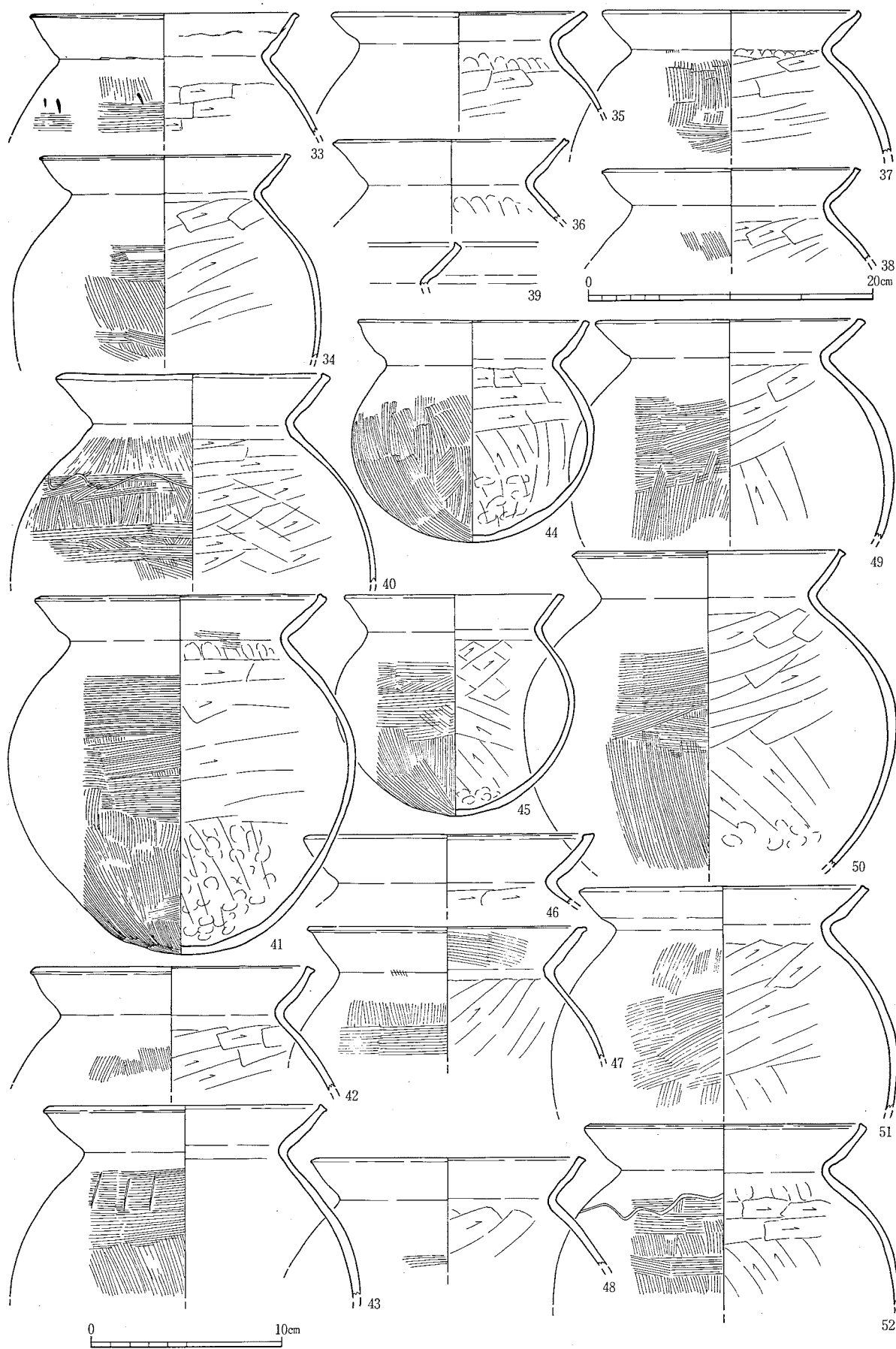
12・13は中形直口壺で12は内外横ミガキの後、内面暗文風の縦ミガキ。13は外面から口縁内面にかけてハケメ仕上げで、器壁の厚い粗製品。14は山陰系中形壺である。12は暗黄褐色、13・14は白黄褐色～灰黄褐色を呈す。15・16は小形丸底壺で外面は胴下部ヘラケズリ後口縁～胴上部ミガキ、内面は頸部下にハケメ残る他はナデで、黄褐色を呈す。16は口縁が大きく開き、外面～口縁内面ミガキ、胴部内面ナデ仕上げで橙褐色。底部には意図的なものか断定し難いが、焼成後の小孔がある。

17～53は畿内系の甕で、19と34は同一個体の可能性がある。口縁部は内湾の強い27、わずかに内湾する19・21・23・38・42・44・46・51・52、屈曲して外反する29もあるが、直線的に外傾するものが主体である。27は頸部外面の横ナデが特に強く、丸く屈曲している。口縁端部は丸く仕上げた29・32・44・45・49、外につまみ出す25・33・34・42もあるが、上方ないしは内側につまみ出すものの多いことが注意される。肩部文様は17が浅く粗雑な2条沈線、18は2条波状文、30・40・52が1条波状文、33がハケメ工具刺突文で、43の肩部にはハケメ工具を押し付けたかのような不規則な縦方向の線刻が見られる。41・43は胴下部縦ハケが胴上部横ハケを切っており、17・18・53はその逆の切合いか。44の胴部外面は横ハケを省略したためか縦ハケのみである。胴内面を見ると21・37・46の内面ケズリは頸部近くまで及ぶが、頸部より少し下でとどまるものが多い。19淡橙褐色、25黄橙褐色、37明褐色の他は白黄褐色～淡黄褐色を主体としている。18・31・35・37・43・44・47・50・51は外面全体に煤が付着し、24・41は口縁外面に付着している。54・55は口縁の伸びが17～53よりも長く、壺との区別が難しいもの。いずれも口縁端部内面をわずかに丸くつまみ出している。55は胴下部の斜めハケが上部の縦ハケを切っており、その変換点が内面の接合痕と対応している。54が橙褐色、55が暗褐色を呈し、やや特異である。二重口縁の56・57は山陰系甕とも呼ぶべきものか。57は口縁部の横ナデが強く器壁が極めて薄い。56は口縁外面に煤が付着し、57は二次加熱が顕著。いずれも白黄褐色～淡黄褐色を呈す。

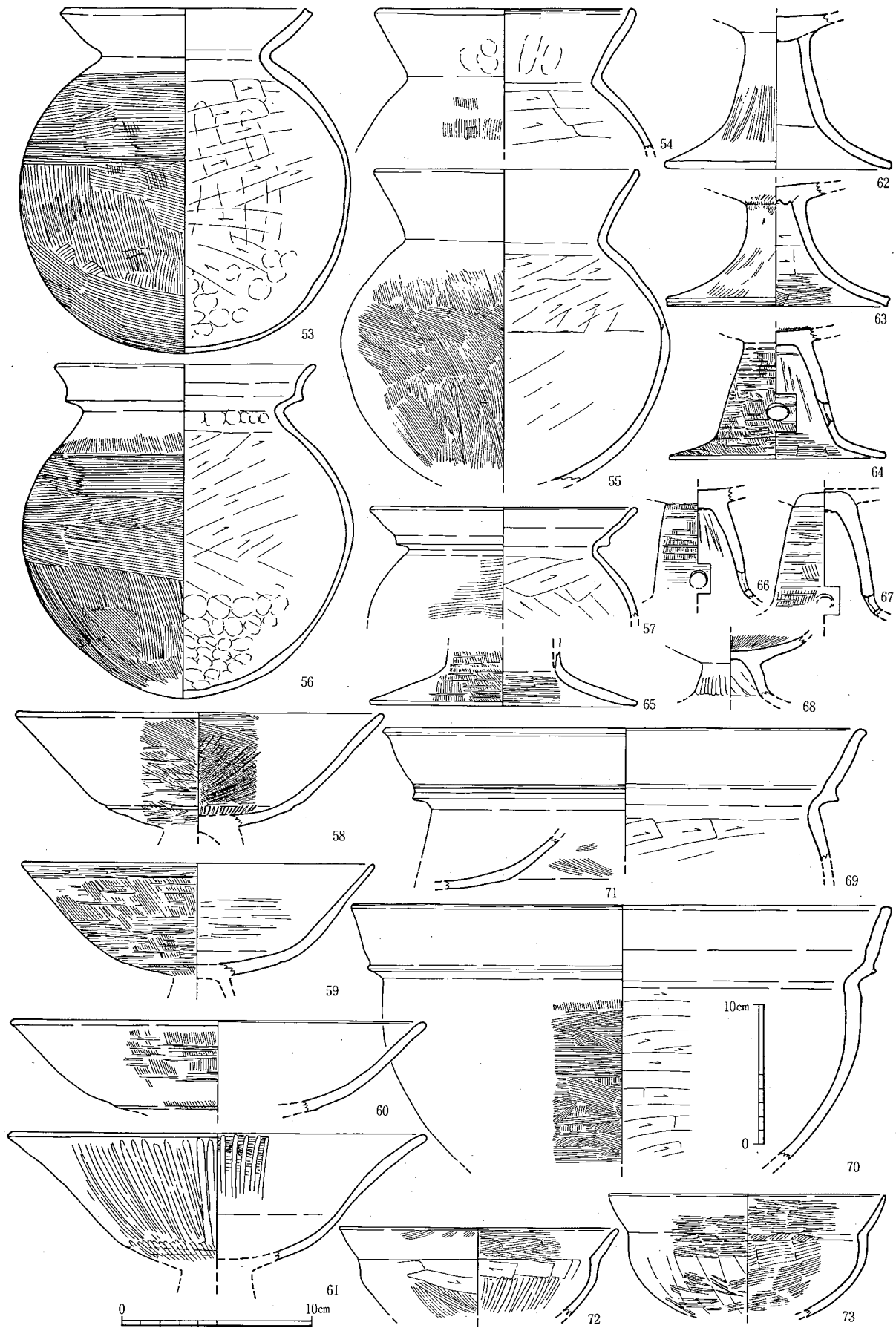
58～61は高杯杯部である。58～60は外面縦ハケ後、横ミガキを施し、内面は58が斜めハケ後放射状に暗文風にミガキを施し、59・60は摩滅するがミガキ仕上げと思われる。61は外面縦ミガキ、内面横ハケ後暗文風のミガキを施した在地系高杯杯部。赤褐色を呈する58以外はいずれも橙褐色。62



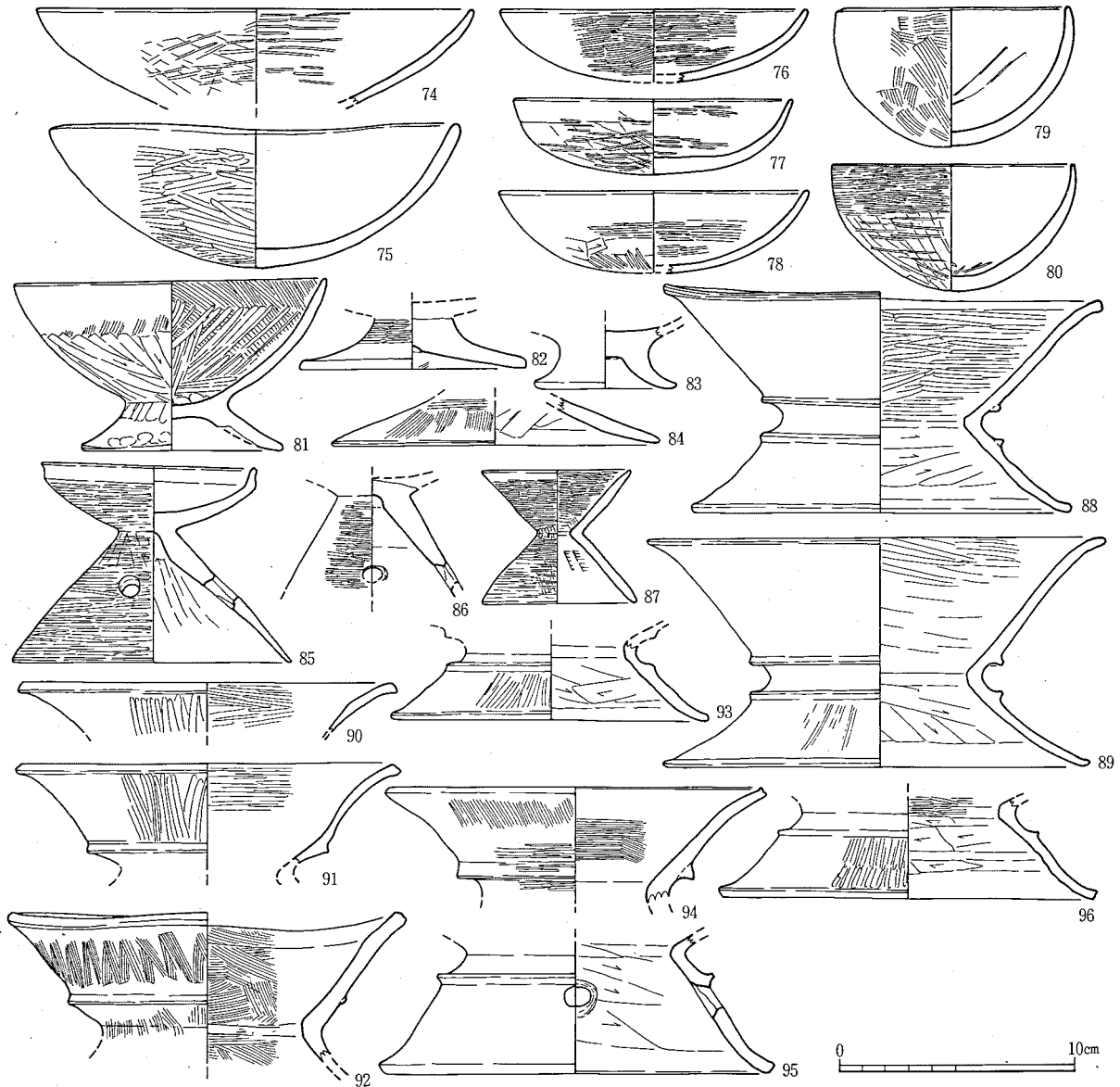
第262図 116号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (12~16は1/3、他は1/4)



第263図 116号竪穴住居跡出土土器実測図(3)(33~39は1/3、他は1/4)



第264図 116号竪穴住居跡出土土器実測図(4)(69~71は1/3、他は1/4)



第265図 116号竪穴住居跡出土土器実測図(5)(1/3)

～68は高杯脚部である。62・63は充填法によって接合し、外面はミガキが目立たず粗製に近い。脚内面上部はケズリ仕上げか。64～67はいずれも外面縦ハケ後横ミガキで、半乾燥時に穿孔する。64・65は脚裾内面ハケメで、64・66は脚柱部内面に絞り痕残す。脚付鉢とも考えられる68は脚柱部外面縦ハケ、内面はケズリの可能性がある。杯部内面は放射状のミガキ。62・63が白黄褐色～灰黄褐色、64が黄褐色を呈す他は橙褐色。

69・70は山陰系二重口縁大形鉢で、71はその底部片か。いずれも白黄褐色～淡黄褐色。72・73は口縁外反する鉢で、72は胴部内面のみ縦方向ミガキ仕上げの珍しい調整。外面はケズリ後ハケメ、内面は口縁部ハケ、頸部ケズリ。73は胴部外面ケズリ、胴部内面ハケメの後、口縁部内外をミガキで仕上げしており、こちらの方は一般的な調整による。72は内面橙褐色、外面灰黄褐色、73は黄褐色。79～80は単口縁の鉢である。74～78は外面ミガキ仕上げであるが、74・77・78はミガキ前のケズリが残り、75は他と比べ太いミガキである。内面はナデ仕上げの75以外はミガキ仕上げ。いずれも黄橙色～橙褐色。79・80は器形の深いもので淡黄褐色を呈し、79は外面ハケメ、80は外面ケズリ後横ミ

ガキで、いずれも内面ナデ仕上げ。81は脚付鉢で82～84はその脚部と考えたが、84は高杯脚裾の可能性もある。81は鉢部外面ハケ後ケズリ、鉢部内面ハケ後暗文風ミガキで、脚内外はナデ。82は外面ミガキ、83は内外ナデ、84は外面ハケメ、内面ケズリ後脚裾ナデ。82は橙褐色を呈するが、他は淡黄褐色である。

85～87は橙褐色を呈する精製小形器台で、85・86は受部鉢状で半乾燥時に穿孔を施す。ほぼ完形の85の穿孔は3ヶ所。小形の87は鼓状につくっている。外面はいずれもミガキ仕上げで、85・87は上下の接合部外面に縦方向稜残す。受部内面の調整は85が摩滅し、87は横ミガキ。脚部内面はいずれもナデで、87には横ハケ残る。88～96は山陰系鼓形器台であるが、92はあるいは壺口縁かも知れない。内面は受部ケズリ後ミガキ、裾部ケズリを基調となるが、92・94はハケメ仕上げで天地がやや不安。外面は90・91・93・96が縦ミガキ、94は縦ハケ後横ミガキ。89・95は縦ハケを丁寧にナデ消している。外面をハケメで仕上げた92は受部外面に鋸歯文風のハケメを施している。95は1ヶ所に半乾燥時の穿孔が残る。(重藤)

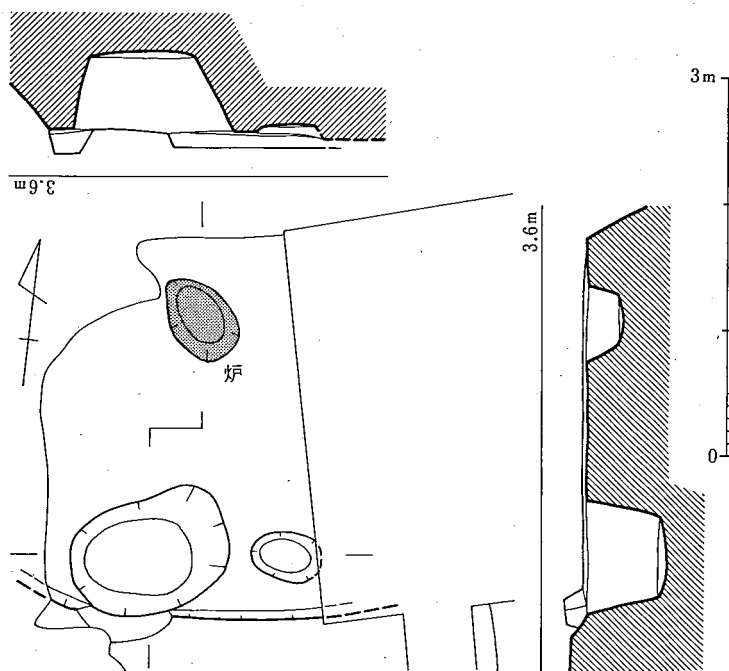
117号竪穴住居跡 (図版43、第212図)

3中2区、3南6・7区にまたがる竪穴住居跡である。大部分が校舎基礎の下に位置するために遺存状況は良くないが、東西2.9m、南北3.6mの比較的小形に属する竪穴住居跡になる。南部は103号竪穴住居跡を床面近くまで掘り進めた段階で確認したが、校舎基礎下に残る土層を観察したところ、103号住居跡覆土を掘り込んでいることを確認した。北東隅は116号竪穴住居跡下層で検出され、切合いからは103号より新しく、116号に先行すると思われる。住居の東壁にやや近い位置で炉跡が検出され、覆土は褐色細砂。

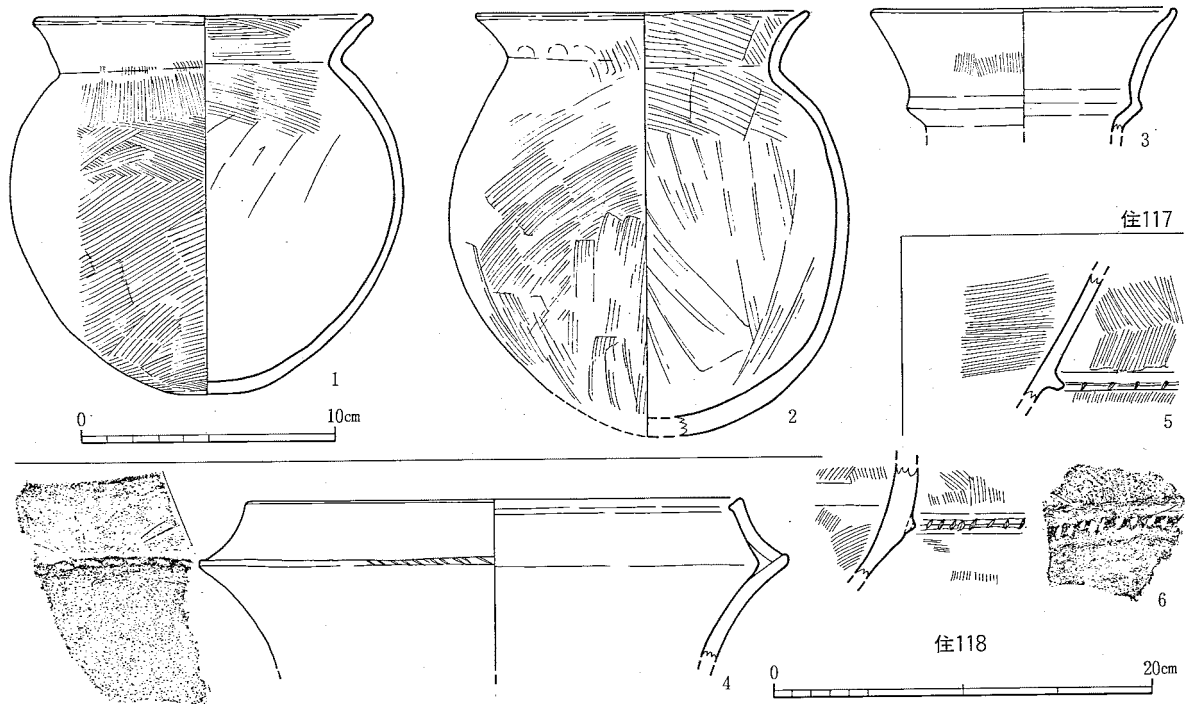
出土土器 (図版116、第267図1～3) 1・2はいずれもほぼ完形に復元される5様式系甕である。1は口縁がわずかに外反し、小さい断面レンズ状の底部をなす。外面はハケメで上から下への切合いが確認できる。内面は口縁～頸部内面ハケメ、胴中～下部はケズリ。2は口縁の外反が強く、底部は丸底をなしており器壁が厚い。外面はハケメ後底部近くを条痕の残る板ナデで仕上げる。内面は口縁部～頸部内面ハケメで胴中～下部はケズリ風の板ナデ。いずれも灰黄褐色を呈す。3は山陰系中形壺であるが、口縁の伸びが短く、外反がやや強く、褐色を呈す。形態的に古い特徴をもつものか。(重藤)

118号竪穴住居跡 (第266図)

3中2区に位置し、北西部を大きく攪乱に壊され、東部は校舎基礎があるために、検出された壁は南壁の一部のみである。南壁沿いに長軸1.3m、短軸



第266図 118号住居跡実測図 (1/60)



第267図 117・118号竪穴住居跡出土土器実測図（1～3は1/3、他は1/4）（1～3：住117、4～6：住118）

0.9m、床面からの深さ0.6mの大形の土坑が検出されており、屋内土坑の可能性もある。やや北側で炉跡が検出されているが、これとは別に図示していないが住居覆土上面でも焼土が確認できた。これが炉跡とすると、上層に別の竪穴住居跡が存在していたことになるが、検証はできなかった。覆土は黄褐色細砂。

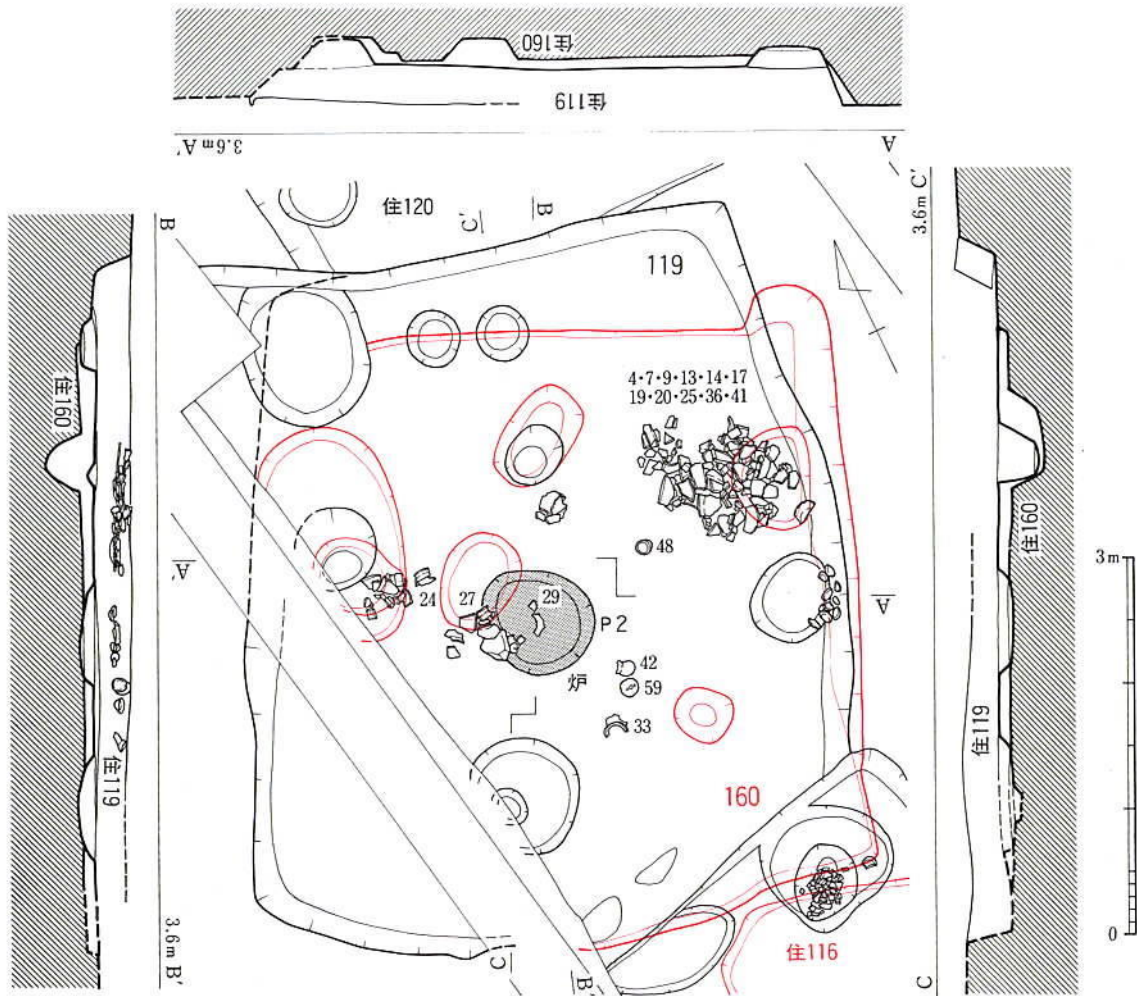
出土土器（第267図4～6） 4は在地系の二重口縁壺で、屈曲部外面に浅い刻目を施すか。5・6は在地系壺に伴うと思われる刻目突帯を施した胴部片で、内外ハケメ仕上げ。（重藤）

119号竪穴住居跡（図版48、第268図）

3中2区に位置しており、116号竪穴住居跡に南東隅を切られ、北壁が120号竪穴住居跡を切っている。下層で検出された160号竪穴住居跡とは、その規模、位置がほぼ一致している。平面形を間違っているとらえた可能性もあるが、あるいは同一場所で建替えを行ったとも考えられる。119号住居跡は南北5.6m、東西4.8mを測るやや大形の竪穴住居跡で、北西部は掘り間違えたために壁が失われ、歪な平面形を呈している。炉跡は住居のほぼ中央に位置しており、その南北にあるピットが支柱穴となる可能性がある。また、西壁想定線の中央に接して、下層で2段掘りの土坑が確認され、あるいは壁際土坑となるか。北東部と炉跡周辺を中心に多数の土器が出土した。160号住居跡との関係に問題を残すが、116号・120号住居跡との切合いは確かであるので、良好な一括遺物と評価できよう。覆土は上層が褐色細砂、下層が黄褐色細砂を少し含む暗褐色細砂。土器の他に玉未製品（第239図4）、石錘（第242図5・9、第243図34）、凹石（第251図66）が出土した。

出土土器（図版116～118、第269～273図56～60） 2・16・43・44・47・51は覆土の下部から出土した。

1は黄褐色の在地系複合口縁壺で、他の土器に比べ古相を呈し混入品か。18は在地系大形壺で橙褐色～褐色を呈す。口縁は丸く屈曲させ複合口縁状になり、端部に刻み目を施す。頸部、胴やや上

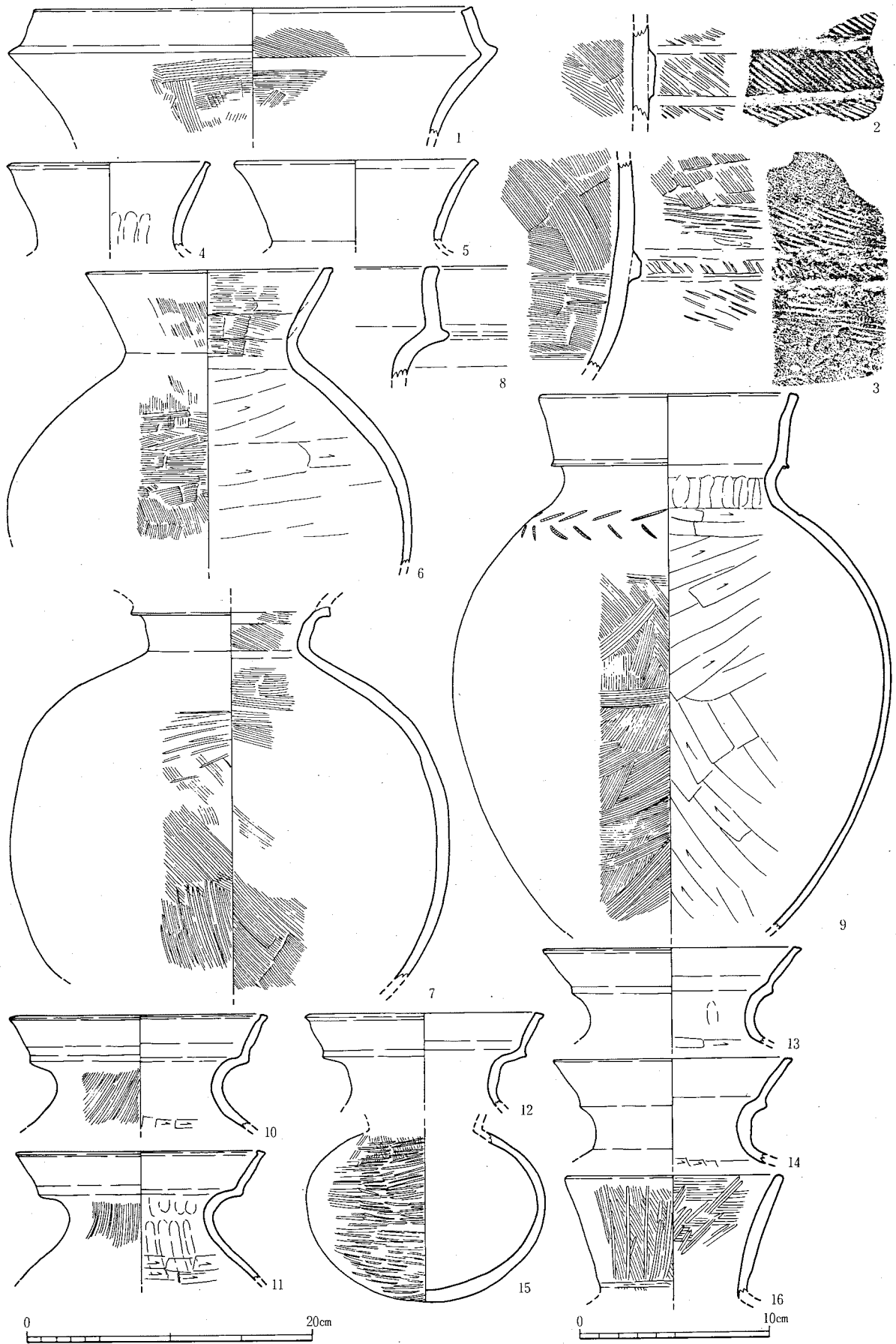


第268図 119・160号竪穴住居跡実測図(1/60)

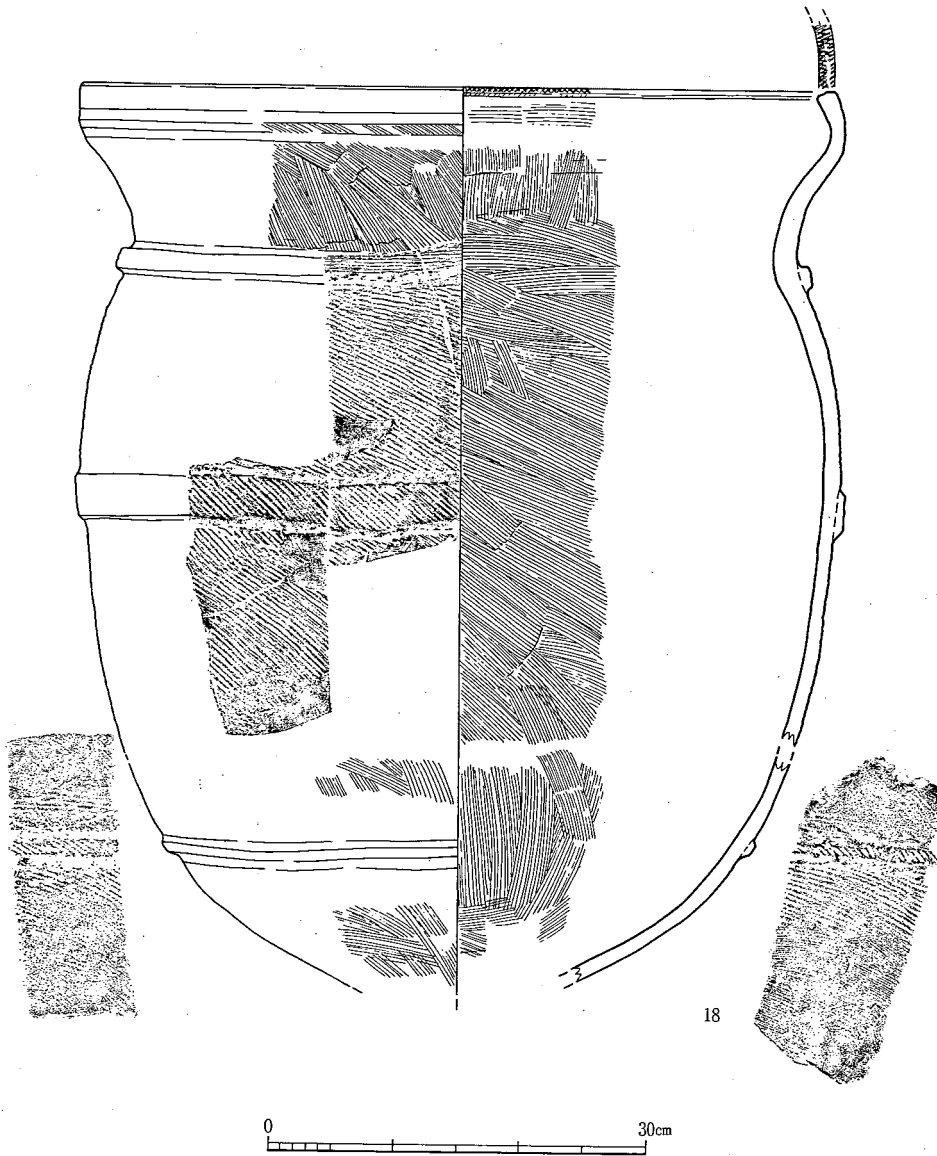
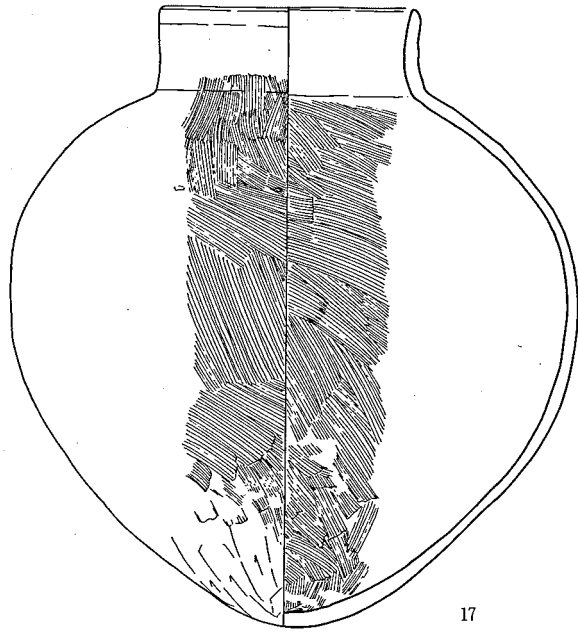
位、やや下位の3ヶ所に低い断面コ字状突帯を貼付し、底部は欠損するも丸底の可能性が高い。外面は口縁部と胴下部はハケメ仕上げ、他は突帯も含めてタタキ。口縁部外面にはタタキ工具の小口があたったような痕跡が一部に残る。2・3はいずれも低い断面コ字状突帯を貼付する胴部片で、18の破片となるかも知れない。外面はタタキ仕上げで、2は黄褐色、3は褐色。17は口縁の直立するやや大形の在地系直口壺で、褐色～白黄褐色を呈す。胴部内外はハケメ仕上げで、外面底部近くはケズリ風の板ナデを施す。

4～6は畿内系直口壺である。いずれも灰黄褐色～淡黄褐色を呈し、4の外面の一部には煤が付着している。7は口縁部を欠損するが、畿内系の二重口縁壺になるか。頸部は一次口縁までしか残っていないが、立ち上がりが短く上方を屈曲させており、胴部は球形に近い。外面上部にミガキの残るかのような部分があるが、基本的には内外ハケメ仕上げの粗製品で、器壁が厚く装飾も見られない。橙褐色。9～14は山陰系二重口縁壺である。9は口縁部が直立し、頸部にハケメ工具刺突文を方向を変えて2段巡らしており、上部から下部への胴部外面ハケメの切合いが観察できる。いずれも灰黄褐色～淡黄褐色を呈し、12外面には若干煤が付着する。15は畿内系中形壺胴部片、16はその口縁部片である。15は外面橙褐色を呈する精製品で、外面ハケメ後ミガキ、内面ナデ仕上げ。16は外面斜めハケ後やや雑な縦ミガキ、内面横ハケ後部分的にミガキで、橙褐色。

19～21は内面ハケメ仕上げで在地系甕か。ともに淡黄褐色～灰黄褐色を呈す。19は口縁部外面に

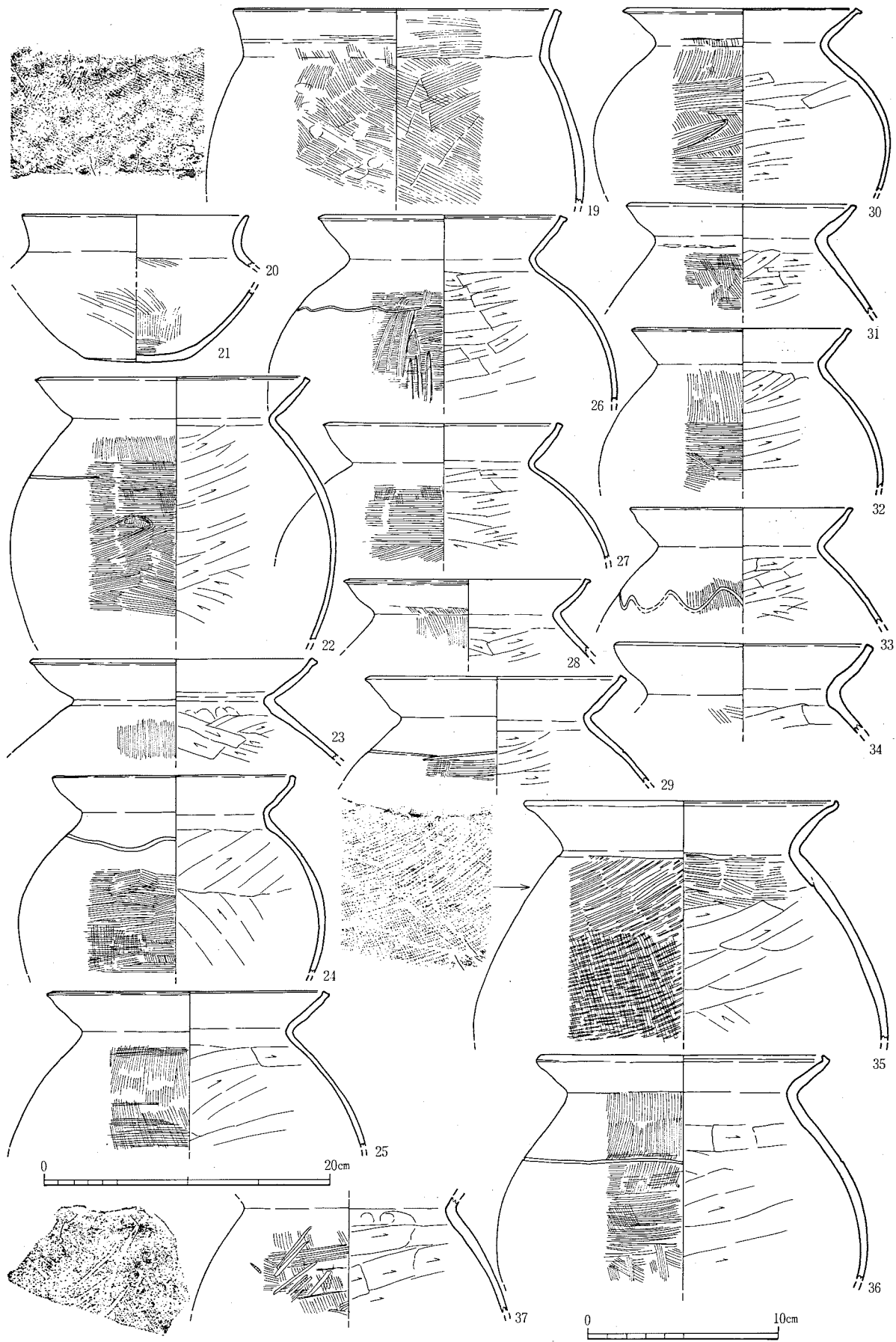


第269図 119号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (15・16は1/3、他は1/4)

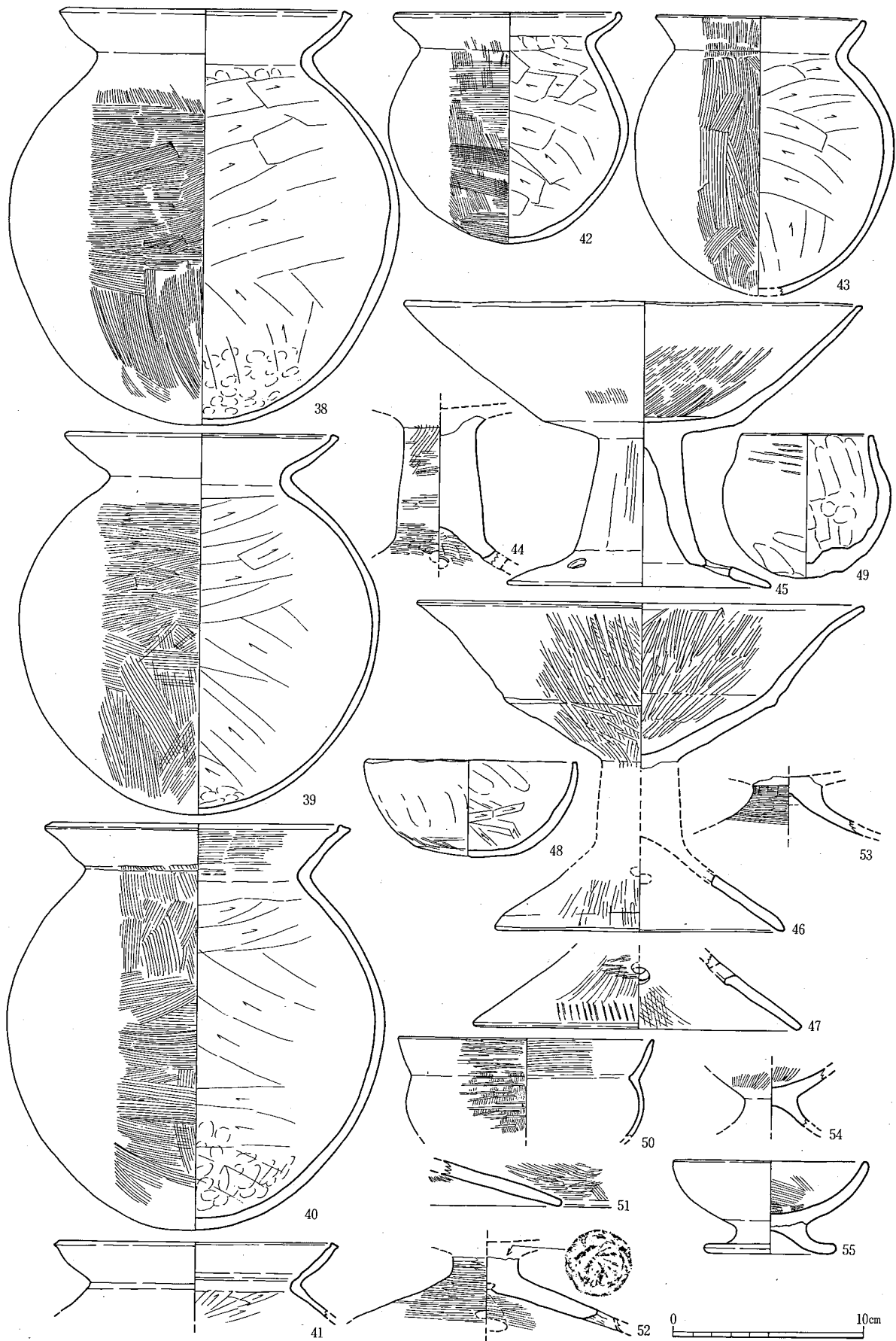


強いナデによる狭い凹線が巡っている。21は底部片で断面はかすかにレンズ状底をなす。35は庄内式甕で、橙褐色である。屈曲して外反し、端部を上方に丸くつまみ出した口縁部に、張りの小さい胴部をなす。胴部外面は細かな右上がりタタキ後下部に縦ハケを施し、内面は頸部直下ハケメ後、頸部からやや下の所までケズリを施している。22～34・36～43は布留系甕で、36以下はやや小形のものである。口縁は強いナデにより端部近くを上方に屈曲させるもの(24)、わずかに内湾気味のもの(28・34)もあるが、直線的に外傾するものが主体をなすと言える。23は口縁の外傾が強く、頸部外面は指の入らないほど狭くなっている点が特徴的である。口縁端部は一部に外側につまみ

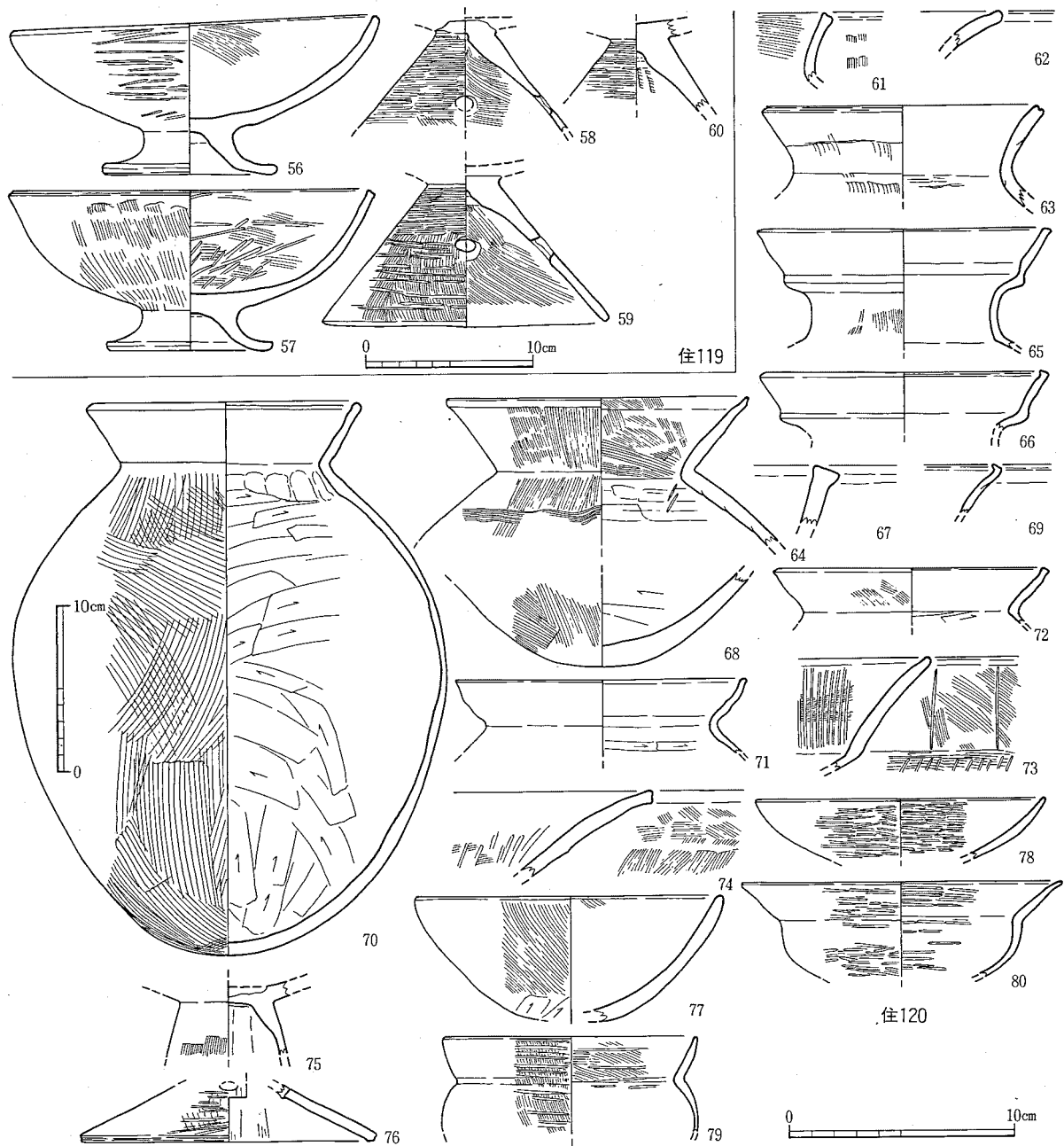
第270図 119号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/6)



第271図 119号竖穴住居跡出土土器実測図(3) (34~37は1/3、他は1/4)



第272图 119号竖穴住居跡出土土器实测图(4)(1/3)



第273図 119(5)・120号竪穴住居跡出土土器実測図実測図(61~72は1/3、他は1/4)

出すもの(23・26・30・33)もあり注意されるが、斜め上方につまみ上げるものを中心とする。外面のハケメを見ると27・30は胴中部斜めハケメが、36は胴下部縦ハケメが胴上部横ハケメを切るようであり、39は全体として上部から下部へのハケメの進行が観察できる。43は縦ハケメ仕上げで、横ハケメを省略したものか。内面はケズリが頸部まで及ばないものがほとんどであるが、22・26は比較的上部までケズリを施している。24・26・33は1条の波状沈線文、22・29・36は1条直線沈線文を巡らし、37はハケメ工具小口刺突文を巡らすとともに、不規則な斜行の線刻を施している。25が化粧土のため橙褐色を呈し、42が黄橙色を呈するほかは、淡黄褐色～灰黄褐色を呈す。39・40・42は外面全体に煤が付着し、39の胴中位は二次加熱も顕著である。

44~47は高杯とその破片で、灰黄褐色の47以外は橙褐色～黄橙褐色。44は中実の脚柱部片で外面

ハケ後横ミガキ、脚裾内面ハケメで仕上げる。45は完形に復元できるもので、杯部と脚部の接合は充填法により、脚裾部の3ヶ所に穿孔する。外面は摩滅が顕著であるが、一部にハケメが残り、杯部内面は縦ミガキである。46は杯部と脚裾が接合しないが、同一個体と思われる。剥離痕からすれば脚柱部は44のような形態と推測される。杯部外面はハケ後縦ミガキ、杯部内面縦ミガキ、脚裾外面縦ハケ仕上げである。45は半乾燥時に穿孔するが、他は乾燥前に穿孔したようである。

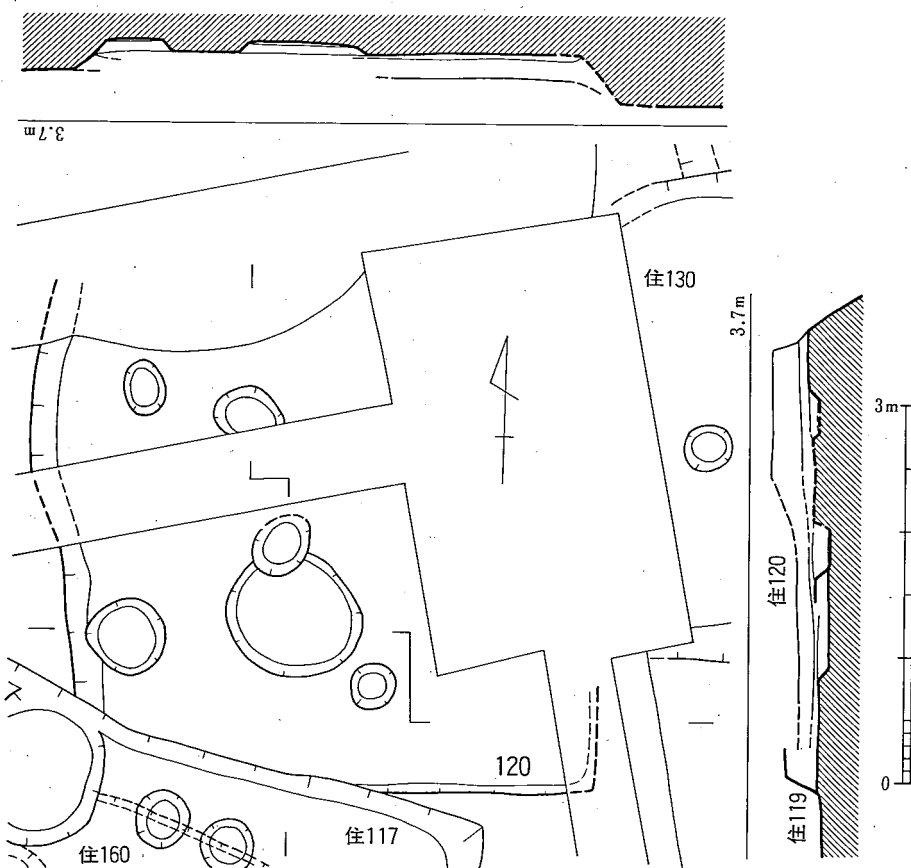
48は単口縁鉢で、内外面底部近くは板ナデを施し、淡黄褐色を呈す。49は口縁部内傾の器形の深い鉢で、口縁部外面にタタキ痕が残る他はナデ仕上げ。灰黄褐色を呈す。50は外反口縁の鉢で外面タテハケ後横ミガキ。内面は口縁ハケ、胴部ナデで橙褐色。51~53は外面横ミガキの橙褐色精製脚付鉢。51はミガキ前の縦ハケが残り、52は内面ハケメで半乾燥時に穿孔している。54は淡黄褐色の脚付鉢片。鉢部外面縦ハケ、内面丁寧なミガキで、脚部は内外ともナデ。55~57は山陰系脚付鉢。いずれも脚内外はナデで、55は鉢部外面ナデ、鉢部内面斜めハケ。56は鉢部外面横ミガキ、内面ハケメがかなり摩滅し、57は鉢部外面縦ハケ、内面横ハケ後ミガキ。55・57は灰黄褐色、56は黄橙色。

58~60は精製小形器台の脚部片で、いずれも橙褐色を呈し、外面横ミガキ、内面ハケメ仕上げである。58はミガキが粗く先行する斜めハケが外面に見え、2ヶ所に半乾燥時穿孔が残る。(重藤)

120号竪穴住居跡 (図版49、第274図)

3中2区にあり。北側は大きな攪乱、東には校舎基礎がある上に、西南隅を119号竪穴住居跡に切られるため、遺存状況は良くない。検出できたのは西壁と南壁の一部のみである。東壁は校舎基礎の東には続かないので、ちょうど基礎の下に位置するものと思われる。斑状に黄褐色細砂を含む暗褐色細砂が覆土であった。炉跡は検出していない。

出土土器 (図版118、第273図61~80) 61~64は直口壺で、62は外反が強く、61は口縁端部に沈線が巡る。64は口縁端部を上方に拡張気味で、肩部外面に波状櫛歯沈線文を巡らし、胴部内面はケズリが浅いために接合痕が残る。61は灰褐色、62・63淡橙褐色、64褐色を呈す。65・66は山陰系二重口縁壺で65は灰黄褐色、66は暗



第274図 120号竪穴住居跡実測図 (1/60)

灰色。淡橙褐色の67は大形の在地系直口壺口縁部か。68は底部片で橙褐色を呈す。器壁の厚いことから大形の壺になるか。

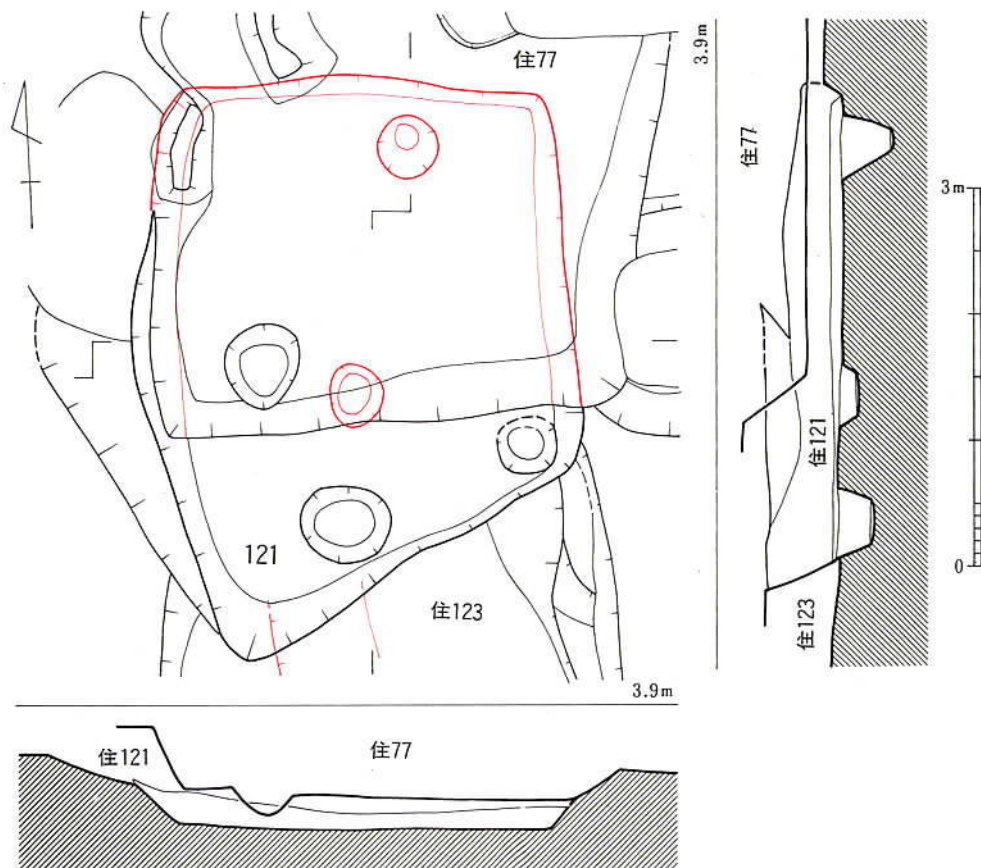
69～72は布留系甕。69は口縁端部を内に内傾させるようにつまみ上げる。70はやや長胴気味で外面の粗いハケと口縁端部内面の肥厚が特徴的。71・72は口縁部に強いナデを施し、72は頸部までケズリが及ぶ。褐色の70以外は白黄褐色～淡黄褐色を呈し、70は胴下半に煤が付着する。

73～76は高杯片。73・74は在地系高杯で、いずれも内面はハケ後縦方向の暗文風ミガキ。73は外面横斜めハケ後、暗文風縦ミガキを施し、口縁部外面はミガキの間隔が粗である。74にはミガキは観察されない。75は充填法により接合したと思われる脚部片で、外面はハケメ後ミガキと思われるが摩滅が顕著。76は脚裾片で外面は縦ハケ後横ミガキで、内面はハケ後ナデ。乾燥前穿孔が1ヶ所残る。73黄褐色、76灰黄褐色で、他は橙褐色。

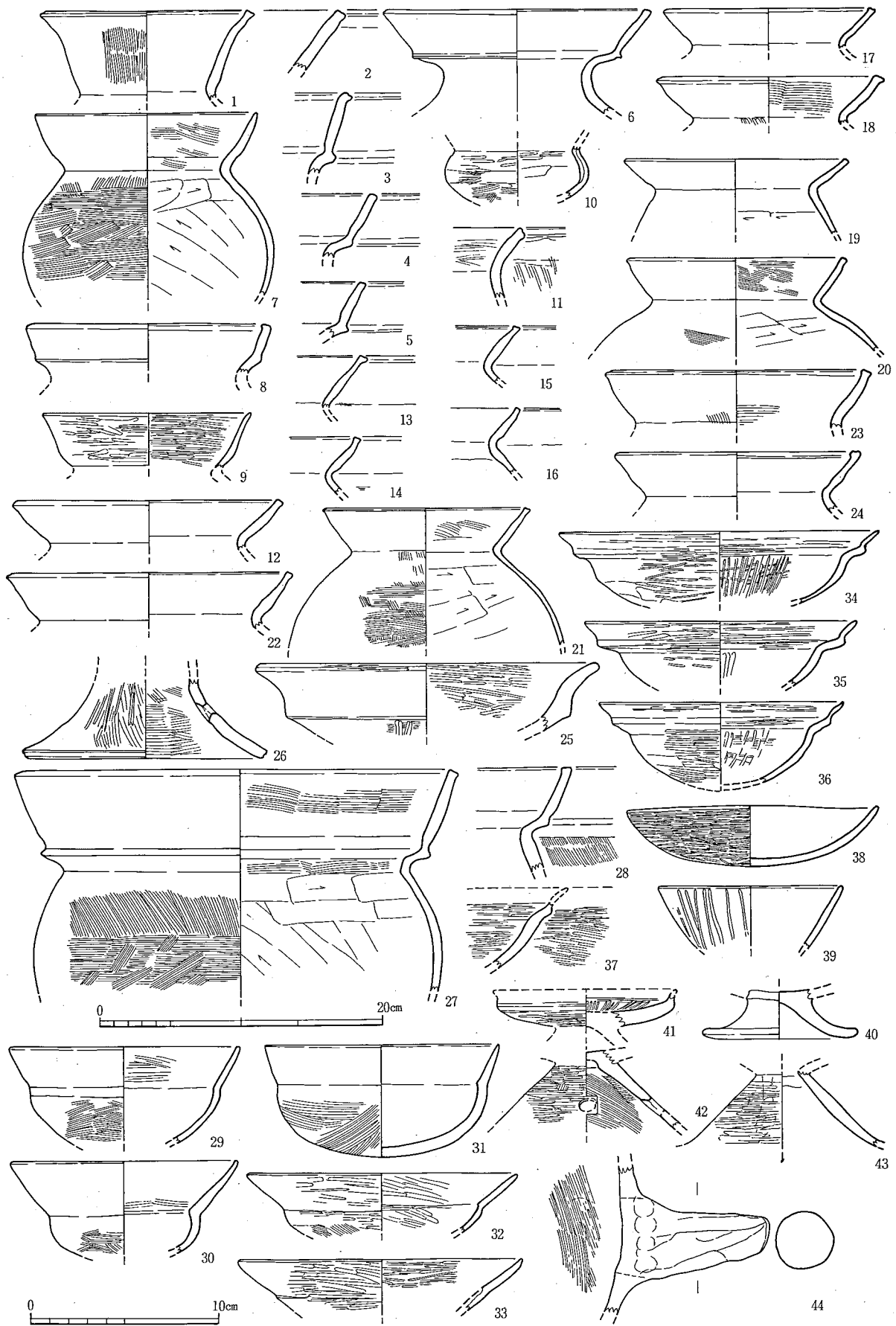
77・78はいずれも橙褐色～黄橙褐色の直口鉢である。77は粗製で外面ハケメ後底部付近ケズリ。内面はナデ。78は精製で外面底部ヘラケズリ後内外を横ミガキ。79・80は内外横ミガキ仕上げで橙褐色精製の外反口縁鉢。79は深い器形をなし、ミガキが粗く先行するハケメを残す。(重藤)

121号竪穴住居跡 (図版49、第275図)

3北1区の中央、77号竪穴住居跡の南部の下層で検出した。南側では123号竪穴住居跡を切っている。この付近は多数の竪穴住居跡が切合っていたために遺構検出に非常に苦労した場所である。そのため123号住居跡との切合いは確実であるが、77号住居跡との切合いは不安が残る。本住居跡



第275図 121号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第276図 121号竖穴住居跡出土土器実測図(1) (1~6・11~21・27・28は1/4、他は1/3)

でも壁は全周するが、掘り間違いのために南壁は東西壁と直行していない。本来はもう少し北側に南壁があったものと思われる。西壁の外側に南壁と直行する掘り込みの線を図示しているが、これも掘り間違いによるものである。炉跡も見つかっていないので住居跡と断定するには不安が残るが、そうであるとすれば比較的、小形のものとなろう。以上のような問題はあるが、本住居跡出土として取り上げた遺物の一括性は比較的良好と考えられる。覆土は黄褐色細砂を斑状に混えた暗褐色細砂。

出土土器 (図版119、第276・277図) 1～44は本住居跡に伴うもので、45～75は121号～124号竪穴住居跡の上面から出土し、それぞれどの住居に帰属するか不明のものである。

1は畿内系直口壺で、口縁端部の外側への拡張が特徴的である。2も直口壺口縁と思われるがやや厚く大形品か。3～6は中形の山陰系二重口縁壺である。化粧土のためか3は淡黄橙色、5は橙褐色を呈す。他は淡黄褐色～白黄褐色。7は白黄褐色を呈す中形直口壺で胴部外面ハケメ仕上げのやや粗製品。8はやや小形の山陰系二重口縁壺。内に折り曲げるようにした口縁端部が特徴的で、淡黄褐色を呈す。9・10は小形丸底壺の破片である。9は内外横ミガキで褐色、10は外面ハケ後ミガキ、内面板ナデで白黄色を呈す。

11は傾き不安であるが、角張る口縁が特徴的なものであり、在地系甕か。灰黄褐色を呈す。12～24は布留系甕である。口縁部は直線的に外傾するものが多いが、14はわずかに内湾する。口縁端部は内～上方に肥厚させたり、つまみ上げるものが多いが、13・18・20は外につまみ出している。二次加熱のためか淡赤褐色を呈する17以外は白黄褐色～淡黄褐色である。

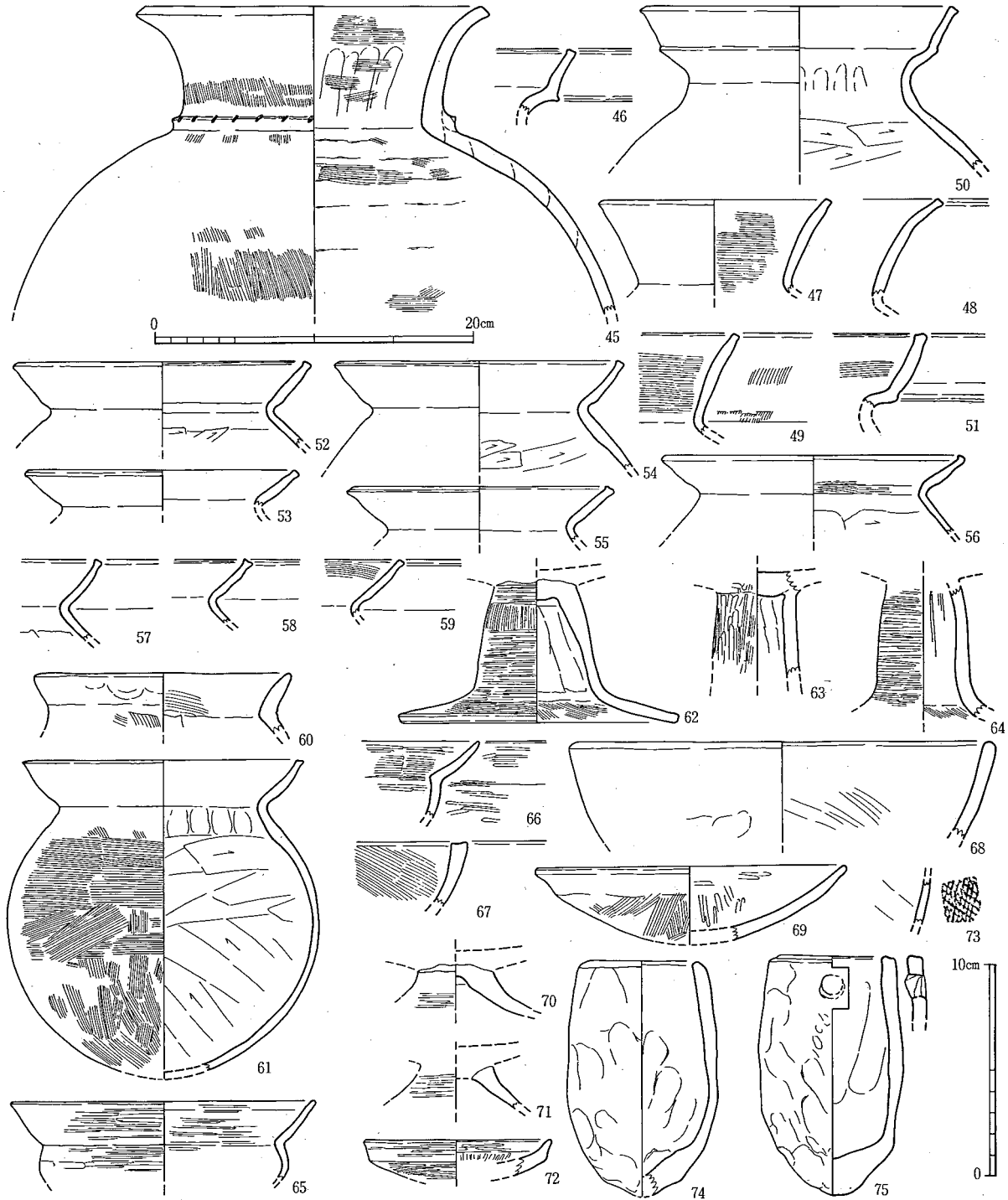
25は器壁が厚く壺口縁との峻別に悩んだが、とりあえず高杯口縁部とした。杯底部外面は横ハケ後縦ミガキ、口縁部外面は横ナデで、内面は横ミガキである。26は外面ハケ後縦ミガキ、内面横ハケで仕上げた高杯脚裾部である。個数は不明であるが、乾燥前と思われる穿孔が残っている。25は白黄褐色、26は橙褐色。

27・28は山陰系二重口縁大形鉢で、27は白黄褐色、28は橙褐色。27は胴部外面ハケで胴上部縦ハケ、胴中部横ハケ、斜めハケの順。口縁部～頸部内面横ハケ、胴部内面はヘラケズリである。29～34は外反口縁鉢である。29～31は胴部外面ハケの粗製品で、29・30は口縁部内面横ハケ。30は淡橙褐色を呈するがミガキは少ないか。29・31は淡黄褐色。32・33は胴部外面にミガキを施したもので、32は胴部外面にミガキ前のケズリ、ハケメが残る。口縁部内面はハケ、胴部内面はミガキ。33は口縁内面ミガキ。32は淡黄褐色、33は橙褐色。34～37は二重口縁鉢。いずれも外面横ミガキで、34～36は内面横ミガキ後胴部暗文風縦ミガキ仕上げであるが、37は縦ミガキが確認されない。34・36は胴部外面下部にミガキ前のケズリを残す。34・35・37は褐色～暗褐色、36は橙褐色。38・39は単口縁鉢である。29は橙褐色の精製品で外面横ミガキ、内面ナデ。暗黄褐色の39は内外ナデの後外面に暗文風の粗な縦ミガキを施した半精製品。40は淡黄褐色を呈す脚付鉢脚部片。

41～43は精製小形器台の破片で、黄橙色～橙褐色を呈す。41は受部破片で、外底部ケズリ後外面～口縁内面を横ミガキ、受部底を放射状ミガキ。42は脚部片で外面縦ハケ後横ミガキ、内面横ハケ。43は受部底がない型式で外面ケズリ後横ミガキ、内面ナデ。

44は甌把手片で、胴部内面にハケメを施した土師器に近い仕上げのもの。焼成も土師器に近く、黄褐色を呈す。

45は大形の直口壺で、頸部外面にハケメ工具小口刺突の断面三角突帯を貼付することから在地系



第277図 121号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (45~59は1/4、他は1/3)

か。46・50は山陰系二重口縁壺、47・48は畿内系直口壺。褐色の45、暗黄褐色50以外は白黄褐色。

52~59・61は布留系甕口縁部である。褐色の58を除けば白黄褐色~淡黄褐色。52・53は外面に煤が付着している。61は外面全体に煤、内面胴下部にコゲが付着する。60は口縁部の厚い小形甕。須恵器出現以降に見られるような器形をなし、あるいは半島系軟質小形鉢の模倣品となるか。褐色を呈し、外面の煤付着、内外の二次加熱が顕著である。

62~64は高杯脚部。62・64は外面縦、斜めハケ後横ミガキ、脚裾内面ハケである。完存するが穿孔はない。63は外面縦ハケ後縦ミガキ、内面絞り痕を残し、充填法で杯部と接合している。62は淡

黄橙色、63・64は褐色を呈す。

65・66は口縁外反の鉢で、いずれも内外横ミガキ仕上であるが、65は胴外面にミガキ前ケズリ、66は口縁部内面にミガキ前ハケメを残す。65は黄橙色、66は明褐色を呈す。67・68は単口縁で深い器形をなし、ミガキを施さない粗製の鉢。いずれも淡黄褐色。69は浅い単口縁鉢で外面ハケメ、内面雑なミガキ仕上げで、黄褐色。70・71は脚付鉢脚部片で、ともに外面横ミガキの精製品。

72は小形精製器台の受部片で外面～口縁部内面横ミガキ、内底放射状ミガキ。73は細かな斜格子タタキの軟質壺胴部片。74・75は蛸壺でいずれも黄褐色。(重藤)

122号竪穴住居跡 (図版49、第278図)

3北1区の南中央で検出したもの、72・96号竪穴住居跡の北に位置している。遺構検出当初は124号竪穴住居跡と一連のものと考えたが、5cm程、覆土を下げた段階で123・124号竪穴住居跡を切っていることが判明した。南側に校舎基礎があるので不明な部分があるが、比較的小形の竪穴住居跡で、北壁中央近くに炉跡を設置している。北壁に沿って投棄されたかのように土器が並んで出土したので、「北壁際一括」土器として取り上げた。これらは良好なセット関係としてとらえることが、その他の遺物には周辺の住居跡に本来帰属するものを含む恐れがある。覆土は褐色細砂。

出土土器 (図版119・120、第279～281図) 1～47が本住居跡出土品で、そのうち11～13・17～22・26～29・31・32・36・37・42・43・46が「北壁際一括」出土品であり、良好な一括遺物を構成する。一方、1・2・7・15・16・22・33～35・38・39・44・47は覆土上層から出土したもので、本住居跡に確実に伴うか不安である。48～64は122・123号竪穴住居跡の上層から出土したものの。

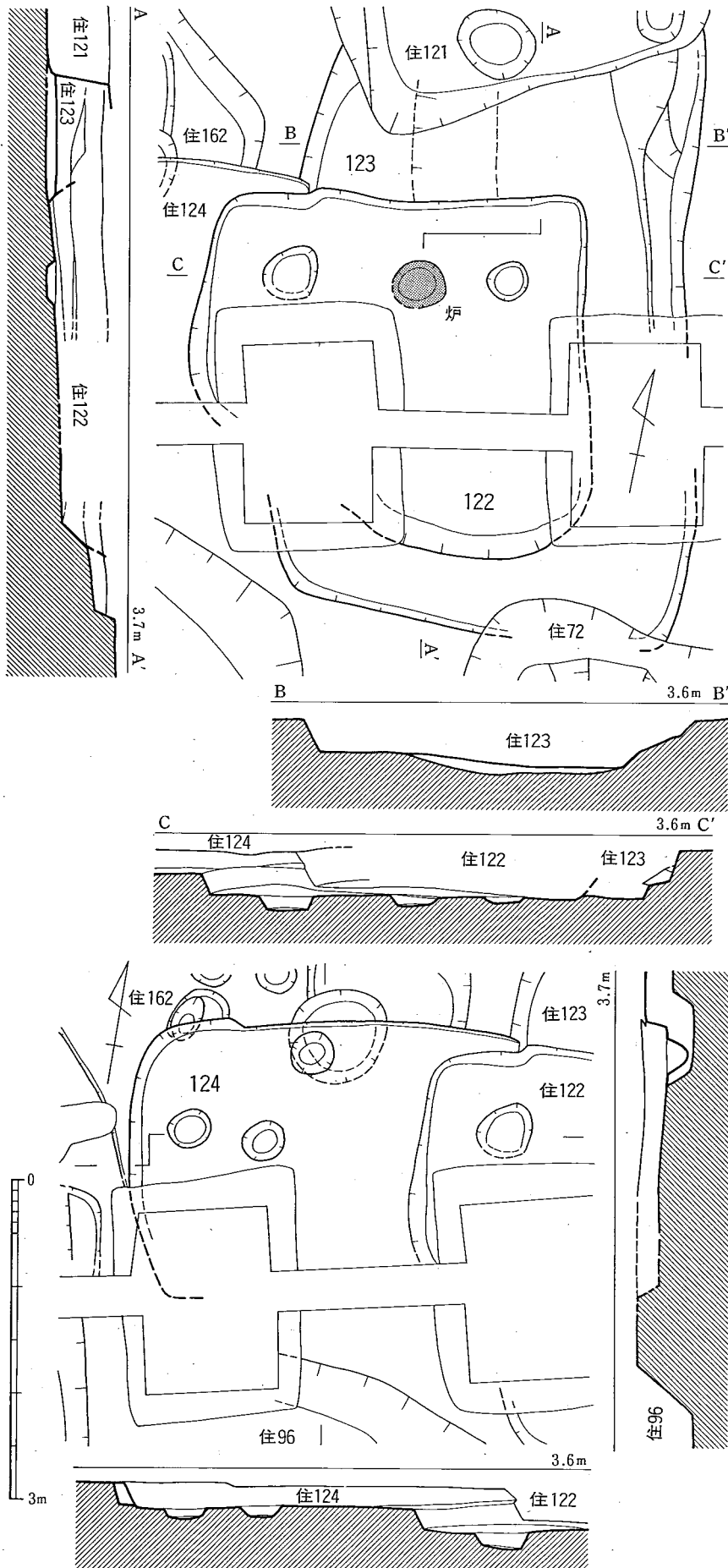
1は頸部にハケメ工具交差文刻目突帯を貼付し、内面ハケメ仕上げの在り系壺頸部片で、灰黄褐色。2は灰褐色の在り系複合口縁壺片で、他の遺物と比較すると古相を呈し混入品か。3～5は畿内系直口壺で、3は口縁端部の外へのつまみ出しが特徴的。3・5は灰黄褐色～黄褐色であるが、4は橙褐色を呈しやや特異。6は畿内系直口壺としては器壁が厚く、あるいは器台か。橙褐色。

7～12・18・19は山陰系二重口縁壺で、13はその底部か。8、9は大形品の頸部片で、8は外面に沈線、斜行櫛歯刺突文、竹管刺突文を巡らし、9は斜行刺突文が残る。10は外面丹塗の可能性がある。18は二重口縁をなすが短く締まりの小さい頸部、レンズ状底という特徴的な形態である。外面は肩部のハケを胴中下部の斜めハケ、縦ハケが切っている。19は肩部の半周にのみ沈線を巡らせている。これらの山陰系二重口縁は橙褐色の10以外は灰黄褐色～淡黄褐色を呈す。

14～17は精製の小形丸底壺。外面はいずれも横ミガキ仕上げであるが、ミガキに先行して14はケズリ、縦ハケ、15～17は縦ハケを施している。内面は15が底部ケズリ、17はハケメを残す。14は頸部が小さく二重口縁壺となることも考えられる。赤褐色でやや粗製の15以外は黄橙色の精製品。

20～31は布留系甕。口縁部は直線的に外傾するもの(21～23)もあるが、わずかに内湾するものが多い。口縁端部はやや角張るものが主体であるが、24は外側に、29は内面上方に拡張気味である。20・21は肩部の横ハケが胴下部の縦ハケを切り、27・29はその逆の切合いとなる可能性がある。22は肩部に1条の波状沈線文を巡らしている。29は頸部内面に水平方向の細い皺が巡り、接合痕と推測される。いずれも白黄褐色～淡黄褐色を呈し、20・21は胴中～下部、22は口縁部外面、27・29は外面全体に煤が付着。30は外面全体に煤が付着するとともに、胴中部の二次加熱が顕著である。

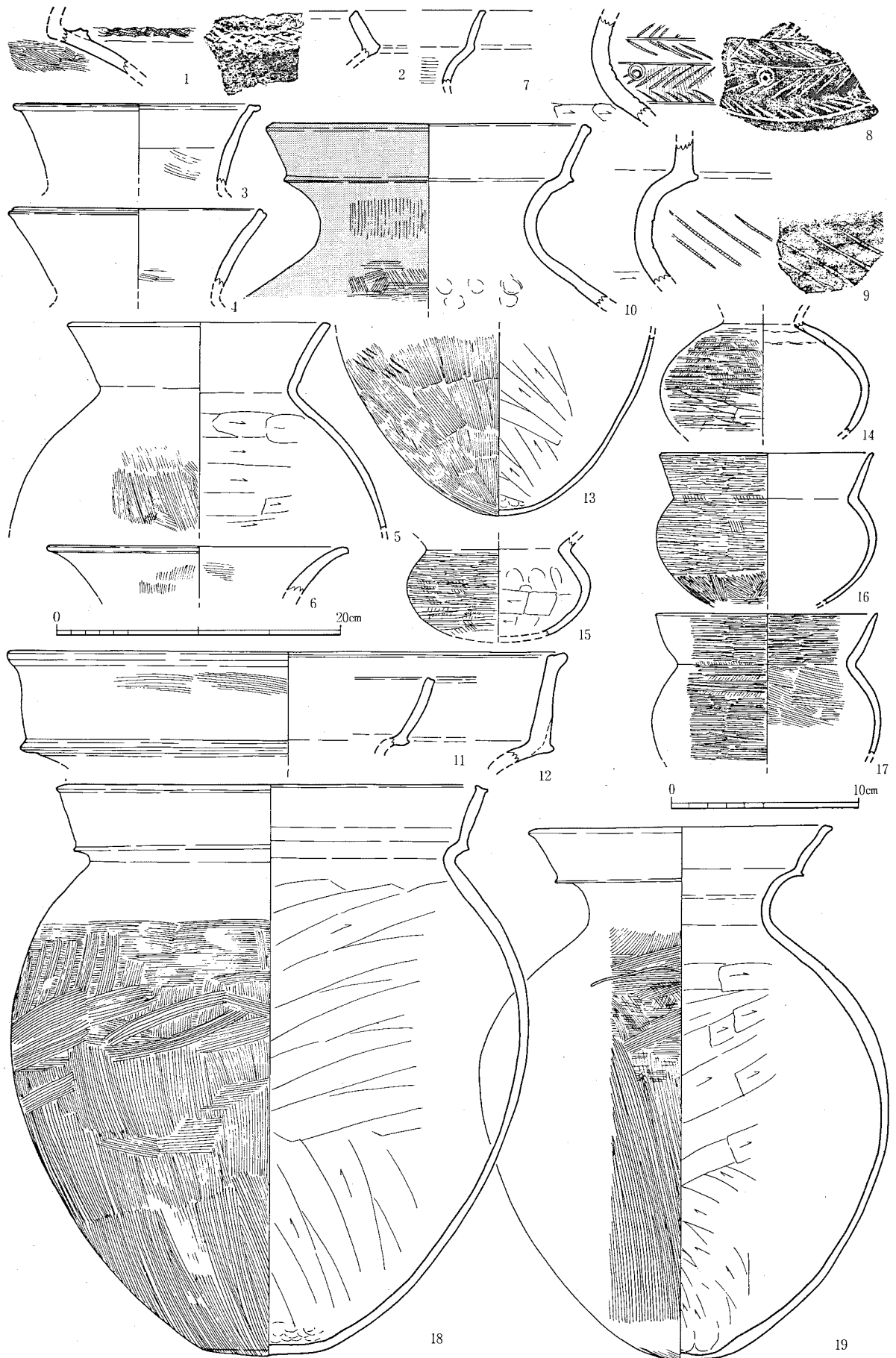
32はほぼ完形の高杯で、脚部2ヶ所に半乾燥時の穿孔がある。外面ハケ後横ミガキ、杯部内面横、



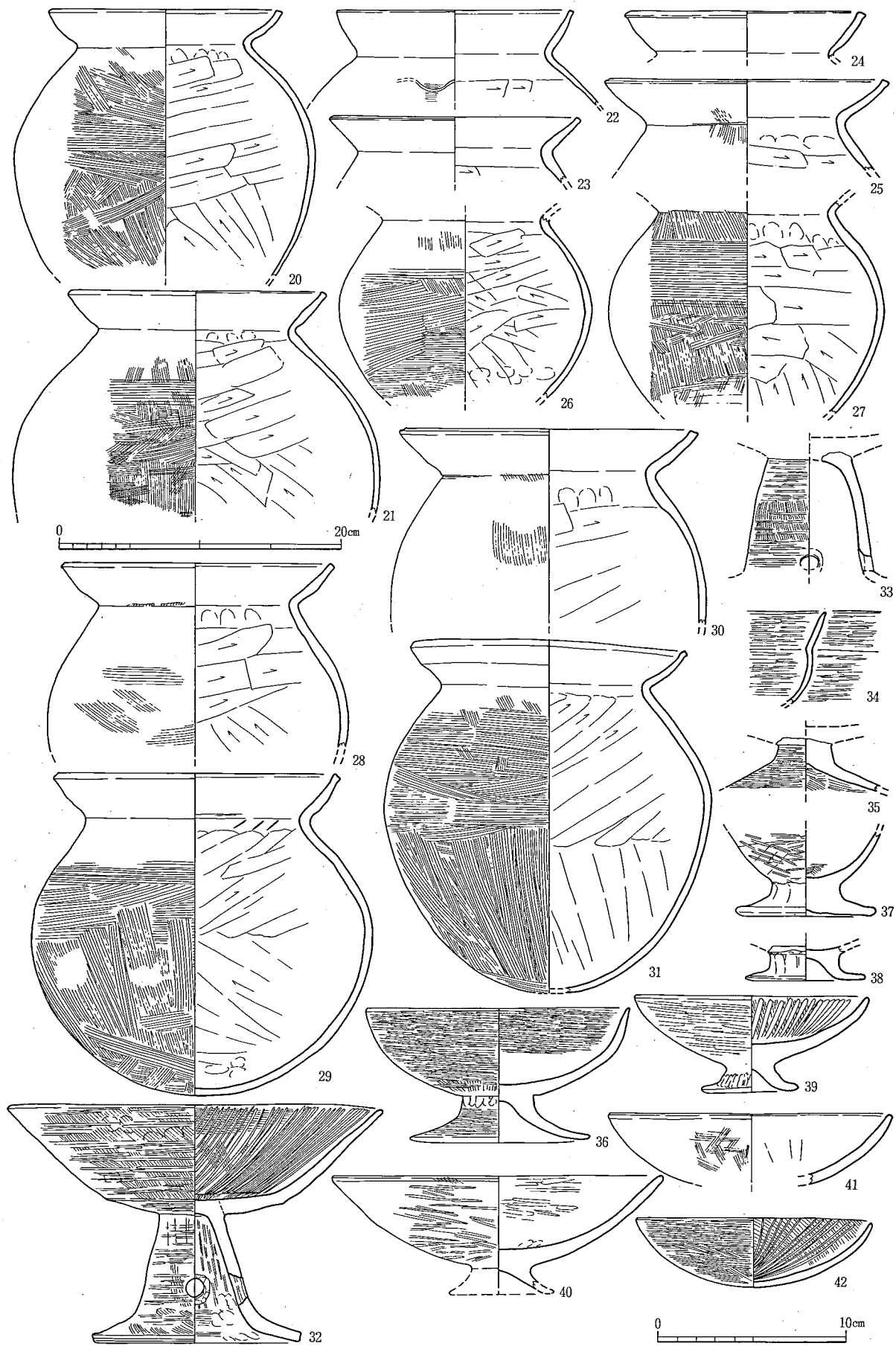
第278図 122～124号竪穴住居跡実測図（1/60）

斜めハケ後暗文風放射状縦ミガキ、脚部内面は縦方向板ナデで、脚裾は指押さえ後横ハケを施す。33も高杯脚部片で、外面縦ハケ後横ミガキ、内面ナデ。いずれも橙褐色の精製品。

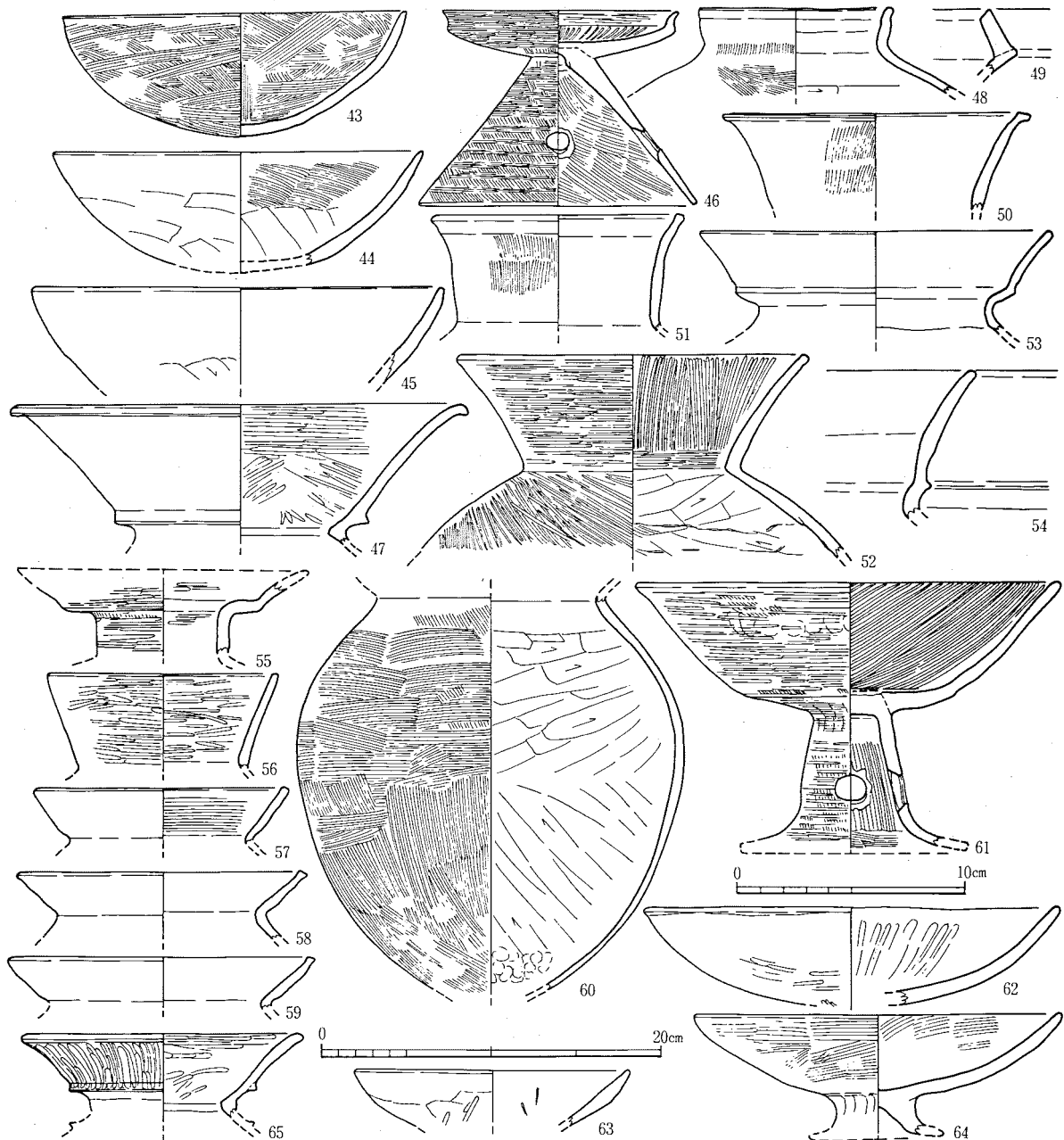
34は外反口縁鉢で内外ミガキ仕上げの精製品。35～39は脚付鉢である。35は外面縦ハケ後横ミガキ、内面ハケメ、36は鉢外面下部ケズリ後外面～内面を横ミガキし、いずれも橙褐色～黄褐色を呈する精製品。37は鉢底部が厚く、鉢部外面をヘラケズリ後横ミガキ。39は鉢部外面横ミガキ、脚部外面指圧痕、鉢部内面を暗文風に縦方向の太い縦ミガキを施す。40は鉢部外面ハケ後横ミガキ、内面は摩滅するが太い横ミガキか。37～40はいずれも淡黄褐色を呈す。41～45は単口縁鉢。41は外面ハケ、内面ナデ、42は外面横ミガキ、内面斜めハケ後放射状ミガキ、43は内外ハケ、44は外面板ナデ後ナデ、内面ハケ、45はケズリの外底部以外はナデである。橙褐色精製の42以外は



第279図 122号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (14~17は1/3、他は1/4)



第280图 122号竖穴住居跡出土土器実测图(2)(20~24は1/4、他は1/3)



第281図 122号竪穴住居跡出土土器実測図(3)(48~52・57~60は1/4、他は1/3)

淡黄褐色を呈す。

46は黄橙色の精製小形器台で、脚裾外面斜めハケ後外面横ミガキ、受部口縁内面横ミガキ、受部内底放射状ミガキ。脚裾内面は斜めハケ仕上げである。脚裾は2ヶ所に半乾燥時の穿孔を施している。47は山陰系鼓形器台で外面摩滅、内面やや太いミガキ。淡黄褐色。

48は在地系直口壺、49は在地系の複合口縁壺口縁部。50~52は畿内系直口壺である。50は口縁部を外に拡張している。52は外面横~斜めミガキ、口縁内面縦ミガキ仕上げで、明褐色を呈するやや特異な個体。50・51は白黄褐色を呈する。53・54は山陰系の二重口縁壺で、白黄褐色~灰黄褐色。55は内外横ミガキ仕上げで橙褐色を呈する小形畿内系二重口縁壺の破片。56は小形丸底壺で内外ミガキ仕上げ。灰黄褐色を呈する。57~60は布留系甕である。60は外面胴上部横ハケ後下部縦ハケの順で、胴中位まで煤が付着している。61は高杯で調整は32と共通している。2ヶ所に半乾燥時穿孔

を施し、化粧土のため淡橙褐色を呈する。62・63は単口縁鉢で、62は内外ミガキを施し、63は外面ケズリ後一部ミガキ、内面は工具痕を残す。64は淡黄褐色を呈し、鉢部内外ハケの脚付鉢。65は白黄褐色を呈する小形の山陰系鼓形器台で外面縦ミガキ、内面やや太い横ミガキ仕上げ。(重藤)

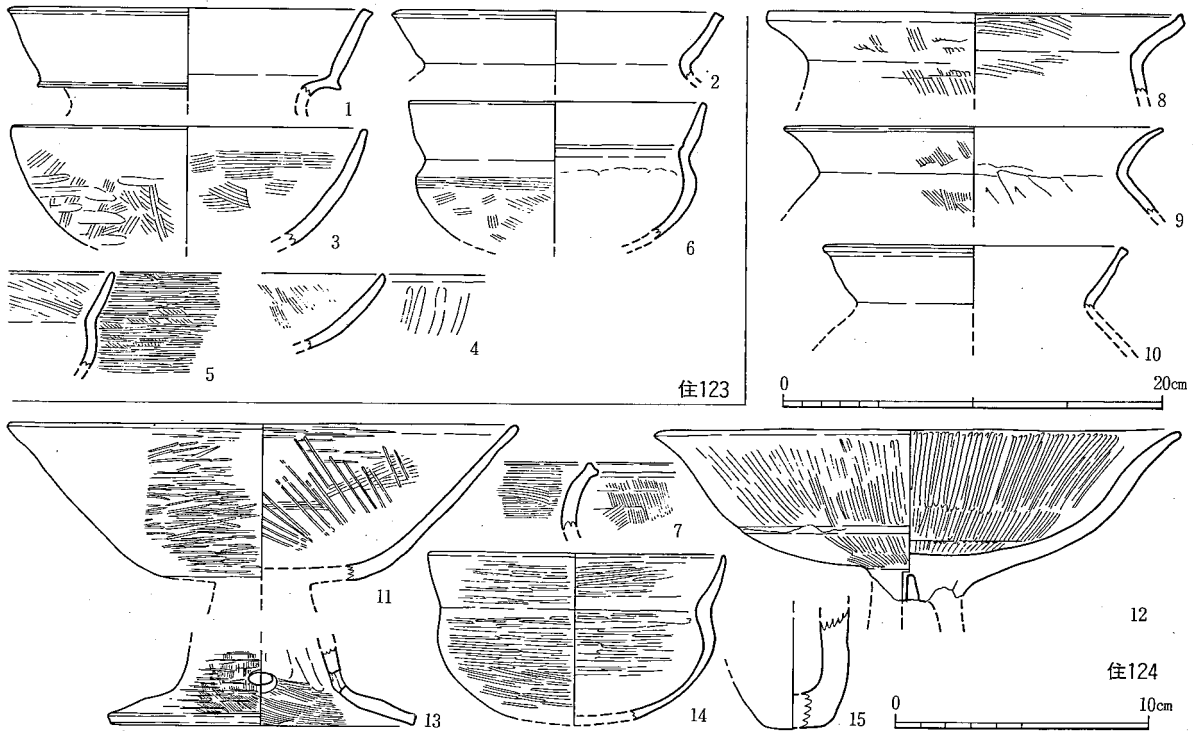
123号竪穴住居跡 (図版49、第278図)

3北1区の南側にあり、北を121号竪穴住居跡、南を122号竪穴住居跡に大きく切られている。東壁は121号住居跡東南隅から南に延びるが、外側は掘り間違いで内側が本来のもの。また、122号竪穴住居跡の南側にある段は、遺構検出時に123号住居跡が基礎を越えて南に広がると想定したものの、発掘の結果、浅いくぼみと分かった部分である。123号住居跡本来の形態は断面図B-B'がかかるとの東西壁のそれぞれ一部しか残存していない。覆土は褐灰色細砂。

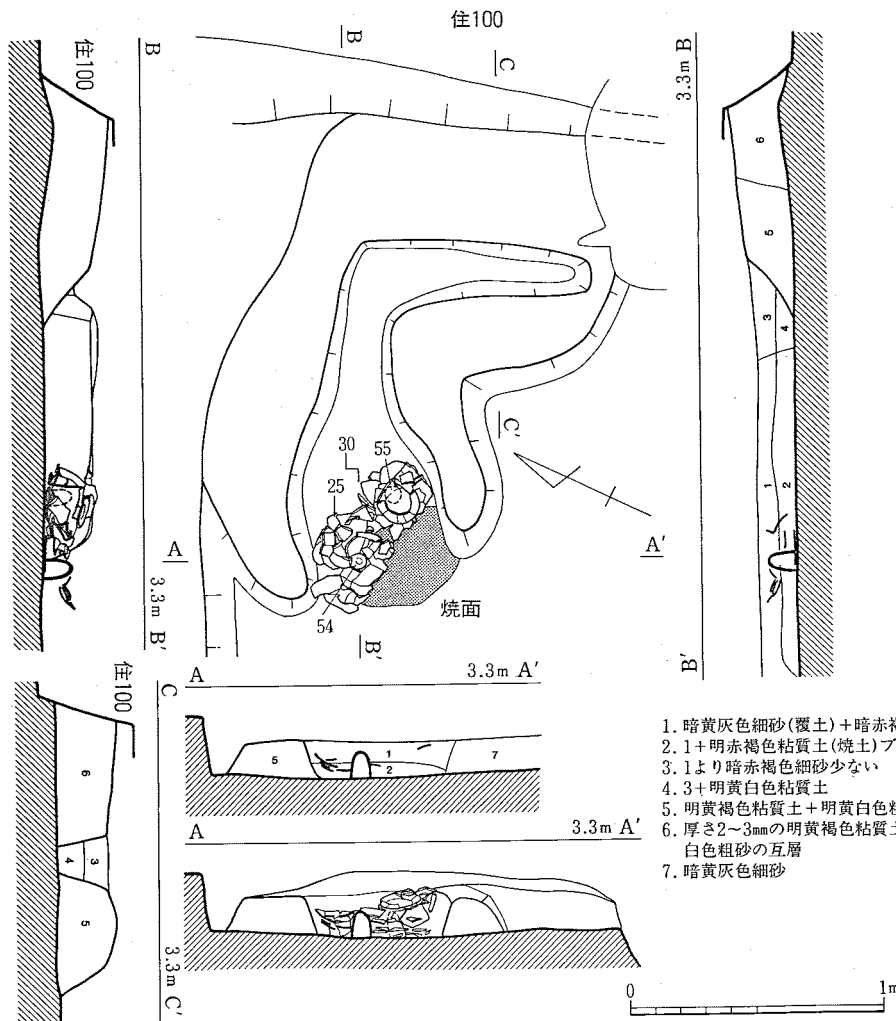
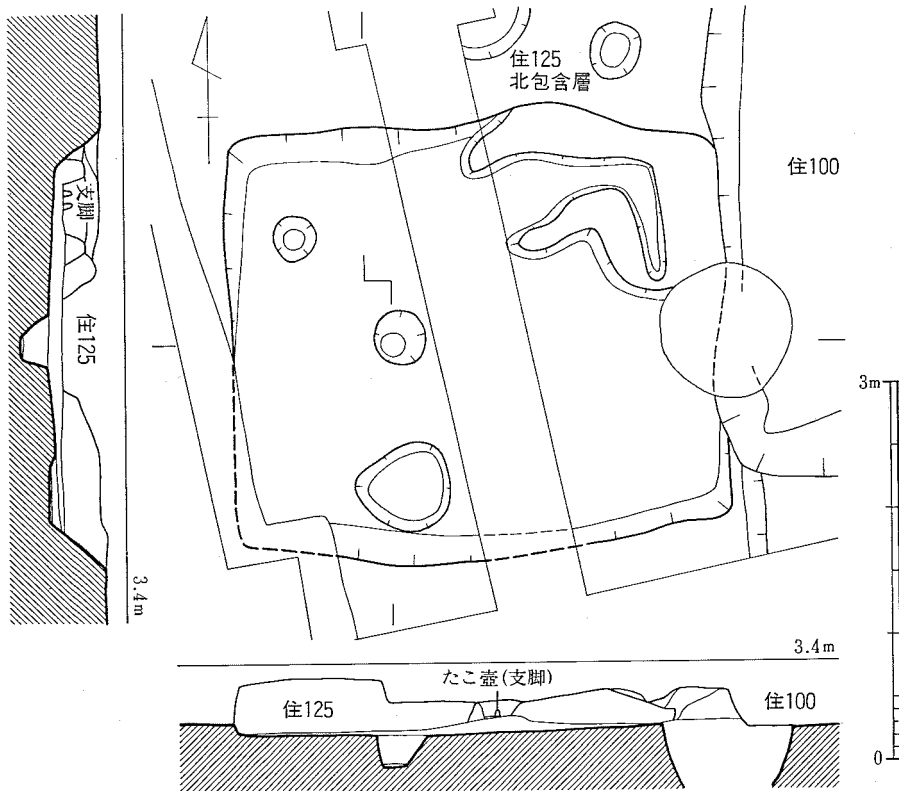
出土土器(第282図1~6) 図示できる出土土器は少ない。1は山陰系二重口縁壺、2は布留系甕の口縁部である。3・4は単口縁の鉢で、3は内外ハケ後外面に太く粗なミガキを施す。4は外面縦ハケ、内面は摩滅するがハケ後ミガキの可能性はある。5・6は外反口縁鉢で、5は外面斜めハケ後横ミガキ、口縁内面斜めハケ。6は鉢部外面ハケ、口縁部内面はナデによる細い凹みが巡っており、ミガキを施さない粗製品。褐色の3・5以外は白黄褐色を呈す。(重藤)

124号竪穴住居跡 (図版49、第278図)

3北1区の南にあり、西北部は162号竪穴住居跡を切っている。東は122号竪穴住居跡に切れ、南側にある校舎基礎を越えて南に広がらないので、南壁は校舎基礎下にちょうど位置するものと推測される。そのため検出できたのは北壁、西壁の一部のみである。炉跡も検出していないので、住居跡と断定するにもやや不安が残る。



第282図 123・124号竪穴住居跡出土土器実測図 (1・2・7~10は1/4、他は1/3)



1. 暗黄灰色細砂(覆土)+暗赤褐色細砂
2. 1+明赤褐色粘質土(焼土)ブロック
3. 1より暗赤褐色細砂少ない
4. 3+明黄白色粘質土
5. 明黄褐色粘質土+明黄白色粗砂
6. 厚さ2~3mmの明黄褐色粘質土と明黄白色粗砂の互層
7. 暗黄灰色細砂

第283図 125号竪穴住居跡・同カマド実測図 (1/60・1/30)

出土土器(図版120、第282図 7~15)

8は在地系の甕口縁部片で、外反し端部が角張る7も同様か。8外面に接合痕と思われる水平方向の凹み、細かい皸が顕著に残っている。9は口縁部の外反が強く、胴部内面に縦ヘラケズリを施す甕片で、畿内5様式系とすべきか。10は布留系甕。11~13は高杯杯部片で、11は外面横ミガキ、内面斜めハケ後暗文風ミガキを施す。12は内外縦ミガキで仕上げ、充填法で脚部と接合したもの。杯底部には軸受け痕が残り、口縁端部が一部二次加熱を受ける。13は高杯脚部で外面縦ハケ後横ミガキ、内面横ハケ。14は内外横ミガキ仕上げの外反口縁鉢である。15はタコ壺片と思われるが、二次加熱が顕著で器壁が荒れているためあるいは、支脚とし

て転用されたものか。9・13黄橙色、11・14は橙褐色を呈し、他は淡黄褐色～灰黄褐色。(重藤)

125号竪穴住居跡 (図版50、第283図)

125号竪穴住居跡は3中1区西端にあり、100号竪穴住居跡の西に位置する。100号竪穴住居跡に切られると考えると発掘したが、切合いには自信がない。西南隅は校舎基礎により攪乱を受ける。覆土は暗黄灰色細砂で、南北3.5m、東西4.0m、深さ40cmのやや長方形を呈する住居である。煙道が東壁中央から北東隅を直角に折れ、北壁に沿ってのびるカマドを検出した。本住居跡北には125号竪穴住居跡北包含層がある。竪穴住居跡の可能性が強いが、壁を確認できなかったため、包含層として報告する。土器の他に石錘(第242図13)が出土している。

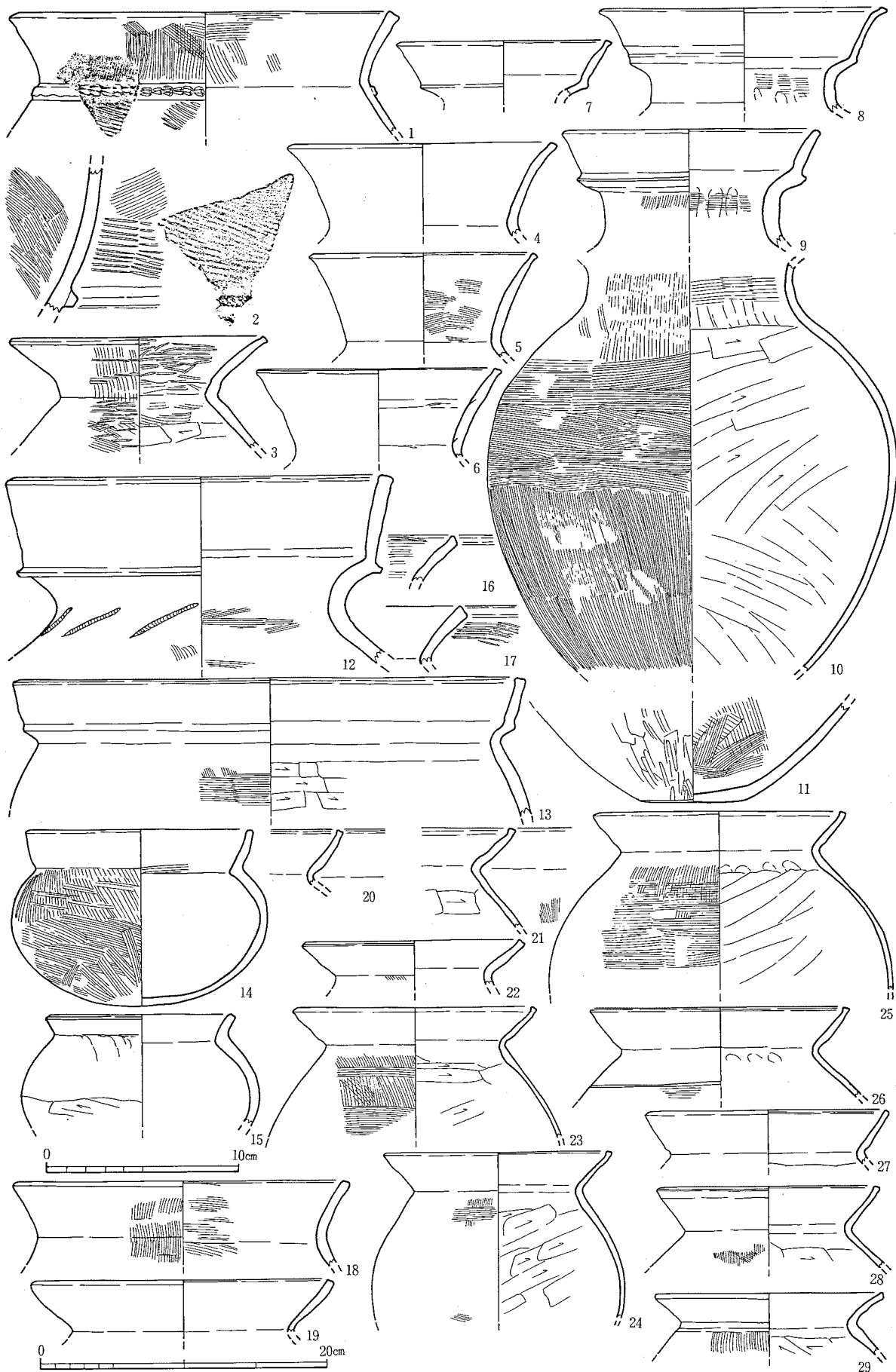
カマド (第283図) 煙道が東壁中央から北側にむかって壁に沿ってのび、北東隅で直角に折れるカマドである。煙道の一部は100号住居跡に切られるが、カマドの長さは東西で2.4m、南北で2.0mを測る。支脚は倒置した蛸壺を使用しており(54・55)、その上に甕が2個体重なった状態で出土した(25・30)。支脚前後は非常に良く焼けており、硬化面を形成する。燃烧部はハの字状に開き、焚口幅は1.0mを測る。袖は暗黄褐色粘質土と明黄白色粗砂を混ぜたもので構築するが、100号住居跡に切られる煙道部壁側は、版築状に粘土と砂を交互に積んで構築する。煙出は住居の外まで延びない。第284図15・第285図43はカマド内出土。

出土土器 (図版120、第284～287図) 1・2は在地系の壺。1は頸部にハケ工具による刻み目突帯を貼り付ける。口縁端部はナデで面取りする。外面はタタキのちハケで調整。外面には薄い黒斑あり。2は大甕胴部片。外面はタタキのちハケ、内面はハケメを施す。3は頸部がすぼまり、口縁部はハの字状に開く形態になる特異な直口壺。外面はハケのち粗な横ミガキ、内面は口縁部は横ハケのちミガキを施す。

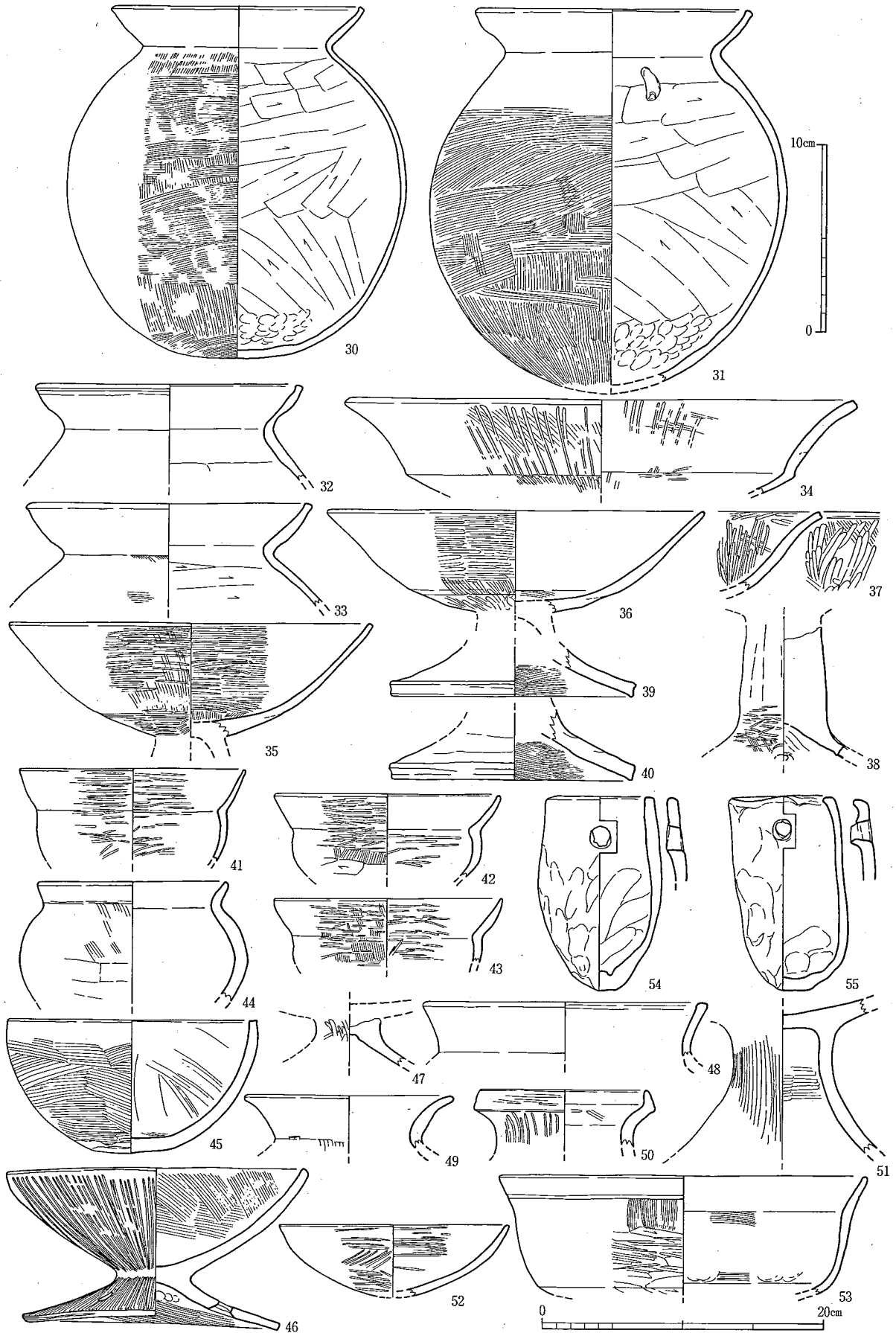
4～6は畿内系直口壺。5は口縁部内面にハケが残る。6の口縁部内面はナデによる凹凸が顕著に残る。少しスリップをかけるものか。7～13は山陰系二重口縁壺である。8は口縁端部を強く外反させ、外面の一部に褐色のスリップをかける。8・9は頸部が長く、直立する器形で、内面には横ハケ前のナデ上げが残る。9は器壁が厚い。10は胴部肩部は縦ハケのち横ハケを施し、頸部はナデ消す。頸部内面は横ハケが残る。11は平底の畿内系二重口縁壺底部か。外面は板ナデのち不定方向の縦ミガキ、内面は不定方向のハケを施す。外面に黒斑と煤が付着。12・13は大形壺。12は頸部にハケ工具による斜行刺突文を施す。内面のケズリは下がった位置にあるか。13は口縁部が短く、鉢の可能性もある。14・15は小型丸底壺。14は直立気味の口縁部で、外面胴部肩には縦ハケのち横ハケを施す。口縁部内面は横ハケをナデ消す。16は口縁部外面に二次加熱痕が残る。15は粗製品で、短く外反する口縁部をもつ。外面胴部下位はケズリを施す。煤がべっとり付着する。2は淡褐色、3は淡橙褐色～淡黄褐色、6は橙褐色、8は黄褐色が基調、他はいずれも灰黄褐色～淡黄褐色。

16は在地系の甕口縁部か。外面には二次加熱痕が残る。17・18は在地系甕口縁部。17は口縁端部はナデで面取りし、凹みになる。外面にはタタキ痕が残る。外面には煤がべっとり付着する。18は外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。16は灰黄褐色、他は黄褐色。

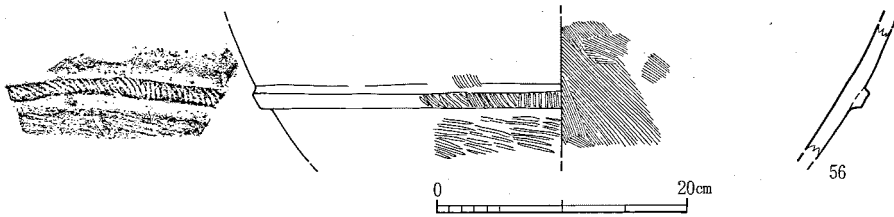
19～33は布留系の甕。21は口縁部外面に煤付着。22は頸部外面にハケが残る。外面には煤が付着する。23は口縁端部を内側につまみ上げる。26は口縁端部を内側につまみ上げ、外面肩部に1条の凹線が巡る。内面はケズリの位置がかなり下がるか。27・29は内面頸部近くまでケズリを行う。28



第284図 125号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (14・15は1/3、他は1/4)



第285図 125号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (30・53は1/4、他は1/3)



第286図 125号竪穴住居跡出土土器実測図(3)(1/6)

は内外面に煤が付着する。29は内面ケズリが反時計回り。30は復元の際に形が歪んでしまった。胴部外面は比較的下位まで横ハケを

施す。外面には煤がべっとり付着する。31はハケがよく残る。胴部外面肩部は縦ハケのち横ハケ、内面頸部にはヘラケズリの際のかきとった粘土が付着する。32は口縁端部が丸く肥厚する。内面ケズリの位置はやや下がっている。33の内面は頸部近くまでヘラケズリを施す。口縁部外面に煤が付着。19・32は灰黄褐色、他は淡黄褐色。

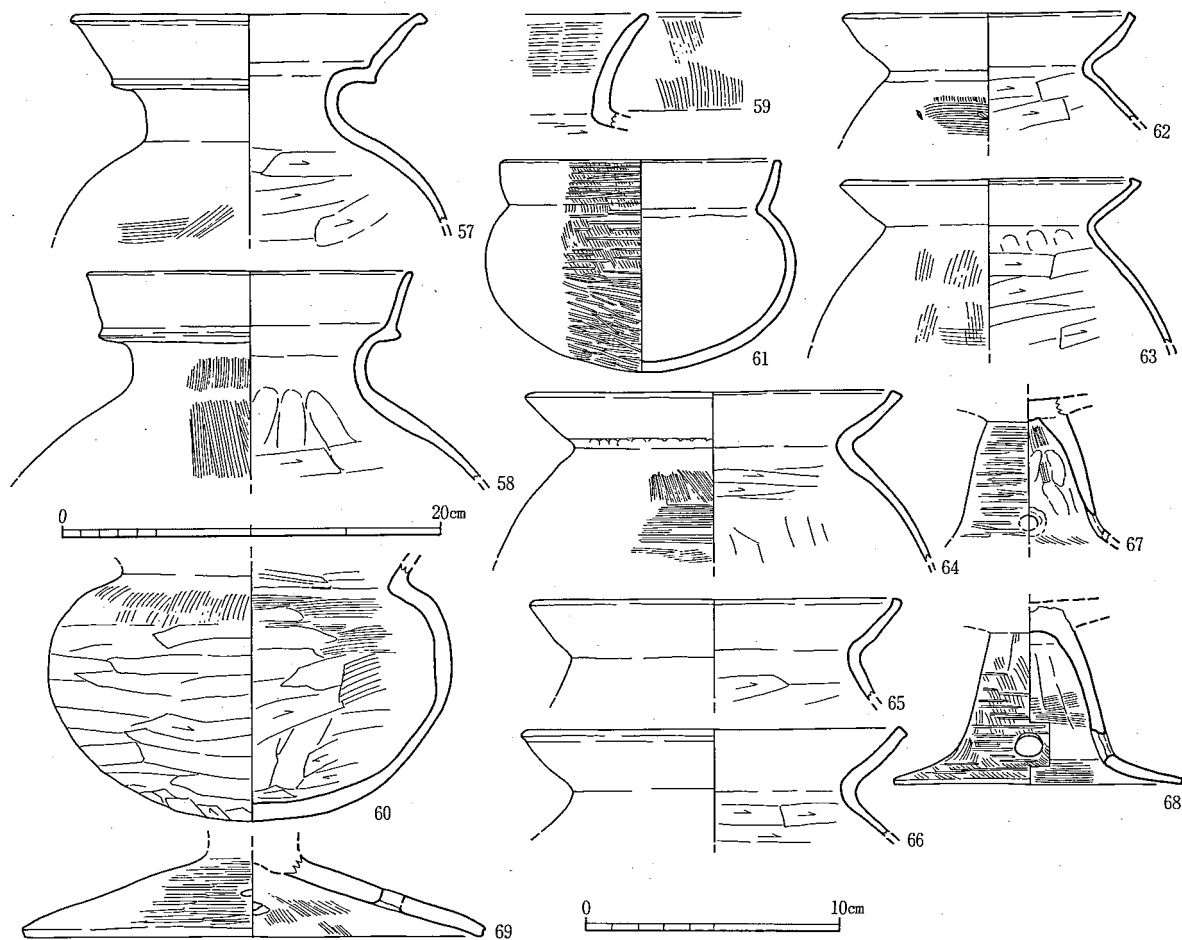
34は在地系高杯。口縁部外面は斜めハケのち縦ミガキ、内面は横ハケのち縦ミガキを施す。35・36は布留系高杯。いずれも杯部の屈曲がほとんどない。35は内外面ともハケのち横ミガキを行う。36は杯部下部は短い縦ミガキを施す。37は在地系高杯口縁部。外面はハケのち粗い縦ミガキ、内面は不定方向のミガキで調整。38は畿内系高杯脚部。外面は細かい横ミガキ、内面は工具による絞り痕が残る。半乾燥状態で外側から穿孔。4ヶ所に施したものか。39・40はいずれも器壁が厚く、器台の可能性もある。41~43は精製の畿内系屈曲鉢。42は外面胴部下半はケズリが残る。43は屈曲が弱い。44は口縁部が短く屈曲する鉢。外面はハケをナデ消す。45は粗製の鉢。外面は粗いハケ、内面はハケをナデ消す。46は畿内系脚付鉢。器壁は少し厚い。杯部外面は縦ミガキ、内面は斜めハケ、脚部は縦ミガキ、内面裾部はハケ、上部は指おさえが残る。脚部にはミガキを切り、半乾燥状態で外側から3ヶ所穿孔する。47は脚付鉢の脚部。外面は縦ミガキを行う。35・36・38・41~43、45・47は淡橙褐色~橙褐色。46は淡黄橙褐色、他は淡黄褐色~灰黄褐色。

48~53は125・126号竪穴住居跡覆土上層出土。48はやや外傾する口縁部をもつ壺か。端部はわずかに肥厚。外面に煤付着。49は小型の壺か。頸部にはハケメが残る。50は小型の在地系複合口縁壺か。やや内傾する口縁部で、外面は横ミガキ、頸部は暗文風の縦ミガキを施す。内面の調整はミガキか。51は在地系の高杯脚部。外面は荒い縦ハケ、内面は一部に横ハケが残る。52は半精製鉢。内外面は荒いミガキを施す。53は大形の口縁部が外反する特異な鉢。外面口縁部下には1条の凹線が巡り、胴部以下はケズリのちミガキ、内面の屈曲部には指おさえ痕が明瞭に残る。底部は平底か。49は暗褐灰色、50・52は橙褐色、他は淡黄褐色。

54・55は蛸壺で、カマドの支脚に転用したもの。いずれも外面に煤付着し、乾燥前に外側から1ヶ所穿孔する。黄褐色。

56は125号竪穴住居跡出土土器で、在地系大形壺の胴部片。外面は刻み目突帯以下はタタキ、上位はハケ、内面はハケで調整。淡褐色。

57~69は125号竪穴住居跡北包含層出土。57・58は山陰系二重口縁壺。57は口縁端部を外側につまみ出す。58の頸部~胴部は縦ハケ、内面はケズリの位置が下がる。外面には煤が付着する。59は畿内系直口壺の口縁部。外面は縦ハケ、内面は横ハケが残る。60は粗製の小型丸底壺胴部。頸部近くは縦ハケ、以下は工具によるナデ、内面頸部は横ハケ、胴部中位以下はケズリを施す。61は精製の畿内系小型丸底壺。胴部中位以下は密な横ミガキ。外面には煤がべっとり付着する。58・59は灰黄褐色、61は明褐色~褐色、他は淡黄褐色。



第287図 125号竪穴住居跡出土土器実測図(4) (57~59・62~64は1/4、他は1/3)

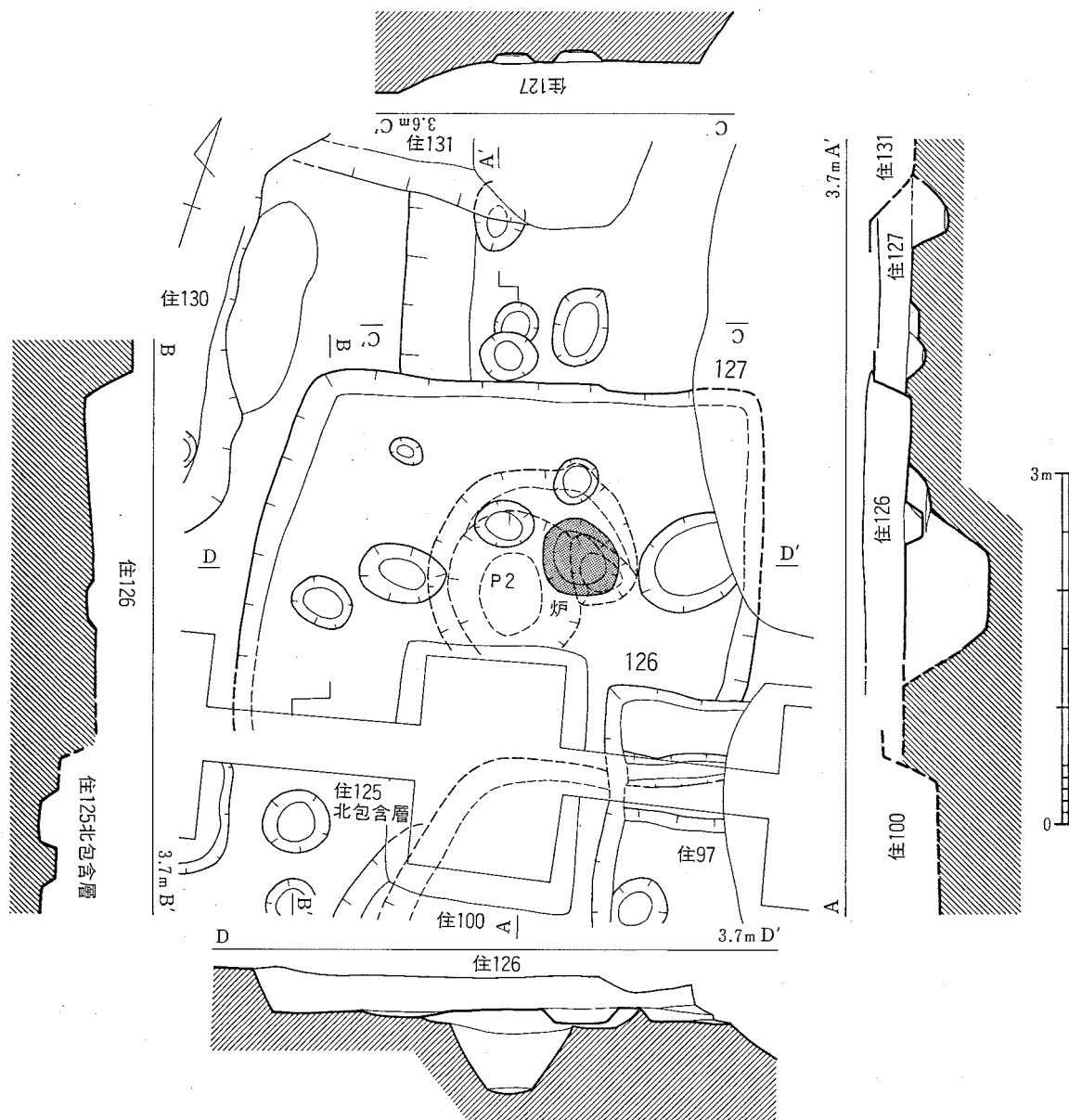
62~66は布留系甕。62は外面肩に刺突文、内面は頸部近くまでケズリ。口縁外面に煤付着。63は口縁端部を内側につまみ出す。胴部外面は縦ハケをナデ消す。63は外面頸部に指おさえ痕、内面は頸部近くまでヘラケズリ。65は口縁部が立ち、肩が張らない特異な甕。口縁端部は内側につまみ上げる。口縁部外面には煤付着する。66は内面頸部近くまでヘラケズリを行う。いずれも淡黄褐色。

67・68は畿内系高杯脚部。67は半乾燥時に外側から穿孔するが、1ヶ所のみ残存。68は外面は縦ハケのち粗い横ミガキ、柱状部内面はナデ絞り痕。半乾燥時に外側から2ヶ所穿孔。69は畿内系の精製脚付鉢脚部。少し厚手で、乾燥があまり進んでない状態で外側から穿孔。いずれも橙褐色。(大庭)

126号竪穴住居跡 (図版50、第288図)

3北1区の西南部にあり、97・100号竪穴住居跡の北に位置している。北東隅は攪乱によって失われ、南東隅は97号住居跡に切られている。また南壁は校舎基礎と100号住居跡があるために十分に検出できていない。南西隅が校舎基礎を越えたところに残存していた可能性があるが、125号竪穴住居跡の北側に広がる包含層(住125北包含層)のため検出していない。しかし、床面中央やや東寄りに炉跡があり、西北壁のラインは明瞭であったので住居とするには問題はないと思われる。炉跡の下層には上段が直径1.9m、下段が直径1.1mの平面円形の2段掘り土坑を検出しているが(P2)、住居跡に直接伴うものではないだろう。覆土は黄褐色細砂を混えた暗褐色細砂。

出土土器(第289図1~23) 1~15が本住居跡の覆土から出土したもので、16~23は126号・127号



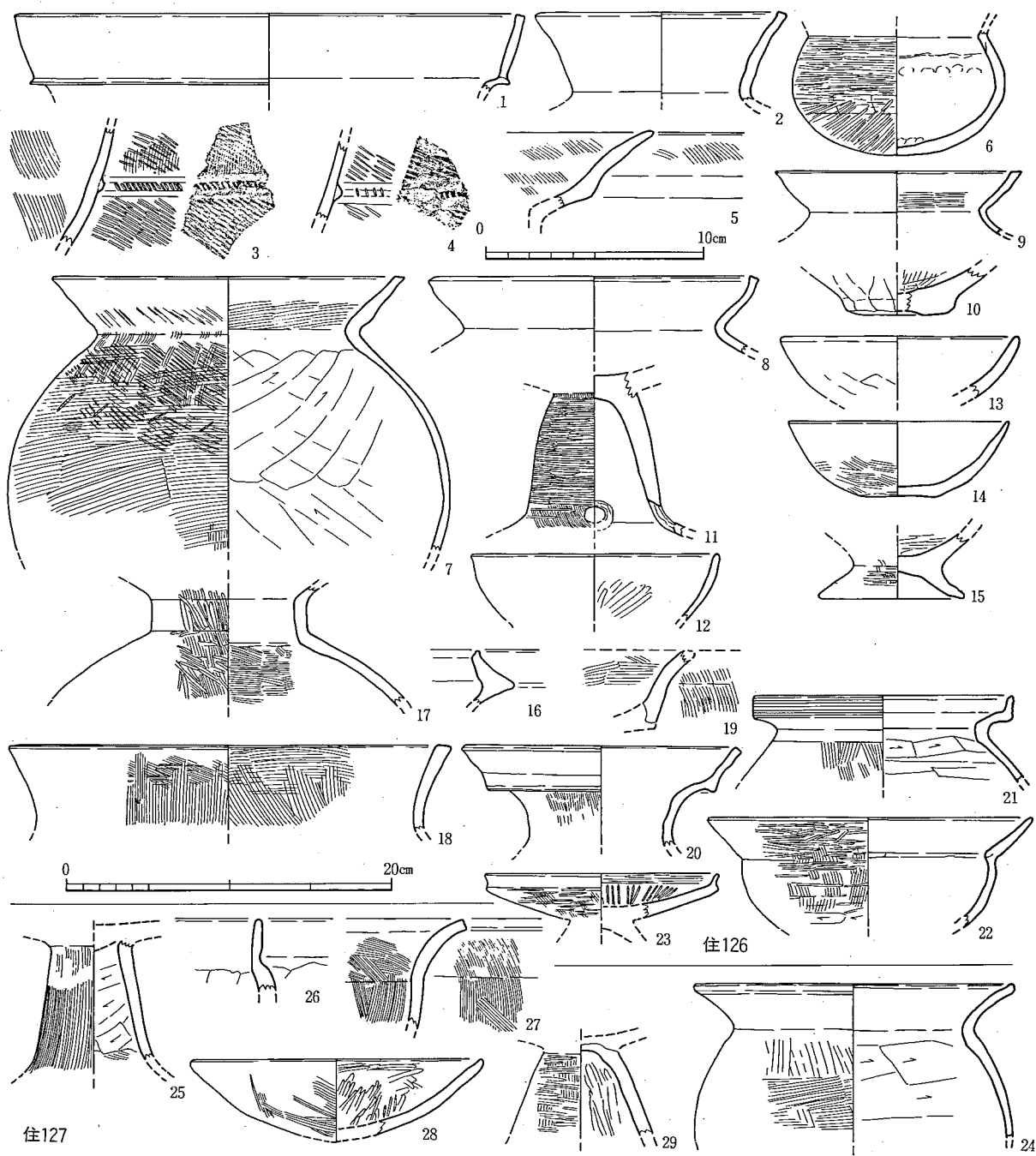
第288図 126・127号竪穴住居跡実測図（1/60）

住居跡の上面から出土したもの。

3・4は断面コ字状の刻目突帯を貼付した在地系壺胴部片。いずれも外面タタキであるが、3は一部タタキ後にハケメ。1は大形の山陰系二重口縁壺、2は畿内系直口壺。5は畿内系二重口縁壺口縁部片か。内外ハケメ後横ナデで仕上げ、ミガキを施さない粗製品である。6は小形丸底壺で外底部ケズリ後横ミガキ、内面はナデ。褐色の5、橙褐色の6以外は灰黄褐色～淡黄褐色。

7は外面にハケメと見間違ふような細かい左上がりタタキ後、縦ハケ、横ハケを施した庄内系甕。口縁タタキ出し整形のためか口縁部外面に左上がりの細かい皴が巡っている。口縁端部は水平面をなし、肩部に全周しないがハケメ工具小口刺突文を施文する。8・9は布留系甕で、10は5様式系甕の底部片か。8灰褐色、10明褐色、他は淡黄褐色～灰黄褐色。

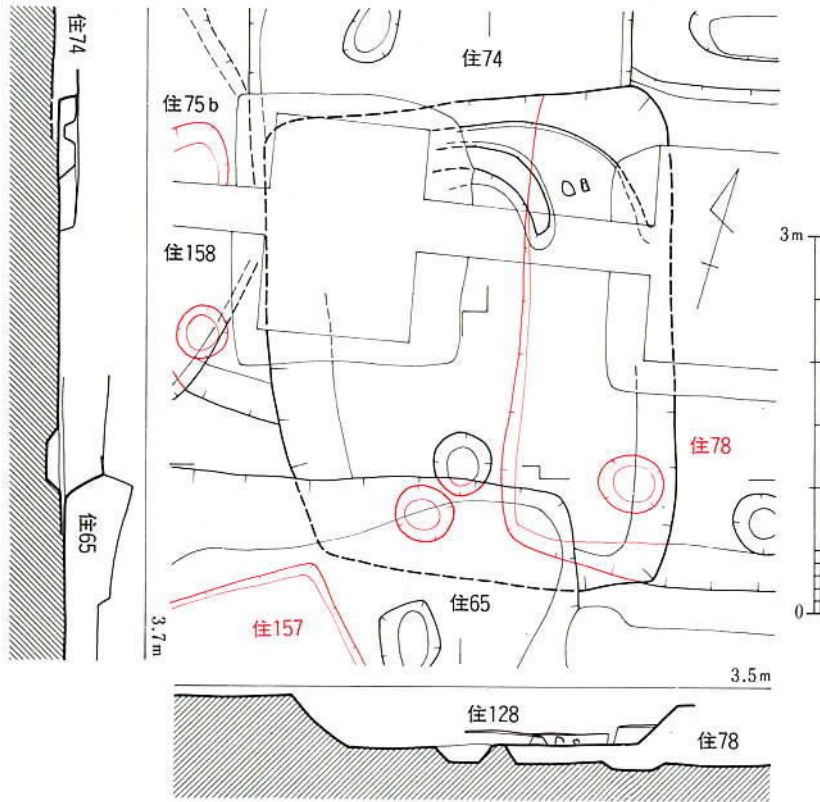
11は黄橙色を呈す高杯脚部片で、屈曲部に2方向から半乾燥時穿孔を施す。外面縦ハケ後横ミガキ、内面ナデ。12～14は単口縁鉢で、12内面ミガキ、13外底部ケズリ、14外底部ハケメ。黄褐色を



第289図 126・127号竪穴住居跡出土土器実測図（1～4・8・9・16～20・27は1/4、他は1/3）
（1～23：住126 24～29：住127）

呈す脚付鉢15は鉢部内面と脚部外面に横ミガキを施している。

16は灰黄褐色の在り系複合口縁壺。17は畿内系二重口縁壺になると思われ、口縁部小片の19も同様か。17外面は縦ハケ後やや太いミガキ、胴部内面ハケで、化粧土のため橙褐色を呈する。19は内外ハケメ仕上げでミガキは見られない。白黄褐色。18は在り系直口壺になると思われ、淡黄褐色を呈す。内外を櫛歯工具によるような深い条痕のハケメ仕上げしているが、口縁部外面には先行する水平方向タタキ痕が一部に残る。内面に煤が付着。20は黄橙色の山陰系二重口縁壺。21は吉備系二重口縁壺で、口縁部外面に条痕が巡る。淡黄褐色を呈し、外面～口縁部内面にべっとりと煤が付着。22は橙褐色精製の外反口縁鉢で外面縦ハケ後横ミガキ、内面ナデ。23は橙褐色精製の小形器台受部片。外底部縦ハケ後外面～口縁部横ミガキ、内底放射状ミガキ。（重藤）



第290図 128号竪穴住居跡実測図 (1/60)

127号竪穴住居跡

(第288図)

3北1区、126号竪穴住居跡と131号竪穴住居跡に南北を切られている。

また、東には大きな攪乱があるため西壁の一部を検出したのみである。

出土土器 (第289図24~29) 25は小形の5様式系甕破片で、灰黄褐色を呈し、外面には煤が付着。25は淡黄褐色の高杯片で外面ハケメ、内面ケズリで仕上げであり、ミガキは観察されない。破損状況から考えて、杯部との接合は充填法によるか。

26は直立する口縁片、27は外反の強い口縁部片でいずれも鉢状の器形か。26は胴部外面板ナデで橙褐色、27は内外ハケメ仕上げで黄褐色。28は単口縁鉢。内面太いミガキで仕上げるが、外面はハケメ残し、黄褐色を呈する半精製品。29は外面ハケ後ミガキ、内面ナデ仕上げで、小形器台脚部になると思われるが、白黄褐色を呈し特異。(重藤)

128号竪穴住居跡 (図版51、第290図)

128号竪穴住居跡は3中1区~3北1区の中央部、65号竪穴住居跡北に位置する。74・78・158号住居跡を切り、65号住居跡に切られると考えると発掘したが、検討の結果、65号住居跡との切合いは逆で、78号住居跡との先後関係は自信がない。また先に65号住居跡を掘ってしまったため、65号住居跡出土土器と混ざってしまった。校舎基礎により、北西隅と東壁は大きく攪乱を受ける。覆土は暗黄灰色細砂で、南北3.9m、東西3.2m、深さ40cmのやや小さい長方形住居である。煙出は攪乱を受けるが、煙道が北壁に沿ってのびるカマドを検出した。

カマド (第291図)

煙道が北壁に沿ってのびるカマドである。右袖先端と煙道は校舎の基礎によりやられているため、カマド長は、南北で1.2m、東西は不明。支脚は石製で2個が燃焼部硬化面上に北側に倒れた状態で検出されたことから、抜き跡は確認できなかったが、廃棄時に抜かれて、倒されたものと考えられる。支脚前は硬化しており、焚口幅は推定で60cm程度か。袖は78・129号住居跡カマドと同様の粘性がある明黄灰色細砂で構築する。36・47はカマド内出土土器。

出土土器 (図版120・121、第292~294図) 1・2は在地系の壺。1は口縁端部外面にヘラ工具による浅い刻み目を施す。2は口縁端部をナデで面取りし、内側につまみ上げる。内外面にはハケが

よく残る。3は短く外湾する口縁部で、端部を丸くおさめる。内外面は細かい横ミガキを行う。

4～8は畿内系直口壺。6は小片のため、傾きが不安。口縁端部内側は横ナデにより凹線状になる。7は口縁端部をナデで強く面取りする。

9～19は山陰系二重口縁壺である。10は内外面に炭化物が付着している。12・13は口縁部がやや強く外傾する。11は口縁端部をナデで面取りする。12は口縁端部を外側につまみ出す。口縁部内面に浅い孔が2ヶ所に見られる。14の

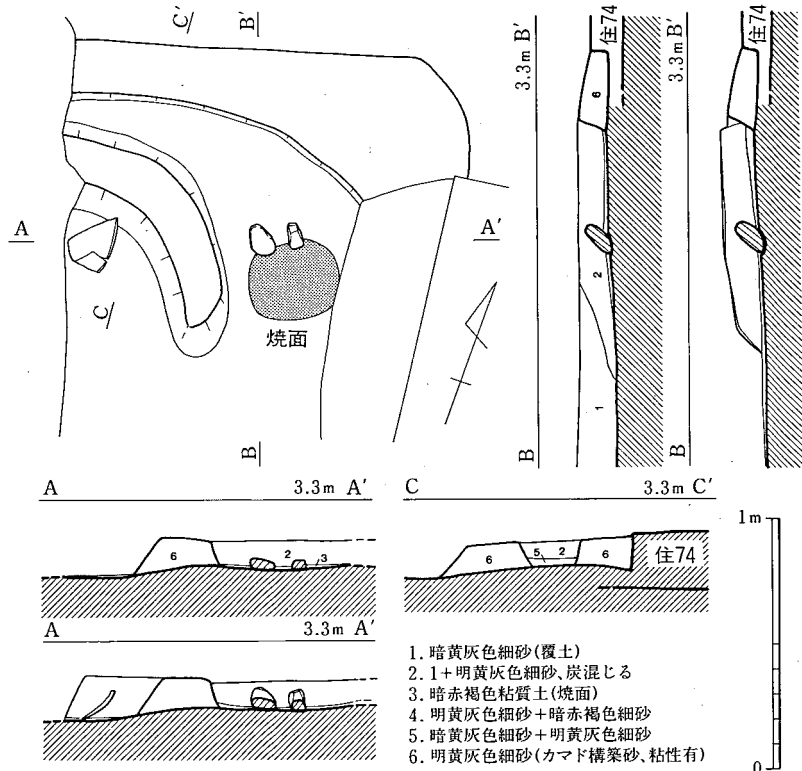
内面は頸部近くまでヘラケズリを行う。15は大形壺で、頸部内面に横ハケが残る。16は口縁部が比較的長く、やや外傾する。頸部は短く、屈曲が強いのが特徴である。外面は胴部上位は斜めハケのち縦ハケを施す。口縁部内外面は横ハケが残る。内面の調整は胴部中位の接合痕より下はハケ、上はヘラケズリで、ケズリの方向は反時計回りと観察される。外面底部近くは輪状に凹み、肩には黒斑がある。17は大形品。18は端部を丸くおさめる短い口縁部で、内面にはハケが残る。19は外面は縦ハケ、内面もハケで、口縁部がないため壺かどうかは自信がない。内面全体は黒変する。

20は半精製の畿内系二重口縁壺。内外面横ミガキを施す。21は脚付の山陰系小型丸底壺で、頸部が明瞭でない。胴部外面はハケ、内面はケズリで調整。

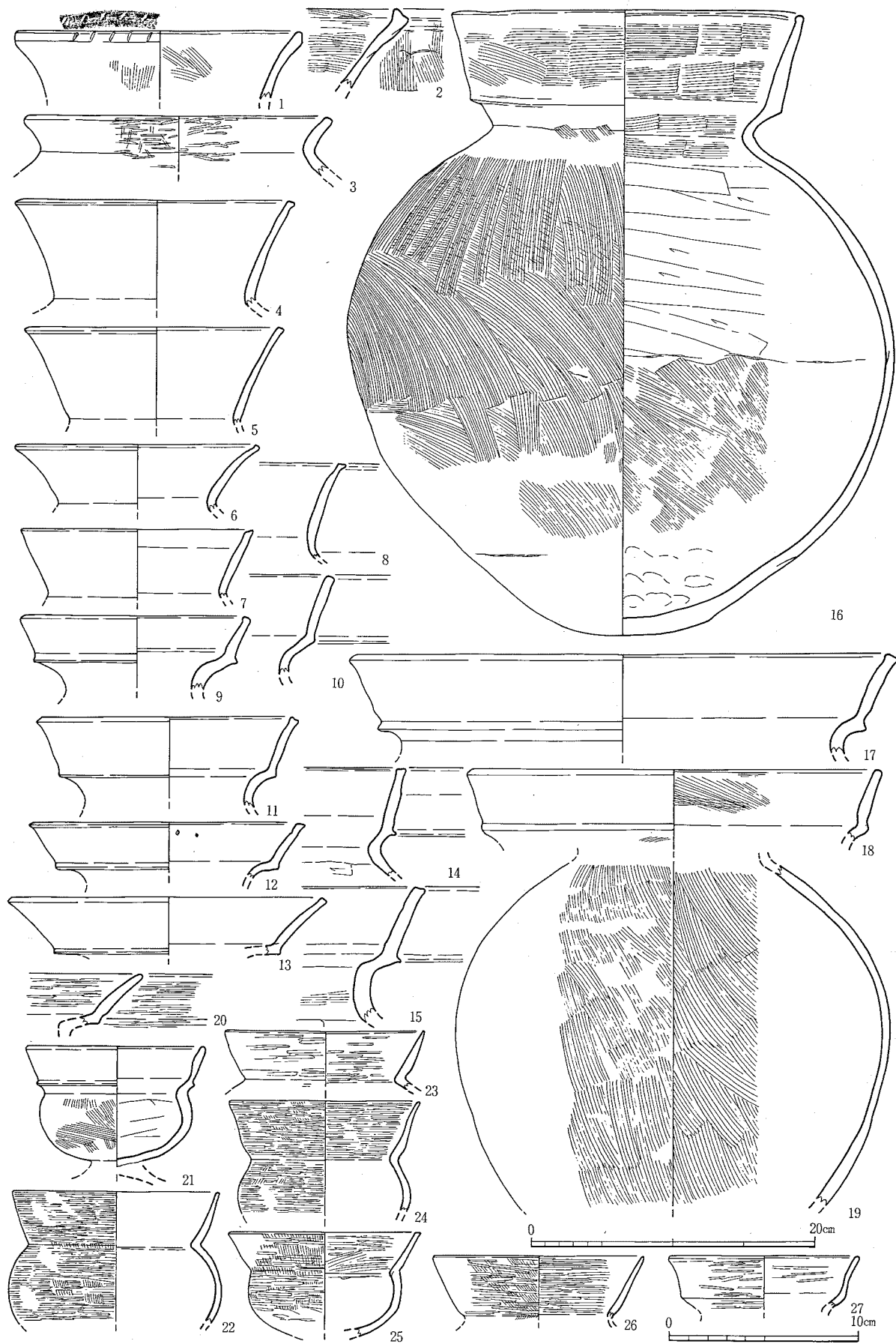
22～27は精製の畿内系小型丸底壺。22はやや内湾する口縁部をもち、外面は縦ハケのち横ミガキ、内面は磨滅しており不明。24は内外面に煤が付着する。25は口縁端部が水平面をなす。27は口縁部がくの字に屈曲する。18・19は淡褐色、20・22～27は橙褐色、他は淡黄褐色～灰黄褐色。

28～50は布留系甕。28・32・33・37・39・41～46・48・50の内面は頸部近くまでヘラケズリを施す。28・31・32・42・47～50には器表に煤が付着する。29は口縁端部を内側につまみ上げる。32は口縁部外面に細い凹みが巡る。35は口縁端部は丸く肥厚する。40は内湾する口縁部で、端部は水平にする。41は口縁端部を内側につまみ上げる。47は二次加熱痕が残る。49は頸部に強い横ナデにより凹線状になる。肩はハケ工具による斜行沈線文。50は胴部に二次加熱痕が明瞭に残る。51は在地系の小形甕か。器壁は厚く、やや外傾する口縁部で、胴部外面下位にはハケが残る。内面は丁寧にナデ。29は淡褐色、33・42は黄橙褐色、40は淡橙褐色、51は褐色、他は淡黄褐色～灰黄褐色。

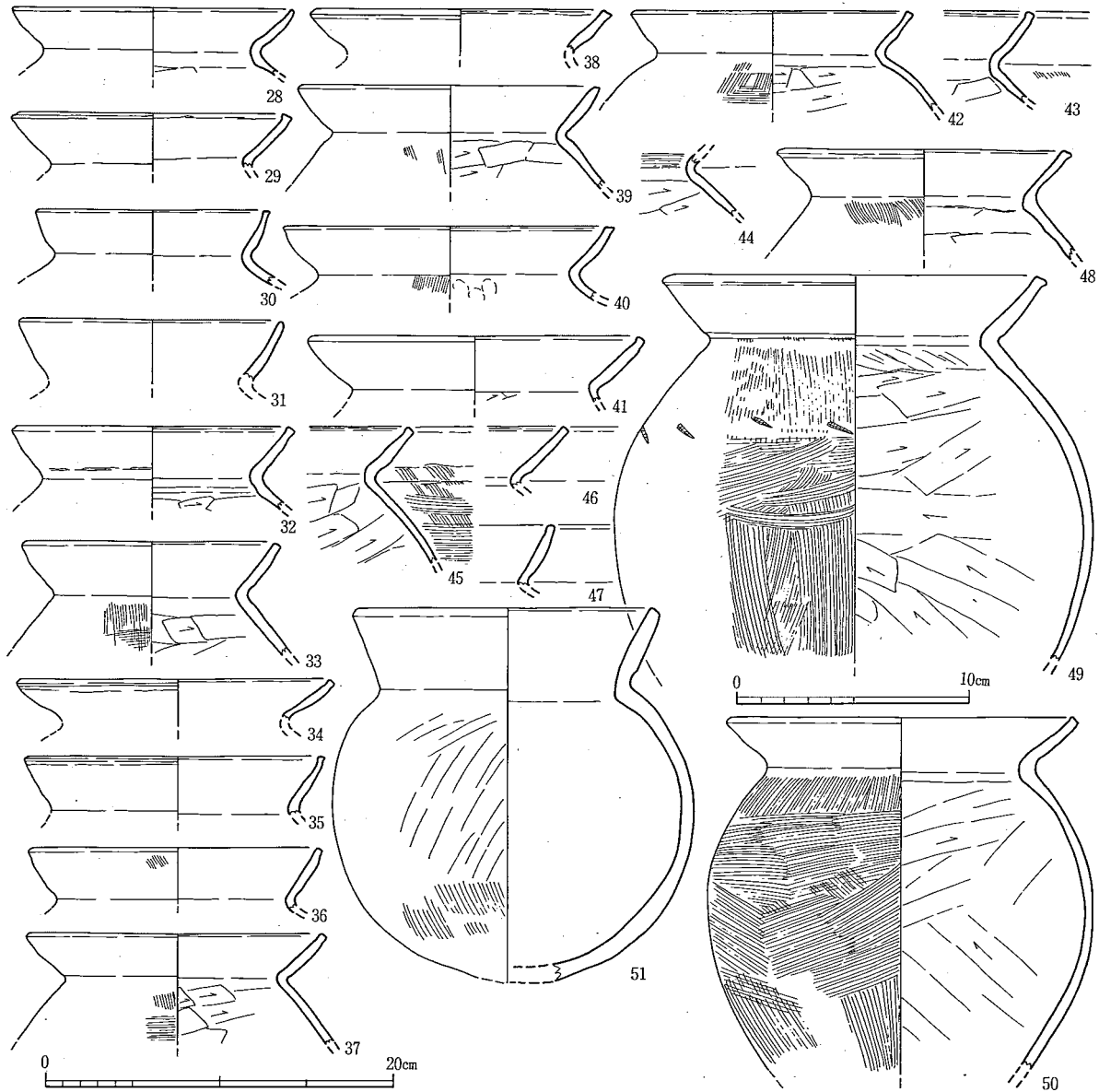
52～56は高杯である。52・53は畿内系の高杯。52は外面は縦ハケのち横ミガキ、内面は斜めハケのち暗文風の縦ミガキ。内面には煤が付着する。53は杯部外面は粗い斜めハケのみ、内面は磨滅のため不明。脚部は内外面粗いハケで調整する。乾燥が進んだ状態で外側から3ヶ所穿孔する。54は在



第291図 128号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第292図 128号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (20~27は1/3、他は1/4)

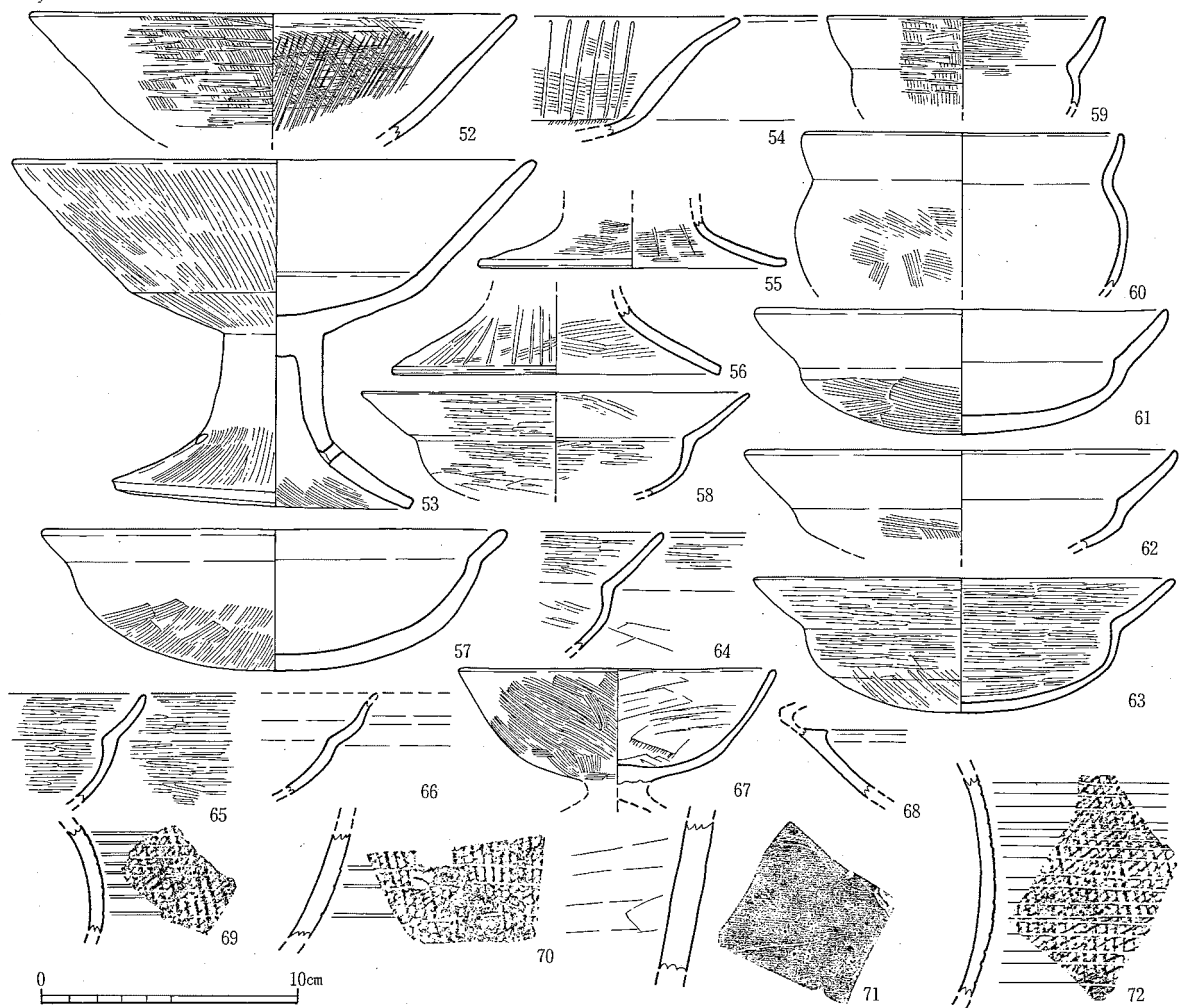


第293図 128号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(48~51は1/3、他は1/4)

地系。口縁部は強く外反させる。内面には横ハケのち暗文風の縦ミガキ。55・56は在地系高杯裾部。55は器壁が薄い。56の外表面はハケのち縦ミガキを施す。内面は粗いハケで調整する。53は褐黄色、55は黄橙褐色、56は淡黄褐色、他は橙褐色。

57~66は畿内系屈曲鉢。57は口縁部が短く、器壁が厚い。底部付近は不定方向のハケ。58は外表面に煤付着。59は小形品で、口縁部の器壁は厚い。60は粗製品。直立気味に内湾する口縁部で、外表面は不定方向のハケで調整。黒斑あり。61・62は器壁が厚く、胴部は深さが浅い。外表面は不定方向のハケ。61の底部は黒変する。63の外表面は底部はケズリのちミガキ、内面もミガキで調整。橙褐色のスリップをかける。66は有段鉢で、磨滅のため、調整不明。67は脚付鉢。器壁は比較的薄く、外表面はハケ、内表面は板ナデで調整。68は山陰系鼓形器台。58・59・63~66は橙褐色、他は淡黄褐色。

69~72は半島系土器。69・70・72は焼成は軟質。69の外表面は粗い斜格子タタキのち間隔が狭い、凹線が巡る。黄褐色。70の外表面は粗い斜格子タタキのち細かい凹線が巡る。淡褐色。71は焼成が陶質で、内外面横ナデ。暗灰色。72は格子目タタキのち間隔が狭い凹線が巡る。灰黄褐色。(大庭)



第294図 128号竪穴住居跡出土土器実測図(3)(1/3)

129号竪穴住居跡(第144図)

129号竪穴住居跡は3区中1区東隅、70号竪穴住居跡北東に位置する。78号竪穴住居跡を切ると考えて発掘したが、本住居跡付近は切合いが激しく、切合いには自信がない。本住居跡は校舎の基礎や攪乱、調査区外にのびるため、西壁のみ確認した。覆土は黄灰色細砂で、南北2.7m以上、東西1.8m以上の住居跡である。北西隅にカマドの煙道部のみ確認した。

カマド(第144図) 北西隅につくカマドで、煙道北壁に沿ってのびるタイプか。校舎の基礎のため、煙道左袖部の一部しか調査できなかった。粘性をもつ黄色砂質土で袖を構築する。煙出は住居の外まで延びない。1・2はカマド内出土。

出土土器(第297図1~5) 1~3は布留系の甕である。1は口縁部外面に黒斑、内面に横ハケが残る。2は口縁部の器壁が厚い。3は外面に煤付着する。4は大形の山陰系二重口縁壺である。頸部にハケ工具による綾杉文を施し、1条の凹線が巡る。内面は頸部近くまでヘラケズリを施す。5は精製の畿内系小型丸底壺口縁部。小片のため、傾きには不安がある。外面は縦ハケのち細かい横ミガキ、内面は横ミガキを施す。5は橙褐色、他は明黄褐色~黄褐色を呈す。(大庭)

130号竪穴住居跡(図版5、第295図)

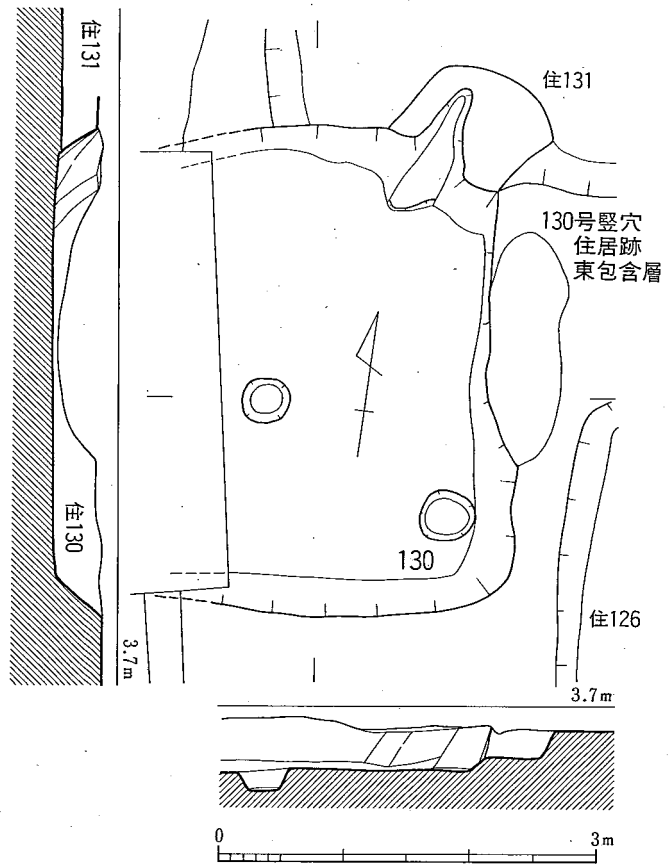
130号竪穴住居跡は3北1区西南隅に位置する。校舎基礎のため、住居跡東側は攪乱を受ける。131号住居跡を切ると考えて発掘した。覆土は暗黄灰色細砂で、南北3.9m、東西2.3m以上、深さ41cmを測る。住居跡北東隅にカマドを確認した。本住居跡東には130号竪穴住居跡東包含層がある。竪穴住居跡の可能性が強いが、住居の壁を確認できなかったため、包含層として報告する。

カマド（第296図）北東隅に位置し、煙道部が131号住居跡に突出する形態である。検出時は131号住居跡カマドまで粘土が広がっていたが、焼面が確認されたため、別々のカマドと判断した。袖は廃棄の際に壊されたためか、残りが悪く、また袖と埋土の土の違いがわかりにくかったため、袖を掘りすぎ、焼面の位置で袖を推定できるにすぎない。長さは推定で2.0mで焚口幅は30cmを測る。煙道部の袖は粘土と砂を交互に積んで構築している。煙道は住居外までのびる。

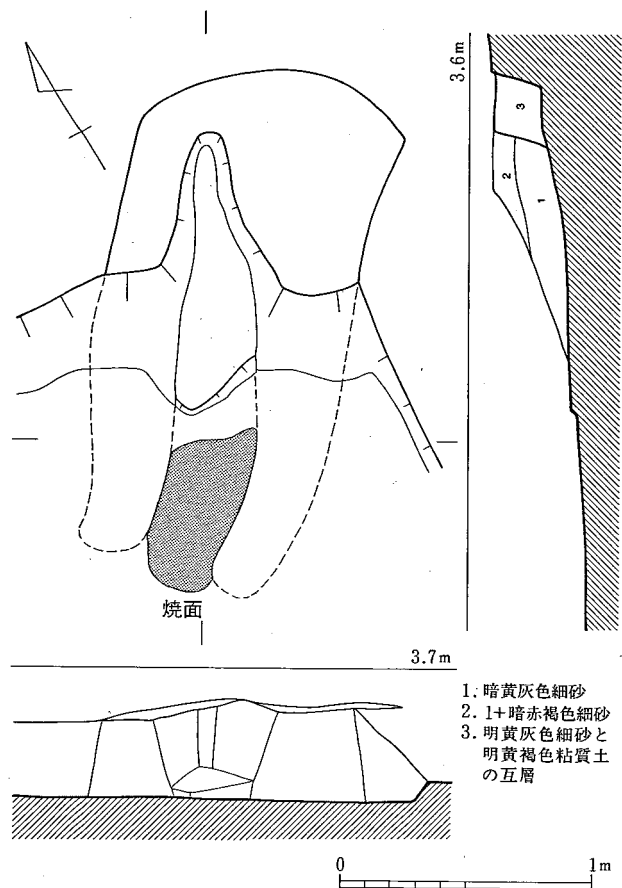
出土土器（図版121、第297図6～7、第298図）

6・7・9は山陰系二重口縁壺。6は大形壺で、口縁端部をナデで面取りする。8は畿内系直口壺である。いずれも淡黄褐色。

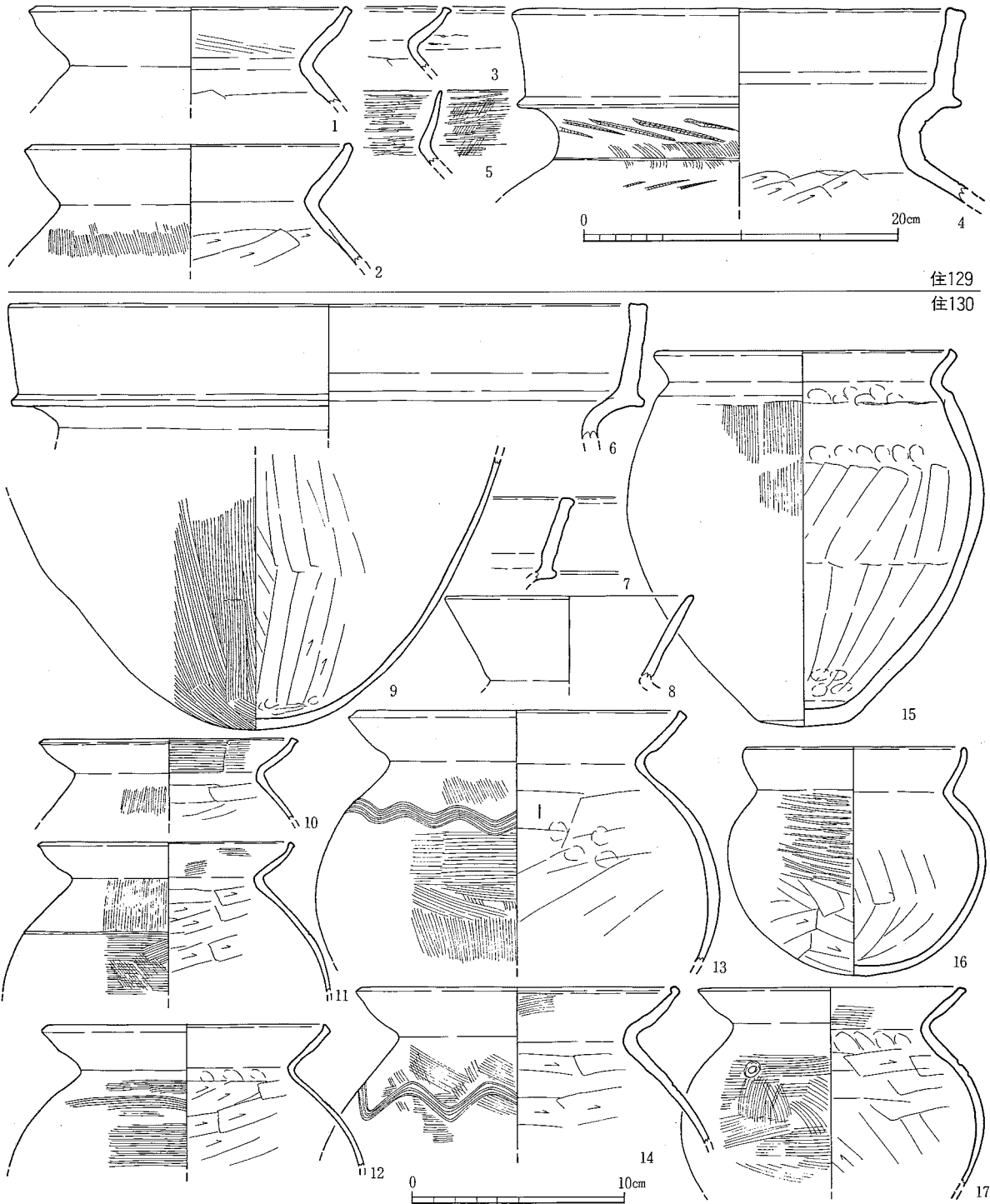
10～14・17は布留系の甕。13・17以外は内面のヘラケズリを頸部近くまで行う。10は口縁部内面に横ハケがよく残る。11は肩に一条の凹線が巡る。外面・口縁部内面に煤が付着する。12は肩部に文様状の横ハケを施す。内外面に煤付着。13・14は肩に波状沈線文を巡らし、器壁は厚い。13は胴部外面に煤がべっとりと付着する。14は口縁端部を内側につまみ出す。17は肩に竹管文が巡るか。胴部下位に二次加熱痕が残り、外面に煤が付着する。15は在地系の甕。短い口縁部で、端部をわずかに内側につまみ出し、底部は平底状を呈す。外面は縦ハケ、内面はケズリか板状工具によ



第295図 130号竪穴住居跡実測図（1/60）



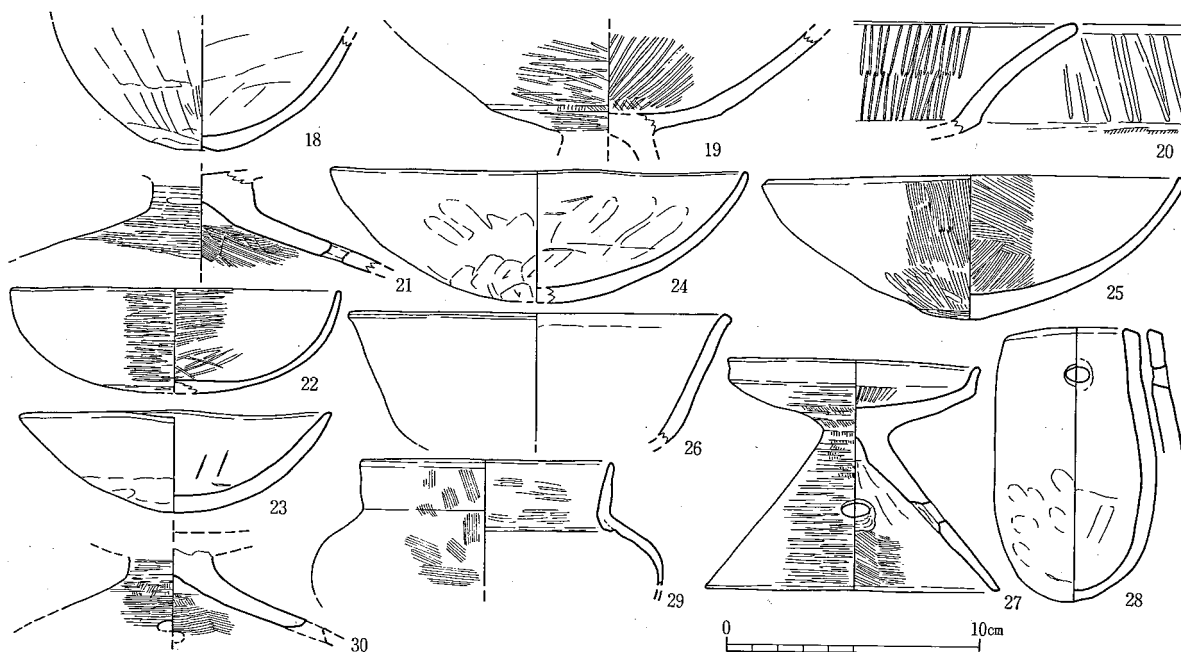
第296図 130号住居跡カマド実測図（1/30）



第297図 129・130 (1) 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (3・4・10~12は1/4、他は1/3)
(1~5:住129、6~17:住130)

るナデを施す。外面は二次加熱が残り、煤がべっとり付着する。16は粗製の畿内系小型丸底壺である。内湾する口縁部で、胴部外面はケズリのち横ミガキ、口縁部内外面はナデ、内面下位はケズリを施す。18は小形の甕か。内外面は工具によるナデで調整を施す。15は橙色、13・16・18は灰黄褐色、他は淡黄褐色。

19は畿内系高杯。杯屈曲部はほとんどない。外面は縦ハケのち横ミガキ、内面は暗文状のミガキを施す。20は在地系高杯の口縁部である。口縁部内外面は縦ミガキを施すが、外面口縁部以下は縦



第298図 130号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/3)

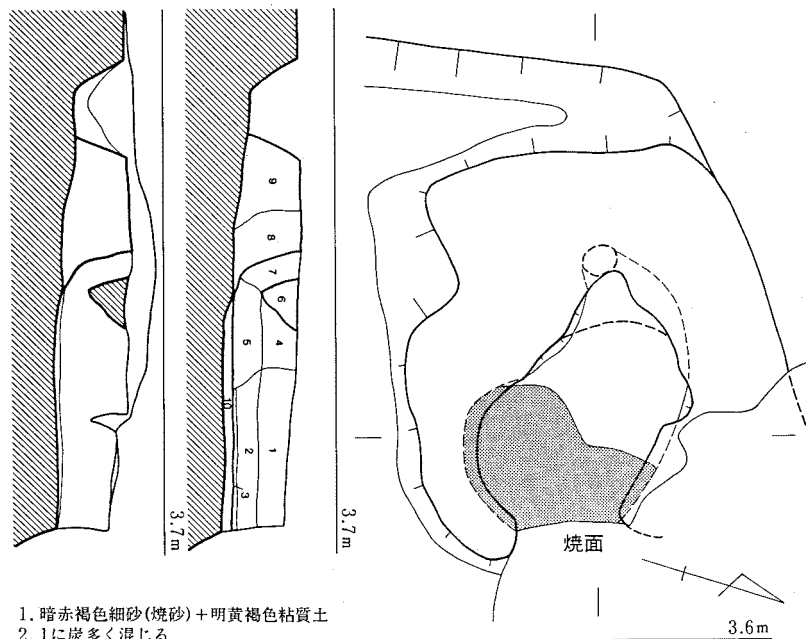
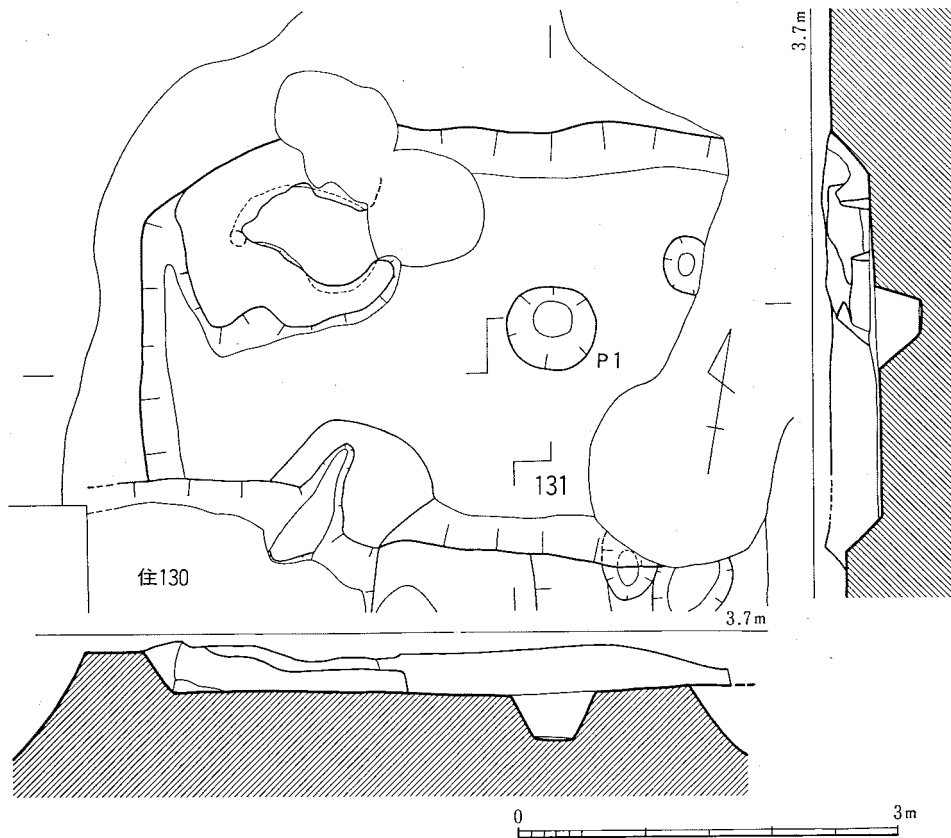
ハケのち横ミガキ。21は畿内系脚付鉢脚部。乾燥が進んだ状態で外側から1ヶ所穿孔する。20は黄橙褐色、他は橙褐色。

23~26は鉢。22は精製で内外面にミガキを施す。23は内面に工具痕が残る。24の内面は工具によるナデのち指ナデ。25は外面底部近くはハケのち粗い縦ミガキを施す。26は器壁が厚く、口縁端部をやや外反させる。24・26は口縁部に黒斑あり。27は畿内系小型器台。外面は縦ハケのち横ミガキ、杯部内面は暗文風の縦ミガキ、脚部内面は底部はハケ、軸受部近くはナデによる絞り痕が残る。乾燥が進んだ状態で外側から1ヶ所穿孔する。28は蛸壺である。工具と指によるナデを行い、乾燥前に1ヶ所穿孔を施す。22・23・27は橙褐色、他は淡黄褐色。29・30は130号竪穴住居跡周辺遺構面出土。29は小型の丸底壺か。口縁部はやや外傾ぎみに直立する。外面は不定方向のハケ、口縁部内面はミガキか。30は畿内系脚付鉢の脚部。乾燥が進んだ状態で外側から穿孔を1ヶ所施す。いずれも橙褐色。(大庭)

131号竪穴住居跡(図版51、第299図)

131号竪穴住居跡は3北1区西端、130号竪穴住居跡北に位置する。130号竪穴住居跡に切られると考えて発掘した。東壁と北壁中央の一部は攪乱を受ける。覆土は暗黄灰色細砂で南北3.5m、東西4.6m以上、深さ40cmの長方形を呈す。P1は径60cm、深さ38cmを測り、支柱穴の可能性もある。北西隅で煙道が北壁に沿うカマドを検出した。

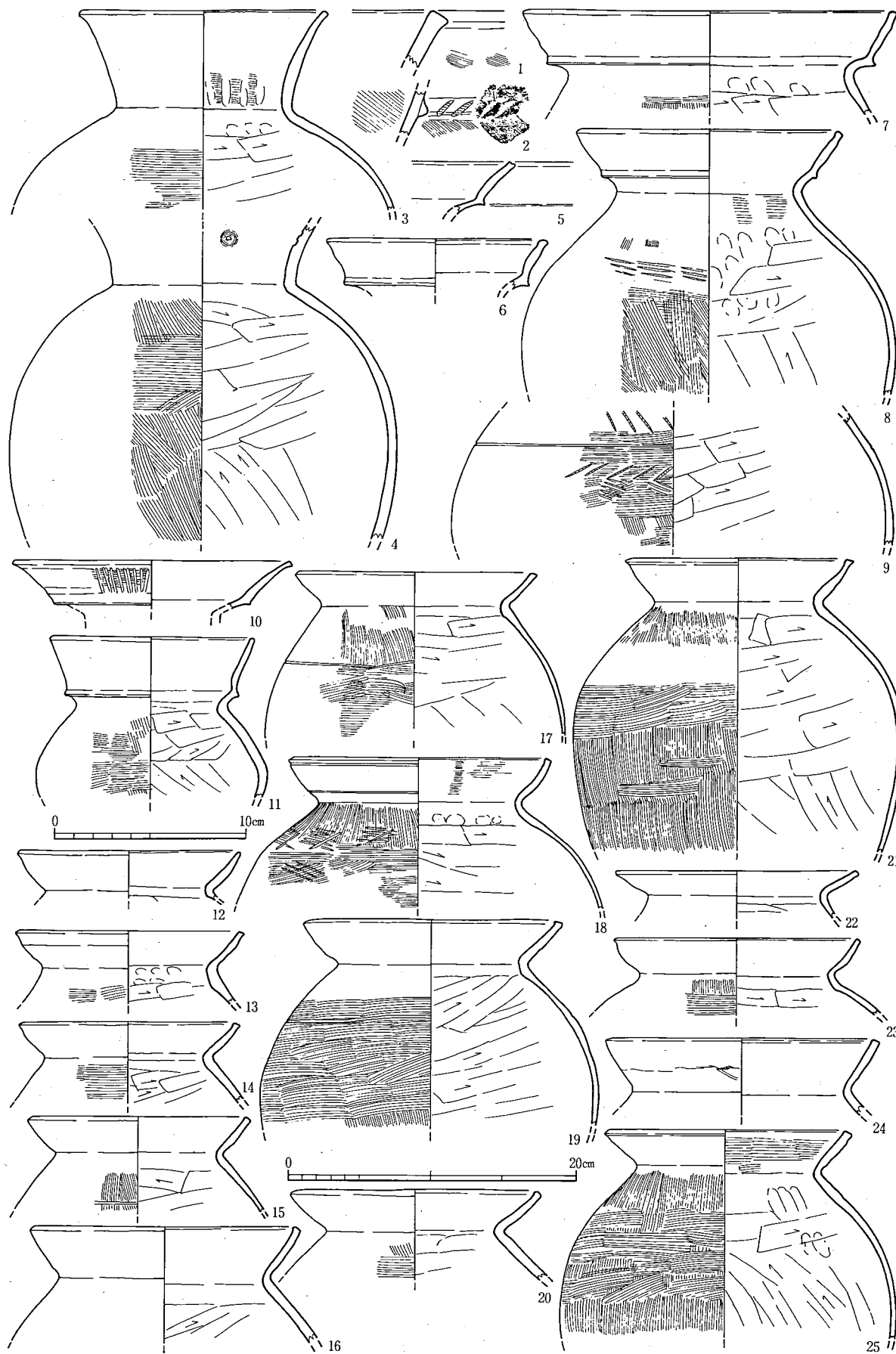
カマド(第299図) 検出時は、130号住居跡カマドまで粘土が広がっている状態で、カマドかどうか判断できなかったが、130号竪穴住居跡カマドの焼面の存在から別のカマドとして判断し調査した。しかし、他のカマドと比べ形態が異なることや天井の高さが低すぎることなどカマドではない可能性もあるが、今回はカマドとして報告する。右袖先端と焼面の一部は攪乱を受けるが、長さは東西で1.7m、天井までの高さは最も残っている部分で29cmを測る。焼面は非常に良く焼けており硬化面を形成する。煙道は77号住居跡カマドと同様のトンネル状に垂直に上がる形態。袖は版



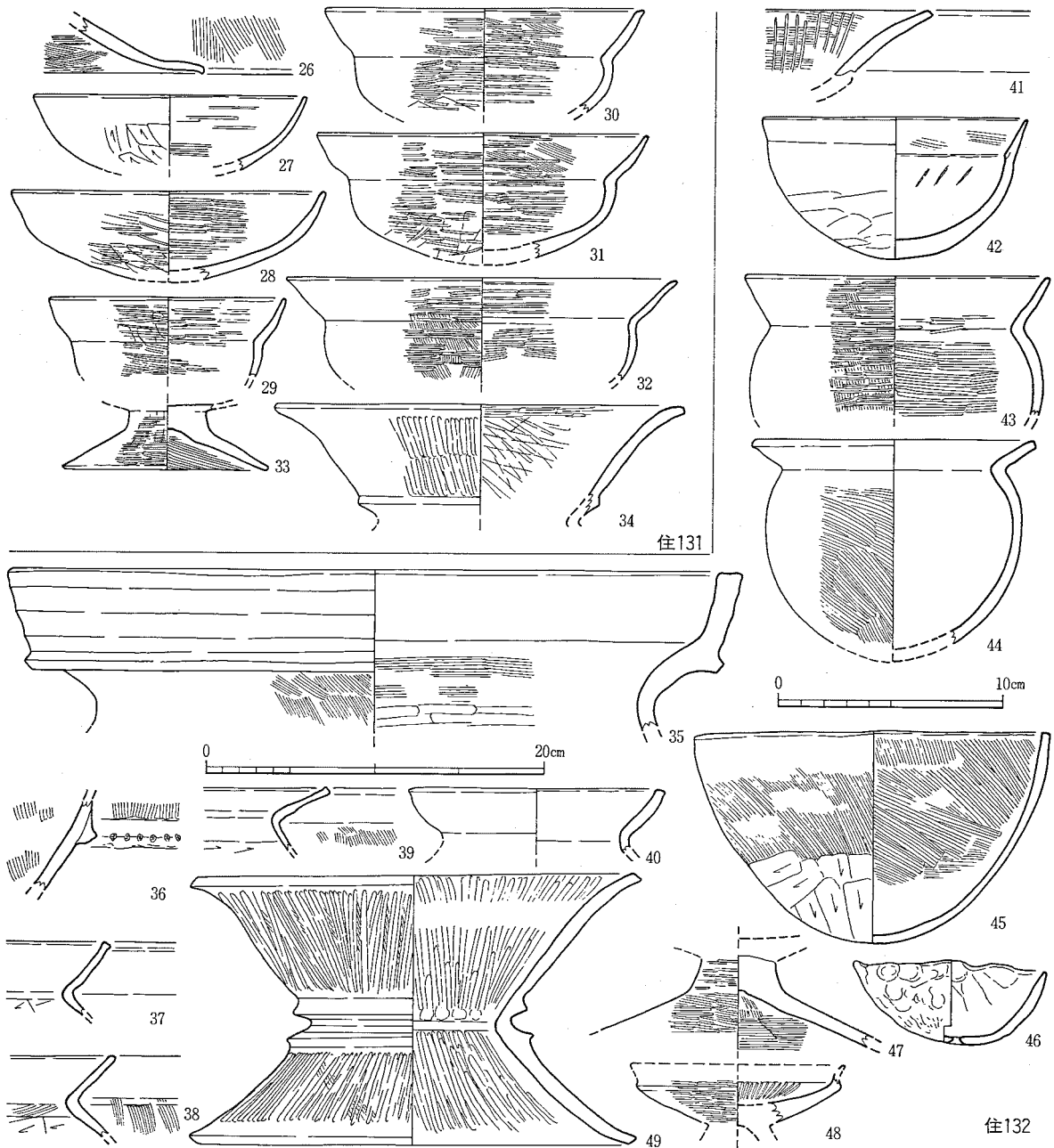
1. 暗赤褐色細砂(焼砂)+明黄褐色粘質土
2. 1に炭多く混じる
3. 暗赤褐色細砂(烧面)
4. 明黄灰色細砂に炭多く混じる
5. 暗赤褐色粘質土に炭多く混じる
6. 明赤褐色粘質土+明黄白色細砂
7. 明黄褐色粘質土に炭多く混じる(煙道部)
8. 厚さ約2mmの明黄褐色粘質土と明黄白色細砂の互層
9. 暗黄灰色粘質砂
10. 8より粘質土が少ない



第299図 131号竖穴住居跡・同カマド実測図 (1/60・1/30)



第300图 131号竖穴住居跡出土土器実測図(1)(10・11は1/3、他は1/4)



第301図 131(2)・132号竪穴住居跡出土器実測図 (35~40・45は1/4、他は1/3)
(26~34:住131、35~48:住132)

築状に粘土と砂を交互に積んで構築する。またカマド下層は構築時に、5cmほど掘り込み、粘質の砂を入れる。23はカマド内出土。土器の他に鉄鏟(第376図1)、台石(第378図11)が出土。

出土土器(図版122、第300・301図26~34)

1は在地系大形壺口縁部か。端部はナデで面取りする。2は在地系の壺胴部片。ハケ工具による刻み目突帯を貼り付ける。3・4は畿内系直口壺。3の肩部は横ハケをナデ消す。4の内面は頸部近くまでヘラケズリを行う。口縁部内面に竹管による刺突を1ヶ所行う。5~9は山陰系二重口縁壺。5は小片のため、傾きが不安。6は外面に煤が付着する。7は内面頸部近くまでヘラケズリを行う。8は二重口縁部の屈曲があまり見られない。肩にタタキ痕が残り、内面はかなりケズリの位置が下がる。頸部には横ハケが残る。胴部内面には炭化物が付着する。9は肩にハケ工具による綾

杉文と1条の凹線を施す。10は精製の畿内系二重口縁壺口縁部。外面は横ハケのち暗文状の太い縦ミガキを施す。11は山陰系の小型丸底壺。内面は頸部までヘラケズリを行う。外面には煤が付着。2は茶褐色、4は褐色、10は橙褐色、他は灰黄褐色～淡黄褐色。

12～25は布留系の甕。12・14・15・17・19～23は頸部内面近くまでヘラケズリを行う。12・13・16・19は器表に煤が付着。12は口縁端部を丸くおさめる。15は肩に1条の凹線が巡る。内面ヘラケズリは反時計回り。16は外面に二次加熱のため器表が荒れる。口縁端部はわずかに内側につまみ上げる。口縁部に黒斑あり。17は外面のやや下がった位置に細い凹線が巡る。18は直立気味に内湾する口縁部の外面に稜状の弱い屈曲がある。肩にはタタキ痕が残り、ハケのちハケ工具による斜行沈線文を巡らす。口縁部内面には横ハケが残る。19は口縁端部を水平にする。肩に凹線が巡り、口縁部内面は強いナデによる凹凸が見られる。20は口縁端部を内側につまみ上げる。21は口縁端部を外側につまみ出し、外面上位は縦ハケのち横ハケ、肩のみその後ナデ消す。22は小片のため、傾きに不安がある。23は直立気味に内湾する口縁部をもつ。24はやや長めに直立する口縁部をもち、外面には接合痕が残る。25は外面胴部にはナデ消しを施さない。口縁部内面は横ハケが残り、ケズリ位置が下がる。16は暗灰褐色、他は淡黄褐色～灰黄褐色。

26は高杯脚部かと考えられる。外面は粗いハケ、内面は細かい横ハケを行う。27・28は直口鉢である。27は半精製品で、外面下位はケズリのちミガキか。風化が激しいが、内面一部には横ミガキが残る。28は精製品で、口縁端部を弱く外反させる。29～32は精製の外反口縁鉢。29～31はいずれも弱く内湾する口縁部をもつ。31は端部を弱く外反させる。29は小形品で、口縁部外面に指おさえ痕が残る。32は外面に二次加熱痕と煤が付着する。33は山陰系脚付鉢の脚部。外面は横ミガキ、内面はハケで調整。34は山陰系鼓型器台の上位。外面は暗文風の太い縦ミガキを2段に施し、内面はケズリのち口縁部のみミガキを行う。26は黄橙褐色、27・34は淡黄褐色、他は淡橙褐色～橙褐色を呈している。(大庭)

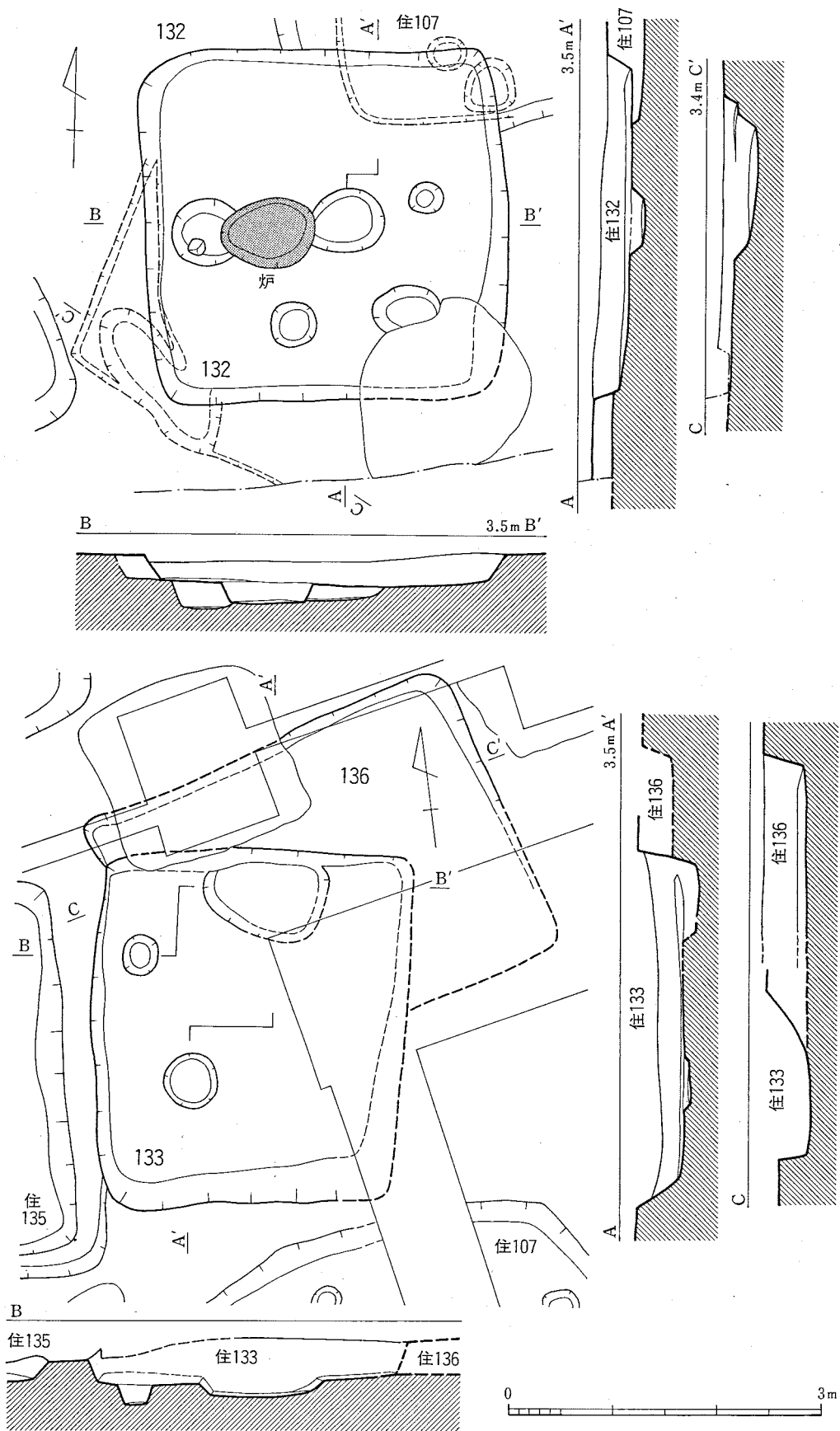
132号竪穴住居跡 (第302図)

3 西拡張区の東部に位置しており、東北隅で107号竪穴住居跡を切っている。攪乱によって失われた南西隅を除けば住居の壁が残存しており、1辺の長さ3.4m前後のほぼ正方形を呈している。床面中央やや西よりに長軸0.9m程の平面楕円形の炉跡がある。平面形もしっかりしており、107号住居跡との切合いも確実であるので、出土遺物の一括性は良好と判断できる。覆土は暗褐色灰色細砂。なお、住居の西南外側に直線的な輪郭の落ち込みが広がっていた。住居跡の可能性もあるが、出土遺物も少ないため現地では特に遺構番号を付けていない。

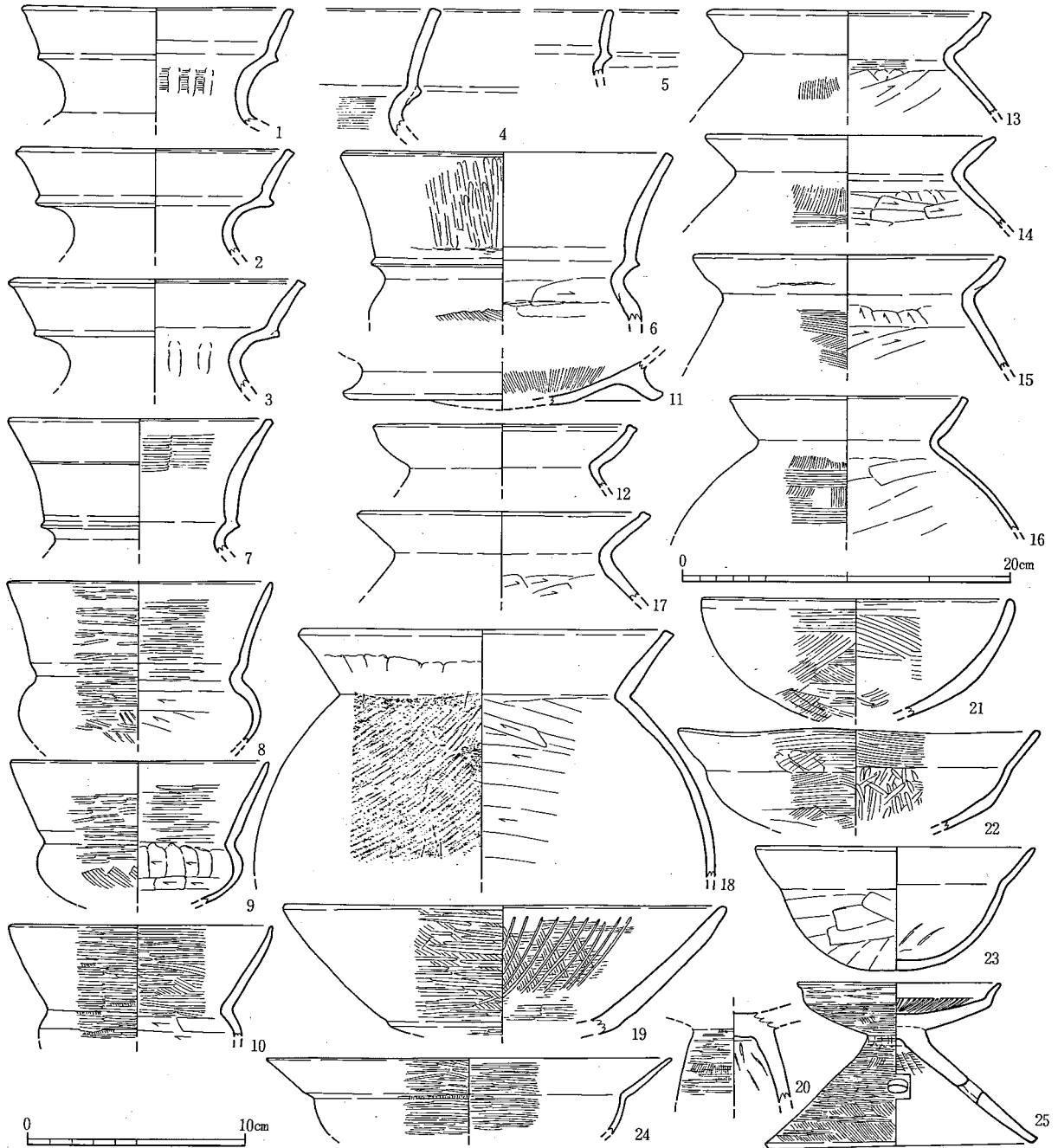
出土土器 (第301図35～48) 35は大形の山陰系二重口縁壺で、口縁外面の強いナデによる稜、一次口縁部のたが状の突出が特徴的である。頸部内面はハケ後板状工具によるナデであり、淡黄褐色を呈する。36は在地系壺胴部片と思われ、断面三角形、頂部ハケメ工具刺突による刻目突帯を貼付している。生地は淡黄褐色を呈するが、橙褐色の化粧土をかけた可能性がある。

37～40は布留系甕である。39は直線的に外反し端部をつまみ上げるが、他は口縁部はわずかに内湾しつつ外傾させる。37は端部を外に拡張気味である。いずれも淡黄褐色～灰黄褐色を呈する。

41は灰黄褐色の在地系高杯口縁部片で外面摩滅、内面横ハケ後暗文風縦ミガキ。42・43は外反口縁鉢。42は口縁が短く、胴部外面ケズリ、口縁部内面一部ハケ、胴部内面工具痕を残す。黄橙色を



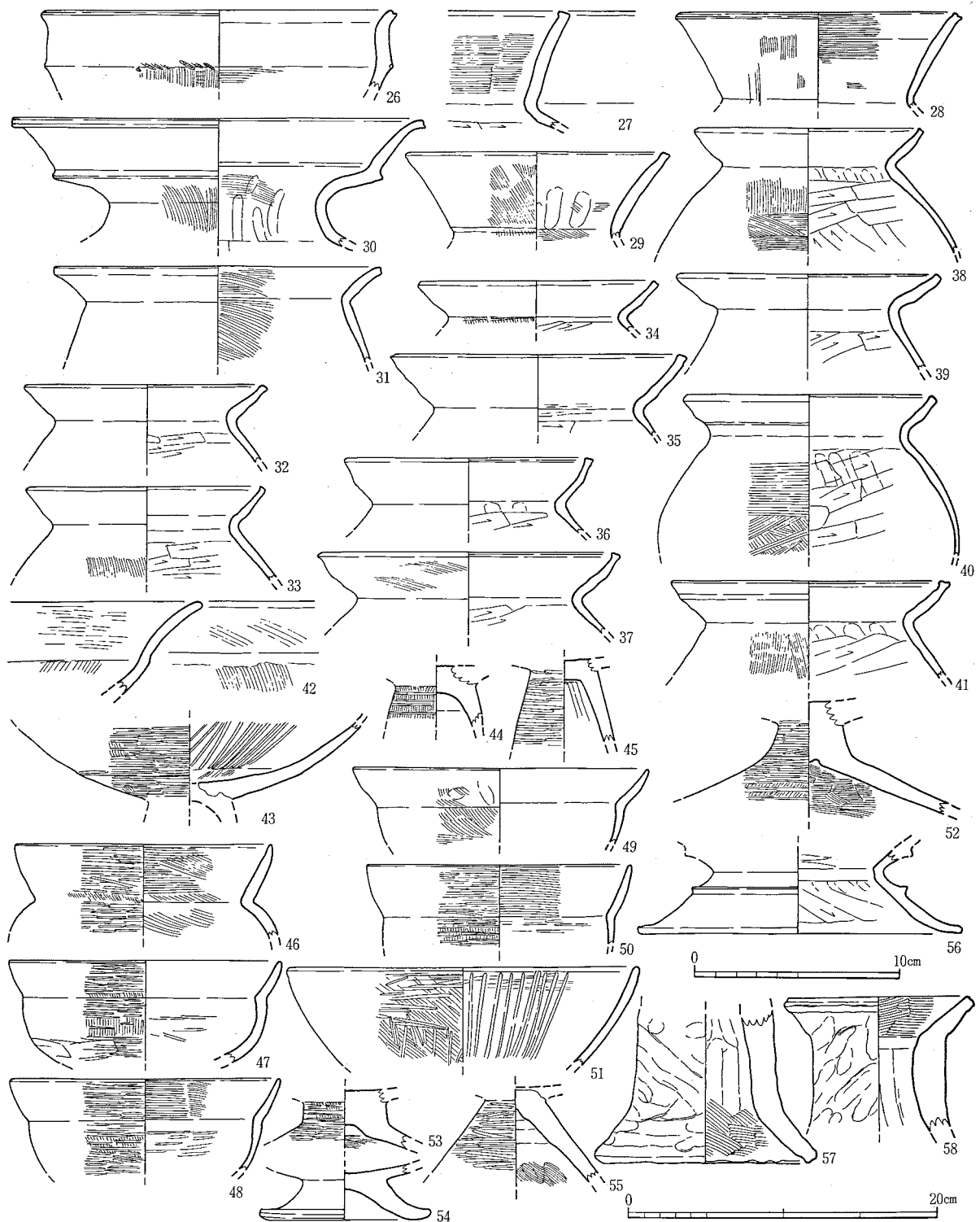
第302图 132·133·136号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第303図 133号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (1~5・12~16は1/4、他は1/3)

呈するが粗製に近い。43は外面縦ハケ後横ミガキ、胴部内面ハケで、口縁部内面は摩滅するがミガキ仕上げの可能性が大きい。橙褐色。44は小形甕との区別に悩むが鉢と考えた。胴部外面は斜めハケ、胴部内面ナデ仕上げの粗製品で、黄橙褐色。45・46は単口縁鉢で白黄褐色～淡黄褐色。45は外面ハケ後底部ケズリ、内面ハケで仕上げ、46は内外の指圧痕が顕著な手捏ね風のつくり。47は橙褐色の脚付鉢で、外面ハケ後横ミガキ、内面ハケ仕上げの精製品。

48は小形精製器台受部片で外面横ミガキ、内面放射状にミガキを施す。橙褐色。49は大形の山陰系鼓形器台で、横ナデのくびれ部を除けば外面斜めハケ後縦ミガキである。内面は通常、この種の器形が受部横ミガキ、裾部ヘラケズリであるのに対して、本例は縦ミガキを施しており珍しい。裾部内面には液体がふきこぼれたかのような暗褐色の付着物が線状に残っている。(重藤)



第304図 133号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(26~38・57・58は1/4、他は1/3)

133号竪穴住居跡 (図版52、第302図)

3西拡張区の東部、107号竪穴住居跡の北側に位置する。136号竪穴住居跡を切ると考えて発掘したが、切合いはやや不安であり、出土遺物も本来136号住居跡に帰属するものを間違っ含めた恐れがある。住居東側は校舎基礎があるため不明であるが、東壁は3南10区では検出されていないので、おそらく校舎基礎の下にあるだろう。北壁のラインも校舎基礎のため不安であるが、復元するならば南北3.5m、東西3.0mの長方形の竪穴住居跡となる。土器の他に鉄鉈(第376図7)が出土。

出土土器（第303・304図） 1～25が本住居の覆土から出土したもので、26～58は本住居と135号住居跡の上面から出土してどちらに帰属するか区別できないものである。

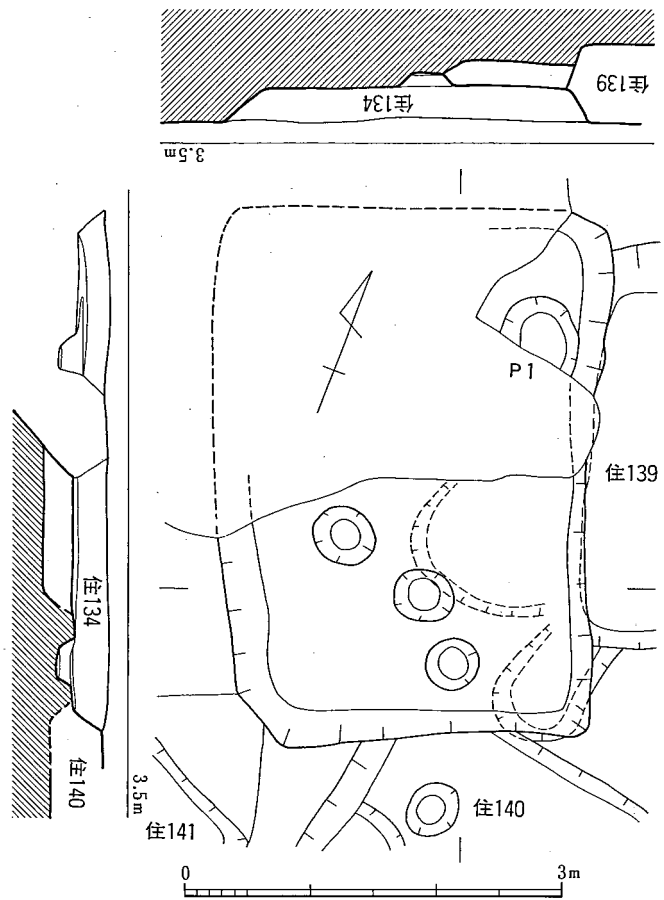
1～5は中～大形の山陰系二重口縁壺で、4は頸が短いために鉢口縁となる可能性もある。5は外面に煤が付着。褐黄色の5以外は白黄褐色～淡黄褐色。6・7は中形の山陰系二重口縁壺で、灰黄褐色～淡黄褐色。6は頸部径がやや大きく、口縁部外面に太い縦ミガキを施している。7は口縁部外面中位に沈線が巡る。8～10はいずれも外面～口縁内面を横ミガキ、胴部内面ケズリで仕上げた小形丸底壺。9・10は一部にミガキ前のハケメが見える。いずれも淡黄褐色～白黄褐色で、橙褐色～黄橙色を呈すものが多いこの種の器形としては特異である。11は復元すると底部が脚部よりも突出して自立しなかった可能性があるが、脚付壺底部片と考えた。外面はナデ、内面ハケメ。

12～17は布留系甕。口縁部はわずかに内湾気味のものが多く、14・16以外は少し上につまみ上げ気味である。14が褐色を呈す他は、白黄褐色～淡黄褐色である。18は外面やや太い右上がりタタキを施し、口縁をわずかに外反させた庄内系甕である。灰黄褐色を呈す。器壁は厚いがヘラケズリを頸部下まで施し、口縁外面に接合痕状の細かい皸が残る。

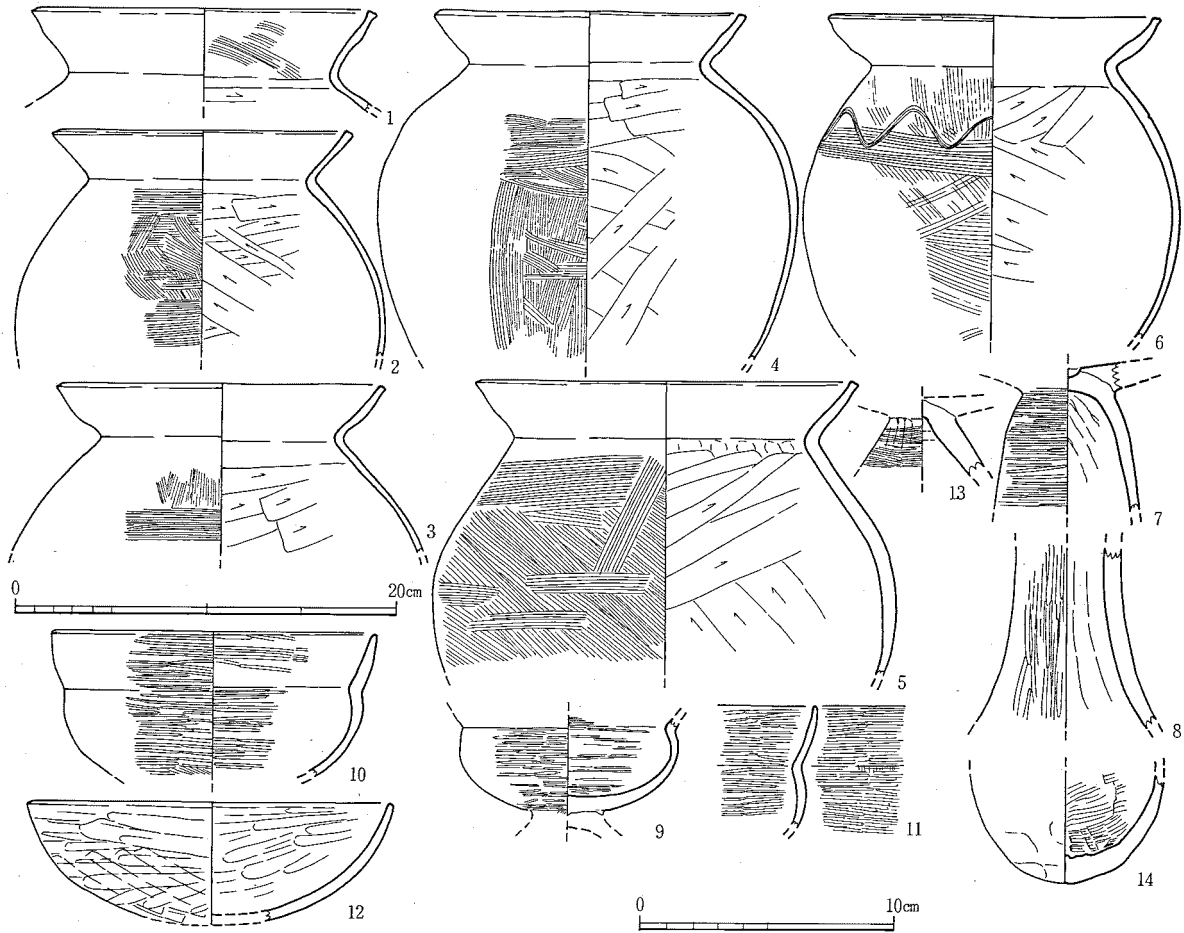
19は高杯杯部片で内外斜めハケ後外面横ミガキ、内面暗文風の縦ミガキ。外面に二次的なものか煤が付着している。20は高杯脚部片で、付加法により杯部と接合したと考えられる。外面縦ハケ後横ミガキ、内面絞り痕。19・20とも橙褐色を呈す。21は単口縁鉢で内外ハケメ仕上げ。淡黄褐色を呈す。22～24は外反口縁の鉢。22は外面口縁部指圧痕、底部ケズリ後横ハケ、口縁内面ハケ、胴部内面ミガキ仕上げ。粗製で淡黄褐色を呈す。23は外底部板ナデ、他はナデ仕上げ。22・23とも白黄褐色～淡黄褐色を呈し、粗製品である。24は橙褐色の精製品で、外面ハケ後、内外を横ミガキ仕上げする。25は精製の小形器台で、外面ハケ後横ミガキ、受部内底放射状ミガキ、脚部内面ハケ後ナデ。半乾燥時のものと思われる穿孔が1ヶ所残る。

26は在地系複合口縁壺の口縁か。口縁端部を外に屈曲させ、一次口縁部にハケメ工具小口刺突の刻目を施す。27～29は直口壺口縁部。30は外反が強く、頸部がやや短い点で特異であるが、山陰系二重口縁壺と思われる。以上の壺は26が淡褐色を呈す他は、黄褐色～淡黄褐色。

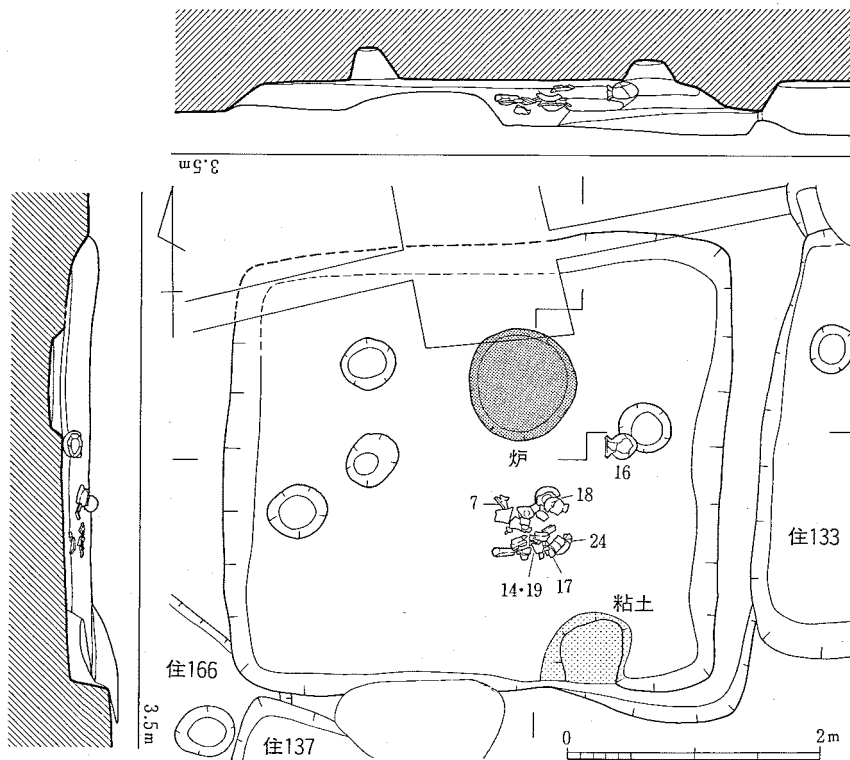
31は在地系甕口縁部で外面摩滅、内面ハケ仕上げ。淡黄褐色を呈す。32～41は布留系甕で、38・39が灰褐色、他は淡黄褐色～黄褐色。41は横ナデが強いために口縁外面中ほどに稜が巡る。33・



第305図 134号竪穴住居跡実測図（1/60）



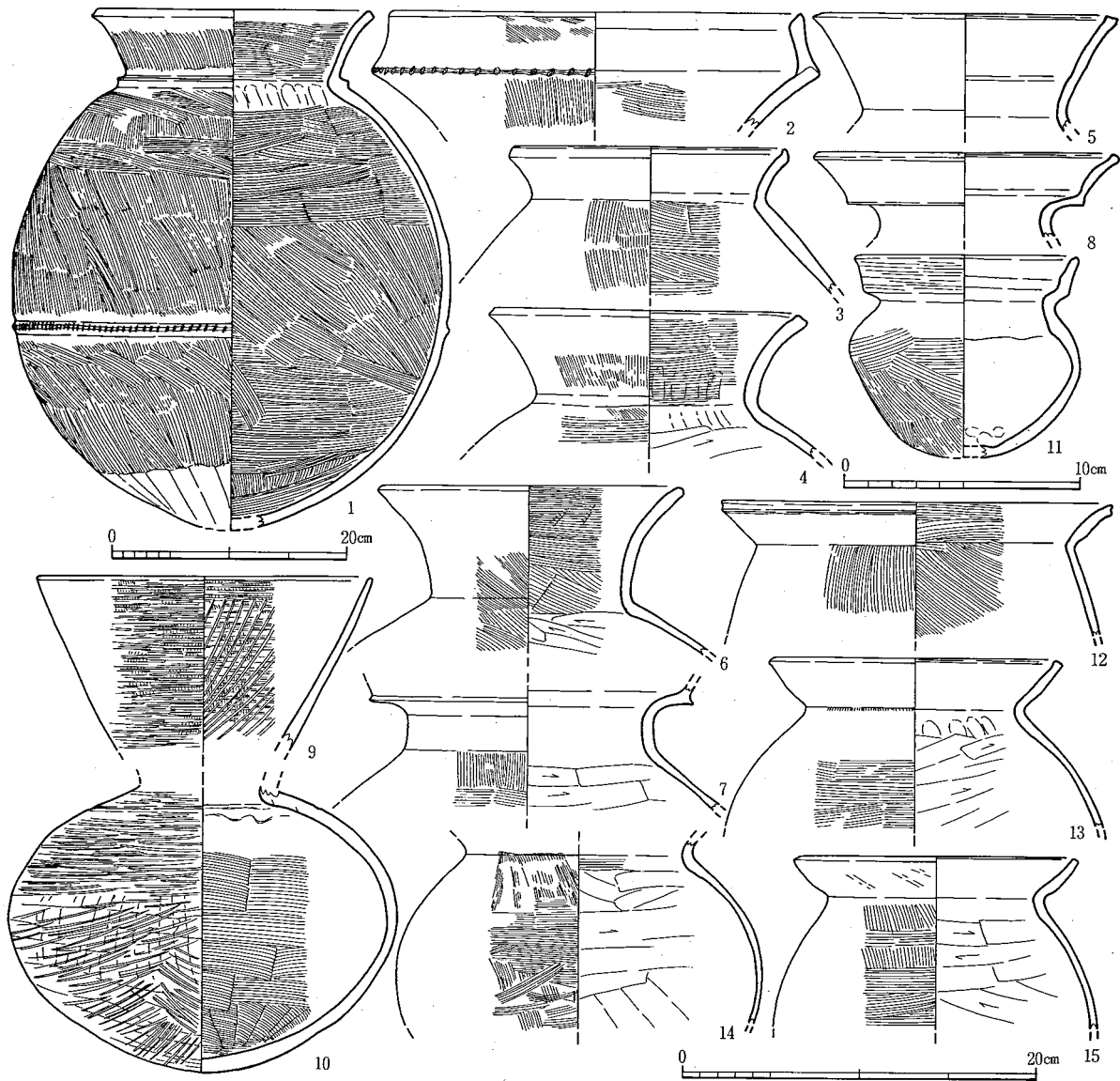
第306図 134号竪穴住居跡出土土器実測図（1～4は1/4、他は1/3）



第307図 135号竪穴住居跡実測図（1/60）

36・38・40・41は外面に煤の付着が見られる。

43は高杯杯部片。外面ハケ後横ミガキ、内面暗文風縦ミガキを施す。44・45は高杯脚部片。これらの高杯片はいずれも橙褐色を呈す。46は壺に近い形態であるが、鉢と考えた。外面縦ハケ後横ミガキ、内面斜めハケで橙褐色。精製といえるが、器壁がやや厚く、外面に煤が付着している。47～49は外反口縁の鉢。47・48・50は外面ハケ、ケズリの後横ミガキを施した精製



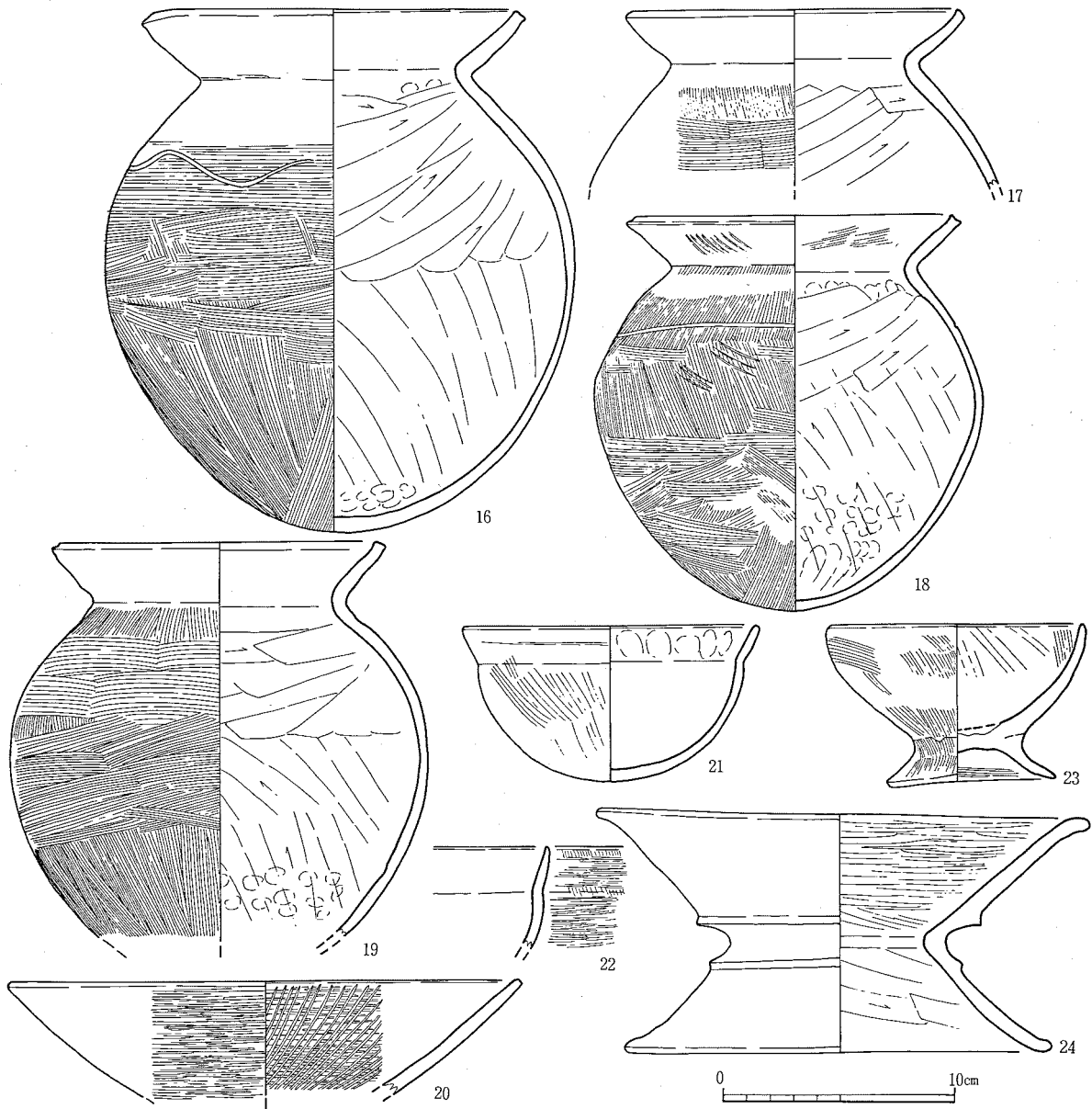
第308図 135号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (1は1/6、9~11は1/3、他は1/4)

品である。47は内面ミガキを施した可能性がある。48は胴内面にミガキを施すが、口縁部内面はハケメ仕上げでミガキはない。49は外面ハケメ、内面ナデ仕上げの粗製品で淡黄褐色。51は単口縁鉢で外面ハケ後雑なミガキ、内面口縁部の横ハケ後暗文風の縦ミガキ。炭素を吸着させたような焼成で褐灰色を呈す。52・53は橙褐色精製の脚付鉢脚部片で、ともに外面ハケ後横ミガキ、内面ハケ仕上げ。54は淡黄褐色粗製の脚付鉢脚部片で、内外横ナデ仕上げ。55は小形精製器台脚部片である。外面横ミガキ、内面ハケで橙褐色。57・58は粗製の支脚片。外面を粗いナデで仕上げている。(重藤)

134号竪穴住居跡 (図版52、第305図)

3西拡張区の南部にあり、139・140号竪穴住居跡を切ると考えて発掘を行った。北側を大きく攪乱に壊されているためか炉跡を検出していないが、地山に掘り込まれた西南、東南隅は明瞭で、139・140号住居跡との切合いも明確であった。覆土は灰黄褐色細砂である。

出土土器(第306図) 6・10・11はP1出土遺物、2・9は134号・139号住居跡の上面から出土し、どちらに帰属するか不明のものである。

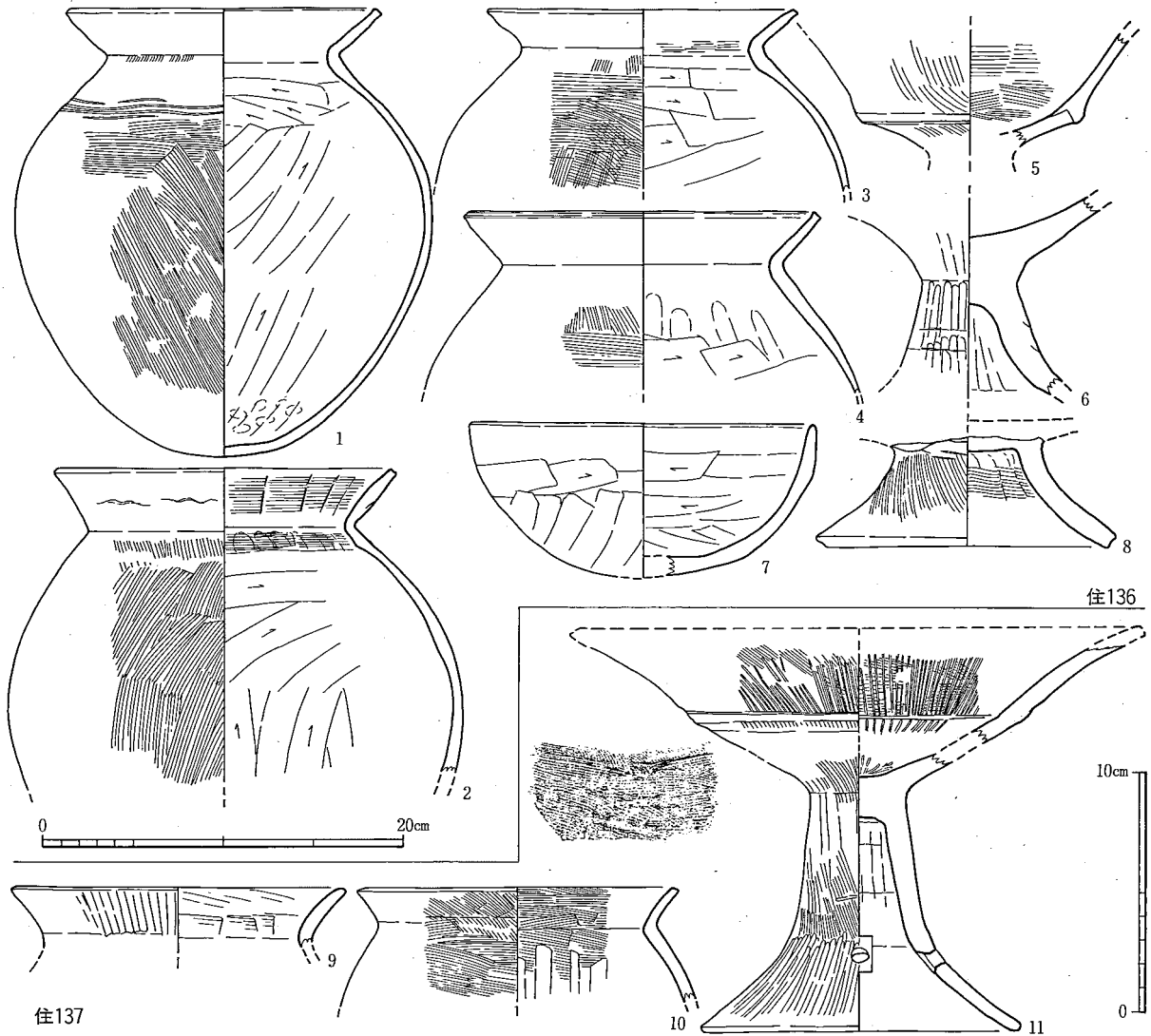


第309図 135号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/3)

1～5は布留系甕。口縁は直線的に外傾するもの(2・4)とわずかに内傾気味のものがある。1・2は端部を上につまみ上げ、6は肩部に2条からなる波状沈線文を巡らしている。いずれも白黄褐色～淡黄褐色で、4・6は口縁と胴下部外面に、1・2は外面全体に煤が付着。7・8は橙褐色～黄橙色を呈す高杯脚部片で、8は在地系となるか。7は外面横ミガキで仕上げ、付加法で杯部と接合している。8は外面縦ミガキ。9は黄橙色で小形丸底壺に近い形態の脚付鉢胴部片。内外を横ミガキ。10・11は内外横ミガキ仕上げ精製外反口縁鉢で、いずれも橙褐色。12は黒褐色を呈す単口縁鉢で、外面ケズリ後内外に太いミガキを施している。13は外面横ミガキ、橙褐色の小形器台片。14は灰黄色の蛸壺片。(重藤)

135号竪穴住居跡(図版52、第307図)

3西拡張区にあり、133号竪穴住居跡の東に位置する。遺構検出面では東側にある133号竪穴住居跡との境界が不明瞭であったが、少し下げると東壁を検出できた。基礎の下になる北西隅の壁が検

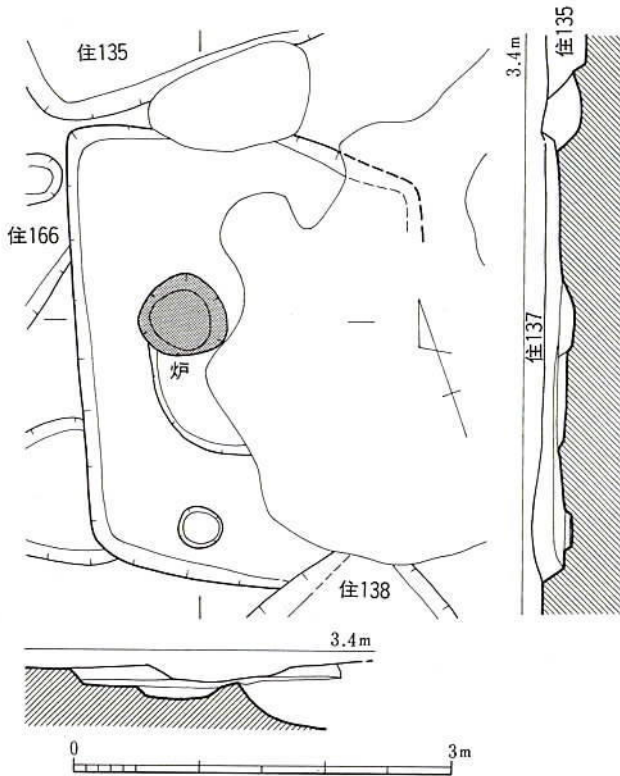


第310図 136・137号竪穴住居跡出土器実測図（1～3・10は1/4、他は1/3）

出できなかったが、東西4.0m、南北3.6mの方形に近い平面形に復元される。北側中央に直径0.9mの円形の炉跡がある。覆土の上層から出土した遺物は133号住居跡に本来、帰属するものを含む恐れがあるが、炉跡南の床面近くから出土した土器（第308・309図の7・14・16～19・24）は良好なセット関係として捉えられる。覆土は暗褐灰色細砂。土器以外に石槌（第379図13）が出土。

出土土器（図版122、第308・309図） 1・2・4・6は覆土上層から出土したもの。1は器高44.1cmを測る在地系の大形直口壺である。口縁部は1/3周しか残存せず、径、傾きは多少不安である。口縁は外反し、頸部三角突帯、胴中部に低い断面方形のハケメ工具小口刺突による刻目突帯を巡らしている。底部は欠損するが、丸底に復元される。内外ハケメ仕上であるが、外底部にはハケメを切るケズリ、頸部内面にはハケメ前の指圧痕が観察される。褐色を呈す。

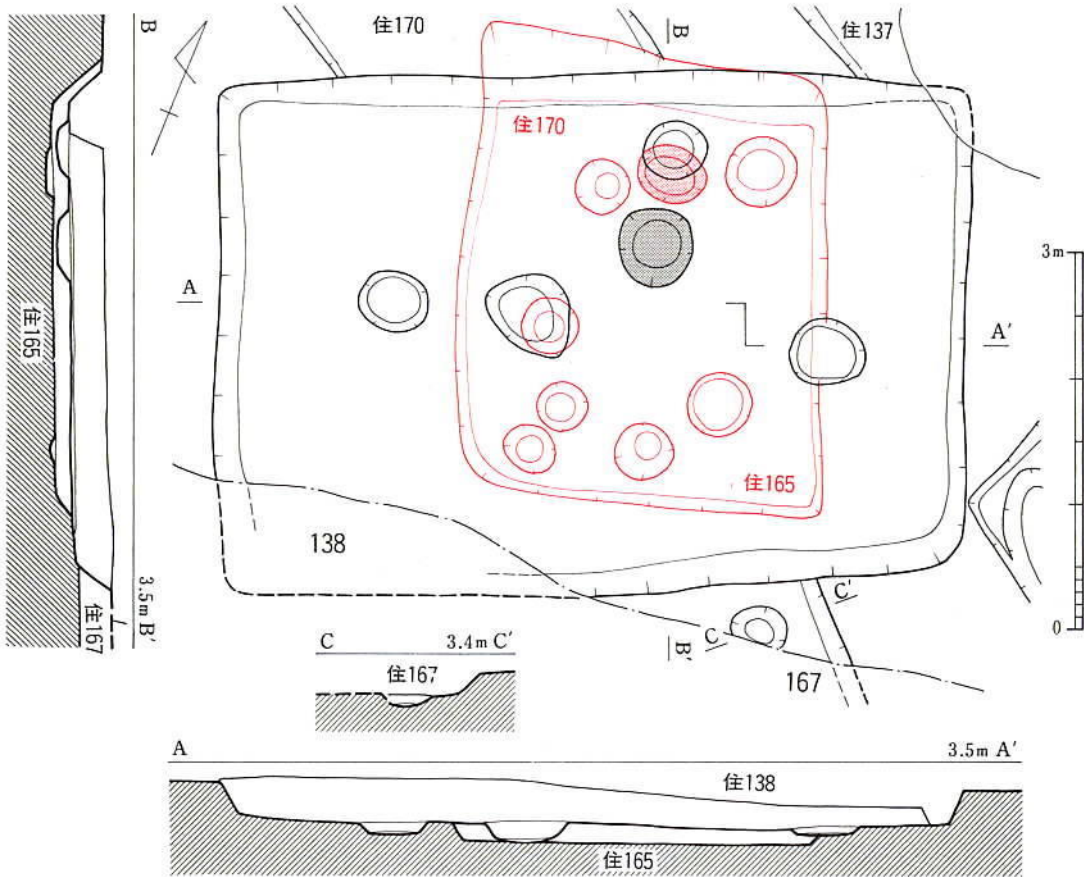
2は在地系複合口縁壺口縁部片で、屈曲部外面にハケメ工具小口刺突による刻目を施文する。黄橙色を呈す。3は口縁が短く外反する直口壺で、胴部内外をハケメ仕上することから在地系か。白黄褐色。4～6は畿内系の直口壺である。5・6は白黄褐色～淡黄褐色。6は頸部までケズリを施し、ケズリ方向も一般の壺・甕と異なることが特徴的。胴部外面のハケメが粗く、黄橙色を呈する。7・8は山陰系二重口縁壺で、7黄橙色、8白黄褐色を呈する。9は中形直口壺口縁部片、10



第311図 137号竪穴住居跡実測図 (1/60)

は同胴部片である。9は内外縦ハケ後横ミガキで、内面はさらに斜行する暗文風ミガキを施している。10は外底部ケズリ後外面ミガキ、内面は完存するため観察が難しいがハケメ仕上げで、頸部下に接合痕が残る。また、接合のためか肩部に凹みが巡っている。生地は淡黄色であるが、内外に橙褐色の化粧土を施している。11は小形の山陰系二重口縁壺で、口縁外面は強い横ナデによる条痕が巡っている。灰褐色。12は灰黄褐色の在在系甕。口縁端部外面は強いナデによりくぼむ。13~19は布留系甕である。口縁部は直線的に外傾するもの(13・16・18)とわずかに内湾気味のものに分かれ、口縁端部は上方、内面につまみ出し気味のもの(13・17~19)と角張るものがある。16は肩部外面に1条波状沈線文を巡らし、

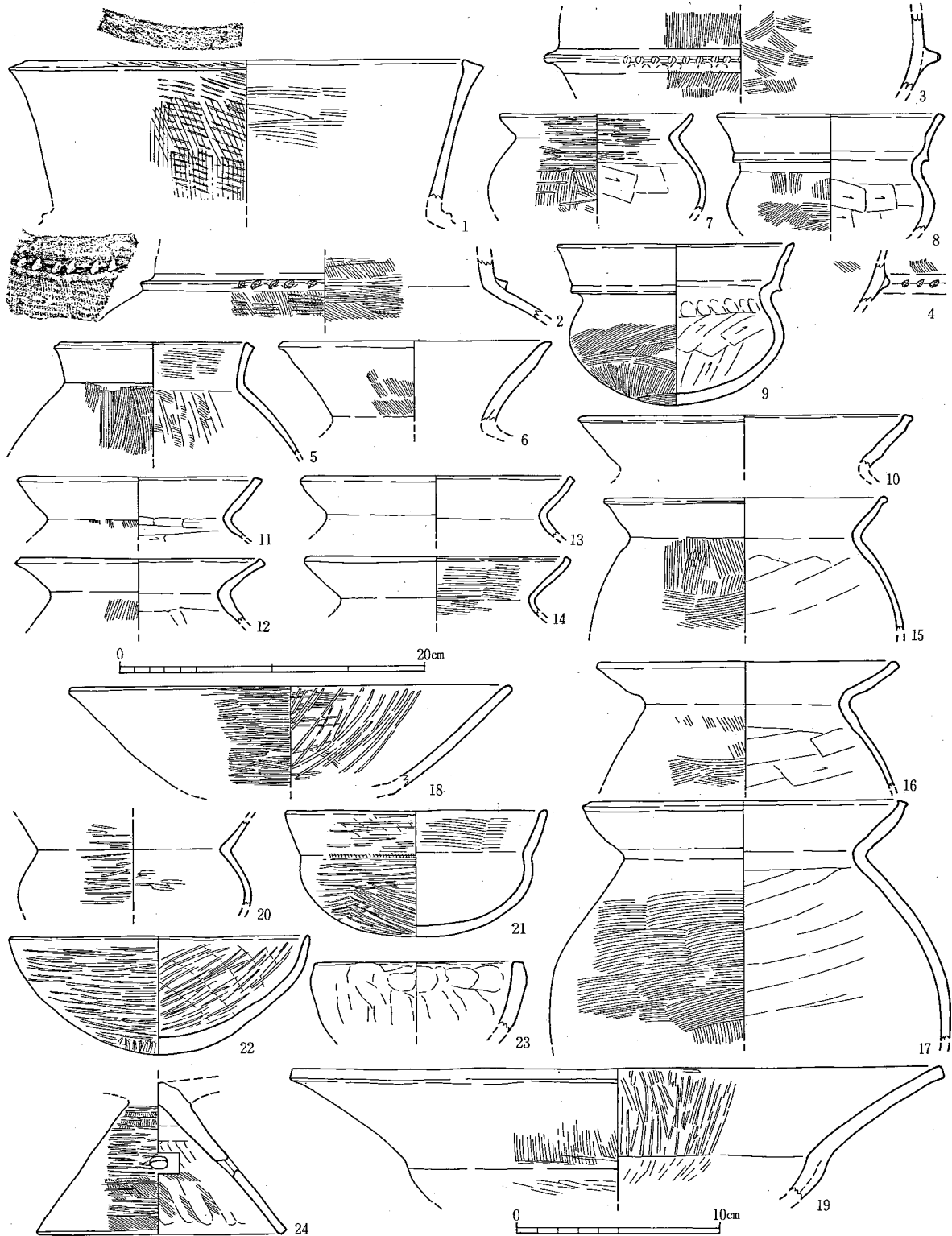
胴下部縦ハケ後胴中部横ハケ。18は1条の沈線を肩部に巡らし、胴上中部の縦ハケ後下部の横斜めハケの順で、一部にハケに先行するタタキ痕残る。口縁部外面にも叩出し整形の痕跡かと思われる条痕が残る。19は縦ハケ、肩部の粗い横ハケ、胴中部の細かい斜め横ハケの順。灰褐色の17以外は



第312図 138・167号竪穴住居跡実測図 (1/60)

白黄褐色～淡黄褐色。13・19は外面全体に煤が付着する一方で、胴部ほぼ完存する18は煤が全く付着しない。

20は橙褐色の高杯杯部片で、内外横ミガキ後内面放射状の暗文ミガキ施す。21・22は外反口縁鉢である。21は外面ハケメ仕上げで、灰黄褐色を呈する粗製品。口縁内面に指圧痕をとどめ、口縁外



第313図 138号竪穴住居跡出土土器実測図（1～6・10～14は1/4、他は1/3）

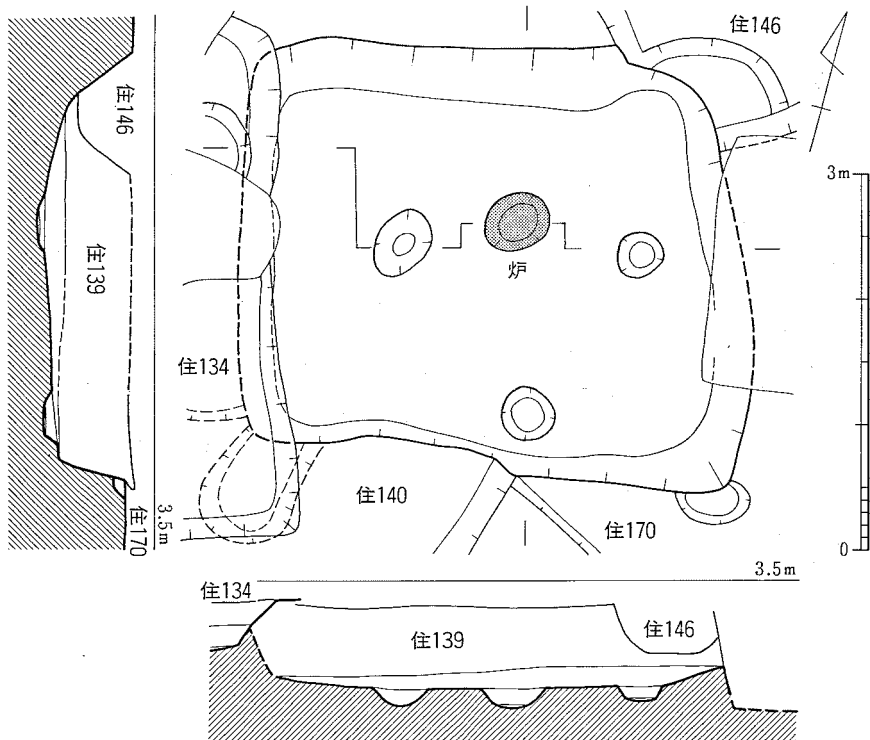
面には接合痕か浅い沈線が巡る。22は橙褐色で、外面縦ハケ後横ミガキの精製品。23は脚付鉢で、内面は粗いハケメ。淡黄褐色を呈す。24はほぼ完形の山陰系鼓形器台。受部内面横ミガキ、裾部内面ヘラケズリ仕上げで、淡黄褐色。(重藤)

136号竪穴住居跡 (第302図)

3西拡張区の東部にあり、133号竪穴住居跡に切られている。西側は133号住居跡に切られるとともに校舎基礎がある。また南壁も校舎基礎の下に位置するために検出していない。検出できたのは西北、東北隅近辺のみである。炉跡も検出していない。北壁沿いに明褐灰色の粘土があり、周辺から比較的多くの土器が出土した。発掘時には確認できなかったが、北壁沿いにカマドを付設していたことも想定する必要がある。覆土は灰黄褐色細砂。

出土土器 (図版123、第310図1~8) 1~4は布留系甕である。1は口縁は直線的に外傾し、端部は丸い。肩部に4条からなる櫛描直線文を施し、胴中下部の縦ハケが肩部横ハケを切るようである。2は外面横ハケを省略したのか縦ハケのみで仕上げ、歪みが顕著で器壁も厚い粗雑なつくりである。口縁部外面に接合痕か細い皺が巡り、頸部内面にハケを残す点が特徴的。口縁部外面に4cm大の焼けはじけによる剥離があるが、そこに煤が付着するので、多少の焼成不良品でも使用したことが判明する。3は口縁部が外反し、端部は丸みをおびる。外面のハケは胴中部の縦ハケが最も新しい。4は口縁部が直線的に外傾し、端部を少し上につまみあげる。ケズリは頸部よりかなり下でとどまっている。以上の甕はいずれも灰黄褐色~淡黄褐色を呈す。1・2は外面全体に煤が付着するが、1は胴中部に特に厚く、胴下部は二次加熱による器表のあれが顕著である。4は口縁外面に煤が多く、胴中部は二次加熱により剥離する。

5・6は高杯片。杯部片5は内外ハケメ仕上げで、杯底部と口縁部の接合が破損面ではっきりと確認できる。黄褐色を呈するが、一部橙褐色化粧土が残る。6は高杯脚部破片で、外面縦ミガキ、



第314図 139号竪穴住居跡実測図 (1/60)

内面ケズリ後ナデのためか縦方向の稜が残る。灰黄褐色。7は口縁部を除く内外をケズリで仕上げた単口縁鉢で、淡黄褐色を呈す。8は脚付鉢脚部片か。端部を除く内外ハケメ仕上げで、器壁が厚く白黄褐色を呈している。(重藤)

137号竪穴住居跡 (図版53、第311図)

3西拡張区にあって、135号竪穴住居跡の南に位置している。138号竪穴

住居跡に切られ、166号竪穴住居跡を切ると考えて発掘したが、調査時には切合関係は不明瞭であった。東部を攪乱で大きく壊され、南壁と北壁の一部と西壁を検出しただけである。住居跡中央やや西寄りに炉跡を検出している。覆土は暗黒褐色細砂であった。

出土土器（第310図9～11） 9・10は在地系甕となるか。9は口径13.9cmの小形品で、口縁部外面粗いハケ、内面ハケ後横ナデ。10は外面～口縁・頸部内面に掛けてハケ、胴部内面工具によるナデ仕上げ。いずれも黄褐色で、外面の煤が顕著である。11は在地系の高杯で杯部と脚部とに分離しているものを図上で復元した。口縁端部は欠損する。杯部内外ハケ後縦ミガキ。脚柱部外面ハケ風の板ナデ、脚柱部内面工具によるナデ、脚裾部外面縦ミガキである。穿孔は本来3ヶ所と思われるが、2ヶ所が残っており、内側が少し広がるものの乾燥前に穿孔したと思われる。褐色を呈し、二次加熱のためか器表の剥離した部分が多い。（重藤）

138号竪穴住居跡（図版53、第312図）

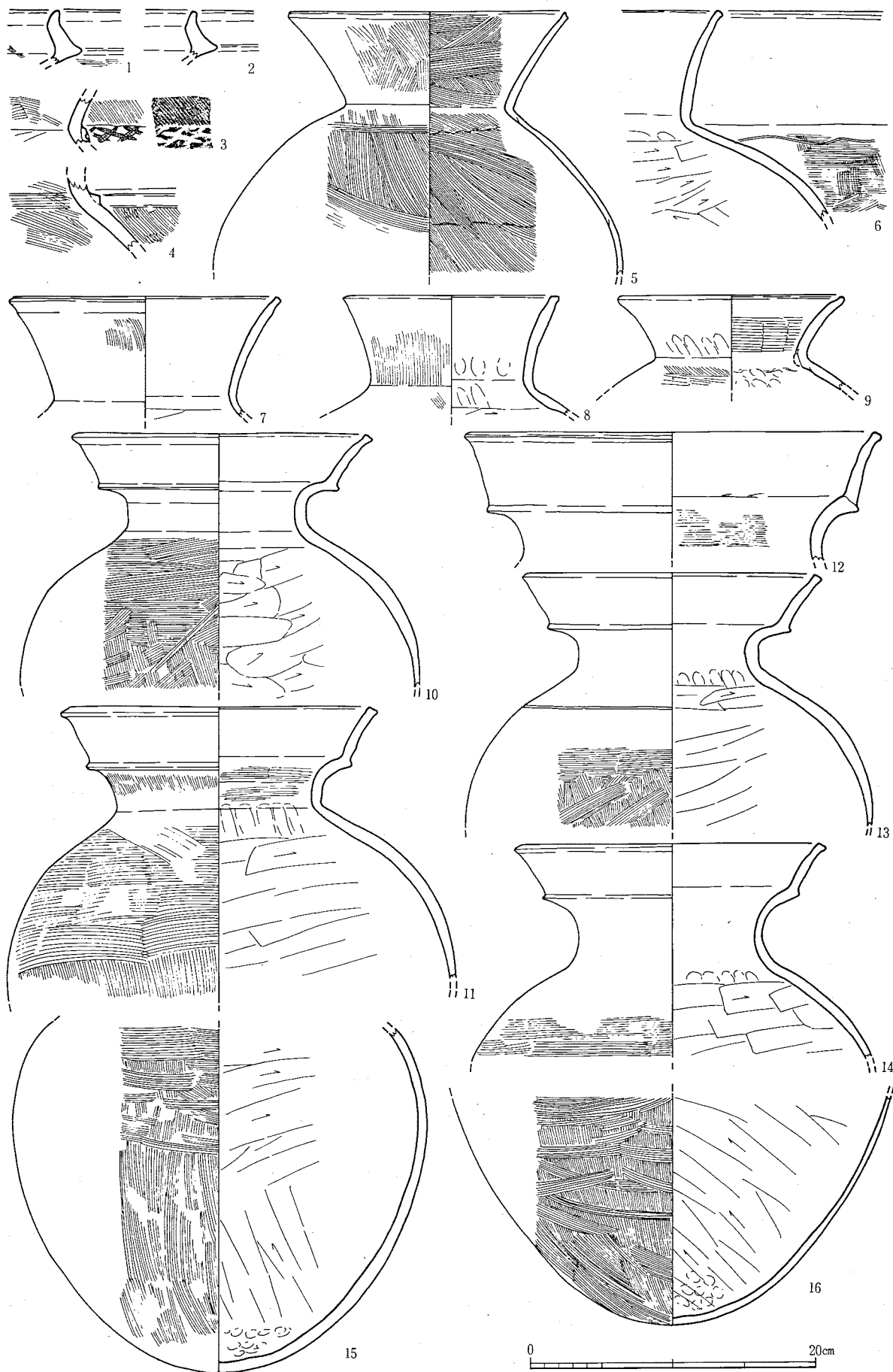
3西拡張区の南壁際にあり、137・167・170号竪穴住居跡を切ると考えて発掘した。137号住居跡との切合いは不確かであったが、他との切合いはほぼ確実である。北東隅がわずかに攪乱を被ると南西隅が調査区外になって検出できていないことをのぞけば、ほぼ良好な形で住居全体を発掘することができた。規模は比較的大きく、東西5.9m、南北4.2mの整った長方形をしている。中央やや南で炉跡を検出し、床面で多数のピットがあるが、いずれも浅く主柱穴と断定できるものはない。覆土は西南の壁際に暗黒褐色が堆積し、その他は灰褐色細砂であった。

出土土器（図版123、第313図） 1は在地系直口壺口縁部片で、頸部片の2はあるいは同一個体か。1は内外ハケ仕上で、口縁部外面にはタタキがかすかに残る。口縁端部は内面に拡張し面をなし、端部にもかすかなタタキが残る。灰黄褐色。2は胴部外面タタキ後ハケメ、内面ハケメで仕上げ、頸部に頂部にハケメ工具刺突による断面三角形刻目突帯文を貼付する。淡黄褐色が主体であるが、一部に化粧土によるのか橙褐色の部分がある。3・4は在地系壺胴部片で、3は高い断面コ字状突帯、4はハケメ工具刺突による断面三角形突帯を貼付する。いずれも灰黄褐色。5は中形の在地系直口壺か。胴部内面はハケ後板ナデで、灰黄褐色を呈する。6は口縁がかなり外傾するが、在地系直口壺か。生地は黄褐色であるが、橙褐色の化粧土を施している。7は口縁部の短い小形丸底壺。胴部外面ハケメ、胴部内面ケズリ後、口縁部内外を中心に横ミガキを施す。焼成が悪いためか、暗褐色を呈する。8・9は山陰系の小形丸底壺である。いずれも胴部外面ハケメ、胴部内面ケズリで、灰黄褐色～淡黄褐色を呈する。

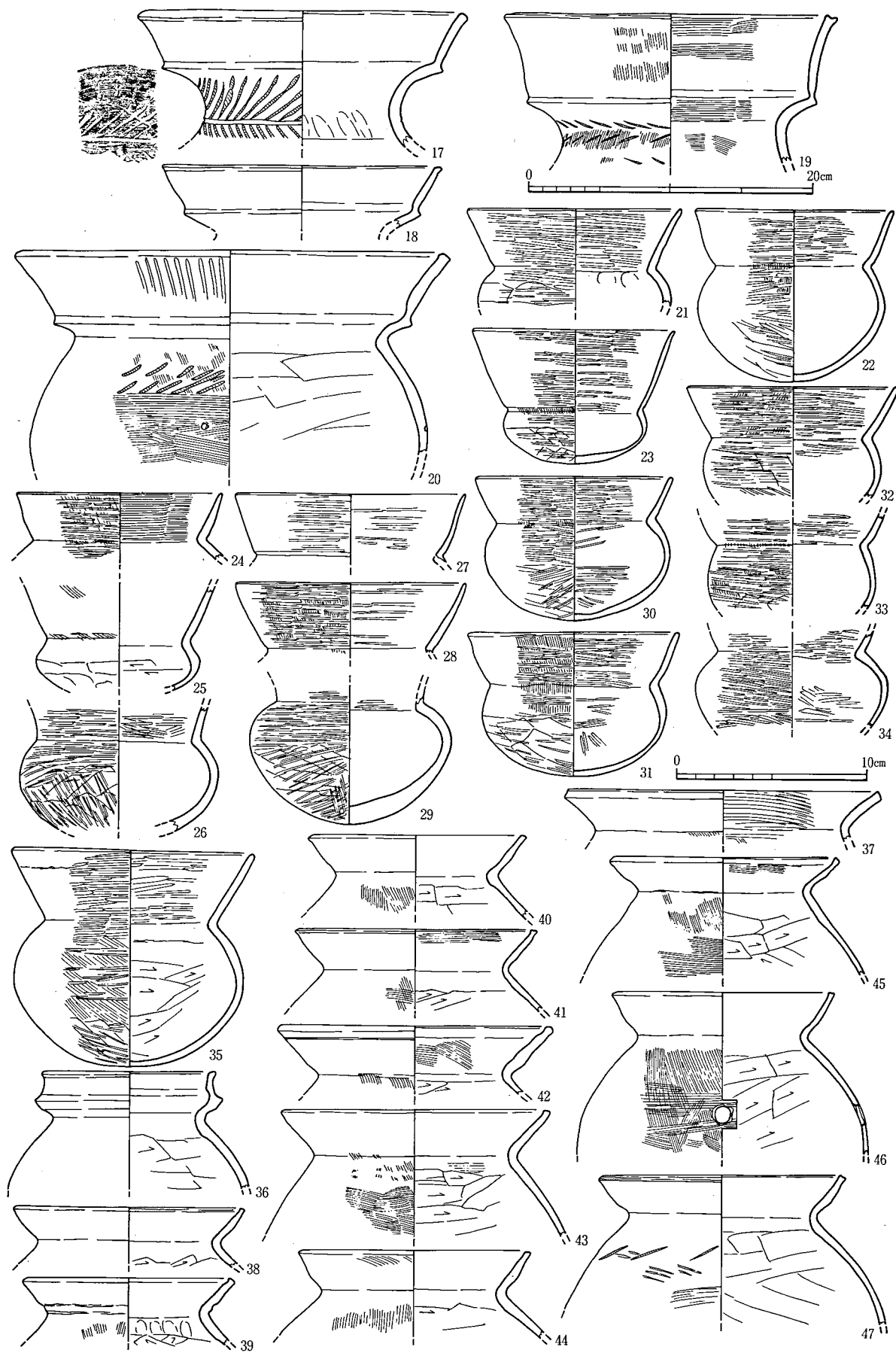
10～17は布留系甕。口縁部はわずかに内湾気味のもの（13・16・17）と直線的に外反するものがある。口縁端部は丸みを帯びるものが多いが、14は内側に、10・15は外側に丸く肥厚させ、17は内上方に拡張気味である。10は強い横ナデにより凹凸の巡る口縁部が特徴的であり、17は口縁部と頸部の境界の外面に強いナデによる稜が立つ。12が暗灰褐色を呈する他は、灰黄褐色～淡黄褐色である。13～15・17は外面全体に煤が付着し、14は内面全体にコゲも観察される。

18は内外横ミガキ後、内面に暗文風ミガキの精製高杯の口縁部。橙褐色を呈する。19は口径が大きく杯部の深い高杯口縁部で、おそらく在地系か。外面ハケ後横ミガキと思われるが摩滅が顕著で、内面は縦ミガキ。灰黄褐色を呈する。

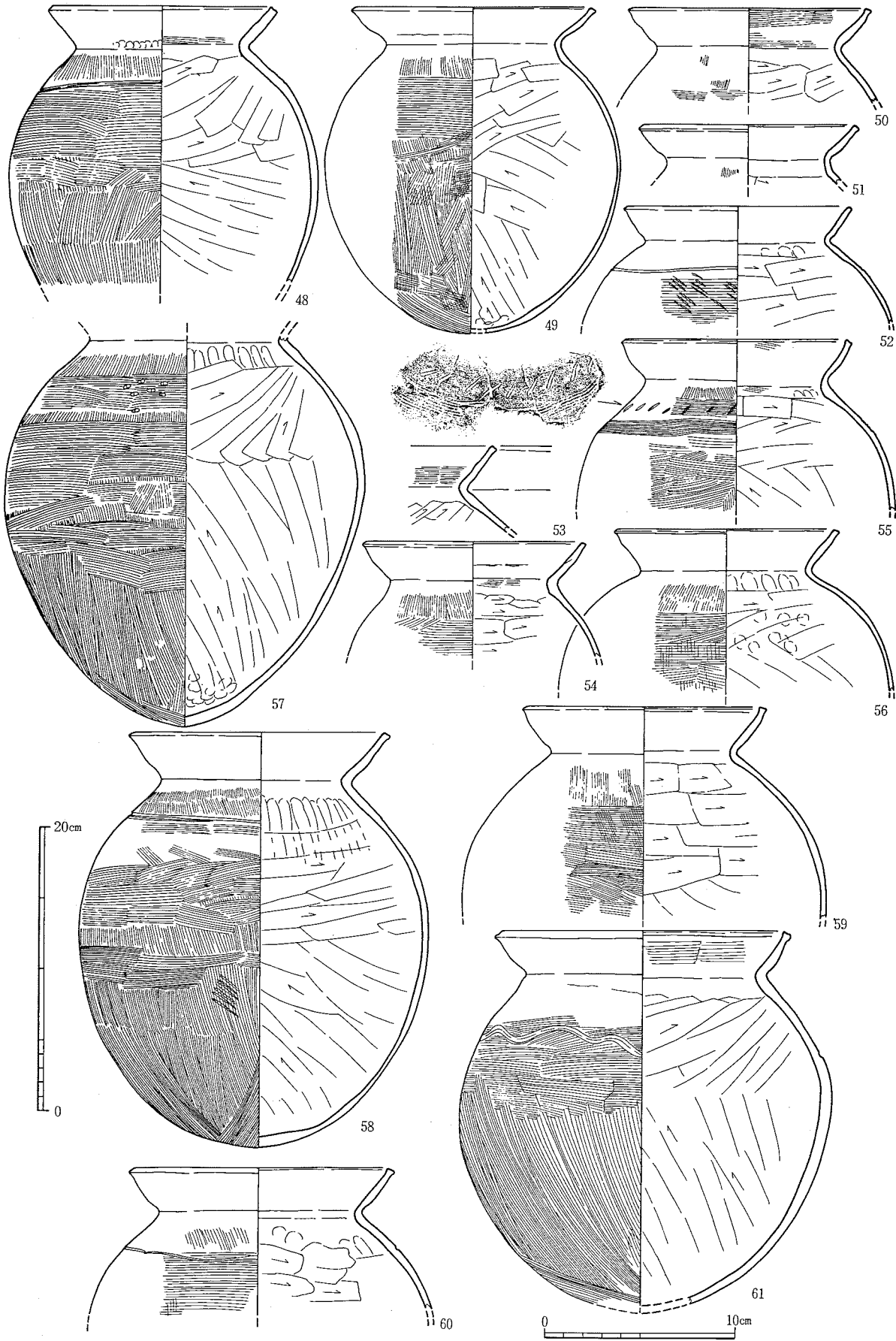
20・21は外反口縁鉢である。20は外面横ミガキ、内面摩滅するがミガキ仕上げと思われ、生地は



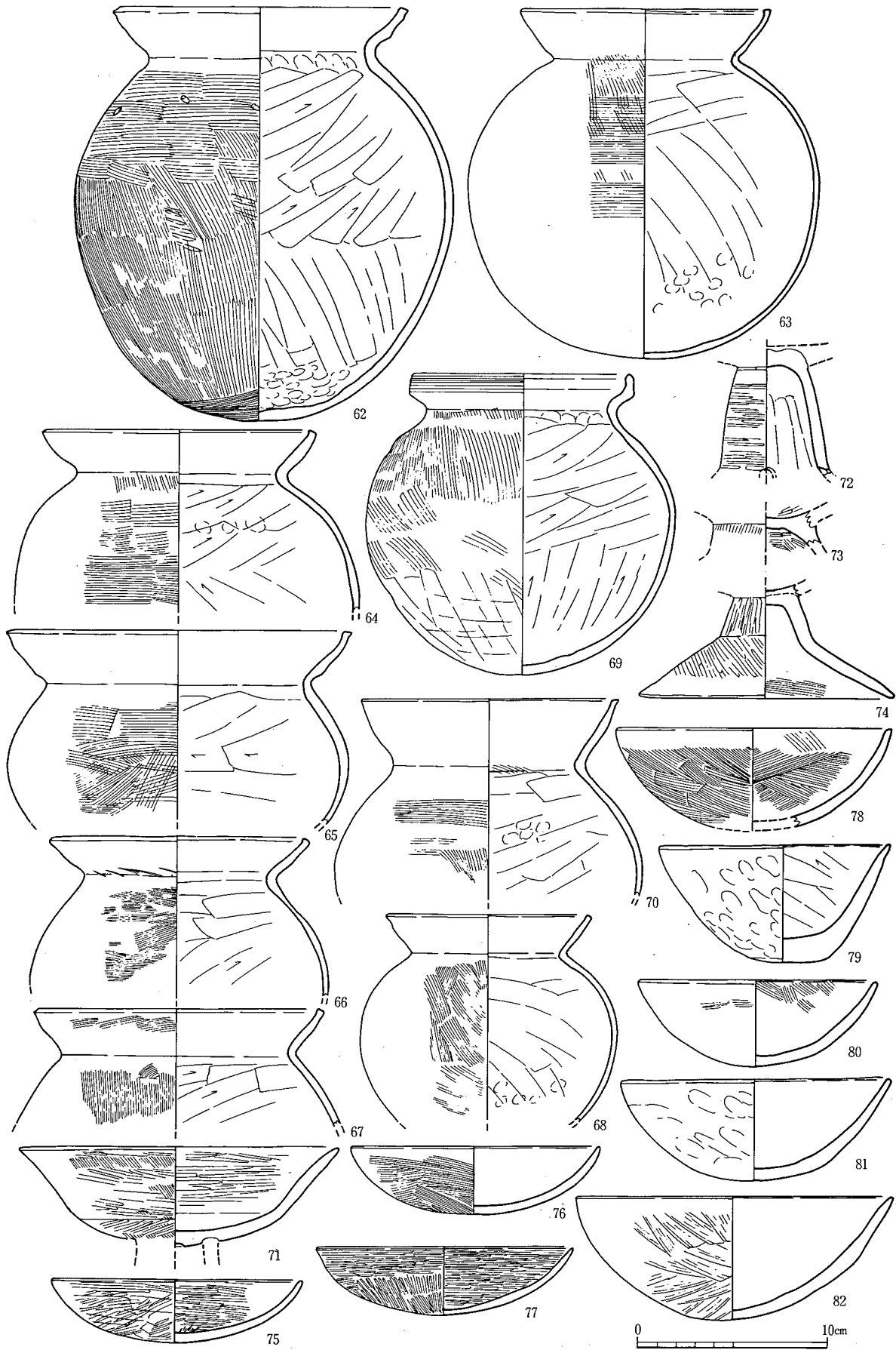
第315图 139号竖穴住居跡出土土器实测图(1)(1/4)



第316図 139号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (37~47は1/4、他は1/3)



第317図 139号竪穴住居跡出土土器実測図(3)(60・61は1/3、他は1/4)



第318图 139号竖穴住居跡出土土器実測図(4)(1/3)

黄褐色を呈するが、淡橙褐色の化粧土を施している。21は外面が口縁部指圧痕、頸部ハケメ後、全体にミガキを施し、内面は摩滅するが、口縁部に横ハケが残る。橙褐色。22・23は単口縁鉢である。22は内面ケズリ後内外をミガキで仕上げた半精製品であるのに対して、23は内外粗いナデで仕上げた手捏ね風の粗製品。いずれも淡黄褐色を呈する。

24は橙褐色の小形精製器台脚部片。内外ハケで整形後、外面横ミガキ、内面ナデで仕上げる。(重藤)

139号竪穴住居跡 (図版53・54、第314図)

3 西拡張区の南中央にあって、138号竪穴住居跡の北西に位置する。134号竪穴住居跡に西壁を切られ、140・146・170号竪穴住居跡を切るが、切合関係は問題ないように思われた。東壁の一部を攪乱に壊されるほかはほぼ全形をとどめており、長軸4.0m、短軸3.4mの比較的小形の竪穴住居跡で、壁は50cm以上の高さが残存している。床面のほぼ中央に炉跡があり、その東西にある小穴が支柱穴と推測される。覆土中から極めて多量の土器が出土し、良好な一括遺物と評価できる。覆土は暗褐色細砂が主体。土器の他に砥石(第379図14)が出土。

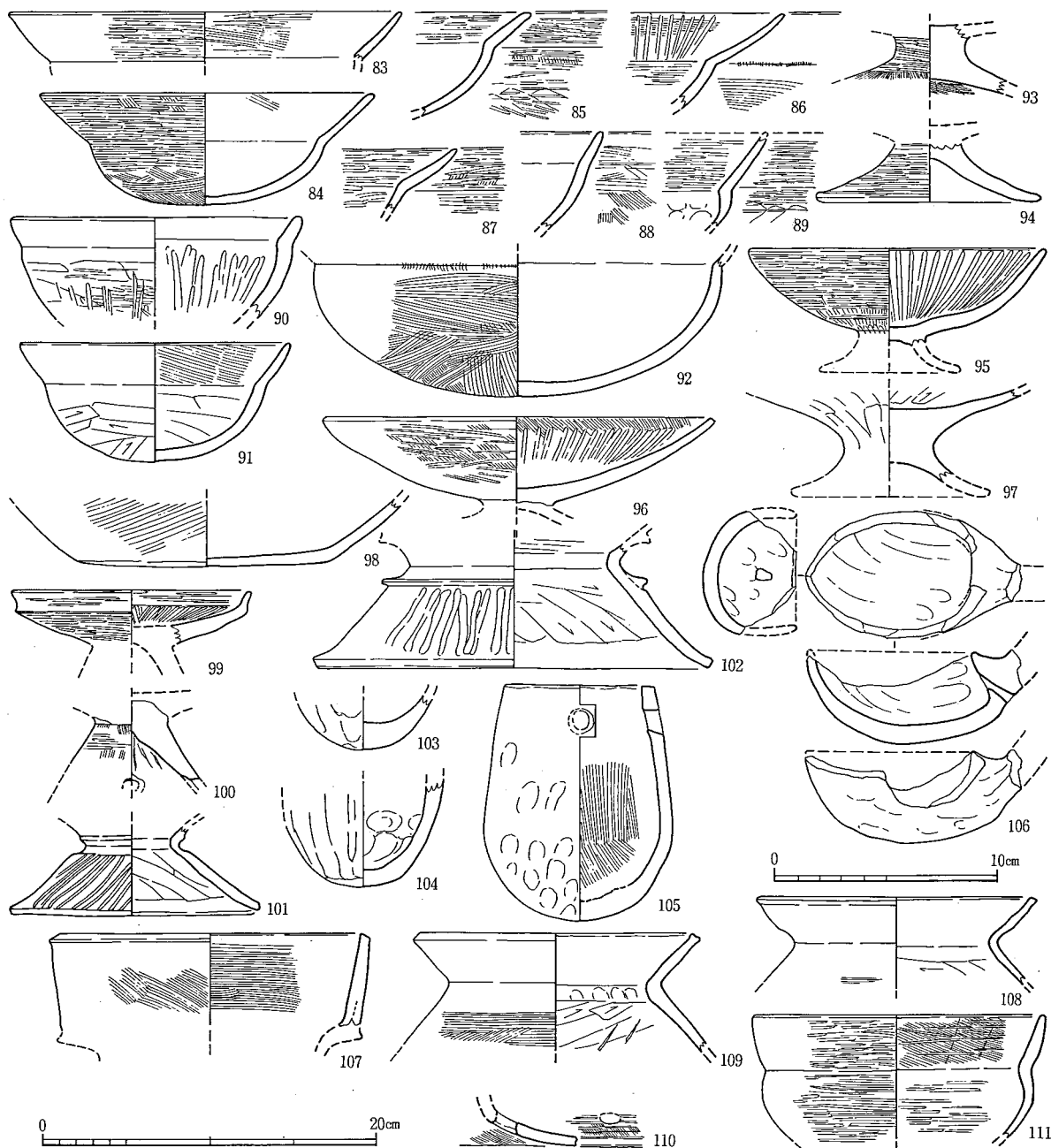
出土土器 (図版123・124、第315～319図) 1・2は在地系複合口縁壺。口縁部の伸びが短く、他の住居出土土器に比べると古相であり、混入品と考えられる。いずれも化粧土のために褐色を呈する。3・4は在地系壺頸部で、いずれも比較的大形の器形と思われる。3は頸部外面には低い断面コ字状で、頂部にハケメ工具小口刺突による交差刻目文を施した突帯を巡らす。4は頸部に断面三角形突帯を巡らす。3は黄褐色、4は黄橙色を呈する。

5～9は畿内系の直口壺で、暗黄褐色の5以外は淡黄褐色。5は内外ハケメ仕上げで、口縁端部がわずかに凹んだ直立に近い面をなしている点で、6～9より古い傾向が看取できる。6は肩部に波状沈線を巡らす。9は肩部外面に粗いミガキを施し、頸部内面に接合痕が残る。

10～14・17～19はやや大形の山陰系二重口縁壺で、大形の壺底部片15・16はこれらの底部か。いずれも白黄褐色～淡黄褐色を呈す。11は頸部が短く、内外にハケメを残し、器表の歪みが著しい。口縁内面～肩部に黄白色化粧土を施し、外面肩部ではハケメを斜めにナデ消したような効果を出している。12は生地の色は他と共通するが、外面に化粧土あるいは丹塗が残るため器表は橙褐色を呈す。13は肩部に沈線を巡らす。15・16の外面調整は縦ハケ後横斜めハケ。17・19は頸部外面にハケメ工具小口刺突の綾杉文を施し、17は直線沈線文後ハケメ工具刺突の順番が確認できる。20は頸部が短く、口縁が大きく開いた灰黄褐色中形の山陰系二重口縁壺。肩部外面にやや不規則な斜行ハケメ工具刺突文を巡らし、その下に1ヶ所棒状工具刺突の凹みが見られる。口縁外面は縦ミガキ。

21～35は小形丸底壺。25以外は外面ミガキ調整で、そのうち21～23・26・29～35は胴下部外面にミガキ前ケズリ、22～24・28・30～34は胴上部～口縁部のミガキ前ハケメが残る。25は胴下半ケズリ、口縁～胴上半ハケ後ナデ。口縁部内面はハケメ仕上げの24、ナデ仕上げの25以外はミガキで、30・31・34は胴部まで及ぶ。胴部内面はミガキが見えるものを除くと、ケズリ(25・35)とナデ(21～23・26・29)に分かれる。これら小形丸底壺は淡黄褐色の25・32、暗褐色の31以外は淡黄褐色～淡橙色。36は淡黄褐色の小形山陰系二重口縁壺で外面～頸部内面ナデ。

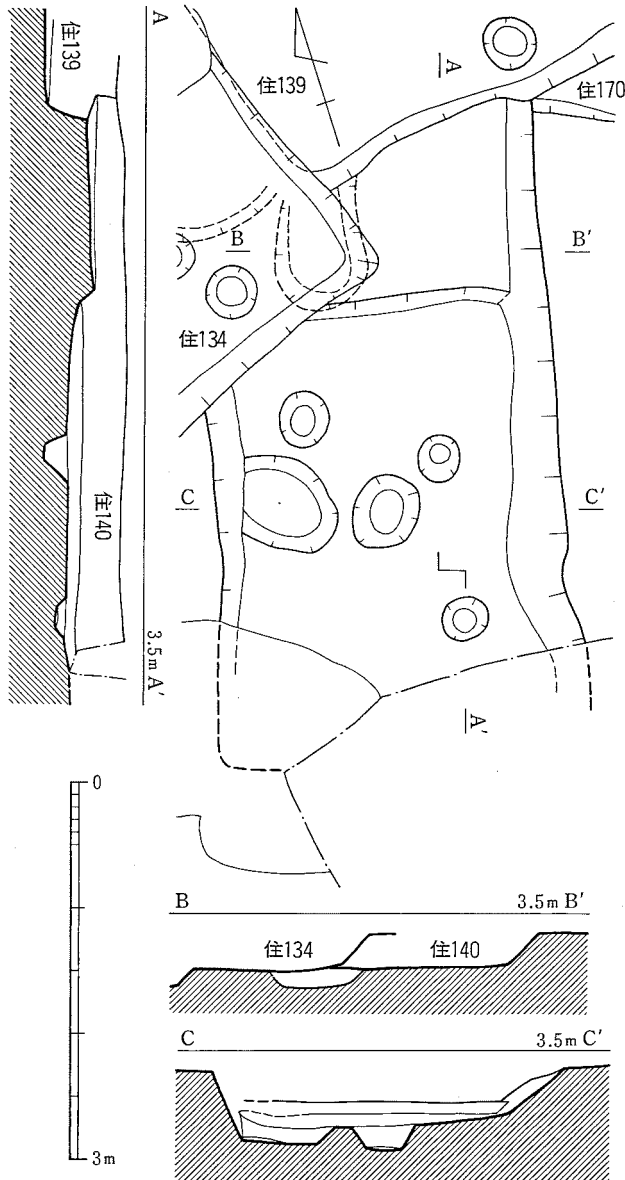
37は在地系甕口縁部か。淡黄褐色を呈し、外面ほぼ全体に煤が付着する。38～68は布留系甕。口縁は直線的に外傾するものとわずかに内湾するもの(45・46・51・54・55・62・63・65)に大きく分かれる。口縁端部は角張るもの(40・45・47～49・58・62など)が多く、内外にかすかに拡張気



第319図 139号竪穴住居跡出土土器実測図(5) (107・108は1/4、他は1/3)

味のものもその中に含まれる。このほかに39・41・46・50・55・59・61・63・64・66は内ないしは上方につまみ出し気味である。65は外側に拡張し、口縁端部近くを上方に強く内湾させている。肩部文様は47斜行ハケメ工具刺突文、48・52・60直線沈線文、55は5条の櫛描直線文と斜行沈線文、57は棒状工具刺突雨粒状列点文(残存部に1ヶ所)、58は2条の櫛描直線文、61は4条の櫛描波状文。62は棒状工具列点文(全周で11ヶ所)を施文している。

39は口縁外面に条痕があり、タタキ痕か。44は口縁外面にハケメがかすかに残る。47は肩部外面を左上がり粗いタタキ後横方向の板ナデ条痕で仕上げる。48は口縁外面下部に指押さえが残り、胴部のハケメは頸部縦ハケ、肩部横ハケ、胴下部縦ハケの順のように見える。これに対して49・58は胴下部縦ハケを肩部横ハケが切っている。52は肩部外面に左上がり粗いタタキ。54は口縁部内面に皺が巡り、接合痕か。56・58の内面ケズリは肩部が浅く、ナデ上げ痕跡、指圧痕がそれぞれ残って



第320図 140号竪穴住居跡実測図 (1/60)

内外を太いミガキを施し、淡黄褐色。72は外面ミガキ、内面仕上げで橙褐色。73は脚内外ハケメ、杯部内面ミガキで、橙白色を呈する。74は比較的低脚で、脚裾が大きく広がる。外面はやや太いミガキで、内面はハケメの残る脚裾以外はナデ調整。淡黄褐色。

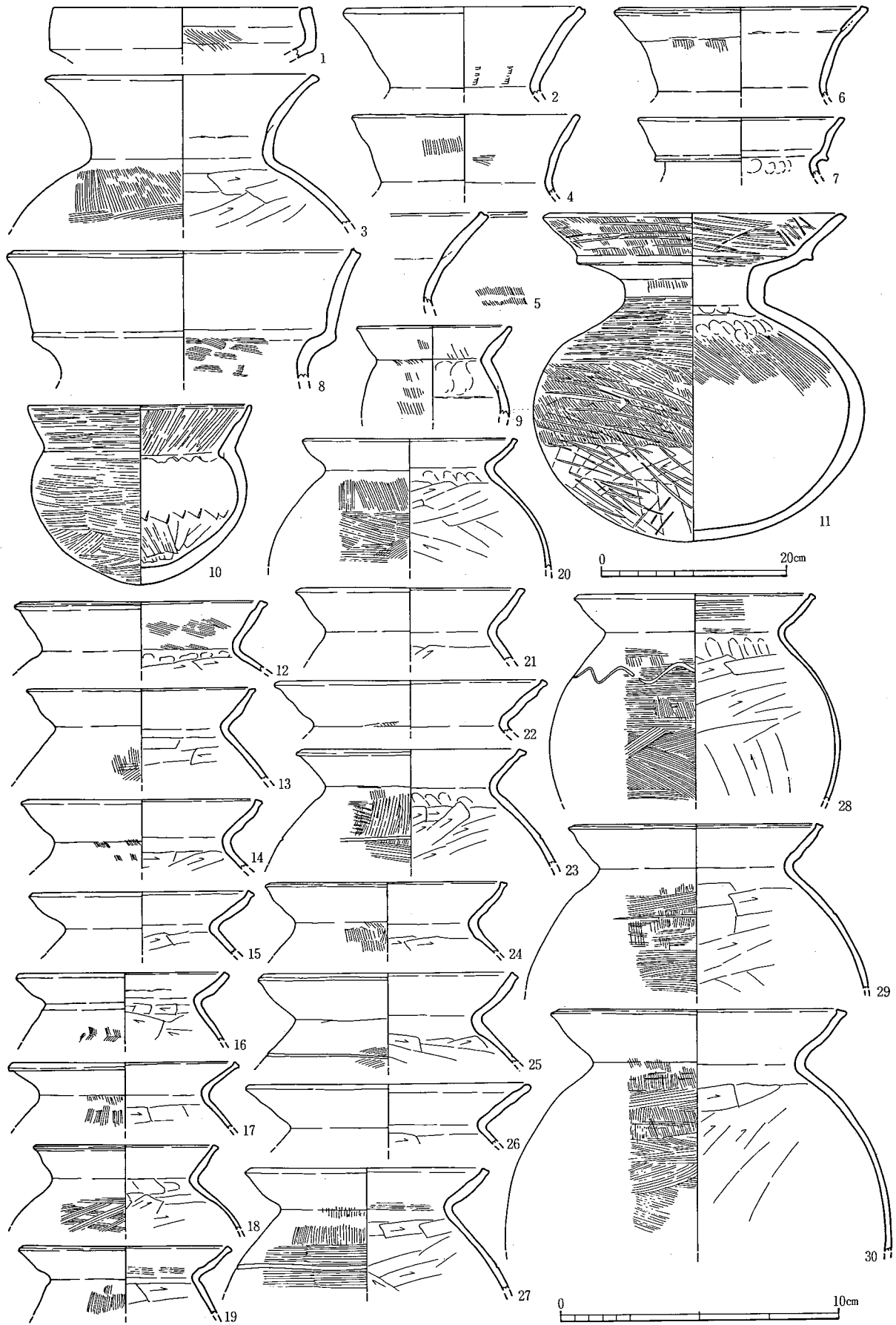
75~82は単口縁鉢である。75・77は橙褐色、内外ミガキ仕上げの精製品で、75外面にはミガキ前のケズリが残る。76は外面ハケメ、内面ナデで淡黄褐色。淡黄褐色の78は内外ハケ調整。79・81は外面に指圧痕を残す粗い調整で、いずれも白黄褐色。79は内面ケズリ。80は外面板ナデ、内面ハケメ後ナデで淡黄褐色。82は橙褐色であるが、外面板ナデ、内面ナデの粗製品。

83~92は外反口縁鉢。83~85・87・89は外面ミガキ仕上げの精製品で、85・89は胴下部にケズリ痕、84はハケメが残る。85・87・89は口縁内面ミガキ、84はハケメ。これらは淡黄褐色の84を除けば橙褐色~淡黄褐色を呈する。86は胴部外面ハケメ、口縁外面摩滅、口縁部内面横ハケ後縦ミガキ、胴部内面ミガキ調整。白橙色を呈し、内面に煤が付着する。88・89は口縁部が短く、ともに淡黄褐色を呈する。88は外面ハケメ、内面ナデ調整、90は胴部外面ケズリ後ミガキ、胴部内面ミガキ。91

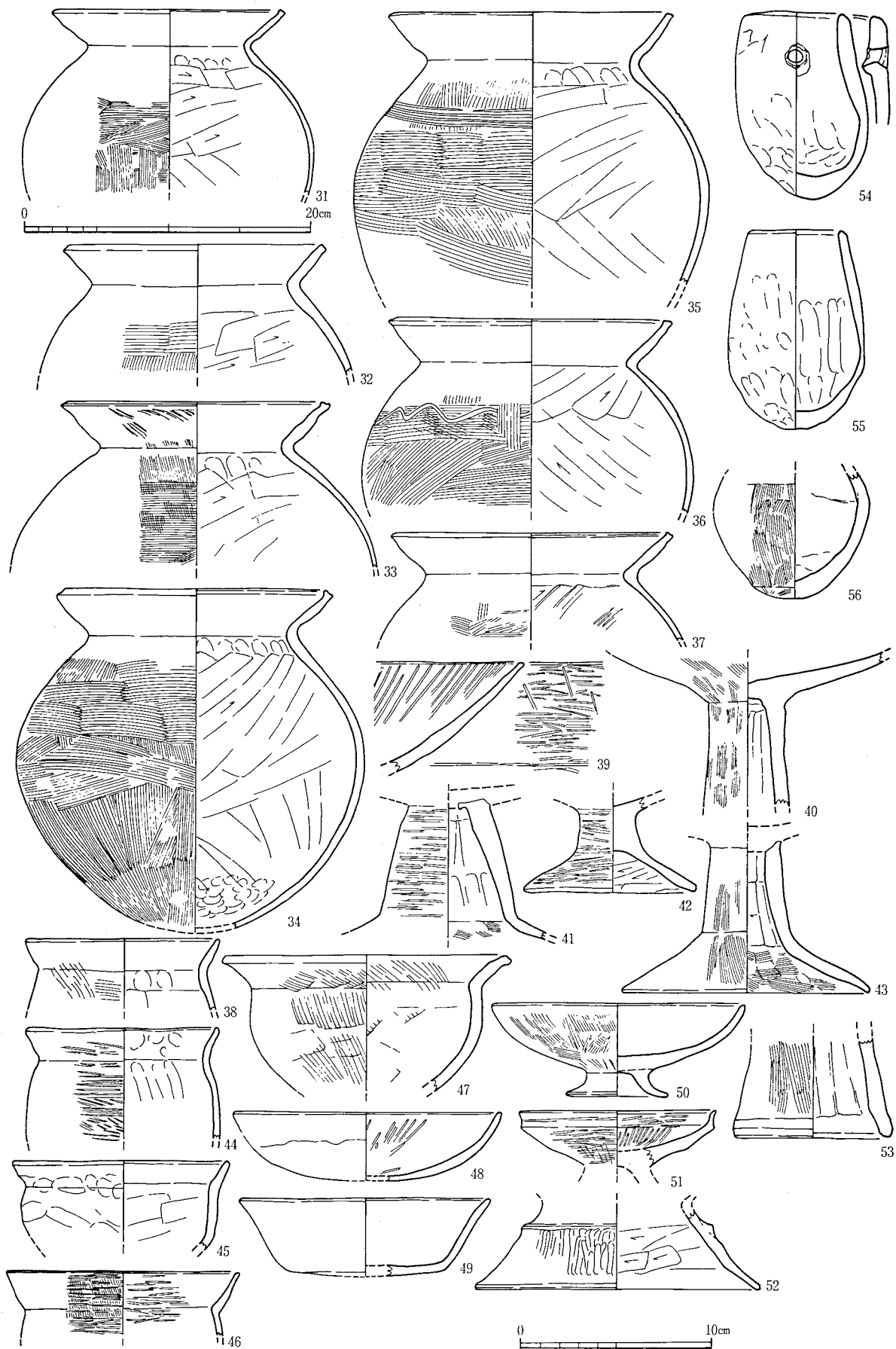
いる。58は底部が厚く、内面胴部・底部境に凹みがめぐっている。61は胴下部縦ハケが確実に肩部横ハケを切っている。62は完形で均整のとれた器形をなすが、外面は縦ハケ後横ハケで、縦ハケ部には先行する斜めタタキが残る。63は傾きがやや不安であるが、球形に近い胴部になることは間違いない。66は口縁外面下部に皺が残っている。68は口径10.8cmとやや小形で、肩部横ハケを省略したのか外面縦ハケ仕上げ。これらの布留系甕は淡褐灰色の50、淡黄橙色の53、淡橙褐色の52・67、褐黄色の62、淡褐色の68を除くと淡黄褐色~白黄褐色~灰黄褐色を呈する。43・50は胴外面全体、49・62は口縁外面と胴中下部外面、59・63・65は胴下部のみに煤が付着。

69は直立する口縁外面にハケメ状工具による条痕を巡らした二重口縁甕で、吉備系か。口縁外面条痕は上から見ると反時計回りに1度で施文されていることが確認できた。淡黄褐色を呈し、胴上部に厚い煤の付着、胴下部にかすかな二次加熱が観察できる。70は口縁の伸びが長く、壺との区別が難しいが、とりあえず甕と考えた。淡黄褐色。

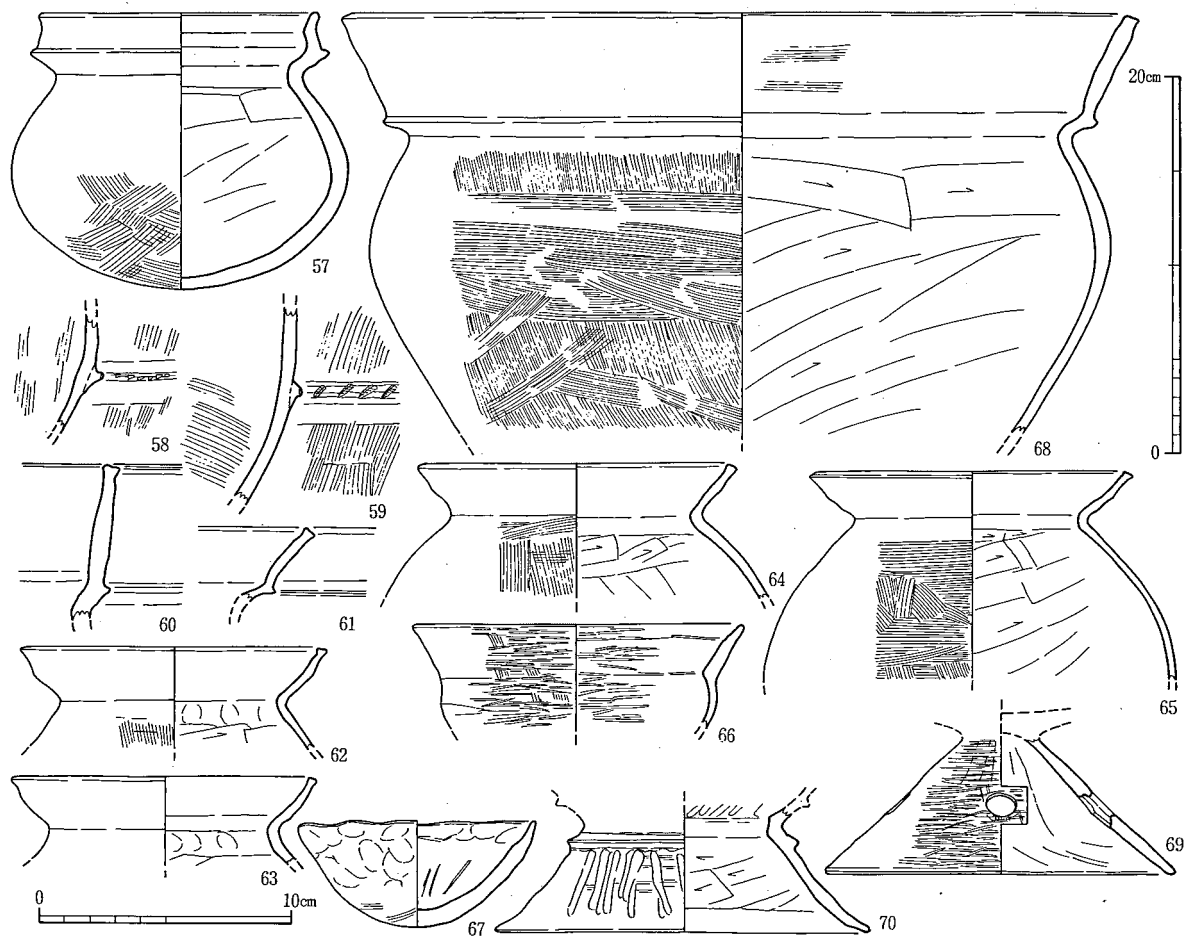
71は高杯杯部片、72~74は高杯脚部片である。72は杯底部に軸受け痕が残り、充填法で脚部と接合したと考えられる。外面縦ハケ後



第321図 140号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (9~11は1/3、他は1/4)



第322図 140号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (31・53は1/4、他は1/3)



第323図 140号竪穴住居跡出土土器実測図(3) (58~65・68は1/4、他は1/3)

は胴部内外ケズリ、口縁外面ナデ、内面ハケメ調整で、淡黄褐色を呈する粗製品。92は口縁部を欠損するが単口縁となるか。外面ハケメ、内面ナデ仕上げで、淡黄褐色を呈する粗製品。

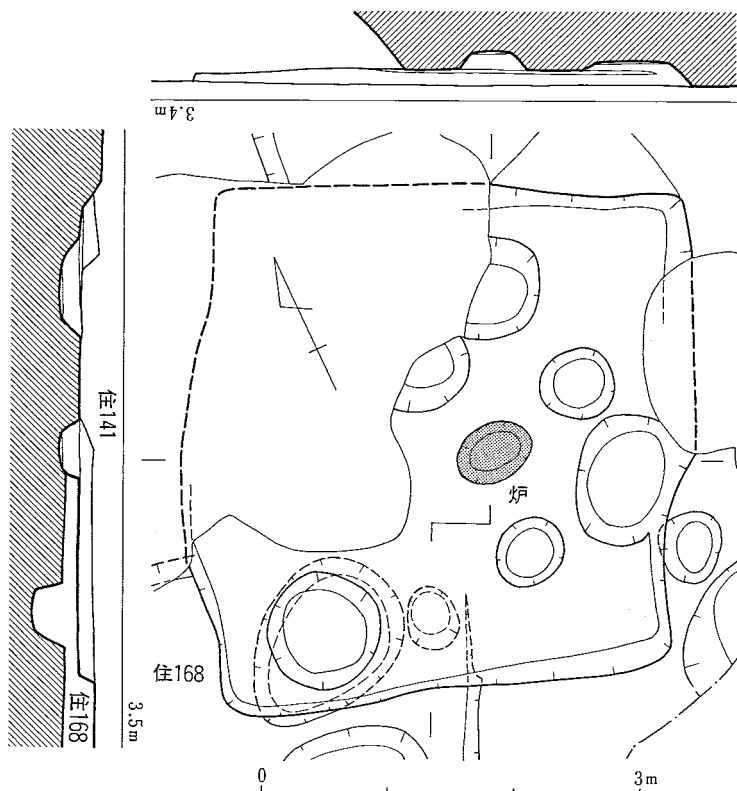
93~97は脚付鉢。93・94は外面ミガキ仕上げの精製品でともに橙褐色を呈する。93はミガキ前のハケメを残し、内面はハケメ仕上げ。黄褐色の95は外面ハケメ後横ミガキ、内面暗文風縦ミガキ。96は内外斜めハケ後外面横ミガキ、内面暗文風縦ミガキ仕上げ。淡黄褐色を呈する。97は内外板ナデ調整で、白黄褐色。98は平底の底部片で山陰系二重口縁鉢になるか。淡黄褐色。

99は畿内系小形精製器台受部片、100は同脚部片で、いずれも橙褐色。99は外面~口縁内面横ミガキ、受部内面放射状ミガキ。100は外面縦ハケ後横ミガキ、内面絞り痕。101・102は山陰系鼓形器台裾部片で、101は淡黄褐色、102は淡橙褐色。いずれも外面暗文風の縦ミガキ、内面ケズリ。

103~105は蛸壺である。106は土製杓子片で内外ナデ仕上げ、淡黄褐色。柄の接合部下に貫通する穿孔がある。

107~111は139・140号竪穴住居跡上面および139号住居跡付近遺構面からの出土品。107は山陰系二重口縁壺で、内外ハケメ仕上げ。褐色で、内面に煤が付着する。108・109は布留系甕で、淡黄褐色~白黄褐色。109内面にはケズリを切る斜めの工具痕が残る。110は高杯脚裾部片で内外ハケメ後外面横ミガキ。111は外反口縁鉢で橙褐色を呈する。口縁部内面ハケメ後内外横ミガキ。(重藤)

140号竪穴住居跡 (図版54、第320図)

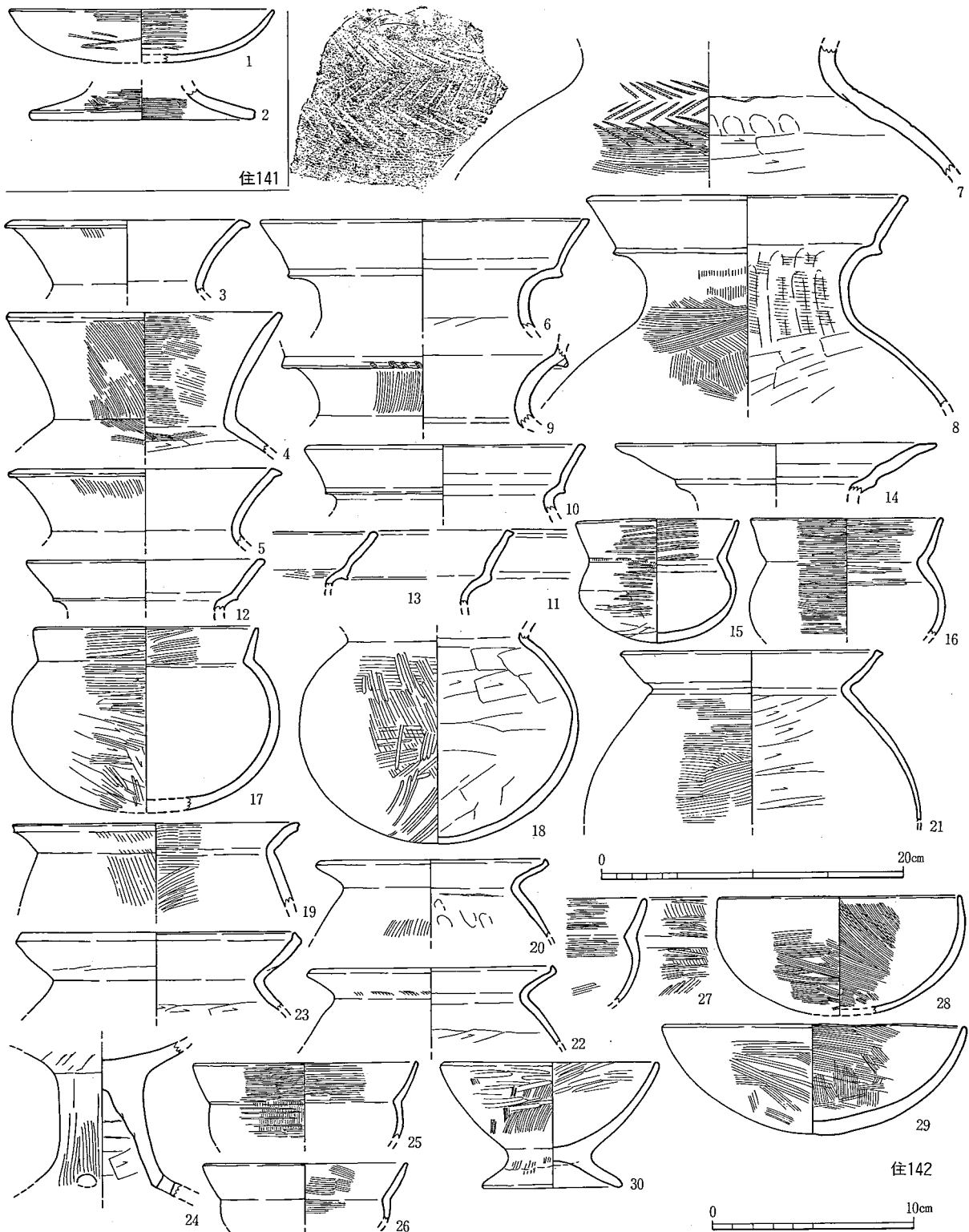


第324図 141号竪穴住居跡実測図 (1/60)

3 西拡張区の南部にあり、北側を134・139号竪穴住居跡に切られている。南は攪乱を被るとともに、東南部は調査区外になるので、遺構の残存状況は良くない。現状では南北5.0m以上、東西2.9mの南北に比較的長い平面形を呈している。ただ、北側には10cm程の段があるので、複数の竪穴住居跡が切合っていたか、あるいは平面形を間違っただけかもしれない。134・139号住居跡との切合いも不安である。覆土は褐色細砂が主体である。土器の他の遺物として鉄鎌(第376図8)、用途不明石器(第379図17)、140・141号付近出土の砥石(第379図16)、石槌(第379図20)がある。出土土器(図版124・125、第321

～323図) 1は在地系複合口縁壺で、口縁部は直立する。屈曲部内面にハケメが残り、白黄褐色を呈する。2～6は畿内系直口壺である。いずれも灰黄褐色～淡黄褐色を呈する。6は口縁端近くを内外に粘土を貼付し多少肥厚させた可能性がある。7・8は山陰系二重口縁壺でいずれも淡黄褐色を呈する。8は口縁部の伸びが長く頸部内面にハケメが残る。9は小形の壺で、外面ハケメ、内面ナデ仕上の粗製品。淡褐色が基調であったと思われるが、暗褐色に変色する部分が多い。10は黄褐色を呈する小形丸底壺で外面は口縁部横ミガキ、胴部板ナデに近い条痕の浅いハケメ仕上げ。口縁部内面は縦方向のミガキで、胴部内面は板ナデ仕上げである。頸部内面には粘土が垂れたように見受けられる。11は中形の畿内系二重口縁壺で、口縁部外面ハケ後横ミガキ、胴部外面は下部ヘラケズリ、上部ハケメ後ミガキを施す。口縁部内面は横ミガキ、頸部内面ナデ、胴部内面は上半ハケ、下部ナデ。生地は淡黄褐色であるが、橙褐色の化粧土を施す。

12～37は布留系甕。口縁部は直線的に外傾するもの(12・13・17～23・26・29・31～34)、わずかに内湾するもの(14～16・24・25・27・28・30・35・36)に大きく分かれる。口縁端部は丸く仕上げるものと、角張るものが多いが、外側につまみ出し気味のもの(12・17・23・35)、内上方につまみ出すもの(30・31・33・34・36)、内傾気味のもの(13)がある。35は肩部に櫛描直線文、28・36は波状沈線文、23・25・27・29は直線沈線文を巡らす。16は口縁内面に接合痕が巡る。23は胴部外面に縦ハケ前のタタキ痕が残り、30も同様の可能性がある。33は口縁部外面に整形時のものかと思われるタタキ痕がある。34・35は肩部横ハケが縦ハケを切っている様子が観察できる。36は肩部にハケメに先行するタタキ痕が残り、縦ハケが一部波状沈線文を切っている。37は胴部内面に斜め方向の工具痕が残る。黄褐色～橙褐色の20・21を除けば、他は灰黄褐色～白黄褐色～淡黄褐色を呈す。12・13・24は口縁外面に、21・28・30・34～36は外面全体に煤が付着し、34は外面下部が



第325図 141・142号竪穴住居跡出土土器実測図（3～11・19～22は1/4、他は1/3）
（1・2：住141、3～30は住142）

二次加熱を受けている。38は口径9.8cmの小形の甕で、外面ハケ、内面ケズリ。灰黄褐色。

39は高杯口縁部片、40～43は高杯脚部片。39は外面横ミガキ、内面暗文風斜めミガキで橙褐色を呈する。40は外面ハケ、内面ナデで明褐色を呈すもので、在地系か。43は破損状況から付加法で接合したと思われ、外面ハケ、脚部内面ケズリ、裾部内面ハケ。淡黄褐色を呈す。41は外面横ミガキ、内面脚柱部ナデ、脚裾部斜めハケで黄褐色。42は外面ミガキ、内面ケズリで橙褐色を呈する。

44は深い器形で甕との区別に悩むが、胴部内面ナデ仕上げであることから、鉢とした。外面ハケメ風の板ナデ。黄灰褐色を呈し、外面には煤が付着する。45～47は外反口縁の鉢である。45は深い器形で、外面ナデ、胴部内面ケズリ仕上げ。黄褐色を呈する粗製品である。46は外面ハケ後内外をミガキで仕上げた精製品。橙褐色。47は外面ケズリ後ハケ、口縁内面斜めハケ、胴部内面板ナデ仕上げ。淡黄褐色を呈する。48・49は淡口縁鉢。48は内外摩滅するが、外面下半ケズリ、内面ミガキか。黄橙色を呈する。49は平底に近く、調整は摩滅する。器形から見て、あるいは混入した奈良時代の土師器か。50は淡黄褐色の脚付鉢で、鉢部外面ハケ、内面摩滅。

51は淡橙褐色の畿内系小形精製器台片で、外面～口縁部内面横ミガキ、受部内面放射状ミガキ。52は淡黄褐色を呈する山陰系鼓形器台裾部で、端部を除き、外面縦ミガキ、内面ケズリ仕上げ。53は支脚で天地不安。外面ハケメ、内面ナデ。

57～69は140・141号竪穴住居跡付近の遺構面から出土したものである。57は小形の山陰系丸底壺。淡黄褐色を呈す。58・59は刻目突帯を貼付した在地系壺胴部片で、ともに灰黄褐色～淡黄褐色を呈する。59はハケメ工具により刻目を施す。60・61は山陰系二重口縁壺で、いずれも灰黄褐色。62～64は布留系甕で、いずれも淡黄褐色。66は橙褐色の外反口縁鉢で、外面を胴下部ケズリ、その他ハケメの後、内外ミガキ仕上げ。67は手握ね風の単口縁鉢。外底部にはハケメ状の条痕が残る。ほぼ完形で焼成は甘く、淡黄褐色。68は淡黄褐色の大形山陰系二重口縁鉢。69は畿内系の小形精製器台で、外面ミガキ、内面工具によるナデか。70は山陰系鼓形器台で、器形・調整とも52と類似するが、受部内面に縦ミガキが観察される。黄褐色。(重藤)

141号竪穴住居跡 (図版54、第324図)

3 西拡張区の南部にあり、140号竪穴住居跡の東に位置している。西北部と東壁中央部に攪乱があるうえに、南西部では168号竪穴住居跡と切合っており、外形は不明瞭であった。168号住居跡との切合いも心許ない。南壁と東壁はそれぞれ隅を検出しているのでそこから復元すると4.0m四方の正方形の平面プランとなる。床面中央やや東寄りで炉跡を検出しており住居跡であることは間違いない。覆土は褐黄色細砂・暗褐色細砂を多く混えた灰褐色細砂であった。

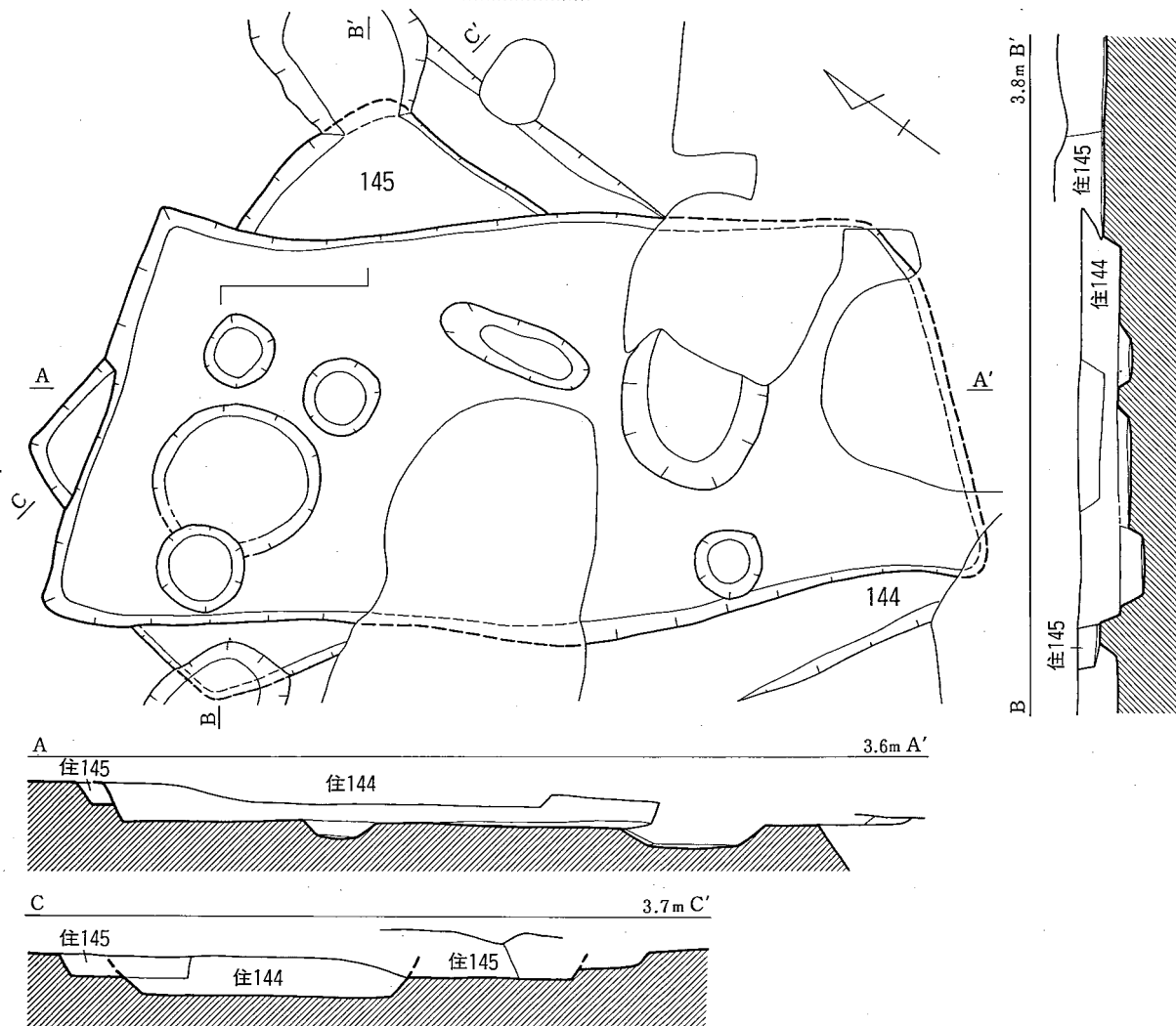
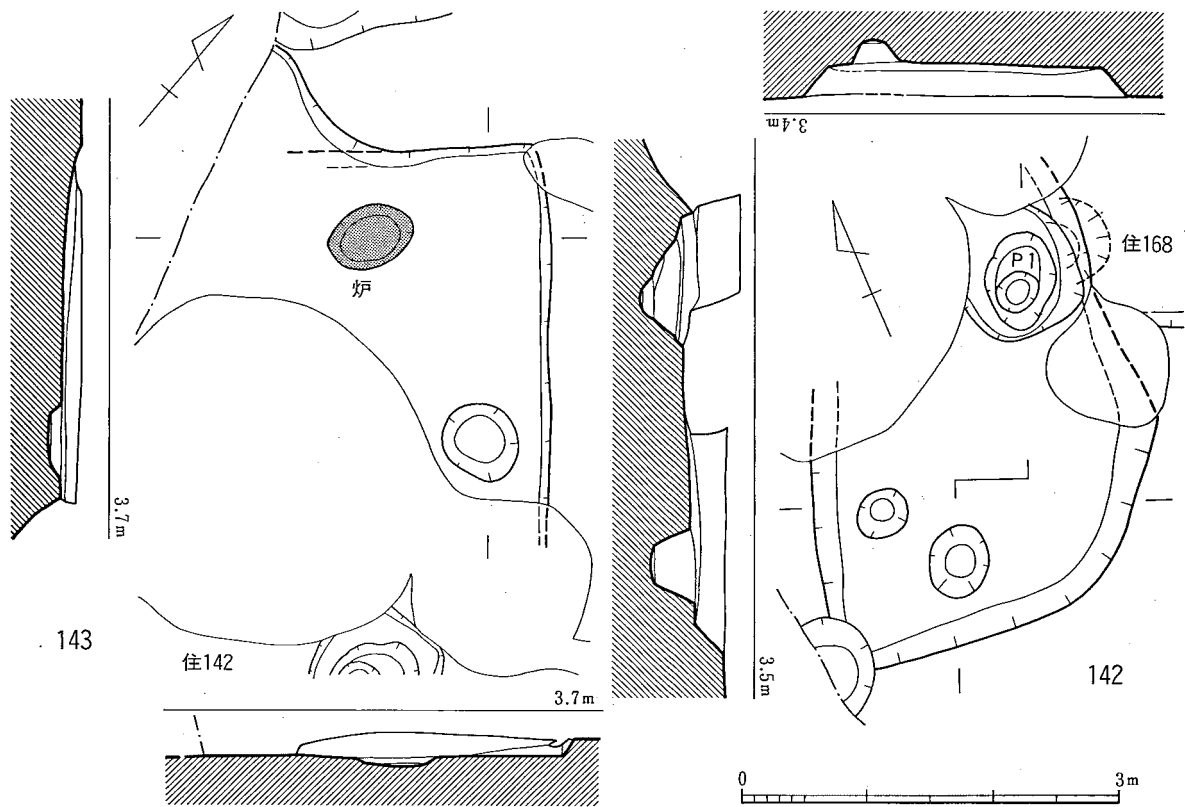
出土土器 (第325図1・2) 図示できる土器は2点のみ。1は内外ミガキ仕上げの精製単口縁鉢で、淡黄橙色を呈する。2は高杯脚裾片と思われ、外面ミガキ、内面ハケ仕上げ。橙褐色。(重藤)

142号竪穴住居跡 (図版55、第326図)

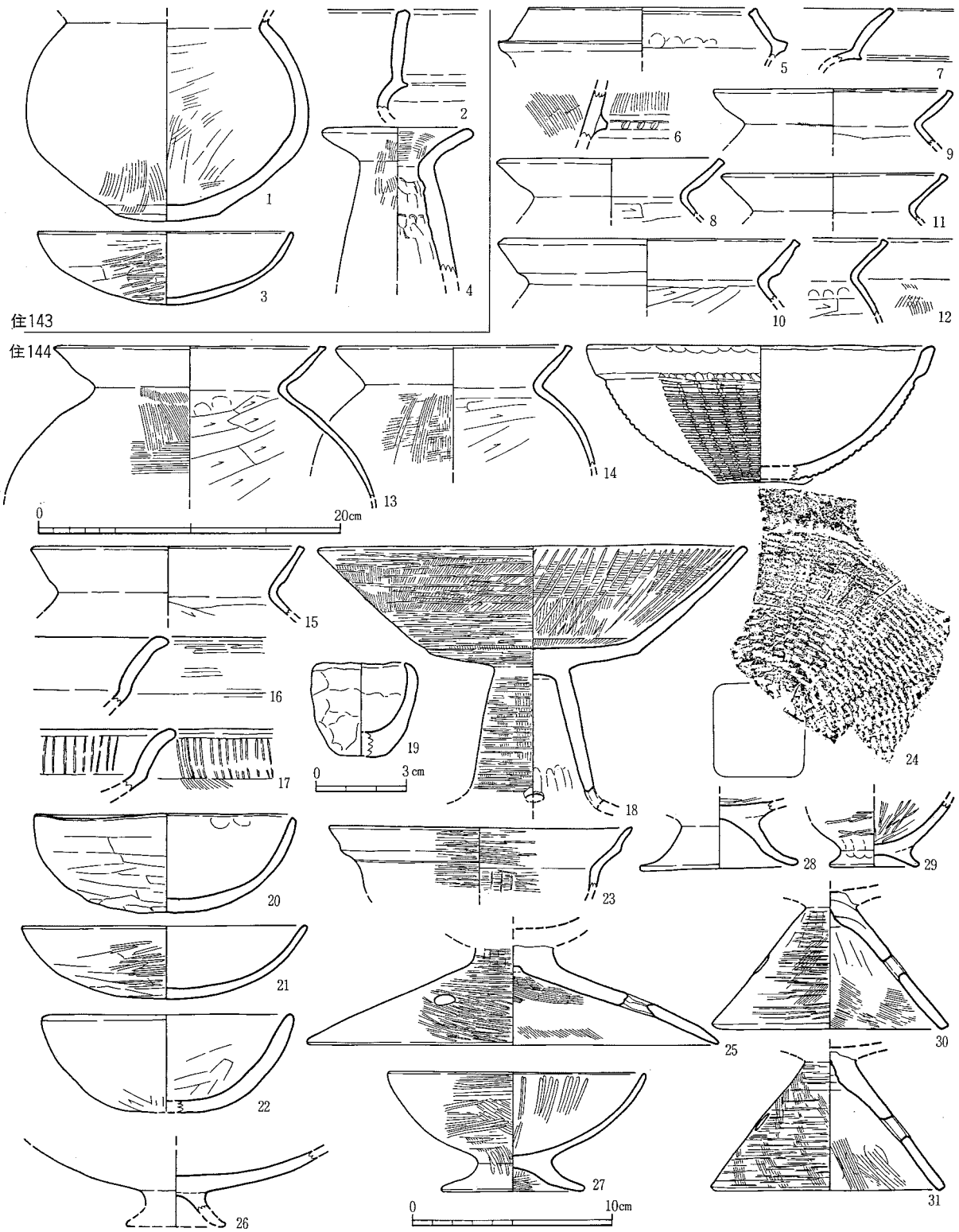
3 西拡張の南西隅で検出されたものであるが、平面プランもいびつで、炉跡も検出されていないことから、竪穴住居跡となるか不安が残る。143・168号竪穴住居跡と重なる位置にあるが、切合う部分が攪乱により破壊されるために、前後関係は確認できていない。出土遺物の一括性も不安である。覆土は黄褐色細砂を少し雑えた暗褐色細砂で、上面には暗灰褐色細砂が堆積していた。

出土土器 (図版125・126、第325図3～30) 5・12・13・17・19・23・25～28は覆土上層から出土し、本住居跡に帰属するかやや不安なもの。15・16・30はP1より出土したものである。

3～5は畿内系直口壺で、いずれも灰黄褐色～淡黄褐色を呈する。3・5の外側への口縁端部の拡張、4の口縁内面ハケメ仕上げが注意を引く。6～13は山陰系二重口縁壺としたものであるが、10は頸部が短いため甕としたほうが適当な感もあり、13は他と比べ器壁が薄いので、小形の器形と

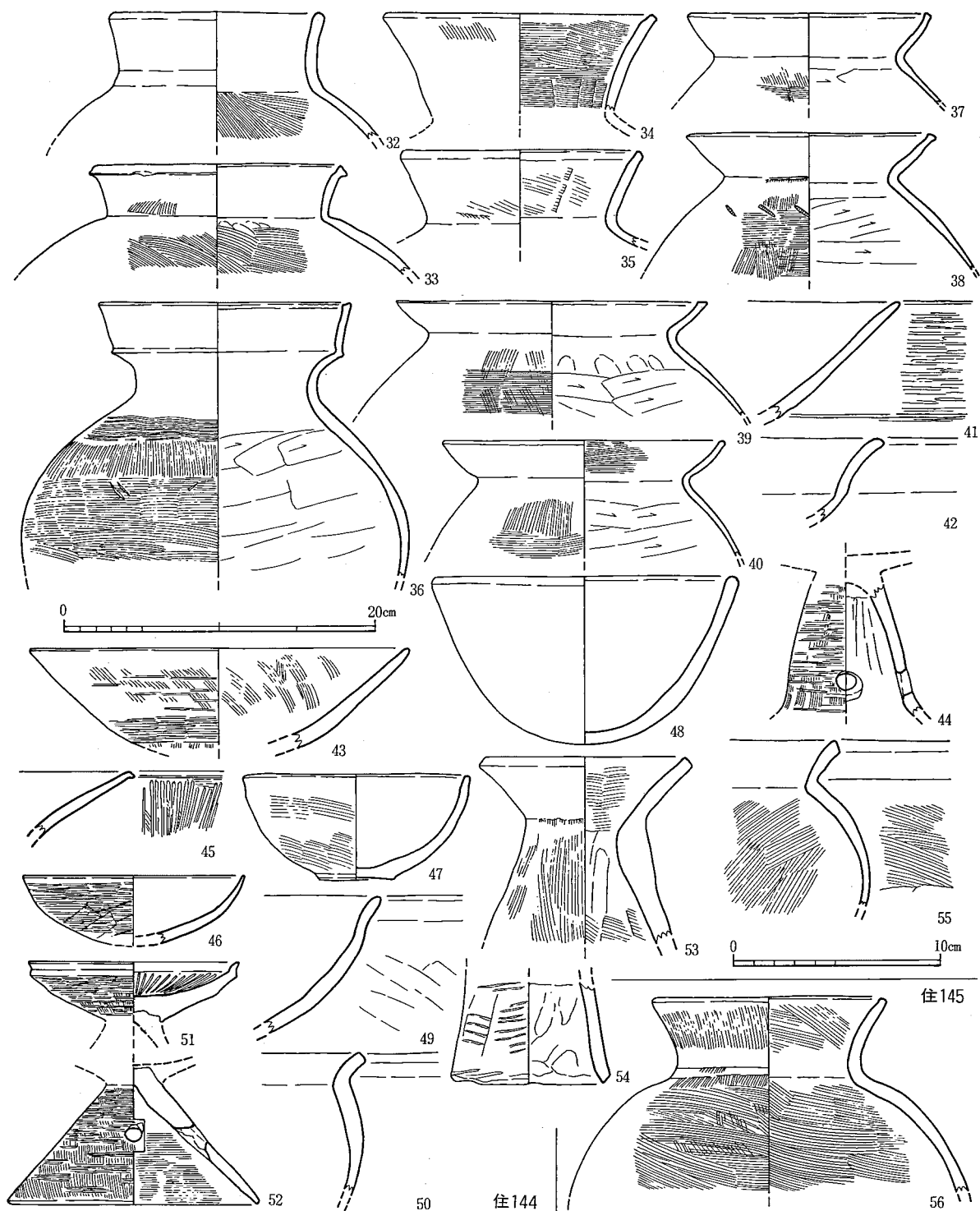


第326图 142~145号竖穴住居跡実测图 (1/60)



第327図 143・144(1)号竪穴住居跡出土土器実測図(19は1/2、2・4~15は1/4、他は1/3)
(1~4:住143、5~31:住144)

推測される。7は大形品で肩部外面にハケメ工具小口刺突の3段からなる綾杉文を施文し、9は擬口縁端部の外面にハケメ工具小口刺突の刻目文を施す。8は頸部内面をハケ後ナデ上げて仕上っている。橙褐色の9以外は白黄褐色~淡黄褐色を呈する。また、甕に近い形態とした10は外面に煤が付着している。14は畿内系二重口縁壺口縁部としてここに示したが、内外横ナデで仕上げるとともに白黄褐色を呈するので、山陰系鼓形器台となる可能性もある。15~17は精製の小形丸底壺で、い



第328図 144(2)・145号竪穴住居跡出土土器実測図(41~52は1/3、他は1/4)(32~55:住144、56:住145)

いずれも淡橙褐色。外面はミガキ仕上げで共通しているが、15・17は胴下部に先行するケズリ痕を残している。内面はいずれも胴部ナデであるが、15・16が口縁内面ミガキであるのに対して、17は口縁内面ハケメ。18は橙褐色の中形壺胴部片で、外面はハケ後粗いミガキ、内面はケズリ仕上げ。

19は外反する口縁に、直立する面をなした口縁端部の在地系甕。灰黄褐色を呈する。20~23は布留系甕。口縁部は直線的に外傾するもの(21・23)、強く外反するものに分かれ、端部を外に拡張気味の21を除けば、いずれも内上方につまみあげている。20の胴部残存部分には内面ケズリが観察されず、指圧痕が残る。21内面には工具の動いた線条が多く残っている。23の口縁外面には細い皺

があり、接合痕か。これらの布留系甕はいずれも淡黄褐色で、20以外は外面に煤が付着する。

24は高杯脚部片で橙褐色～灰黄褐色。外面は杯下部板ナデ、脚外面ハケメでミガキは目立たない。杯内面は摩滅、脚内面はケズリ仕上げ。脚屈曲部には乾燥前に4ヶ所穿孔を施している。25～27はいずれも橙褐色の外反口縁鉢。25・27は外面ハケメ後、内外ミガキ仕上げし、26は外面摩滅し、内面はハケメ仕上げでミガキが観察されない。28・29は単口縁鉢。28は焼成良好で橙褐色を呈するが、内外ハケメ仕上げでミガキは観察されない。淡黄褐色の29は、調整は28と同様である。30は脚付鉢で、鉢部外面ハケメ後、口縁部内外を中心にやや太い横ミガキ仕上げ。橙褐色を呈する。(重藤)

143号竪穴住居跡 (図版55、第326図)

3西拡張区の西壁にかかる竪穴住居跡で、142号竪穴住居跡の北に位置している。西南壁、東南壁は攪乱によって壊されたり、調査区外にあるため検出できず、また北西壁の西側を間違っ掘りすぎている。西北壁に近い位置で炉跡を検出しているため、住居跡には間違いはないが、床面レベルが隣接する142号住居跡よりも30cm程高くなっていることが注意される。覆土は褐色細砂。

出土土器(第327図1～4) 1は在地系の壺胴部片か。胴高に対して最大径の大きい胴部に、レンズ状底がつく。摩滅が著しいが内外ハケメを残す。2は山陰系二重口縁壺で、直立する口縁をなす。3は単口縁鉢で外面ケズリ後ミガキ、内面摩滅。4は支脚で外面～口縁内面ハケメ、脚部内面粗いナデ仕上げ。1・2は淡黄褐色、3は淡黄橙色、4は橙褐色。(重藤)

144号竪穴住居跡 (図版55、第326図)

3西拡張区にあり、143号竪穴住居跡の北東に位置している。東、北、西の壁を検出したところで長さ7m余り、幅3m余りの長軸の長い長方形竪穴住居跡と考えて発掘したが、南東壁の大部分が攪乱を被るために若干、不安である。床面ではピット、土坑等を検出しているが炉跡は確認していない。145号竪穴住居跡を切ると考えて発掘したが、切合いは不安で、出土遺物の一括性にも問題がある。覆土は上層では暗褐色細砂、下層では灰褐色細砂であった。土器以外に用途不明石器(第380図24)、144号住居跡付近遺構面で凹石(第379図21)、摺石(第379図23)、本住居付近攪乱出土の砥石(第379図22)がある。

出土土器(第327・328図5～55) 5～31は覆土より、32～54は144号住居跡付近の遺構面および144・145号住居跡上層、55は144号住居跡北包含層より出土した。

5は在地系複合口縁壺口縁部片、6はやや高い断面コ字状で、頂部に浅い刻目を施文した突帯をもつ在地系壺胴部片。7は山陰系二重口縁壺口縁部。5～7は白黄褐色～淡黄褐色を呈する。

9～15は布留系甕。口縁部は直線的に外傾するもの、口縁端部は内、上にわずかにつまみ出し気味のものが目立つ。14外面は肩部横ハケ後、縦ハケをまばらに施すことが確認できる。褐色を呈する11以外は灰黄褐色～淡黄褐色を呈する。

16～18は高杯。16は外反口縁に外面横ミガキ、内面横ナデ仕上げ。灰黄褐色。17は褐色を呈す弥生後期高杯の混入品か。口縁内外にまばらな暗文縦ミガキを施し、杯底部外面はハケメ。18は脚裾部を除き完存し、外面は縦・斜めハケ後横ミガキ、杯部内面は縦ハケ、横ハケ後放射状に暗文風ミガキ、杯部見込は放射状ミガキ。脚部内面はナデ仕上げ。淡橙褐色を呈す。

19は手捏ね風の小形の鉢で、淡橙褐色を呈する。20～22は単口縁鉢である。20は外面ケズリ、内

面ナデ後粗なミガキを外面に施す可能性がある。21は内面摩滅し、外面はケズリ後横ミガキ。22は外底部ケズリ、内底部板ナデで口縁内外はナデ仕上げ。20暗灰褐色、21淡橙褐色、22黄褐色。23は橙褐色の二重口縁鉢で、内外細かな横ミガキ仕上げ。胴部内面は疎な暗文風縦ミガキを施す可能性がある。24は外面に籠状の圧痕を残すいわゆる「籠目土器」鉢。1/4周弱しか残存しないが、口縁部は円形、底部は隅丸方形を呈する可能性がある。籠は底部を除けば21段ほど数えられ、籠の口縁部を巻き込むように土器口縁部をつくっている。籠の口縁部は螺旋状に竹をまいていたと推測される。内面はナデ仕上げ、口縁端部は雑なナデで、口縁内面に粘土を押し付けた際の凹みが水平に巡っている。淡黄褐色を呈す。管見では大平村上唐原遺跡（小池史哲編1995『上唐原遺跡』1 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集 福岡県教委 p.227）、夜須町出口遺跡（佐藤正義2000『出口遺跡』夜須町文化財調査報告書第49集、p.49）について福岡県で3例目の出土例。この種の土器は畿内を中心に分布し、九州には少ないと考えられている（角南聡一郎 1999「弥生～古墳時代前期の籠目・籠形土器」『香川考古』第7号 pp.17～30）

25は畿内系の精製脚付鉢の脚部片。外面はミガキ、内面はハケ後ナデ仕上げで、半乾燥時に3方向に穿孔を施す。橙褐色を呈する。26は脚端、口縁部を失った脚付鉢で、内外摩滅するがあるいは鉢部内面ミガキか。淡黄褐色。27は外面ハケ後ミガキ、鉢部内面、脚部内面ミガキ仕上げ。橙褐色を呈する精製品である。28は脚内外ナデ、鉢部内面ミガキで灰黄褐色。29は脚の短い形態が特徴的である。脚内外ナデ、鉢内外ミガキ仕上げで、橙褐色～黄橙色を呈する。

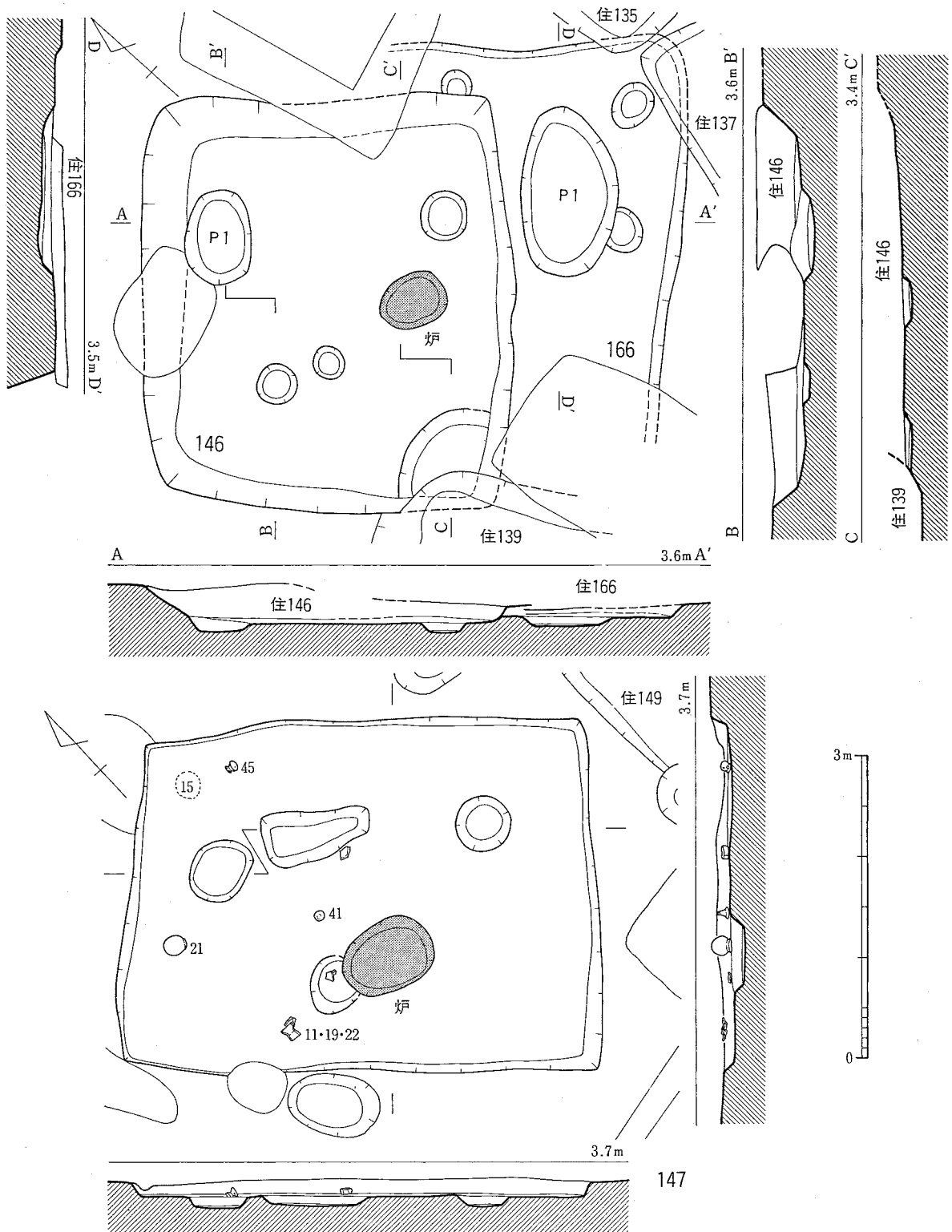
30・31は小形精製器台の脚部である。いずれも外面斜めハケ後横ミガキ、内面斜めハケ後ナデで仕上げている。内面上部には軸痕を残している。穿孔は両者とも内側に広がらず、乾燥前に行ったと推測され、他のこの種の器形の場合と異なる。いずれも淡橙褐色。

32、33は胴部内面ハケメ仕上げであることから在地系直口壺か。32は口縁端部を丸く仕上げ、33は口縁の伸びが小さく、端部を内外に拡張する。34・35は布留系の直口壺。いずれも口縁内面にハケメを残す点が特徴的である。36は山陰系二重口縁壺で、肩部外面に7本からなる櫛描文を巡らし、外面胴部最大径付近には不規則な線刻あるいは工具痕が残る。これらの壺類は32淡褐色、33生地淡黄褐色で一部淡橙褐色化粧土塗布、他は白黄褐色～淡黄褐色。

37～40は布留系甕。40を除けば、口縁端部を内につまみ上げたり、肥厚させる。38は肩部外面にハケメ工具小口刺突の斜行文を巡らし、39は胴部の張りが強い。いずれも白黄褐色～淡黄褐色。

41～45は高杯片。41は外面横ミガキ、内面ナデ。42はかなり摩滅するが内外ナデ仕上げか。43は内外ハケメ後外面横ミガキ。内面はミガキが観察されず、本来施されなかったか。44は脚部片で外面縦ハケ後横ミガキ、内面ナデ。半乾燥時に2方向から穿孔する。45は外面縦ミガキ、内面摩滅進行するがミガキか。器壁が他と比べ薄く、外面に煤が付着。42灰黄褐色、他は橙褐色。

46～49は単口縁鉢。46は外面ケズリ後横ミガキ、内面ナデで橙褐色。47は平底をなす特徴的な器形。外面斜めハケ、口縁外面～内面ナデ仕上げ。48・49は内外を粗いナデで仕上げた粗製品。49は口縁が外反気味で、外面下部にナデ前のケズリが観察される。47～49は灰黄褐色～淡黄褐色。50は深い器形であるが、外反口縁鉢か。摩滅進むが内外ナデ仕上げと推測される。黄褐色を基調とするが、外面は二次加熱のため淡赤褐色を呈する。51は小形精製器台受部片、52は脚部片。51は外面ハケ後横ミガキ、受部内面放射状ミガキ仕上げ。口縁内外は横ミガキの可能性もある。52は内外ハケ後、外面横ミガキ。半乾燥時穿孔が1ヶ所に残る。53・54は支脚片で、54外面はタタキか。

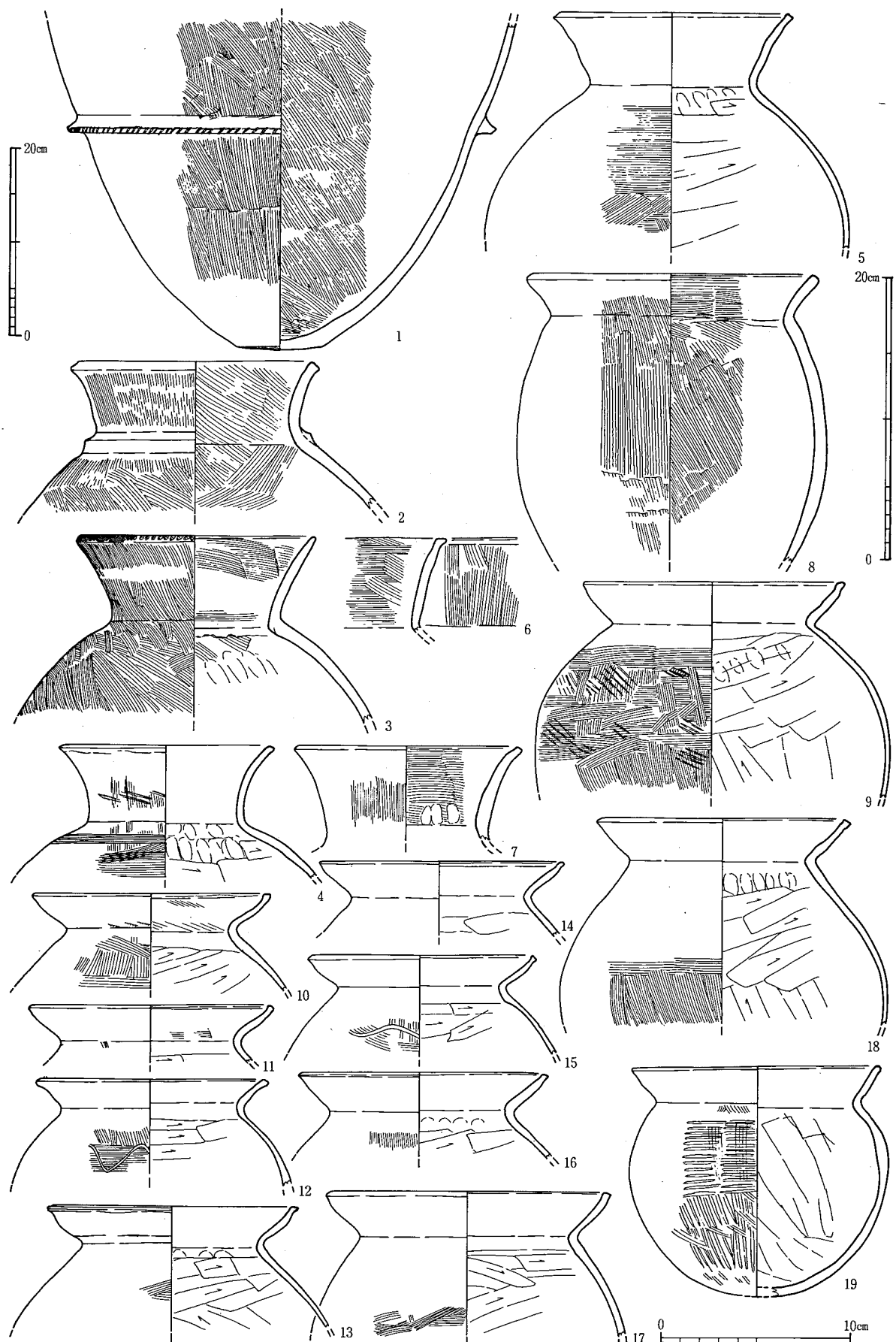


第329図 146・147・166号竪穴住居跡実測図 (1/60)

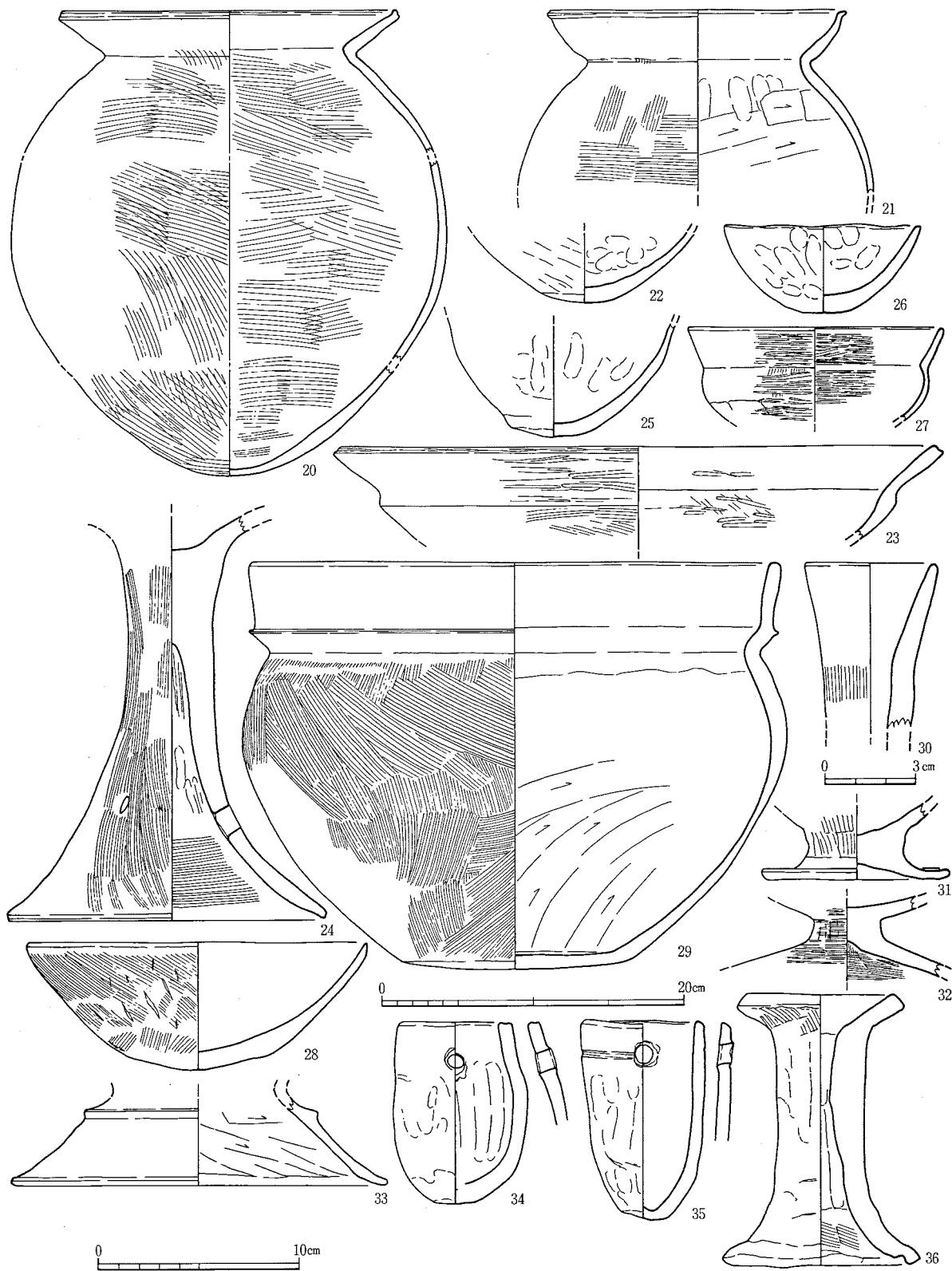
55は北包含層から出土したもの。50と器形が類似するがやや口縁が長く、壺と鉢のいずれとするか区別に悩む。胴部内外はハケメ仕上げで、黄橙褐色を呈する。(重藤)

145号竪穴住居跡 (図版55、第326図)

3西拡張区に位置し、大部分を144号竪穴住居跡に切られている。検出できたのは北東、北西、



第330図 146号竖穴住居跡出土土器実測図 (1) (1は1/6、19は1/3、他は1/4)



第331図 146号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (29・36は1/4、30は1/2、他は1/3)

南西の3つの隅のみで、東西4.5m、南北3.0m程の平面形が推測される。なお、検出面で間違っ
てプランをとらえたために、東壁の外側を段状に掘ってしまっている。

出土土器(図版126、第328図56) 確実に本住居跡で図示できるのは56の直口壺1点のみ。口縁の
伸びが小さく、内外ハケメ仕上げであるが、畿内系か。淡黄褐色を呈する。(重藤)

146号竪穴住居跡（図版56、第329図）

3 西拡張区にあり、139号竪穴住居跡の北東に位置し、東に隣接する166号竪穴住居跡の覆土を掘り込んでつくられている。139号住居跡に南西隅を切られ、北東壁の中央に校舎基礎下になっているが、他の壁は良好に残っていて、139号竪穴住居跡との切合いはやや不安であるが、輪郭は明瞭であり遺物の一括性は良好と思われる。覆土の上層は汚れた黄灰色細砂で、下層は褐色・黄褐色細砂を含んだ暗褐色細砂であった。

出土土器（図版126・127、第330・331図） 6・21・36は覆土上面から出土し、本住居に帰属するかやや確信のもてないもの。また、22・24・26はP1から出土した。

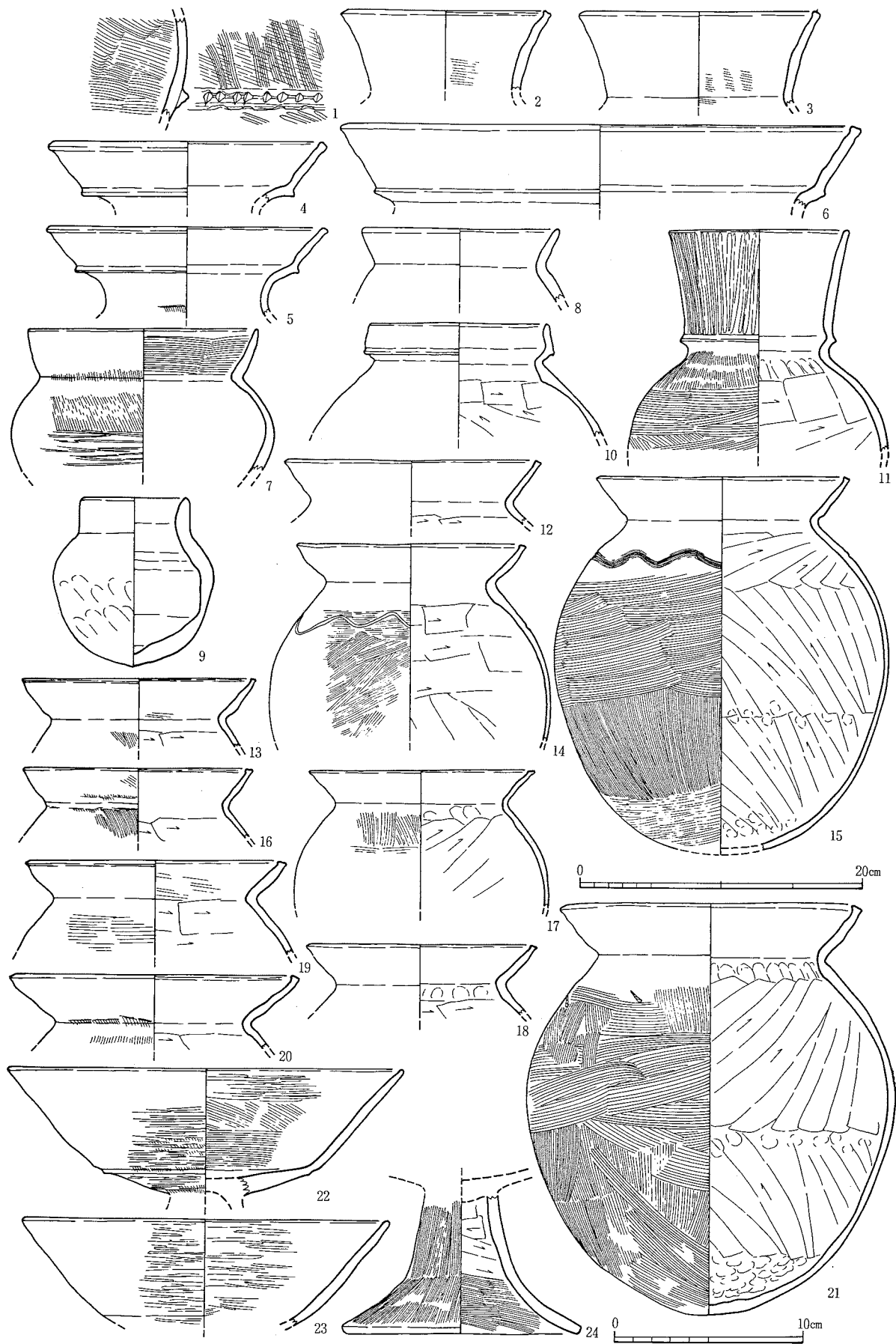
1は2つに分かれた大きな破片を図上で復元した胴部最大径50cmを超える在地系大形壺である。黄褐色を呈す。底部は平底で、胴下部に断面コ字状で高く突出し、頂部にハケメ工具小口を刺突した刻目突帯を巡らしている。2は内外ハケメ仕上げの在地系直口壺で、頸部に断面三角形の突帯を巡らしている。胎土に長石を含み、暗褐色を呈する点で、他の多くの土器と異なる。3～7は畿内系直口壺で、いずれも灰黄褐色～淡黄褐色を呈す。3は口縁端部にハケメ工具小口刺突の刻目を施し、胴部内面のケズリ、ハケメをきれいにナデ消した珍しい個体。4は肩部に櫛描直線文を巡らし、口縁端部をやや外に拡張気味である。口縁部外面にはハケメに先立つタタキと思われる線条がかすかに残る。5は口縁端部を上につまみ出し、6は外に拡張している。

8は在地系甕。内外ハケメで仕上げ、器壁の厚い粗製品である。口縁～胴中部に煤が多く、淡黄褐色を呈す。9～18・21は布留系甕。口縁部はわずかに内湾するもの（9～11・13・17・21）と直線的に外傾するもの（14～16・18）に大きく分かれるが、外反するもの（12）もある。口縁端部は丸く仕上げるもの（11・14）、内に肥厚させるもの（9・10）、上にわずかにつまみあげるもの（15・18）、外に拡張するもの（13・21）、やや角張るもの（16・17）に分かれる。12・15は肩部に波状沈線文を巡らしている。9はハケに先行するやや粗い左上がりタタキが一部に見える。17は頸部内面にハケメに先行して、強いナデによる凹みが巡る。18は胴下部の縦ハケが横ハケを切っている。これらの布留系甕は淡褐色の16を除けば白黄褐色～淡黄褐色を呈し、9は外面全体に煤が付着する。

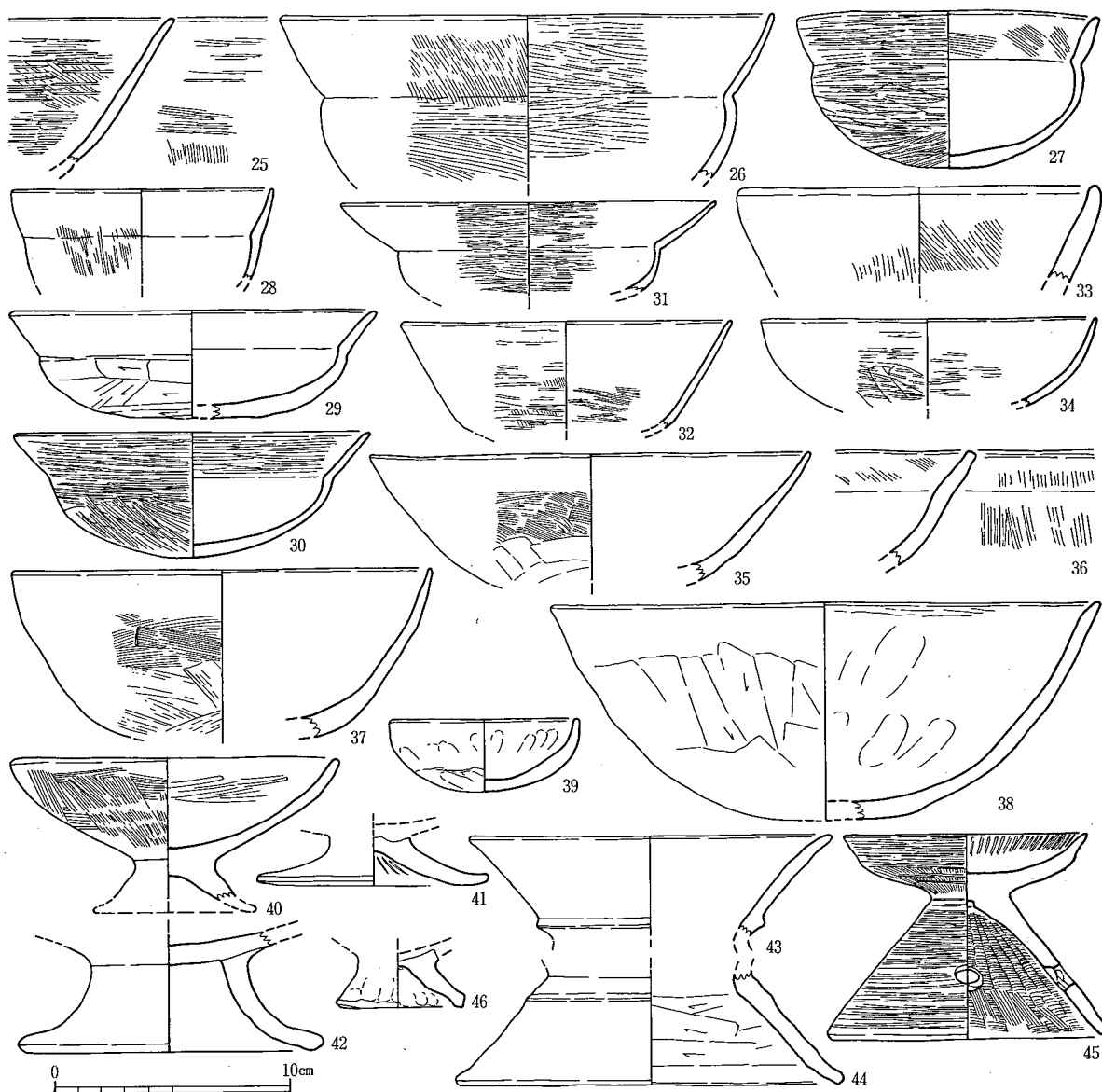
19・20は5様式系甕とすべきものか。19は外面をタタキ後ハケメ風の板ナデ、内面を板ナデで仕上げる。口縁部は横ナデが丁寧であり、つくりは布留系甕に近い。褐色～暗褐色を呈する。20は内外を粗いハケで仕上げるが、口縁は大きく外傾し、端部を上方に拡張して垂直に近い面を作る点で庄内系甕に近い。淡黄褐色を呈する。22は外面板ナデ、内面指圧痕で仕上げた甕底部片で、レンズ状底に近いことからやはり5様式系か。

23は高杯口縁部、24は高杯脚部片。23はハケ後内外横ミガキ仕上げで、短い口縁が特徴的であるが、在地系か。白黄褐色。24はやはり在地系と考えられ長脚である。外面ハケ、内面脚柱上部絞り痕、中部ナデ、裾部横ハケ仕上げ。3ヶ所に乾燥前の穿孔を施している。淡黄褐色を呈する。

25は内外ナデで仕上げ、甕との区別に悩むが深い器形の鉢と考えた。橙褐色。26は25と同様内外ナデ仕上げで橙褐色を呈する単口縁鉢。27は外面下部ケズリ、上部ハケメ後、内外をミガキで仕上げた外反口縁精製鉢。淡橙褐色。28は単口縁鉢で外面ハケメ、内面ハケ後ナデ仕上げ。外面は接合のためか縦方向の皺を多数残し、煤が付着する。黄橙褐色。29は接合しない2片を図上で復元した山陰系二重口縁鉢。胴部外面はナデ、胴部外面はケズリであるが上部の剥離が著しい。淡黄褐色を呈する。30は天地不安であるが、深い小形の鉢と考えて図示した。口縁部は横ナデで仕上げ、外面



第332图 147号竖穴住居跡出土土器实测图(1)(7~11・19~21は1/3、他は1/4)



第333図 147号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/3)

下部にハケメを残す。半島系土器など外来系土器であろうか。灰黄褐色。31・32は脚付鉢脚部である。31は脚底部の厚い点が特徴的。鉢部内面は工具によるナデ仕上げで淡黄褐色を呈する。32は外面ミガキの精製品で橙褐色を呈する。鉢部内面ミガキ、脚部内面細かいハケ仕上げ。

33は外面横ナデ、内面ケズリ仕上げの山陰系鼓形器台。淡黄褐色を呈する。36は筒形支脚で器壁が厚く、内外をナデ、ハケで仕上げた粗製品。褐色。

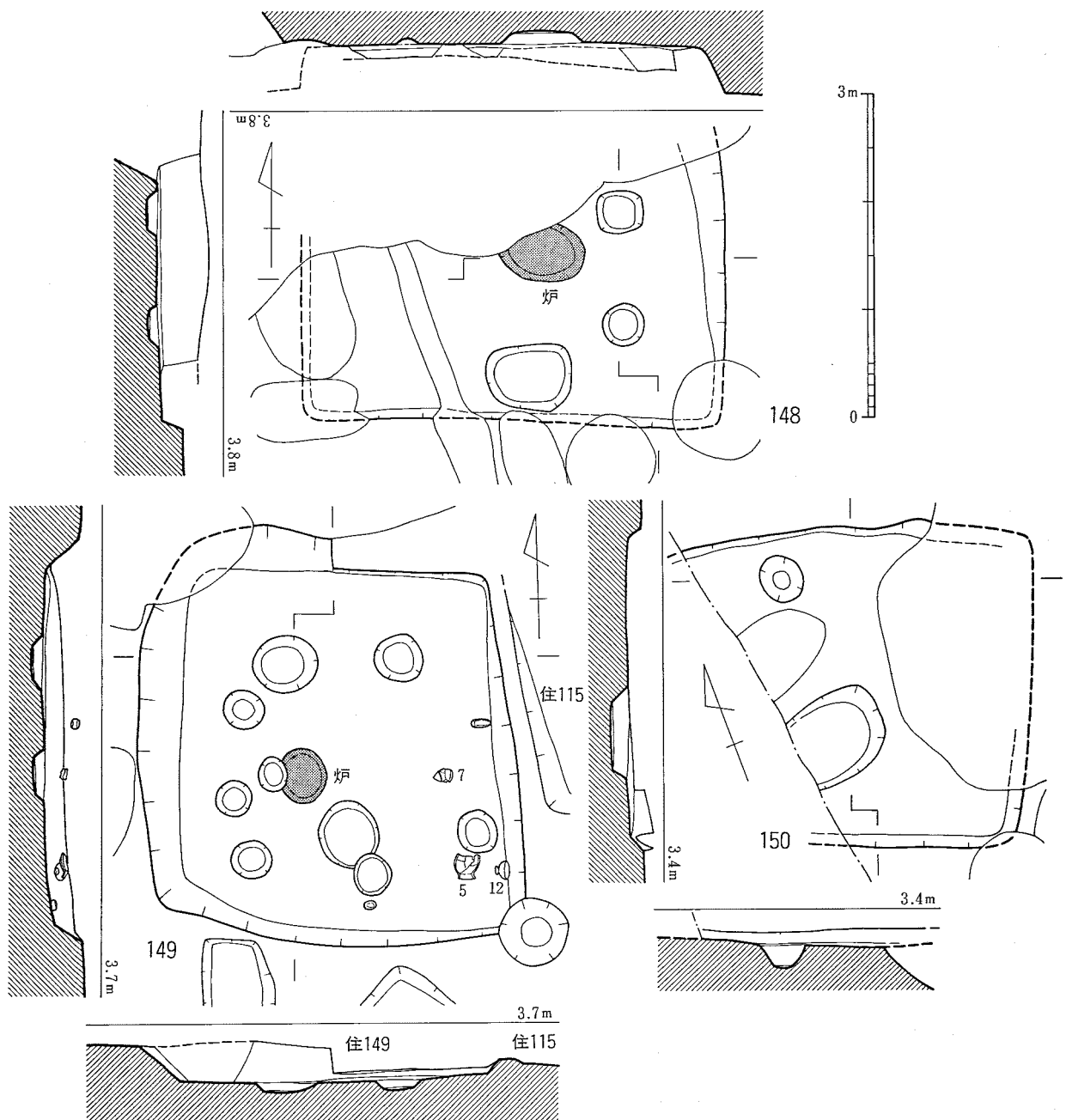
34・35はタコ壺で、34褐色、35淡黄褐色。35は穿孔部に強いナデによる凹線が巡る。(重藤)

147号竪穴住居跡 (図版56、第329図)

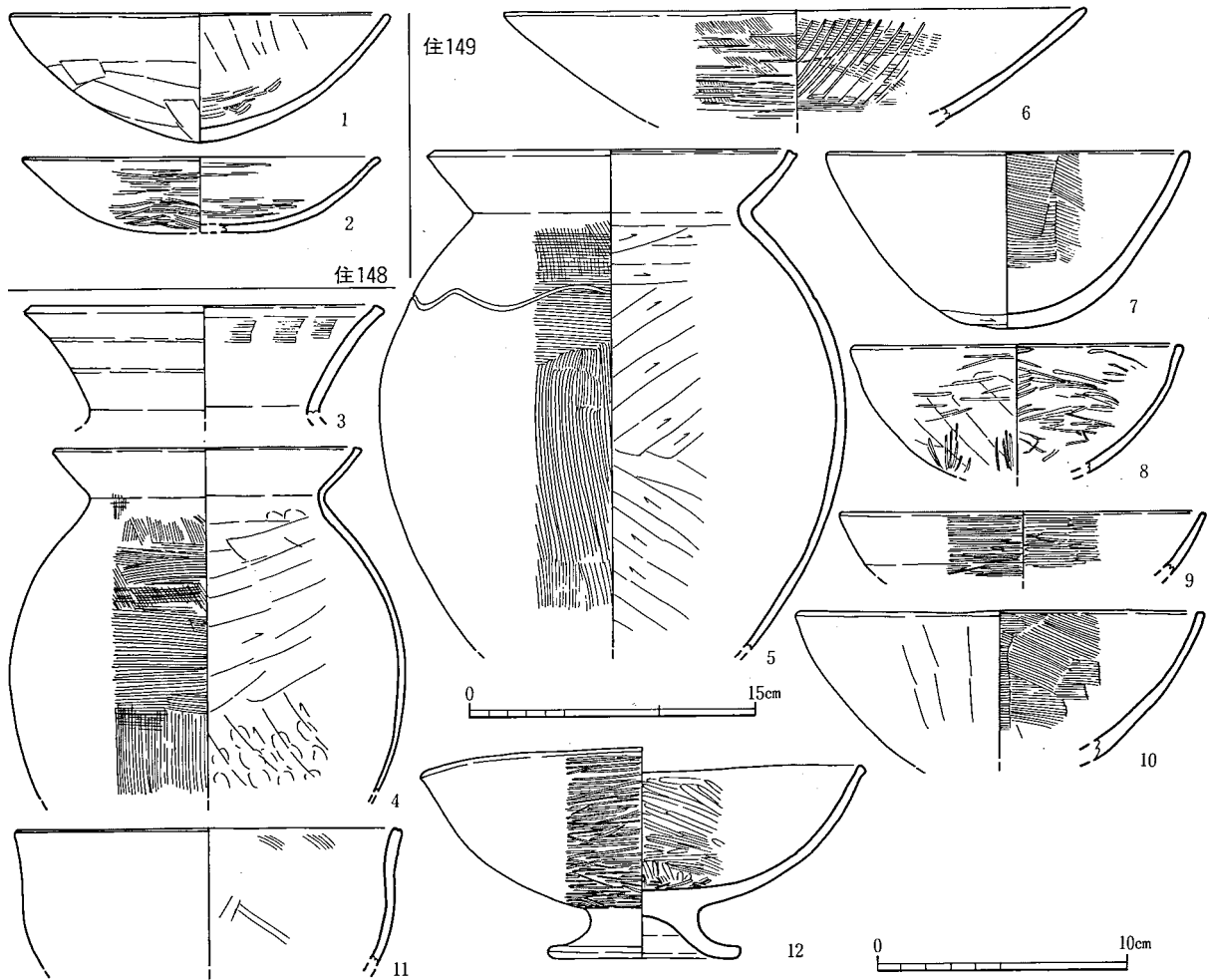
3 西拡張区の中央部付近、108号竪穴住居跡の南西、146号竪穴住居跡の北に位置している。攪乱をさほど受けていないためにほぼ全体の壁を検出することができ、長軸4.8m、短軸3.7m程の長方形竪穴住居跡になる。南西長壁の中央部に寄ったところで長軸0.9m、短軸0.7m程の楕円形の炉跡を検出している。他の竪穴住居跡との切合いも全くないことから、出土遺物の一括性は良好と考えられる。土器の他に鉄鏃(第376図2)が出土。

出土土器（図版127・128、第332・333図） 1は淡黄褐色の在地系壺。胴部に断面三角形で頂部に刻み目を施した突帯を巡らす。内面ハケメ仕上げ、外面タタキ後突帯上は縦ハケ。2・3は淡黄褐色～灰黄褐色の直口壺。4～6は山陰系二重口縁壺で、灰黄褐色～淡黄褐色を呈する。7・8は口縁部の短い小形丸底壺。7は外面の胴下部横ミガキ、胴上部縦ハケ、口縁部内面横ハケ仕上げ。他はナデ調整で、橙褐色を呈し外面煤が厚く付着する。8はミガキ仕上げの可能性もあるが、内外摩滅する。白黄褐色。9は器壁が厚く、口縁部の短い小形壺。内外ナデ仕上げで、淡黄褐色を呈する粗製品である。10は頸部の短い山陰系小形丸底壺。外面～口縁内面はナデ仕上げ。全体に焼成が悪く暗褐灰色を呈する。11は淡黄褐色の山陰系中形壺で、胴部外面ハケメ、口縁部外面縦ミガキ。

12～21は布留系甕。口縁部はわずかに内湾気味のもの（20・21）もあるが、直線的に外傾するものを主体とする。口縁端部は内面につまみ出すものも多く、16は内面に肥厚させる。17は口縁端部



第334図 148～150号竪穴住居跡実測図（1/60）



第335図 148・149号竪穴住居跡出土土器実測図(3~5は1/4、他は1/3)(1・2:住148、3~12:住149)

を外に拡張させ、上面はわずかに内傾する面をなす。14は肩部に1条の波状沈線文、15は5条1単位の櫛描波状文、21は肩部全周で9ヶ所にハケメ工具刺突の列点文を巡らしている。15・21は内外の調整が良好に遺存しており、内面ケズリの転換点付近に指圧痕の残る点に注意される。外面橙褐色を呈する16以外は灰黄褐色～白黄褐色～淡黄褐色を呈する。

22・23・25は黄橙色～橙褐色を呈する高杯杯部片である。いずれも内外横ミガキ仕上げで、22・25はミガキ前のハケメが残る。24は高杯脚部片で、破損状況からみて充填法により接合したと推測されるので、22・23・25とは別個体になるだろう。ケズリ仕上げの脚柱部内面を除けばハケメ調整で、穿孔は見られない。二次加熱のためか赤褐色を呈する。

26~31は外反口縁鉢。26・28は外面ハケメ仕上げの粗製品。26内面はやや粗いミガキ調整、28内面はナデでいずれも淡黄褐色。27・30・31は外面ミガキ仕上げの精製品で、いずれも淡橙褐色を呈する。30は口縁内面、31は内面全体にミガキが及ぶ。また、27・30は胴外面にミガキに先行するケズリの稜線が残る。30の胴部内面はナデ仕上げ。27は口縁内面斜めハケ、胴部内面ナデ。29は胴部外面ケズリ、他はナデ仕上げで、ミガキの施されない粗製品。淡黄褐色。32~39は単口縁鉢。32は内外ハケ後外面疎らな横ミガキ、内面ナデ。33は内外ハケ後口縁部付近をナデ仕上げ。32・33とも灰黄褐色。34は外面下部ケズリ後内外を横ミガキ仕上げした淡橙褐色の精製品。35・37はいずれも外面下部板ナデ、中部ハケメで、口縁外面～内面ナデ仕上げ。あるいは同一個体か。ともに淡黄褐色。36は口縁端部近く外反気味で、内外ハケ後ナデ仕上げ。淡黄褐色。38は口径23.1cmに復元され

る大形品で、外面下部ケズリ後、内外をナデ仕上げ。灰黄褐色を呈する。39は内外ナデ仕上げの粗製品で、胴外面下部にかすかな段が巡る。淡黄褐色～淡橙褐色。40～42は脚付鉢で、橙褐色の41以外は淡黄褐色。40は鉢部外面ハケ、鉢部内面摩滅進むがミガキか。脚部内外はナデ。42、43は脚部破片で、残存部はいずれもすべてナデ仕上げ。41は脚内面上部にハケメ工具痕が残る。

43は山陰系鼓形器台口縁部、44は同脚部である。43は内外磨滅が進み、44は外面横ナデ、内面ケズリで、ともに白黄褐色を呈する。45は畿内系小形精製器台で、外面ハケ後横ミガキ、受部内面は摩滅が進むが口縁部近くに暗文風縦ミガキが残る。脚部内面は上端に径9mm程の軸痕を残し、脚裾近くに縦ハケを施す以外は横ハケ仕上げ。横ハケは上端から裾端部まで一度に施しているの、調整に使用したハケメ工具の小口幅が少なくとも6cm以上あったことが判明する。46は内外に指圧痕を残す粗製の脚部で、製塩土器と推測される。二次加熱はそれほど観察されない。淡黄褐色が基調であるが、一部化粧土のためか褐色を呈する。(重藤)

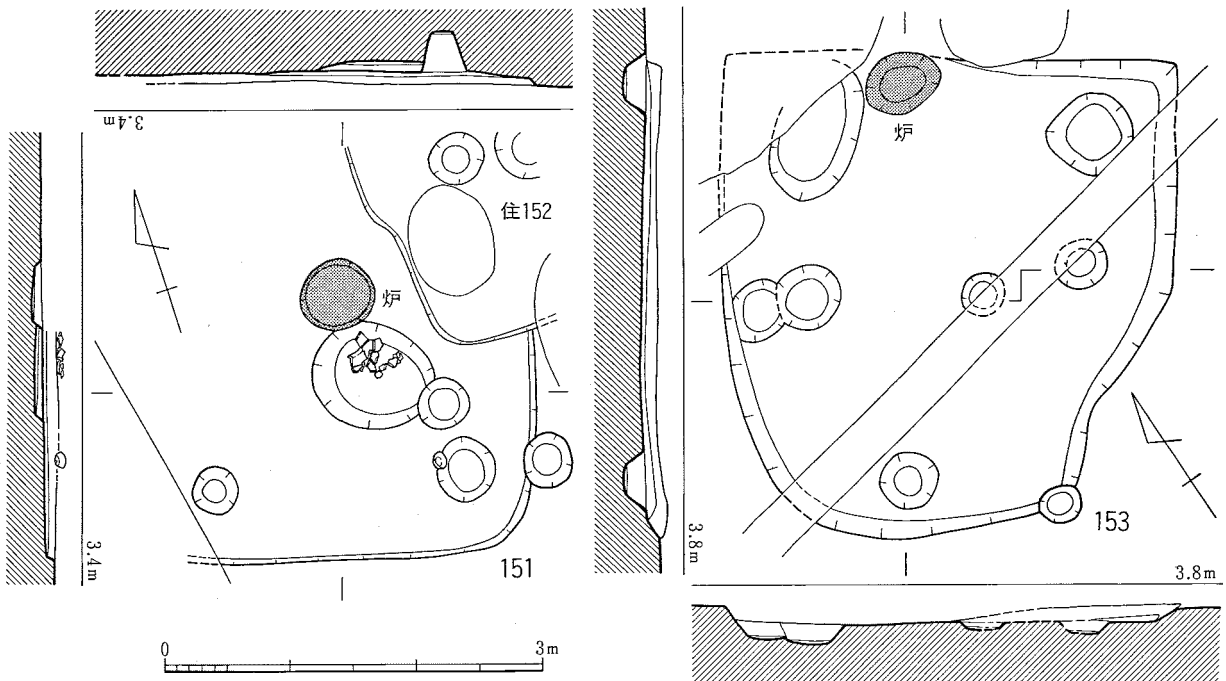
148号竪穴住居跡 (図版56、第334図)

3西拡張区の中央部付近、147号竪穴住居跡の北西に位置している。北側が大きく攪乱を被り、南半分しか検出していないが、壁も攪乱でかなり壊されており、平面形は不安である。ただ、東壁の遺存は良好であり、高さ40cm程残っており、中央部付近で平面楕円形の炉跡を検出していることもあわせて、竪穴住居跡であることは間違いない。

出土土器 (第335図1・2) 図示できるのは単口縁鉢2点のみ。1は外面ケズリ、内面下部ミガキ、口縁部板ナデ後ナデで黄褐色。2は内外ミガキ仕上げで、化粧土のため橙褐色を呈す。(重藤)

149号竪穴住居跡 (図版57、第334図)

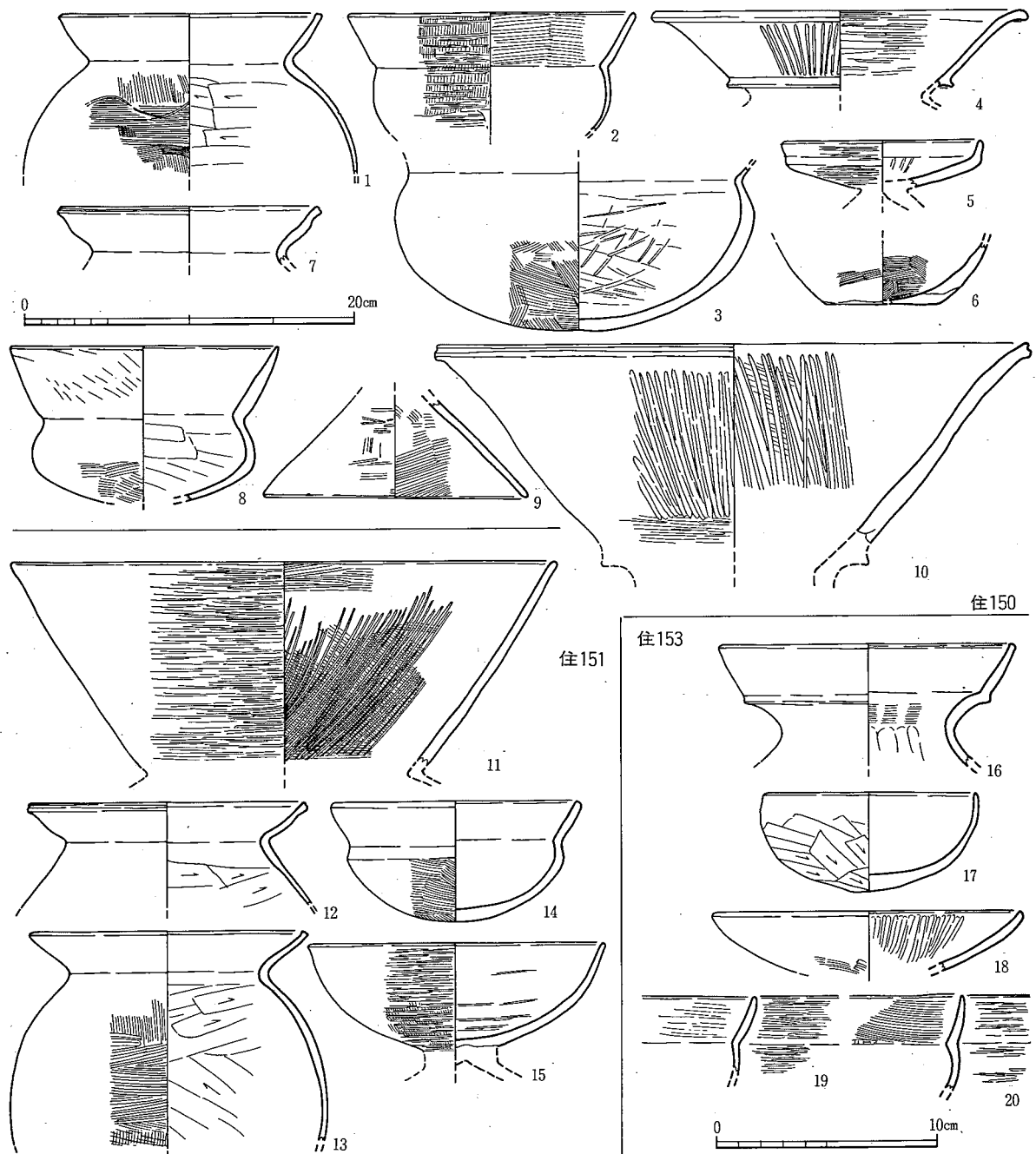
3西拡張区の中央部付近、147号竪穴住居跡の北、113号・115号竪穴住居跡の西に位置している。北西隅、南東隅が攪乱、近世ピットで失われている他は良好に遺存しており、長軸3.8m、短軸3.5



第336図 151・153号竪穴住居跡実測図 (1/60)

m程の長方形を呈している。住居の床面ではいくつかのピットとともに、中央やや西よりで炉跡を検出している。他の住居跡との切合いもないので、出土遺物の一括性は良好であろう。覆土は灰黄褐色であった。土器以外に不明石器（第380図25）が出土。

出土土器（図版128、第335図3～12） 3は白黄褐色の畿内系直口壺口縁部片。端部を内にやや肥厚させ、外面に白色化粧土の細い線が2条巡っている。4・5は布留系甕。いずれも口縁は直線的に外傾し、端部は内に肥厚気味。5は肩部に1条の波状文を巡らし、外面下部の縦ハケが肩部の横ハケを切っている。いずれも淡黄褐色で、4は外面全体、特に口縁に厚く、5は胴中下部に煤が付着する。6は高杯口縁部で内外斜めハケ後、外面横ミガキ、内面暗文風のミガキ。黄橙色を呈し、傾きはやや不安である。7～11は単口縁鉢。7は外面ナデ、内面ハケメ。8は外面下部ケズリ後、内外細かいミガキ。9は内外横ミガキ仕上げ。10は外面板ナデ後ナデ、内面ハケメ。11は他よりやや



第337図 150・151・153号竪穴住居跡出土土器実測図（1・7・12・13・16は1/4、他は1/3）
（1～10：住150、11～15：住151、16～20：住153）

や深い器形のもの。内外ナデで、内面に一部ハケ、工具痕が残る。黄橙色の8、橙褐色の9を除けば、他は白黄褐色～淡黄褐色。7・10は外面に煤が付着。11は脚付鉢で、鉢部と脚部の回転軸が一致しない、ゆがんだ器形をなす。鉢部内外は横ミガキ仕上げで、淡黄褐色を呈す。(重藤)

150号竪穴住居跡 (図版57、第334図)

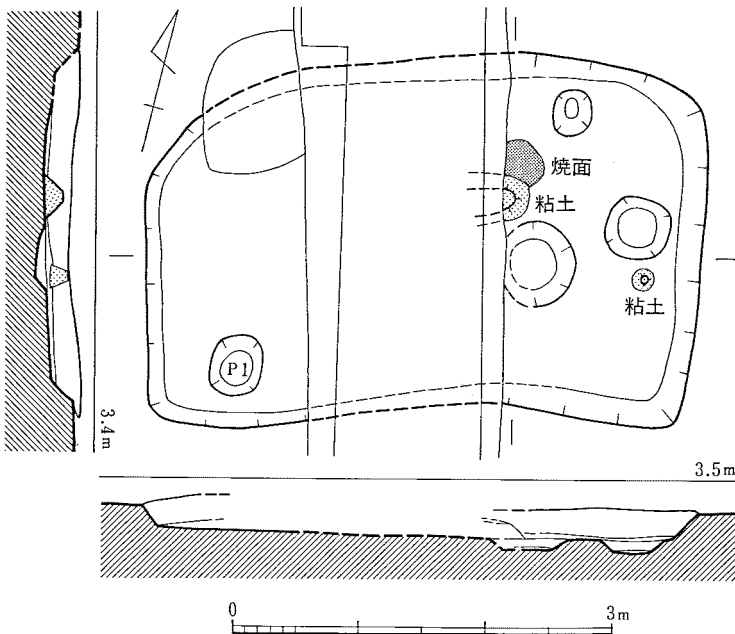
3西拡張区の北寄りに位置している。西側は水道管が通っていたために発掘できず、北西部は大きく攪乱を被っているため、平面形の全容は不明である。また炉跡も検出していない。残存する南北壁間が3.0m余りであるので、さほど大きくない竪穴住居跡になるだろう。

出土土器 (図版128、第337図1～10) 1～6は本住居跡の覆土より出土したもので、7～10は150～152号竪穴住居跡上層から出土したものである。

1は淡黄褐色を呈する布留系甕。肩部に波状の沈線を巡らしている。2は淡黄褐色の外反口縁鉢。外面胴下部ケズリ、他縦ハケ後横ミガキし、口縁内面はハケメ、胴部内面はナデ仕上げ。3は口縁部を失うが、同じく外反口縁鉢になるか。外面下部はハケメ、上部は剥離するがミガキの可能性はある。胴部内面はケズリ後粗なミガキ。橙褐色～淡黄褐色を呈する。4は山陰系鼓形器台で、器壁が薄い。外面縦ミガキ、内面横ミガキで白黄褐色。5は畿内系の小形器台口縁部片で、外面横ミガキ、内面ナデ後受部底放射状ミガキ。6は内外ハケメ仕上げ平底を呈し、タコ壺あるいは鉢か。褐黄色。7は淡黄褐色の布留系甕。8は小形丸底壺で、胴下部外面ハケ、口縁部外面ハケメと工具痕、口縁部内面ナデ、胴内面ケズリ仕上げである。ミガキが観察されず灰黄褐色を呈す粗製品。9は橙黄色の畿内系小形精製器台。外面縦ハケ後横ミガキ、内面斜めハケ。10は山陰系鼓形器台口縁部。外面下部横ミガキ後、口縁部にかけて縦ミガキ、内面ハケ後深い縦ミガキである。傾き、径には不安が残るが受部の深い器形と推測される。内面には煤がべっとり付着し、淡黄褐色を呈す。(重藤)

151号竪穴住居跡 (図版57、第336図)

3西拡張区、150号竪穴住居跡のすぐ北で検出された竪穴住居跡である。西側が水道管のため発掘できず、北東部は152号竪穴住居跡

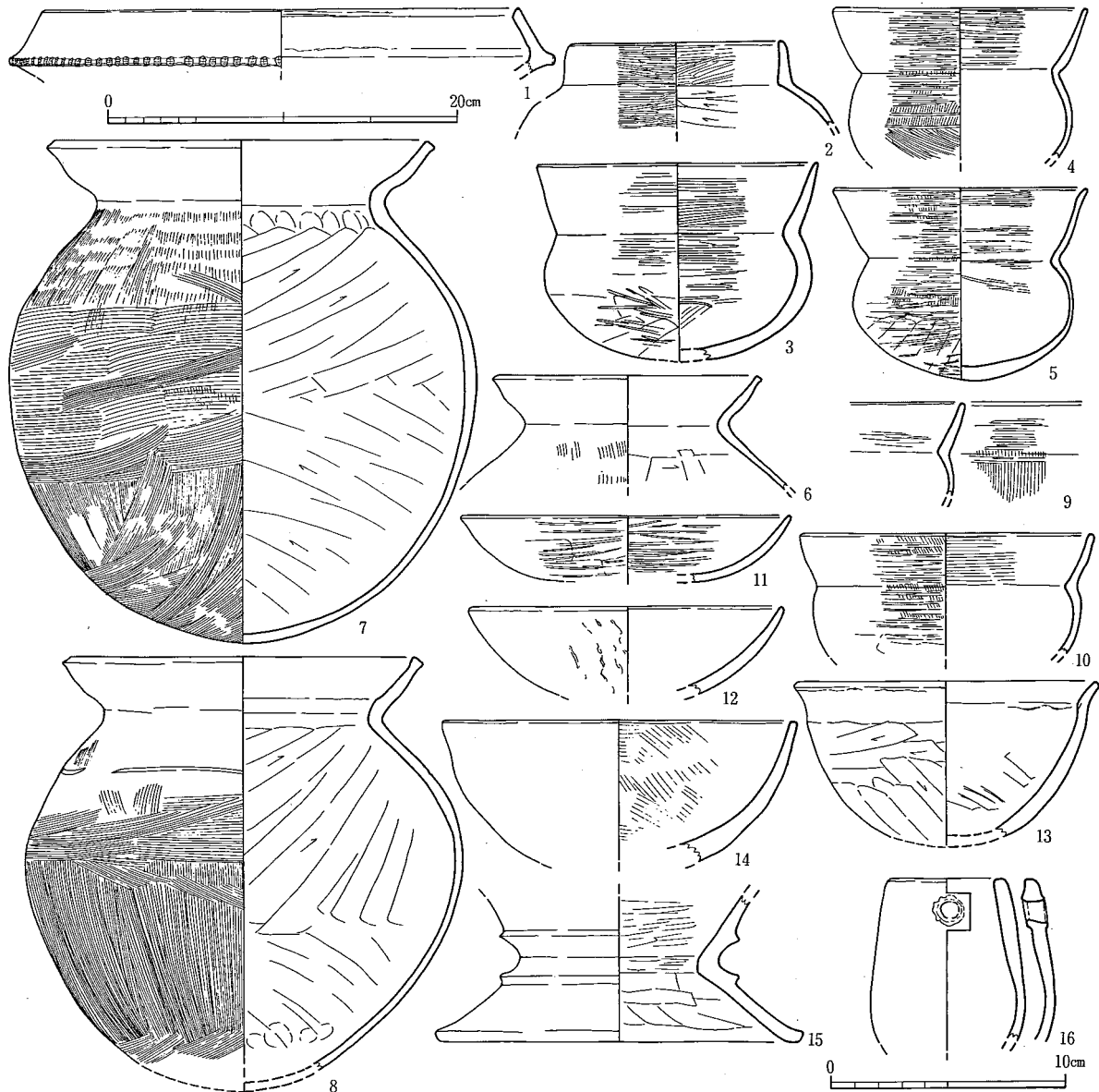


第338図 154号竪穴住居跡実測図 (1/60)

に切られている。加えて、全体的に削平が著しいために、東壁、南壁の一部を検出したにとどまり、壁も5cm内外の高さしか残っていない。中央で円形の炉跡を検出しているので住居跡であることは間違いなからうが、平面形、152号住居跡との切合いも不安である。覆土は暗褐色細砂が主体であった。

出土土器 (図版128、第337図11～15)

11は畿内系中形直口壺の口縁部と思われるが、やや口径が大きい。外面横ミガキ、内面斜め～横ハケ後暗



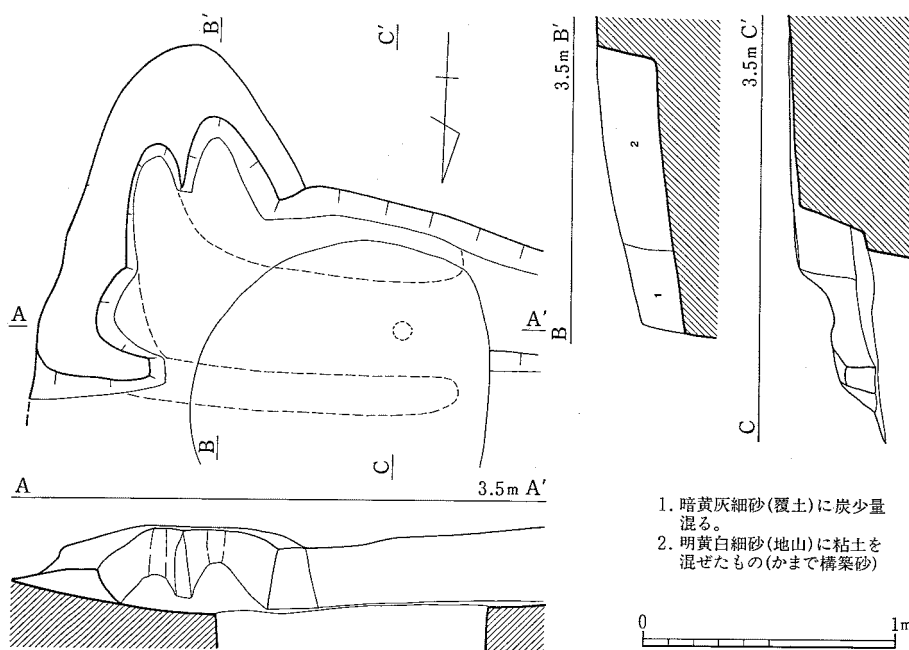
第339図 154号竪穴住居跡出土土器実測図（1・6は1/4、他は1/3）

文風の斜めミガキで橙褐色を呈する。12・13は布留系甕でいずれも淡黄褐色。12は胴部外面摩滅のため調整観察困難。14は外反口縁鉢で外面灰褐色、内面淡黄褐色を呈する。胴部外面ハゲ、胴部内面ケズリ後ナデ、口縁部内外ナデ仕上げの粗製品。15は脚付鉢鉢部片。鉢部外面縦ハゲ後内外にミガキを施し、橙褐色を呈する精製品。（重藤）

152号竪穴住居跡（図版57、第40図）

3西拡張区にあり、151号住居跡を切ると考えて発掘を行ったものである。1区西端で検出された13号竪穴住居跡に隣接し、方向も一致するので、同一住居跡となる可能性があるが、調査区境界をはさんで壁が一致していないので、別住居跡とした。炉跡も検出していない。覆土は暗灰褐色細砂が主体であった。図示できる土器等の出土遺物はない。（重藤）

153号竪穴住居跡（図版58、第336図）



第340図 155号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

3北2区と3西拡張区の境界で検出された竪穴住居跡である。対角線上に水道管があって攪乱を被るとともに、周辺の削平が激しいために壁も高さ10cm程しか残っていない。平面形は方形に近いが、南隅が直角をなしておらず、炉跡も北壁に極めて近接する位置にある。床面ではいくつかのピットを

検出しているが、炉跡の位置、平面形など点で住居跡と断定するには少し不安を覚えている。出土遺物もさほど多くないのであるいはくぼみに堆積した包含層的性格の遺構であった可能性もあるだろう。斑状に黄褐色細砂を含む暗褐色細砂が覆土の主体である。

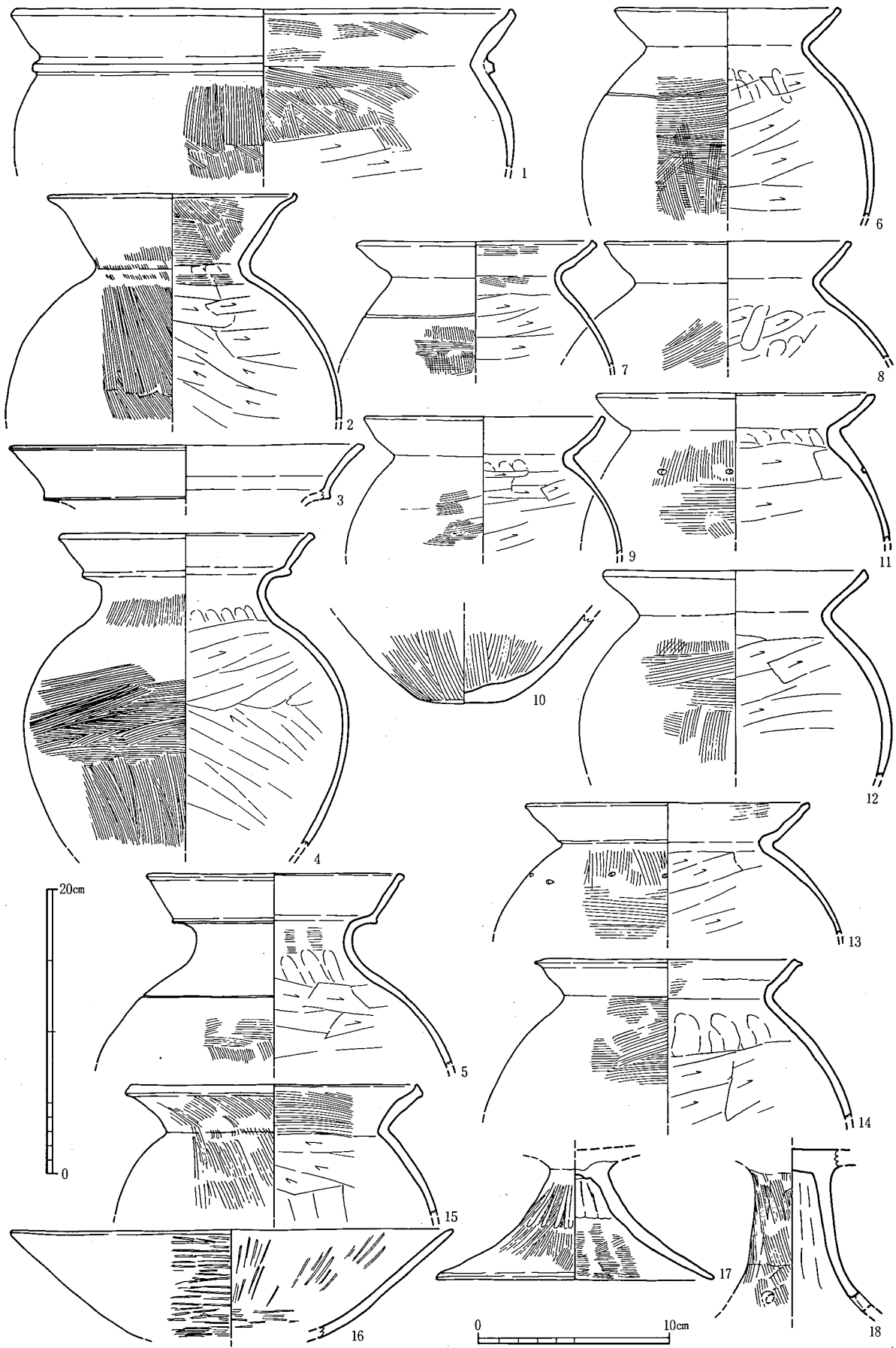
出土土器 (図版128、第337図16~20) 17以外は覆土上面から検出したもの。16は淡黄褐色を呈する山陰系二重口縁壺。18は単口縁鉢で、外面下部ヘラケズリ、内面下部工具によるナデの他はナデ仕上げ。淡黄褐色を呈する粗製品である。18は内面に縦ミガキを施すことから脚付鉢の口縁部か。外面下部ハケ、他はナデ仕上げ。19・20は外反口縁鉢で、ともに橙褐色。いずれも外面ミガキ、胴部内面ナデで仕上げ、口縁部内面は19が板ナデ風、20がハケメである。(重藤)

154号竪穴住居跡 (第338図)

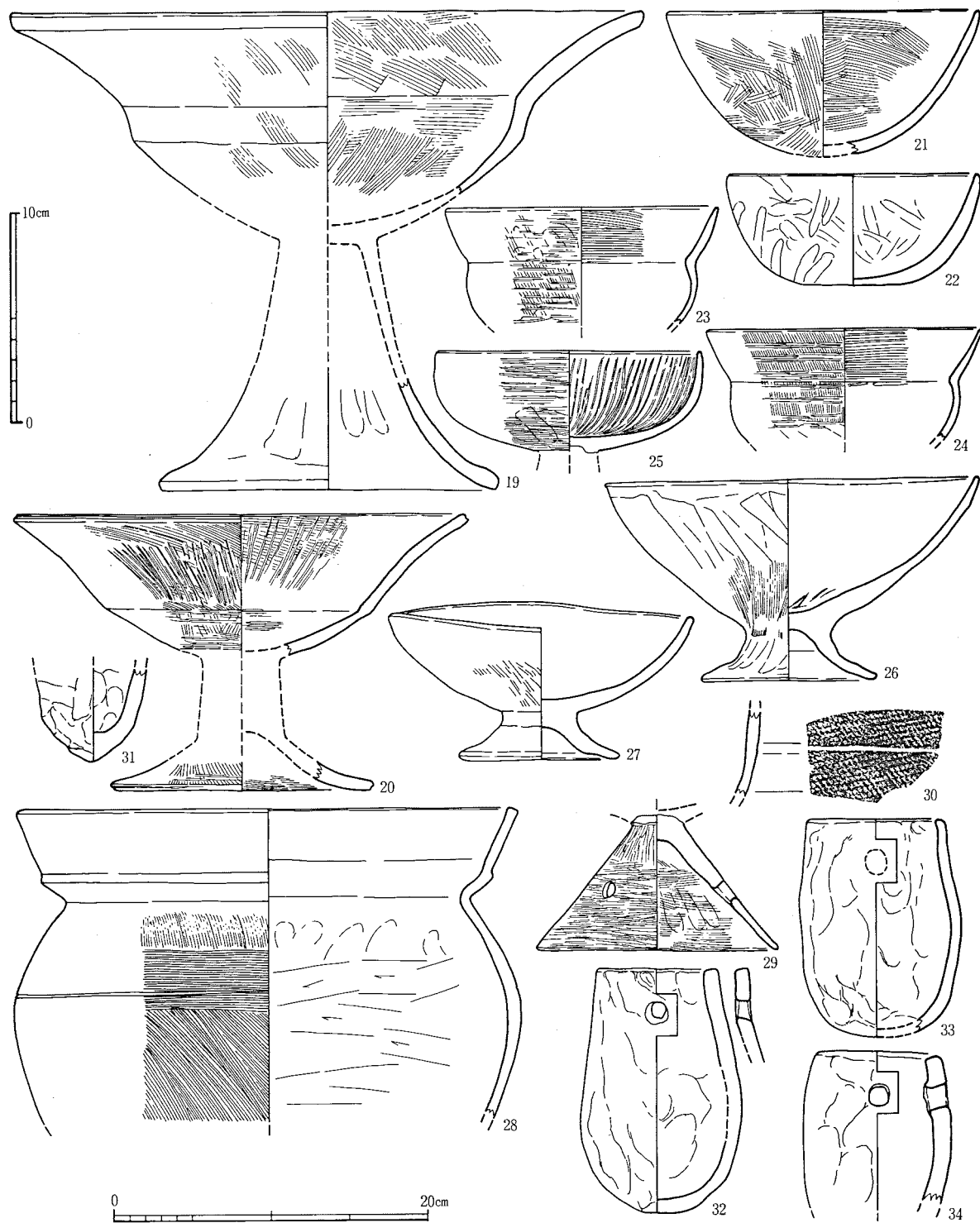
3南1・2区にあり、68・71号竪穴住居跡の下層に位置すると考えて発掘を行ったが、これらの切合いは心許ない。中央を校舎基礎が横切り、68・71号住居跡の下層で検出したために壁も20cm程しか残っていないが、住居の平面形はほぼ把握できた。平面形は東西に長い長方形を呈し、長軸4.3m、短軸2.9mとやや小形である。住居のやや東部の床に焼面を検出したが、そのすぐ南にカマドに適するような粘土の高まりを検出しているので、校舎基礎下に当たる部分にカマドが設置されていた可能性がある。そうであるとするともカマド付きの158号住居跡から炉をもった68号住居跡への切合いとなり問題が生じる。また、焼面の南の粘土高まりの他に、東壁近くでも直径15cm程の粘土の高まりが検出された。土器の他に石錘 (第242図16) が出土した。

出土土器 (図版、第339図) 1・3・4・10・15は覆土上層、2・9はP1より出土した。

1は白黄褐色を呈する在地系の複合口縁壺で、屈曲部外面にハケメ工具刺突の刻目を施す。屈曲部内面のナデは少し雑となっている。2は直立する口縁の小形壺。胴部外面~口縁部内面はミガキ仕上げ、胴部内面はケズリで橙褐色を呈す。3~5は小形丸底壺で、いずれも橙褐色。外面~口縁内面はいずれもミガキ仕上げであるが、3・5は胴部内面にまでミガキが及び、胴部外面下部には



第341图 155号竖穴住居跡出土土器実測図(1) (11・13・15~18は1/3、他は1/4)



第342図 155号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (28は1/4、他は1/3)

ミガキに穿孔するケズリが確認できる。4は胴部を上半にミガキ前のハケメが残る。

6～8は布留系甕。6は口縁部が直線的に外傾し、端部が角張る。7は口縁部がやや内湾気味で、端部は角張る。胴部外面中部に煤が付着。8は口縁部が直線的に外傾し、端部をやや上に拡張気味である。肩部1条の直線沈線文を施し、胴中部の横ハケが胴下部の縦ハケを切っている。

外反口縁鉢9・10は外面ミガキ仕上げで、9はミガキ前ハケメ、10はミガキ前ハケメ、ケズリが確認できる。口縁部内面は9がミガキ、10はハケメである。いずれも橙褐色を呈し、9の外面には

煤が少し付着する。11～14は単口縁鉢。11は外面下部ケズリ後、内外をミガキで仕上げた精製品で黄橙色を呈する。12は内外ナデ仕上げ、褐色の粗製品で、外面は接合のためか縦方向の皺が残る。13は口縁がわずかに外反する。胴部外面ケズリ、内面工具痕を残し、橙褐色。14は外面ナデ、内面ハケメの粗製品で灰黄褐色。15は山陰系鼓形器台で外面ナデ、受部～屈曲部内面ミガキ、裾部内面ケズリ仕上げ。淡黄褐色を呈する。16は白黄褐色を呈する蛸壺片。(重藤)

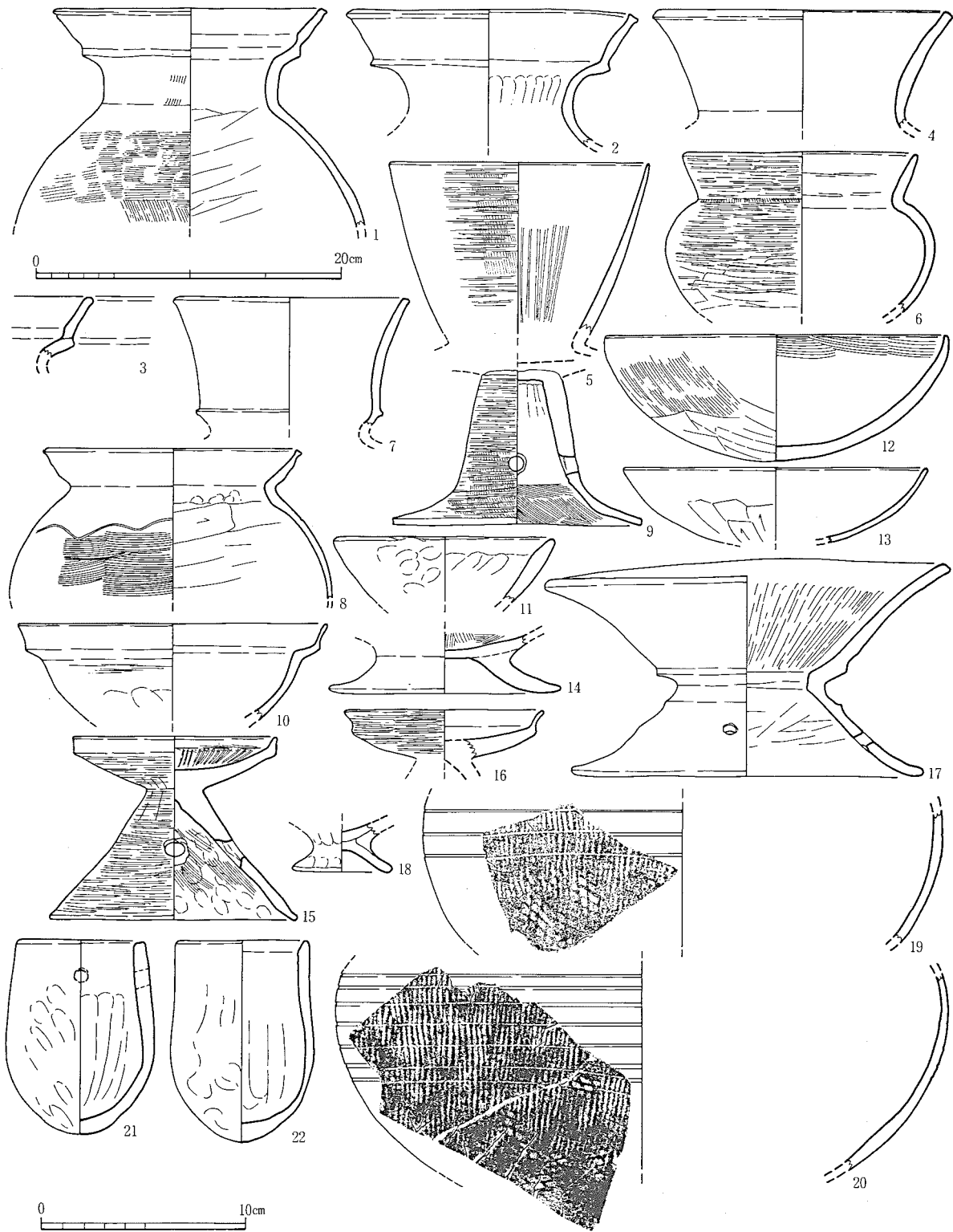
155号竪穴住居跡 (図版58、第112図)

3南1区北東隅、64号竪穴住居跡北東に位置する。63号竪穴住居跡に切られ、156号住居跡を切ると考えて発掘したが、本住居跡付近は切合いが激しく、自信がない。覆土は暗黄灰色細砂で、南・西壁、北壁の一部のみ残るが、東西3.9m、南北2.9m、深さ40cmの長方形住居である。住居南東隅には煙道が南壁に沿って延びるカマドを検出した。本住居跡西には155号竪穴住居跡西包含層がある。竪穴住居跡であるが、西壁しか確認できなかったため、包含層として報告する。土器の他に摺石(第380図26)が出土している。

カマド(第340図) 煙道が南壁に沿って延びるカマドである。燃焼部ほとんどが攪乱を受けているため、煙道部しか調査できなかったが、破線で推定復元を行った。カマドの長さは推定で東西2.5mを測る。図面では2ヶ所煙道部が存在するが、当初西側と考え発掘したが、東側の部分が炭が多く混じるため、掘り間違えたと判断した。袖は砂に粘土を混ぜたもので構築する。

出土土器(図版129、第341・342図) 1は在地系壺。頸部に突帯を貼り付ける。内面胴部中位以下はヘラケズリ、中位以上はハケ、口縁部のみその後ナデ消しを行う。胴部外面には黒斑あり。2は畿内系直口壺。胎土は精良で、口縁部は外反させ、端部を上方につまみ上げる。外面は縦ハケのみで、内面頸部近くまでヘラケズリ。口縁部と胴部外面に黒斑。3～5は山陰系二重口縁壺。4は外面は縦ハケが横ハケを切り、肩のみその後ナデ消す。5は端部を丸くおさめ、肩に1条の凹線を施す。頸部内面には横ハケ。1は褐色、2は橙褐色、3は橙黄褐色、4は淡褐色、5は灰黄褐色。

6～9、11～14は布留系の甕。6・8・14は内面のケズリの位置が下がる。6・7は肩に1条の凹線が巡る。6は横ハケを切る不定方向の太いハケを施す。胴部外面には煤が付着する。9は直立気味に内湾する口縁部で、内面は頸部近くまでヘラケズリを行う。10は壺か甕の底部。器壁が厚く、やや平底状を呈し、内外面ともハケで調整。外面には煤が付着する。11は器壁が厚く、口縁端部は内傾する面をなす。肩に刺突文が巡るか。12は肩部に黒斑。13は口縁端部は水平で、内傾する面をなす。外面は粗いハケ、口縁部内面には横ハケが残る。外面には煤がべっとり付着する。肩には0、1、4、7時方向に竹管文が巡る。内面は頸部近くまでヘラケズリを施す。14は口縁端部を外側につまみ出す。内外面ともハケをあまりナデ消さない。外面には煤が付着する。15は在地系の甕。口縁端部は内側につまみ上げ、外面は縦ハケ、内面は口縁部は横ハケ、頸部まで反時計回りのケズリを施す。外面に煤が付着する。いずれも灰黄褐色～淡黄褐色。16は畿内系高杯杯部で、外面は横ミガキ、内面は暗文風の縦ミガキを施す。17は脚部で、外面は縦ハケのち上位は縦ミガキ、内面の裾部はハケ、柱状部は工具による絞り痕が残る。18～20は在地系高杯。18は乾燥があまり進んでない状態で、外側から3ヶ所穿孔したものか。19は器壁が厚く、深さがあり、口縁部の屈曲が比較的強い。内外面ハケ目を施す。脚部裾は磨滅のため調整不明。20の杯部は弱い屈曲で、口縁部内外面はハケのち細かい暗文風の縦ミガキを施す。脚部は同一個体か。外面には黒斑がある。16は黄橙褐色、



第343図 156号竪穴住居跡出土土器実測図（1～4・8は1/4、他は1/3）

18は褐色、20は橙褐色、他は淡黄褐色～灰黄褐色。

21・22は直口鉢。21は外面は不定方向のハケ、内面は横ハケを施す。22は平底で内外面は工具によるナデで調整する。外面に煤附着。23・24は精製の畿内系屈曲鉢。いずれも外面は縦ハケのち横ミガキ、口縁部内面は横ハケが残る。25は杯部が碗型を呈する脚付鉢。内面には暗文風の縦ミガキを施す。26・27は山陰系の脚付鉢。26は杯部内外面は工具によるナデ、外面下位のみその後ハケで

調整。内外面には淡橙褐色のスリップがかかる。27は丁寧なナデ調整を行う。杯部外面には二次加熱痕が残る。23～24・26は橙褐色～黄橙褐色、他は灰黄褐色～淡黄褐色。

28・29は155号竪穴住居跡覆土上層出土。28は大形の山陰系二重口縁鉢で、肩から下がった位置に1条の凹線が巡る。内面は下がった位置からヘラケズリを行う。29は畿内系小型器台の器台で、外面は細かい横ミガキ、上位は縦ミガキ。あまり乾燥していない状態で外側から3ヶ所穿孔する。28は淡黄褐色、29は橙褐色。

30は焼成が軟質の半島系土器で、外面は格子タタキののち、間隔が広く太い凹線が巡る。黄赤褐色。31は製塩土器か。二次加熱が見られ、外面にはケズリが残る。暗黄褐色。32～34は蛸壺である。32・34はあまり乾いていない状態で外側から穿孔する。いずれも灰黄褐色～黄褐色。(大庭)

156号竪穴住居跡 (図版58、第112図)

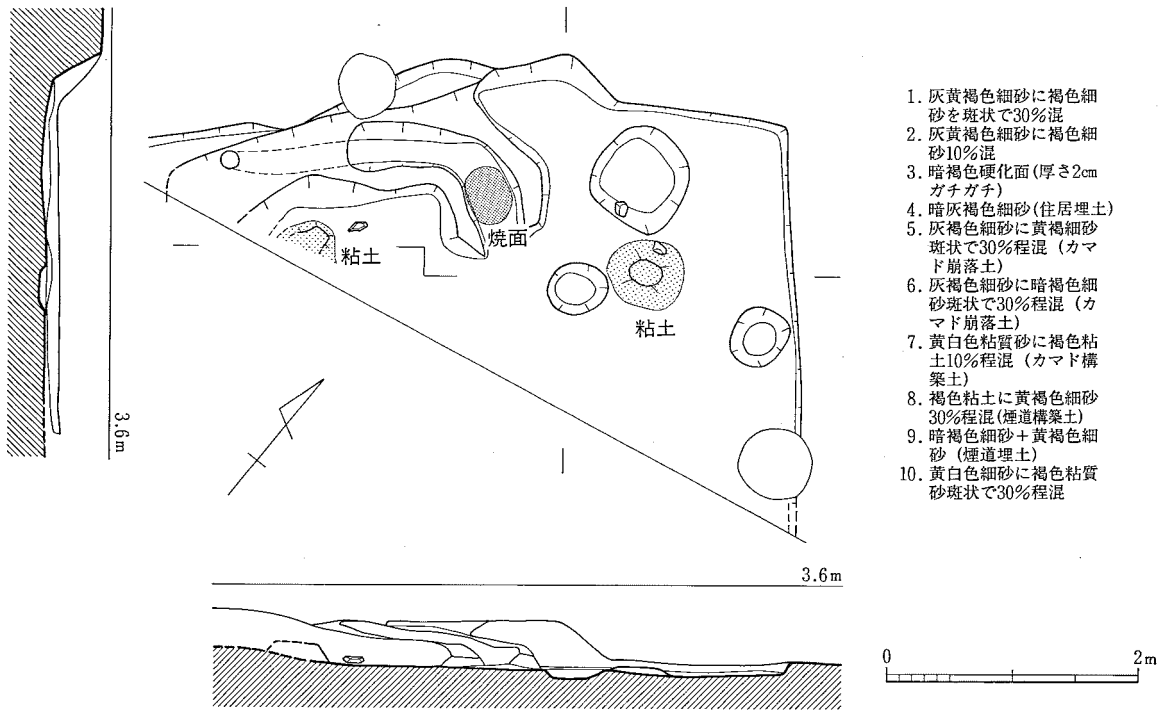
3南1区にあり、63号竪穴住居跡西側に位置する。南側は攪乱を受けるため、西壁しか確認できなかったが、ピットを2個確認したことから住居跡として報告する。覆土は暗黄灰色細砂で、南北3.8m以上の住居跡である。土器の他に石杵(第380図27)が出土。

出土土器 (図版129・130、第343図) 1は山陰系二重口縁壺か。頸部が直立し、口縁端部を外側につまみ出す。肩が張らず、寸胴の器形を呈する。外面はハケをナデ消し、内面は頸部までケズリを行う。2・3は山陰系二重口縁壺。2は口縁端部をナデで面取りし、頸部内面は縦方向になで上げる。4は畿内系直口壺。5は精製の中型畿内系直口壺で、やや内湾する口縁部を持つ。外面は縦ハケのち横ミガキ、内面は暗文風の縦ミガキを施す。6は畿内系小型丸底壺。短く外傾する口縁部で、胴部外面下部はケズリのちミガキ、胴部外面上位は縦ハケのち横ミガキ、口縁部内面は粗雑なミガキを行う。スリップをかけたものか。7は山陰系の中型直口壺。口縁端部は外反が強くなる。5・6は橙褐色、他は淡黄褐色。

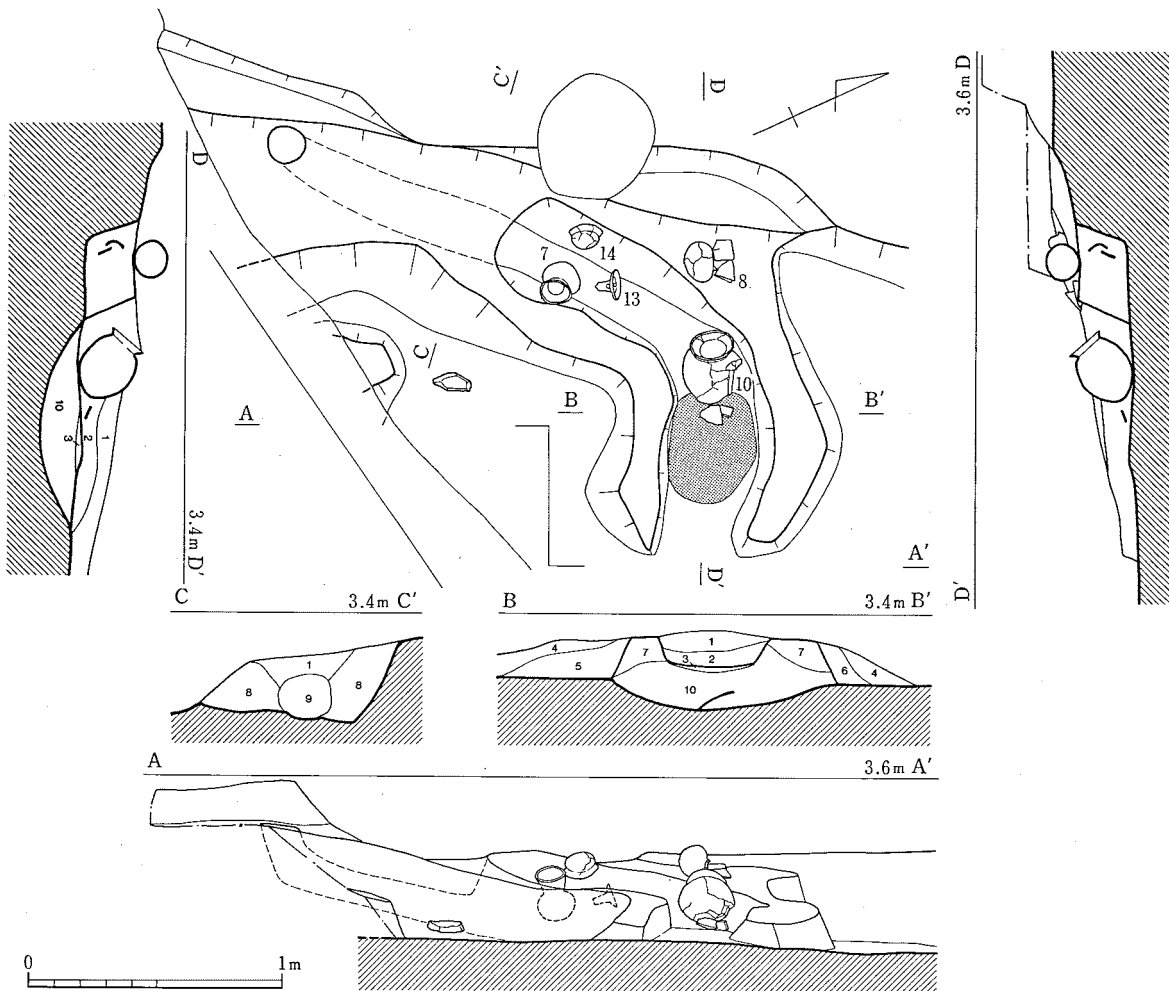
8は布留系の甕である。肩に1条の波状沈線文が巡る。9は精製の畿内系高杯の脚部。外面は縦ハケのち横ミガキ、内面底部近くは横ハケ、柱状部はナデによる絞り痕が残る。比較的やわらかい状態で外側から2ヶ所穿孔する。10は畿内系の有段鉢。器壁が薄く、外湾する口縁部をもつ。磨滅がはげしいが、杯部下位はケズリのちミガキを施す。11は粗製の小型鉢。器壁が厚く、手づくね状。12・13は直口鉢。12の外面底部はケズリ、口縁部内面は横ハケが残る。13は器壁が薄く、外面下位のみケズリを施す。14は山陰系脚付鉢の脚部。外面はミガキを施すか。9・10・14は橙褐色、11は淡褐色、他は淡黄褐色。

15・16は精製の畿内系の小型器台。15の口縁部内面は横ハケのちナデ、その下は暗文風の縦ミガキを施す。脚部裾部はナデにより面をなす。乾燥が進んだ状態で外側から2ヶ所穿孔する。16は器壁が非常に薄く、短く外湾する口縁部をもつ。17はほぼ完形の山陰系鼓形器台。外面はナデ、内面上位はケズリのち太いミガキ、下位はケズリのち底部近くはナデ消す。やわらかい状態で外側から1ヶ所穿孔。15・16は淡橙褐色、17は淡黄褐色。

18は製塩土器脚部。胎土は粗く、焼成は甘い。淡褐色。19・20は焼成は瓦質の半島系土器の胴部片。いずれも外面は斜格子タタキのち平行タタキを行い、上位のみ平行タタキのち細い凹線が巡る。淡灰黄褐色。21・22は蛸壺。21は乾燥前に外側から1ヶ所穿孔か。いずれも淡黄褐色。(大庭)



1. 灰黄褐色細砂に褐色細砂を斑状で30%混
2. 灰黄褐色細砂に褐色細砂10%混
3. 暗褐色硬化面(厚さ2cmガチガチ)
4. 暗灰褐色細砂(住居埋土)
5. 灰褐色細砂に黄褐色細砂斑状で30%程混(カマド崩落土)
6. 灰褐色細砂に暗褐色細砂斑状で30%程混(カマド崩落土)
7. 黄白色粘質砂に褐色粘土10%程混(カマド構築土)
8. 褐色粘土に黄褐色細砂30%程混(煙道構築土)
9. 暗褐色細砂+黄褐色細砂(煙道埋土)
10. 黄白色細砂に褐色粘質砂斑状で30%程混



第344図 156号竪穴住居跡・同カマド実測図(1/60・1/30)

157号竪穴住居跡（図版58・59 第344図）

3中1区の東部に位置するカマド付き住居跡。65・69号竪穴住居跡の下層で検出したため遺存状況は悪く、南部は基礎下にあるため検出できたのは北西壁、北東壁の一部のみである。北西壁中央にカマドを設置している。65・69号住居跡との切合いは不安であるが、カマド近辺出土した土器の一括性は問題がなく、良好なセット関係として捉えられる。覆土上部に灰褐色細砂を斑状に雑えた暗褐色細砂、下部に褐色細砂が堆積していた。土器の他に鉄器（第238図53）が出土。

カマド（図版59、第344図） 住居跡の北西壁中央に設置され、煙道が北西壁沿いに延び、西隅で竪穴外に出る構造のものである。北西壁の中央から0.9m程離れたところを中心に45cm×35cmの範囲の床面が熱変しており、燃焼部に当たると思われる。その部分で袖の間隔は30~40cmを測る。袖は北西壁とほぼ直行しているが、燃焼部の壁側から西に屈曲し、煙道につづいている。煙道は燃焼部から1mのところより住居西隅の屋外への煙出しの部分までトンネル状に残っている。D-Eの断面部分では直径20cmを測り、煙り出しの部分で直径15cm程である。袖の先端部分は黄白色粘質土を主体に構築しており、煙道は下部が褐色粘土、上部が黄灰色細砂を積んで造っている。

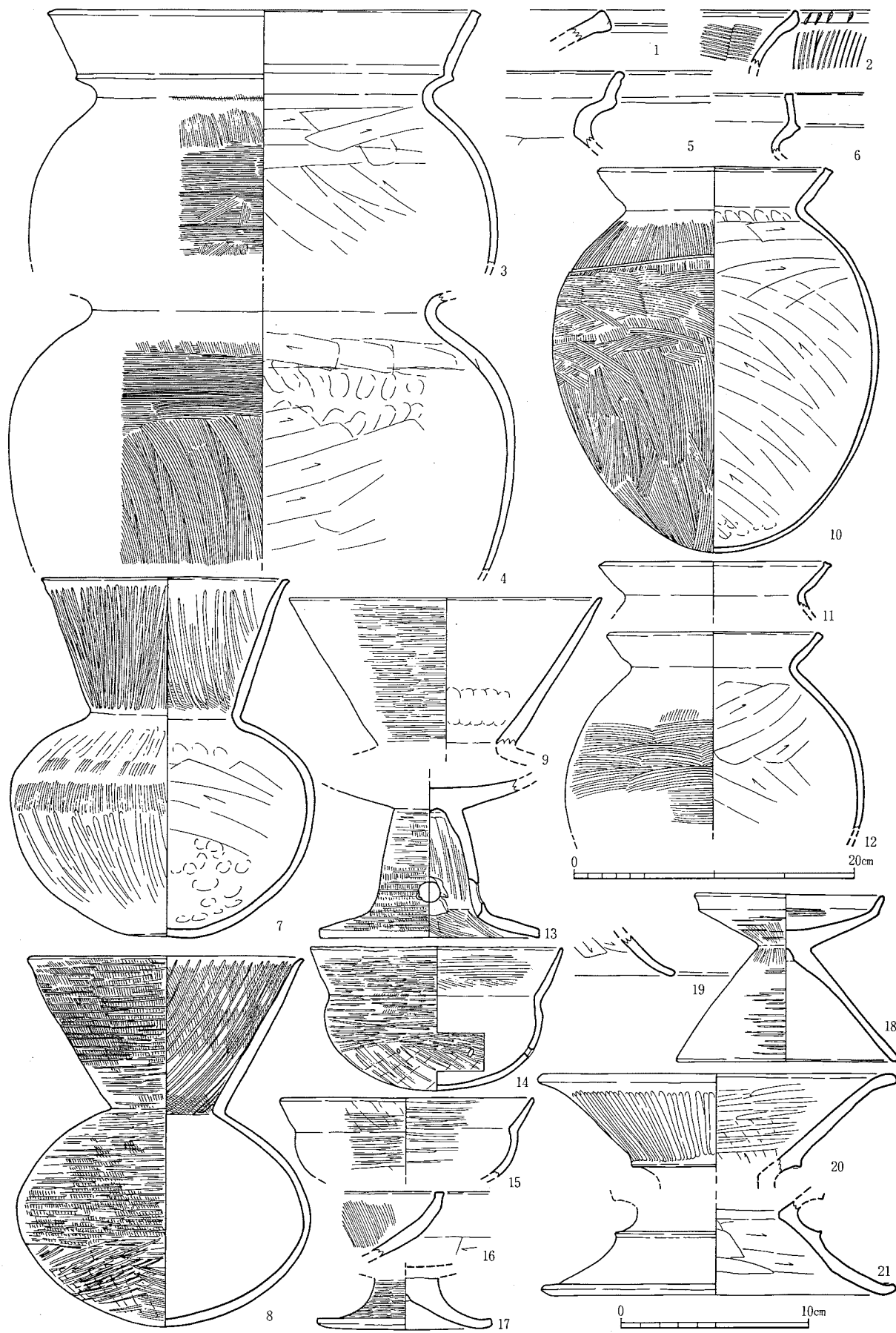
燃焼部の直上ではほぼ完形に復元できる土師器甕（10）が出土し、カマドに煮沸具としてかけられていた可能性がある。一方、煙道内と袖上から中形直口壺2点、鉢1点、高杯脚部1点（7・8・13・14）が出土している。これらはほとんど完形に復元でき、意図的に配置されたと考えられるが、7の中形壺が袖上より出土していることから、カマドを壊した後で置かれたと考えられる。また、高杯13は脚部が完存するが接合する杯は周辺部から出土しないので、意図的に破砕した後に置かれた可能性がある。このような土師器の出土状況はカマド封じに伴う祭祀行為を復元する場合の良好な資料となろう。なお、ちょうど中形壺8の下の袖構築土中から脚部の半分欠損した小形器台（18）が出土した。これはカマド構築時に置かれたと考えられ、構築時にも何らかの祭祀行為が執り行われることもあったと推測される。この他、12がカマド左袖外側から出土している。

出土土器（図版130、第345図） 上述した土器の他に、1・3・6・17がカマド周辺、4がカマド下部掘り方から出土した。また、2は覆土下層から、5は覆土上層から出土した。

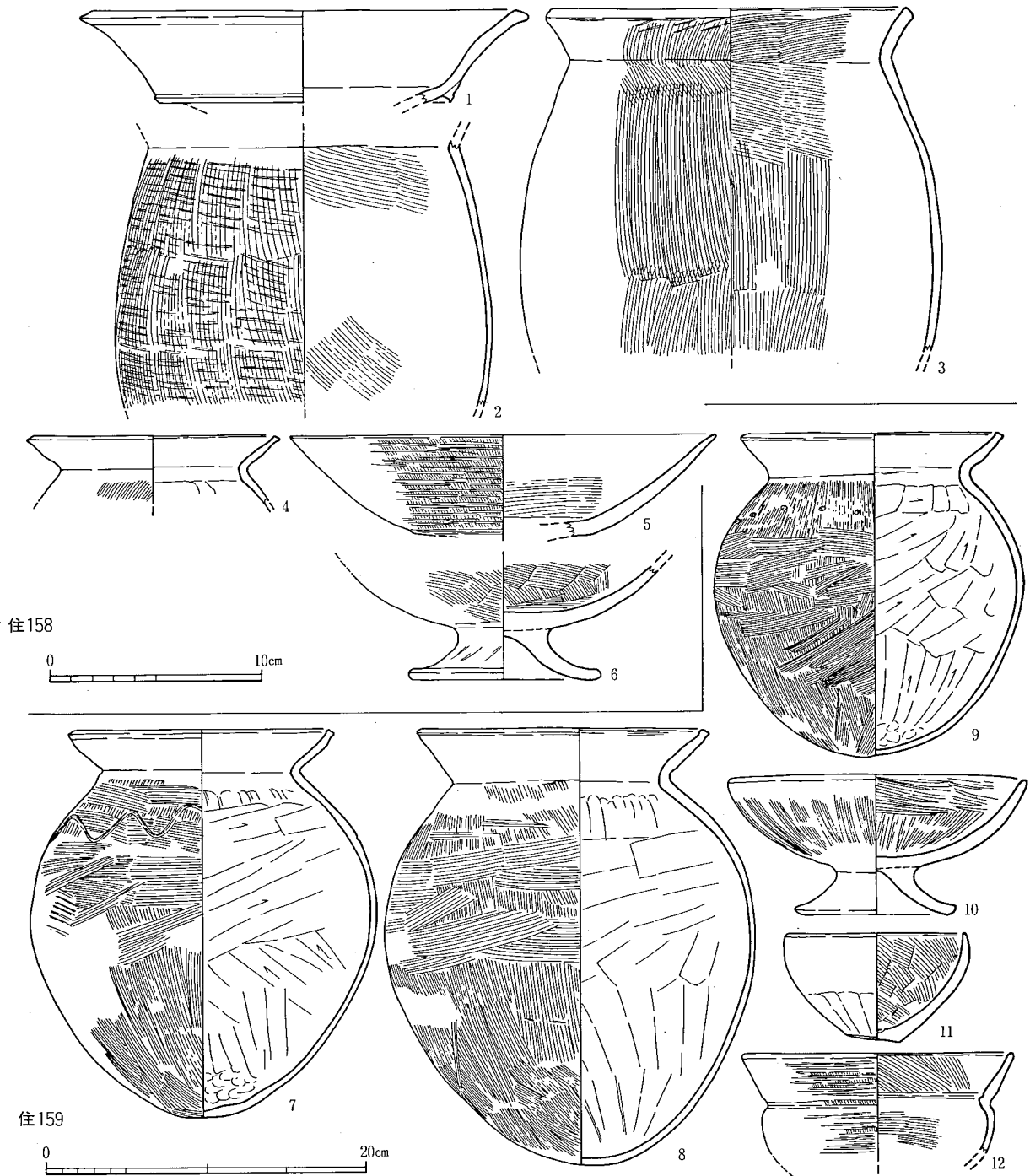
1は口縁を肥厚させており、在地系直口壺口縁部か。2は口縁端部を上にした拡張気味でハケメ工具刺突による刻目を施し、内外粗いハケメで仕上げる。黄白褐色。3~6は山陰系二重口縁壺で、白褐色の6を除けば、白黄褐色~灰黄褐色。4は口縁部を失っており、胴部外面横ハケ後縦ハケ、内面は上下のケズリが重ならず肩部内面に指圧痕が残る。5は口縁部が短く、6は内傾しており、小形の個体と考えられる。7~9は畿内系の中形直口壺。7は口縁部~胴部を縦ハケ後縦ミガキ、口縁内面を斜めハケ後縦ミガキで仕上げられており、8など通例と異なる。完形であるが煤、黒斑はみられず、褐黄色を呈する。8は外面胴下部ケズリ、その他縦ハケ後横ミガキ、口縁部内面斜めハケ後暗文風のミガキ。胴部内面は完形のため観察が難しい。完形であるが煤は付着せず、底部に10cm大の黒斑がある。淡黄褐色~淡橙褐色。9は淡橙褐色の口縁部片で、外面ミガキ、内面ナデ。

10~12は布留系甕で、10は淡黄褐色、11・12は褐灰色~灰褐色。10はほぼ完形に復元される。直線的に外傾する口縁の端部を斜め上方につまみ上げ、肩部外面に1条の沈線を巡らす。胴外面は縦ハケを胴中部の横・斜めハケが切っている。胴下部には煤が付着するがさほど強い火を受けたようには見受けられない。口縁部破片の11も10とほぼ同様の形態。

13は高杯脚部~杯底部の破片。脚外面は縦ハケ後横ミガキ、脚柱内面は線条の残る縦方向板ナデ、



第345図 157号竪穴住居跡出土土器実測図 (1~4・10~12は1/4、他は1/3)



第346図 158・159号竪穴住居跡出土土器実測図（1～4・7～9は1/4、他は1/3）
（1～6：住158、7～12：住159）

脚裾内面斜めハケ仕上げ。杯部内面はミガキ、外面は摩滅する。橙褐色を呈し、一部に煤の付着、二次加熱が認められる。14・15は外面ミガキ仕上げの外反口縁鉢。14は外面にミガキ前ハケ、ケズリが残り、口縁部内面横ハケ、胴部内面摩滅。胴部に意図的なものか不明であるが、孔が2ヶ所にある。黄橙色。15は口縁部外面にミガキ前指圧痕、胴部外面にケズリが残り、胴部内面は粗な横ミガキ。淡橙褐色を呈する。16は褐色の単口縁鉢口縁部か。口縁端部は水平面をなし、胴下部はケズリ仕上げ。17は脚付鉢脚部片で、外面は横ミガキで、脚内面上部に軸受け痕か凹みが残る。

18は橙褐色の織内系精製小形器台で、外面ハケ後横ミガキ、受部内面も一部ミガキ残る。脚裾内

面は摩滅し、残存部分に穿孔は見られない。19～21は山陰系鼓形器台。19・21は脚裾片で、脚内面ケズリ、他は横ナデ。20は口縁部片で口縁端を除き、外面縦ミガキ、内面ケズリ後縦ミガキ。19褐灰色、20淡黄褐色、21橙褐色～淡黄褐色。(重藤)

158号竪穴住居跡 (第132図)

3中1区の東部にあり、75・128号竪穴住居跡に切られる竪穴住居跡。後から造られた住居跡、校舎基礎に壊されているために遺存状態が悪く、南西隅を検出したのみである。74号住居跡のところでも述べたように、74号住居跡の一部となる可能性もろう。暗褐色細砂を覆土としている。

出土土器 (第346図1～6) 1は二重口縁壺口縁部片で、口縁部が大きく外傾し、屈曲部に粘土を貼付して垂下させることから畿内系か。内外横ナデ仕上げで、淡黄褐色。2・3は内外ハケメ仕上げの在地系甕。2は胴外面全体、3は口縁外面端部近くにハケメに先行する粗いタタキ痕が残る。いずれも淡黄褐色で、3外面には煤が付着する。4は淡褐色の布留系甕。5は高杯杯部片で外面ハケ後ミガキ。内面は摩滅してハケメのみ残るが、あるいはミガキ仕上げか。6は脚付鉢。鉢部内外ハケメ仕上げで、脚外面には絞り痕状の浅く幅広の斜め方向皴が残る。白黄褐色。(重藤)

159号竪穴住居跡 (第138図)

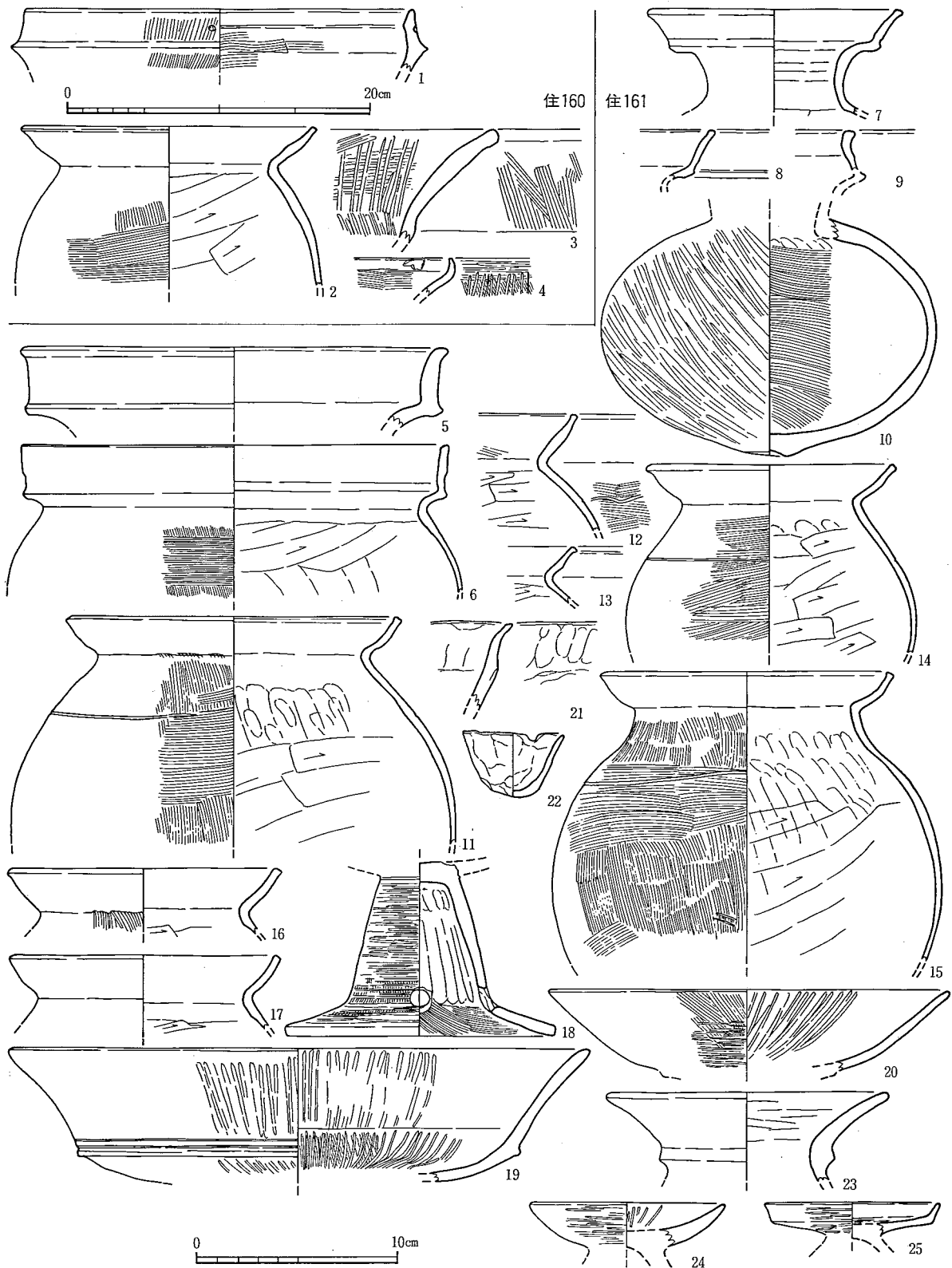
3北1区の東南部にあり、76号竪穴住居跡と81号竪穴住居跡に挟まれて位置している。南を大きく76号住居跡に切られており、検出できたのは北壁と東壁、西壁の一部である。しかもこれらの壁が整った方形をなさず、竪穴住居跡になるかどうかとも疑わしい。覆土上部は暗灰褐色細砂、下部は灰褐色細砂。

出土土器 (第346図7～12) 7～9はすべて淡黄褐色を呈する布留系甕で、いずれも図上で完形に復元できた。7は肩部外面に波状沈線文を巡らし、縦ハケ後横・斜めハケを施す。一部にハケメ前タタキも確認できる。内面はケズりに先立つナデ痕が頸部下に残るが、ナデに板状の工具を用いたようでもある。肩部を除く外面に煤が付着している。8は外面縦ハケ後横斜めハケ仕上げ。口縁端部は上に少し拡張気味である。器形は復元時の歪みが大きく、外面に煤が少し付着する。9は外面縦ハケ後横・斜めハケ仕上げで、肩部に棒状工具小口刺突の列点文を巡らしている。頸部内面には接合痕が残り、外面肩部を除き煤が付着する。10は脚付鉢で、鉢部外面縦ハケ、内面幅2mm程のやや太い縦、横ミガキ仕上げ。淡黄褐色を呈する。11は小形で深い器形の直口鉢。小さな平底をなし、外面下部板ナデ、内面ハケメ仕上げ。12は淡橙褐色の外反口縁鉢で、外面ハケ後横ミガキ、内面ハケ後ナデ。頸部内面に凹線が巡っている。(重藤)

160号竪穴住居跡 (第268図)

3中2区にあり、119号竪穴住居跡の下層で検出したものである。西壁は119号竪穴住居跡と一致するため検出できていないが北壁、東壁、南壁の一部を116号・119号竪穴住居跡の下層で検出している。ただ南壁、東壁は119号住居跡壁とはほぼ一致しているので、160号住居跡の平面形を間違えて、119号住居跡としてとらえた可能性もあるだろう。土器の他に鉢(第237図31)が出土。

出土土器(第347図1～4) 1は在地系複合口縁壺で、口縁部の伸びは短く、端部が内傾する面をなす。口縁外面に焼成後ドリルのような工具で穿った貫通しない小孔がある。2は布留系甕。3は



第347図 160・161号竪穴住居跡出土土器実測図（1・5～8・11～15は1/4、他は1/3）
（1～4：住160、5～25：住161）

器形が深いが在り系高杯口縁部か。外面斜めハケ、内面横ミガキ後縦ミガキ調整。4は小片で器形不明の精製土器。口縁を丸く屈曲させて上方に立ち上げる形態が特徴的である。外面ハケ後口縁部横ミガキ、その下を暗文風縦ミガキ調整。内面はハケメで、口縁端近くに搔き取った小粘土塊が付着する。1～3は淡黄褐色～灰黄褐色を呈し、4は橙褐色。（重藤）

161号竪穴住居跡（第149図）

3北1区東南部にあり、81号竪穴住居跡に切られると考えて発掘調査を行った。検出できたのは住居の北西隅のみ。ただ、北壁は81号竪穴住居跡の煙道と方向が一致しており、西壁は延長すると「住81南西包含層」、さらには「住81東包含層」とした部分とつながるようである。これらから考えて81号住居跡の平面プランを間違えて、北西隅部分を161号住居跡とした可能性が高い。そうすると81号住居跡は東西5.3m、南北4.2mの長方形の平面プランとなる。

出土土器（図版131、第347図5～25） 5～9は山陰系二重口縁壺口縁部片。5は大形で口縁部が直立する。6は頸部が短く、口径が大きいのであるいは二重口縁の大形鉢となるか。8・9は小片ではあるが器壁が薄くあるいは中小形品か。いずれも灰黄褐色～白黄褐色～淡黄褐色を呈する。10は底部が小さな凹み底をなし、頸部が小さい壺胴部片。外面は斜めハケ、完形のため観察が難しいが内面はハケ仕上げで、淡褐黄色を呈する。

11～17は布留系甕。直線的に外傾する口縁の13を除けば、いずれも口縁部は内湾気味で、口縁端部は16がやや丸みを帯び、15は内上方に拡張気味である。11・14・15は肩部に直線沈線文を巡らしている。11は口径22.0cmに達し、胴部が張った比較的大形の器形をなす。外面は肩部横ハケ、胴下部縦ハケの順で、内面は横方向のケズリが比較的下でとどまっており、それに先行する指圧痕、粗い縦ケズリの残る点が注目される。15は肩部が強く凹む特徴的な器形をなす。胴部外面は頸部縦ハケ、肩部横ハケ、胴下部縦ハケの順。胴部内面はケズリがあまり上まで及ばず、ハケメ前の指圧痕が残る。いずれも白黄褐色～淡黄褐色を呈し、14・17の外面には煤が付着する。

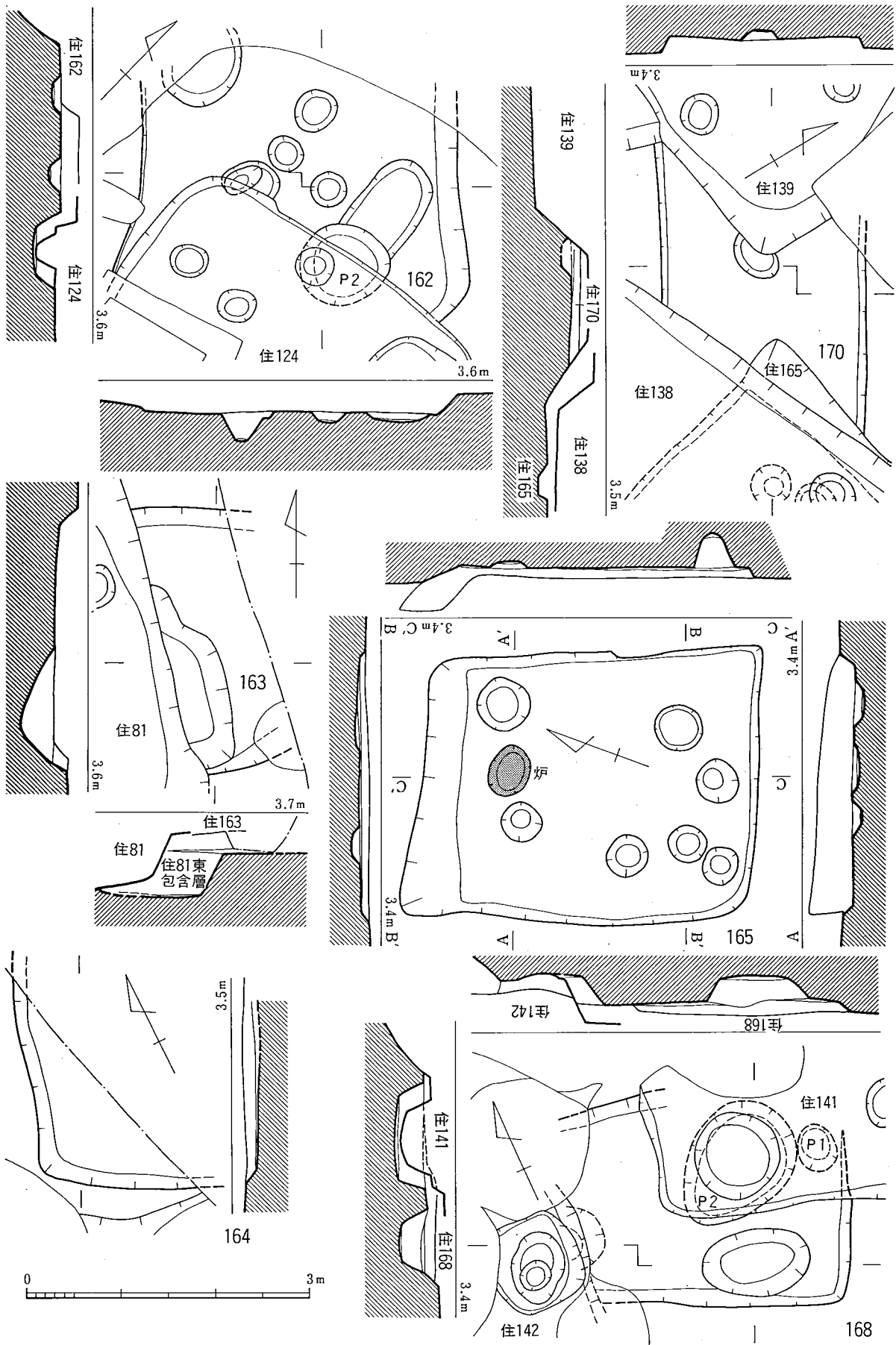
18は高杯脚部、19・20は高杯口縁部である。18は外面縦ハケ後横ミガキ、内面脚裾ハケメ、脚柱ナデか。屈曲部の2方向に半乾燥時穿孔を施す。淡橙褐色。19は口径が大きく、外面屈曲部上が強い横ナデにより沈線状になる在地系高杯口縁部。杯底部内面ハケメ後内外に暗文風の縦ミガキで仕上げている。白黄褐色。20は外面斜めハケ後横ミガキ、内面暗文風のミガキで、橙褐色を呈する。

21は強いナデにより口縁を外反気味につくるが、鉢状の器形となるか。暗褐灰色を呈す。22は手捏ね風の作りの鉢。くすんだ橙褐色。23は口縁内面に粗いミガキを施し、口縁下に突帯状の段を形成することから鼓形器台と考えるとここに示した。ただ、屈曲部が間延びし、内面に稜がないために壺口縁になる可能性もある。外面は横ナデ仕上げで、淡黄褐色を呈する。器壁が厚く、やや雑な作りである。24は鉢状の単口縁をなすが、底部が厚く、外面横ミガキ、内面暗文風放射状ミガキを施すことから小形精製器台受部片と考えた。25は直立する口縁の小形精製器台受部片で外面ミガキ、受部底内面放射状ミガキ調整。橙褐色。（重藤）

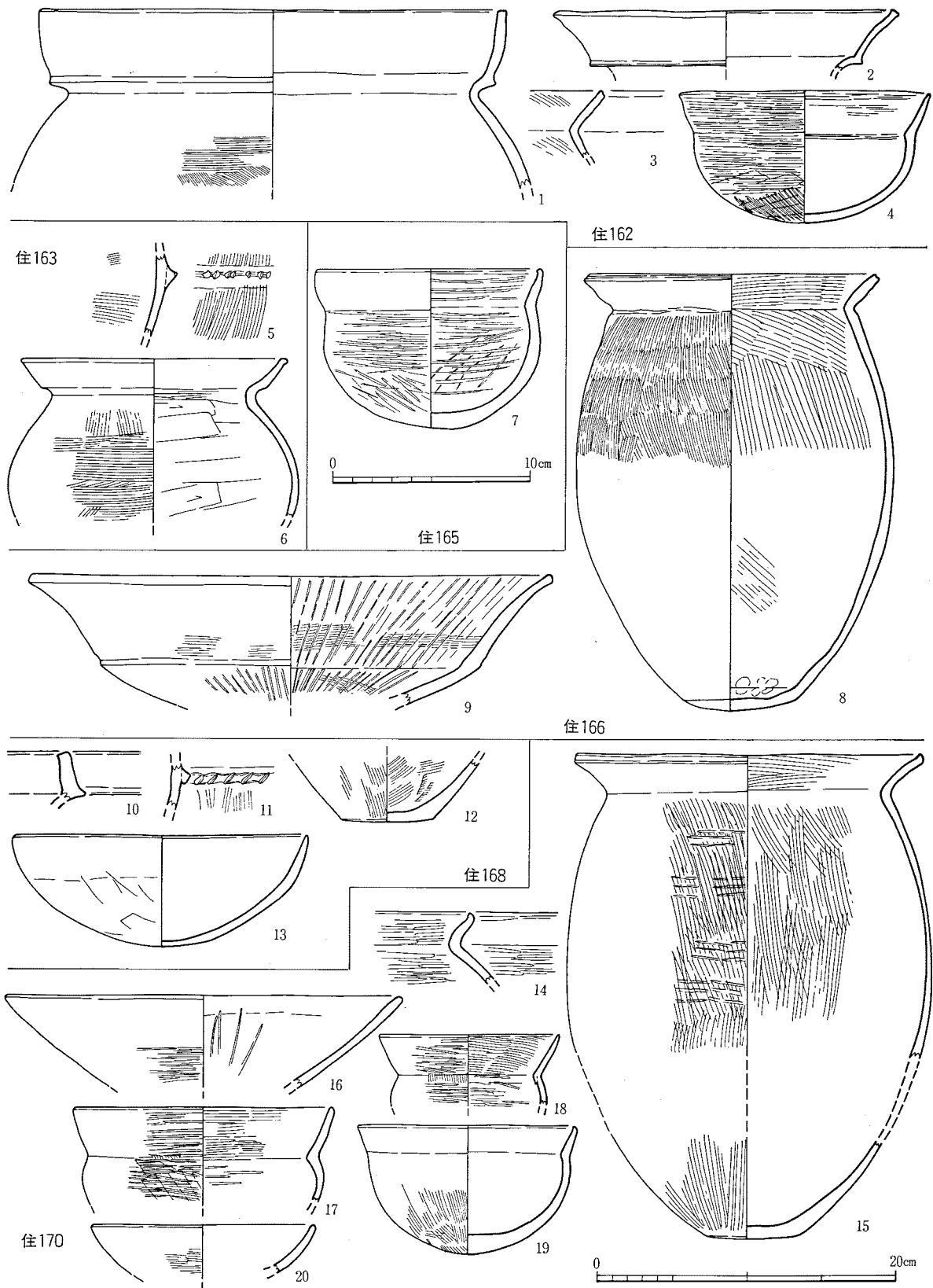
162号竪穴住居跡（図版59、第348図）

3北1区の中央やや南よりにあり、南側を124号竪穴住居跡に切られる。また北西部は攪乱により失われるので、西北壁の一部と東南壁の一部を検出したにとどまる。炉跡も確認されなかった。

出土土器（図版131、第349図1～4） 1・3は覆土中、2・4はP2から出土した。1・2は山陰系二重口縁壺。1は頸部が短く、胴部内面は摩滅し、白褐色。2は灰黄褐色。3は胴部、口縁内面にハケメを残す在地系甕口縁で、淡黄褐色。4は外反口縁鉢で、胴外面下部ヘラケズリ、内面ナデ後外面～口縁部内面横ミガキ調整。頸部内面は細い凹みが巡る。橙褐色の精製品。（重藤）



第348图 162~165·168·170号竖穴住居跡実测图 (1/60)



第349図 162・163・165・166・168・170号竪穴住居跡出土土器実測図

(1~3・5・8・10~12・15は1/4、他は1/3)

(1~4:住162、5・6:住163、8・9:住166、12~18:住168、14~19:住170)

163号竪穴住居跡（第348図）

3北1区の東壁にかかる竪穴住居跡で、西側を81号竪穴住居跡、住81東包含層に切られている。検出したのは南北壁の一部のみであるが、床面が平坦であるので住居跡となることは間違いなからう。土器の他に砥石2点（第380図28・29）が出土。

出土土器（図版、第349図5・6） 5は在地系壺胴部片で、断面三角形の刻目突帯を巡らしている。6は布留系甕で、頸部外面の強い横ナデが特徴的。いずれも淡黄褐色を呈する。（重藤）

164号竪穴住居跡（第348図）

3北1区の東壁にかかる竪穴住居跡で、163号竪穴住居跡の南に位置している。住居跡の西南隅を検出したのみである。図示できる出土遺物はない。（重藤）

165号竪穴住居跡（図版59、第348図）

3西拡張区の南寄り、138号竪穴住居跡の下層で検出したものである。南部は138号竪穴住居跡に削平されるため壁の高さ10cm余りしか残っていないが、北壁は40cm余りの高さが残っている。南北3.6m、東西2.9mの小形長方形の竪穴住居跡で、北壁に近いところに長軸方向60cm、短軸方向40cm程の楕円形の炉跡がある。

出土土器（図版131、第349図7） 図示できるのは外反口縁鉢1点のみである。比較的深い胴部に、短くやや内湾気味で端部を内に肥厚させた口縁部がつく特徴的な器形である。内外ミガキ仕上げで、胴部外面下部ヘラケズリ、胴部内面下部斜め工具痕が残る。淡橙褐色を呈するが、ミガキがまばらで半精製の印象を受ける。（重藤）

166号竪穴住居跡（第329図）

3西拡張区の南部にあり、146号竪穴住居跡に北側を大きく削られる。135号、137号竪穴住居跡に南東隅を切られるように図示したが、切合関係は十分に確認できていない。また南西部は139号竪穴住居跡と重なるが、切合いは不明である。土器の他に砥石（第243図24）が出土。（重藤）

出土土器（第349図8・9） 8はほぼ完形の在地系甕で口縁は外傾し、レンズ状底である。胴部外面上部ハケ、下部ナデ、口縁部～胴部内面ハケメで、胴下部内面は摩滅している。褐黄色で、外面全体に煤が付着。床面直上から出土。9は褐色を呈する高杯杯部片で在地系か。口縁部外面ハケ後ナデ、杯底部外面暗文風縦ミガキ、内面横ハケ後暗文風縦ミガキ。P1より出土。（重藤）

167号竪穴住居跡（第312図）

3西拡張区にあり、138号竪穴住居跡に北側を切られる。南は調査区外に続き、住居跡の東壁の一部を検出したにとどまる。図示できる出土遺物はない。（重藤）

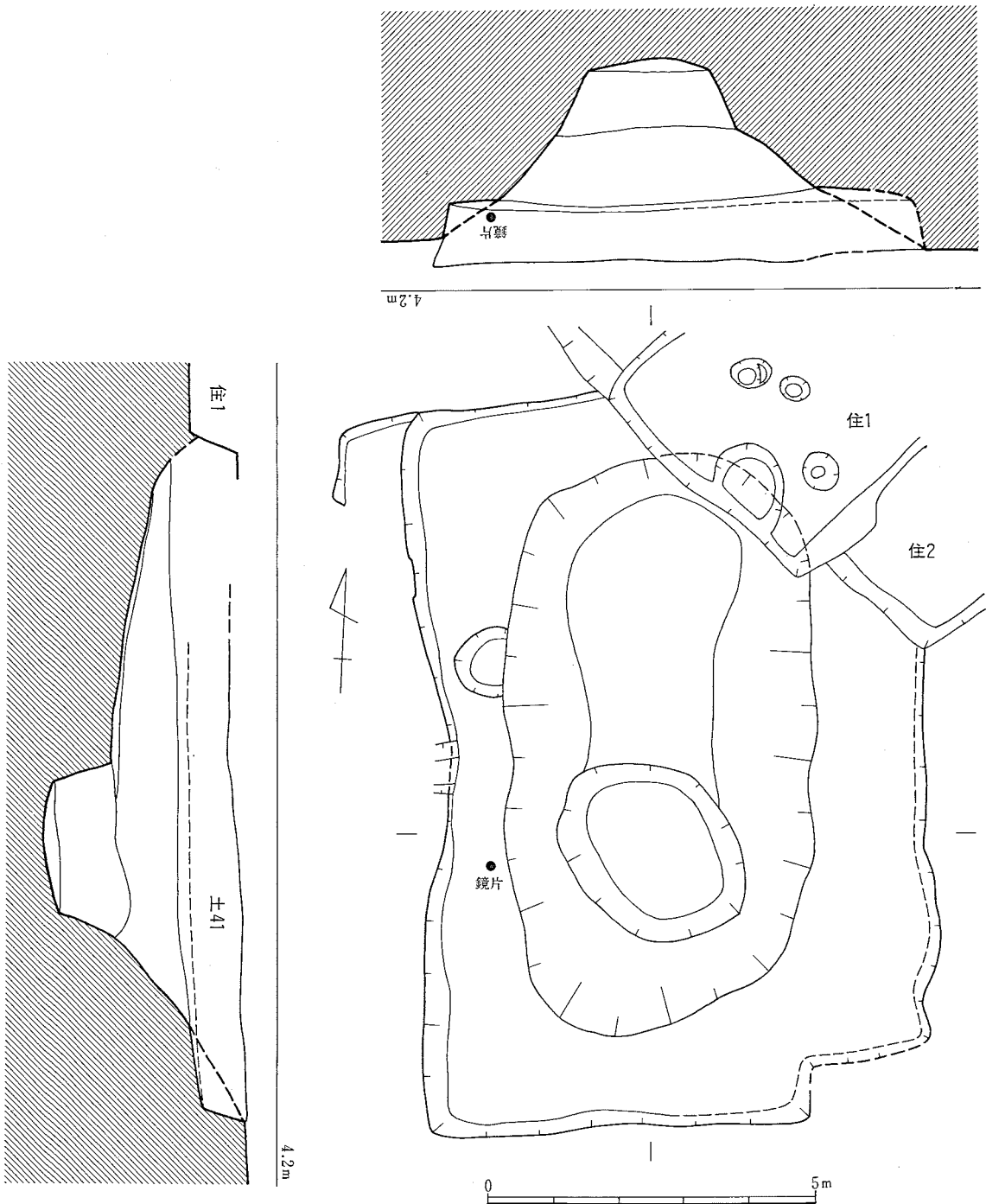
168号竪穴住居跡（第348図）

3西拡張区の西南部にあり141・142号竪穴住居跡に切られている。加えて周辺の攪乱も著しいために北壁の一部と東南隅を検出したにとどまる。141号住居跡に切られる部分で、下層から長軸140cm、短軸110cm、深さ30cm余りの平面楕円形土坑を検出した。

出土土器（図版131、第349図10～13） 図示できる遺物は少ない。10は在地系複合口縁壺口縁部でP 2より出土。11は在地形壺胴部片で、断面コ字状の刻目突帯を貼付する。P 1より出土した。12は平底で内外ハケメ仕上げの在地系甕底部片。外面には煤が付着する。13は単口縁鉢で外面下部ケズリ風ナデ。これらの土器はいずれも灰黄褐色～淡黄褐色を呈する。（重藤）

170号竪穴住居跡（第348図）

3西拡張区南部にあり西北部を139号竪穴住居跡、東南部を138・165号竪穴住居跡に切られている。そのため北壁と南壁の一部を検出したにとどまり、住居跡の規模などは不明である。土器の他に石



第350図 41号土坑実測図（1/100）

器（第380図33）が出土。

出土土器（図版131、第349図15～20） 14は口縁部の短い小形壺で、外面～胴部内面を横ミガキ仕上げ。淡黄褐色を呈する。15は灰黄褐色の在り系甕。底部と口縁～胴部の2片に分離している。口縁部はやや外反気味で端部が直立に近い面をなす。胴上部は内外ハケメ仕上げで、外面にはハケメに先行する粗いタタキ痕を残す。底部は平底に近いレンズ状底で外面ハケ、内面ナデ仕上げ。本住居跡出土の他の土器と比べると古相を呈す。16は高杯口縁部か。内外摩滅進むが、外面横ミガキ、内面板ナデ後暗文風ミガキ。淡橙褐色。17～19は外反口縁鉢。17は胴部外面ケズリ後外面全体に横ミガキを施し、口縁部内面はハケメ、胴部内面はミガキ仕上げ。18は胴部外面ハケ、口縁部内面ハケ後外面と胴部内面に横ミガキを施す。内面頸部下には接合痕を残す。19は口縁部の伸びが短く、胴外面下部ハケメ、口縁部～内面ナデ仕上げでミガキが観察されない。外面～口縁内面に煤、胴部内面にコゲが付着する。これらの外反口縁鉢は19が灰黄褐色を呈し、他は橙褐色。20は淡褐灰色を呈する単口縁鉢で、外面下部ハケ、他はナデ調整。（重藤）

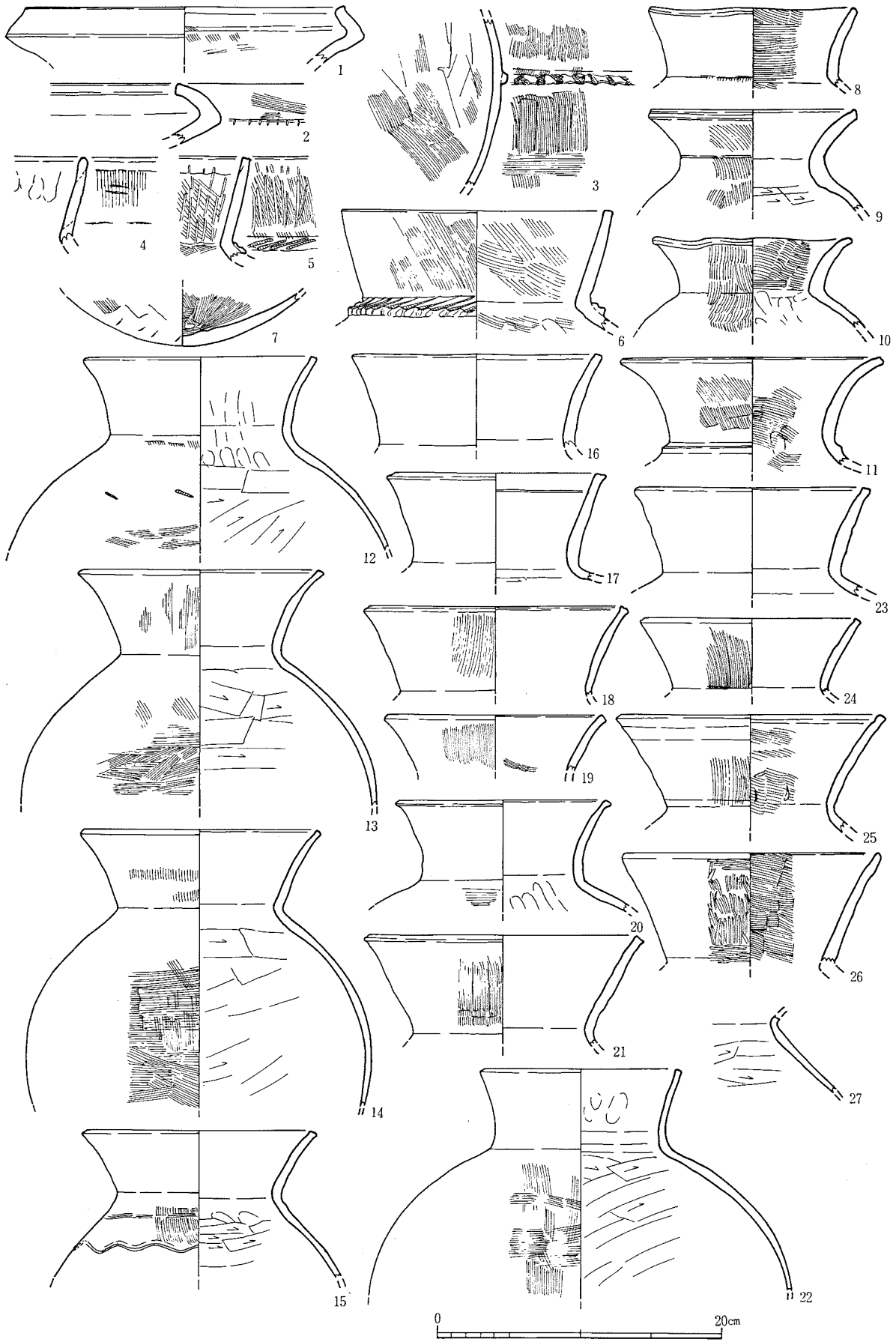
2. 古墳時代の土坑と出土土器

41号土坑（図版62、第350図）

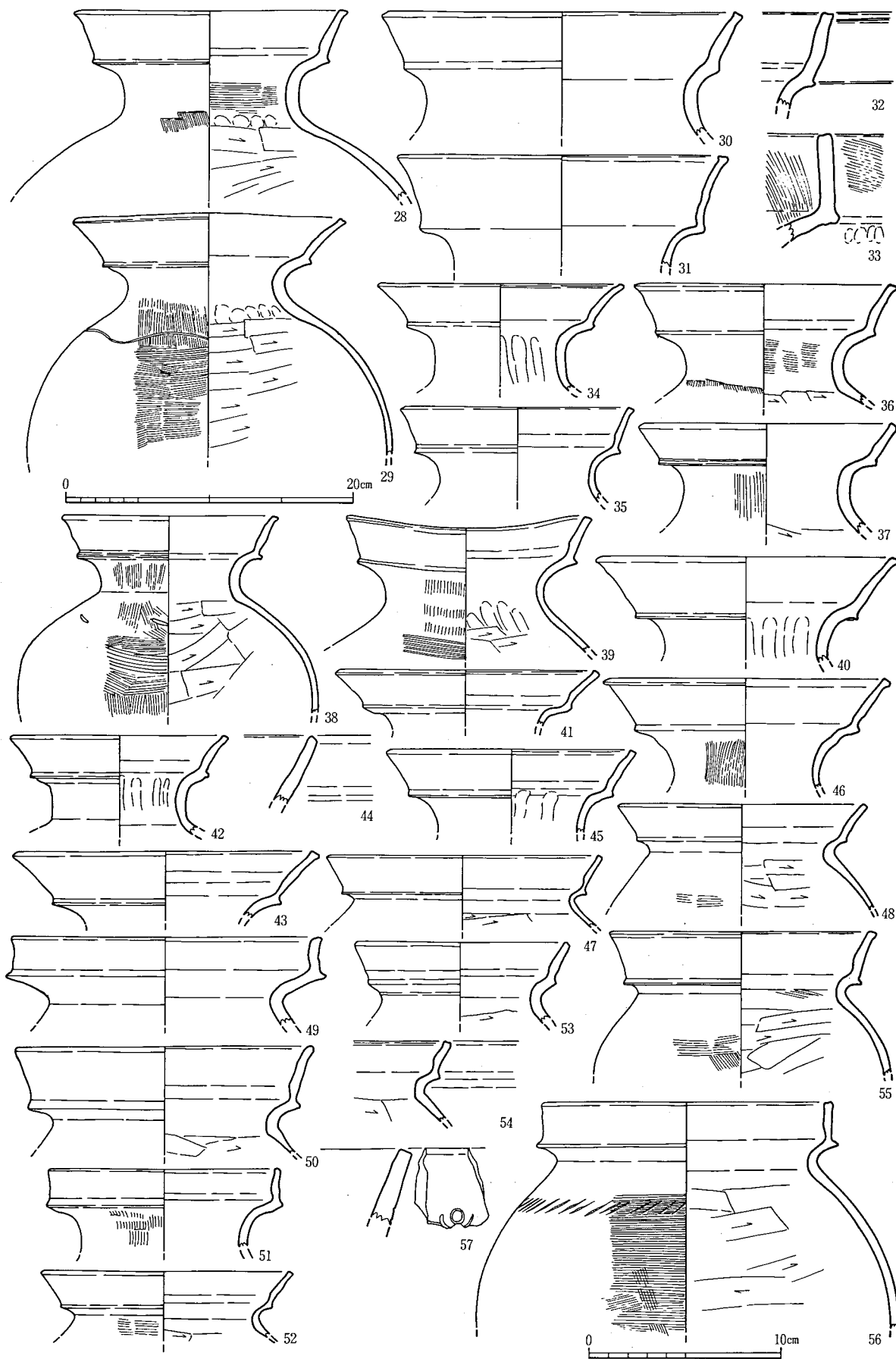
1区の東部に位置し、北東部を1・2号竪穴住居跡に切られる大形の土坑である。主軸をほぼ南北方向にとり、検出面で南北11.3m、東西7.8mを測るほぼ長方形を呈している。他の古墳時代遺跡ではあまり例を見ない巨大な土坑のため、検出当初はいくつかの住居跡の切合いではないかと間違えた程である。そのため、発掘当初はやや不自然に壁を直に近い角度で掘ってしまい、図示したように方形の掘り方の中に長さ9m程の楕円形土坑がある2段掘りの状況となったが、本来は壁は緩やかに傾斜して立ち上がると考えられる。南壁から3～5mの範囲が直径2.7mのほぼ円形に急に深くなっており、その底面は検出面から3.0m程、標高0.6mを測り、湧水点より下となっている。覆土下部は黄灰色砂ブロックが混じる黄褐色砂、覆土最下部は黄灰色～灰白色砂に黄褐色砂が混じていた。覆土中から土器が多量に出土したが、上部では比較的大きな破片であったのに対して、下部では小片であった。南西隅から北に4m程の西壁沿いで後漢鏡片（第236図1）が出土した。このほかに鉄器も出土している（第237図21・28・30、第238図54・55・63、第376図3）。

出土土器（図版132～136、第351～360・362図1～290） 1～2は複合口縁壺口縁部で、2はやや古相を呈することから混入品か。3は在り系大形壺の胴部片で、天地は不安である。胴部外面に断面コ字状突帯を貼付し、突帯頂部にはハケメ工具小口刺突による交叉刻目文を施している。4～6は口縁部が直立に近く、頸部に突帯をもつものもことから、在り系の直口壺か。5・6とも頸部突帯にハケメ工具小口刺突の刻目を施す。5は内外を粗い縦ミガキ仕上げする。7は底部片で、器壁が厚く、内面にハケメを残すことから在り系か。外面はタタキ後板ナデ。

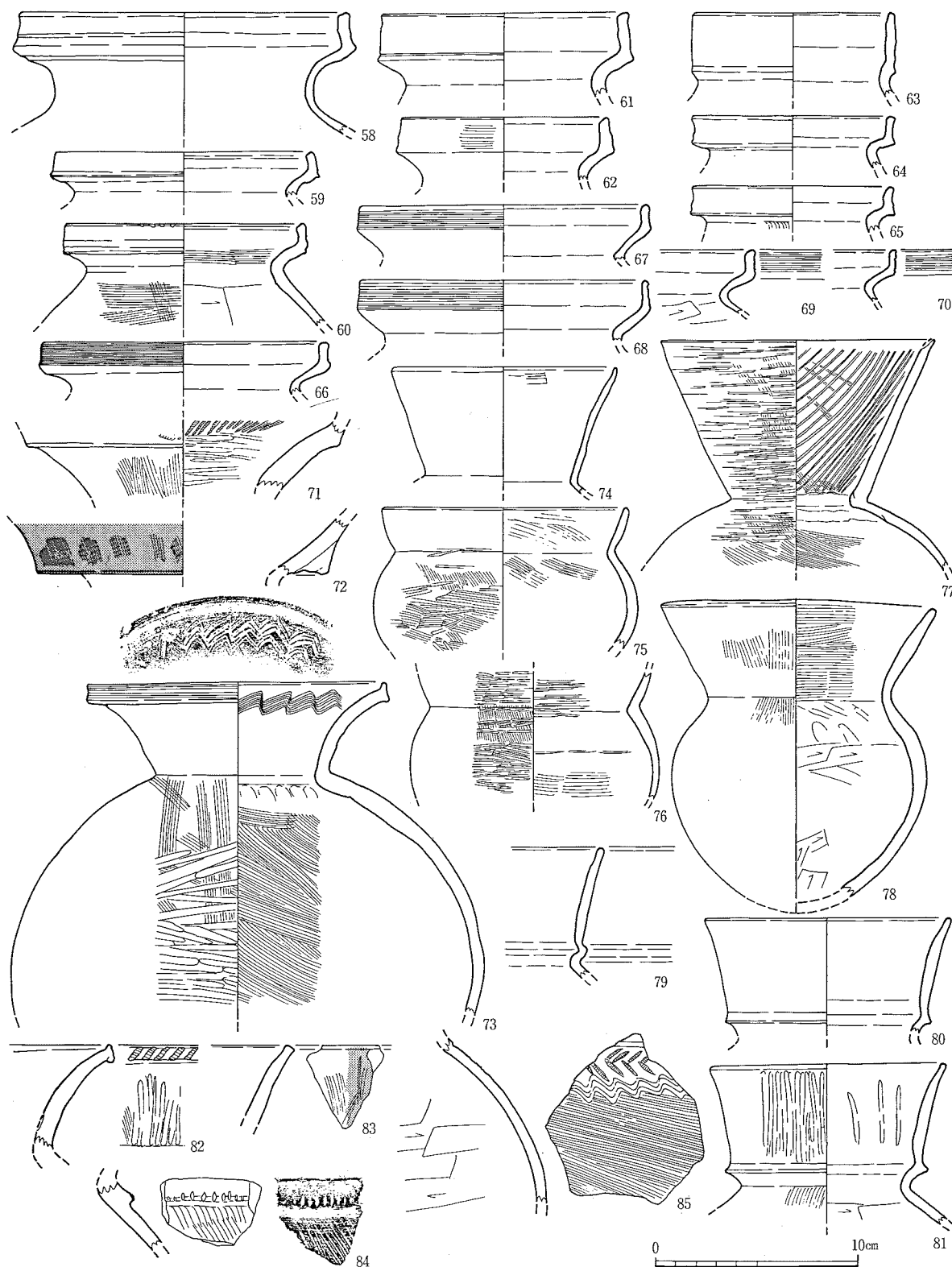
8～26は畿内系直口壺と考えたものである。ただ9～11は器壁が厚く、内外の仕上げも粗雑であることから、在り系となる可能性もあるだろう。10は胴部内面に指圧痕を残している。11は肩部に低い断面三角形突帯を巡らすことが、やや特異である。12は肩部にハケメ工具刺突文、15は2条1単位の波状櫛描文を巡らしている。15の波状櫛描文の上に浅い沈線が巡っているが、意図的な文様か、横ナデによるものかは判断が難しい。20は口縁端部を外に拡張し、残存部の胴部内面はナデ仕上げ。22は口縁部が直立に近い角度で立ち上がり、他と異なっている。26は口縁内外ハケメ後、縦



第351图 41号土坑出土土器实测图(1)(1/4)



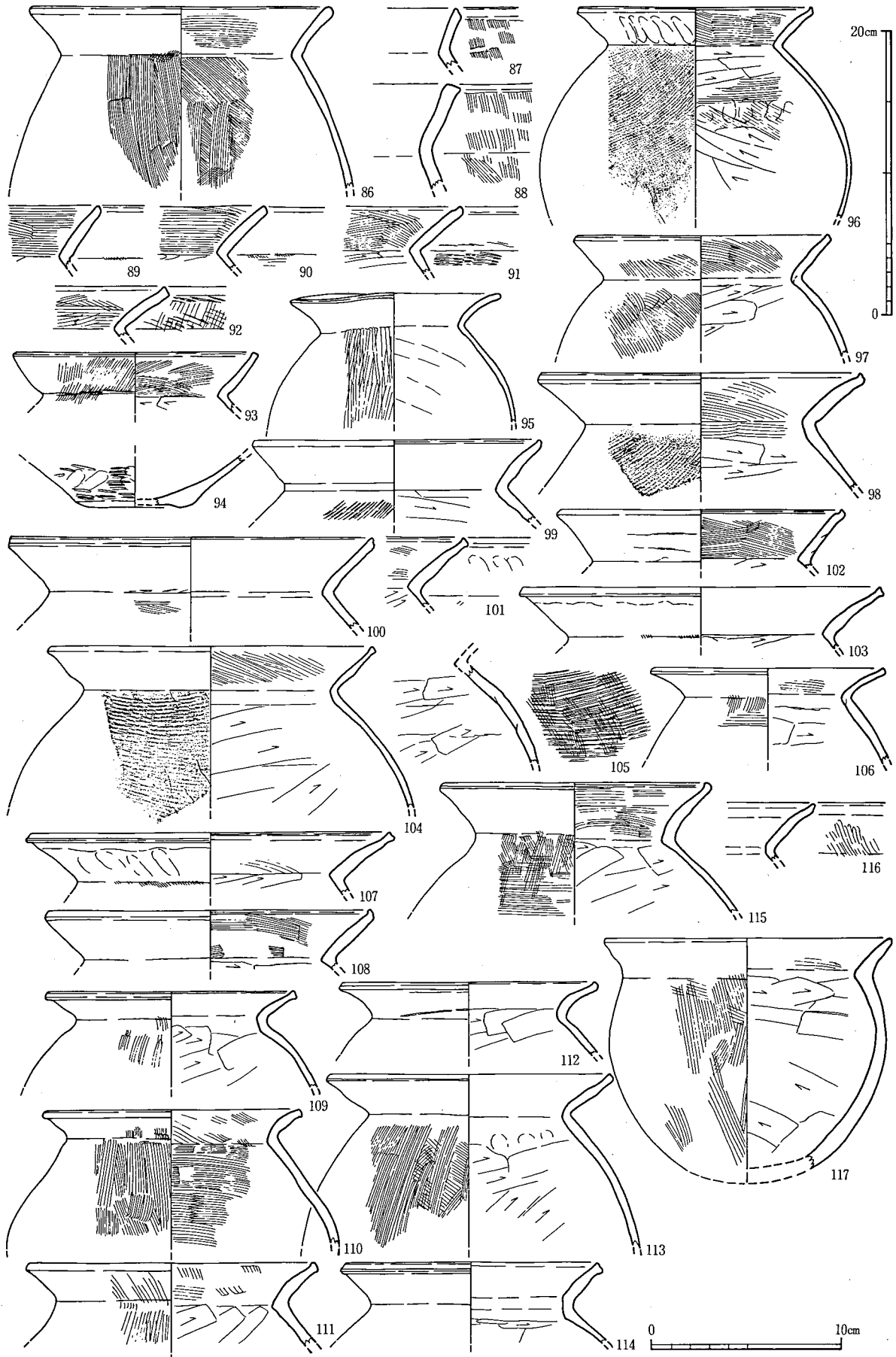
第352図 41号土坑出土土器実測図(2) (48~57は1/3、他は1/4)



第353図 41号土坑出土土器実測図(3)(1/3)

ミガキを施す。27は口縁部を欠損するが、傾きから考えて、直口壺の肩部となるか。

28~47・57は中・大形品の山陰系二重口縁壺、48~56・58~65はやや小振りの山陰系二重口縁壺である。29は肩部に1条沈線波状文、38はハケメ工具によるかは不明であるが刺突文、39は5条以上を1単位とする櫛描直線文を巡らしている。32は外面口縁端部直下が強いナデにより、沈線状に



第354图 41号土坑出土土器实测图(4)(86~97は1/4、他は1/3)

凹んでいる。33・57は口縁が直立し、器壁も厚いのでかなり大形品と推測され、57は口縁部外面に二重竹管文を施文する。47・48・55は頸部が短く、外面に煤が付着しているので、壺というよりは甕としたほうが適当か。47は器壁が他と比べて、器壁が薄い点も目を引く特徴である。56は短い頸部から直立する口縁に至り、胴部が丸い数の少ない器形のもの。肩部に比較的、密にハケメ工具刺突文を巡らしている。58～65は口縁がほぼ直立するもので、63を除けば口縁部が短いものである。口縁部横ナデの比較的強いものが多く、58・60などは口縁部外面に明瞭な段、沈線が形成される。60は意図的な文様と断定はできないが、口縁端部に一部、刻目状の凹みが施されている。

66～70は口縁端部外面に櫛描きの条痕が巡る二重口縁壺で、吉備系となるか。いずれも口縁部は直立に近く、上述の58～65と形態が類似している。

71・72は頸部径の小さい二重口縁壺で、おそらく畿内系と推測される。71は口縁部をかなり欠失するが残存部分にハケメ工具小口刺突文を巡らしている。外面はハケメでミガキは見られない。72は内外の摩滅のため調整は不明瞭であるが、外面に丹塗が残る。

73は直口壺であるが、口縁部が外反し端部を上方に拡張している。口縁端部外面は強いナデによる条痕が残り、口縁内面には8条1単位の櫛描波状文を1/4周にのみ施文する。胴部外面は縦ハケ後粗い縦ミガキ、内面はハケメである。

74～76は小形壺。74は口縁部の伸びが比較的長いものである。内外摩滅しているが、口縁内面にミガキが一部残り、器壁は薄い。75・76とも外面ハケメ後ミガキ、内面ハケが残るもので、75は口縁が短く、鉢との区別に悩む器形である。

77・78は中形の直口壺。77は精製品で、内外ハケ後、外面横ミガキ、内面暗文風斜めミガキを施す。これに対して78は粗製品で外面～胴部内面はハケメ、胴部内面はケズリ仕上げで、調整は甕に近い。79～81は中形で口縁の長い山陰系二重口縁壺。81の口縁部外面は縦ミガキ、内面は縦方向にハケメ工具痕が残る。

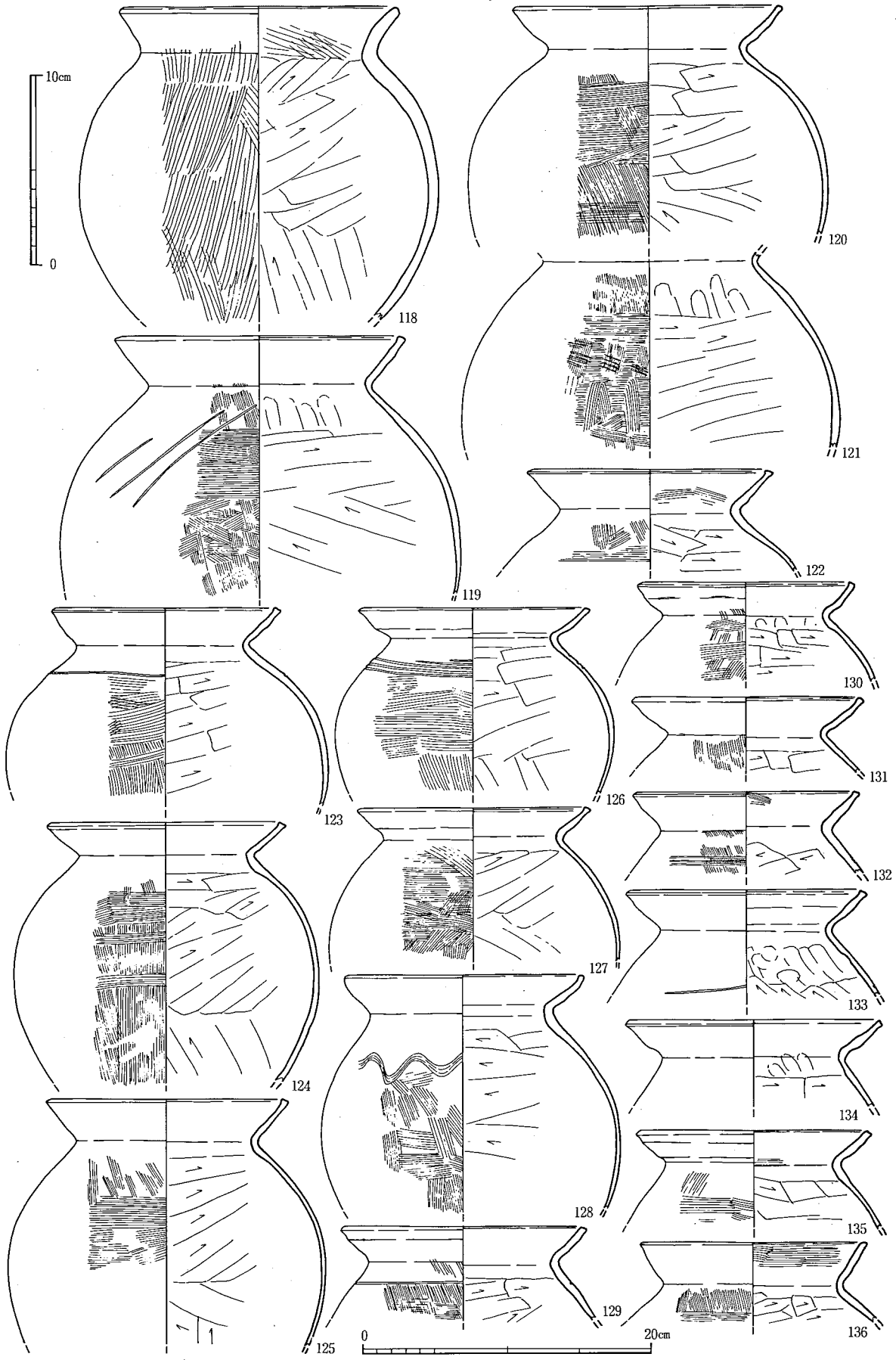
82は直口壺口縁部片で端部を上下に拡張し、そこにハケメ工具小口刺突による刻目を施す。83は畿内系の直口壺口縁部の可能性が高い。外面に一部丹が付着する。84は在地系と推測される突帯を貼付した壺頸部片で、線刻の刻目を突帯上に施している。85は壺胴部片で、波状文帯と直線文の間にハケメ工具小口刺突による斜行文を巡らしている。

86～88は在地系甕。89～95は畿内5様式系の甕となるか。89～93は直線的に外系する口縁部で、91は胴部外面、92は口縁外面にタタキ痕を残す。94はわずかに上げ底気味で、胴部外面にタタキを残す。95は口縁部を強く外反させ、胴部外面は縦ハケ仕上げ。

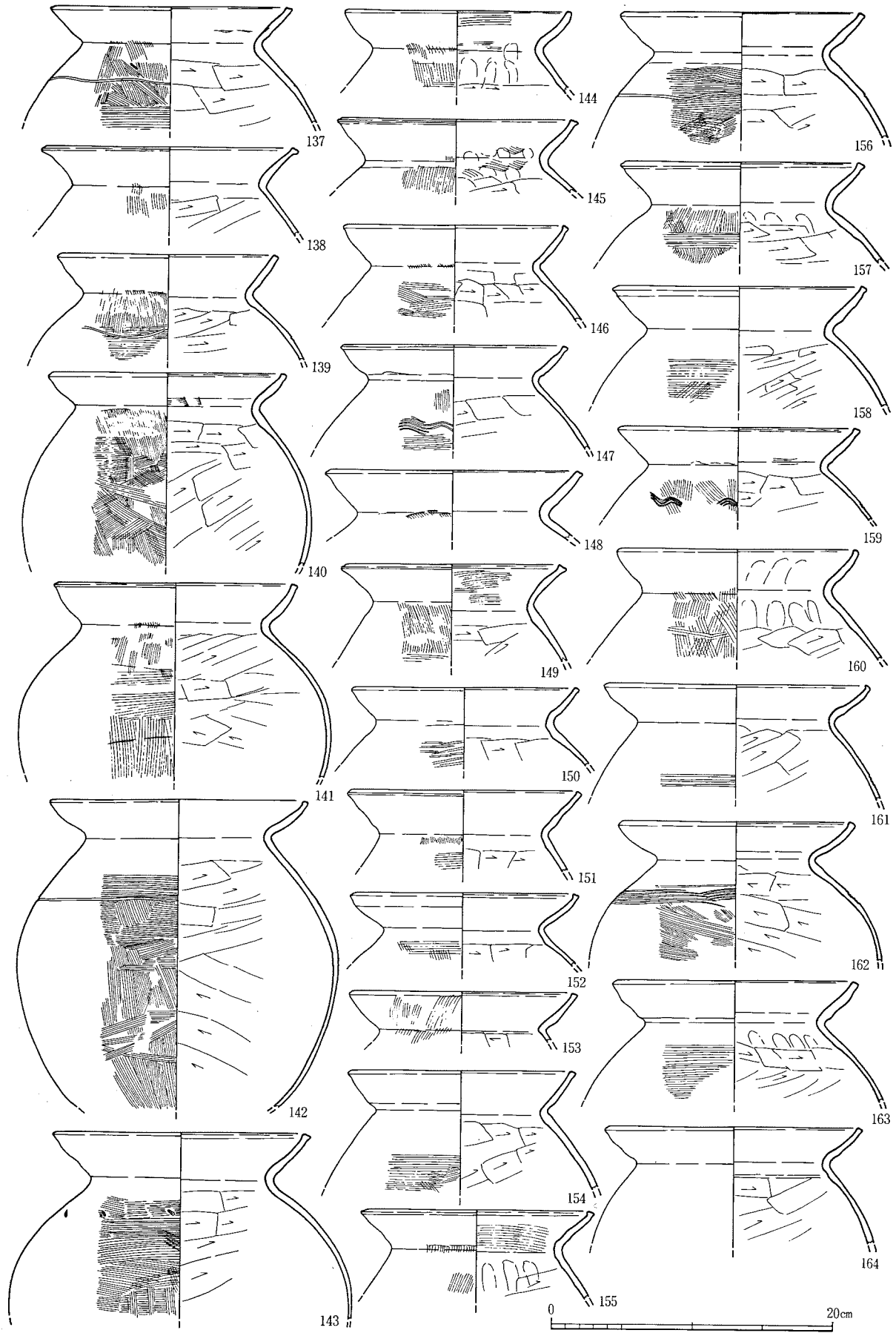
96～108は庄内系甕。96は胴部外面に右上がりタタキを施した後、ハケメ仕上げで、胴部内面にもハケメが残る。97・106は胴部外面ハケメ仕上げで、タタキは見られない。99は右上がりタタキで、100は胴部外面ハケメ仕上げ。102は口縁外面痕と思われる細かい皺が巡り、103・107はナデによるかすかな稜線が口縁外面に残っている。

109～116は小形の5様式系甕となるか。胴部外面はハケメ調整のものが多く、内面は110を除けばケズリ仕上げ。113は左上がり斜めハケ後縦ハケで、外面に煤が付着する。116の口縁外面はミガキ仕上げか。117・118は器壁が厚い甕で、ともに外面ハケメ、内面ケズリも粗雑な印象を受ける。

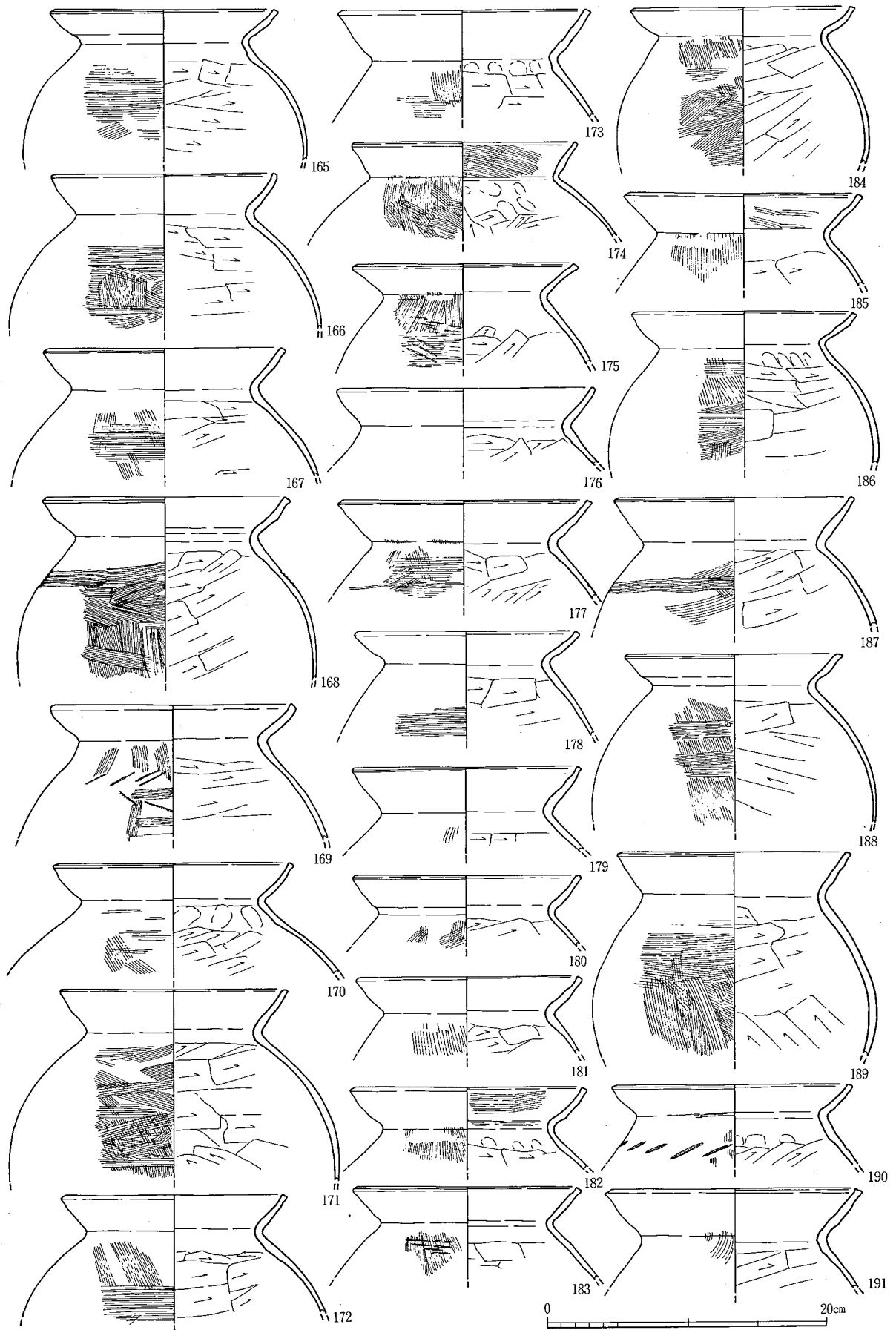
119～244は布留系甕。肩部文様は122・123・129・133・137・142・156・177・200・205・229・232・242が1条沈線直線文、139・204・213・220・234・239・242は1条の波状沈線文、126・168・



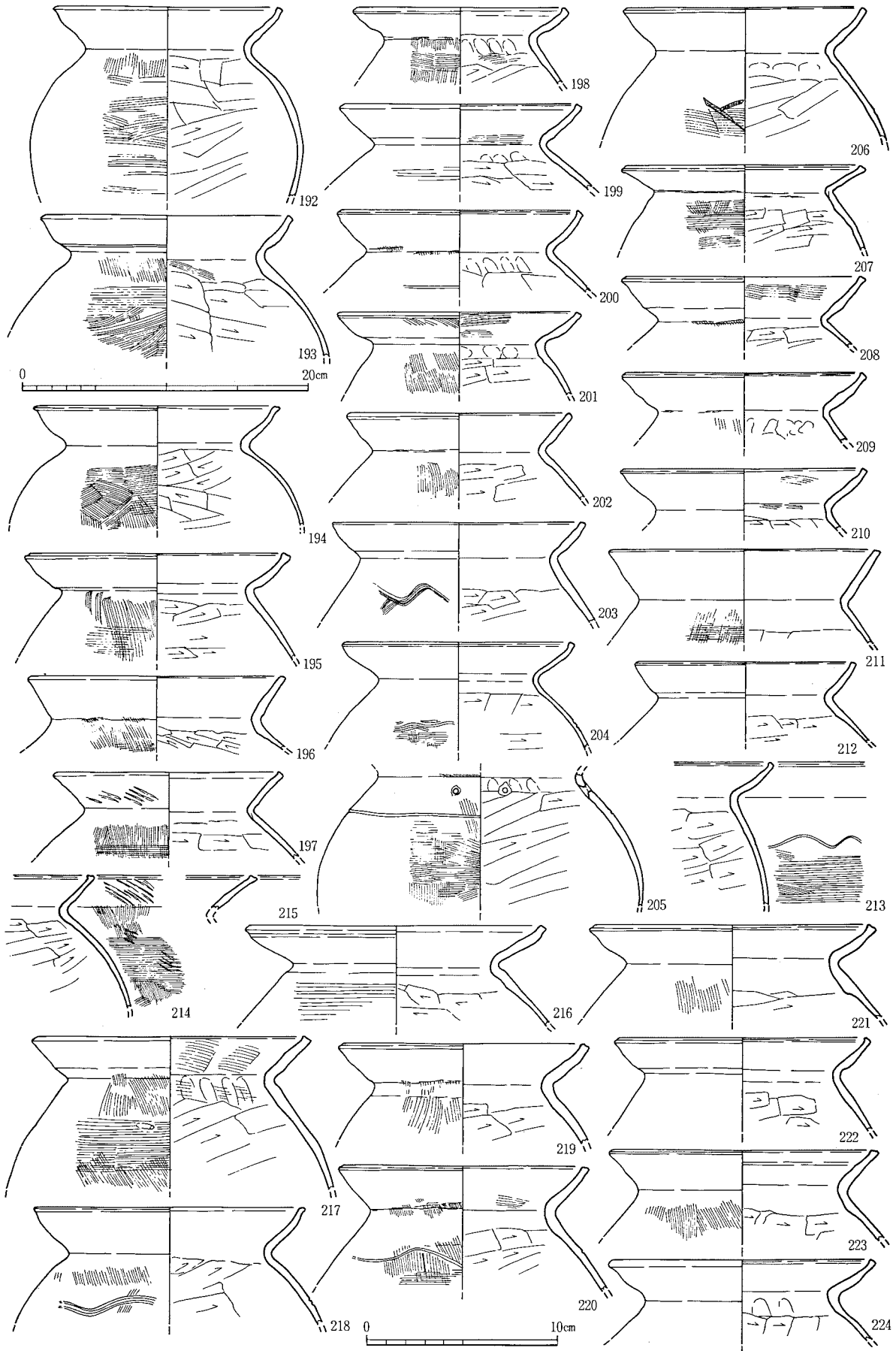
第355图 41号土坑出土土器实测图(5)(118は1/3、他は1/4)



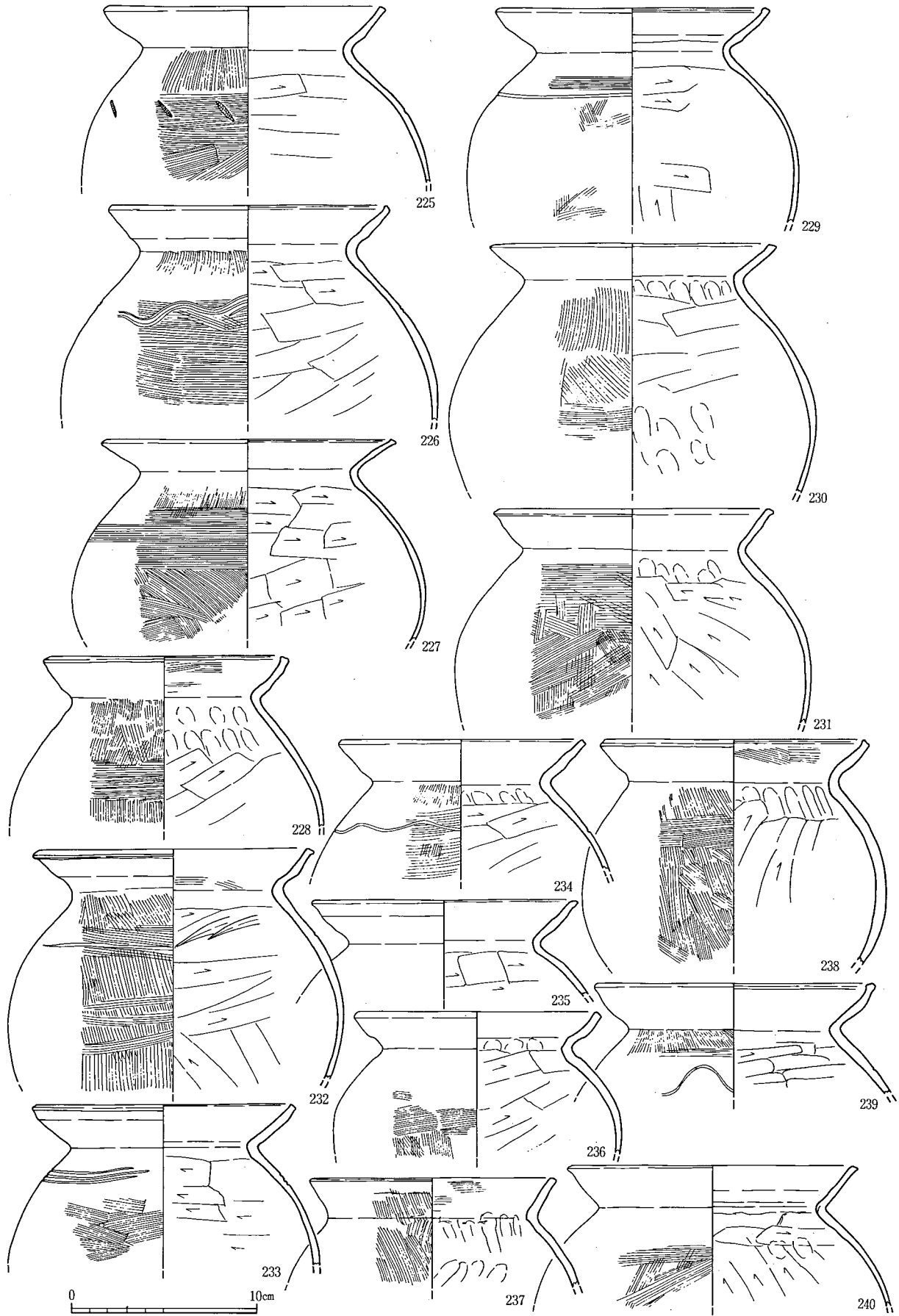
第356图 41号土坑出土土器实测图(6)(1/4)



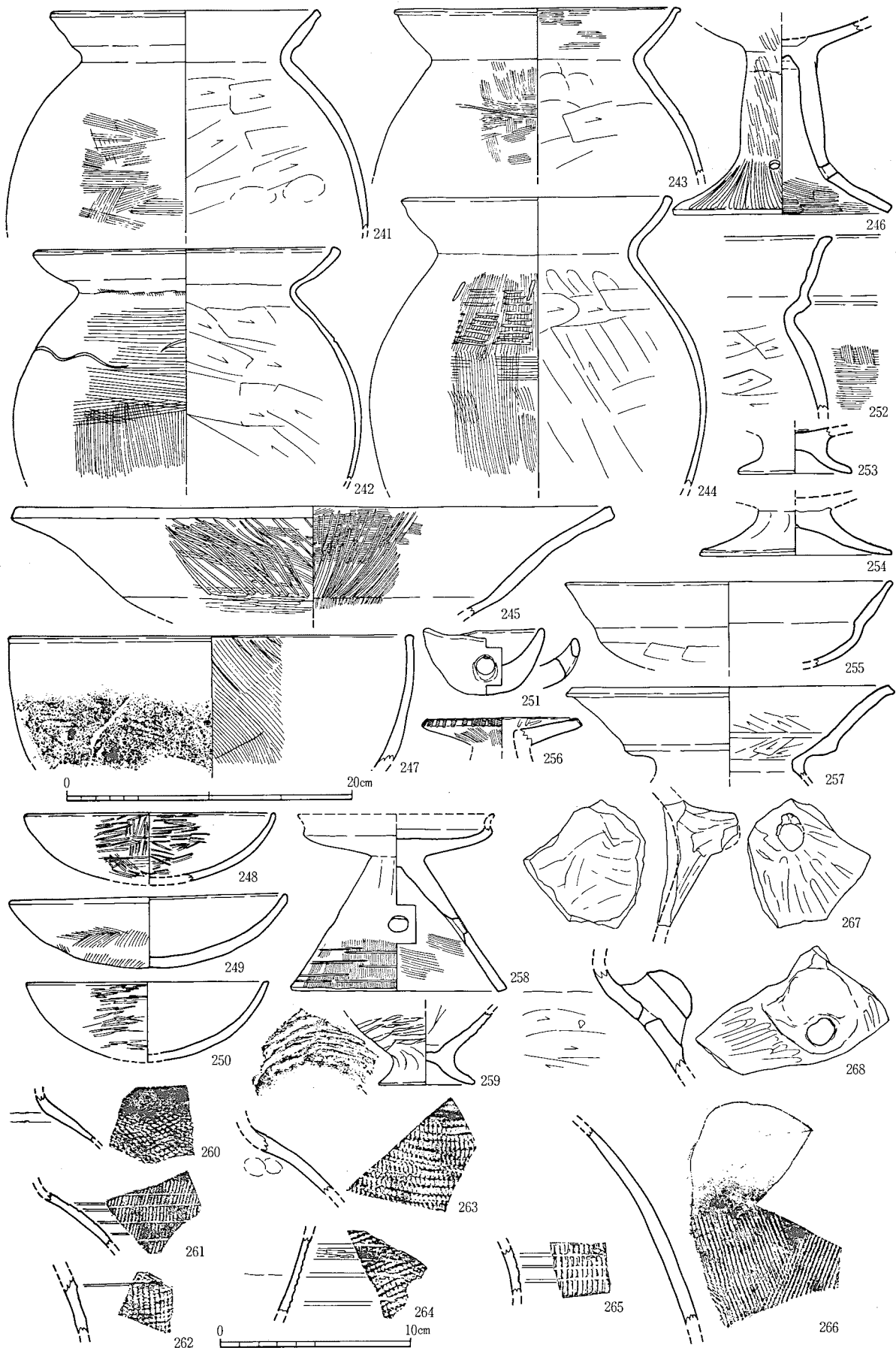
第357图 41号土坑出土土器实测图(7)(1/4)



第358图 41号土坑出土土器实测图(8) (216~224は1/3、他は1/4)



第359图 41号土坑出土土器实测图(9)(1/3)



第360图 41号土坑出土土器实测图(10) (247・252・256は1/4、他は1/3)

187・227は5条、132・159・161・233は3条からなる櫛描直線文、128は4条、147は5条、159・203・204は3条、218・226は2条からなる櫛描波状文、143・244は列点状のハケメ工具小口刺突文、169は肩部に綾杉状にハケメ工具小口刺突文、190・225はハケメ工具小口刺突の斜行文、217は棒状工具刺突の列点文を施している。110は肩部にかすかな斜め方向の線刻が残る。162は5条1単位からなる櫛描直線文の上に1条の直線沈線文らしきかすかな条痕が巡る。188は棒状工具刺突の列点文を1/2の残存部分に2ヶ所残している。206はハケメ工具刺突による交叉文が1ヶ所残る。

布留系甕であるが、121・143・175・183・244は胴部外面縦ハケ部にかすかに粗いタタキの痕跡が見える。214は胴部にタタキが残るのに加えて、口縁部外面にも整形時のものかと思われるタタキ状の条痕が残る。197は口縁部外面にタタキ状の工具痕、頸部内面に接合痕が見られる。

120は胴下部縦ハケが肩部の横ハケをきることが確認でき、127は肩部横ハケを斜め方向帯状にナデ消す部分がある。133の胴部内面はケズリが頸部よりかなり下でとどまっておろ、ケズリに先行するナデ上げが頸部内面に観察できる。ケズリ方向も縦に近いので、本遺跡で一般的な布留系甕に見られる肩部内面に右上がりケズリを省略したものと考えられる。150は肩部のハケメが他に比べて粗い。164は頸部内面にまで横ナデがおよび、ケズリの上にナデによる段が形成されている。205は肩部に1ヶ所意図的な焼成後穿孔を施しており、補修孔か。207は口縁の外傾が強く、頸部内外に接合痕状の皺が巡っている。217の頸部内面はナデ上げ後ハケ仕上げか。218は口縁外面下部に強いナデによる凹線が巡っている。227は球形に張った胴部に、端部を少しつまみ上げ、大きく外傾させる口縁がついている。228はケズリが頸部よりかなり下までとどまっているため、肩部内面に指圧痕が広く残っている。230はケズリが浅いためか、胴下部内面に指圧痕が残っている。231は肩部外面にタタキ痕がかすかに残り、外面胴下部の斜め、縦ハケが肩部の横ハケを切っている。また、頸部内面の指圧痕は明瞭である。232は肩部内面にケズリとは別に斜め方向の工具痕が残る。237は口縁部外面、頸部内面に接合痕状の皺が見られる。また外面は縦ハケで仕上げ、残存部分の胴部内面はケズリの見られない粗い調整のもの。240は口縁部が他と比べ薄く、頸部内面に接合痕と工具のあたりのような条痕が残っている。

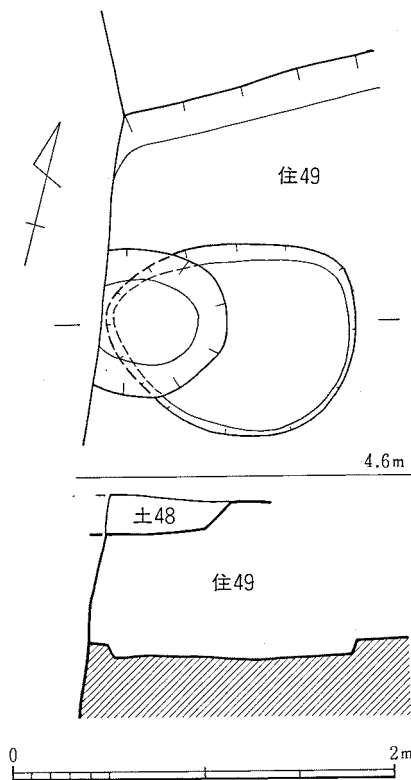
245は在地系高杯口縁部。内外ともハケメ後暗文風のミガキを施す。246は高杯脚部～杯底部の破片で、脚部は完存する。外面縦ミガキ、裾部内面ハケ、胴部内面ナデ仕上げで、杯部内面は摩滅が進むがミガキ仕上げか。脚の屈曲部に乾燥があまり進まないうちに、3ヶ所穿孔を施している。

247は大形の鉢で内面ハケメ、外面は摩滅するがタタキ状の条痕が残っている。248～240は単口縁鉢で、248・250は内外ミガキ仕上げの精製品である。249は粗製品で、摩滅が進むが外面下部にハケメが残っている。251は穿孔のある小形の単口縁鉢と考えたが、あるいはタコ壺底部片か。252は傾き、器形から考えて山陰系二重口縁大形鉢。253・254は脚付鉢の脚部片で内外ナデ仕上げ。254の脚内面頂部には軸痕があり、脚上部の破損面は鉢部との接合のための条痕が残っている。255は単口縁鉢で、摩滅が進むが外底部はケズリ仕上げか。

256は支脚口縁部か。口縁端部にハケメ工具小口刺突による刻目を施す。257は山陰系鼓形器台破片で、天地不安。内面はハケ後ナデ仕上げである。258は畿内系の小形器台で、内外摩滅進むが、外面はハケ後ミガキか。半乾燥時の穿孔が2ヶ所に見られる。

259は脚付鉢状の器形であるが、鉢部外面に粗いタタキを残すことから製塩土器か。

260～276は半島系土器破片。260は淡黄褐色軟質で外面やや小さい斜格子タタキ。261は灰白色瓦



第361図 48号土坑実測図(1/40)

質で、外面細かい平行タタキ後沈線を巡らす。252は小さな格子タタキで、天地不安であるが、図に則していえば上部にナデによる段が巡る。263は淡灰色軟質で、外面擬格子風のタタキ。264は小さな斜格子タタキで、沈線を巡らす。淡褐色で瓦質焼成。265は外面粗い平行タタキで、沈線が巡っている。灰白色で瓦質に近い焼成。266は上部ナデ、下部縄文タタキを巡らし、壺胴部破片か。極めて堅緻な陶質に焼き上がっており、灰紫色を呈する。267は穿孔は無いが、耳付壺破片となるか。内面ヘラ状工具によるナデ、外面ミガキ仕上げ。淡橙褐色でやや軟質に近い。268は耳付壺破片か。耳は円形に粘土を貼り付け、縦方向に穿孔を施し、意図的か不明であるが穿孔の中間部に胴への孔がある。土師質に近い焼成で、灰黄褐色を呈する。外面板ナデ風ミガキ、内面ケズリ仕上げ。

269は壺頸部破片で、胴部外面はやや密な平行タタキを残す。灰白褐色で瓦質焼成。270も壺頸部破片であるが、外面に強い横ナデを施す。外面黄灰色、内面暗灰黒色を呈している。内外器表に炭素を吸着させたような近世瓦質土器に近い焼きで、一般の瓦質よりも硬質であるが、完全な陶質とも言えない。内面暗灰黒色、外面黄灰色。271は胴部片で内外暗灰黒色を呈し、比較的陶質に近い。内外ナデ仕上げ。272～274はいずれもやや堅い瓦質で灰色～灰黄色を呈し、外面小さな格子タタキを施したもの。272は内面摩滅、273は内面ナデで一部無文当て具痕状の凹みが残る。274は内面ナデ仕上げで、太く浅い凹線が巡る。275は平行タタキ後沈線を巡らした壺胴部片である。軟質で赤褐色を呈する。276は鉢の口縁部となるか。口縁は短く外反し、胴部外面はやや粗い斜格子タタキ後沈線を巡らす。内面はナデ仕上げ。灰黄褐色軟質であるが、土師器よりは堅く焼き上がっている。

277～290はタコ壺である。いずれも口縁部近くに1ヶ所焼成前穿孔を施している。281は外面に意図的か不明であるが、線刻がある。

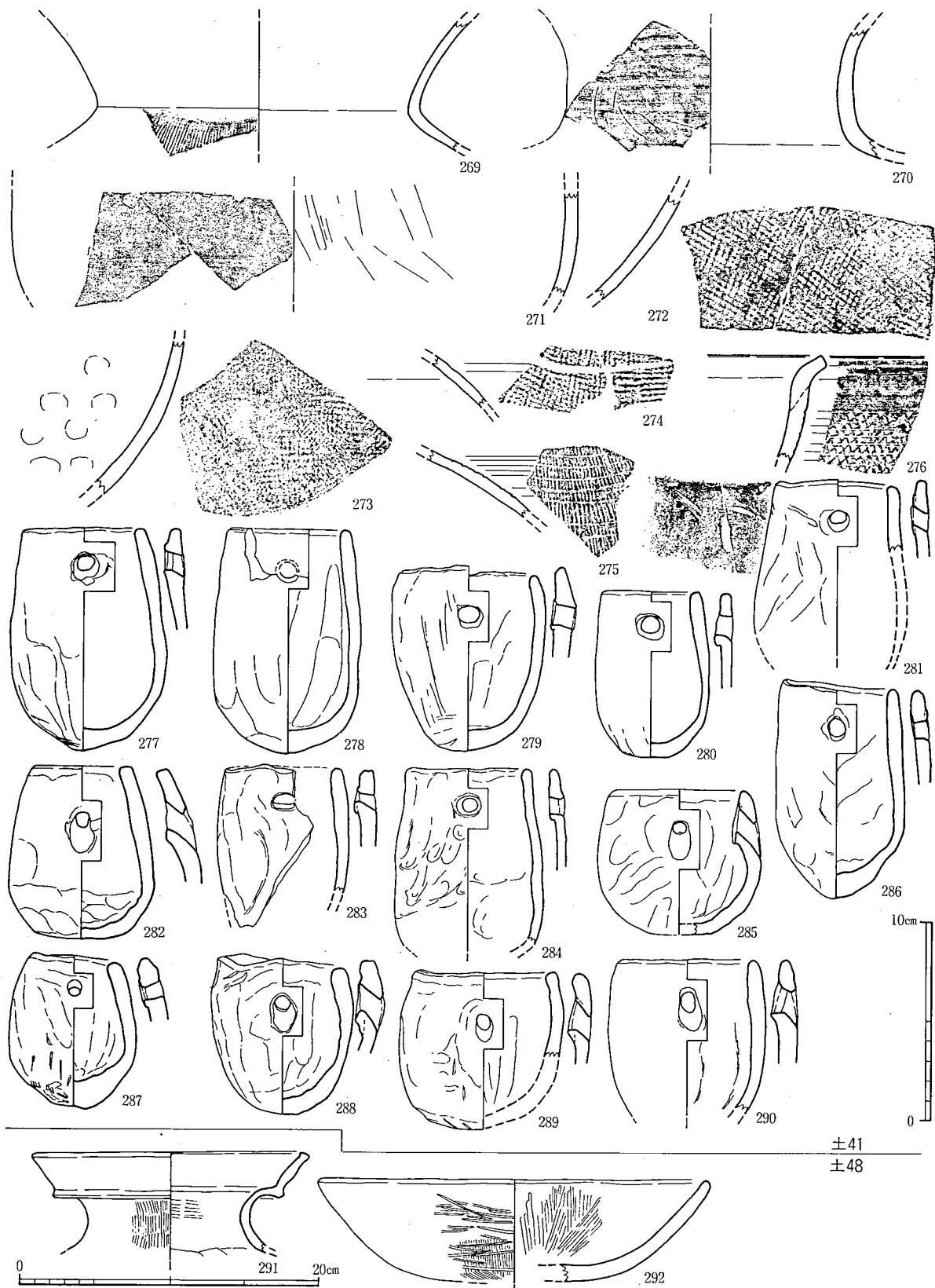
48号土坑(図版62、第361図)

2中区の東端、49号竪穴住居跡の覆土上面で検出したものであり、検出面は49号住居跡の床面より約80cm弱上方にあたる。西側は校舎基礎構築時に攪乱を被るが、南北0.8m、東西0.7m以上の略楕円の平面形を呈し、深さは20cm弱。埋土は黒褐色砂層で、拳大礫を若干含んでいた。

出土土器(第362図291～292) 291は山陰系二重口縁壺口縁部。292は単口縁鉢で、外面ハケ後横ミガキ、内面縦ミガキ。

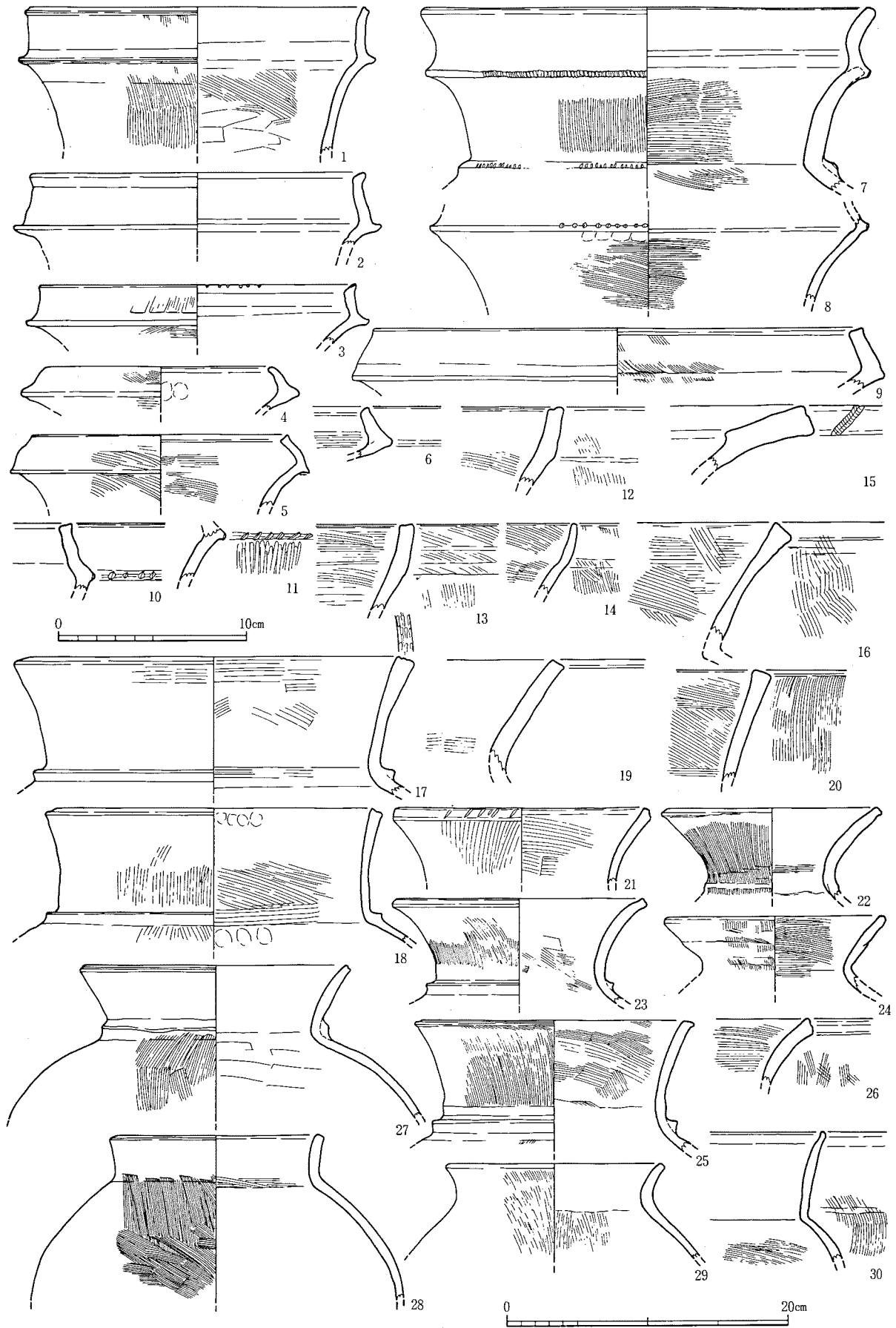
3. 包含層・遺構面等出土古墳時代土器

ここでは包含層や近世遺構・攪乱から出土した古墳時代土器、および遺構検出面として取り上げた古墳時代土器の特徴的なものを中心に、その一部について説明を加える(図版137～141、第363～375図)。

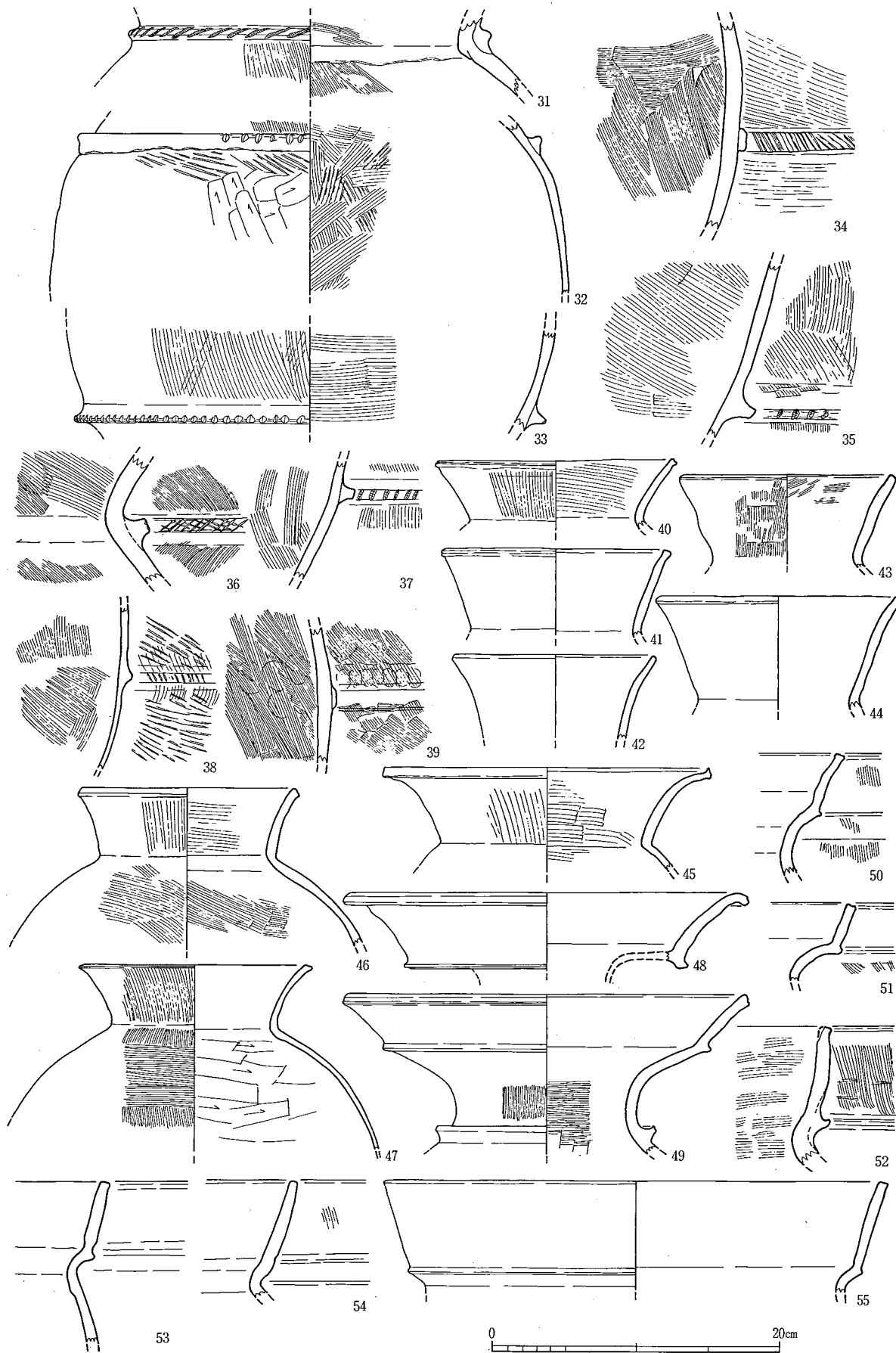


第362図 41号土坑出土土器実測図(11)・48号土坑出土土器実測図実測図(291は1/4、他は1/3)
 (269~290:±41、291・292:±48)

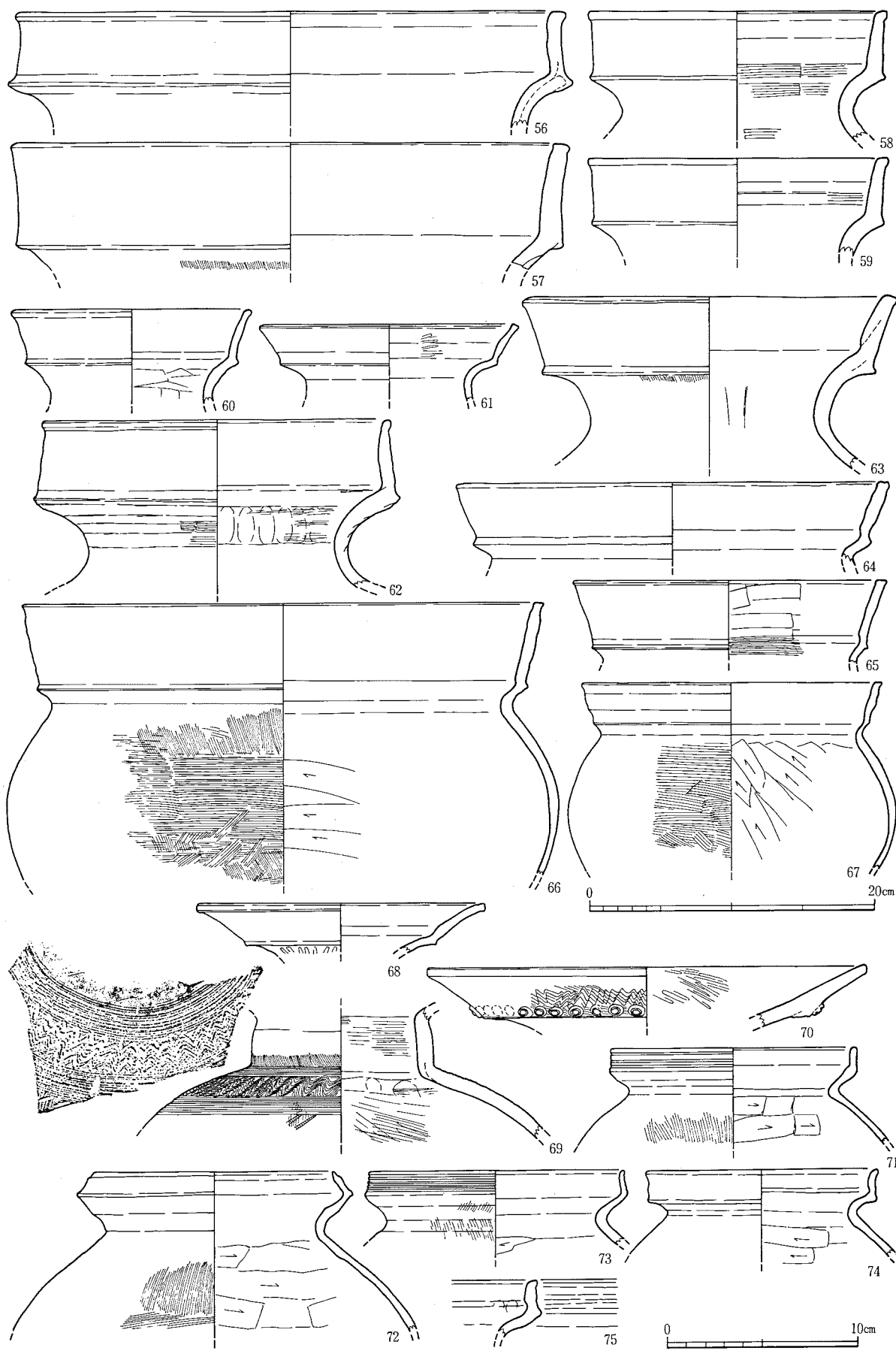
1~11は在地系の複合口縁壺である。1は口縁部が直立に近く、2・3は端部を外反させている。4は口縁部がやや丸みをもって内傾し、6・9は口縁部の立ち上がりが小さい。7・8・10は口縁屈曲部外面に刻目を施し、7は頸部にも刻目突帯を巡らしている。11は口縁部を失っているが10と



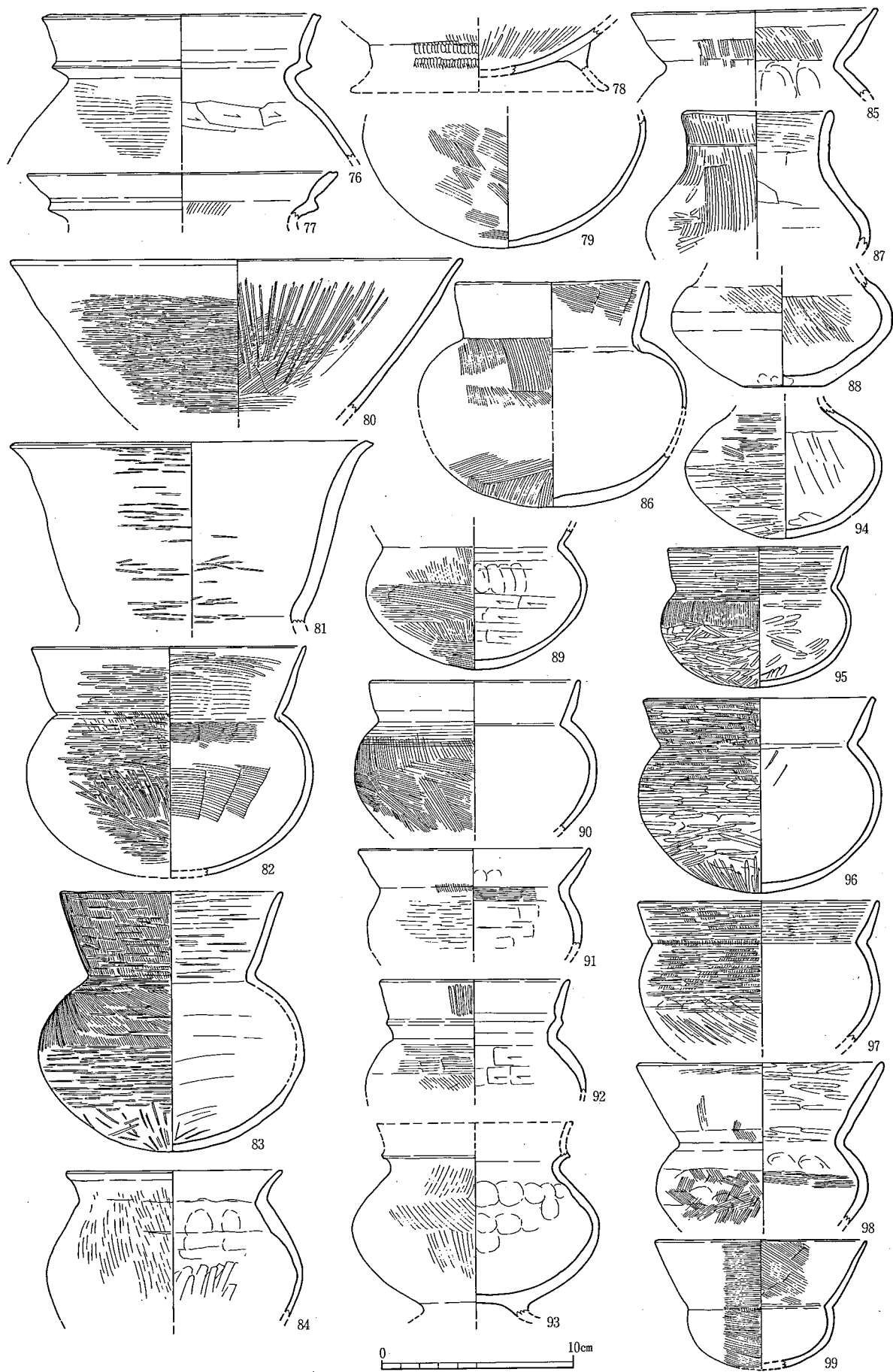
第363図 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図(1)(10・11・16・28は1/3、他は1/4)



第364图 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図(2)(1/4)



第365図 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図(3)(68~75は1/3、他は1/4)



第366図 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図(4)(1/3)

同様の形態と推測され、外面は縦ミガキ仕上げである。12～14は内外をハケメで仕上げた口縁部で、屈曲部が不明瞭であるが在地系複合口縁壺と考えられる。

口縁上面を肥厚させ、端部にハケメ工具刺突を施す15は大形の在地系壺口縁部と推測される。3南8区より出土し、同区に位置する105号竪穴住居跡出土土器1と同一個体の可能性が高い。

16～20は在地系の大型壺直口壺口縁部で、17・18は頸部に突帯を貼付している。17は口縁端部上面にタタキ工具を押し付けて文様としている。21～27は在地系の直口壺と考えられ、22・24・26以外は頸部に突帯を巡らしている。22は頸部の上下を強いハケメによって突帯風に突出させている。21は口縁端部外面に線刻による刻目を施す。28・29は口縁部の短い在地系直口壺か。28は胴部内面ナデ、29は胴部内面縦ハケ。30は胴部内外ハケメ仕上げであることからやはり在地系か。

31・36は刻目突帯を巡らす壺頸部片で在地系の大型品と思われる。32～35・37～39は在地系大型壺の胴部突帯付近の破片で、32・34・49は天地不安である。ハケメ仕上げのものが多く、32は胴部外面タタキ後ケズリ、38は胴部外面タタキである。

40～47は畿内系の直口壺。45は上方に拡張させた口縁端部が特徴的であり、内外のハケメも他と比べて粗雑。46は胴部内面にハケメをとどめている。

48・49は二重口縁壺で形態から考えて比較的大型の畿内系となるか。48は口縁端部を屈曲させて、やや下方に垂れたような形態で、1次口縁の突出も堅著。49は頸部に突帯を巡らしており、頸部内面はミガキのように見える。

50～67は山陰系二重口縁壺と考えてここにまとめた。ただ、53・66・67は形態からすれば山陰系二重口縁鉢とするのが適当か。52は口縁内外をハケメ仕上げ。54は横ナデが強く、口縁外面一次口縁上に凹線が巡る。55～57は大型品である。57・62は外面一次口縁下に接合痕が残っている。

68は中形で器壁の薄い二重口縁壺で、口縁部の外反が強いことから中形の畿内系となると思われる。69は直立する頸部に球形の胴部がつき、肩部に2段、櫛描直線文を施文した後、その間に櫛描波状文を巡らしている。このような形態、文様から考えて、畿内系二重口縁壺と推測される。胴部内面は指圧痕、ハケメが残る。70は口縁部外面に円形浮文を貼付し、櫛描波状文を巡らすもので、やはり装飾性の高い畿内系二重口縁壺。内面は摩滅するがハケメ後ミガキ仕上げか。

71・73は口縁外面に櫛描条痕が巡り、吉備系の二重口縁壺。

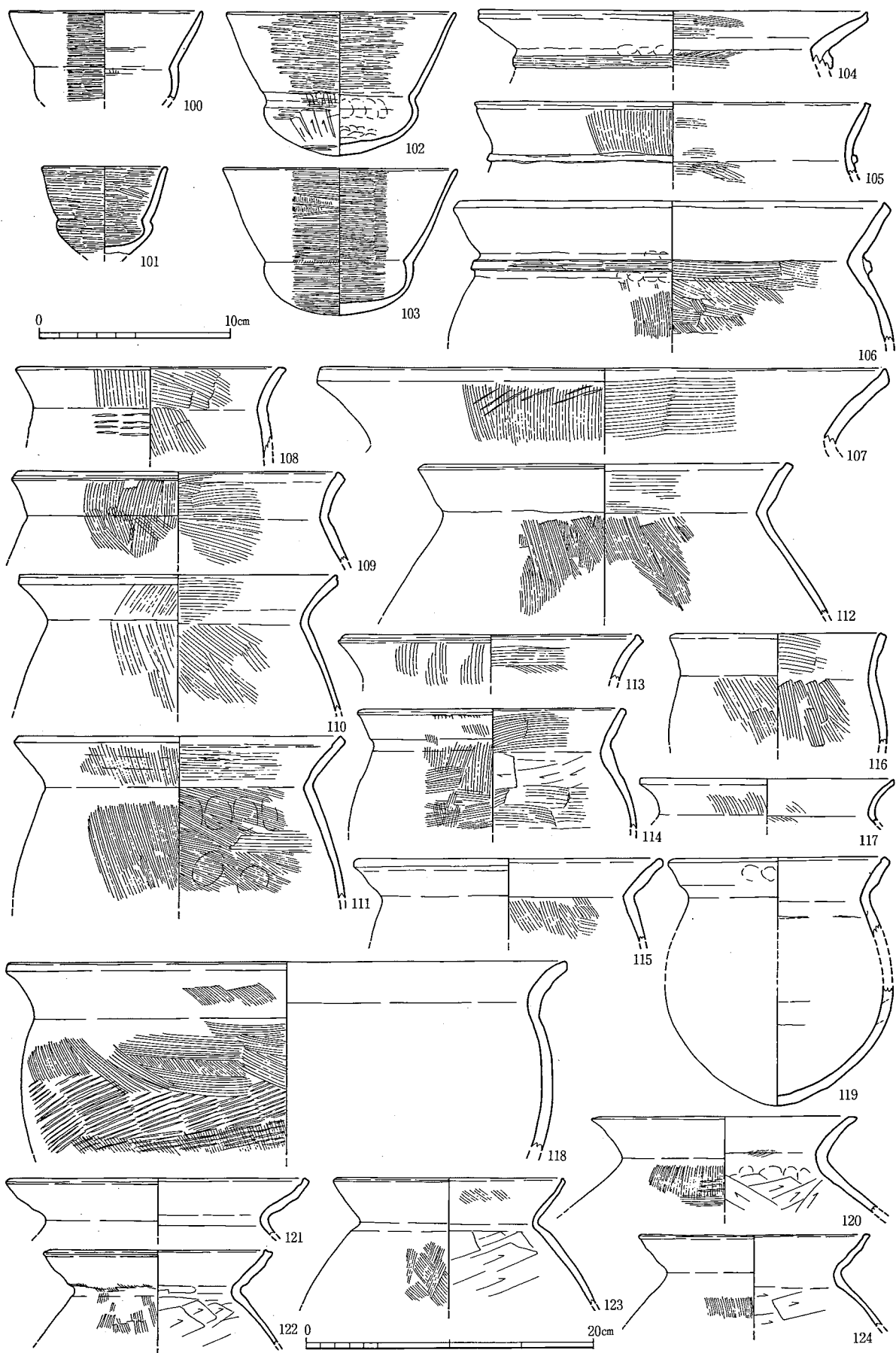
72・74～77は小形二重口縁壺で山陰系となるか。口縁は強い横ナデで仕上げ、直立するものが多いが、72は内傾、77は外傾する点の特徴的である。

78は在地系の脚付壺脚部片か。外面は縦ミガキ、内面はハケメ仕上げ。79は中形の胴部片で、壺となるか。外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。

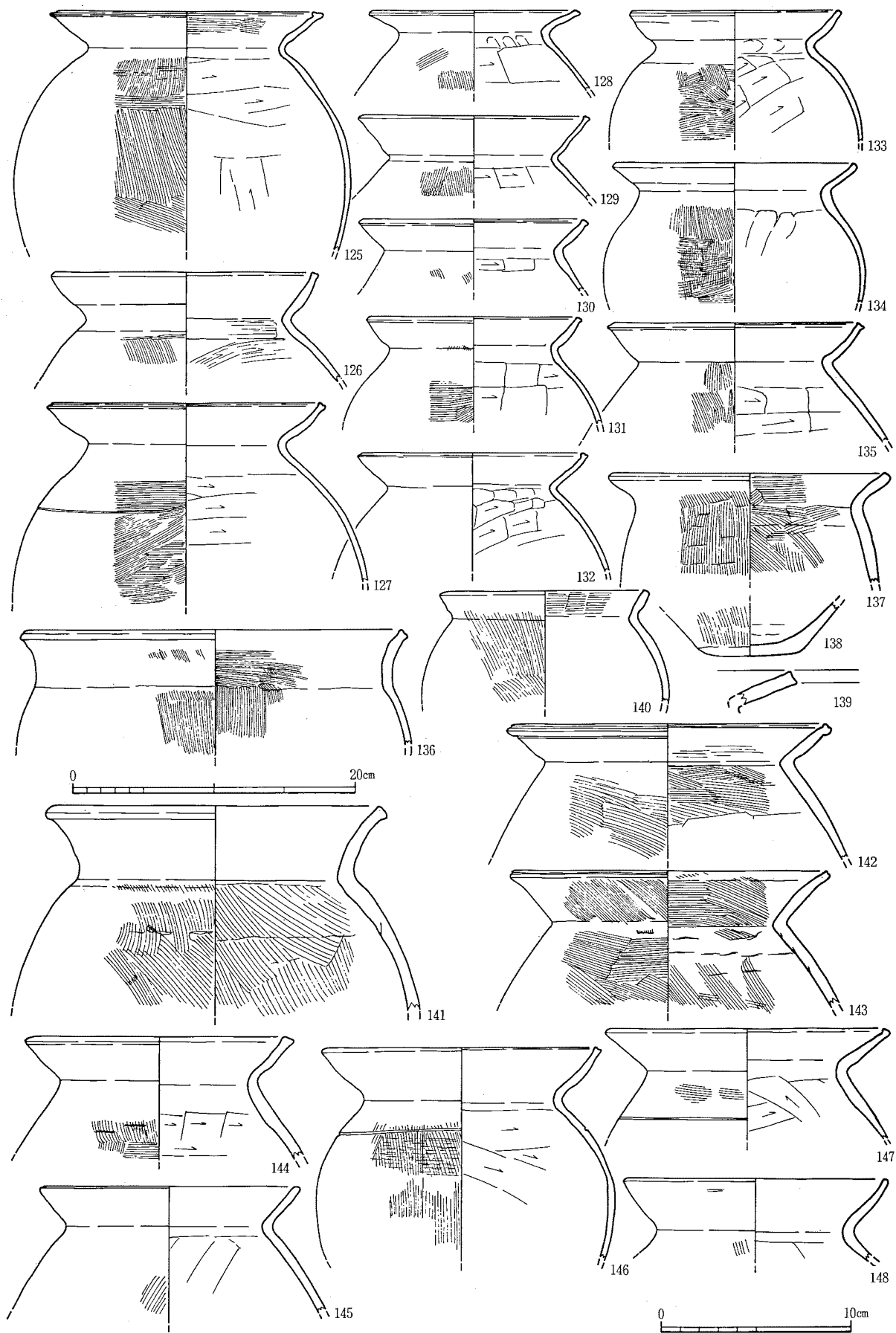
80・81はやや大振りであるが、畿内系中形直口壺か。80は外面横ミガキ、内面斜めハケ後暗文風の放射状のミガキ。81は内外横ミガキ仕上げ。

82～103は小形壺。82・83・94～97・99～104は外面横ミガキ仕上げで、ミガキに先行するハケメ、ケズリをとどめるものが多い。82は口縁部内面ミガキ、胴部内面ハケメ、83・100・102は口縁部内面ミガキ、胴部内面ナデ、94は胴部内面板ナデ、95・101・103は口縁部～胴部内面ミガキ、96は内面ナデ、97・99は口縁部内面ハケ、胴部内面ナデ。84は口縁部が短く外反し、外面縦ハケ仕上げで、内面板ナデと指圧痕。94は頸部の小さいやや特異な器形をなしている。

86は口縁部が短く直立する壺で、口縁部～胴上半の破片と底部破片に分かれて接合しないが、同



第367図 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図(5) (100~103は1/3、他は1/4)



第368図 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図(6)(126・140~148は1/3、他は1/4)

一個体であろう。胴部外面縦ハケ、口縁部内面斜めハケ、他はナデ仕上げで、頸部内面に接合痕が残る。87は口縁部と胴部の境界が明瞭でなく、胴部最大径が低い位置にある特異な個体。外面縦ハケ、口縁部内面横ハケ、胴部内面ケズリ。88は偏球形の胴部片で、底部は平底。胴部外面ハケ後ナデ、胴部内面ハケ仕上げ。89は胴部片で外面ハケメ、内面ナデ後ケズリ。90は口縁部が短く、胴部外面ハケメ、他はナデ。91は胴部外面ハケ、口縁部内外ナデ、胴部内面ハケ後板ナデ仕上げ。92・93は山陰系二重口縁小形壺。92は胴部外面ハケ、口縁部外面縦ミガキ、口縁部内面ナデ、胴部内面ケズリ仕上げ。93は裾を欠損するが脚付と思われ、口縁部も欠損。胴部外面ハケ、胴部内面ナデ。98は口縁部のみに粗くミガキを施した半精製品。胴部外面ハケ、胴部内面はナデ後横ハケ。

104～116・136～138・140・141は在地系甕と考えられ、胴部内外をハケメのものが多い。104～106は比較的大形品で、頸部に突帯を巡らす。104・106は突帯上にハケメを施し、105は突帯が細く低い。107も大形品であるが、頸部突帯は見られない。口縁部外面にはかすかに粗いタタキの条痕が残っている。108は胴部外面粗いタタキ仕上げで、111は胴部内面にハケメに先立つ指圧痕がかすかに残る。114は内面頸部直下のみにケズリを施す。136は口縁が直に近い角度で立ち上がり、140は口縁の伸びが短いやや特異な形態のもの。口縁部片137と断面レンズ状に近い平底片138は同一近世遺構より出土し、同一個体と考えて間違いない。141は口縁部の伸びが長く、特異な形態。

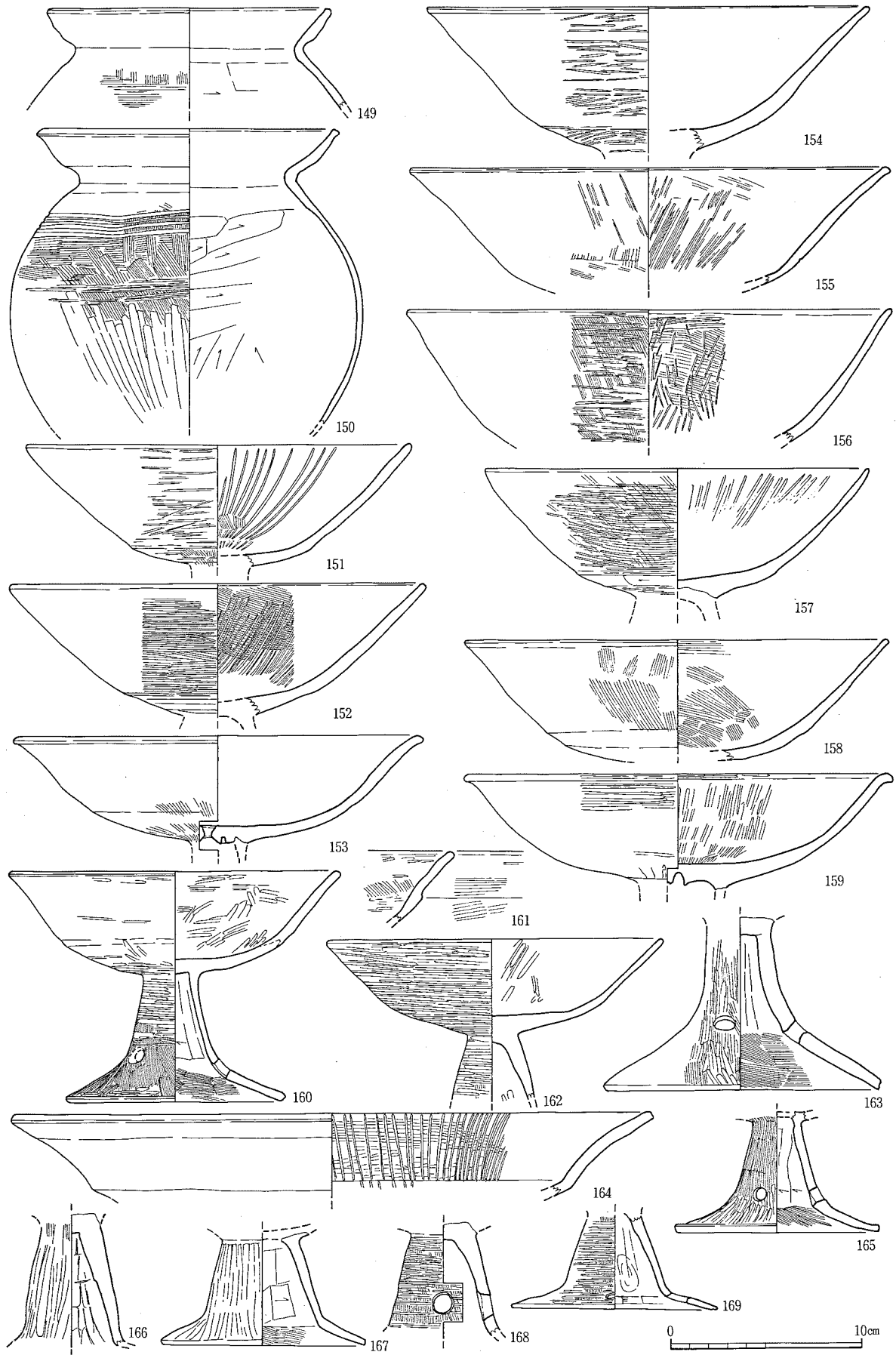
117は口縁が強く屈曲して外反し、畿内5様式系の甕か。118は口径が大きく鉢との区別に悩むが、ひとまず甕としてここに示した。胴部外面は右上がりの粗いタタキ後、頸部下横ハケ、胴下部縦ハケ仕上げで、内面は摩滅する。119は口縁部と胴部が接合しないが、同一個体と考えられる。口縁部は布留系甕に似るが、胴部内外ナデ仕上げ、やや尖り気味の底部などの特徴が異なっている。胴部内面には接合痕が数ヶ所に残っており、ケズリを省略したものか。139は口縁部が強く外傾し、端部が角張ることから5様式系甕口縁部片となるか。

142・143は胴部の内外にハケメを残すが、形態的には庄内式甕と類似している。142は口縁端部が沈線状に凹み、胴部内面はハケ後ケズリ仕上げ。143は胴部内面に間隔の空いた縦ハケを施し、粘土紐の接合痕を多く残している。

120～135・144～150は布留系甕。肩部文様は127・146・147に1条直線沈線文、150に4条1単位の櫛描直線文を巡らしている。120は胴部外面、縦ハケの残る部分にかすかにタタキの条痕が残る。132は外面をナデで仕上げ、145は胴部内面に板ナデ状の調整を施している。150は胴下部にハケメの後縦方向の板ナデを施す。

151～159・164は高杯口縁部。153・155・158・164以外は外面横ミガキ仕上げで、156・157は横ミガキに先行する斜めハケが残る。これらの内面は151・152・156・157は暗文風縦ミガキ仕上げで、152・156は縦ミガキに先行する斜めハケが残っている。154は内面ナデ、159は内面縦ミガキ仕上げで、杯底部に軸痕が残る。153は外面ハケメの後、内外ナデ仕上げ。杯底部外面は軸痕が残り、さらに底部に焼成後と思われる穿孔がある。158は内外にハケメが残るが、摩滅が進んでおり、あるいはミガキ仕上げか。164は在地系の高杯口縁部で外面摩滅し、内面は横ミガキ後暗文風の縦ミガキ。161は内面ハケメ後ミガキ、外面ハケメ仕上げで、特異な形態であるが、高杯口縁部か。

160は3中2区遺構面より出土した完形に復元できる高杯で、本来119号竪穴住居跡に帰属する可能性が高い。杯部内外ハケ後やや雑なミガキ、脚部は縦ハケ後脚柱部を中心に横ミガキ。内面は脚裾部横ハケ、脚柱部ケズリで、屈曲部の3ヶ所に乾燥前穿孔を施している。162は高杯杯部～脚柱



第369图 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図(7)(1/3)

部の破片。外面横ミガキ、脚部内面板ナデで、杯部内面は摩滅が進むがわずかにミガキが残る。

163・165～183は高杯脚部片。163・165～167・176・177・179は外面縦ミガキ仕上げで、163・165・179は縦ミガキに先行するハケメが残る。内面は163脚裾ハケメ、166は脚柱絞り痕後ナデ、165・167・177・179は脚柱ケズリ、脚裾ハケ仕上げ、176はナデ仕上げ。

168～171・173～175・181は外面縦斜めハケ後横ミガキ仕上げのものである。内面は脚柱部絞り後ナデ、脚裾ハケ仕上げのものが多いが、173は脚柱部内面ケズリ仕上げである。181は脚柱部中間に半乾燥段階穿孔を2ヶ所に施している。

172・178は外面縦ハケ、内面脚柱部ナデ、脚裾ハケで、屈曲部4ヶ所に乾燥前穿孔。180は外面縦ハケ、内面脚柱ケズリ、脚裾ナデ仕上げ。182は脚柱外面縦方向ケズリ、他はナデ仕上げ。183は在地系高杯の細長い脚柱部と考えたが、あるいは別器種となるか。外面縦ハケ、内面はハケ後ナデ。

184・185は手捏ね風の小形平底鉢。186は小形の単口縁鉢で外面ナデ、内面ハケメ仕上げ。

187～195・197～202は単口縁鉢。187・191・192・195は外面ハケメ、内面ナデ仕上げで、187の内面には板状工具小口痕がかすかに残っている。191は外面底部に凹凸がかなり顕著である。188・204・206は外面横ミガキ仕上げのもので、204はミガキに先行するケズリが底部近くに観察できる。内面は204はミガキ仕上げで、188・206は摩滅が進む。189・199・201～203・205は外面ケズリ仕上げで、189・199は内面ハケ、201・205は内面ナデ、203はミガキ、202は内面ハケ後底部近くに板ナデを施す。190は外面ハケ後底部付近ケズリ、内面板ナデ後ミガキ。207は摩滅が進むが、あるいは内外ミガキ仕上げか。193・194はいずれも外面ナデ仕上げで、193は内面ナデ、194は粗いハケ仕上げ。197は器壁は薄い、内外に指圧痕を残す粗い調整である。198は内面ハケメ後、内外に粗い縦ミガキを施す。200は外面指圧痕を顕著に残し、内面ハケメ仕上げ。

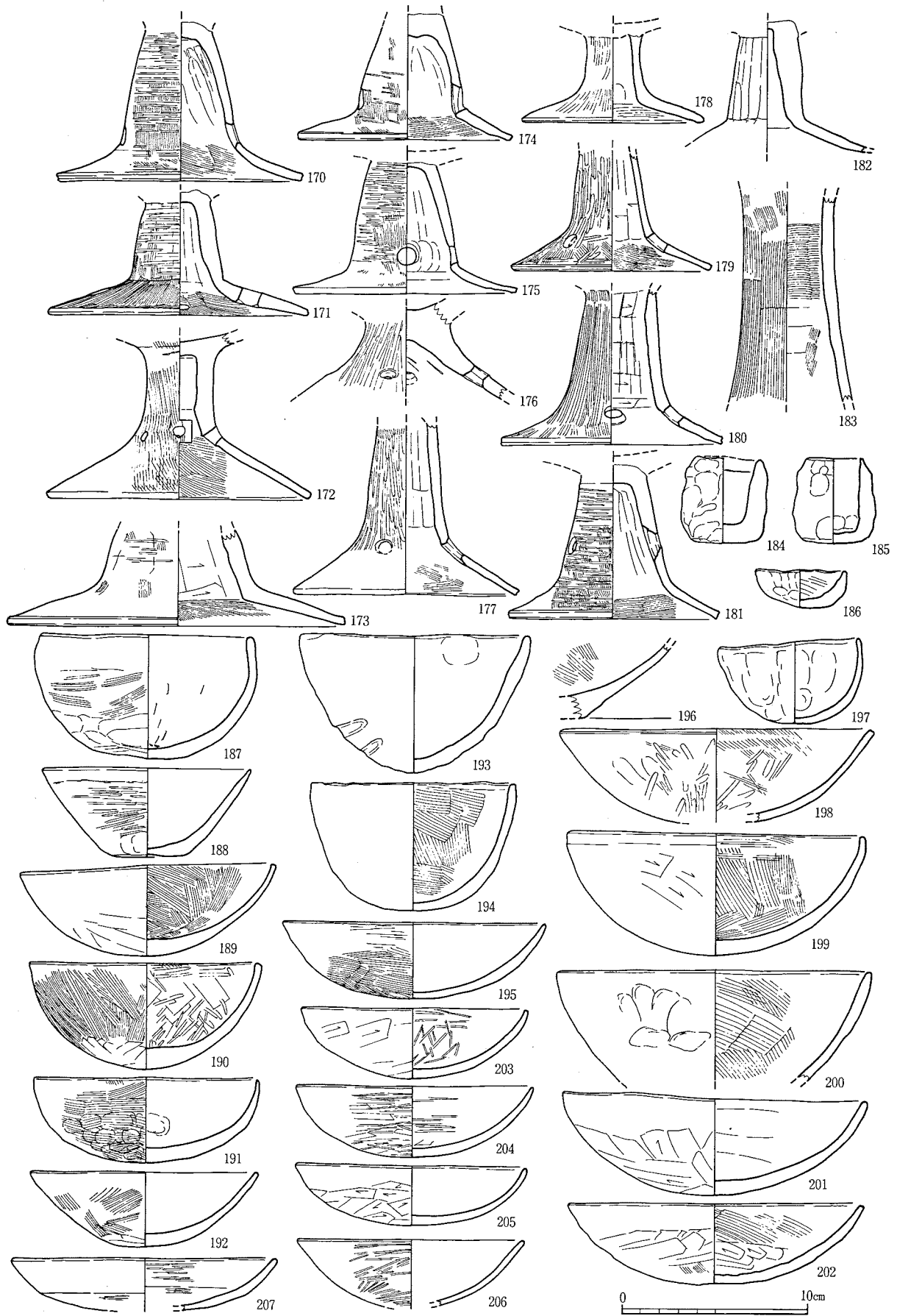
196はレンズ状に近い底部の小片で内面ハケ、外面ナデ仕上げ。山陰系二重口縁鉢の底部片か。

208～223は外反口縁鉢。208は口縁部と胴部の境界がやや不明瞭で、外面ハケ後縦ミガキ、内面横方向のケズリ仕上げ。209・210は胴部外面ハケ、胴部内面ケズリ仕上げのもの。209は頸部の屈曲が明瞭で長く口縁が伸びるのに対して、210は口縁部と胴部の境が不明瞭で、口縁が短い。211はやはり口縁と胴部の境がやや不明瞭なもの。胴部外面ケズリ、口縁部外面縦ハケで、胴部内面はナデ仕上げ。212～214は内外にハケメを多く残すものである。215は胴部外面はハケメを残すが、胴部内面にやや太めのミガキが観察される。216は外面縦ハケ後横ミガキ、口縁内面ハケ、胴部内面ナデ仕上げ。217は外面ナデで、口縁内面にミガキが残る。218～223は外面横ミガキ仕上げのもので、220～223には内面にもミガキが残る。224・225は内外ミガキ仕上げの二重口縁精製鉢。

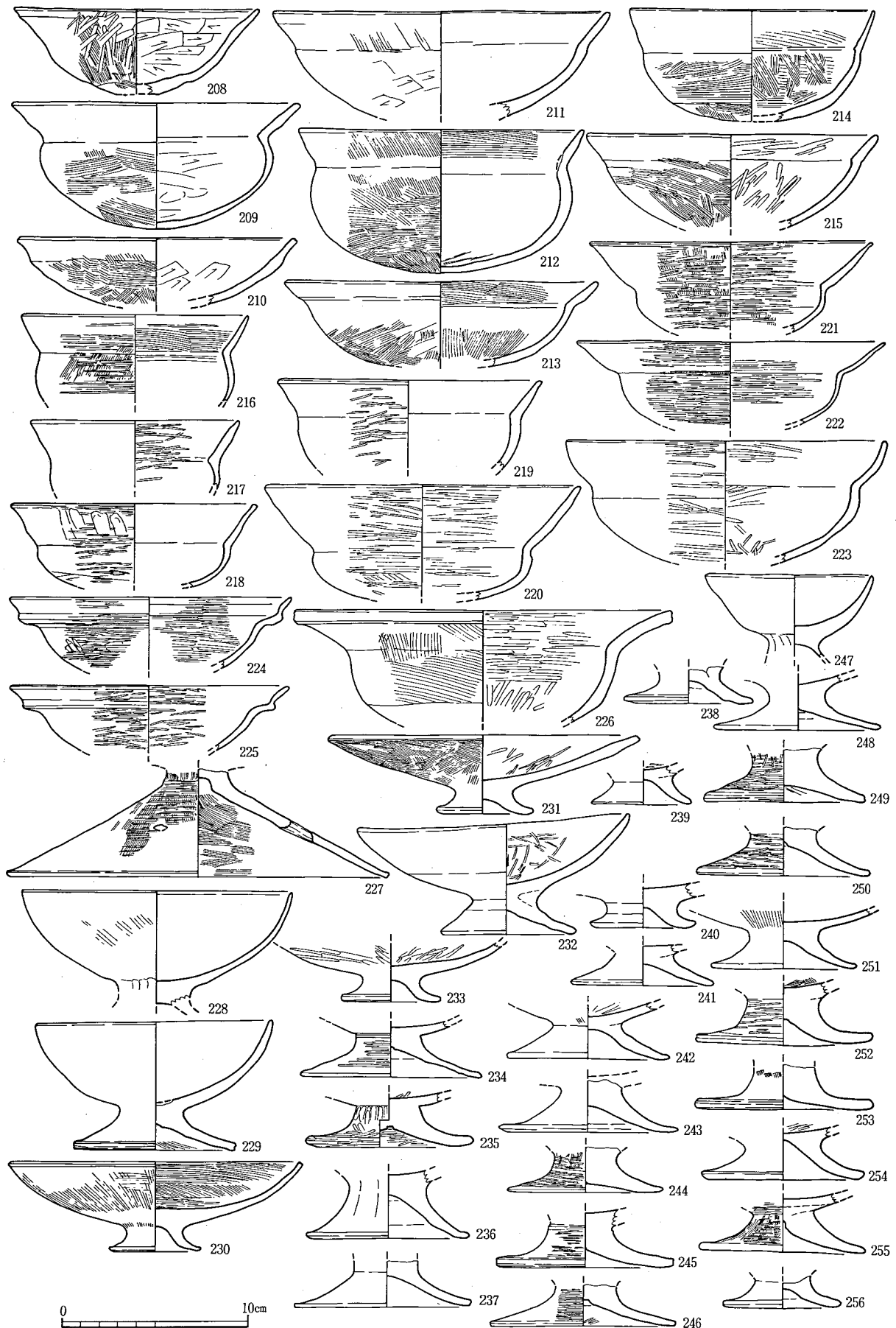
226は外反口縁鉢状の器形をなすが、器壁が厚く、端部を断面方形に仕上げる点がやや特異。高杯口縁部となる可能性も考慮する必要があるだろう。外面ハケメ、内面ミガキ仕上げである。

227は畿内系の精製脚付鉢脚部片。外面は縦ハケ後横ミガキ、内面は斜めハケ仕上げで、3ヶ所に半乾燥時の穿孔。228は深い鉢部の脚付鉢。いずれも内外ナデ仕上げ。230～232は鉢部が浅く、山陰系となるか。230は鉢部内外ハケメ、231は鉢部外面ハケ、内面ミガキ、232は外面ナデ、鉢部内面ミガキ仕上げ。233も同様の器形と推測されるが、鉢部内外はミガキ仕上げ。247は鉢部口径が小さく、やや深い器形。内外ナデ仕上げで、脚部外面に縦方向のかすかな稜が残っている。

234～246・248～259は脚付鉢脚部片である。外面横ミガキ、内面ナデ仕上げのもの（234・244～246・249・250・252・255）と、内外横ナデ仕上げのもの（237～243・248・251・253・254・256）



第370図 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図(8)(1/3)



第371图 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図(9)(1/3)

が多数を占めている。235は外面縦ミガキ、脚端外面～内面ミガキ仕上げで、やや特異である。236・257は外面に縦方向の稜が残る。258は内外のナデが粗く、外面には凹凸、内面には接合痕を残す。260は脚裾が大きく広がるもので、外面縦ハケ後横ミガキ、内面横ハケ仕上げ。

261～269は畿内系の小形器台。外面ミガキのもの多く、261～264・268は受部内面放射状ミガキ。262外面は摩滅が進むが、本来ミガキか。267も摩滅が顕著であるが、ミガキは観察できずハケメのみ残る。脚部内面は264・266・269は板ナデ後ハケメであるのに対し268内面はナデ仕上げ。268は3南6区遺構面出土のもので、101・102号竪穴住居跡のいずれかに帰属する可能性がある。同様に3南4区出土の264は95・99号竪穴住居跡のいずれかに伴う可能性がある。

270～278は山陰系鼓形器台の破片。受部内面ミガキ、裾部内面ケズリが基本であるが、270・273・276受部内面はミガキが観察されず、278内面は摩滅が進む。外面は横ナデ仕上げを基調とするものが多いが、270・271は横ハケ後縦ミガキ、275は横ミガキ仕上げ。273・274は外面横ミガキ仕上げで、屈曲部下の突帯が無いので、あるいは受部底の無い畿内系小形器台となるか。

279～282は粗製の支脚片で、280は天地が不安。281・282外面には粗いタタキ風の条痕が残る。

283・284は小形の脚部片で、粗雑なナデにより仕上げていることから製塩土器の可能性が高い。

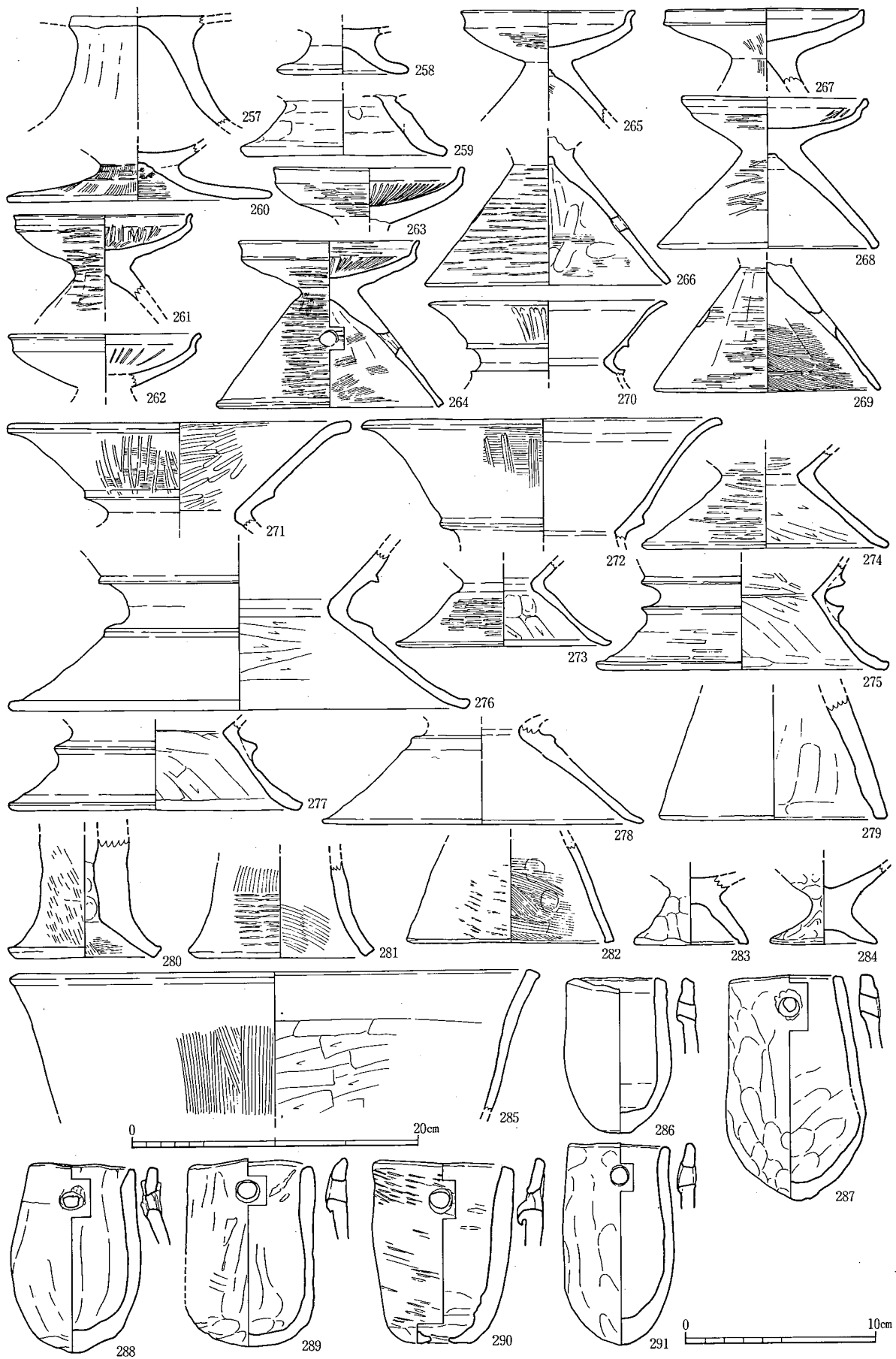
285は大きく開く口縁部で、外面縦ハケ、内面ケズリ仕上げによることから、山陰系甌形土器か。

288～293はタコ壺片。内外ナデ仕上げのものが多いが、290はタタキのような条痕が外面全体に残っている。290は底部に焼成前穿孔がある点でも特異である。

294は土製杓子片。内面はやや粗いミガキ仕上げ。295は山陰、北陸地域にいくつか例がある舟形土製品の舳先部分の破片となるか。内外ナデ仕上げ。

296～363は半島系土器の破片である。297は灰白色瓦質の壺頸部片である。胴部外面は平行タタキで、近世の瓦質土器に近い焼成のもの。297は壺頸部片で、胴部平行タタキの後、頸部に三角形の列点文を巡らす。41号土坑付近の攪乱から出土しており、近辺に位置する29号竪穴住居跡の出土土器2と同一個体の可能性があるだろう。明褐色軟質であるが、土師器よりは堅緻。298は壺頸部片であるが、直に頸部が立ち上がり、強く外反して口縁へと続く点特徴的。内外ナデ仕上げで、灰白色でやや軟らかい瓦質焼成。299は口縁部の短い壺になると推測される。胴部外面縄席文タタキ、頸部内面ハケメ状の条痕残る。黄灰色を呈し陶質。300は暗灰色を呈す口縁部片であるが、外面に環状把手が剥離したような痕跡がある。内外に炭素を吸着したように見え、中世瓦器に近い焼成。301はやや長く伸びた口縁部片で、陶質に焼成され、灰黄白色を呈す。302は二重口縁壺口縁部片で、割口に接合痕が明瞭に観察できる。やや軟質に近い焼成で、外面淡黄褐色、内面黒灰色を呈している。3南3区遺構面より出土しており、93号竪穴住居跡出土土器89と同一個体と考えられる。303は灰色陶質の壺頸部片で、内外ナデ仕上げ。304は口縁端部で、やや上方に拡張させる。完全に陶質焼成されており、内面は強い火を受けて器表が荒れて黄灰色を呈し、外面はテリ状の付着物があり暗灰色。305は大形壺頸部片で50号竪穴住居跡出土品と類似する。灰色を呈し、陶質焼成。306は壺口縁部片で、丸い端部に、口縁端近くの内面にかすかな凹みの巡る点特徴的である。瓦質に近いが内外に炭素を吸着させたような印象を受け、暗灰色を呈する。

307は淡黄褐色を呈し軟質であるが、土師器よりは硬い。外面平行タタキ後沈線を巡らす。308は頸部付近の破片で、外面粗い縄席文タタキ後沈線を巡らす。やや軟質で淡黄褐色。309は細かな平行タタキ後沈線を巡らした壺胴部片で、灰褐色で中世瓦器のような焼成。310は炭素を吸着させた



第372図 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図 (10) (279~282・285は 1/4、他は 1/3)

ような瓦質焼成で暗灰色。外面平行タタキ後沈線。311も310と同様の調整であり、瓦質焼成。

312は大形の壺で、瓦質で黄褐色を呈する。外面は平行タタキ後、凹線・沈線を巡らしている。313は外面細かな平行タタキ、格子タタキの胴～底部片で、やや焼きが甘い陶質に含めて良い焼成で灰色を呈する。314は313同様細かな平行タタキを施し、焼成、色調も類似する。315はやや粗い平行タタキに沈線を巡らしたもので、瓦質で淡黄褐色を呈する。316・317は底部片で、胴部細かな平行タタキ、底部格子タタキを施したもので、317は陶質で灰黄色、317は陶質で灰色を呈する。318は細かな擬格子タタキの壺胴部片で、瓦質に近く、灰褐色を呈する。細沈線を巡らしている。

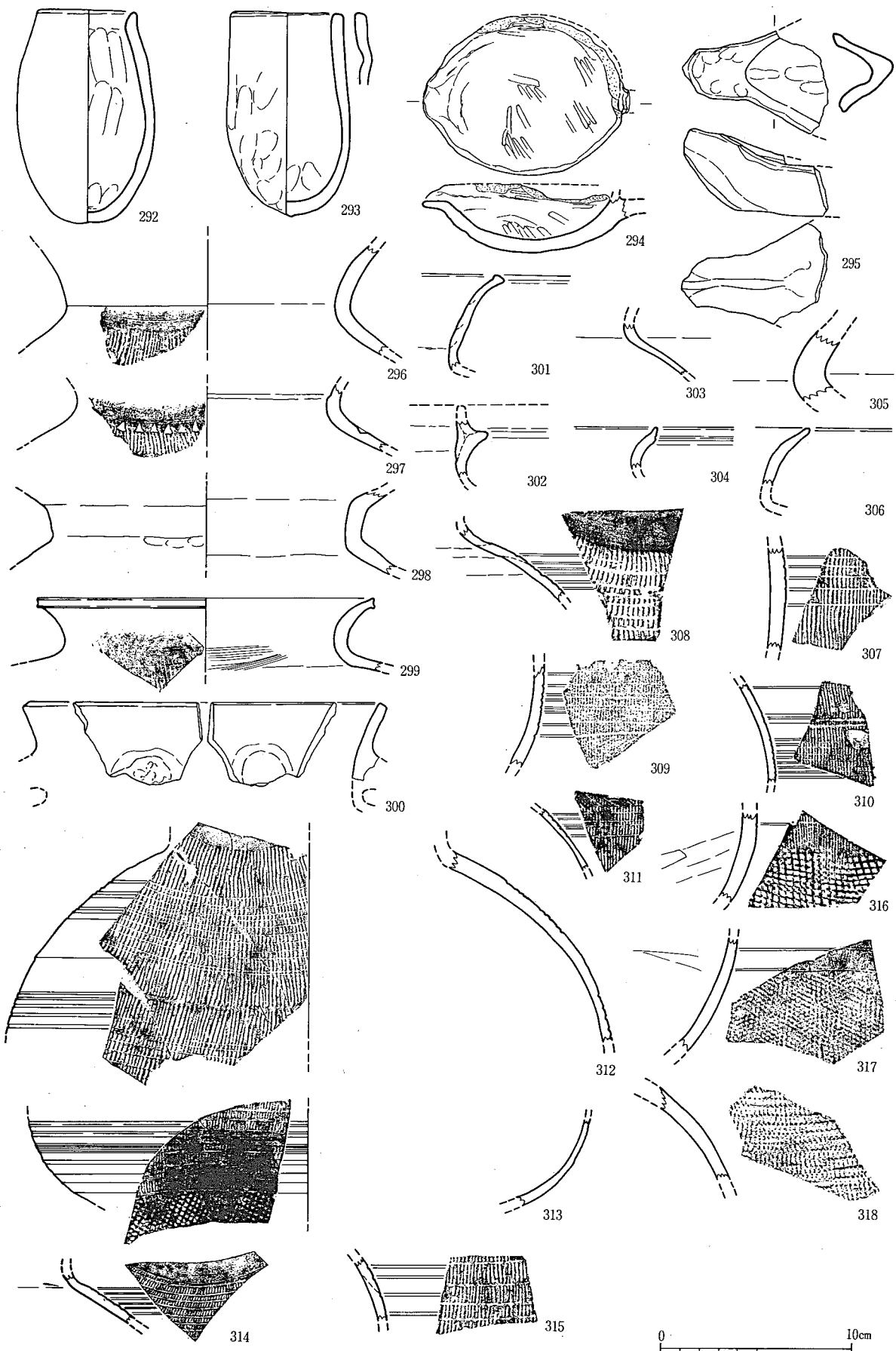
319は大形の壺片で、小片に分かれているため復元にやや無理があろう。胴部粗い平行タタキ後沈線を巡らし、底部は粗い格子タタキ。軟質で黄褐色。320・322は胴～底部片で胴部平行タタキ後沈線、底部細かな格子タタキ。320はやや堅緻な軟質焼成で、黄褐色。322は瓦質で灰褐色。321は縄蓆文タタキ後やや幅広の沈線をめぐらした壺胴部片。陶質で内外とも暗灰色を呈する。323はやや細かな平行タタキ後沈線を巡らしたもので、下部には沈線が及ばないことから底部近くか。底部内面には無文当て具痕か、凹みが残る。瓦質で灰白色。324は縄蓆文タタキ壺破片で、タタキが交叉することから底部近くか。325も外面縄蓆文タタキ、瓦質焼成、黄褐色を呈する。326～328はいずれも外面縄蓆文タタキ後沈線の壺胴部片であり、326は陶質で灰褐色を呈する。327は瓦質で白灰色を呈する。328は下部に沈線が及ばないことから底部近くとなるか。陶質で暗灰色を呈する。

329～342はいずれも外面に細かな格子タタキを施したもので、329には沈線、339は凹線を施している。329は陶質で灰色、330・331は瓦質で灰色を呈す。332は頸部近くの破片で、陶質、灰白色。333は内面ケズリで、砂粒を少し含む胎土。焼成は土師器に近く、淡黄褐色を呈する。334は頸部近くの破片で、瓦質、灰褐色を呈する。335は陶質で、灰青色。336～339は頸部近くの破片で、336は灰褐色陶質、337灰色瓦質、338淡灰色瓦質。339は内面に接合痕を残し、やや瓦質に近い焼成。

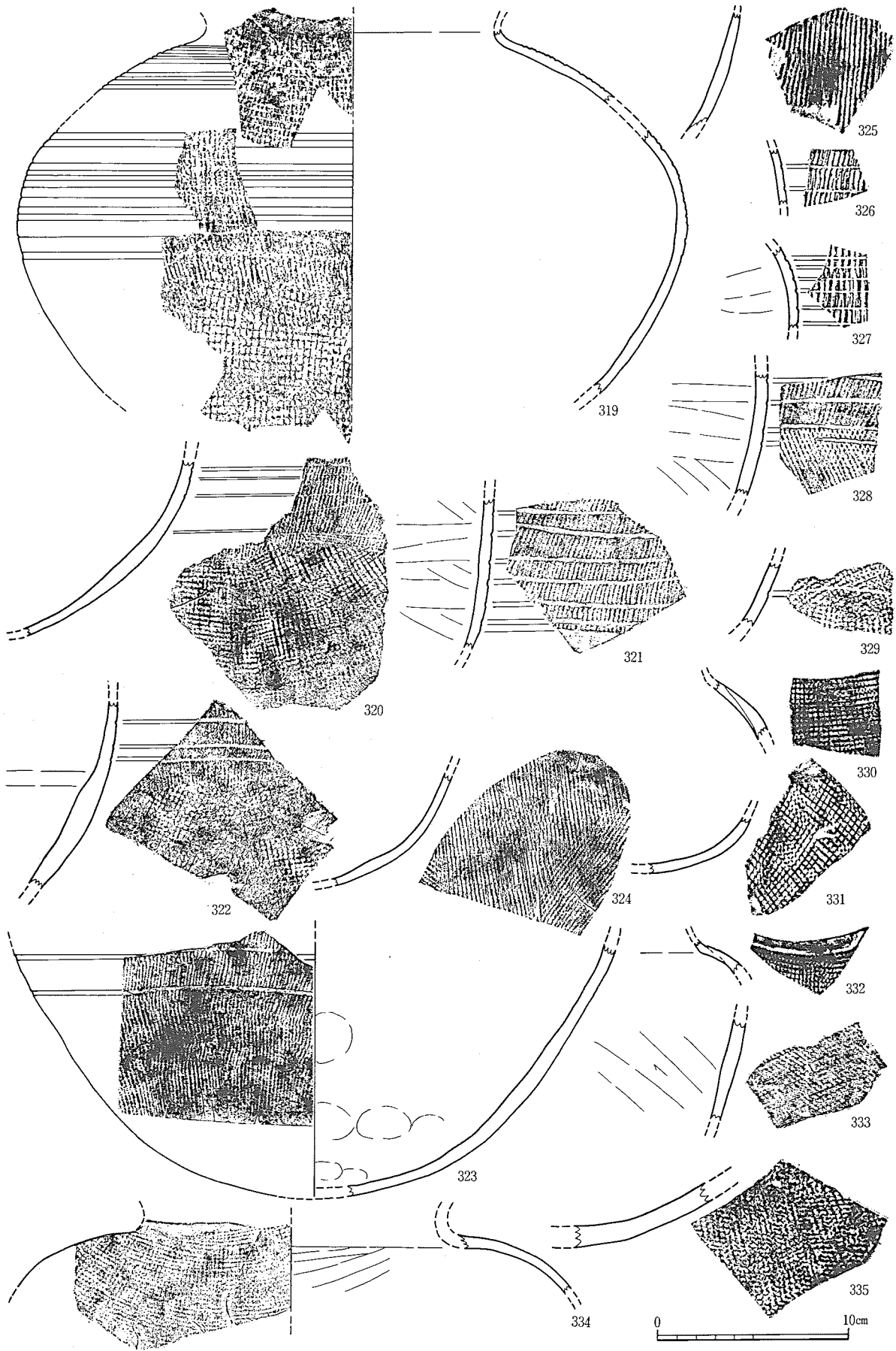
340はやや粗い格子タタキを施し、内面はかすかな凹みが残る。土師器と大差ない軟質焼成で、淡黄褐色。341は外面かすかな格子タタキ、内面は板ナデによる擦過痕。淡灰褐色瓦質。342は細かな格子タタキの底部片で、黄褐色軟質。343は縄蓆文タタキ後、ナデ消しを行ったもので、陶質紫灰色。344・345は外面無文で、いずれも陶質焼成。344は紫灰色、345は暗灰色を呈する。346はやや細かな斜格子タタキの後凹線を巡らしている。軟質であるが土師器よりやや堅緻で、淡黄褐色を呈する。347は平行タタキを網代状になるように丁寧に重ねた珍しいタタキのもの。陶質で暗灰色。

348・349は鉢口縁部片。348は外面細かな斜格子タタキ後、凹線を巡らし、口縁のナデが丁寧である。いずれも軟質で、淡黄褐色を呈する。352・353は外面タタキ、焼成、色調とも348と類似している。351。354～356はいずれも外面粗い斜格子タタキで、黄褐色軟質のもの。3北1区を中心に出土しており、あるいは同一個体か。鉢状の器形と推測される。

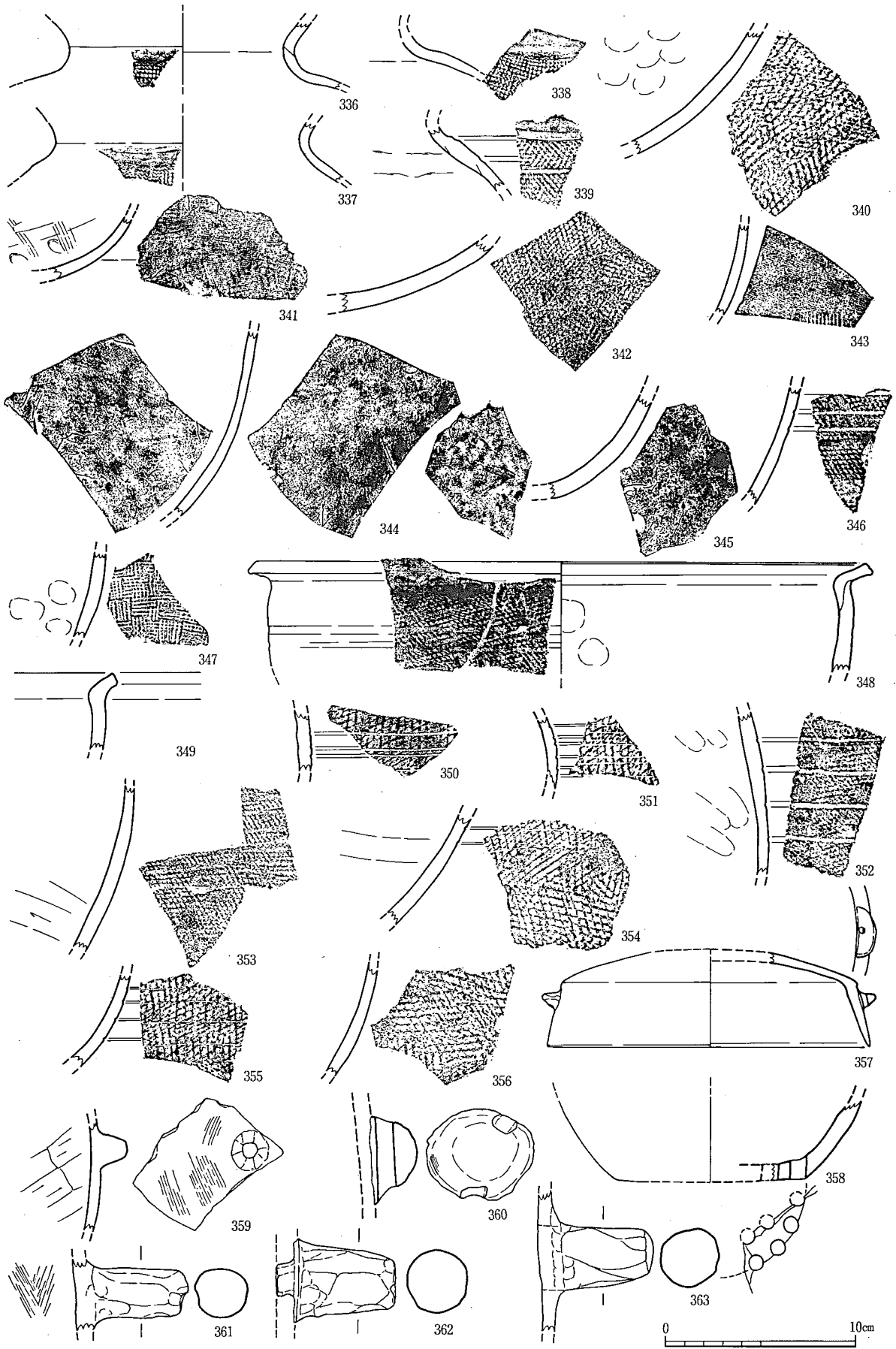
357は蓋で、口縁部外面に穿孔のある耳が貼付されている。口縁部と天井部は分離した別破片であるので、器形の復元にはやや不安が残る。内外ナデ仕上げ。器形からして全羅道系の平底両耳付壺の蓋と推測されるが、かなり大形であるので21号竪穴住居跡出土品のような大形器種とセットをなすと考えられる。焼成は軟質で土師器に近く、淡褐色を呈する。358は甌底部片で、やや軟質、淡黄褐色を呈する。焼成、色調から考えて81号竪穴住居跡出土甌と同一個体か。361～363はいずれも軟質の甌把手片。359・360は耳付壺の耳部破片か。359は小さな乳頭状の突起となっており、穿孔はない。内面ケズリ、外面ハケメ仕上げ、灰白色軟質で土師器に近い。360は円形の耳で、器壁との接合部分より剥離している。縦に穿孔を施し、黄褐色軟質。



第373图 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図 (11) (1 / 3)



第374図 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図 (12) (1/3)



第375图 包含層・近世遺構等出土古墳時代土器実測図(13)(1/3)

3. 古墳時代の鉄器

第376図は古墳時代の遺構出土、および近世遺構・包含層などから出土した古墳時代のものと考えられる鉄器を示したものである。本来、住居、土坑などの古墳時代以降から出土したものは『西新町遺跡』Ⅱ第237・238図に掲載の予定であったが、刊行後に報告漏れに気づいた遺物もここに掲載している。

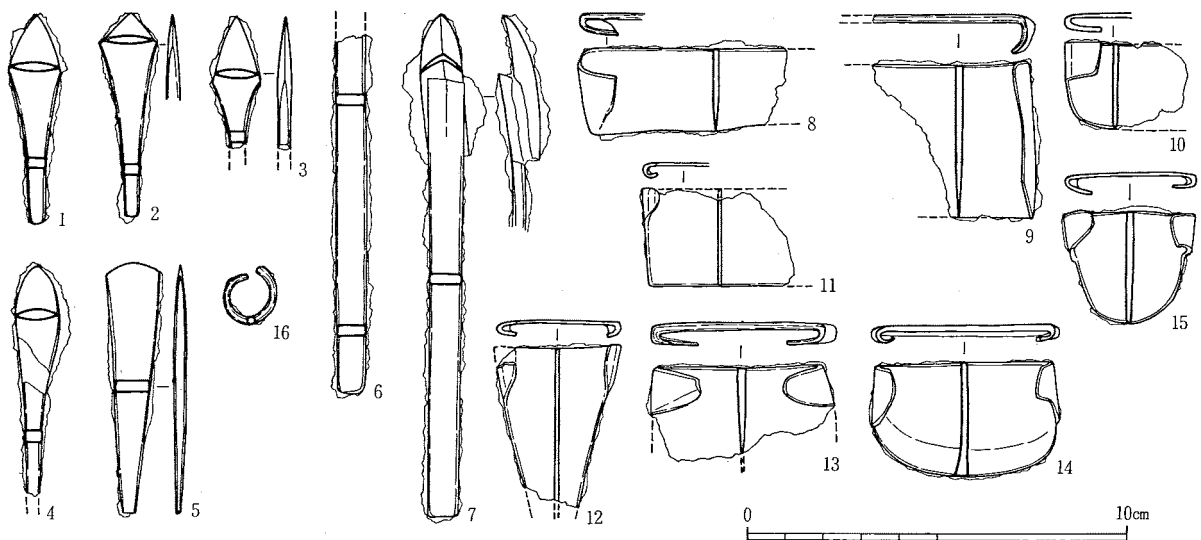
1～5は鉄鏃で、1は131号竪穴住居跡、2は147号竪穴住居跡、3は41号土坑、4は3中1区遺構面、5は3南3区の近世ピットより出土した。

7は鉈で、切先部分が錆により膨らみずれているが、切先～茎尻まで完存する。長さ13.3cm、切先幅1.0cm、茎部幅0.8cmを測り、茎尻は平面方形である。切先は鑄が立ち、茎の断面は方形を呈す。133号竪穴住居跡出土。6は鉈の茎と考えられるもので、7同様に茎尻は方形である。110号竪穴住居跡より出土した。

8・9は鉄鎌基部近くである。いずれも折り返した基部近くまで刃が立っている。8は140号竪穴住居跡、9は3号竪穴住居跡より出土している。

11～15は側縁を小さく折り曲げた鉄器で、平面形は鋤先に類似し半円形、隅丸方形を呈するが、鋤先と比べてかなり小形である。下縁の残る10、15、14では刃をつけておらず、農具、工具とは考えられないものである。14は下端部を厚く拡張しており特徴的である。これらの遺物は10が3南6区遺構面、11が3西拡張区近世土坑、12が1区包含層、13が1区西側遺構面、14が1区東拡張区攪乱、15が1区近世ピットより出土しており、古墳時代遺構に確実に伴うものではないが、形態から近世のものとは考えられないので、古墳時代の可能性が高いと思われる。この種の鉄器について川越哲志氏は小型鍛造鉄刃という名で呼び、農具としての機能を推測している（川越哲志 1993『弥生時代の鉄器時代』雄山閣 pp.134-5）。

ただ、これらの鉄器は刃が無いことに加えて、左右の折返しが短く狭いため木製品に装着したとも考えられないので、農具としての機能を想定するには無理があるだろう。ここで、これらの鉄器の機能について結論を下すことはできないが、布留式土器などの土師器のケズリ工具ではないか



第376図 古墳時代金属器実測図（1／2）

という岩瀬正信氏の指摘が参考となる。岩瀬氏はこれらの鉄器の模造品を作成し、土器の内面にケズリを施す実験を行っている。実験の結果、これらの工具は粘土を掻き取り、器壁を薄くする「ケズリ」工具として十分に機能することが判明した（図版153）。本遺跡より出土した布留式土器とは多少、ケズリの稜の立ち方などの雰囲気の違いがあるが、これは調整を行なう時の土器の乾燥度の差によるものと考えられよう。側縁の鉄板折返し部分の形状、全体的な大きさは特に木製の柄などを装着せずに片手で握るのに適しており、11・14・15のように下縁が曲線をなした平面形も土器内面のカーブと合致している。したがって、土器ケズリ工具の可能性も考える必要があろう。（重藤）

4. 漁撈具

整理の関係上、『西新町遺跡』Ⅱで報告できなかった未製品を含む石錘・浮子計13点を図示した（第377図）。図示したもののほとんどが、近世・近代の遺構や古墳時代遺構面、攪乱から出土したものである。なお、土錘については、近世・近代に属する土錘と区別することが難しいため、近世・近代の漁撈具として扱い、また蛸壺については出土量が多いため、『西新町遺跡』Ⅱと同様、住居跡や遺構面出土土器の中に含めた。石錘の分類については御床松原遺跡報告書における分類に従い、報告する。

1～5は有溝石錘。1は17号土坑出土。裏面が欠けるが、長軸溝が全周するタイプになるか。長さ7.0cm、重さ69.7gで頁岩製。2・3は3区遺構面出土。短軸溝を切る直軸溝を各1条もつ。2は長さ6.2cm、重さ97.1gで滑石製。3は加工痕が明瞭に残る。長さ7.5cm、重さ169.8gで滑石製。4は3区北1区遺構面出土。長軸溝1条、短軸溝2条もつ。加工痕が明瞭に残る。12次調査で出土した石錘の中で最大のものである。長さ14.8cm、重さ330.1gで滑石製。5は3区西拡張区遺構面出土。短軸溝1条のみ。長さ10.3cm、重さ398.2gで滑石製。

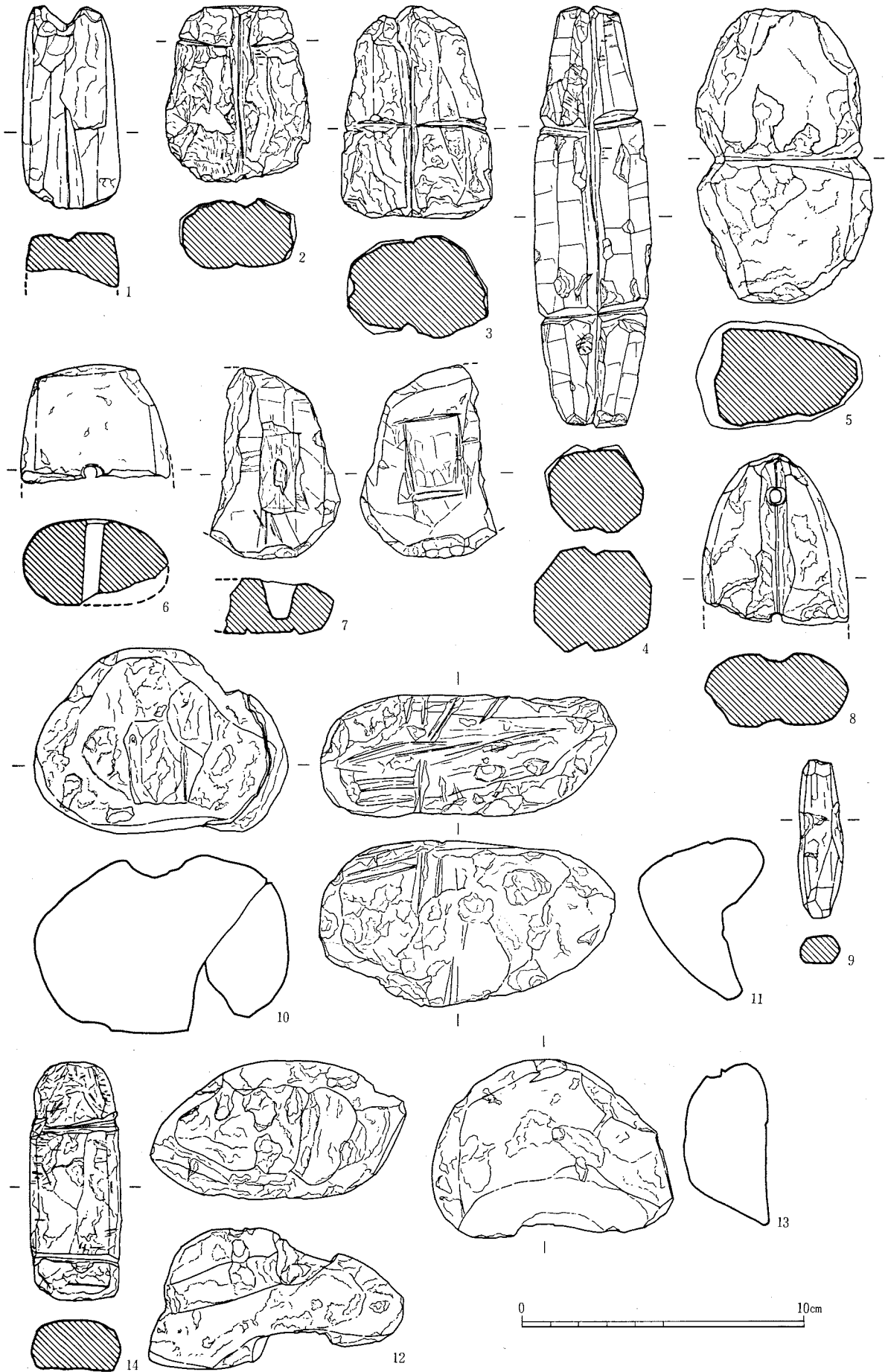
6・7は有孔石錘。6は3区西拡張区遺構面出土。下半分は欠けるが、2孔もつタイプになるか。長さ4.1cm、重さ103.6gで頁岩製。7は未製品で、3区北1区攪乱出土。表側には小刀状工具を使用した未貫通の孔と、裏側には四角形の開孔する際の目安となる溝を掘る。長さ6.7cm、重さ89.1gで滑石製。

8は有溝・孔石錘。中2～3区攪乱出土。下半分は欠けるが、長軸溝に直交する3孔をもつタイプになるか。長さ6.0cm、重さ112.6gで滑石製。

9は未製品か。3区南1区遺構面出土。全面に加工痕が明瞭に残る。長さ5.6cm、重さ13.6gで細粒砂岩製。

10～13は浮子に使用したと考えられる軽石。明瞭な加工痕が認められるもの4点のみ図示した。10は3区南1区遺構面出土。両面に束縛用の抉りがある。長さ6.3cm、重さ62.2g。11は3区北1区遺構面出土。側面には10以上の細かい溝と両面に束縛用の抉りがある。長さ10.5cm、重さ55.4g。12は3区北1区遺構面出土。2方向の束縛用の抉りがある。長さ8.5cm、重さ24.1g。13は84号土坑出土。半月状に加工。灰白色を呈し、他の軽石と異なる。長さ8.4cm、重さ35.7g。

14は112号住居跡出土で、本来は昨年度報告すべきもの。上下に2条の溝をもつ有溝石錘で、表面に細かい加工痕が残る。長さ9.5cm、重さ85.6gで滑石製。（大庭）



第377图 渔捞具实测图 (1/2)

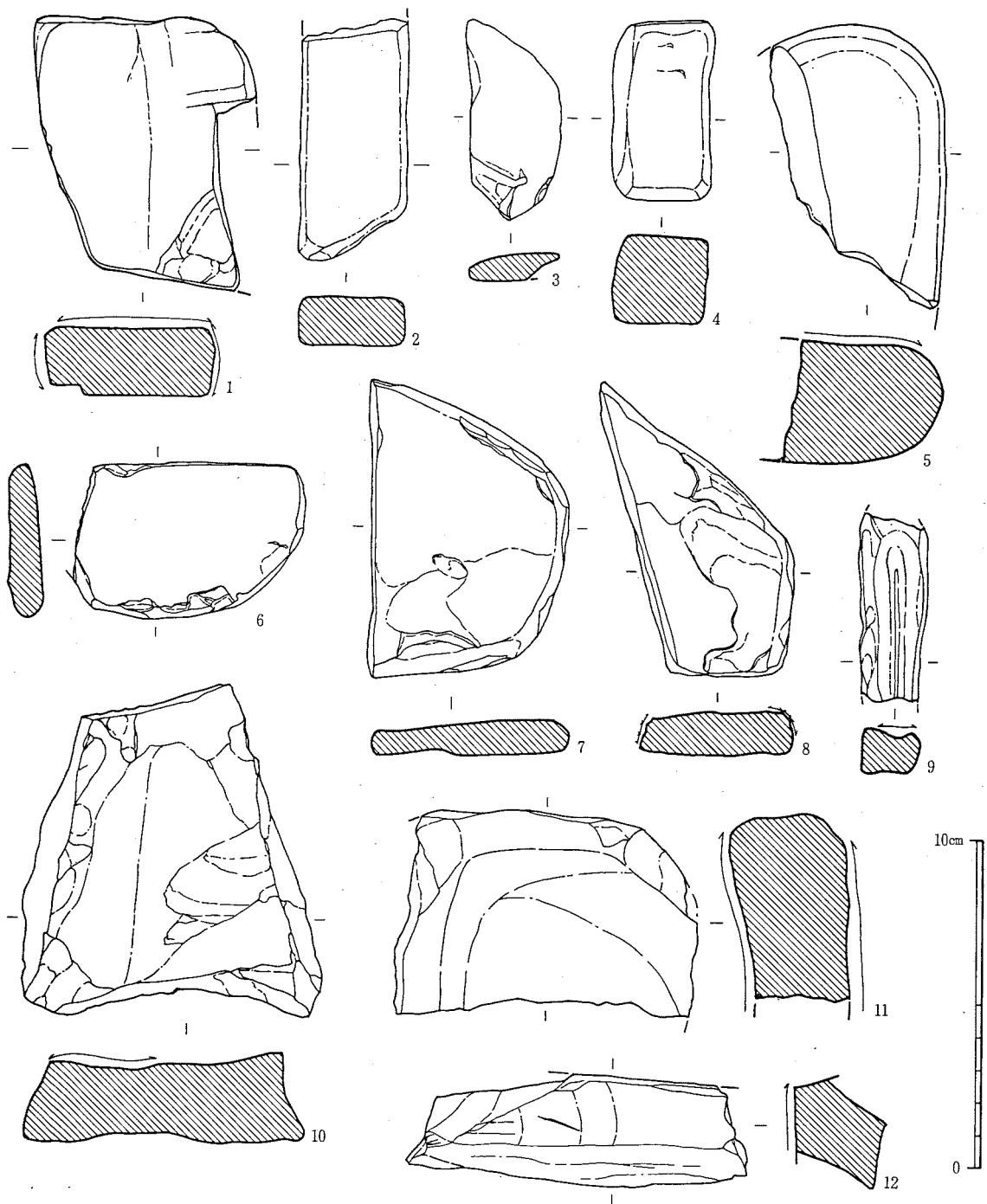
5. 石器

ここでは『西新町遺跡Ⅱ』で掲載できなかった120号住居跡以降の住居跡及びそれ以外の箇所から出土した石器類について報告する（図版152・153、第378～383図）。

住居跡・41号土坑出土石器（図版152、第378図1～第379図38）

1は78号・129号住居跡上層から出土。砥石か。長軸8.3cm、短軸6.5cm、厚2.1cm、重さ181.8g。欠損箇所があるが欠損後に再使用したか。表面が風化しており、目立った削痕は認められない。砂岩。2は121-124号住居跡周辺出土。用途不明。重さ61.9g。黄褐色を呈する。砂岩。3は121-124号住居周辺出土。長軸6.1cm、短軸2.8cm、厚さ0.9cm で重さ15.2g。全面平滑だが用途は不明。砂岩。4は122号住居覆土出土。摺石か、使用痕認められず明確な用途不明。長軸5.4cm、短軸3.1cm、厚さ2.7cm で重さ93.1g。砂岩。5は122～123号住居跡上層出土。台石か、一面使用。大きく欠損する。残存長8.6cm、厚さ3.7cm で重さ263.4g。花崗岩。6は125号住居跡覆土出土。一部欠損、裏面は剥離する。長軸7.0cm、短軸4.9cm、厚さ1.0cm で重さ49.4g。端部に加工痕があるが使用痕認められず未製品か。少し赤みがあった灰褐色を呈する。安山岩系。7は125号住居跡覆土出土。すべての辺に加工痕が認められるが用途は不明。82.8g。9は128号住居覆土出土砥石。一面のみ使用、玉砥石か、中央部が線状に陥没する。前後欠損し長軸5.7cm、短軸2.0cm 厚さ1.4cm。安山岩系石材で赤褐色。10は128号住居跡覆土出土。台石か。全面風化しており顕著な使用痕認められない。長軸10.2cm、短軸8.9cm、厚さ2.6cm で重さ281.4g。砂岩。11は131号住居跡覆土出土台石。中央部が凹み、削痕が認められる。表裏二面使用。大きく欠損する。残存長6.1cm、幅9.2cm、厚さ3.5cm、重さ329.3g。砂岩。12は『西新町遺跡』Ⅱで掲載漏れした15号住居跡出土の砥石。使用した1面以外欠損しており、他面使用しているかは不明。表面に薄く削痕があるがほとんど平滑である。残存長さ10.4cm、短軸3.4cm、厚さ3.3cm で重さ104.0g。シルト岩。

13は135号住居跡覆土出土。石槌。端部に使用痕とみられる打痕がみられ、中央部に持手と考えられる人為的な窪みをもつ。長さ14.9cm、厚さ3.5cm、重さ457.0g。花崗岩で黄がかかった灰白色を呈する。14は139号住居跡覆土出土の砥石片。大部分を欠損する。二面使用しており、薄い削痕がみられる。重さ96.4g、黄白色から黒色を呈す。石材は不明。15は146号住居跡P1から出土の玉砥石。二次的な被熱を受けているのか表面は赤色化している。三面の使用が認められ溝状の削痕がみられる。半分は欠損しているともみられ、現存長10.0cm、幅10.6cm、厚さ5.0cm で重さ775.0g。砂岩。16は140・141号住居跡付近出土の砥石。両端部を欠損する。確実に使用が認められるのは二面。何らかの転用の可能性もある。現存で長さ6.7cm、幅2.1cm、厚さ2.6cm で重さ59.7g。粘板岩もしくはシルト岩か。17は140号住居跡覆土出土の用途不明石器。摺石として使用か。全面風化によるものか、平滑である。使用痕は認められないが人為的な窪みが認められる。長さ9.3cm、厚さ1.8cm、重さ70.5gで花崗岩系の石材。18は143号住居覆土から出土の砥石？削痕がほとんど認められない。鉄分が全体的に吸着し、鉄分で砂粒が付着する。風化も著しく、表面剥離箇所も多い。現存長16.6cm、厚さ4.9cm で重さ626.8g。濃緑色を呈するがシルト岩系の石材か。19は140号住居跡覆土出土の砥石。四面ともに使用痕が認められ、よく摩耗している。半分は欠損していると思われ、現存長9.0cm、幅3.8～4.5cm、厚さ0.6～1.6cm で重さ72.8g。シルト岩。20は140・141号住居付近出土の石槌。端部に使



第378図 石器実測図 (1) (1/2)

用痕とみられる打痕があるが他は平滑。長さ12.5cm、幅4.7cm、厚さ3.1cm で重さ299.7g。黄がかった灰白色を呈する、花崗岩。21は144号住居跡付近遺構面出土の凹石。一部に凹部をもつ他、人為的な使用痕は認められない。長さ7.5cm、幅5.6cm、厚さ2.0cm で重さ123.2g。ケイ岩。22は144号住居跡攪乱から出土の砥石。表裏の二面を使用。半分は欠損しているとみられ、現存長6.5cm、幅6.9cm、厚さ2.4cm で重さ193.8g。砂岩。23は144号住居付近遺構面出土の摺石。一面に摺った痕跡が認められるが風化によるものかあまり明確ではない。長さ10.9cm、幅9.2cm、厚さ3.6cm で重さ551.6g。



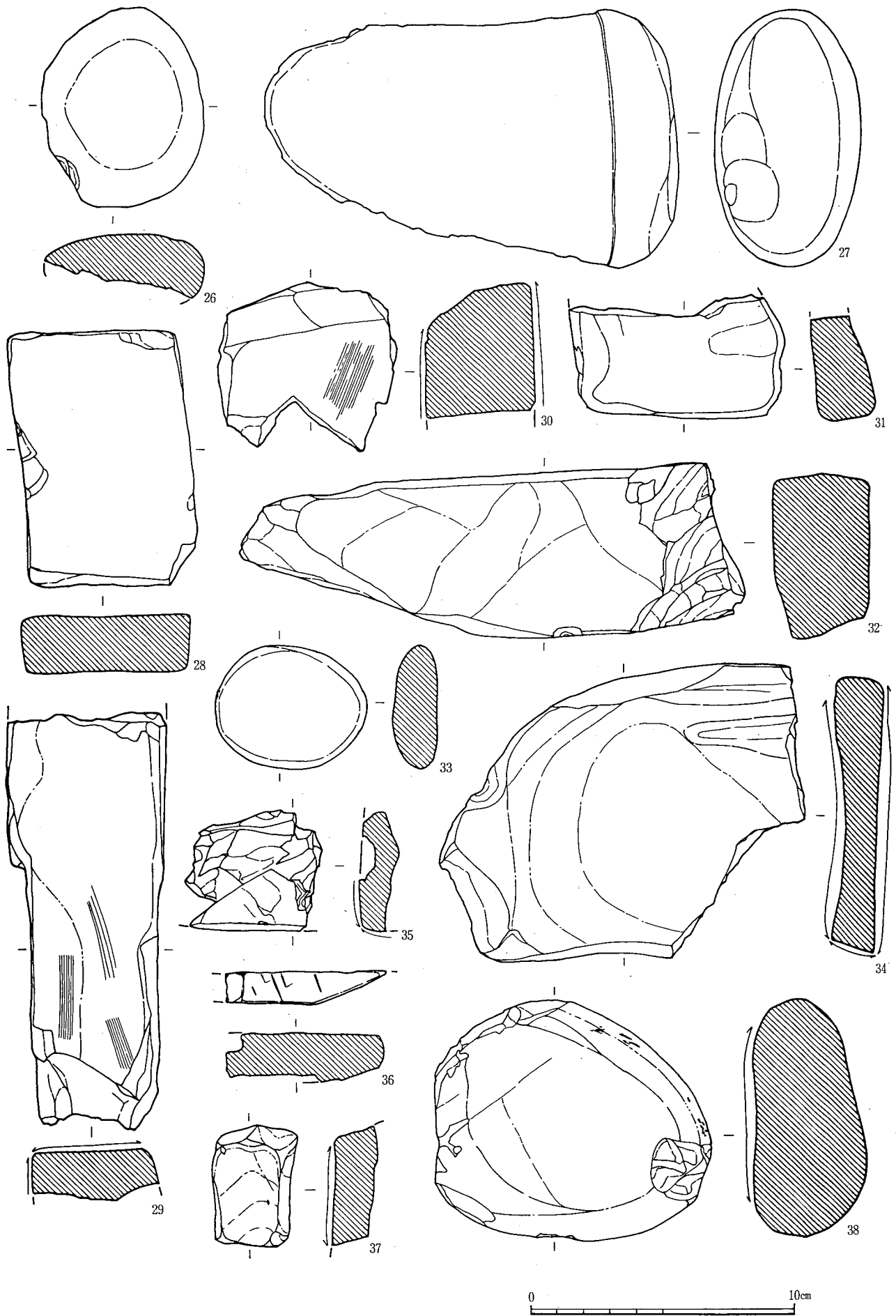
第379图 石器实测图(2)(1/2)

玄武岩。24は144号住居跡覆土から出土の用途不明石器。使用痕が認められない。長さ6.6cm、幅2.6cm、厚さ1.5cmで重さ41.2g。砂岩か。25は149号住居跡出土の不明石器。石槌か。明確な使用痕は認められず。表面は気泡が多い。端部は欠損、剥離する。残存長6.2cm、幅3.6cm、厚さ2.1cmで重さ42.3g。黒色を呈する、凝灰岩系か。

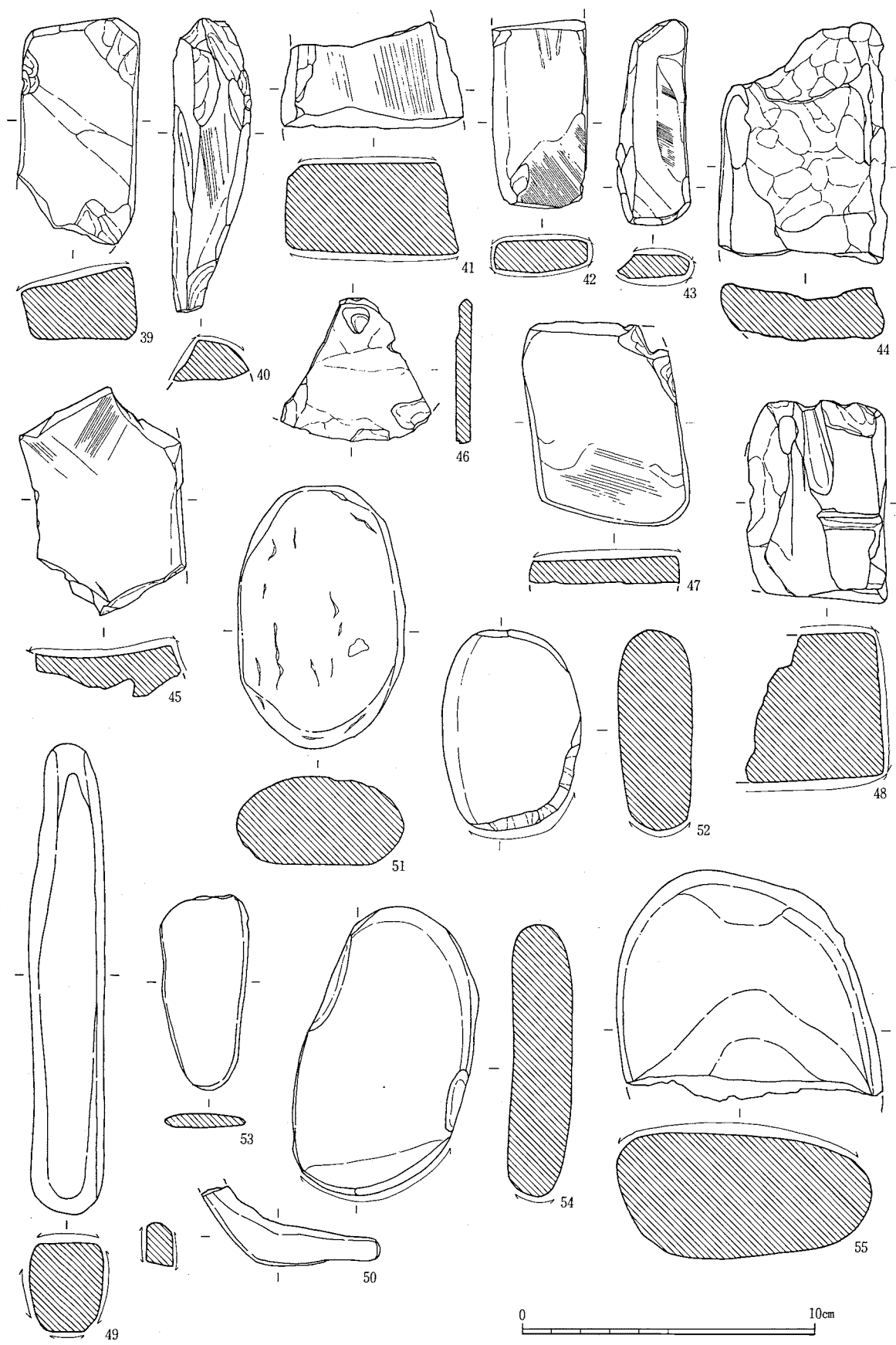
26は155号住居跡覆土出土。摺石か。明確な使用痕は認められない。半面は欠損。現存長7.6cm、幅6.0cm、厚さ2.4cmで重さ113.6g。砂岩系。27は156号住居跡上層出土の石杵?。表面は風化により気泡が多いが摺面と考えられる箇所は平滑。石材をうまく利用しているのか、摺面と持ち手の石材は別々の石材を接合したかの様相を呈す。長さ16.2cm、幅5.5~9.7cmで重さ380.27g。花崗岩。28は163号住居跡覆土出土の砥石。端部は所々欠損するがほぼ完形に近い。表面風化している。使用痕は三面に認められる。長さ9.6cm、幅6.4cm、厚さ2.2cmで重さ380.2g。砂岩。29は163号住居跡覆土出土の砥石。半面は欠損しており二面使用が認められる。削痕が良く残る。残存長15.7cm、幅2.0cm、厚さ6.0cmで重さ266.4g。シルト岩。30は169号住居跡覆土出土の砥石。大きく欠損し、表裏二面の使用が認められ、削痕が残る。現存長さ6.4cm、幅6.8cm、厚さ4.15cmで重さ196.0g。砂岩。31は169号住居跡覆土出土の石器。砥石か。やや凹部があり、平滑ではあるが明確な使用痕なし。大きく欠損しており、現存長さ8.1cm、幅4.8cm、厚さ2.2cmで重さ126.5g。明赤褐色を呈するが石材不明。32は169号住居跡覆土出土の石器。砥石もしくは石槌か。使用はされていると思われるが、表面は風化して気泡が多く、明確な使用痕なし。形状から石槌の可能性もあるが端部欠損しており断定しがたい。現存長さ19.1cm、厚さ3.6cmで重さ744.5g。砂岩系。33は170号住居跡出土の摺石か。全面平滑。長さ5.7cm、幅4.6cm、厚さ1.7cmで重さ16.1g。レキ岩。35は41号土坑出土の砥石。表面は剥離し、欠損著しい。二面は使用痕が認められる。重さ29.1gでシルト岩。36は41号土坑出土の不明石器。端部欠損、風化著しい。重さ19.3gで砂岩。37は41号土坑出土の砥石片。大部分を欠損し、一面の使用が認められる。重さ29.4g。砂岩。38は41号土坑出土の凹石。全面に被熱し赤色化する。高温を受けたか熱による剥離が激しい。長さ10.3cm、幅9.0cm、厚さ4.23cmで重さ593.2g。角閃石。(森井)

遺構面出土石器 (図版152、第380図39~第381図55)

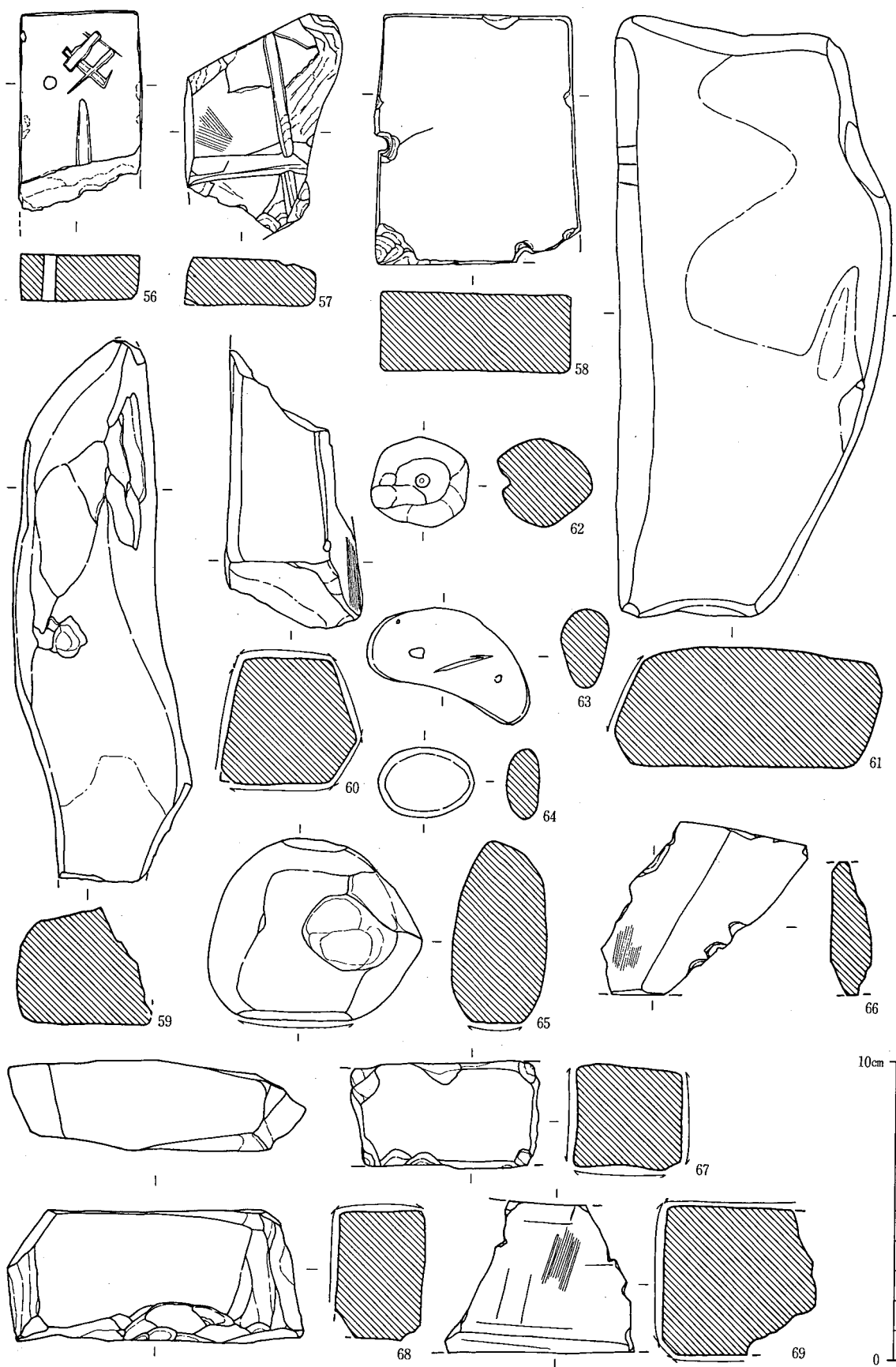
39は3区西拡張遺構面出土。砥石か。使用痕跡二面認められるが粗く、砥石にしては粗いか。端部欠損し、長さ7.8cm、幅3.9cm、厚さ2.5cmで重さ105.0g。黄白色を呈する、砂岩系。40は3区西拡張遺構面出土の仕上砥石。裏面大きく剥離し欠損する。二面の使用は確認でき、削痕が良く残る。残存長10.0cm、重さ36.9g。シルト岩。41は3区西拡張遺構面出土の砥石。両端を大きく欠損している。表裏二面を使用。削痕は表面だけ残り、裏面は平滑。表裏で使用用途を変えていたか。重さ98.6gで石材は不明。42は3区3~中2西遺構面出土の砥石、もしくは他の用途ありか。全面の使用が認められる。片側端部欠損。細かい削痕が認められる。残存長6.4cm、厚さ1.1cm、重さ45.3g。黄白色を呈するが石材不明。44は3区南1区遺構面出土。表面のほとんどが剥離して欠損するために用途は不明である。本来の面が残っている箇所は平滑であり、あるいは砥石として利用されていたか。重さ109.4g、砂岩系。45は3区西拡張南遺構面出土の仕上砥石。裏面剥離。欠損部多い。二面の使用は認められ削痕良く残る。重さ61.2g、シルト岩。46は3区西拡張遺構面出土の不明石器。大きく欠損している。重さ11.5gで砂岩。47は1区遺構面出土の不明石器。表面には細かい削痕が認められるが、裏面剥離する。長さ7.0cm、幅5.0cmで重さ43.6g。淡黄白色を呈するが石材不明。48は1区遺



第380图 石器实测图 (3) (1/2)



第381图 石器实测图(4)(1/2)



第382图 石器实测图(5)(1/2)

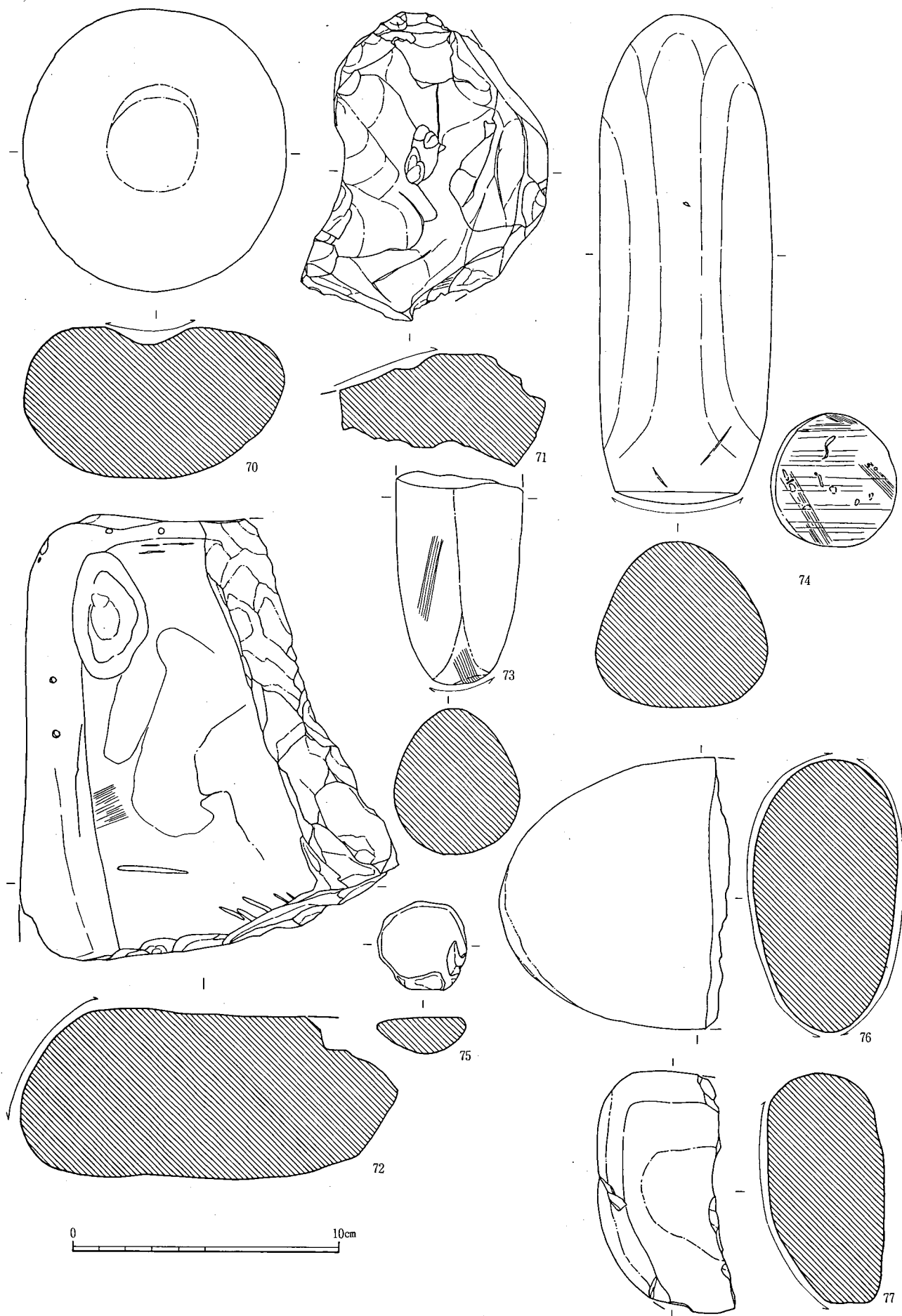
溝面出土。玉砥石か。半分は欠損していると思われるが三面は使用。表は二条、裏面にも一条の溝条削痕がある。もう一面は通常の砥石として使用。全体的に摩耗する。重さ250.6g。黄白色に赤色の縞状に目が入る。石材不明。49は3区中2区遺構面出土の石器。砥石の転用品か。四面に平滑な面をもつが砥石として利用されたかは断定しがたい。長16.2cm、幅2.5cm、厚さ3.0cmで重さ211.2g。シルト岩。50は2区中6区遺構面出土の不明石器。端部欠損、二面平滑。灰白色から灰茶色、泥岩か。51は1区遺構面出土。摺石か。灰黄色を呈し、表面は自然な気泡があるものの全体的には滑らか。摩耗によるものか。使用痕跡らしいものは確認できない。長9.0cm、幅5.7cm、厚さ3.0cmで重さ243.7g。石材不明。52は3区南8区遺構面出土の摺石もしくは叩石。端部に使用痕が認められる。長さ6.9cm、幅4.8cm、厚さ2.5cmで重さ141.2g。花崗岩系。53は3区南7区遺構面出土不明石器。極めて薄く、使用痕なし。残存長6.7cm、幅3.0cm、厚さ0.5cmで重さ17.0g。青緑色を呈すが石材は不明。54は3区南7区遺構面出土摺石もしくは叩石。端部に使用痕、持ち手とみられる箇所凹みを作る。裏面に被熱か、赤変する箇所がある。長10.1cm、幅5.8cm、厚さ2.1cmで重さ192.7g。砂岩。55は3区南4区遺構面出土の台石か。半分を大きく欠損する。片面を使用したと思われる。被熱したとみられ赤色化している。現存長7.9cm、幅8.9cm、厚さ4.3cmで重さ466.3g。花崗岩。(森井)

近世土坑出土石器 (図版153、第382図56～59)

56は2号土坑出土の不明石製品。穿孔があり、また線刻で何かを刻むが不明。半分は欠損する。全体的に非常に平滑、研磨痕あり。残存長6.6cm、幅4.0cm、厚さ1.6cmで重さ95.4g。滑石製。57は63号土坑出土の砥石。表面にのみ溝状の削痕が二条ある。四面使用。欠損大。残存長7.4cm、幅4.3cm、厚さ1.6cmで重さ73.2g。小豆色を呈する。砂岩系。58は93号土坑出土石製品。滑石製で何かの未製品か。端部に穿孔あり。全面平滑だがすべて切断面とみられ、加工途中であったのであろう。長8.4cm、幅6.8cm、厚さ2.6cmで重さ260.1g。59は129号土坑出土。石槌か。全面摩耗して平滑。半分は欠損。残存長18.2cm、幅5.3cm、厚さ3.9cmで重さ572.0g。青灰色を呈するが石材不明。(森井)

溝・石列基礎出土石器 (図版153、第382図60～67)

60は1号溝から出土の砥石片。六面使用で削痕良く残る。ほとんど欠損する。残存長9.3cm、幅4.7cm、厚さ4.4cmで重さ140.1g。砂岩。61は29号溝から出土の台石。比較的全面平滑ではあるが摩耗によるものかもしれない。長20.1cm、幅9.2cm、厚さ3.9cmで重さ1141.7g。泥岩系か。62は54号溝出土の凹石。中央部に人為的な凹みがあるが用途は不明。石錘の未製品か。長3.2cm、幅3.0cm、厚さ3.1cmで重さ30.5g。砂岩。63～65は55号溝出土。63は不明石。古墳時代の玉原石に似ており、混入したものか。表面は非常に平滑。長5.4cm、幅2.7cm、厚さ1.6cmで重さ33.9g。赤褐色を呈する。64も玉原石か。長3.1cm、幅2.3cm、厚さ1.1cmで重さ13.6g。灰白色。65は摺石?石材不明で摩耗によるか全体的に平滑。長6.1cm、幅7.0cm、厚さ3.1cmで重さ211.5g。67は石列基礎出土。ほとんどが欠損しており、本来の面は平滑だが削痕などは認められない。重さ31.2g、砂岩系。67は石列基礎南出土砥石片。三面使用し、薄い削痕がみられる。残存長6.0cm、幅3.6cm、厚さ3.5cmで重さ128.8g。砂岩。(森井)



第383图 石器实测图(6)(1/2)

ピット・攪乱出土石器（図版153、第382図68～第383図77）

68は P135出土砥石。表面は摩耗し削痕はみられないが二面は使用している。残存長9.9cm、幅4.1cm、厚さ3.0cm で重さ211.4g。シルト岩。69は P243出土の砥石。欠損するが三面の使用は認められ、削痕が残る。重さ160.4g で外面黄橙色を呈するが石材は不明。

70は P274出土の凹石。中央部に大きい凹みを有する。表面に気泡が多い石材だが材質は不明。被熱によるものか、所々赤変する。長10.6cm、幅9.9cm、厚さ5.7cm で重さ856.2g。71は P306出土凹石。ほとんどが欠損している。全面風化が著しい。重さ 439.7g で玄武岩か。72は P505 出土の不明石器。大きく欠損箇所がある。人為的な穿孔の可能性のある径 2 mm 程度の穿孔が 4 カ所ある。厚さ6.3cm で重さ2216.2g。シルト岩。

73は西拡張攪乱出土の石槌か。半分を欠損する。端部に打痕が認められる。残存長8.1cm、幅4.5cm、厚さ6.5cm で重さ315.8g。花崗岩系。74は 3 区中 5 区攪乱出土の石杵。使用面は非常に平滑で細かい削痕が認められる。長18.3cm、幅6.4cm、厚さ6.2cm で重さ1270.1g。ヒン岩。75は近世包含層出土の不明石器。玉原石に似る。表面非常に平滑で加工痕なし。長3.3cm、幅3.3cm、厚さ1.5cm で重さ 18.6g。赤色・黄色・黒色が縞状に入る。76は 3 区西拡張区南出祖の摺石もしくは台石。半分が欠損。ほぼ全面が平滑である。残存長8.6cm、幅10.2cm、厚さ5.4cm で重さ692.2g。花崗岩。77は 2 区中 6 区攪乱出土の摺石か。半分を欠損する。表面の摩耗が著しく、一面のみ使用痕がみられる。残存長9.2cm、幅4.6cm、厚さ4.3cm で重さ253.7g。砂岩系石材。（森井）

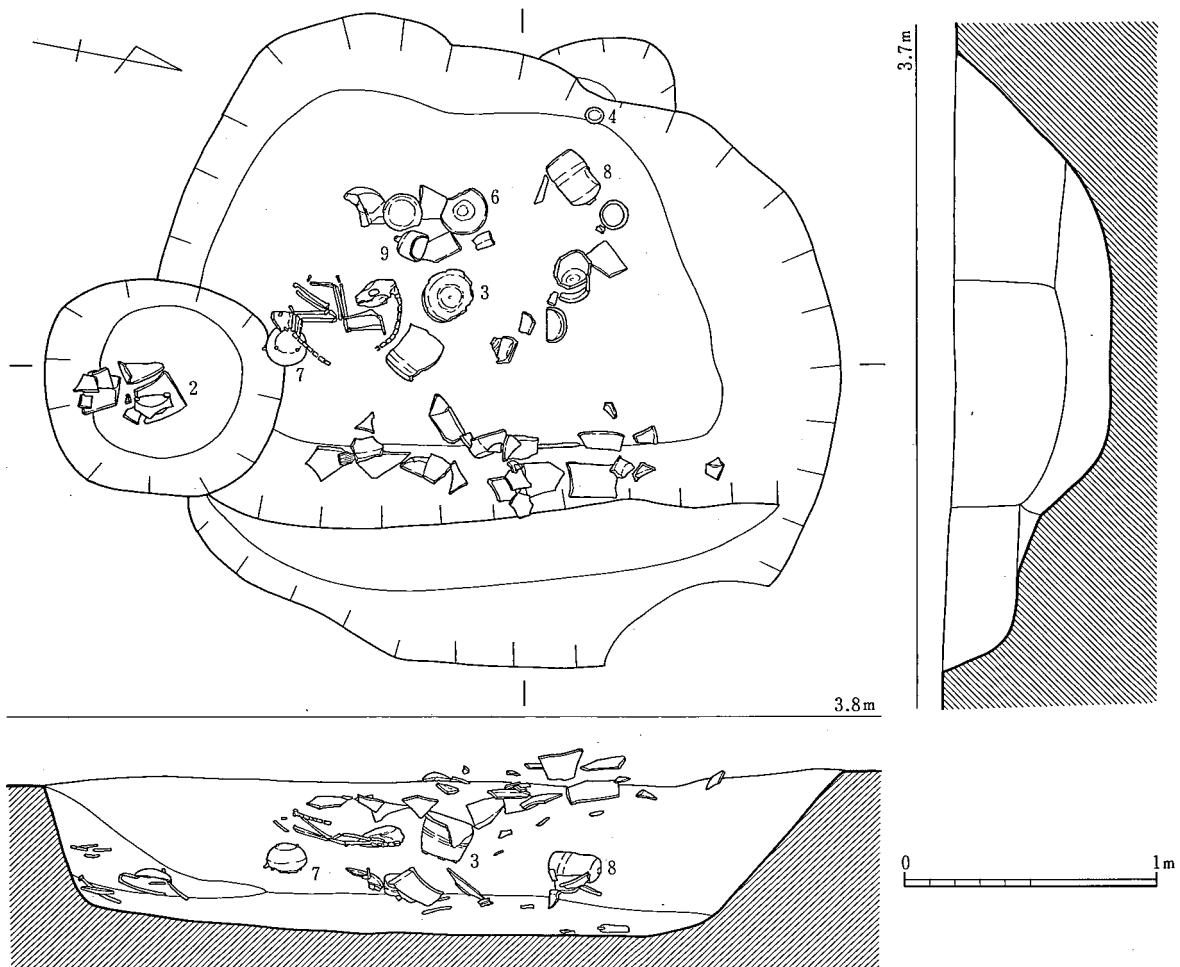
第4節 近世以降の遺構と遺物

今回の調査では、調査区のほぼ全面に渡って近世から現代に至る多数の遺構と多量の遺物を検出した。近世では100基を越える数の土坑の他に溝、井戸、ピットなどを検出し、多量の陶磁器、瓦、土人形、窯道具などが出土した。調査区の北側は海岸線に向かって徐々に傾斜する状況が認められているが、その上に黒色土による近世の包含層が形成され、多量の遺物が包含されていた。

近代以降、修猷館高等学校が西新町に移ってきた当時の建物基礎と考えられる石列、水飲み場と考えられる石組と導水施設の他、遺物としては陶磁器やガラス瓶、文房具やボタン、工芸作品などが出土しているが、本書では近世の主な遺構と遺物に関して概要的に報告する。

2号土坑（図版63、第384図）

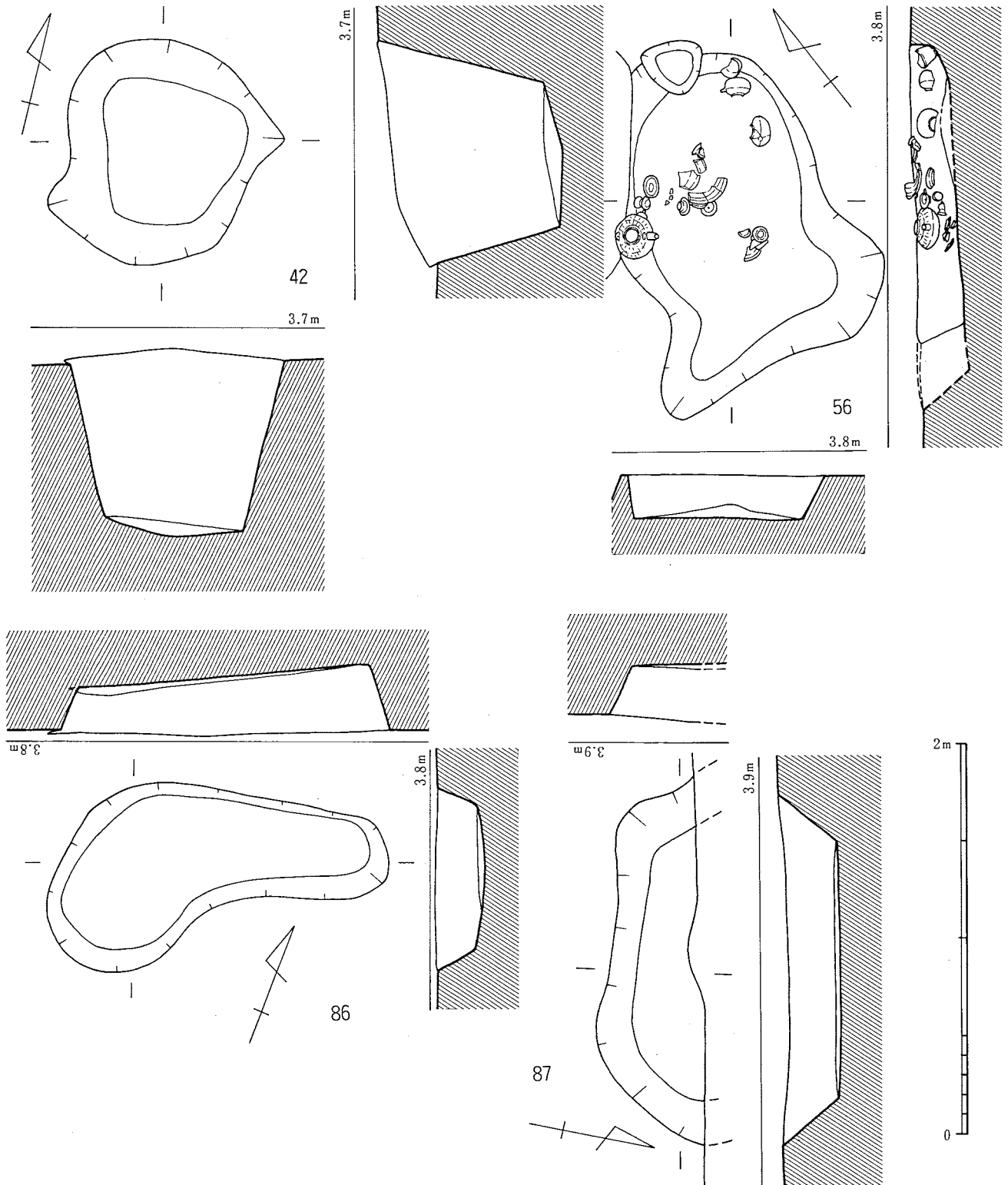
第1区で検出した。南北方向にやや長い円に近い楕円形を呈する。南辺に径0.95mのピットが独立して切られた状態で検出されているが、出土遺物の比較から一連の遺構であると考えられる。南北長2.40m、東西長2.50mを測る。床面は東辺でテラス状の段がある。遺物の出土状態から北から南に土砂が流れ込んでいる状況が認められる。出土遺物には多数の陶磁器（図版154、第388図）及び犬骨が背中を丸めた状態（図版63-2）で検出している。陶磁器は灯明皿1点のみが完形である他はすべて欠損しており、すべて意図的に廃棄されたものと考えられる。



第384図 2号土坑実測図（1/30）

42号土坑（図版62-2、63-3、第385図）

第1区の南東、全調査区内ではほぼ中央付近に位置する地点で検出した。径1.16m、深さ0.7mを計り円形を呈する。32号土坑と一部を接するために、本来の平面形状とはかなり異なっている可能性がある。底面はU字形で、全体的には北から南へと傾斜する。



第385図 42・56・86・87号土坑実測図（1/30）

45号土坑（図版64-1）

第2区で検出した。建物基礎の石列等が入り組み、底面まで完掘していない。検出面での東西2.9m、南北4.4mを測る大きな土坑である。黒色土を埋土とする。廃棄土坑であろう。

56号土坑（図版64-2、第385図）

第3区東南隅で検出した。南北方向に1.7m、東西方向に1.08mを測るいびつな平面形状を呈する土坑である。底面はほぼ平らで南から北に向かい緩傾斜しており、最深部の深さ0.23mを測る。陶磁器は東から西に流れ込んだ状態であり、2号土坑と同様完形品が認められないことから、意図的に廃棄されたものと考えられる。埋土に灰や炭が少量混じっており、サルボウや巻き貝等の貝類が含まれており、生活廃棄物の土坑であろう。

86号土坑（第385図）

第3区東南で検出した。東西方向に長く、南西側が若干張り出したL字形を呈する土坑で、東西1.74m、南北0.94mを測る。深さは全体的に西側に向かい緩やかに傾斜し、西の張り出しは挿鉢状を呈する。深さ0.25mである。

87号土坑（第385図）

86号土坑の東に近接して検出した。基礎石組に北半を切られているために本来の形状を留めてはいるが、検出時の計測値では1.9mを測り、平面形状は87号土坑と同様のものになる。

92号土坑

学校基礎石列に北側の大半を破壊されており、ほとんど原形をとどめていないが残存する東西長は1.2mを測り、東西に長い平面楕円形を呈する土坑と考えられる。

101号土坑（第386図）

調査区の南端で検出した。南北1.74m、東西1.46mを測る南北にやや長い平面楕円形を呈する土坑である。断面は西から東へと緩やかに傾斜し、深さは中央付近で0.3mを測る。

129号土坑（第386図）

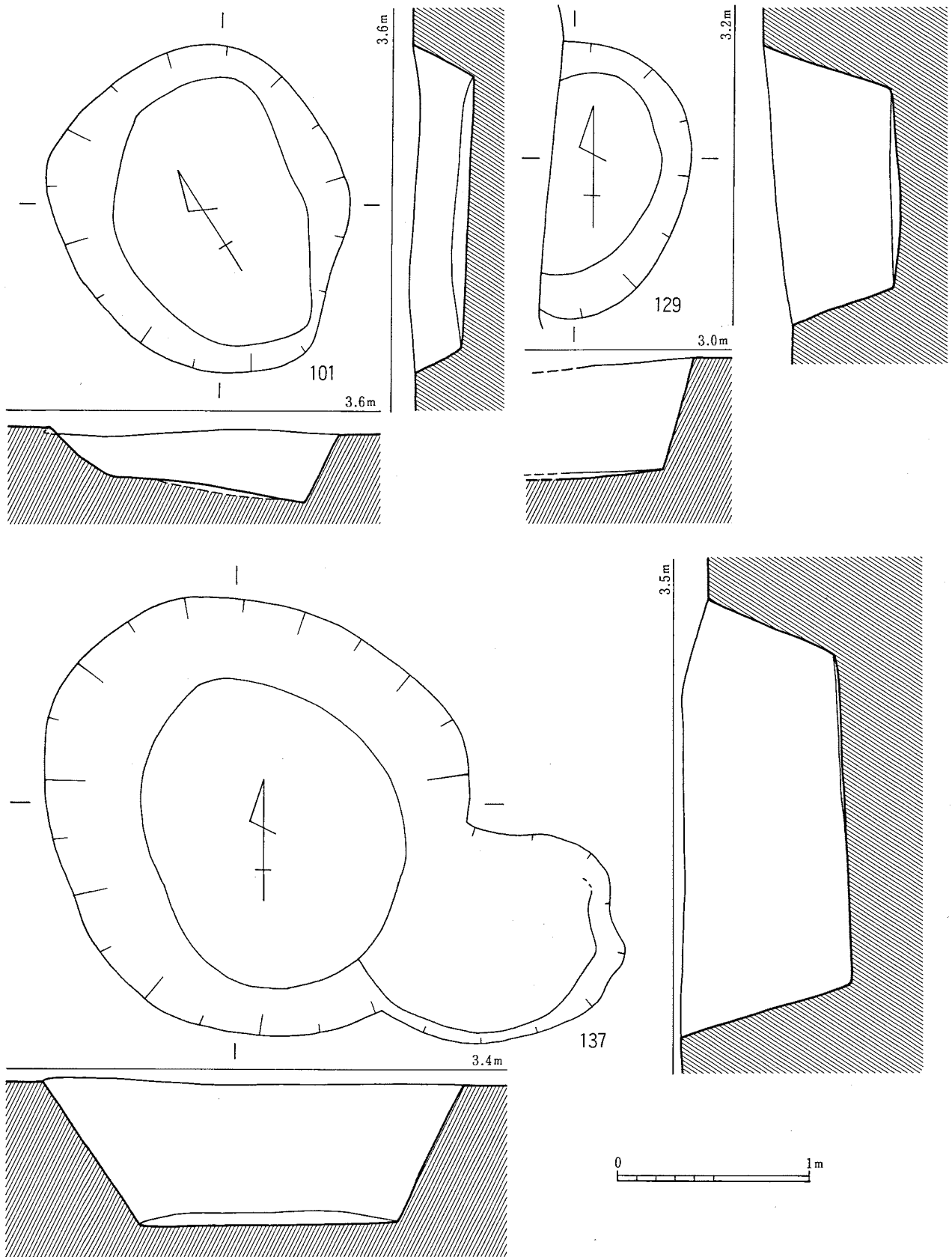
第1区の西で検出し、西半は調査区外へと広がるために全形に関しては不明である。南北長1.46m、東西長は検出面で0.74m、推定で1.2m前後のやや南北に長い円形状の平面形を呈するものと考えられる。底面はほぼ平らに近いすり鉢状を呈し、深さは中央最深部で0.64mを測る。

137号土坑（第386図）

第1区南西隅で検出された。後述する139号土坑の北に近接する。南西の一部を138号土坑に切られている。南北長2.4m、東西長2.2mを測るやや南北に長い円形に近い平面形を呈する土坑である。底面はほぼ平らで北から南へと若干傾斜し、深さは北隅から0.68m～中心部0.72m～南側0.80mを測る。

139号土坑（第387図）

第1区南西隅で検出された。137号土坑の南に近接し、西辺に一部をP479に切られ、東辺では140号土坑を切る。南北長2.02m、東西長最大で1.58mを測り、南東隅がやや窪んだ豆の様な平面形状

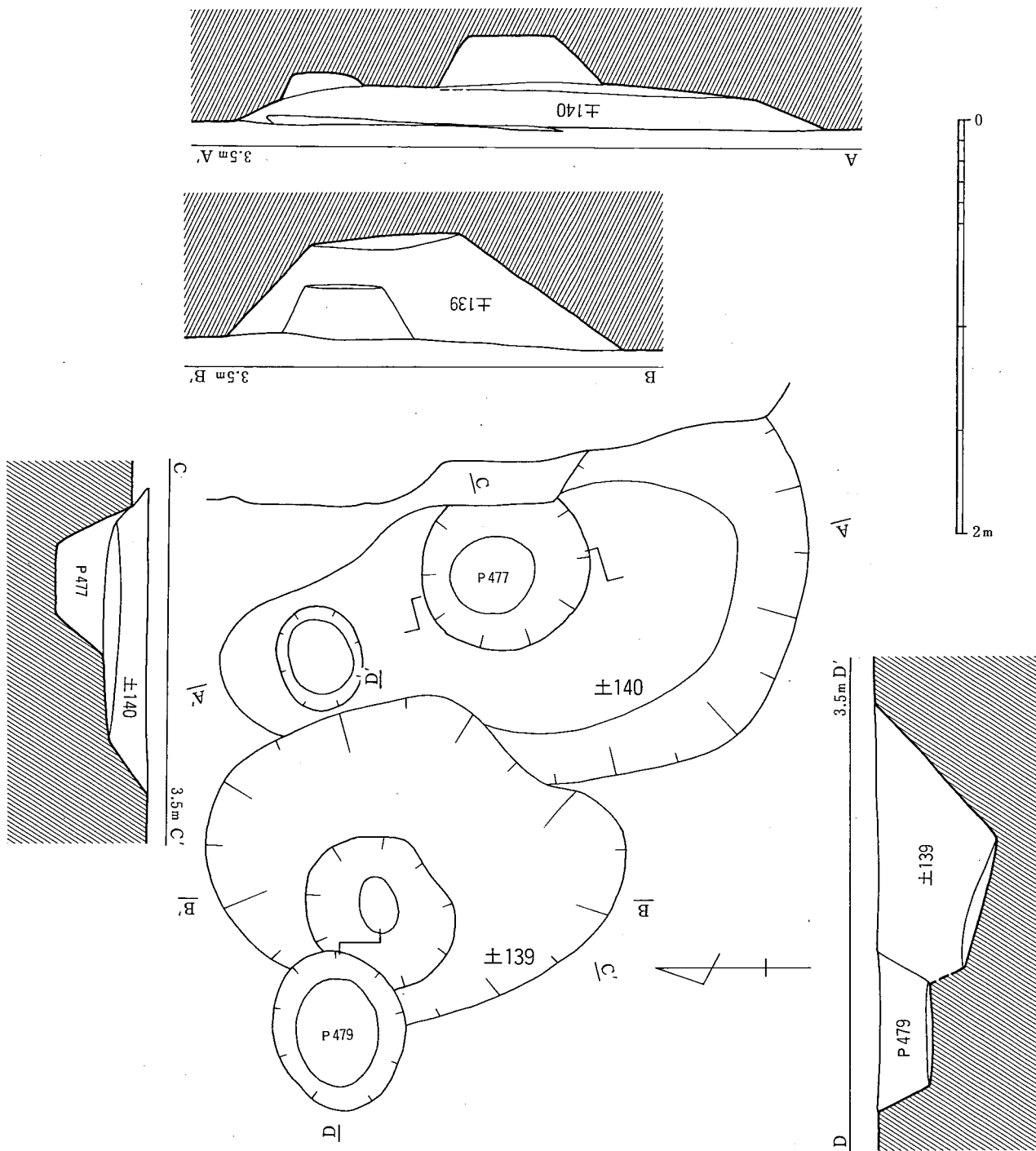


第386图 101·129·137号土坑实测图 (1/30)

を呈する。底面は西から東へと若干急な角度で傾斜しており、土坑中央の最深部で0.56m、浅い南部で0.46mを測る。土壌が砂質であることから掘削直後から壁面が崩れており、底面形状には不正確なところもある。

140号土坑 (第387図)

第1区南西隅で検出された。139号土坑に北西隅を切られ、中央部にP477、北隅にもピットがある。南北長2.9m、東西の最大長1.56mを測るがピット等が切り合うためにいびつな形状を呈する。底面は緩やかな楕円状を呈し、中央部で0.22mの深さを測る。



第387図 139・140号土坑実測図 (1/30)

他にまとまった遺物が出土した土坑として103号土坑（図版64-3）があるが、調査時の不手際で遺構番号を付すときに誤り、103号土坑を特定できない状態になってしまった。代わって107号土坑が2基存在しており、いずれかの1基が103号土坑にあたると考えられるが確定できない。したがって出土遺物を掲載するに留めることとする。

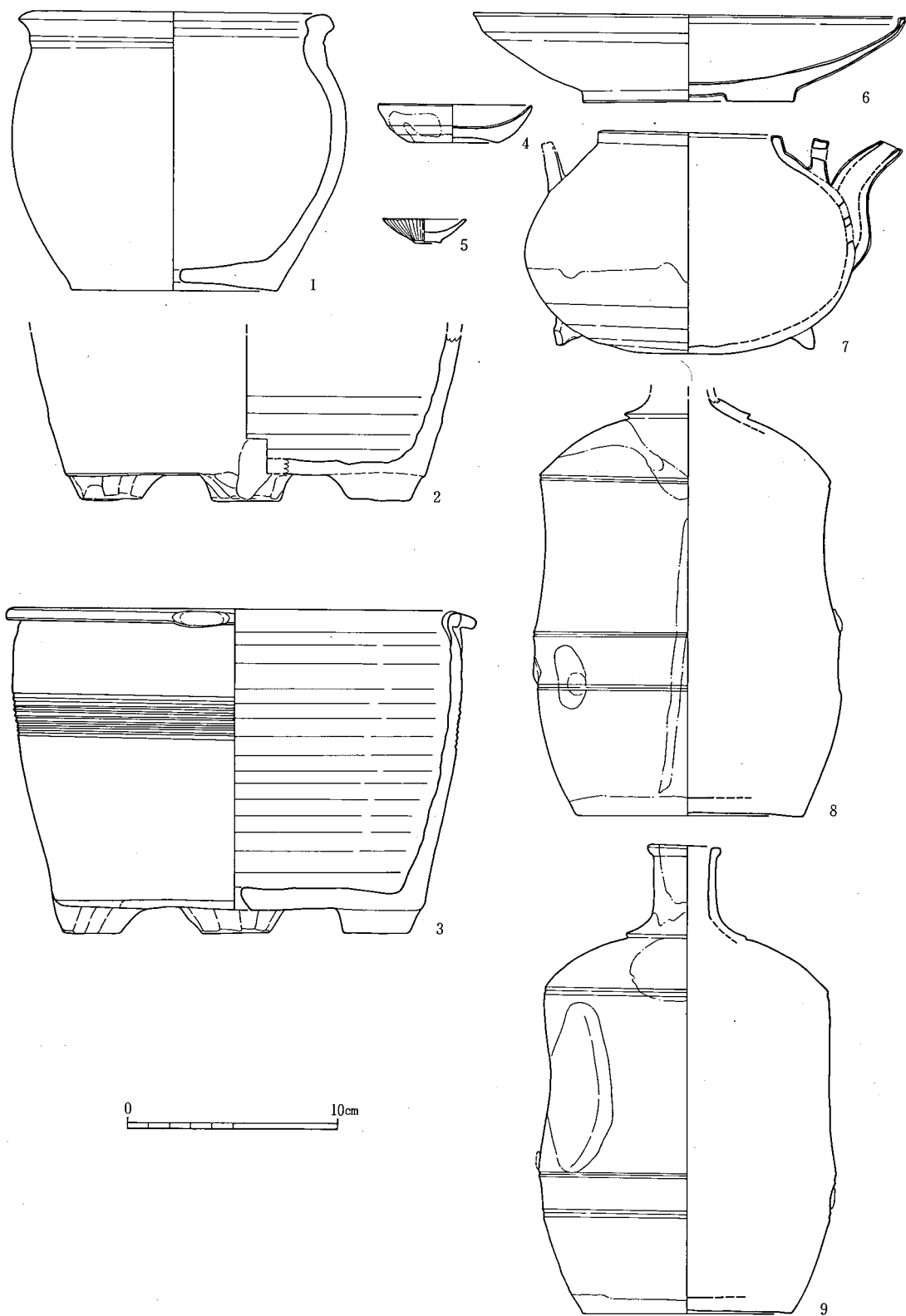
出土遺物

2号土坑出土遺物（図版154、第388図1～8）

比較的まとまった量の遺物の出土をみたが4の灯明皿と5の紅皿以外完形のものはない。

1は破片が接合しほぼ完形に復元できた個体。陶器の壺で底部に焼成後の穿孔がある。植木鉢として利用されたものか。口径13.6cm、底径9.8cm、器高13.4cm。内部から口縁までは回転ナデ、外面も回転ナデだがカキメ状の細い痕跡が残る。外面は乳白色で内面はやや赤みがかかった乳白色を呈する。焼成は良好で表面無釉の素焼きであるが、底面に釉が付着する。高取系の壺か。2は陶器三脚鉢の底部で約1/3が残存。底径17.2cm。外面から内面まで回転ナデ、内面下半はケズリで底はカキメ状のケズリが残る。内外面とも明赤褐色を呈し、素焼きで焼成はやや甘い。これも高取系か。3は同じく三脚鉢。口縁1/2欠損。復元口径19.5cm、底径17.0cm、器高15.5cm、素焼である。底部に1.5cmの円孔を焼成前に穿孔している。胎土精良、焼成良好で内外面とも乳白色。植木鉢か。4は口縁縁がやや欠けているもののほぼ完形の灯明皿である。口径7.1cm、底径4.2cm、器高1.8cmを測り、外面は回転ヘラケズリで端部はナデ。内面のみ釉がかかり小豆色を呈し、外面は素地のままでやや釉が垂れているが明赤褐色を呈している。やはり高取系か。5は紅皿で2号土坑唯一の完形品。口径4.0cm、底径1.5cm、器高1.1cmを測る。白磁であるがややくすんだ色調を呈している。6は陶器大皿で口縁が欠損するものの完形に復元可能な個体である。復元口径20.8cm、底径10.0cm、器高4.15cmで内外面ともに施釉する。いずれも茶褐色を呈する。口縁端部が内側に屈曲して綾をなす。重ね焼きのため高台と見込みは蛇の目状に素地を残す。外面底部近くに跳匏状の装飾がある。重ね焼きに際して付着したとみられる他の個体の一部が付着しており、不良品かもしくは二級品扱いの個体であったろうか。高取系。7は取手の一部と脚がひとつ欠損するもののほぼ完形の土瓶。口径8.1cm、器高10.7cm、胴部最大径は15.8cmで中央よりやや下半で最大径を測る。外面は上部から約2/3を回転ケズリでカキメ状の痕跡を残し、下半1/3は回転ヘラケズリ。内面はすべてナデで仕上げる。外面上半分に施釉し茶褐色を呈し、外面下半及び内面は素地を残し赤褐色を呈する。3ヶ所の脚を有するがいずれも着地せず底面が直接着地する個体であり、不良品である可能性が高い。高取系。8・9はいずれも陶器の酒瓶である。似通った個体であるが8の方が若干小降りである。8は数個体の破片が接合してほぼ完形に復元できた。口径3.3cm、底径9.9cm、器高22.4cm。胴部がくびれており、くびれ付近に2ヶ所の窪みを作り、また反対側下半にやはり2ヶ所の窪みを作っている。外面は全面に施釉し暗赤褐色を呈す。頸部と肩部には別の釉を使い分けて装飾する。外面は施釉のため明らかではないが回転ナデとみられる。9は口縁～頸部を欠損するが胴部は完形。全体的な器形は8と似るが若干大きい。残存器高20.2cmで底径10.8cm。8と同様対照的な位置に2ヶ所ずつの窪みを作り持ちやすくしている。窪みの間には丸みを帯びた不正形な円盤を付す。施釉は外部はほぼ全面だが丁寧ではなく下半は釉だれしているのみでかかっている箇所がある。

2号土坑出土遺物は高取系遺物がほとんどを占め、かつ不良品と考えられる個体が多いのが特徴



第388図 2号土坑出土遺物実測図(1 / 3)

的といえる。

13号土坑出土遺物(図版154、第389図1・2)

1は向付椀で口径9.3cm、底径3.8cm、器高4.9cm。胎土は精良で焼成良好。全面に施釉し、高台か

ら底部にかけては露胎。色調は灰黄色を呈する。唐津系。2は染付皿。復元口径10.4cm、底径6.4cm、器高2.9cmを測る。全面に透明釉を施釉する。見込みに花文を描き、底には「大明年□」の字款がある。

14号土坑出土遺物（図版155、第389図3）

3は14号土坑出土の染付香炉。口径10.45cm、底径6.2cm、器高8.05cmを測る。外面から内面口縁部付近まで施釉し、内面と底部は露胎。

38号土坑出土遺物（図版155、第389図4～7）

4は完形の椀で口径9.7cm、底径3.7cm、器高5.0cm。胎土精良で焼成良好。全面に施釉し、高台から底部は露胎。色調は灰黄色を呈する。唐津系。5と6はセットをなす染付の蓋と大型の椀である。5は復元口径24.4cm、残存器高6.7cm。天井部につまみを付すか。全面に施釉するがかえりは露胎。唐草文の中に丸枠をとり植物を描く。6も同様の意匠をとる。6は約1/2が残存する。復元口径23.6cm、復元底径11.3cm、器高11.3cmで胎土精良で焼成は良好。全面施釉で畳付は露胎。5と同様の文様構成を持ち、高台部に直線で施文する。

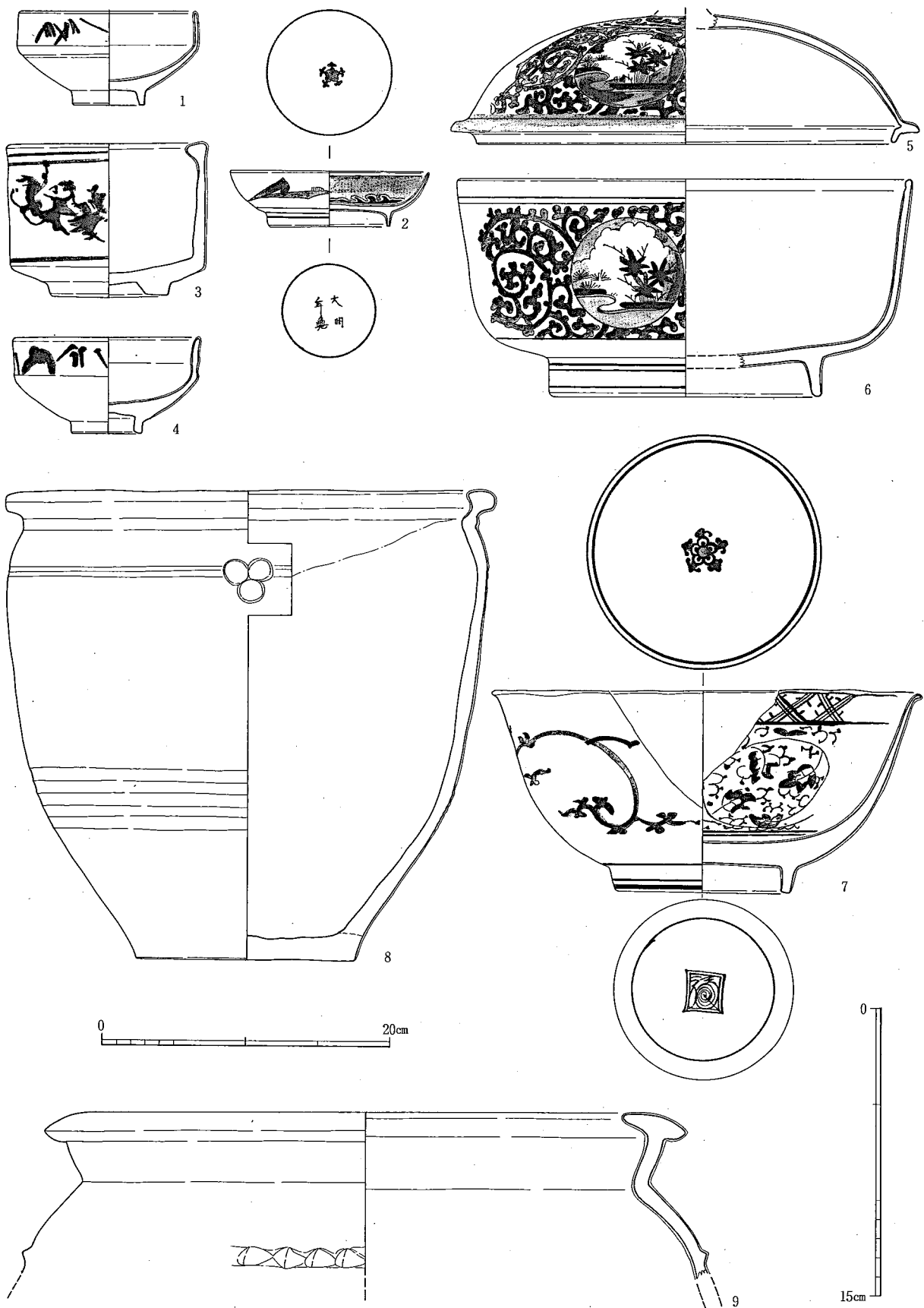
7は染付椀で復元口径22.3cm、底径10.4cm、器高9.2cm。胎土精良で焼成良好。全面に施釉する。見込みに花文を描き外面には蔓唐草、底に崩し字款がみられる。

42号土坑出土遺物（図版155、第389図8・9）

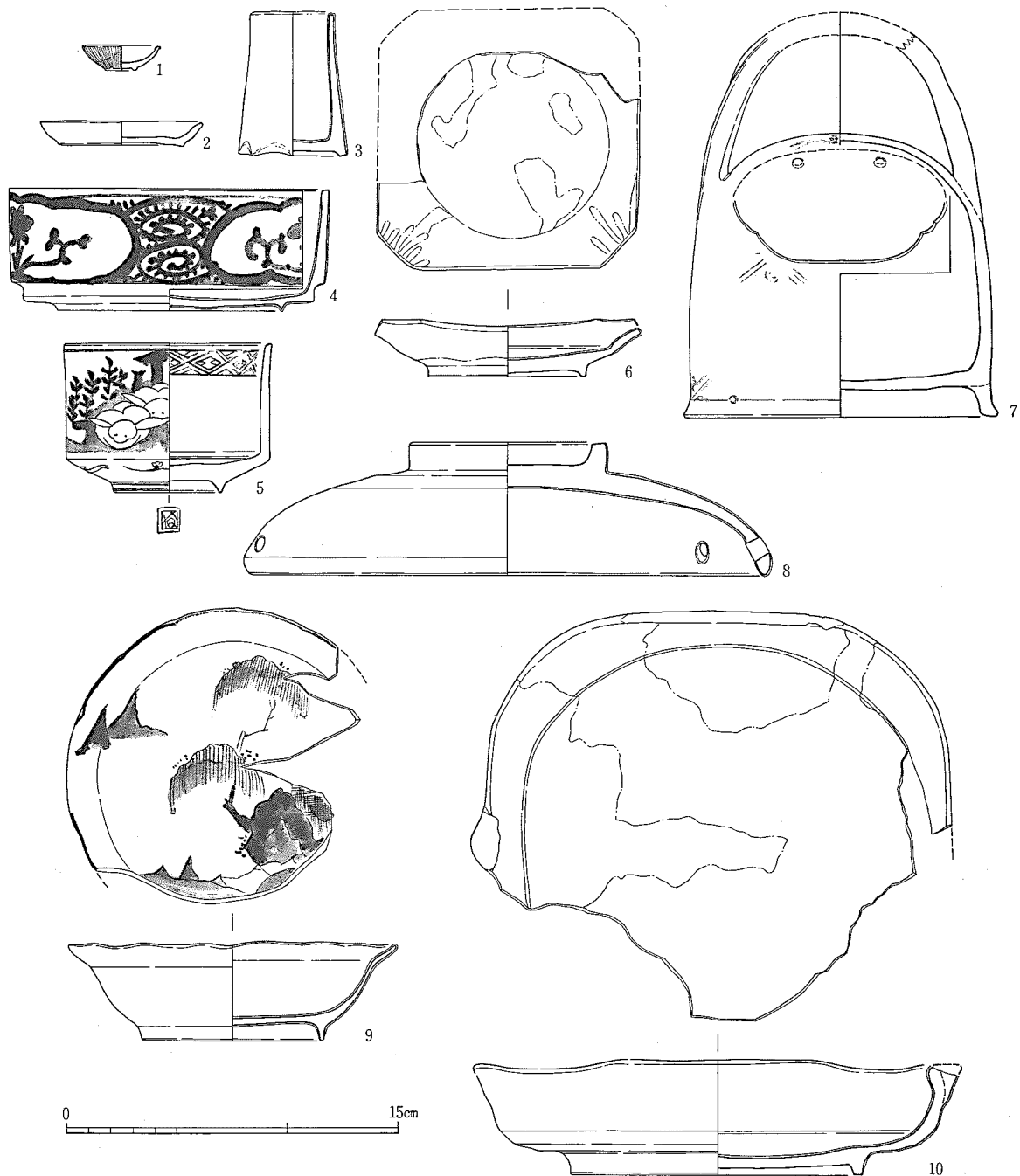
8は瓶である。口径31.0cm、底径14.3cm、器高33.7cmで胴部最大径が32.6cmを測る。ほぼ全面にわたり回転ナデ調整。2～3mm程度の細砂粒を含み、焼成は良好。全面に藁灰釉を施釉し色調は黄茶色を呈する。頸部下に3つ円文を付す。高取系。9は大型の瓶口縁から頸部で約1/8が残存。復元口径28.8cm、残存器高8.5cm。外面は回転ナデで内面には格子目の当て具痕が残る。頸部に刻み目突帯を張り付けている。胎土は精良で焼成良好。外面は全面藁灰釉で施釉しており内面の一部まで釉がかかる。色調は茶褐色で胎土は灰褐色を呈している。

45号土坑出土遺物（図版155・156、第390図・第391図）

1は完形の紅皿。内面から外部口縁の一部にかけて透明釉を施釉し、底部は露胎。2は完形の土師皿で底部糸切り。3は線香立約1/2。復元口径3.4cm、復元底径5.0cm。器高6.5cm。胎土精良で焼成良好。ほぼ全面施釉し灰褐色を呈するが底部は露胎しており灰白色を呈する。底部は波状を呈する。4は染付の重ね椀。約2/3。外面に蔓唐草文と蛸唐草文を組み合わせ描く。重ねる段から底部にかけては露胎。5は染付椀。約1/2を反転復元している。復元口径9.2cm、復元底径4.8cm、器高6.7cm。胎土は精良で焼成良好。外面に兎を描き、底部に崩し字款を描く。6は角皿で約1/2。復元口径12.0cm、底径7.1cm、器高2.3～2.7cm。内面は全面、外面も口縁から屈曲部にかけて施釉する。ススが付着しており2次焼成を受けたか。7は染付の手焙り。把手を欠損する。底径14.0cm、残存器高17.4cm、胴部径13.8cm。胎土は精良で焼成は良好。外面は回転ナデで高台は張り付け。底部に6と同様ススが付着する。8は陶器蓋で約3/4。復元口径25.0cm、つまみ径8.4cm、器高6.0cm。内面は回転ナデで外面ケズリ。胎土はやや粗く焼成は良好。全面施釉でススが付着しており、蒸気抜きとみられる穿孔がみられる。9は染付の輪花皿。約1/2を反転復元している。復元口径14.6cm、底径8.0cm、器高4.3cm。全体回転などで整形後口縁部はユビオンで波状に整形。胎土精良で焼



第389图 13・14・38・42号土坑出土遺物実測図 (8は1/4、他は1/3)
 (1・2:±13、3:±14、4・6・7:±38、8・9:±42)

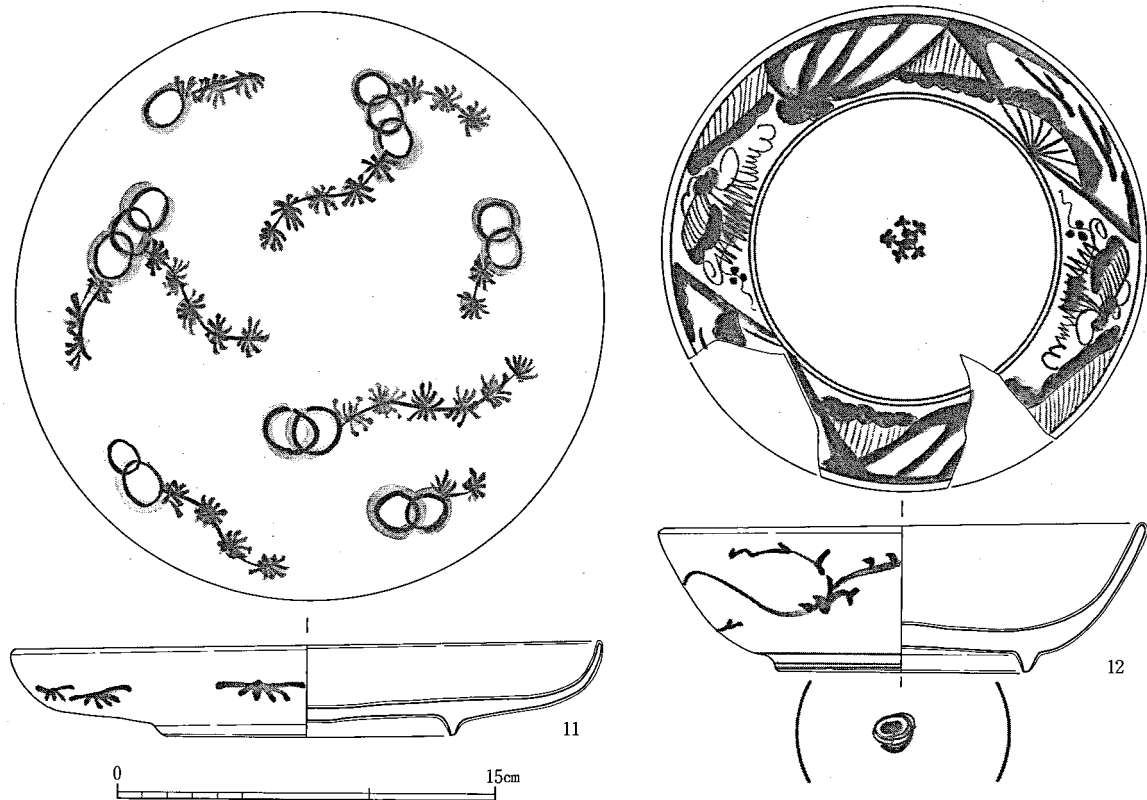


第390図 45号土坑出土遺物実測図(1)(1/3)

成は良好。見込みに深山の風景を描き、口縁を茶色の釉薬で縁取る。外面の一部にススが付着。須恵焼か。10は変形皿約1/2。復元口径21.6cm、底径12.2cm、器高4.5cm。内面から外面上半までは回転ナデ、外面下半から高台～底部にかけては回転ケズリである。胎土精良で焼成良好。三彩を模したものか、緑釉と紫釉を用いて意匠を描く。施釉箇所は黄色で露胎箇所は黄白色を呈す。

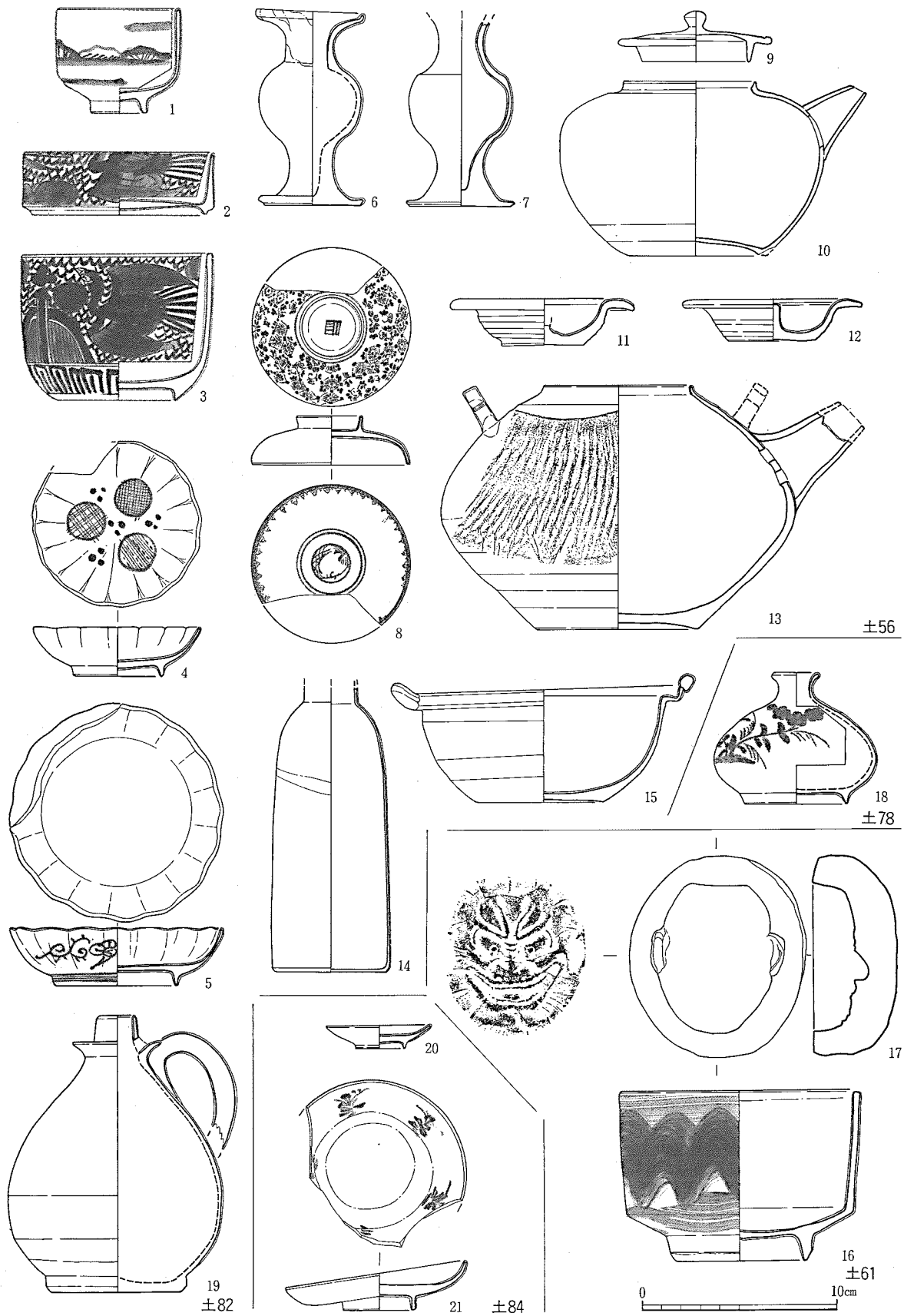
11は染付大皿。口径23.4cm、底径11.6cm、器高3.9cm。全面に施釉し畳付のみ露胎。12は染付皿。口径19.4cm、底径10.1cm、器高5.9cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉し、畳付は露胎。見込みに花文と扇文を描き、外面には蔓唐草、底面は崩した字款であろうか。

56号土坑出土遺物(図版157、第392図1~15)



第391図 45号土坑出土遺物実測図(2)(1/3)

1は染付碗で約 2/3を反転復元。口径6.0cm、底径3.0cm、器高5.4cm。全面に施釉し、畳付は露胎。外面は淡い呉須で風景?を描く。2・3は染付重ね碗のセット。2はほぼ完形で口径9.6cm、底径8.8cm、器高3.25cm。胎土精良で焼成は良好。ほぼ全面に施釉し、体部から高台にかかる重なり箇所のみ露胎する。染付はコバルトのような発色をしており、時期的にはかなり下る可能性がある。3は2とセットになる染付碗である。口径9.6cm、底径6.1cm、器高7.5cmを測り全面に施釉し畳付のみ露胎。外面には鳳凰が崩れたような不明の鳥を描く。4は染付の輪花皿で口縁の一部を欠損する。口径8.4cm、底径4.5cm、器高2.55cm。全面施釉で畳付のみ露胎。見込みに3種類の円文を描く。5は一部欠損する染付輪花皿。口径10.9cm、底径2.0cm、器高2.0cm。全面に施釉し、外面には唐草を描く。6は完形の青磁。口径5.5cm、底径5.1cm、器高10.1cm。外面全面施釉し底部は露胎。糸切り。口縁から頸部にかけて黄緑色の釉を施す。7は口縁部を欠損する。底径5.3cm、残存器高9.6cm。外面は全面施釉し、底部のみ露胎し糸切り痕が残る。6と同様2色の釉を用いている。8は染付蓋。口縁部の一部を欠損する。復元口径8.0cm、つまみ径3.3cm、器高2.5cm。全面に施釉。外面プリントで花文を施し、内面にも見込みに唐草?文を描く。9・10は陶器土瓶のセットである。9は陶器蓋で口径5.5cm、器高2.7cm。外面ケズリでかえりから内面およびつまみは回転ナデ。乳白色を呈する。10は土瓶でほぼ完形。口径6.7cm、底径7.0cm、器高9.0cmを測る。内面から外面上半まで回転ナデで下半は回転ケズリ。内外面とも乳白色を呈するが外面はススが附着し黒色を呈する。11は陶器蓋でつまみを欠損。口径9.4cm、器高2.4cm。外面施釉し、底部は糸切り。内面は回転ヘラケズリ。外面乳白色で内面ススで黒色を呈する。12・13がセットとなる。12は蓋で完形。口径9.3cm、器高2.2cm。外面施釉し内面回転ヘラケズリ。ススが吸着して黒色を呈する。底部糸切り。13は陶製土瓶である。口径8.6cm、底径8.0cm、器高12.5cm。外面上半は跳髀を用いており、下半は回転ケズリ。内面は回転



第392図 56・61・78・82・84号土坑出土遺物実測図(1/3)

ナデ。胎土精良で焼成は良好。外面上約1/4程度施釉しており黄褐色を呈するが他は露胎し黄白色を呈する。外面ススが吸着し、一部黒色を呈する。小石原産か。14は磁器酒徳利。口縁部を欠損

する。底径5.6cmで残存器高14.8cm。頸部から肩部にかけて茶色の釉を流す。時期は下るか。15は陶器土鍋でほぼ完形。口径14.0cm、底径6.5cm、器高6.6cm。内面から外面頸部にかけて施釉。外面はほぼ露胎し、回転ケズリで底面糸切り。

61号土坑出土遺物（図版157、第392図16・17）

16は61号土坑出土の陶器椀。口径11.6cm、底径6.4cm、器高8.8cmを測る。口唇部と畳付は露胎する。外面は白塗土でハケ目を施し、内面は回転ナデ。胎土精良、焼成良好。色調は黄茶色。現川系。17は土製人形型。顔面部分である。長軸10.4cm、短軸9.0cm、厚さ4.3cm。型の合わせ目は丁寧なナデで外面はユビオサエ。

78号土坑出土遺物（図版157、第392図18）

18は78号土坑出土の染付瓶。口径2.2cmで底径5.2cm、器高6.7cm。外面施釉し畳付のみ露胎。外面に花を描く。

82号土坑出土遺物（図版157、第392図19）

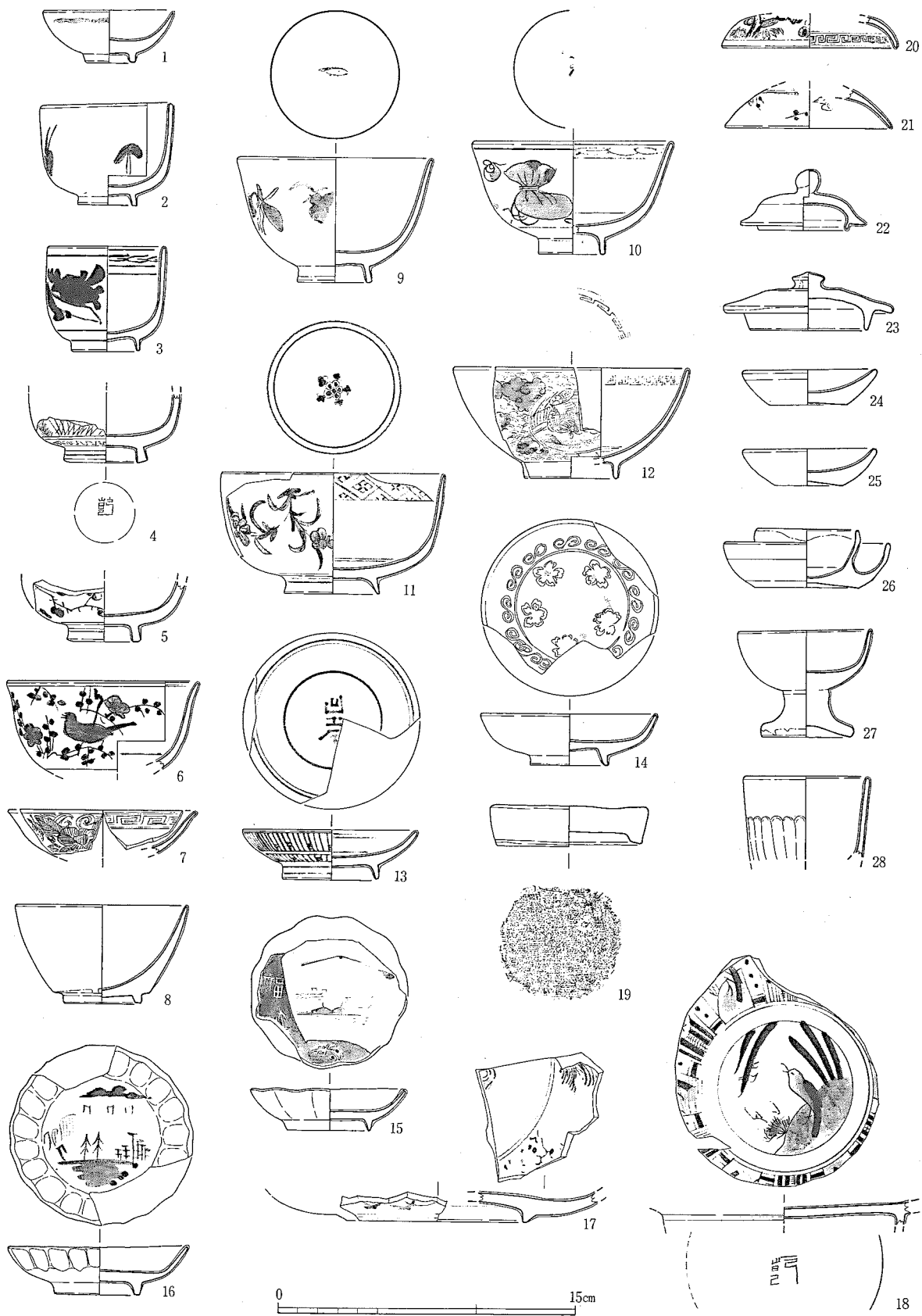
19は82号土坑出土の陶製油壺。口径1.8cm。底径6.6cm、器高14.3cm。口縁部に0.6cmを測る空気抜き穿孔を施している。口縁内面から外面にかけて施釉。胎土精良焼成良好。色調は淡黄褐色を呈する。底部糸切り。

84号土坑出土遺物（図版157、第392図20・21）

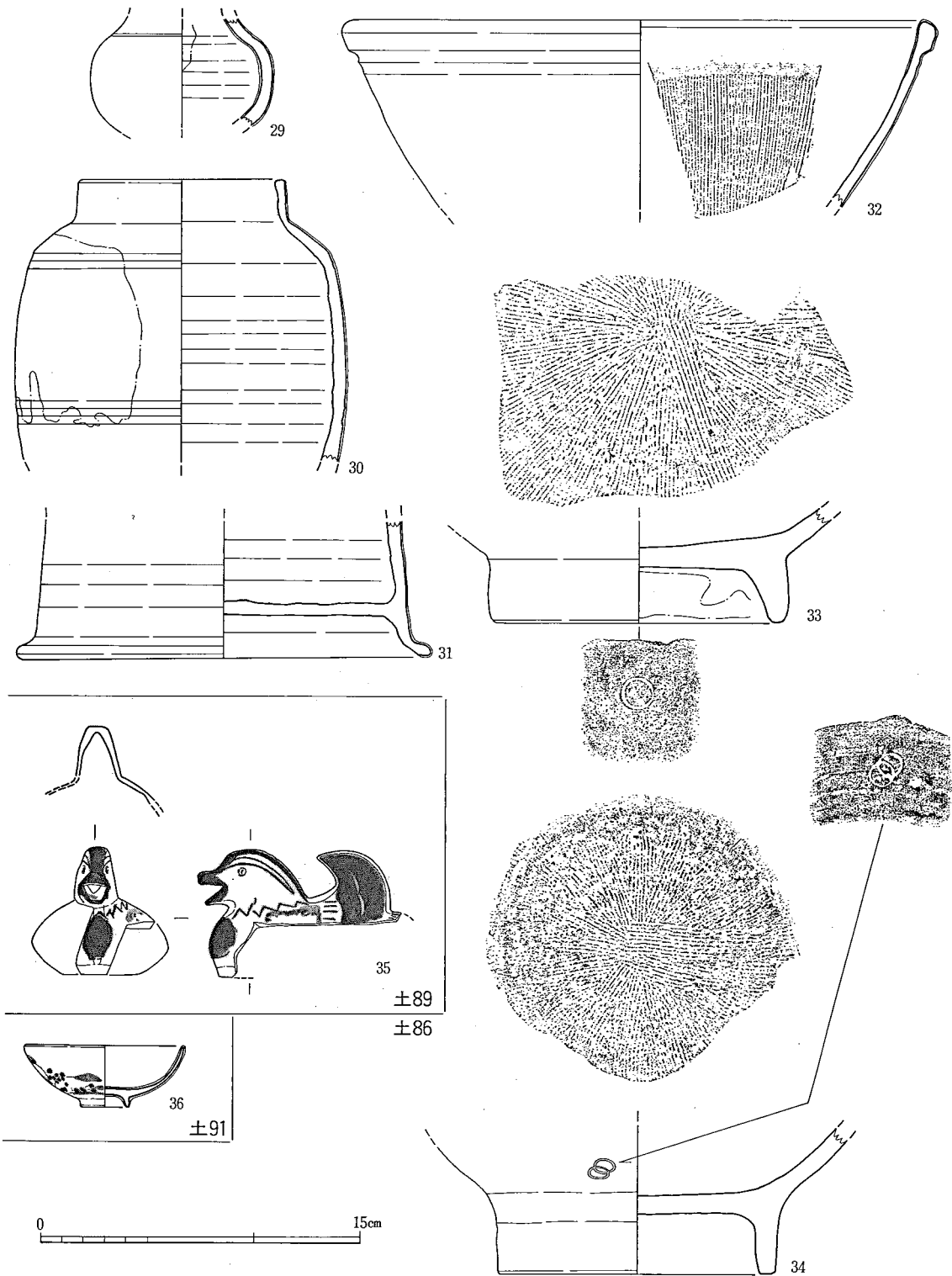
20・21は84号土坑出土。20は口径5.4cm、底径2.6cm、器高1.3cm。全面回転ナデで施釉、畳付は露胎。胎土精良焼成良好。21は染付皿。口縁部を欠損し、また焼け歪んでいる。復元口径9.3cm、底径3.5cm、器高1.3～2.5cm。ほぼ全面施釉し、見込みはかきとりして露胎。見込みに花を描く。

86号土坑出土遺物（図版158、第393図1～28・第394図29～34）

1～12はいずれも染付椀である。1は約1/2残存。復元口径6.5cm、底径2.5cm、器高2.7cm。胎土精良で焼成良好。畳付は露胎。2は染付椀で口縁部約1/3。復元口径6.7cm、底径2.1cm、器高5.1～5.3cm。胎土精良で焼成良好。畳付は露胎。3は約2/3。復元口径6.0cm、底径3.5cm、器高5.4cm。胎土精良で焼成良好。畳付露胎。4は底部細片。復元底径4.2cm。胎土精良で焼成良好。畳付露胎。底部に崩した字款か。5は底径3.8cm。胎土精良、焼成良好。畳付露胎。外面に植物を描く。6は復元口径9.6cm。胎土精良、焼成良好。全面施釉。外面は梅に鶯か。7は復元口径9.6cm。胎土。焼成とも良好。内面に雷文、外面には花を描く。8は白磁椀。口径8.6cm、底径4.0cm、器高5.0cm。細砂含むも焼成良好。高台から底部にかけて露胎。9は畳付は露胎。外面に花を描く。10は約1/2片。復元口径10.2cm、底径3.4cm、器高7.7cm。胎土精良で焼成良好。畳付が露胎。見込みに施紋。11は復元口径11.3cm、底径4.8cm、器高6.1cm。胎土精良で焼成良好。畳付露胎。見込みに花文、外面に花を描く。12は復元口径11.9cm、復元底径4.8cm、器高5.7cm。胎土精良で焼成良好。畳付露胎。口縁内面に雷文を描く。13は染付皿。口径8.8cm、底径4.9cm、器高2.5cm。胎土精良で焼成良好。見込みに崩した字款を描く。14は陶器皿。口径9.0cm、底径4.0cm、器高2.6cm。胎土は細砂粒を含み、焼成は良好。畳付露胎。色調は暗茶褐色を呈する。内面象眼で花を施紋。15は染付輪花皿。口径7.8cm、底



第393图 86号土坑出土文物实测图 (1) (1/3)



第394図 86(2)・89・91号土坑出土遺物実測図(1/3)

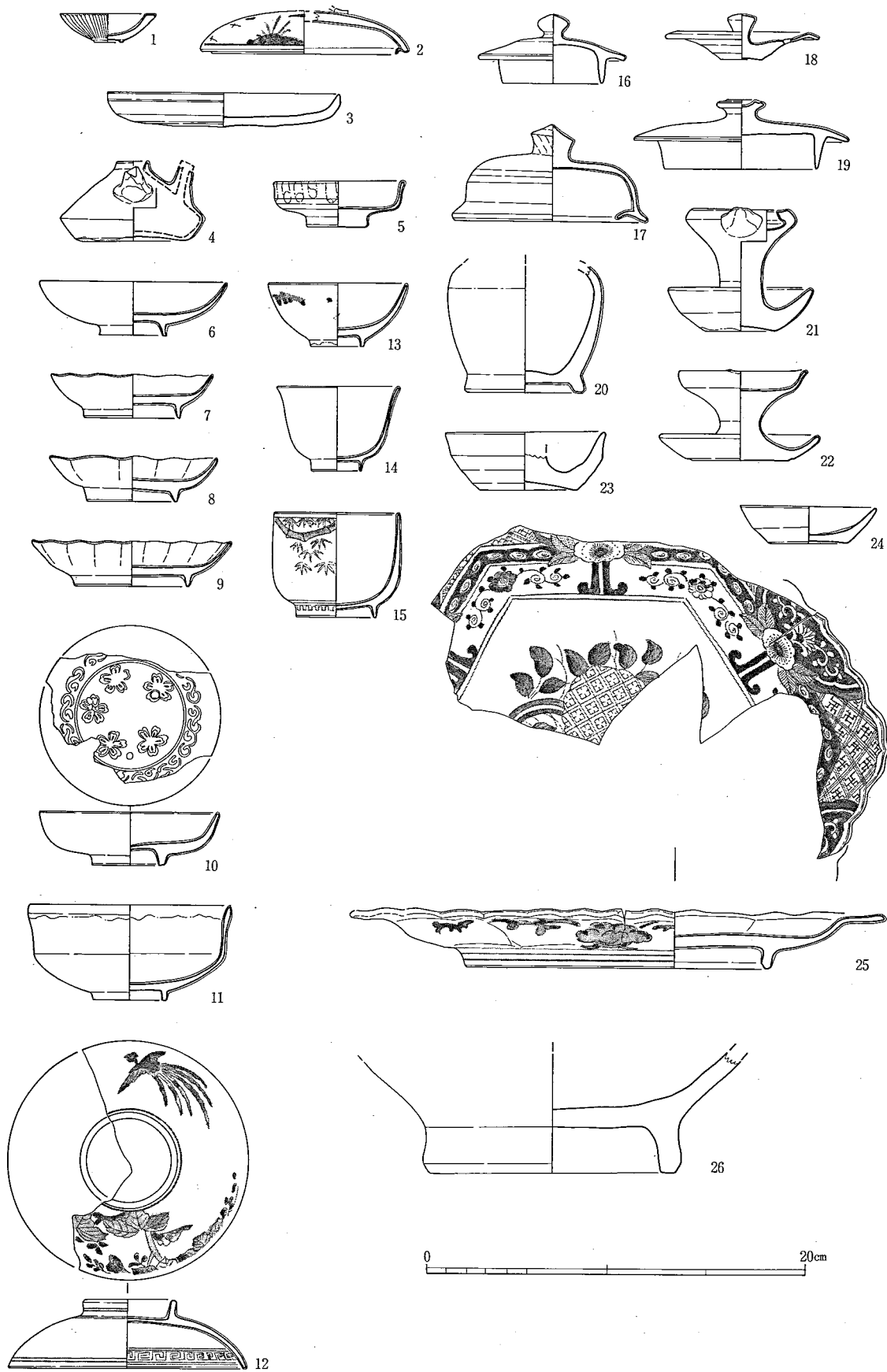
径4.2cm、器高2.0~2.1cm。胎土精良で焼成良好。畳付露胎。見込みに景色を描く。16は染付輪花皿。口径9.1cm、底径4.2cm、器高2.5cm。胎土は精良で焼成良好。見込みに景色を描く。17は染付皿の破片。復元底径9.0cm。胎土精良焼成良好。畳付露胎。18は染付皿。底径12.1cm。見込みに鳥、底部に字款を描く。19は焼塩壺の蓋。口径7.4cm、底径10.0cm、器高2.1cm。内面布目で外面ナデ。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。内面茶褐色、外面茶褐色から黒色を呈する。20・21は染付蓋。20は復

元口径9.0cm。胎土精良、焼成良好。内側に圏線に囲まれた雷文を描く。21は復元口径8.4cm。胎土は精良で焼成良好。22は白磁蓋。口径4.6cm、受部径6.4cm、器高3.1cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉。23は蓋。口径6.0cm、受部径6.8cm、器高3.0cm。胎土は細砂を含み焼成は良好。外面施釉で暗黄茶色で内面露胎で茶色を呈す。24・25は灯明皿。24は口径6.8cm、底径3.9cm、器高1.75cm。胎土は細砂粒を含むも精良で焼成良好。内面施釉で灰黄橙色、外面は露胎し淡橙色を呈する。25は口径6.8cm、底径3.3cm、器高1.9cmを測り胎土は細砂粒を含み、焼成は良好。内面施釉で灰黄褐色、外面露胎で灰黄褐色。26は灯明皿。口径5.1cm、受部径8.4cm、底径5.25cm、器高2.95cm。胎土は細砂を含み、焼成は良好。内面施釉で灰黄緑色を呈し、外面は露胎で灰黄褐色。27は仏飯具。口径6.8cm、底径4.2cm、器高5.3～5.4cm。底部は回転ナデ。胎土は細砂を含み、焼成は良好。内外面とも施釉し灰黄色を呈し、底部露胎で灰黄橙色。28は口縁部細片。復元口径6.4cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉で茶色を呈する。29は壺胴部片。復元胴部最大径8.6cm。胎土精良で焼成良好。内外面ともに施釉し、灰黄緑色を呈す。30は壺約1/3片。復元口径9.7cm。胎土は細砂を少量含み、焼成は良好。外面施釉で黄がかった緑色から灰黄褐色。32～34は陶器播鉢。31は残存約1/2。復元底径19.6cm。胎土精良焼成良好、外面施釉し灰黄褐色、底部は露胎し茶色を呈す。32は口縁約1/2片。復元口径27.8cm、胎土精良で焼成良好。外面施釉で暗茶褐色を呈する。33は底径13.8cm。外面暗茶褐色を呈し、畳付が露胎して茶色。底面に円文を施す。34は底径13cm。2～4mm程度の砂粒を含む。外面茶色、底部の一部が露胎し橙褐色を呈する。底部に2つの円文を施文。須恵焼。

87号土坑出土遺物 (図版159、第395図1～26)

1は紅皿で完形。口径4.8cm、底径1.3cm、器高1.4cm。胎土は精良で焼成良好、高台はナデ。2は染付蓋約1/2で口径10.2cm、受部径9.1cm、器高2.2cm。胎土は精良で焼成良好。3は土師器皿で一部欠損するもほぼ完形。口径11.5cm、器高1.7cm、胎土は焼成やや甘い。内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ。全面無釉。見込みに「両」の字の陰刻あり。4は油壺。胎土は精良、焼成良好。5は陶器皿でほぼ完形。口径6.4cm、底径3cm、器高2.3cm。胎土は焼成外面は全面施釉し、底部は露胎で茶褐色。糸切り。6は磁器皿約2/3で復元口径9.3cm、底径3.4cm、器高2.7cm。胎土は焼成外面は畳付は露胎。7は輪花皿で復元口径8cm、底径4.7cm、器高2.2cm。胎土は精良で焼成良好畳付のみ露胎。8は輪花皿で復元口径8.3cm、底径4.2cm、器高2.3cm。胎土は焼成見込みに花を描く外面は

9は輪花皿で復元口径10cm、底径5.6cm、器高2.3cm。胎土は焼成畳付のみ露胎。10は陶器皿で口径9.0cm、底径2.8cm、器高2.7cm。胎土は精緻、焼成良好。11は陶器碗約1/2で復元口径10cm、底径3.6cm、器高4.8cm。12は蓋で口径11.8cm、器高3.5cm。胎土は精緻で焼成良好。13は碗で口径6.9cm、底径2.7cm、器高3.2cm。畳付のみ露胎。14は碗で口径6.1cm、底径2.4cm、器高4.3cm、胎土は精良で焼成良好外面は白色。15は碗で復元口径6.2cm、底径3.9cm、器高5.3cm、胎土は精良で焼成良好畳付のみ露胎。16は陶器蓋で口径5cm、受部径7.2cm、器高3.5cm、胎土は焼成全体的に回転ナデをし、外面は施釉し暗茶褐色を呈し、内面は露胎し、赤みがかった茶褐色を呈する。17は白磁蓋で口径9.4cm、受部径6.5cm、器高4.9cm、胎土は精良で焼成外面は全面施釉やや青みがかった白色を呈する。18は陶器蓋約1/2で復元口径7.5cm、器高2.3cm、胎土は焼成外面は施釉し茶褐色。梅の絵を描く。内面は露胎し底部は糸切り。19は陶器蓋で口径7.6cm、受部径10.8cm、器高3.5cm、胎土は焼成内面回転ナデで外面は施釉し濃緑色を呈し、内面は露胎で、灰黄色を呈する。20は水瓶胴部2/3で底径5.8



第395图 87号土坑出土文物实测图 (1/3)

cm、残存器高6.5cm、胎土は精良で良好外面は全面施釉し、白色。胴部最大径付近に鉄釉で施文する。内面は露胎で白色を呈する。21は完形の柄燭で口径3.6cm、底径3.9cm、器高6.2cm。22は柄燭で皿部約2/3、杯部約1/3が残存。口径6.3cm、底径4.8cm、器高4.5cm。23は灯明皿受部で皿部口径7.8cm、底径4.7cm、残存器高2.9cm、胎土は焼成内外面とも無釉で内面から口縁部まで回転ナデ、底部回転ヘラケズリ。24は灯明皿で口径6.7cm、底径3.9cm、器高1.8cm。25は染付輪花大皿で復元口径26.8cm、底径15.0cm、器高3.5~4.0cm。26は陶器播鉢で底径12.2cm、残存器高6cm、胎土は焼成底部に「加」の陰刻あり。

89号土坑出土遺物（図版159・第394図35）

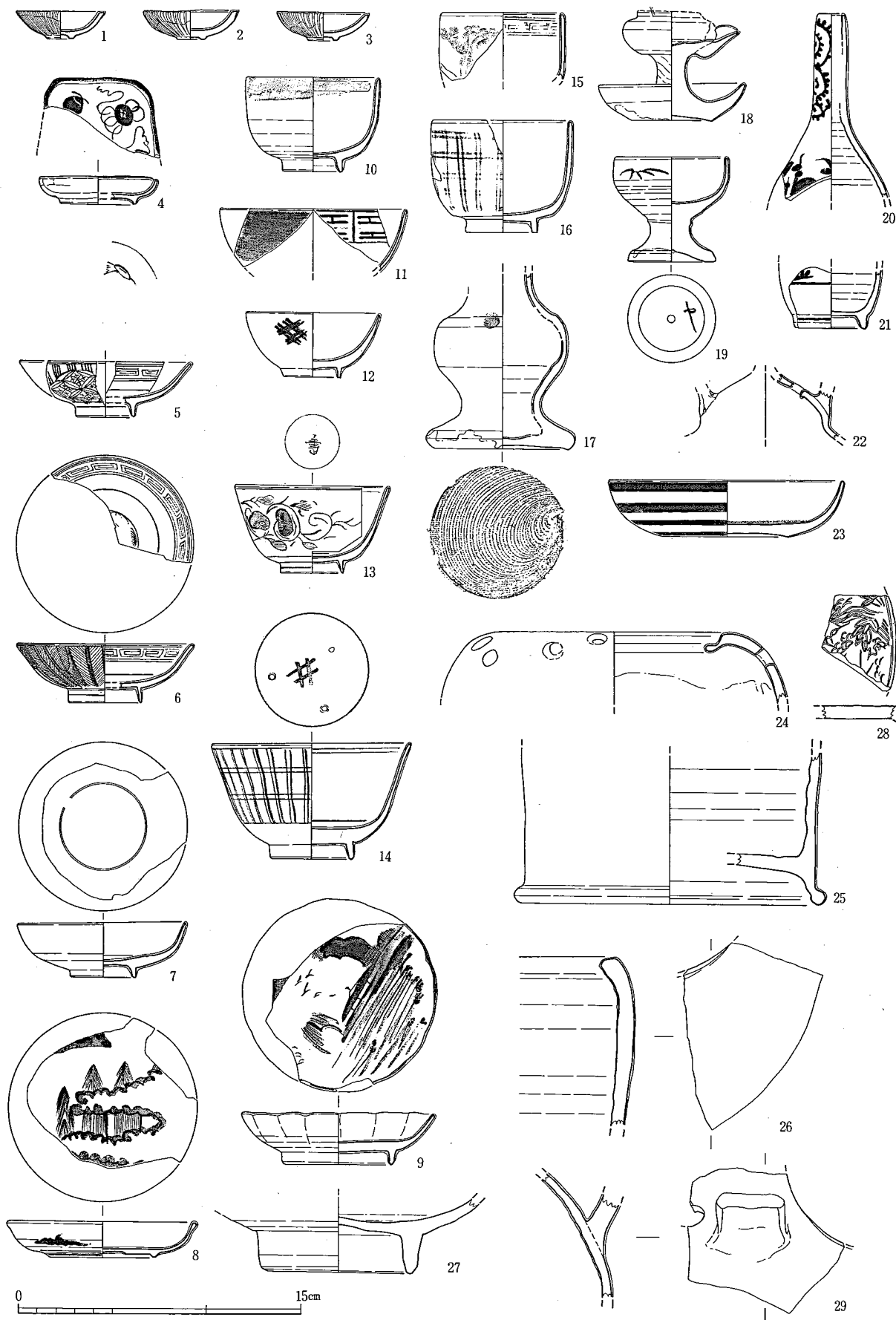
35は89号土坑出土の色絵置物であるいは水滴か。頭部と胴から尾の一部が残るが残存は悪い。残存長9.6cmを計る。

91号土坑出土遺物（図版159・第394図36・第397図1）

36は91号土坑出土の染付椀。1は完形の陶製の小型火鉢。口径9.0cm、底径6.4cm、器高8.0cm。胎土精良で焼成は良好。肩部に2ヶ所の把手状の突起を張り付けており、竹管文状にスタンプする。胴部下反に開口部をもち、底部に3ヶ所の脚をもち。内面口縁直下に3ヶ所の突起をもち胴部中央付近に一体となったスノコを有す。口縁部はハケ、外面はナデで調整、内面もナデ。内外面とも黄褐色を呈するが外面はススが吸着し黒色化している。

92号土坑出土遺物（図版161・第396図1~29）

1~3はいずれも完形の紅皿である。型押しで整形し、高台を張り付ける。1は口径4.75cm、底径1.4cm、器高1.5cmを測る。胎土は精良で焼成は良好。口唇部から内面にかけて施釉し乳白色を呈するが、外面は露胎しくすんだ白色。外面は二次的に煤けている。2は口径5.0cm、底径2.6cm、器高1.6cmを測る。胎土は精良で焼成良好。口唇部から内面にかけて施釉し、口縁部外面にもやや釉垂れがみられる。外面露胎箇所はやや煤けている。3は口径4.9cm、底径1.6cm、器高1.5cmを測る。胎土は精良で焼成良好。口唇部から内面に施釉し、外面は露胎。内外面とも乳白色を呈する。4は変形の角皿約1/3。復元口径6.1cm、復元底径4.0cm、器高1.5cm。器高全面に施釉し乳白色を呈し、畳付は露胎。胎土は精良で焼成は良好。見込に図像を描く。5は染付椀。復元口径9.3cm、復元底径3.2cm、器高3.0cm。胎土精良で焼成良好。口縁内面に雷文を描く。6は染付椀約1/4片。復元口径9.6cm、復元底径4.0cm、器高3.15cm。全面施釉で畳付は露胎。口縁内面には雷文、外面には杉を描く。7は陶器椀で口縁部を大きく欠損する。復元口径9.1cm、底径3.5cm、器高2.95cmを測る。全面に施釉し、畳付は露胎。見込に3ヶ所の目跡が残る。象眼で花を描く。8は染付皿で口縁部の2/3を欠損する。復元口径10.0cm、底径5.6cm、器高1.9cm。内面は全面、外面は底部以外に施釉し、底部は畳付から蛇の目状に釉のカキトリがみられる。見込と外面に図像を描く。9は染付輪花皿。口縁部の約1/2が欠損する。復元口径10.3cm、底径6.0cm、器高3.3cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉し畳付は露胎。見込に図像を描く。10は椀。復元口径7.2cm、底径3.2cm、器高5.0cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉し畳付のみ露胎。11は椀。復元口径10.0cm。胎土精良で焼成良好。12は染付椀。復元口径7.2cm、底径3.1cm、器高3.4cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉し畳付のみ露胎。外面に「井」の字状に施文。13は染付椀。復元口径8.3cm、底径3.3cm、器高4.75cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉し畳付のみ露胎。見込に崩した字款、外面には植物を描く。14は染付椀。口径10.6cm、底



第396图 92号土坑出土遗物实测图 (1/3)

径4.5cm、器高6.2cm。全面施釉し畳付のみ露胎。見込に3ヶ所の目跡が残り、中央に「井」の字、外面は格子に文様を描く。15は染付椀。復元口径6.6cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉。口縁内面に崩した雷文、外面には松を描く。16は染付椀。復元口径7.4cm、底径3.8cm、器高6.0cm。全面施釉し畳付のみ露胎。外面に格子状の文様。17は花器で頸部から口縁を欠損。底径7.8cm。胎土精良で焼成良好。外面施釉し淡褐灰色を呈し、高台部から底部にかけて露胎。底面は糸切り痕が顕著に残る。内面はシボリ痕残るも所々に釉垂れしている。18は柄燭。復元口径3.3cm、底径4.2cm、器高5.75cm。胎土精良で焼成良好。ほぼ全面に施釉し灰褐色を呈し、底部は露胎。19は仏飯具。復元口径6.2cm、底径4.7cm、器高5.6cm。全面施釉し脚部端から底面にかけて露胎。底面に判読不明だが墨書あり。20・21は接合しないが同一個体と考えられる染付細頸壺。口径1.4cm、底径3.8cm。口縁内面から外面は施釉し、内面および畳付は露胎。頸部に蛸唐草を描き胴部にも図像を描く。22は陶器油壺。口縁部内面から外面は施釉し、胴部内面は露胎。肩部に空気抜きとみられる径0.6cmの穿孔がある。23は皿。復元口径12.6cm、底径6.5cm。器高3.0cm。胎土は精良で焼成良好。内外面ともに施釉し、見込はカキトリで口唇部および底部も露胎。外面に三重の圏線。24は手焙りか。胎土精良で焼成良好。口縁部内面から外面にかけて施釉、胴部内面は露胎。外面に径0.8cm前後で6ヶ所の円孔を穿つ。25は復元底径16.6cm。胎土精良で焼成は良好。外面施釉し灰緑色、内面と底部は露胎。26は口縁部片で器形は不明。胎土は精良で焼成良好。外面から内面口縁上部まで施釉、内面胴部は露胎。27は片口鉢底部。底径8.4cm。内面施釉するが見込蛇の目にカキトリ。外面施釉し底部付近から高台、底面にかけて露胎。28は二彩破片。29は陶器片。胎土は精良で焼成良好。外面から内面胴部中央付近まで施釉し淡灰褐色を呈し、下半は露胎している。

93号土坑出土遺物（図版163、第397図2～7）

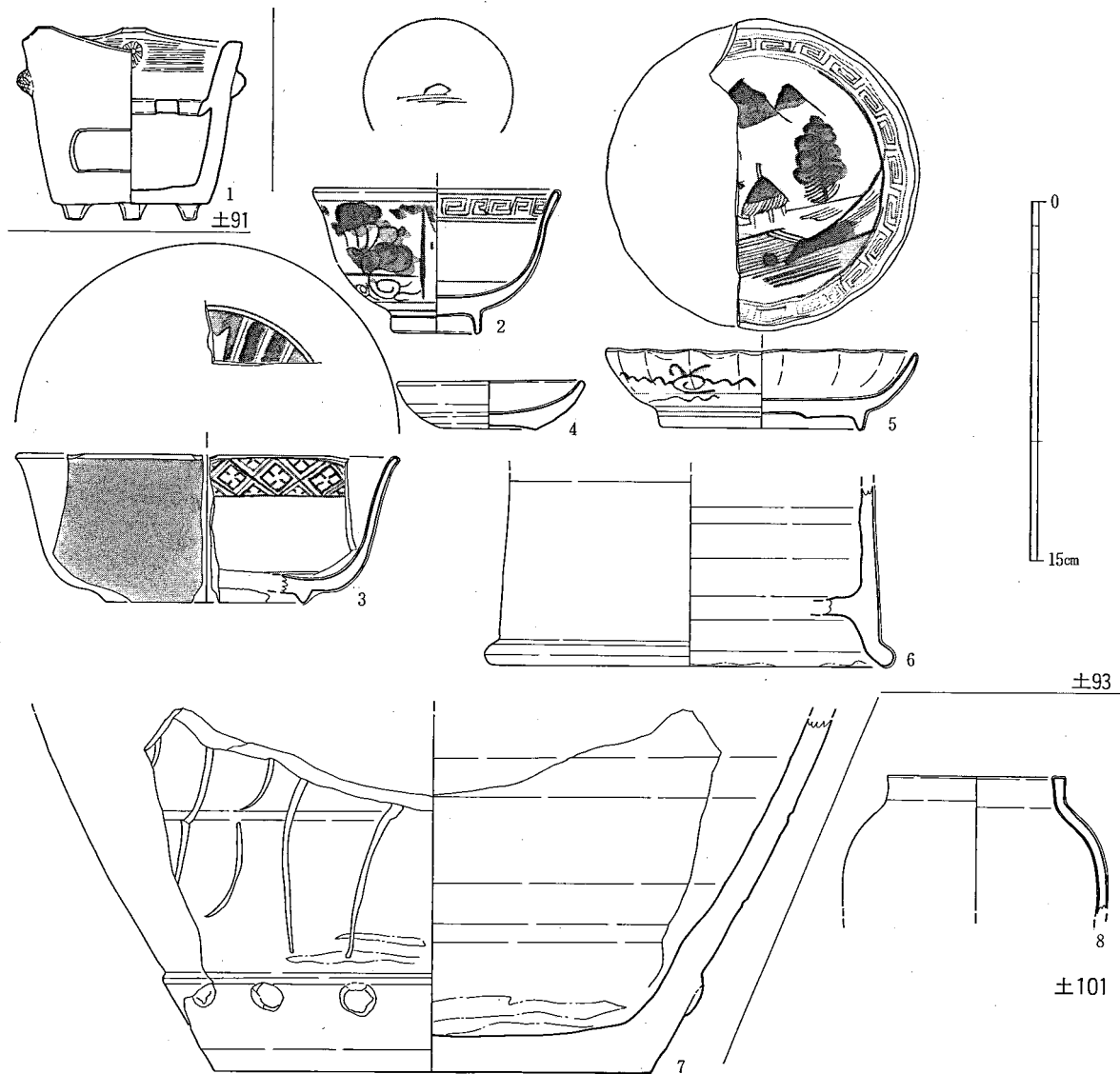
2は染付椀。復元口径10.3cm、底径3.8cm、器高6.0cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉し畳付は露胎。見込に施文、口縁部内面に雷文を描き外面には植物を描く。3は染付椀。胎土精良、焼成良好。底部一部露胎する。見込に図像を描き、口縁内面に施文する。4は陶器灯明皿。内面施釉し外面は露胎。5は染付輪花皿約1/2。復元口径13.0cm、底径8.6cm、器高3.3cm。胎土は精良で焼成良好。全面施釉し底部蛇の目に露胎。見込に風景図像を描き口縁内面に雷文、外面に文様を描く。6は7は大瓶。復元底径18.0cm。胎土精良で焼成良好。内面施釉し底部付近露胎、外面施釉して褐色を呈し、底部露胎、タタキの痕跡残る。外面底部付近に円文を張り付け装飾する。

101号土坑出土遺物（図版163、第397図8）

8は壺約1/4。復元口径7.4cm、残存器高5.9cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉し灰褐色を呈する。

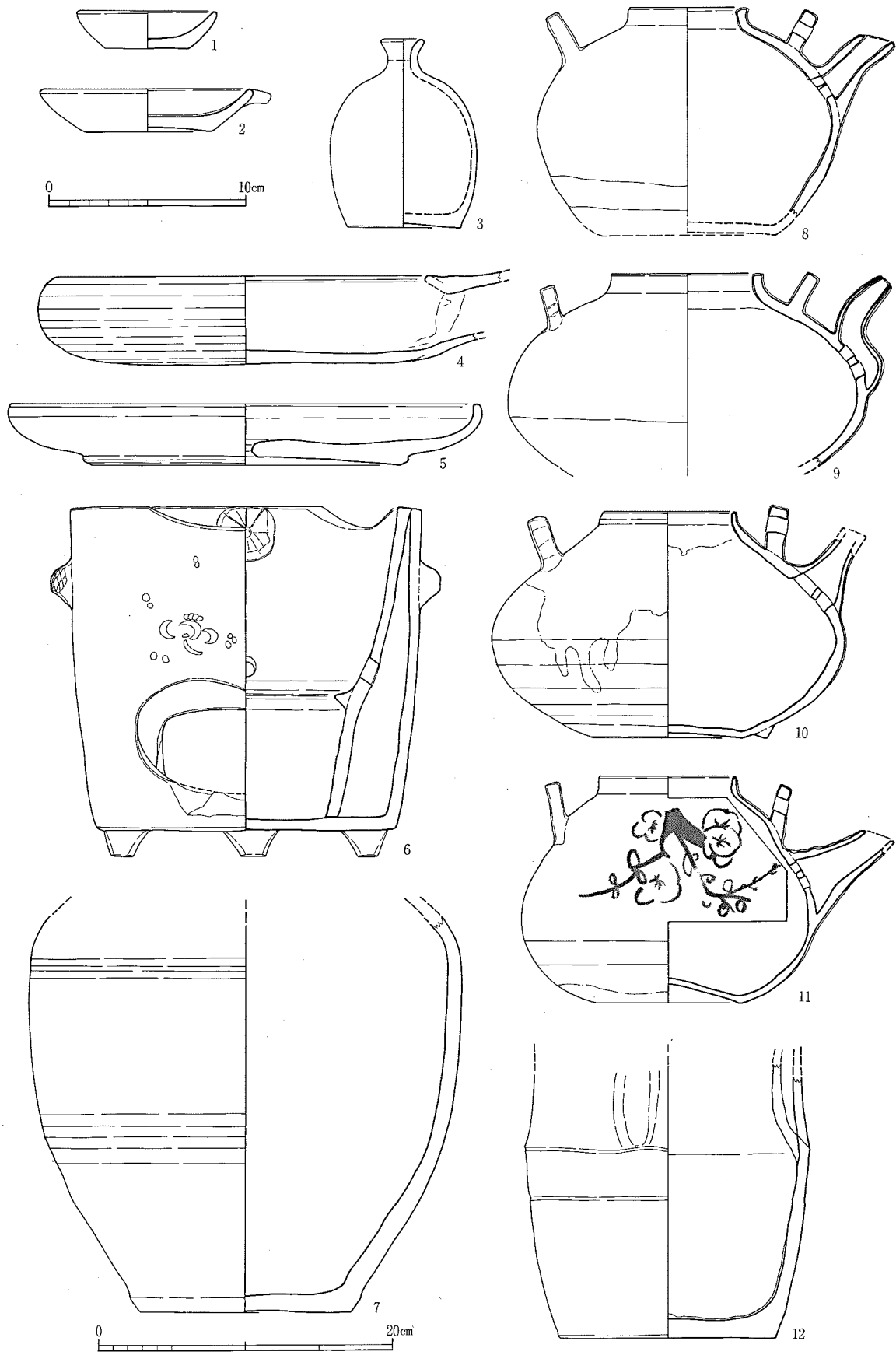
103号土坑出土遺物（図版163、第398図1～12）

1は完形の灯明皿。口径6.6cm、底径4.1cm、器高1.9cm。胎土精良で焼成良好。内外面とも回転ナデで底部へラ切り。素焼きで黄褐色を呈する。2は完形の土師質把手付皿。口径10.3cm、底径6.4cm、器高2.2cm。胎土精良で焼成良好。外面回転ナデで底部糸切り痕残る。内面施釉し灰白色、外面露胎し橙色を呈する。3は完形の素焼の瓶。口径1.8cm、底径5.6cm、器高9.6cm、胴部最大径7.4cm。胎土精良で焼成良好。全面回転ナデ、底面糸切り。茶褐色を呈する。4は把手を欠損するが体部は完形のほうらく。口径19.0cm、器高4.7cm、胎土精良焼成良好。内外面とも回転ナデ調整で把手はナデ。



第397図 91・93・101号土坑出土遺物実測図（1／3）

橙色を呈し、外面はススが吸着する。5は完形の素焼き大皿。口径23.6cm、底径15.6cm、器高3.1cm。胎土精良で焼成良好。橙色を呈す。回転ナデ調整で底部は糸切り後ナデ。底部中央に穿孔する。6はほぼ完形の陶製火鉢。口径17.8cm、底径15.0cm、器高17.8cm。胎土精良で焼成は良好。内部では2重構造をとる。肩部に2ヶ所の把手状の突起を張り付けており、菱形にスタンプする。胴部下反に開口部をもち、底部に3ヶ所の脚をもち。内面口縁直下に3ヶ所の突起をもち胴部中央付近にスノコを掛けるための突帯を有す。外面は回転ナデで調整、内面も回転ナデ。内外面とも黄褐色を呈するが外面はススが吸着し黒色化している。7は高取系の大瓶胴部約1／2。底径14.4cm、残存器高21.0cm。胎土は砂粒を多く含み焼成は良好。全面回転ナデ調整し、底面のみナデ。素焼で黄褐色を呈する。8～11はいずれも土瓶である。8は底部を欠損する。口径5.0cm、残存器高10.9cm。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。内外面とも回転ナデで吸口と把手はナデ。ほぼ全面施釉し、茶褐色を呈す。高取系。9も底部を欠損。口径7.6cm、残存器高9.8cm、胴部最大径18.2cm。胎土はやや粗く焼成は良好。内外面とも回転ナデで吸口と把手はナデ。口縁内面から外面にかけて施釉、内面は自然釉がかかり黄白色を呈す。外面にはススが吸着する。10は約3／4残存。口径6.8cm、底径7.8cm、器高11.5cm、胴部最大径18.0cm。胎土精良で焼成良好。内外面とも回転ナデで吸口と把手はナデ。



第398図 103号土坑出土遺物実測図（7は1/4、他は1/3）

底部回転ヘラケズリ。外面は鉄釉を塗り分ける。11は完形。口径6.6cm、器高11.5cm、胴部最大径15.0cm。胎土精良で焼成良好。内外面とも回転ナデで吸口と把手はナデ、底部は回転ヘラケズリ。外面に梅の木を描く。東野亭焼か。12は酒瓶。底径11.0cm、残存器高14.0cm、胴部最大径14.4cm。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。全面回転ナデ。外面に自然釉が多くかかる。

129号土坑出土遺物（図版164・165、第399図1～10）

1は壺。口縁から頸部を欠損する。底径5.8cm、残存器高5.4cm、胴部最大径8.4cm。胎土精良で焼成は良好。内外面とも回転ナデ、底部糸切り。淡褐色を呈する。高取系の一輪ざしか。2は素焼の壺。口縁から頸部を欠損。底径8.4cm、残存器高8.1cm、胴部最大径11.4cm。胎土精良で焼成良好。内外面とも回転ナデで底部糸切り。淡橙色を呈す。3は壺約1/2。復元口径5.8cm、底径4.2cm、器高9.0cm。胎土はやや粗く、焼成は良好。内面施釉、外面は胴部下半まで施釉し底面露胎し糸切り痕残る。4は素焼の香炉約1/2。復元口径9.2cm、復元底径8.2cm、器高9.8cm。胎土精良で焼成良好。内外面とも回転ナデ、底部ケズリ。口縁部に円形浮文を付す。内外面とも淡橙色を呈す。5は素焼の水注で把手部を欠損するも胴部完形。口径7.6cm、底径8.8cm、器高13.2cm。胎土精良で焼成良好。内外面とも回転ナデ、底部は糸切り後ナデ。底部を別作りして接合しており、胴部との接合部はヘラでナデで調整する。内外面とも淡橙色を呈する。高取系か。6は花瓶。頸部より上を欠損。底径8.2cm、残存器高13.6cm。胎土精良で焼成良好。外面施釉し底部、内面は露胎。胴部に墨で鳥を描く。7は輪花椀。全面施釉し畳付は露胎。見込に4ヶ所目跡がある。8は陶製播鉢。口径40.9cm～42.1cm、底径14.1cm、器高16.7cm。胎土は砂粒を若干含み、焼成は良好。9は陶製瓶。底径15.4cm、器高15.7cm。胎土精良で焼成良好。内外面とも回転ナデ調整、底部ケズリ。肩部に径4.5cmの円孔あり。高取系。10は陶製の小型火鉢。口径25.1cm、底径19.0cm、器高22.8cm。胎土精良で焼成は良好。内部二重の構造になっている。肩部に2ヶ所の把手状の突起を張り付けている。胴部下反に開口部をもち、底部に3ヶ所の脚をもち。内面口縁直下に3ヶ所の突起をもち、胴部中央付近にスノコを支持するための突帯を有す。口縁部はナデで、内面はハケメが残る。内外面とも黄褐色を呈する。外面にススが吸着し黒色化する。

136号土坑出土遺物（図版167、第400図5）

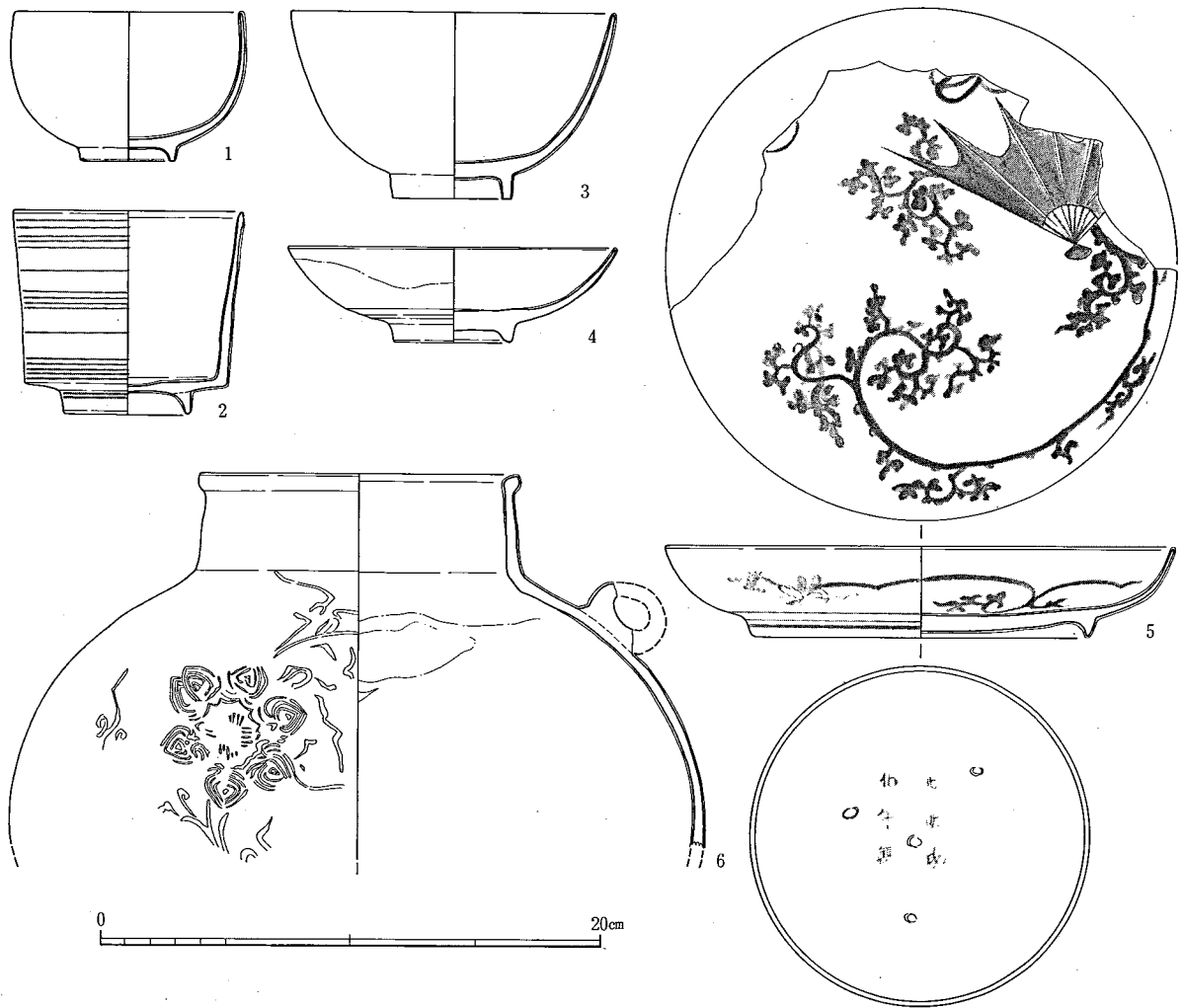
5は染付皿。復元口径24.0cm。底径13.6cm、器高4.3cm。胎土は精良で焼成良好。外面に施釉し、底部は露胎。見込、外面に文様描き、裏銘に「□□成□□製」とある。初期伊万里か。

139号土坑出土遺物（図版165、第400図1～6）

1は椀。口径9.0cm、底径3.6cm、器高6.0cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉し乳白色を呈し、畳付は露胎。2は椀。口径9.0cm、底径2.7cm、器高8.2cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉で畳付露胎。須恵焼か。3は椀。口径13.0cm、底径2.6cm、器高7.5cm。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好。全面施釉し灰白色を呈し、畳付は露胎。4は皿。口径13.0cm、底径4.6cm、器高3.8cm。胎土精良、焼成良好。内面施釉し、外面は口縁から垂らすように施釉する。胴部中央から底部は露胎。5は染付皿。口縁の約1/3を欠損する。復元口径20.3cm、底径13.5cm、器高3.6cm。胎土は少量の砂粒を含み、焼成はやや甘い。見込に唐草文と扇を配した意匠を描き、外面に図像、裏銘は「□明□化年製」と描く。目跡4ヶ所残る。6は瓶。口径12.6cm、残存器高16.0cm。胎土精良で焼成良好。内外面とも回転ナデ。外面にヘラ状工具による図像を描く。内外面に施釉。



第399図 129号土坑出土遺物実測図（8～10は1/4、他は1/3）



第400図 139号土坑出土遺物実測図(1/3)

149号土坑出土遺物(図版166、第401図6)

ほぼ完形の壺で口径11.6cm、底径11.2cm、器高13.3cm。胎土精良で焼成良好。内外面とも回転ナデで底部外面は回転ケズリ、底面は糸切り。肩部に沈線が入る。

大土坑出土遺物(第401図1~4)

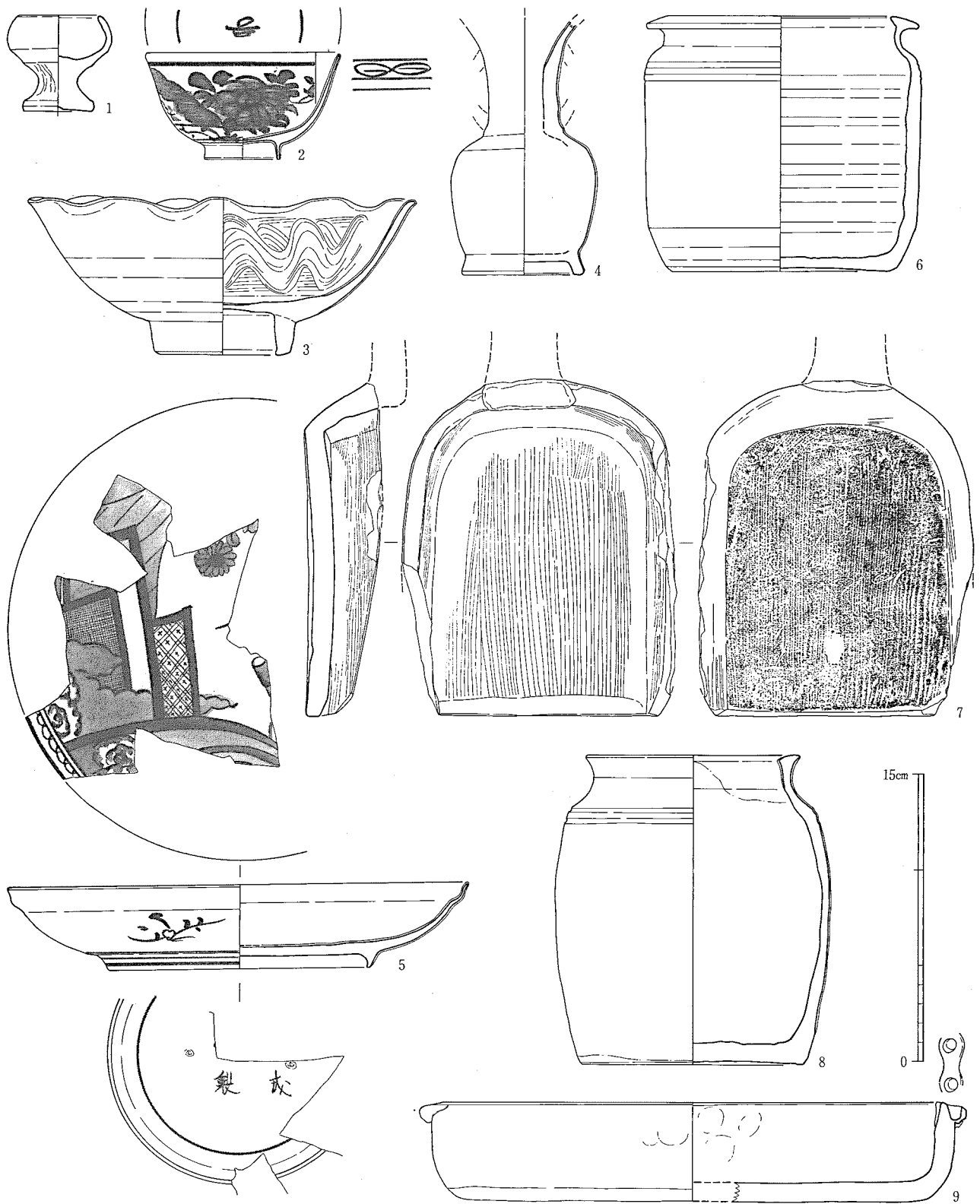
1は仏飯具で口径4.2cm、底径3.6cm、器高5.0cm。胎土精良で焼成良好。外面に施釉し内面および底部は露胎。糸切痕残る。2は染付碗。口径10.2cm、底径3.8cm、器高5.6cm。胎土は精良、焼成はやや甘い。見込、口縁内面に施文、外面に図像を描く。3は輪花碗。内面は施釉し蛇の目でカキトリ、外面は底部付近まで施釉し高台から底部は露胎。内面にハケ状工具で波状文を施文。4は花器で底径6.0cm、残存器高12.5cm。口縁内面から外面にかけて施釉緑色を呈し、高台から底部は露胎。

溝70出土遺物(図版165、第401図8)

高取系の甕約1/3片である。復元口径10.8cm、底径10.8cm、器高16.1cm。胎土精良で焼成良好。口縁内面から外面にかけて施釉し、外面回転ナデ、内面には当て具痕が残る。

攪乱出土遺物(図版165、第401図7)

7は3区西拡張区の攪乱から出土したほうらくで把手を欠損するも体部はほぼ完形。残存長17.3cm、高さ4.0cm。砂粒を多く含み焼成は良好。素焼で橙色を呈する。外面は使用の際に付着したスス



第401図 136・149号土抗・大土抗・溝・攪乱出土遺物実測図（1／3）

が吸着している。裏面はハケで仕上げしており、焼成前に線刻された銘文があり、「天保五年（1834）手（？）万口 八月廿八日 皿山作」と書かれている。作成年代と作者であろうか。

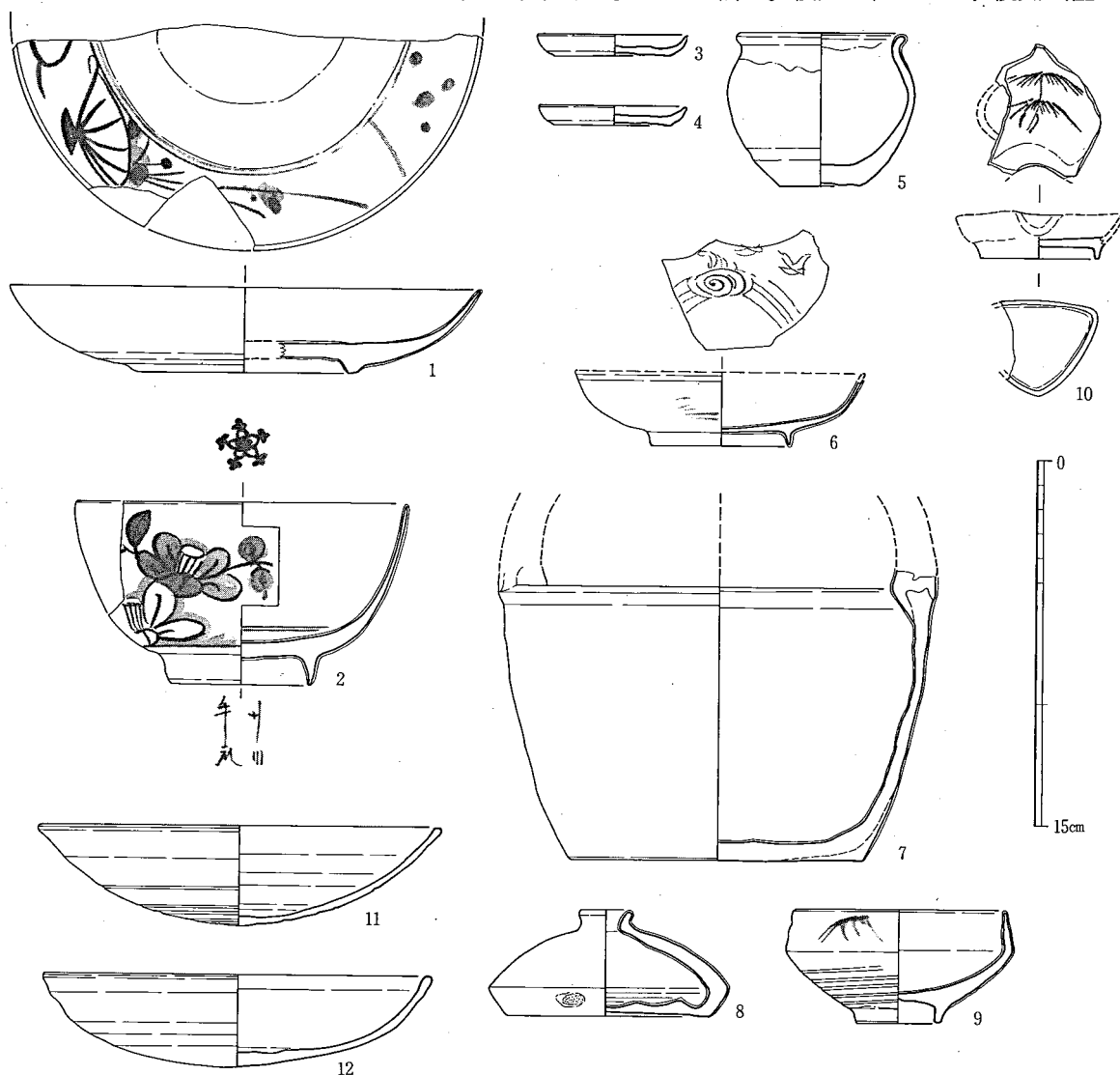
37号竪穴住居跡出土遺物（図版165、第401図9）

住居覆土に混入していた個体。復元口径28.2cm、底径23.0cm、器高5.1cm。胎土は砂粒を多く含む。焼成良好。素焼で内外面とも回転ナデ、口縁内面の把手を付した箇所にはユビオサエ後ナデ。橙色を呈するが外面にはススが吸着する。把手は2ヶ所に付されたと考えられ、穴も2ヶ所あるが貫通はしていない。

ピット出土遺物（図版166、第402図1～12）

各ピットから出土した遺物の主なものを図化した。

1はP2出土の染付皿約1/2。復元口径19.2cm、底径9.2cm、器高3.5cm。胎土は精良で焼成良好。全面に施釉し畳付は露胎。見込に扇の意匠を描く。2はP49出土の染付椀。復元口径13.5cm、底径5.8cm、器高7.5cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉し畳付は露胎。見込に花文、外面にも花を描く。3～7はP180・181からの出土。3は素焼の灯明皿。口径6.2cm、底径4.5cm、器高0.9cm。胎土精良で焼成良好。回転ナデで底部糸切り。4は素焼の灯明皿。口径6.0cm、底径4.8cm、器高0.8cm。胎土は精良で焼成良好。橙色を呈する。回転ナデで底部糸切り。5は小壺。口径6.6cm、底径3.6cm、器高6.3cm。胎土は砂粒を含み、焼成は良好。内外面とも口縁部に施釉、ほかは露胎する。暗赤茶色を呈する。内面ヨコナデ、底部回転ケズリ、底部糸切り。6は色絵皿。復元口径11.8cm、復元底径5.8

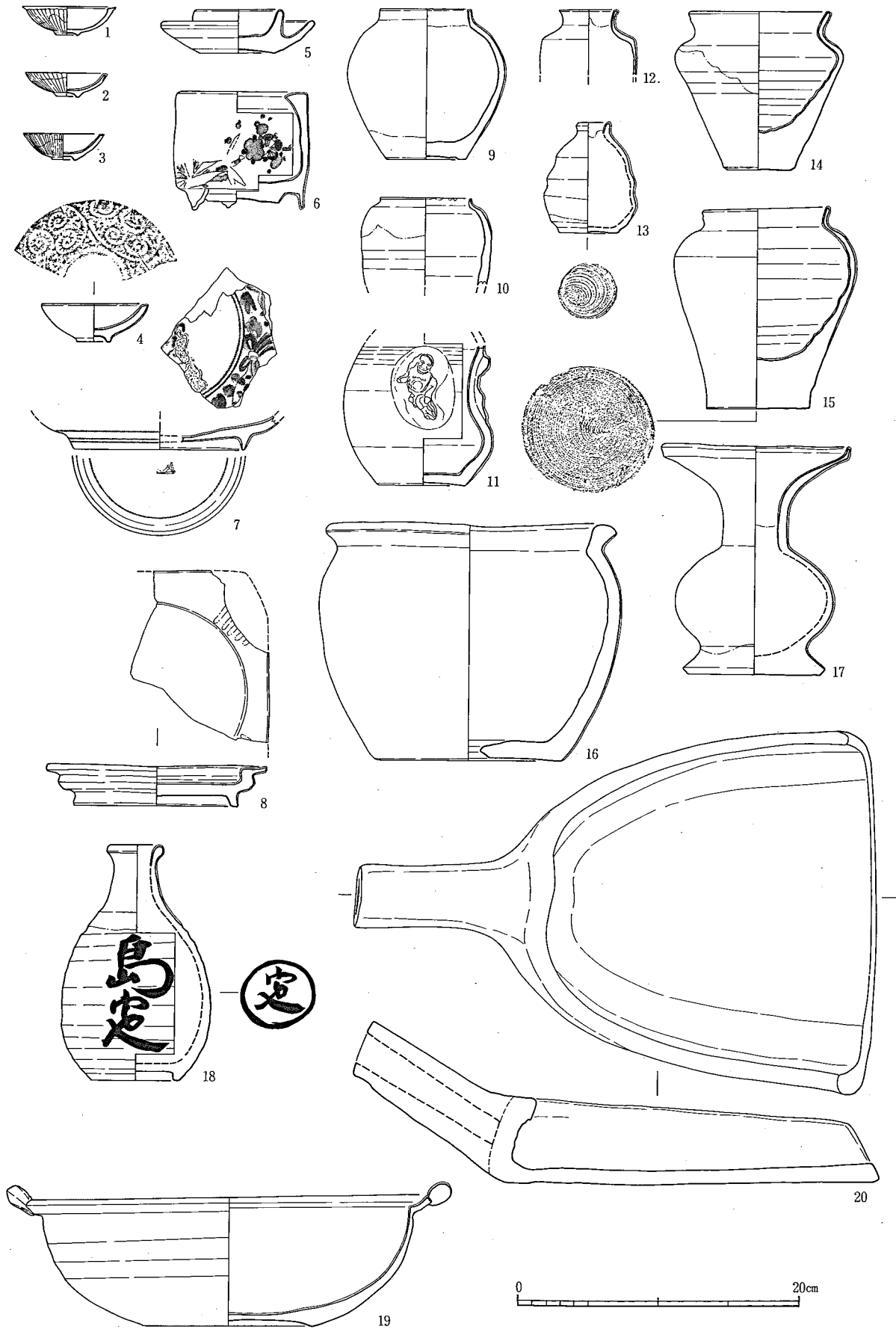


第402図 ピット出土遺物実測図（1/3）

cm、器高3.0cm。胎土精良、焼成良好、全面に施釉。赤、緑、青の3色を用い、見込に鳥をモチーフにした図像を描く。7は把手付鉢。口径27.0cm、底径12.0cm、器高12.0cm。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好。内外面ともに施釉して茶褐色を呈し、底部は露胎。8はP270出土の油壺約2/3。口径2.0cm、底径8.2cm、器高4.4cm。胎土精良、焼成良好。外面施釉で底部は露胎、糸切り。9はP305出土の椀。口径8.6cm、底径3.4cm、器高5.6cm。内外面とも施釉し高台から底面にかけては露胎。外面に図像を描く。10はP309出土の変形小皿。口縁のほとんどを欠損する。胎土精良で焼成は良好。11・12はともに西拡張中ピットから出土の完形土師質椀。11は口径16.6cm、器高3.9cm。胎土は精良で焼成良好。素焼で淡橙色を呈する。内面回転ナデ、底部回転ケズリ後回転ナデ。12は口径16.0cm、器高3.8cm。胎土は精良で焼成良好。素焼で淡橙色を呈する。

遺構面・包含層出土近世遺物（図版167、第403図1～20）

1～4は紅皿。1は完形で口径4.9cm、底径1.2cm、器高1.5cm。内面施釉、外面は口縁から釉垂れして底部は露胎。口唇部は強いナデで面をなす。2は口径4.3cm、底径1.2cm、器高1.25cm。内面から口縁にかけて施釉、外面露胎。4は約1/2で復元口径5.6cm、底径1.8cm、器高2.0cm。胎土精良で焼成良好。全面施釉。型押しにより外部に蛸唐草文を陽刻する。5は完形の灯明皿。口径4.4cm、底径4.0cm、器高2.3cm。胎土はやや粗く焼成は良好。内面から受部内面まで施釉し、外面は露胎、回転ケズリ。口縁部にスガが付着する。6は色絵香炉。口径7.0cm、器高6.2cm。胎土精良で焼成良好。内外面とも施釉し底部露胎。外面青と赤で花を描く。7は染付皿。復元底径9.0cm。胎土はやや粗く焼成は良好。全面施釉し、見込に図像、裏銘は崩した「福」を描く。8は角皿約1/3。復元口径11.4cm、底径8.5cm、器高2.1cm。胎土精良で焼成良好。内外面とも施釉し底部は露胎。口縁部に鉄絵あり。唐津系か。9は完形の壺。口径4.7cm、底径4.2cm、器高8.0cm。胎土精良で焼成は良好。口縁内面から胴部外面にかけて施釉。10は壺破片。復元口径4.7cm。口縁部に施釉する。肩部付近に耳が付くか。11は小石原の徳利。底径4.6cm、器高7.5cm。胎土精良で焼成良好。内外面とも施釉し飴色を呈し、底面露胎。表面に布袋を張り付ける。12は壺小片。復元口径3.0cm、残存器高3.4cm。胎土精良で焼成良好。口縁内面から外面に施釉。13は壺。復元口縁1.7cm、底径3.1cm、器高5.9cm。胎土精良で焼成良好。外面施釉し底面露胎し糸切痕残る。14は壺。復元口径7.3cm、底径3.8cm、器高8.4cm。胎土は1～2mmの砂粒を少量含み、焼成は良好。内面施釉。外面は口縁から肩部にかけて施釉する。底面露胎し、糸切り痕残る。15は完形の壺。口径6.6cm、底径5.4cm、器高10.6cm、胴部最大径9.6cm。胎土は精良だが焼成やや甘い。内面施釉、外面は胴部中半まで施釉するも底部付近から底面は露胎。糸切り痕残る。16は高取系の壺。口径13.4cm、底径9.8cm、器高12.6cm。胎土は砂粒を少量含み焼成は良好。外面は施釉するが底部は露胎。焼成後に穿孔する。植木鉢として利用か。17は完形の花器。口径9.8cm、底径7.0cm、器高12.2cm。胎土精良で焼成良好。内面から外面底部近くまで施釉し黄白色、底面は露胎し赤褐色を呈す。糸切痕残る。18は完形の徳利。口径2.6cm、底径4.6cm、器高12.5cm。胎土精良で焼成良好。口縁から頸部にかけて施釉し深緑色を呈し、底部は露胎。黒で「北満出土於龍江省克東懸古城址」の銘文があるが、そのような個体とは考えられない。19は完形の土鍋。口径20.6cm、底径8.9cm、器高6.8cm。内面施釉し黄橙色、外面は露胎して乳白色。スガが吸着して一部黒色化する。内面回転ナデ、外面は回転ケズリ。20は完形のほうらく。全長27.7cm、高さ8.5cm。胎土精良で焼成良好。全面ナデで調整。素焼で橙色を呈する。



第403図 遺構面・包含層出土遺物実測図(1/3)

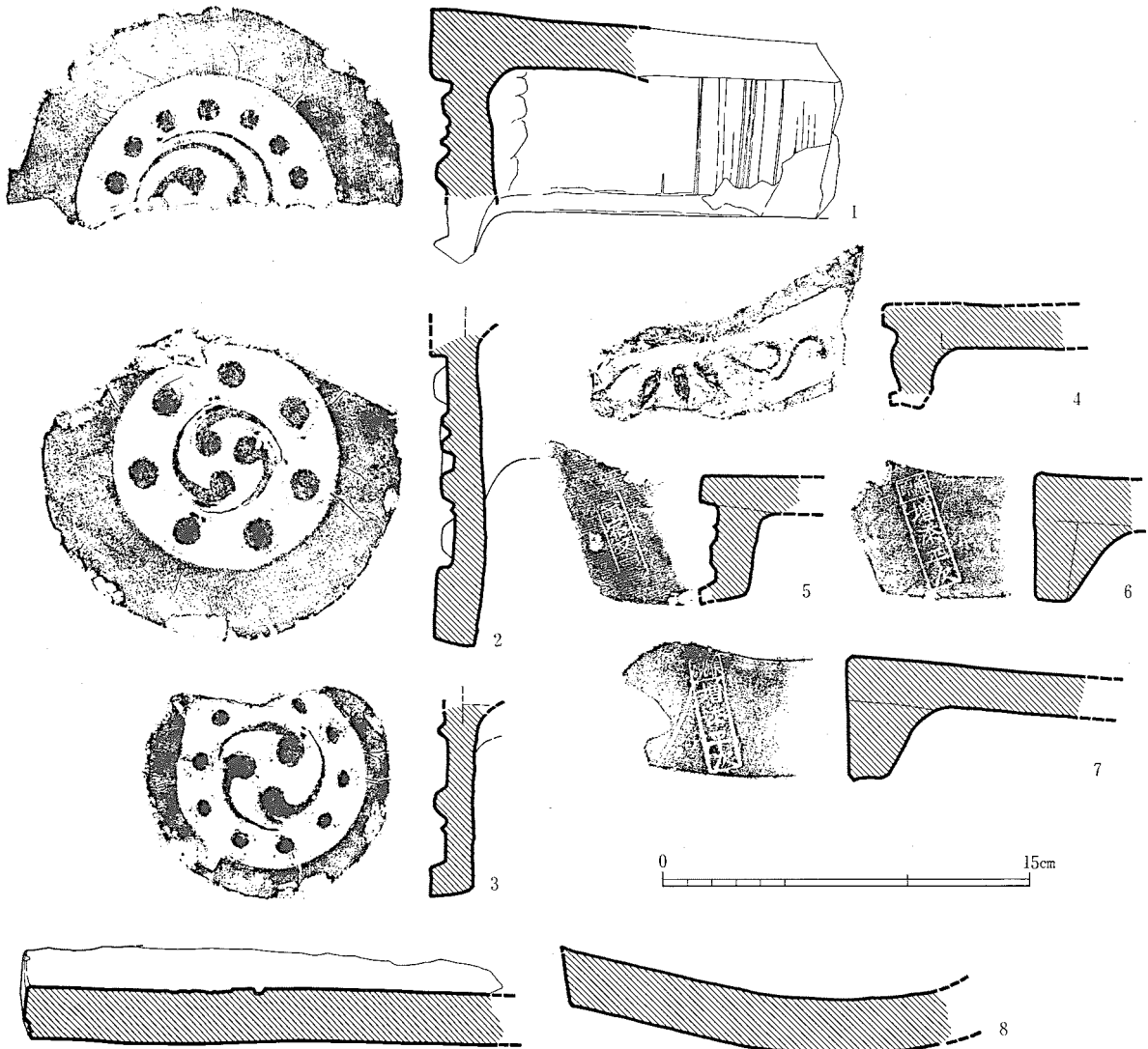
瓦（図版167、第404図1～8）

1は3区北1区攪乱1からの出土。胎土は1～3mmの粗砂粒含み、焼成は良好。いぶし仕上げ。色調は黒灰色を呈す。2～4は3区北1区の攪乱10からの出土。2は胎土は若干の粗砂粒、細砂粒を含み、焼成は良好。いぶし仕上げ。色調は淡灰色を呈する。瓦当裏面は不定方向のナデ。3は胎土細砂粒含み、焼成は堅緻でいぶし仕上げ。黒灰色を呈する。瓦当裏面は不定方向のナデ。4は胎土やや粗く細砂粒含む。焼成は堅緻で色調は黒灰色。5は3区南11区のP329からの出土。胎土は細砂粒、粗砂粒含み、焼成は堅緻。いぶし仕上げ。色調は淡灰色。18世紀後半以降のものか。6は西拡張区P504からの出土。胎土はやや粗く砂粒含む。焼成堅緻でいぶし仕上げ、色調は黒灰色を呈す。7は西拡張区攪乱からの出土。胎土やや粗く粗砂粒含む。焼成は堅緻でいぶし仕上げ、色調黒灰色を呈す。8は2号土坑からの出土。胎土やや粗く粗砂粒含む。焼成は堅緻で色調は灰色から黒灰色。

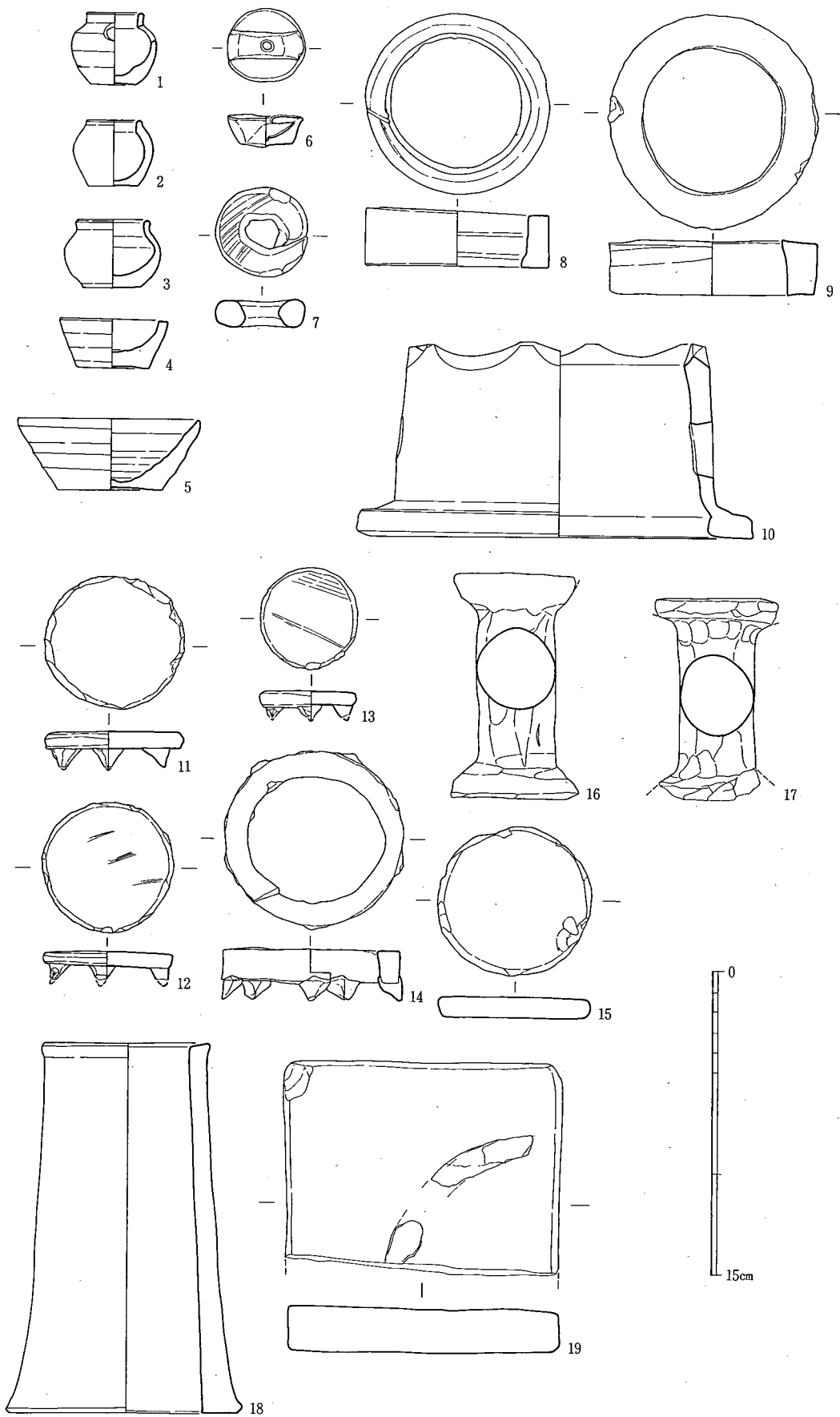
窯道具（第405図1～19）

各遺構から出土した窯道具類のうち、主なものを図化した。掲載したものはほんの一部であり、相当数が出土している。

1は140号土坑出土。口径2.7cm、底径2.15cm、器高3.6cm。素焼で明赤褐色。底面糸切。2は36号



第404図 瓦実測図（1／3）



第405图 窯道具実測图 (1 / 3)

溝出土。復元口径2.3cm、底径2.5cm、器高3.3cm。素焼で明赤褐色。糸切。3は119号土坑出土で約1／2個体。復元口径3.4cm、底径2.9cm、器高3.4cm。素焼で白色を呈し、底部糸切。4は86号土坑出土。口径5.3cm、底径3.5cm、器高2.4cm。素焼で乳白色を呈し、糸切。5は108号土坑出土。口径8.9cm、底径5.1cm、器高3.5cm。素焼で灰白色を呈し、糸切。6は遺構面出土。径3.8cm、器高1.5～1.6cm。上部から棒状工具で穿孔しており底部まで届くも貫通はしていない。7は26号土坑出土。径4.4～4.6cm。所々にユビオサエし、上部はヘラ切りして平滑になる。8は遺構面出土。径4.4cm、器高2.5～2.8cm。乳白色を呈す。9は1区遺構面出土。口径10.0～10.4cm、器高2.6～2.8cm。乳白色を呈す。10は146号土坑出土で約3／4片。底径9.3cm、器高9.6cm。乳白色を呈す。胴部2ヶ所穿孔する。11～13は三脚ハマ。11は3区北1区攪乱6出土。径6.5～6.9cm、器高1.8cm。体部黄白色で脚部白色。12は87号土坑出土。径6.4～6.5cm、器高1.4cm。体部茶褐色で脚部白色。13は3区北1区P435出土。径4.8～5.0cm、器高1.4cm。体部乳白色で脚部白色。14は1区精査時出土。径9.0cm、器高2.5～2.6cm。体部乳白色、脚部黄白色。五脚。16～17はトチン。16は1区遺構面出土。器高11.1cm。暗赤茶褐色。17は2区南拡張区攪乱出土。器高10.0cm。茶褐色。18は149号土坑出土で底径11.1～11.2cm、器高18.3cm。明赤褐色を呈し、自然釉が所々付着する。19は129号土坑出土。やや欠損する。幅13.3cm、厚2.2～2.4cm。茶褐色を呈する。多くは藤崎遺跡の各調査でも同様の遺物が出土しており、いずれも高取系窯である東・西皿山で用いられたものであろう。

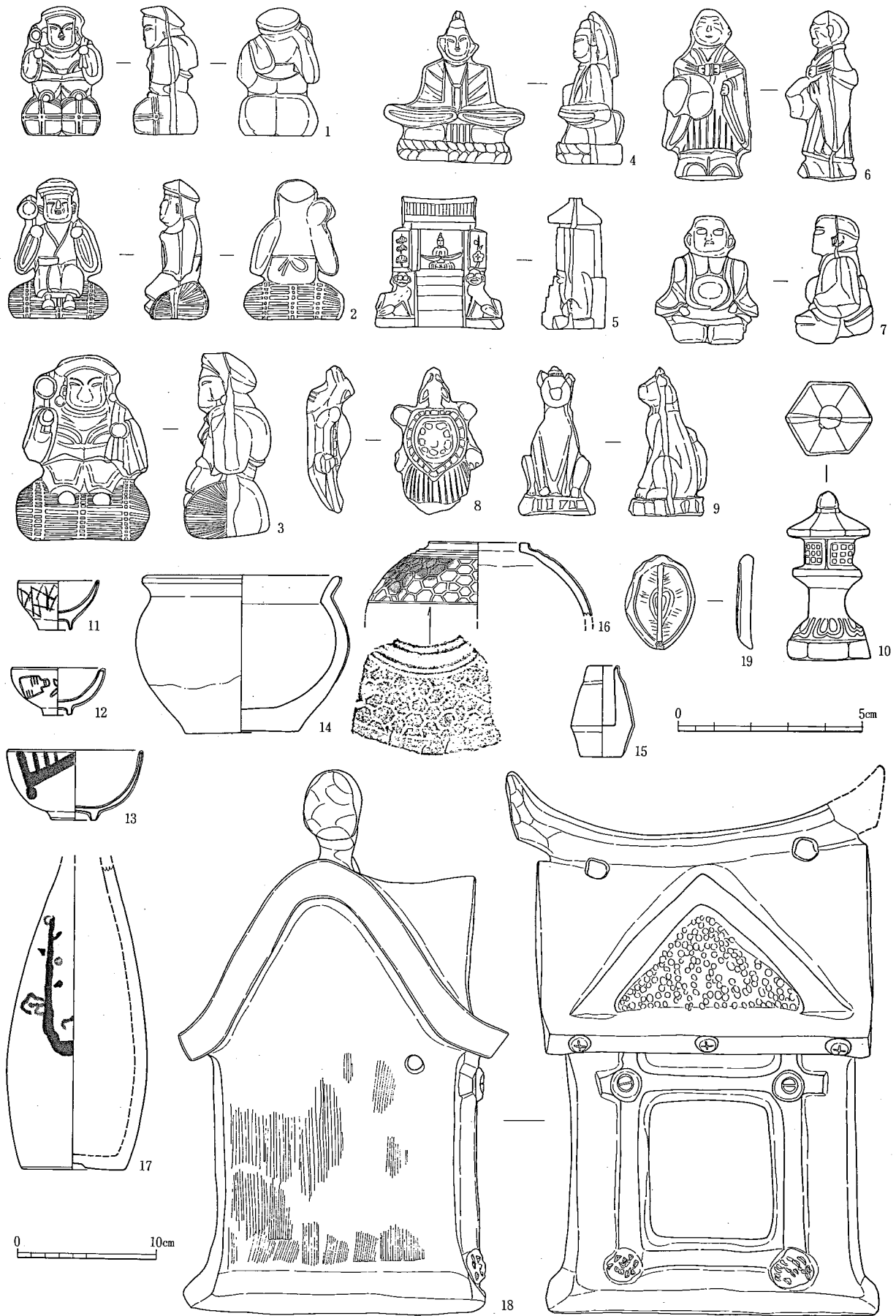
土人形・玩具類（図版168、第406図1～18）

多くの遺物が出土しているが、完形のもののみ図化した。

1～10は土人形。いずれも型作りで中央部に合わせ目が認められる。11～17は玩具である。

1は3号土坑出土の大黒天。高さ3.4cm。2は140号土坑出土の大黒天。高さ3.8cm。3は遺構面出土の大黒天。高さ5.0cm。4～6はいずれも3号土坑出土である。4は天神で高さ4.2cm。他に3点の天神が出土しているがいずれも頸部を欠損する。5は堂内天神。高さ3.6cm。6は弘法大師で高さ4.7cm。7は45号土坑出土の日蓮聖人。高さ3.5cm。8は39号土坑出土の亀。長さ4.0cm。9は1区P176出土の稲荷様。高さ4.0cm。10は3号土坑出土石灯籠。高さ4.6cm。

11は染付碗約2／3。口径2.2cm、底径0.9cm、器高1.4cm。全面に施釉、焼歪む。12は2区南攪乱出土の白磁碗約1／2。口径2.5cm、底径0.8cm、器高1.3cm。全面施釉し型押しで外面に陰刻で羽子板？を描く。13は127号土坑出土染付碗約1／3。復元口径3.7cm、底径1.2cm、器高1.9cm。全面施釉し畳付は露胎。外面に図像を描くが絵柄は不明。14は92号土坑出土陶器小壺でほぼ完形。口径5.1cm、底径3.1cm、器高4.3cm。口縁から肩部にかけて施釉。内面乳白色、底部糸切。15は86号土坑出土の壺小片。復元口径2.7cm。16は14号土坑出土完形の飴釉壺。口縁0.9cm、底径1.15cm、器高2.5cm。外面施釉。17は3区中遺構面出土丁子で頸部を欠損する。底径2.7cm、残存器高8.2cm。外面朱塗りし、梅の絵を描く。18は137号土坑出土陶製の稲荷。高さ40.3cm。胎土は砂粒を多く含み、焼成は堅緻。外面はハケメの後ナデ。色調は茶褐色を呈する。19は1区遺構面出土の泥面子女陰。長さ2.6cm。泥面子はこの1点のみが認められた。



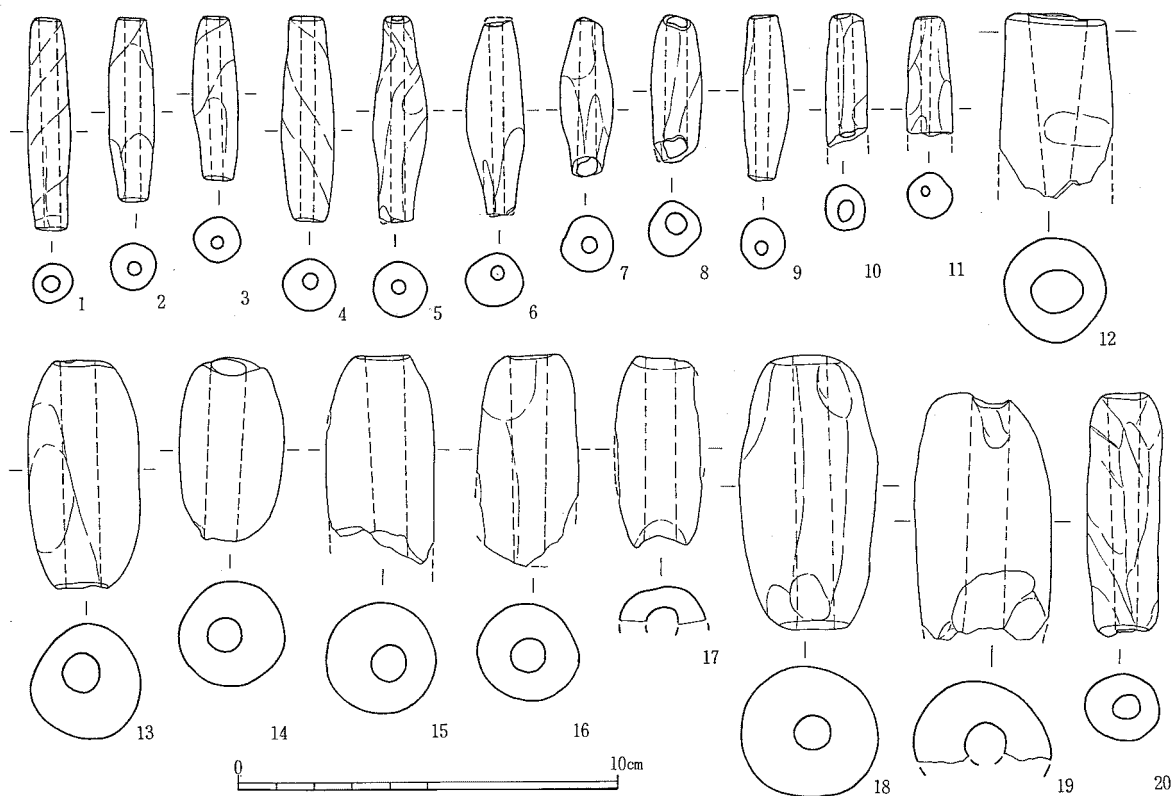
第406図 土人形・玩具等実測図 (18は1/4、他は2/3)

土錘（図版168、第407図）

土錘は各遺構から出土しているが、まとめて出土した遺構はなく、多くが遺構面もしくは包含層からの出土である。ほとんどが近世に属する遺物であると考えられるが、古い個体も存在する可能性がある。しかし、土錘は形がシンプルであるために古代以前から現代にいたるまでプロポーションがほとんど変化がなく、時期を特定しがたい遺物である。したがってここでは近世の遺物として一括して報告する。それぞれの計測値に関しては表2を参照いただきたい。

1～11までは径に対して長さが細身の紡錘形で、12～20までは径に対して長さが短い太めの形を呈し長さが5cmを越える（14のみやや短い）大型品である。

1～4・6・9はいずれも完形の個体で5・7・8はほぼ完形の個体である。1はP280からの出土。ほぼ直線状の形で淡い黄白色を呈する。2は45号土坑からの出土。両端部をユビオサエによって整形する。黄白色から明赤褐色を呈する。4は109号土坑出土。全体にシボリ痕がみられ、ナデで整形し、端部の整形はみられない。乳白色を呈する。5・6は包含層からの出土。5は全体的にユビオサエ。端部もつまんで整形する。明赤褐色を呈する。6は片側端部をナデで整形。乳白色を呈する。7～9はやや小振りの個体である。7は遺構面からの出土で端部がやや欠損する。全体的にユビオサエで、いびつな形状である。ややくすんだ明赤褐色を呈する。8はP332からの出土でやはり端部がやや欠損する。全体的に丸く端部のみ整形は認められない。乳白色を呈する。9は45号土坑出土。片側をやや整形しているよう。暗褐色から乳白色を呈する。10はP516出土で約2/3程度の残存と考えられる。全体的にユビオサエで整形している。明赤褐色を呈する。11は包含層からの出土で約1/2が残る。端部をユビオサエで整形。乳白色を呈する。12～14はいずれも遺構面からの出土である。12は約1/2が残存している。唯一端部が直線的で全体的にシャープな形



第407図 土錘実測図（1/2）

状を呈する。工具でナデで整形。乳白色を呈する。13はほぼ完形である。ユビナデで整形、乳白色を呈する。14は胴部最大径に比してもっとも長さが短く丸み強い形状を呈する。暗茶褐色から茶褐色。15は包含層出土で端部を欠損。全体的にナデで整形。16は攪乱からの出土で約1/2が残存。工具によるナデで整形。赤褐色から暗赤褐色。17は58・59号溝からの出土で約1/2が残存。全体ナデで明赤褐色を呈する。19はP 138出土で端部と半面を欠損する。全体的にナデで整形。淡灰黄色。20は大型品唯一の棒状の個体で完形品。遺構面からの出土。全体ユビナデ・オサエで整形している。乳白色から明赤褐色を呈する。

表2 土錘計測表

No.	出土地点	長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	残存
1	P280	5.7	1.1	0.45	5.3	完形
2	土坑 45	4.9	1.1	0.35	6.6	完形
3	包含層	5.4	1.25	0.3	8.9	完形
4	土坑 109	4.4	1.3 ~ 1.4	0.35	6	完形
5	包含層	5.5	1.5	0.35	8.3	ほぼ完形
6	包含層	5.3	1.5	0.3	10.1	完形
7	遺構面	4.2	1.4 ~ 1.5	0.45	5.7	ほぼ完形
8	P332	3.9	1.4 ~ 1.5	0.6	5.6	ほぼ完形
9	土坑 45	4.3	1.35	0.3	6.2	完形
10	P516	残存 3.6	1.1 ~ 1.2	0.4 ~ 0.55	3.2	約 2/3
11	包含層	残存 3.2	1.2 ~ 1.3	0.2	4.6	約 2/3
12	遺構面	残存 4.8	3.0 ~ 3.2	1.15 ~ 1.35	31	約 1/2
13	遺構面	6	2.8 ~ 3.0	0.9 ~ 1.05	43.9	完形
14	遺構面	4.9	2.8	0.9	30.4	ほぼ完形
15	包含層	残存 5.6	2.9 ~ 3.0	0.95	39	約 2/3
16	攪乱	残存 5.6	2.6	0.9 ~ 0.95	29.3	約 2/3
17	溝 58・59	残存 5.1	3.4 ~ 3.45	0.8 以上	14	完形
18	遺構面	7.3	3.4 ~ 3.45	0.9 ~ 0.95	89.7	約 1/2
19	P138	残存 6.5	3.6	1.05	49.8	約 1/2
20	遺構面	6.4	1.8 ~ 1.9	0.7	22.2	完形

第4章 西新町遺跡の玉原石

西南学院大学名誉教授 唐木田 芳文

第1節 まえがき

西新町遺跡第12次調査による竪穴住居跡から、完成あるいは未完成の勾玉とその原石と見られる小礫（以下、玉原石という）が出土した。とくに96号竪穴住居跡からは、1箇所に集中して多数発見されている。これら玉原石の岩石学的性質を明らかにし、その産地を推定しようという目的での調査が実施された。

それにそって調査は、まず、偏光顕微鏡とX線分析によって構成鉱物とその岩石の特徴を調べ、つぎに、これまでの地質学的調査に基づいて産地を推定する、という方法ですすめられた。また、現地調査も一部実施した。

その結果、大部分は蛇紋岩で、一部は変質安山岩であることが明らかになった。九州には、変成帯ごとに異なる特徴をもった蛇紋岩が分布する。しかし、玉原石の蛇紋岩がどの変成帯の何処からもたらされたものかの判定は、現段階では不可能であった。また、火山岩が多く分布する九州では、変質安山岩の産地についても、推定は困難である。

この調査の過程で、福岡教育大学の高須岩夫氏には偏光顕微鏡用岩石薄片の作製をお願いし、九州大学の中牟田義弘氏には蛇紋岩のX線分析をしていただいた。また、福岡大学の石橋澄教授は顕微鏡写真の撮影を御援助くださった。記してお礼申し上げる。

第2節 玉岩石の鑑定

顕微鏡鑑定のために、次の代表的玉原石7個を選定して岩石薄片を作製し、任意に番号を付けた。

- No. 1 : 96号竪穴住居跡242
- No. 2 : 96号竪穴住居跡227
- No. 3 : 北1区遺構面273
- No. 4 : 65号竪穴住居跡262
- No. 5 : 96号竪穴住居跡159
- No. 6 : 96号竪穴住居跡159
- No. 7 : 71号竪穴住居跡覆土

A) Nos. 1～6 ; 蛇紋岩

肉眼観察

蛇紋岩は、全般的に見ると、①淡青色のもの（淡色部）と②緑～褐色がかかった黒色のもの（黒色部）とが混在しており、混在の仕方が玉原石ごとに異なる。質は硬く、玉に適す。

- No. 1 : ②が主体で、①が不規則なネットワーク状に入る。
- No. 2 : No. 1と似ているが、①がNo. 1よりやや多い。 6号竪穴住居跡227
- No. 3 : ほとんど①のみ。したがって、淡青色を呈する。北1区遺構面273
- No. 4 : ①と②が層状に接する。

No.5 : ①と②が不規則に混在する。

No.6 : ①>②で、両者不規則に混在する。

顕微鏡観察 (第408・409図)

おもな構成鉱物は蛇紋岩と磁鉄鉱・赤鉄鉱で、部分により、わずかの緑泥岩をともなう。①はほとんど細粒の蛇紋石のみからなり、②は磁鉄鉱粒と赤鉄鉱粒の微細粒子を多数ふくむ。②が肉眼で黒っぽく見えるのは、この鉄鉱類を含有するためである、

蛇紋石：かんらん岩の蛇紋岩化作用の過程で、おもに、かんらん石から生成したものである。

蛇紋岩の、一般的な“ふつうの部分”では、長さ0.04~0.1mm、幅0.01~0.02mmの短い葉片状結晶が、アランダムに組み合っている(第408図2・4など)。No.1ではとくに大形の結晶も混在し、長さ0.3mmに達することがある。No.3はこれらと違った様相を示し、長さ0.2mmの細長い葉状結晶と微細な針状結晶とが平行に配列・集合した、片状の薄層部が“ふつうの部分”を切るように発達している(第408図6)。この片状部は、何回もくり返して起こった蛇紋岩化作用の後期の産物であろう。

磁鉄鉱・赤鉄鉱：かんらん岩に元来ふくまれていたものと、蛇紋岩化作用の過程で副産物として生じたものが混在するであろう。

径0.1mm以下の微細な、不規則な形の黒色粒子として散在し、部分的に赤鉄鉱をともなう。細かい粒子は数珠状^{じゅうず}に連なって線状や網目状に分布する(第408図1)。また、磁鉄鉱はときどき、径0.5mm前後の大きい不定形集合体を形成している(第409図9)。

緑泥石：かんらん岩に少量ふくまれていた輝石から変質したものであろう。

No.4では断面矩形(0.3×0.7mm)の緑泥石の集合体がときに見られる。輝石の仮像であろう。一般には、磁鉄鉱が密集した部分に、緑泥石がよくともなわれる(第408図4・第409図10)。Nos.5・6にとくに多く見られる。

粉末結晶によるX線分析 (第410・411図)

No.4における①と②をそれぞれ、ガンドルフィーカメラによってX線分析し、おもに蛇紋石と磁鉄鉱から構成されていることが確認された。第410図に示すように、淡色部①でみとめられるのは蛇紋石の回折X線ピークのみである。これに対して、黒色部②には第411図のように、蛇紋石のほかに磁鉄鉱のピークがあらわれている。したがって、淡色部はほとんど蛇紋石のみからなり、黒色部はおもに蛇紋石と磁鉄鉱の混合物と結論される。

鉱物はそれぞれ特有の結晶構造をもっているので、照射された入射X線は、その構造に応じて特有の方向に回折する。そうしてできる、ある種の鉱物のX線回折パターンが予めわかっているならば、未知の鉱物の回折パターンをそれと比較することによって定性分析することができる。

こうした比較・参照の方法としてふつう、Hanawalt法が利用される。鉱物の結晶における一連の格子面間隔(d)に対応した回折X線のうち、もっとも強度の強い3~4本を取り出して既知鉱物のそれと比較し、一致していれば他の弱い回折線も比較する。この既知物質の基準データとしてASTMカードがよくつかわれる。

ASTMカードによる蛇紋石と磁鉄鉱の代表的な回折X線ピークのd(オングストローム)とその相対強度(最大ピークの高さに対する百分率であらわす。括弧内)は次のようである。回折X線

の強度が強いほど、ピークは高くなる。

・蛇紋石（アンチゴライト）：7.29～7.33（100）－4.60～4.64（40～60）－3.61～3.66（80～100）－2.50～2.53（100）

・磁鉄鉱：2.97（30）－2.53（100）－2.10（20）－1.62（30）－1.49（40）

No.4の回折パターンから読み取られる回折角 2θ （横軸の数字）から計算したdは次のようになる。いずれも、上記の標準鉱物のものと一致し、それぞれ、蛇紋石、磁鉄鉱と同定される。

・第159図（淡色部①）の蛇紋石：

7.31（100）－4.60（12）－3.62（45）－2.51（32）

・第160図（黒色部②）の磁鉄鉱：

2.97（35）－2.53（100）－2.09（29）－1.61（32）－1.48（42）

B) No.7：赤鉄鉱化をうけた変質安山岩

肉眼観察

淡い灰褐色の緻密な基質中に、白色の斜長石斑晶が散在する。

顕微鏡観察（第409図11・12）

斑晶：大部分が斜長石で、少量の磁鉄鉱・赤鉄鉱と、まれに緑泥石が見られる。斜長石は、長さ0.2～1.5mmの長柱状で、変質あるいは汚染をほとんどうけずに新鮮で透明（第409図11）。双晶を示す（第158図12）。鉄鉱類は、径0.05～0.3mmの、角のとれた四角形～多角形の断面を示す。まれに見られる緑泥石は、柱状の斑晶状集合体をつくっており、角閃石や輝石などから変質したのであろう。

石基：微粒の磁鉄鉱・赤鉄鉱が高密度で散在する（第409図11）。そのため、石基の組織は不鮮明であるが、ときどき、長さ0.03～0.1mmの、部分的に変質した拍子木状斜長石がみとめられる。

第3節 産地の推定

A) Nos.1～6：蛇紋岩

蛇紋岩は一般に、かんらん岩が蛇紋岩化作用（400～500℃以下での熱水変質作用）をうけてできる。かんらん岩は、おもにかんらん石と輝石からなる超苦鉄質深成岩で、かんらん石と輝石の割合や輝石の種類によって分類されている。変成帯に普遍的に分布する、蛇紋岩化したかんらん岩体は、大洋底の一部やマントルを構成する岩石が、構造運動によって変成帯中に固体貫入してきた断片と考えられている。

分布：日本では古生代・中生代の変成帯に産出する。九州に分布するおもな変成帯はa)三郡変成帯、b)長崎変成帯、c)黒瀬川構造帯で、それぞれ蛇紋岩をともなっている。a)は中国地方から延長してきて、北部九州から中部九州西部につづく、b)は長崎県の西彼杵半島・野母半島に分布し、天草西海岸にも見られる。c)は大分県臼杵から熊本県八代につづく秩父累帯の中の細長いレンズ状帯として出現する。

これらの変成帯の中で、蛇紋岩がとくに多く分布する地域は、a)では福岡県篠栗地域、佐賀県の天山および巖木。b)の西彼杵半島西半部では、南北にのびたレンズ状～岩床状の小岩体がいくつも分布し、とくに西海町の島崎東方に集中して見られる。野母半島の中部には、かなり大規模な

岩体が露出する。c)では全域に分布するが、とくに熊本県田浦町赤松付近から北東方の清和村栗林にかけて、幅1～2 km以下のレンズ状～帯状岩体が断続的に見られる。

特徴：これまでの研究によると、各変成帯のかんらん岩は、それぞれ特有の鉱物粗製をもっている。a)とc)はかんらん石を主体として斜方輝石をともなうタイプ、b)はかんらん石に単斜輝石をともなうタイプである。元のかんらん石や輝石の大部分が蛇紋石に変質してしまっている蛇紋岩から、このタイプを設定するためには、蛇紋岩化作用を免れてわずかに残っている輝石・かんらん石(残存鉱物)を探し出して確認しなければならない。

産地：上記のように、変成帯ごとの蛇紋岩の特徴が、玉原石蛇紋岩の産地を推定する一つの手がかりになると考えられる。しかし、今回の調査では、玉原石の蛇紋岩化作用が完全であって、残存鉱物のかんらん石や輝石はみとめられなかった。したがって、上記の方法による出所の判定は不可能である。しかし、九州あるいは福岡に近い北部九州における蛇紋岩の分布状況は、おおまかな産地の候補地を示唆している。

B) No. 7の赤鉄鉱化した変質安山岩

九州には安山岩の分布は広く、産地を特定するのはむずかしい。玉原石蛇紋岩と同じ地域からもたらされたと考えるのも一つの推論方法であろう。

付 福岡県鞍手郡宮田町千石峡の实地調査

三郡山地の源から北東に流下し、力丸ダムをへて、宮田町生見で犬鳴川に合流する八木山川の下流部に、千石峡がある。ここはちょうど、宮田町と南側の飯塚市との境界にある笠置山の北麓にあたる。

笠置山地域は、立岩遺跡付近で加工された石包丁の原石となった“輝緑凝灰岩”の産地としてよく知られているように、白亜紀の脇野亜層群の標準分布域であり、赤紫色や緑灰色を呈する凝灰岩が特徴的に見られる。この地域の南西側の三郡山地には、青緑色の角閃岩を多くともなう三郡変成岩が分布している。

したがって、これらの地域を侵食して流れる八木山川の川原には、凝灰岩や青緑色変成岩をふくむさまざまな岩石の礫が運ばれてきているものと期待される。力丸ダムより下流の八木山川の礫を調べた。

肉眼的に玉原石に類似した岩石として、赤紫色の粘板岩質凝灰岩や灰青色の縞状角閃岩などを採集し、偏光顕微鏡で観察した。しかし、期待に反して玉原石とは別種類の岩石であることがわかった。

第408・409図偏光顕微鏡写真の説明

スケール：写真1・7のスケールは写真1～7に共通、写真9のスケールは写真8～12に共通。

写真1・2：蛇紋岩No.1。それぞれ平行ニコルと十字ニコル

平行・十字ニコル下で、ともに黒色に見え、大小の粒子状のものが磁鉄鉱である。そのほかの部分構成する蛇紋岩は、平行ニコルでは無色で、結晶は判別しがたいが、十字ニコル下では、干渉色の違いによって、葉状結晶の集合であることがわかる。

写真3・4：蛇紋岩No.2。それぞれ、平行ニコルと十字ニコル

磁鉄鉱が大形で密集している部分には、緑泥石(c)がともなう傾向がある。緑泥石は、ほとんど無色で蛇紋石と区別しがたいが、屈折率がより高く、複屈折が小さく干渉色がより暗い。

写真5・6：蛇紋岩No.3。それぞれ平行ニコルと十字ニコル。

磁鉄鉱をふくまず、形態の異なる蛇紋石のみからなる。一つは、アランダムに向いた葉状のもの、他は平行配列した、細長い葉状～針状のものである。後者は前者を横切り、後期に形成したことを示唆している。

写真7：蛇紋岩No.4。平行ニコル。

数珠状に連なった磁鉄鉱粒が、網目状に分布する。

写真8：蛇紋岩No.5。平行ニコル。

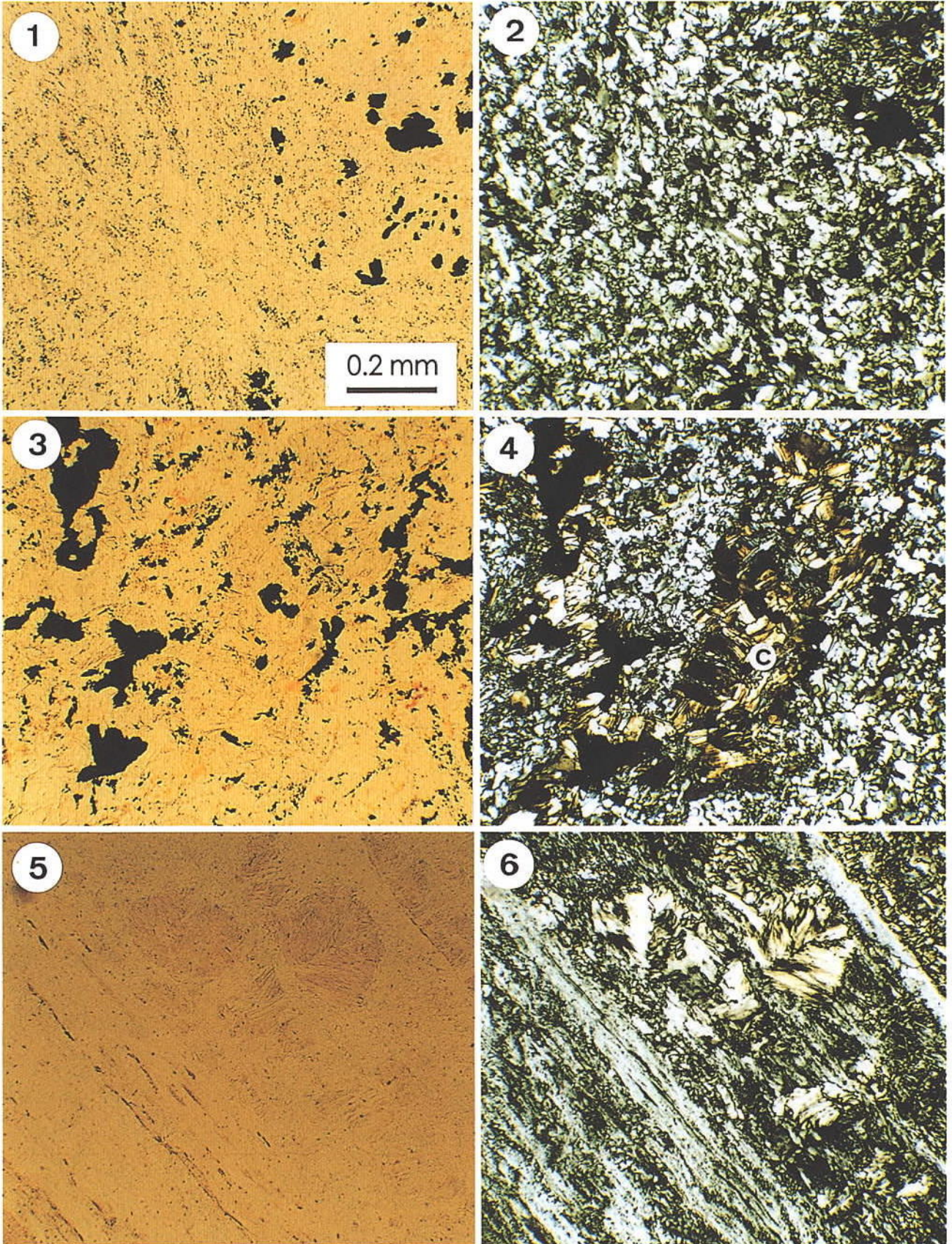
磁鉄鉱が集合して不規則な形態をなす。

写真9・10：蛇紋岩No.6。それぞれ、平行ニコルと十字ニコル。

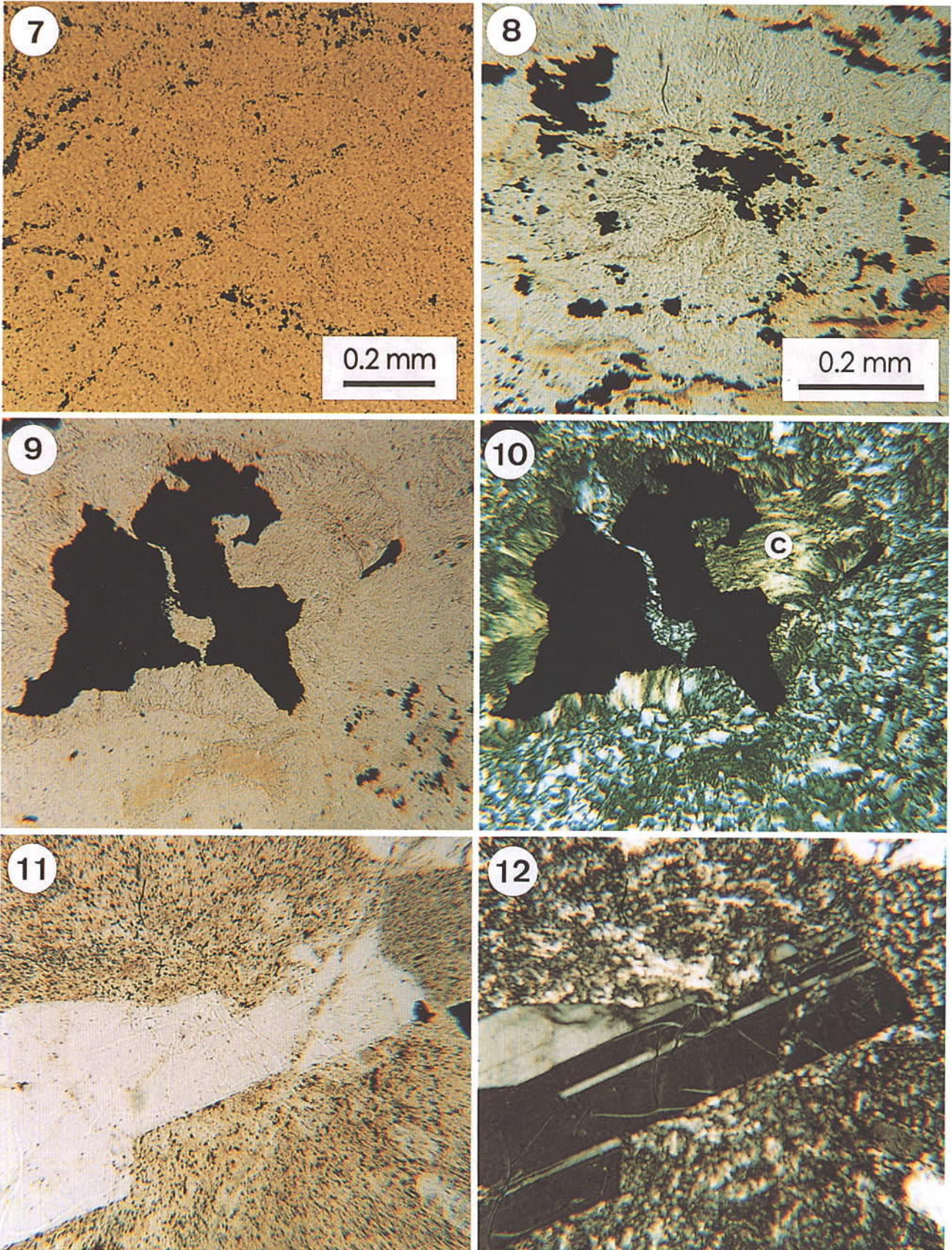
磁鉄鉱の不定形集合体に緑泥石(c)がよくともなう。

写真11・12：赤鉄鉱化作用を受けた変質安山岩No.7。それぞれ、平行ニコル、十字ニコル。

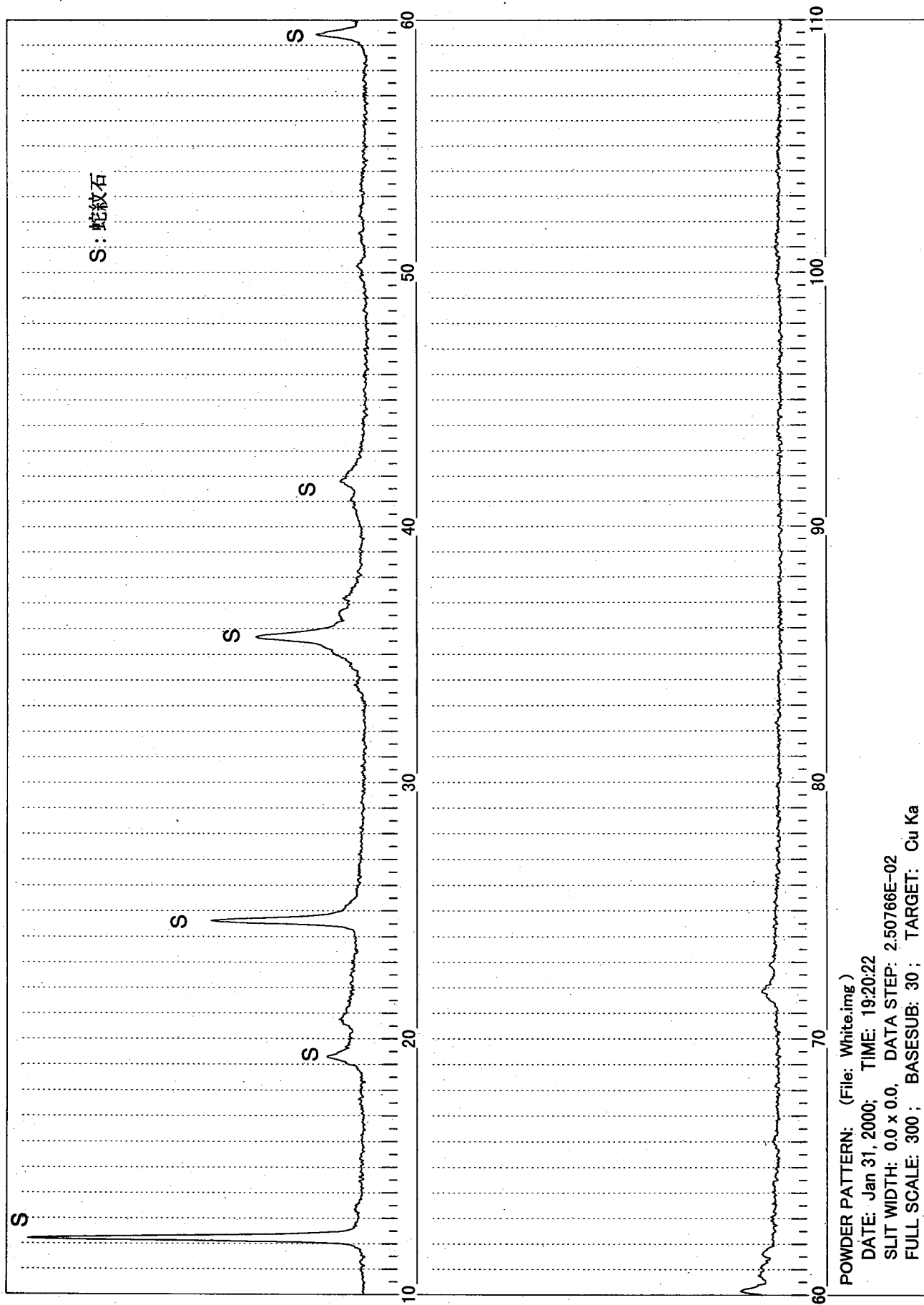
写真11で、細かい赤鉄鉱と磁鉄鉱の粒子が散在する部分は石基、角張って白色の部分は斜長石の斑晶である。十字ニコル下では、白黒の縞が見え、双晶していることがわかる。



第 408 図 玉原石の偏光顕微鏡写真 (1)

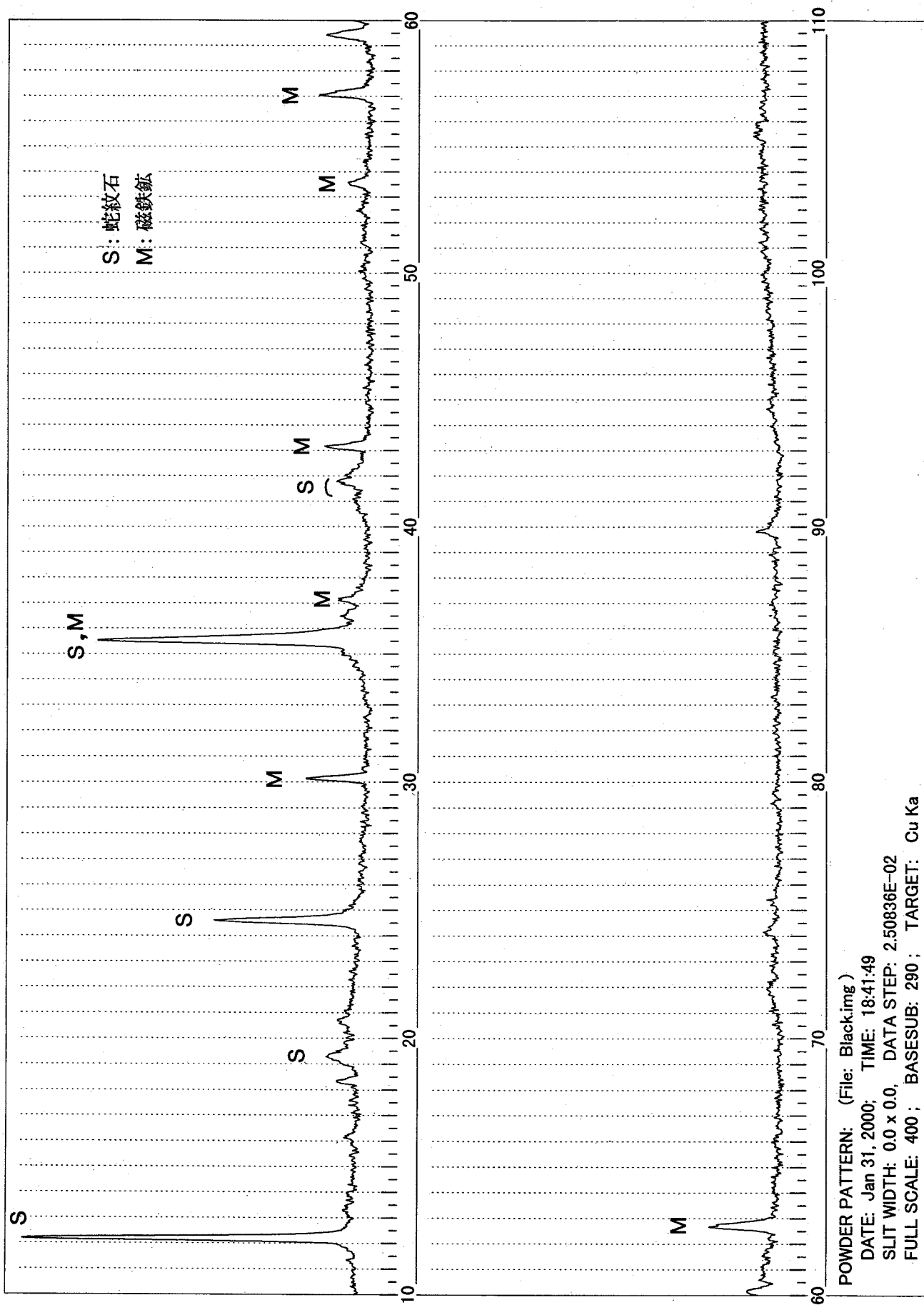


第 409 図 玉原石の偏光顕微鏡写真 (2)



100

第410図 蛇紋岩・淡色部のX線回折パターン



第411図 蛇紋岩・黒色部のX線回析パターン

第5章 考察

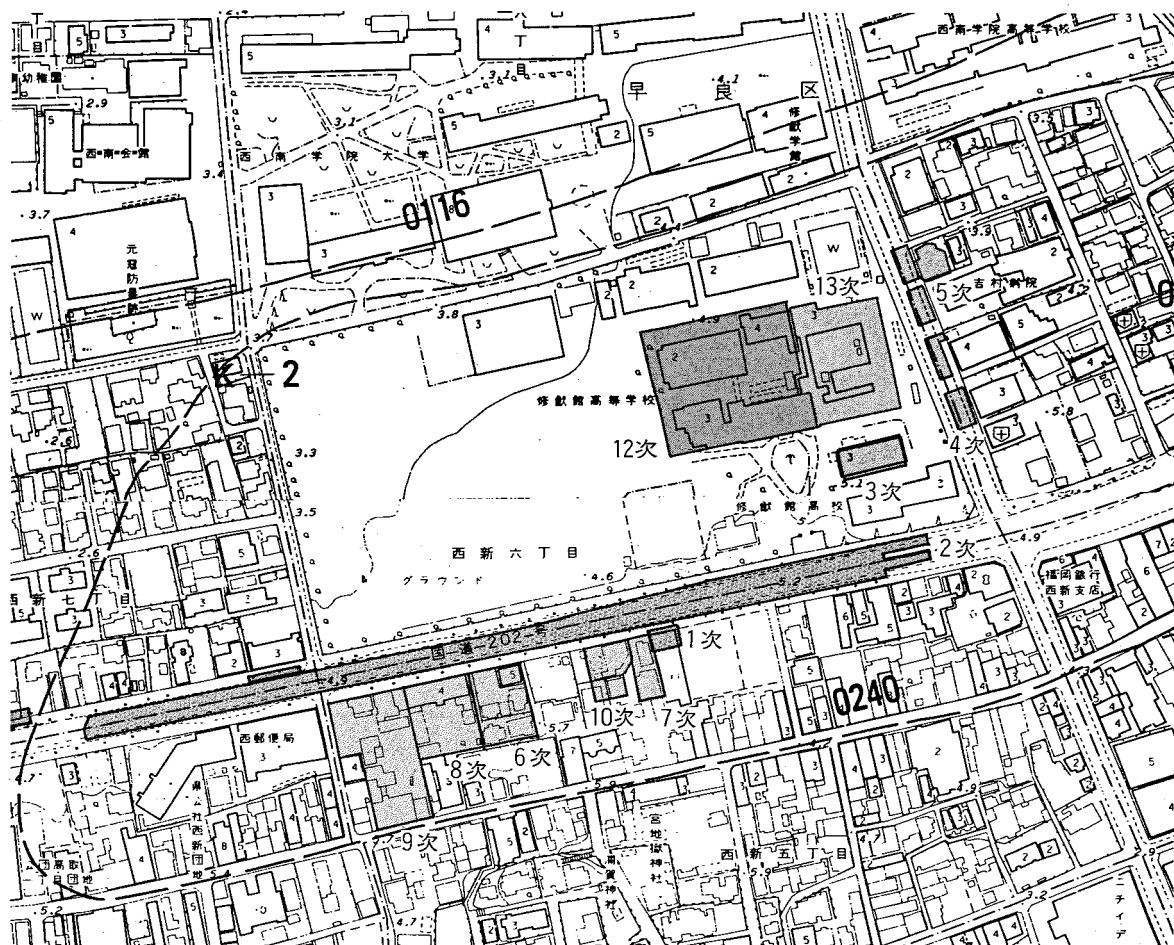
第1節 西新町遺跡における古墳時代集落の展開に関する予察

1. はじめに

西新町遺跡第12次の調査では158棟の竪穴住居跡を検出し、これまで12度にわたる西新町遺跡の調査を通じて、検出された竪穴住居跡の数は250棟を超えることとなった。遺跡の範囲は東西800m、南北300mにおよび、玄界灘沿岸域の古墳時代集落の中でも最大級の規模と言える〔池崎他1982、柳田・赤司1985、松村1989、長家1984、常松1996、加藤1996、加藤1997〕(第412図)。

修猷館高校改築に伴う発掘調査は平成12年度に12次調査区東隣接地で13次調査が実施され、やはり多数の竪穴住居跡が検出されており、平成13年度にも12次調査地の南に隣接する部分で行われる予定である。したがって、集落展開の本格的な考察は修猷館高校改築事業全体の報告書終了後に行なうのが適当であるとの認識をもっている。

ただ、12次調査はこれまでの西新町遺跡に対する最大面積の調査であり、なおかつ遺跡の中心部分に位置していることを考えると、今後の調査、報告書作成における検討課題を抽出するために時期尚早であっても、その展開を整理しておく必要があると思われる。そこで、ここでは土器編年について若干の検討を加え、その結果に基づいて12次調査検出遺構の時期比定を行ない、集落の展開について予察することにした。



第412図 西新町遺跡の範囲と調査位置 (1/4,000)

2. 土器編年に関する若干の整理

編年の基準器種の抽出 西新町遺跡12次調査で検出した遺構は古墳時代の土師器である布留式ないしは布留系土器を主体とする時期と言える。従来、北部九州の古墳時代初頭前後の土器編年においては在来系土器の変遷と外来系土器との共伴関係を基準に、弥生時代終末の在来系土器を主体とする段階から、古墳時代に入り畿内系を主体とする外来系土器の卓越する段階への変遷を重視する視点が主体であった〔武末1978、柳田1982、田崎1983、溝口1989など〕。このような視点は北部九州における古墳時代の開始とその当時の文化・社会の変化を明らかにする上で大きな成果があったが、12次調査の各遺構は布留式、布留系土器を主体とするので、ここで目的とする各遺構の時期比定には適用が難しい。

西新町遺跡に対しては2次調査の結果に基づき常松幹雄・折尾学氏〔1982〕によって出土土器の編年がすでに実施されている。ただ、2次調査区は在来系土器から外来系土器への転換期にあたる遺構が多く、12次調査出土土器と比較すると先行する時期のものが中心になる。したがって、そのままここでの時期区分には使用できないが、12次調査遺構との関係を後述することにしたい。

このほかに布留式・布留系甕の変遷も重視する見解があると思われるが、古墳時代前期を通じて甕は堅著な形態的变化があまりなく、久住氏〔1999；107-10〕の指摘するように口縁部断面形態、口縁端部形態、内面のヘラケズリなど調整技法の微細な属性でしか変化をたどれないと思われる。また、西新町遺跡および周辺地域の同時代遺跡における良好な一括遺物を見るとこれら微細な属性はバリエーションが大きいので、小変異の頻度の変化にのみ時間的な変遷が現れていると推測される。そのため、やはりここでの各遺構の時期比定には有効な指標とはなりえない。

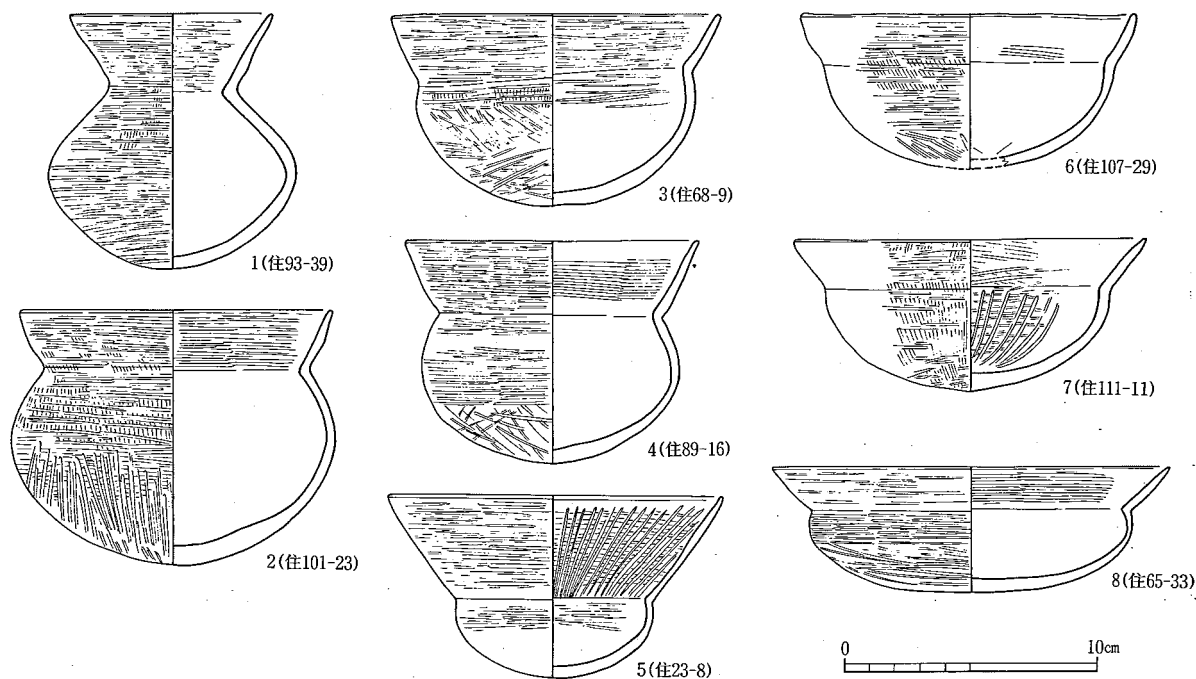
これに対して、小形精製器種である小形丸底壺、外反口縁鉢は古墳時代前期の土師器の指標となる器種の一つであり、精製土器の展開という点で古墳時代前期をとおして、変化をたどることができる器種である。また、形態的に変化が大きく、すでに寺沢薫氏〔1986；351-2〕、久住猛男氏〔1999；106-7〕によって、説得力の高い型式変化の説明も行われている。そこで、ここではこれらの業績を参考にしながら、小形丸底壺、外反口縁鉢を中心に土器の編年を考えてみたい。

小形丸底壺・外反口縁鉢の型式変化 古墳時代前期～中期前半にかけて盛行する小形丸底壺は、古墳時代前期においては器壁が薄く、外面をミガキで仕上げ、化粧土を塗布した精製品を主体とし、小形精製器台、小形精製二重口縁鉢とともに小形精製三器種を構成している。古墳時代前期の小形丸底壺のこれらの特徴は弥生時代後期終末以前、古墳時代中期前半の小形壺には見られないものである。西新町遺跡12次調査においても、若干のハケメ仕上げの粗製品を含みながら精製品が多数を占めており、これらが古墳時代前期を中心としたものであることは明らかである。

さて、上述した久住猛男氏の研究によれば小形丸底壺は、典型的な布留式と平行する時期においては、外反口縁鉢との器種分化が明確になるとともに、口縁部が伸長し、胴高を凌駕する方向に変化するとされている。

そこでここでは器高10cm以下の小形丸底壺について

- 1式 口径が胴部最大径より小さく、口縁の伸びが長く、胴高の $1/2$ 以上の口縁部高（第413図1）。
- 2式 口径が胴部最大径より小さく、口縁の伸びが小さく、胴高の $1/2$ 以下（第413図2）。
- 3式 口径が胴部最大径より大きく、口縁の伸びが小さく、胴高の $1/2$ 以下（第413図3）。



第413図 西新町12次出土小形丸底壺・外反口縁鉢の型式分類（1 / 3）

4式 口径が胴部最大径より大きく、口縁の伸び長くなるが、胴高程には至らないもの（第413図4）。

5式 口径が胴部最大径より大きく、口縁高が胴高より大きくなるもの（第413図5）。
のように型式を設定し、この順に変遷したと考えておきたい。

口縁が断面「く」の字に外反する鉢は、弥生時代後期終末以前には若干量の大形品が見られるが、いずれも粗製品である。これに対して古墳時代初頭の北部九州では、口径20cm以下の小形丸底鉢が外来系土器の流入とともに増加する。これらの外反口縁鉢は粗製のものもあるが、小形丸底壺と同様の特徴をもつ精製品が多数を占めている。一方、古墳時代中期前半になると早良平野を含む北部九州一円で精製のものはもちろん、外反口縁の形態をなす鉢自体がほとんど消滅している。

外反口縁鉢は深い胴部に短く直に近い角度で立ち上がる口縁がつくものから、浅く広がった胴部に大きく開き、長くのびた口縁がつくものへの変異が看取できる。後者は小形精製二重口縁鉢の出現に影響を受けた可能性〔久住1999；107〕もあるが、上述した小形丸底壺との形態差がより広がる方向へ、すなわち器種分化の方向への時間的変化として理解できるだろう。そこで、口径35cm以下の外反口縁鉢について、この

表3 西新町遺跡12次調査における小形丸底壺・外反口縁鉢の共伴

	壺1	壺2	壺3	壺4	壺5	鉢1	鉢2	鉢3
西新町12次住93	○					○	○	
住138		○				○		
住109		○		○		○	○	
住125		○					○	
住105			○			○		
住140			○			○	○	
住116		○	○			○	○	
住142		○	○				○	
住100			○				○	
住64				○			○	
住80				○			○	
住6				○			○	
住101		○	○				○	○
住128		○		○			○	○
住9				○			○	○
住81			○	○			○	○
住96				○			○	○
住63				○			○	○
住36				○			○	○
住65				○			○	○
住82				○			○	○
住98				○			○	○
住154				○			○	○
住4				○	○		○	○
住133					○		○	○
住139		○	○	○	○		○	○
住121							○	○
住150					○		○	○
住97		○	○		○		○	○
住21				○	○	○	○	○
住30					○	○	○	○

ような器形の変化から

1式 口径が胴部最大径と大差なく、直に近い角度で立ち上がり、口縁の短いもの、口縁の内湾気味のものが多い(第413図6)

2式 口縁が外傾し伸びるが、口縁高は胴高の1/2以下のものより小さいもの(第413図7)。

3式 口縁が外傾し伸びるが、口縁高は胴高の1/2以上のもの(第413図8)

のように型式を設定することにしたい。なお、1式は恐らく畿内の庄内式に系譜が求められると考えられる。

遺構における共伴関係 西新町遺跡12次調査における各遺構において、上述した小形丸底壺、外反口縁鉢の型式がどのように共伴しているかを調べ、型式変遷順に配列したのが表3である。これによれば鉢1式は壺2・3式と共伴することが多い一方で、壺の最新型式の5式は鉢3式と必ず共伴しており、時間的変遷の想定をある程度、検証できたと言えるだろう。ただ、小形丸底壺5式、外反口縁鉢3式が共伴する139・97号竪穴住居跡では、時期がややさかのぼると推測される小形丸底壺2・3式も出土している。また、109号竪穴住居跡では壺2式、鉢1式が共伴しているにもかかわらず、やや時期の降る小形丸底壺4式も出土している。このような共伴関係は、多少の重複期間をもちながら前後する型式が変遷した可能性、あるいは12次調査における遺構切合い、平面形把握の誤りなどの問題が影響した恐れがある。

特に後者の発掘調査の精度に関する不安を解消するためには、他遺跡における小形丸底壺、外反口縁鉢の共伴を確認する必要があるだろう。そこで、12次調査以外の西新町遺跡での検出遺構を含む、福岡平野～早良平野における布留式・布留系土器を主体とする古墳時代前期以前の良好な一括遺物における小形丸底壺・外反口縁鉢の共伴関係を示したのが表4である。

これによると西新町遺跡12次調査と同様に、小形丸底壺2式と外反口縁鉢1式、小形丸底壺5式と外反口縁鉢3式の共伴が確かめられる。また、小形丸底壺1～5式、鉢1～3式が一定の重複期間をもちながらも変遷したことがよく現れている。したがって、上述の型式変遷はほぼ妥当と考えられる。また、そうとすれば西新町遺跡12次の遺構に見られる壺4式と鉢2・3式との共伴関係(表3の住64～154の間)も、一定の時期を占めるものと解釈できよう。

以上から、西新町遺跡12次調査の竪穴住居跡は小形丸底壺1～3式と外反口縁鉢1式、小形丸底壺4式と外反口縁鉢2・3式、小形丸底壺5式と外反口縁鉢3式がそれぞれ共伴関係にある3時期に区分したいと思う。なお、小形丸底壺1～3式－外反口縁鉢1式の時期は布留式系の土器が主体でありながら在地系土器、庄内系土器が若干量、共伴しているのに対して、小形丸底壺4式－外反

口縁鉢2・3式、小形丸底壺5式－外反口縁鉢3式の時期には混入と思われる例を除いて、これらの共伴例が少ない傾向が指摘できる。

時期区分 さて、西新町遺跡12次調査では小形丸底壺1～3式－外反口縁鉢1式の時期が最古期であるが、2次調査などでは

表4 早良平野・福岡平野の遺跡における小形丸底壺・外反口縁鉢の共伴

	壺1	壺2	壺3	壺4	壺5	鉢1	鉢2	鉢3	文献
西新町2次D区住11	○					○			池崎他編1882
博多45次SK4031		○				○			田崎編1991
堅粕8次63号遺構		○				○			大庭1999
清末3次SC0003		○				○			濱石編1995
西新町3次SC39		○				○			松村1989
岩本2次SC0507		○					○		濱石他編1993
西新町2次D区住8		○				○	○	○	池崎他編1982
博多4次945号遺構			○	○			○		大庭編1991
東入部1次SC205				○	○		○	○	榎本編1998
西新町5次SC06				○	○		○	○	長家編1994
西新町4次SC31					○	○	○	○	松村1989
有田・小田部35次住6					○		○	○	井澤編1988
清末3次SC0007					○		○	○	濱石編1995

これら小形丸底壺、外反口縁鉢を伴わずに布留系、山陰系などの外来系土器がかなりの量を占める遺構が検出されている。2次調査D地区1号、11号竪穴住居跡などがそうであり、常松氏編年の西新町3式の一部にあたる。布留式出現以降を古墳時代とするならばこれらを古墳時代初頭と考えることができ、西新町3式前半としたい。小形丸底壺1～3式-外反口縁鉢1式を伴う時期は常松氏編年にあわせると西新町3式後半となる。

また、これに後続する小形丸底壺4式-外反口縁鉢2・3式、小形丸底壺5式-外反口縁鉢3式の時期は常松氏・折尾氏編年の西新町4式に相当することになる。常松氏・折尾氏編年の提唱段階では西新町遺跡におけるこの時期の良好な遺構調査例がなかったため、若干、構成される土器の型式は異なるが、以下では小形丸底壺4式-外反口縁鉢2・3式の時期を西新町4式前半、小形丸底壺5式-外反口縁鉢3式の時期を西新町4式後半とすることにしたい。

なお、西新町4式後半は古墳時代中期初頭の土師器に先行する時期である。あるいは西新町4式後半と古墳時代中期初頭の間にもう1時期設定できるかもしれないが、ひとまずは西新町遺跡における古墳時代前期の土師器は3式前半、3式後半、4式前半、4式後半の4段階に分かれることになる。なお、柳田氏の編年〔1982〕、久住氏の編年〔1999〕と対照すれば西新町3式前半は柳田氏のI a期、久住氏I B～II A期、西新町3式後半は柳田氏I b期、久住氏II A～II B期、西新町4式前半は柳田氏II a期の一部、久住氏II C期、4式後半は柳田氏II a～II b期、久住氏III A期に相当しよう。

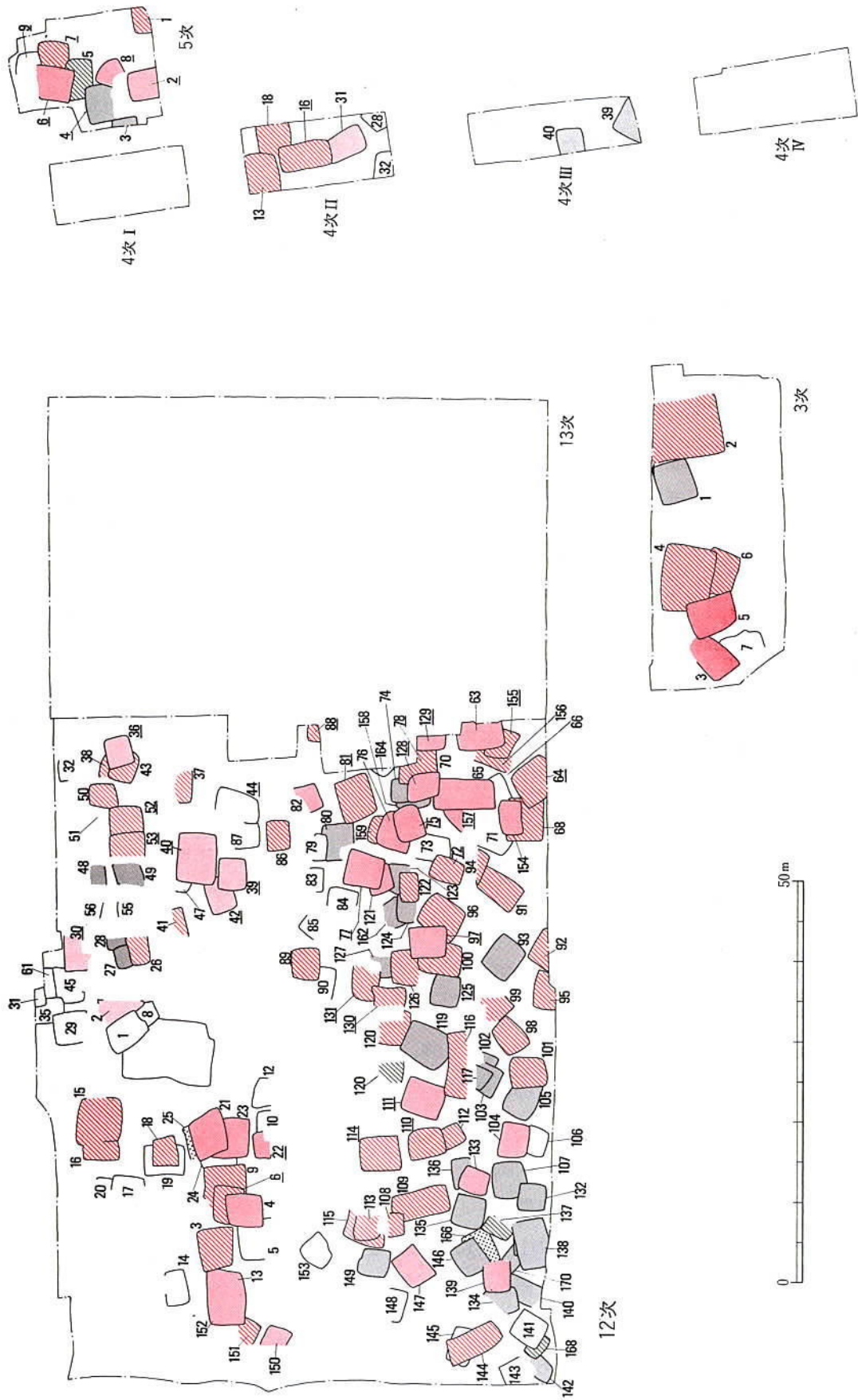
3. 西新町遺跡における弥生時代終末～古墳時代前期集落の変遷

前項で常松氏・折尾氏の編年に若干の改変を加えて時期区分を設定したが、これにもとづいて12次調査区を含む西新町遺跡の既往の発掘調査により検出された竪穴住居跡の時期比定を行ない、時期ごとに網の調子、色を変えて表示したのが図163・164である。時期比定は出土土器とともに、出土土器が少ない場合は切合い関係も考慮して行なった。出土土器、切合いでも決定できない場合は不明としている。なお図414・415は相対的な位置関係は考慮しているが、調査区間の距離、方向は厳密にあわせてはいないので注意されたい。

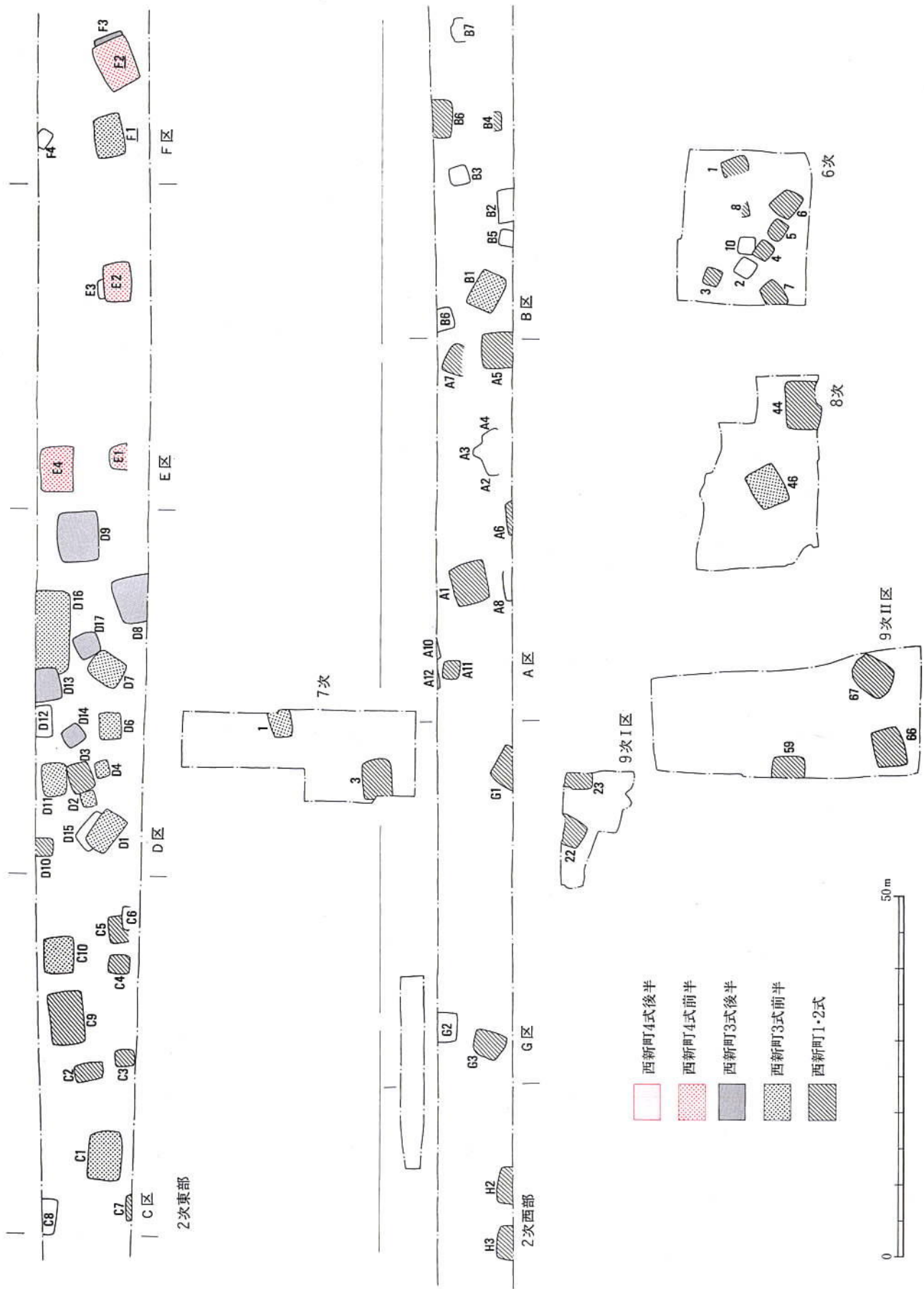
図によると、弥生時代終末にあたる西新町1・2式の竪穴住居跡は2次調査区の西半、6～9次調査区で検出例が多い。5次調査9号竪穴住居跡、12次調査25・166号竪穴住居跡はこれらと離れて分布しているが、当該期の竪穴住居跡は遺跡の西南部に集中し、集中区は修猷館高校グラウンド西南部にかかると考えて良いだろう。

続く西新町3式前半になると6～9次調査区での検出例が少なくなり、2次調査区のB・C区で多数、検出されている。この時期の集落の中心は2次調査B・C区から修猷館高校グラウンド東南部にかけてと思われる。12次調査区の118・137・168号竪穴住居跡、5次調査区の5号竪穴住居跡も中心分布域からはずれるが、出土土器から見てこの時期に比定される。

西新町3式後半になると、2次調査区ではD・E区に限定されるようになる。これに対して3～5・12次調査区では多数の検出例があり、集落の中心区域が東北部に移動したことが分かる。12次調査区ではこの時期の竪穴住居跡はほぼ全域に分布するが、特に西南部に多い傾向が看取でき、西南部ではこの時期の住居跡同士の切合いも見られる。この時期になり、西新町遺跡の集落規模の拡大が起こったものと想定される。集落の中心は12次調査区西南部～修猷館高校資料館にかけてと推



第414図 西新町遺跡竪穴住居跡変遷図(1) (1/750)



第415図 西新町遺跡竪穴住居跡変遷図(2) (1/750)

測される。

西新町4式前半に当たる竪穴住居跡は、2次調査区では東端のE・F区に限定されている。一方、3～5・12次調査区では3式後半より引き続いて多数の住居跡が検出されている。

西新町4式後半になると2次調査区での例がなくなり、3～5・12次調査区に限定されている。12次調査区ではこの時期の竪穴住居跡は調査区の全域にほぼ分布するが、特に東北部に多い傾向が看取できよう。4式前半～後半の集落の中心はちょうど修猷館高校校舎がある部分にあたと推測されるだろう。

以上のようなことから、西新町遺跡の集落はおおよそ西南から東北の方向へその中心を移動していったものと考えられる。このような集落の移動は遺跡の立地する砂丘の形成、発達と関連するものとも考えられる。しがたって、集落の変遷については古砂丘に対する自然地理学的な観点からの検証が今後、必要となってくるであろう。

4. 西新町遺跡における古墳時代集落の展開に関する二、三の問題について

冒頭でも述べたように西新町遺跡は玄界灘沿岸でも屈指の規模の古墳時代集落であるが、まず、その集落にどれだけの人口が居住していたかが大きな問題となろう。これについて竪穴住居跡の切合いが少ない集落の最終末期である4式後半の竪穴住居跡の状況から考えてみたい。

12次調査区では4式後半の竪穴住居跡は、現状では4・13・150号竪穴住居跡、21・22・23号竪穴住居跡、30号竪穴住居跡、36号竪穴住居跡、39・40・42号竪穴住居跡、63・65・75～77・97・121・128・129・154・157号竪穴住居跡、104・111・133・139・147号竪穴住居跡の7群に大きく分かれるようである。これだけで少なくとも同時期に7～10棟前後の竪穴住居跡が共存していた可能性が考えられる。また、攪乱が多いため失われた同時期の竪穴住居跡群もあると推定されるので、12次調査区だけで10～15棟くらいとなろう。3～5次調査区では3～4群が推定される。このほかに13次調査区や発掘の及んでいない場所での同時期の住居跡の存在を想定して考えると、全体で竪穴住居20～30棟程の竪穴住居跡の数になるだろう。

仮に竪穴住居1棟に平均4人が居住したとすれば、100人前後の集落と推測される。さらに、4期後半は西新町遺跡の衰退期と捉えてよいので、全盛期にはこれを上回る人口であったと考えたほうがよいであろう。

この西新町遺跡に対しては主として第2次調査の成果を中心に、すでに集落構成に検討を加えた研究が発表されている。田崎博之氏〔1983；238－9〕は2次調査検出の竪穴住居跡について、時期が下るにつれて集落が東へと拡大するとともに、古墳時代初頭前後には2次調査C地区を境に東西2つの集団に分かれ、東の集団に外来系土器が偏るとしている。溝口孝司氏〔1989；109〕はやはり同時期において在地系土器を主体とする竪穴住居跡と外来系土器を主体とする竪穴住居跡があり、その分布が分かると述べ、そこから、同時期の集落において移入者集団と在地集団が混在していたと推測している。

このような第2次調査における東西の土器相の差について、特に問題となったのは古墳時代初頭、すなわち西新町2式～3式にかけての時期である。3～5・12次調査の結果からすれば、西新町4式までは在地系土器が残存しないので、土器相の差はそれほど顕著ではない。前項で述べた集落の変遷が正しいと考えるならば、このような異なる土器相の共存は少なくとも在地系を主体とする時

期から外来系を主体とする時期への転換期に限られた現象にとどまると解釈できるだろう。あるいは極めて短期間に起こった急激な変化を共時的な関係と捉えた恐れもある。

また、武末純一氏〔1996；607－8〕はカマド付竪穴住居跡、半島系土器の分布に特に注目し、これらが遺跡の中で新しい時期の竪穴住居跡に多い傾向を指摘しつつ、遺跡の東部に集中することから遺跡東西での集団の違いを反映したものと推測している。カマド付竪穴住居跡（第414・415図の住居番号下線のもの）は2次調査ではF 2、F 3竪穴住居跡がそうであるが、これらを除けば4・5・12次調査区に集中し、12次調査区のみを取り上げても、特に東半分が多い傾向が指摘できる。カマドの時期は2次調査区F 1号竪穴住居跡、5次調査区9号竪穴住居跡が西新町3式前半以前に比定できるが、他は3式後半以降であり、特に4式後半の例が多い。12次調査区においては4式後半になるとかなり高い割合でカマドを設置しているが、カマドを設置しないことがほぼ確実な4・13・21・23・104・133・139・147号竪穴住居跡はいずれも調査区に西側に分布している。このような傾向は武末氏の指摘を裏付ける結果と言えよう。

ただ、武末氏も指摘するように、カマド付竪穴住居跡から半島系の土器が必ず出土するわけではなく、逆に炉を持つ竪穴住居跡から半島系土器が出土することもある。カマド廃絶時に儀礼的な行為の結果として意図的に配置された土器を除けば、土器は直接、住居に伴うものが極めて少ないことも影響しよう。したがって、カマド付竪穴住居に生活した集団の問題は武末氏の論じるような出土陶質土器の系譜や、12次調査などで検出された良好な遺存状態をとどめるカマド構造の詳細な比較と、遺跡内の住居跡の群構成との関係などを考慮する必要があると思われる。

なお、武末氏の述べるとおり西新町遺跡で最古のカマド例は5次調査の9号竪穴住居跡となり、西新町2式、すなわち弥生時代終末に比定できよう。この5次調査9号竪穴住居跡は現状では、弥生時代終末の集落域からかなり離れた場所に位置しており、異質である。また、西新町3式後半の集落は、上述のように12次調査区の南半に中心があると想定されたが、5次調査では数棟まとまって分布している。武末氏〔2000〕は12次調査区は全羅道系、4・5次調査区では伽耶系と半島系土器の系譜の分かれることに注意し、カマドを構築した集団も複数であったとの想定を行なっている。このようなことを考えると5次調査区周辺に弥生時代終末以来、やや集落内では性格の異なる集団が居住していた可能性がある。また、遺跡の範囲も5次調査より東にさらに広がるのではないだろうか。これについては5次調査に隣接する13次調査の成果が公表されれば、さらに検討が可能になるであろう。

5. おわりに

本稿を予察としたとおり、修猷館高校改築に伴う西新町遺跡の調査は今後も継続する予定であり、集落の展開に関する本格的な研究はその報告書刊行以降に進展するものと思われる。土師器編年についても、ここでは小形丸底壺、外反口縁鉢の変遷に立脚したが、在地系土器、土師器の各器種を総合した編年を適用するならば、ここで示した竪穴住居跡の時期比定に対して修正を加える必要があると思われる。また、カマドの構造、細かな遺構の切合いから見た集落の展開なども問題となるところであろう。

このように本稿は多くの不備があると考えているので、諸賢の御批判を仰ぎつつ、調査が一段落した後に再度、この問題に取り組むことができたらと考えている。

参考文献

- 池崎讓二・田崎博之・常松幹雄・田中克子・折尾学編 1982 『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告・西新町遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第179集（2次調査）
- 井澤 洋一編1988 『有田・小田部』第9集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集
- 榎本 義嗣編1998 『入部』8 福岡市埋蔵文化財調査報告書第575集
- 大庭 康時 1991 『博多』21 福岡市埋蔵文化財調査報告書第249集
- 大庭 康時 1999 『堅粕』3 福岡市埋蔵文化財調査報告書第590集
- 加藤 良彦 1997 『西新町遺跡』6 福岡市埋蔵文化財調査報告書第505集（9次調査）
- 加藤 良彦 1996 『西新町遺跡』5 福岡市埋蔵文化財調査報告書第484集（8次調査）
- 久住 猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』19 pp.62-143
- 武末 純一 1978 「早良平野の古式土師器」『古文化談叢』第5集 pp.37-62
- 武末 純一 1996 「西新町遺跡の竈」『碩悟尹容鎮教授停年退任記念論叢』pp.599-615
- 武末 純一 2000 「北部九州の百済系土器-4・5世紀を中心に-」
『福岡大学総合研究所所報』第240号（総合科学編第3号） pp.99-114
- 田崎 博之 1983 「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』第120輯 pp.219-261
- 田崎 博之編1991 『博多』20 福岡市埋蔵文化財調査報告書第248集
- 常松 幹雄 1996 『西新町遺跡』4 福岡市埋蔵文化財調査報告書第483集（6・7次調査）
- 常松幹雄・折尾学 1982 「第4章 結語」池崎讓二・田崎博之・常松幹雄・田中克子・折尾学編
『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告2 西新町遺跡』福岡市文化財調査報告書第79集
pp.173-92
- 寺沢 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」
寺沢薫編『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 pp.327-97
- 長家 伸編 1994 『西新町遺跡』3 福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集（5次調査）
- 濱石 哲也編1995 『入部』5 福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集
- 濱石哲也・榎本義嗣編 1993 『入部』4 福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集
- 松村 道博 1989 『西新町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第203集（4次調査）
- 溝口 孝司 1989 「古墳出現前後の土器相-筑前地方を素材として-」『考古学研究』第35巻第2号 pp.90-118
- 柳田 康雄 1982 「3・4世紀の土器と鏡」
『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会 pp.869-922
- 柳田康雄・赤司善彦 1985 『西新町遺跡』福岡県文化財調査報告書第72集（3次調査）

第2節 西新町遺跡における朝鮮半島系土器について

1. はじめに

西新町遺跡においてはかねてより、古墳時代前期の遺跡としては他に例のほとんど見られない朝鮮半島系土器（以下、半島系土器とする）が集中して出土する遺跡として注目されていた。西新町遺跡における半島系土器は質・量のいずれにおいても同時期の北部九州地域のみならず古墳文化の及ぶ列島全体を見渡してみても、他遺跡を圧倒する感がある。ここでは西新町遺跡のこれまでの調査の中でも特に良好な事例が多い今回の12次調査資料を中心に、半島系土器の時期、系譜について考えてみたい。

2. 西新町遺跡出土の半島系土器の事例とその観察結果

西新町遺跡出土の半島系土器の各資料については、これまで出土遺構ごとに説明を加えたが、ここで各器種ごとに完形もしくは完形に復元される資料等の遺存状況の良好な事例を中心に、主要な器種別にあらためて整理しておきたい。（第416～418図）

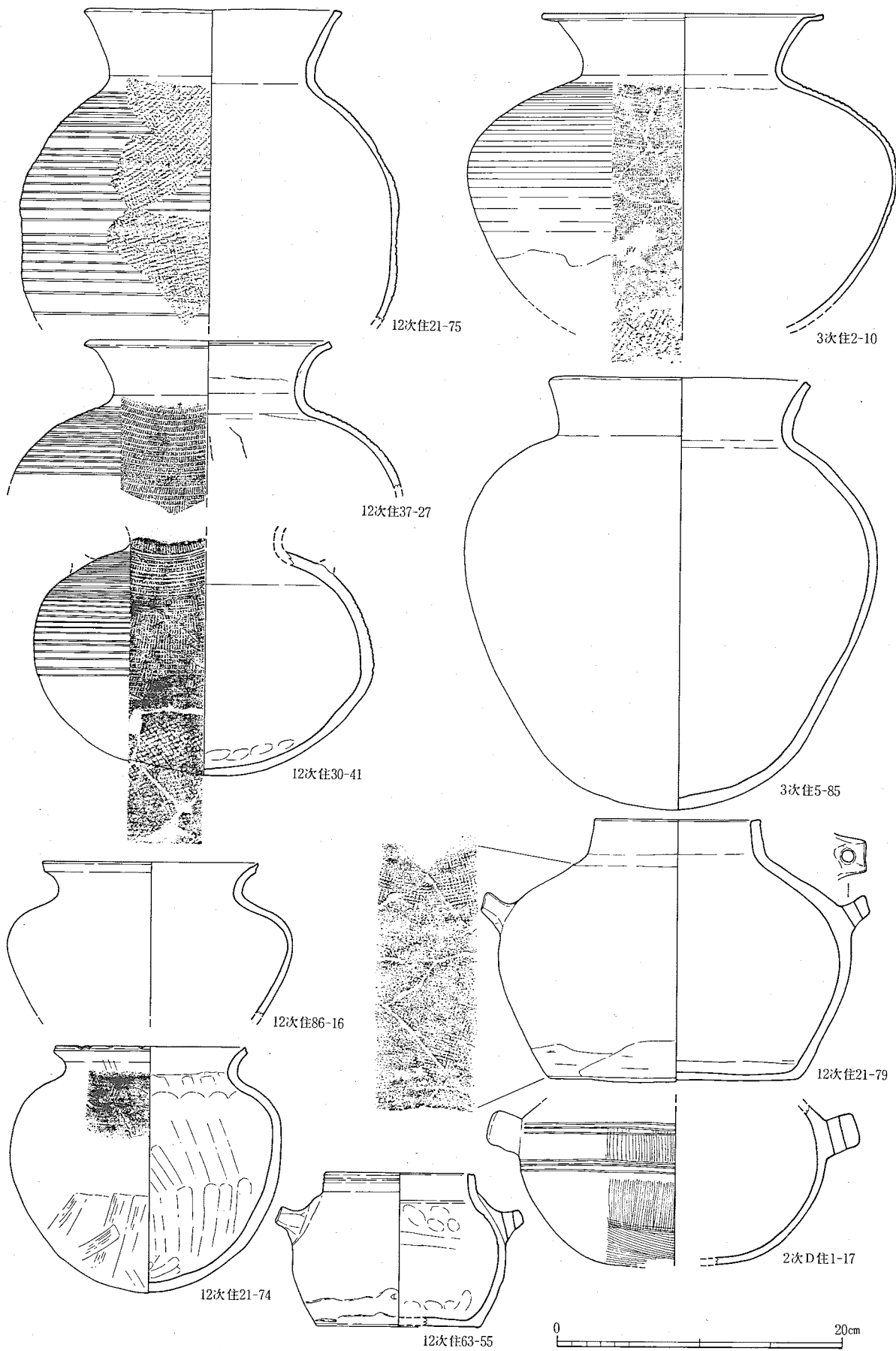
タタキ文短頸壺 12次30号竪穴住居跡41は口縁部を欠損するが、胴部は完形で短頸壺になると思われる。胴部は偏球形を呈し、肩2ヶ所に耳の痕跡が残る。胴部外面は胴上半平行タタキ後、密な沈線、底部はやや粗い格子タタキである。灰色を呈し陶質に含めて良いが、やや軟らかい焼成。12次37号竪穴住居跡27は口縁が強く外反し、胴部は大きく膨らんだ球形を呈すと思われる。密な平行タタキ後沈線を巡らしたもので、灰色を呈し堅緻な陶質焼成。12次2号竪穴住居跡22なども同様の個体となる。12次21号竪穴住居跡75はやや口縁が長く伸びるものであるが、外面に沈線を巡らす点は上述したタタキ文短頸壺と共通するものである。陶質で灰褐色を呈する。図示していない12次97号竪穴住居跡115は器形の復元に不安があるが、大形のタタキ文壺で、平行タタキの後沈線を巡らしている。焼成は瓦質に近く、灰黄褐色～灰白色を呈する。このほか12次調査では縄蓆文タタキ、やや細かい斜格子タタキを施した胴部片が多数出土しており、完形品の点数は少ないが最も数の多い器種と言えるだろう。

3次2号竪穴住居跡10は口縁端を外に屈折させ、上面が凹面をなしている。胴部は細かな平行タタキ後沈線、下部は格子タタキである。焼成は軟質で赤褐色を呈す。図示していないが、3次1号竪穴住居跡1は胴部外面縄蓆文タタキ後沈線で、口縁が特に短い。灰褐色硬質であるが、須恵器に比べやや軟らかいと言う。

5次SC06-124は陶質焼成で、口縁は大きく外反し、球形の胴部をなす。外面は密な格子目タタキを全面に残している。図示しなかった4次SC39-15も密な格子タタキを残し、沈線を巡らしている。やや軟らかい陶質で灰色を呈する。

無文短頸壺 12次21号竪穴住居跡74は球形の胴部を呈し、短く外反する口縁をなす。外面下部に板ナデ、内面にナデ上げあるいは無文当て具痕らしき凹みが残るが、内外とも無文。非常に堅緻に焼成された陶質で灰色を呈す。12次86号竪穴住居跡16は口縁は短く外反し、端部が直立する面をなし、内外無文である。肩の張った胴部をなす点が12次21号竪穴住居跡74と異なるものの、焼成、色調は共通する。

無文大形直口壺 3次5号竪穴住居跡85は瓦質の器高30cmを超えるやや大形の壺で、胴部内外の



第416図 西新町遺跡出土半島系土器 (1) (1/4)

タタキを丁寧にナデ消したもの。12次21号竪穴住居跡74のような無文短頸壺より大形で、タタキ文短頸壺とはタタキの有無のみならず器形も異なるので、別器種とした。灰褐色を呈す。他に3次3号竪穴住居跡45も同様の個体となるか。

両耳付壺 12次21号竪穴住居跡79は外面に細かな格子タタキを施し、黄褐色軟質を呈す。底部は平底をなし、底部近くの胴外面は板ナデあるいはヘラケズリを施す。これよりも小形の例が12次63号竪穴住居跡55である。口縁部が短く、平底をなし、肩部器壁を穿孔して耳を差し込んでいる。褐色軟質であるが焼成は土師器より良好である。

2次D区1号竪穴住居跡17はこれらの個体とは異なり、丸底に近いもの。胴部最大径付近の沈線が特徴的である。

二重口縁壺 12次29号竪穴住居跡2は口縁端部を欠損するものの二重口縁になると思われる。傾きはやや不安であるが球胴を呈し、平行タタキの後、幅広の凹線を巡らす。肩部には三角文を施している。赤褐色を呈し軟質と言えるが、やや堅緻。12次93号竪穴住居跡89は胴部最大径が低く、大きな平底をなす特徴的な器形である。口縁部は外反する1次口縁上に口縁部を接合し、内面接合部には粘土帯を貼付して屈曲を消している。肩部には穿孔のない縦長の耳を貼付している。内外器表は炭素を吸着させたようであり黒灰色を呈し、生地は黄褐色。これと類似する二重口縁壺口縁部片に12次96号竪穴住居跡47があるが、突出部は箍状に粘土を貼付するようであり、接合法が異なる点に注意される。軟質で褐色。

蓋 12次遺構面357は耳付の高杯となる可能性も考えたが、蓋とするのが適当であろう。口縁部外面に穿孔のある耳が貼付されており、器形からして平底両耳付壺あるいは二重口縁壺の蓋と推測される。焼成は軟質で土師器に近く、淡褐色を呈する。

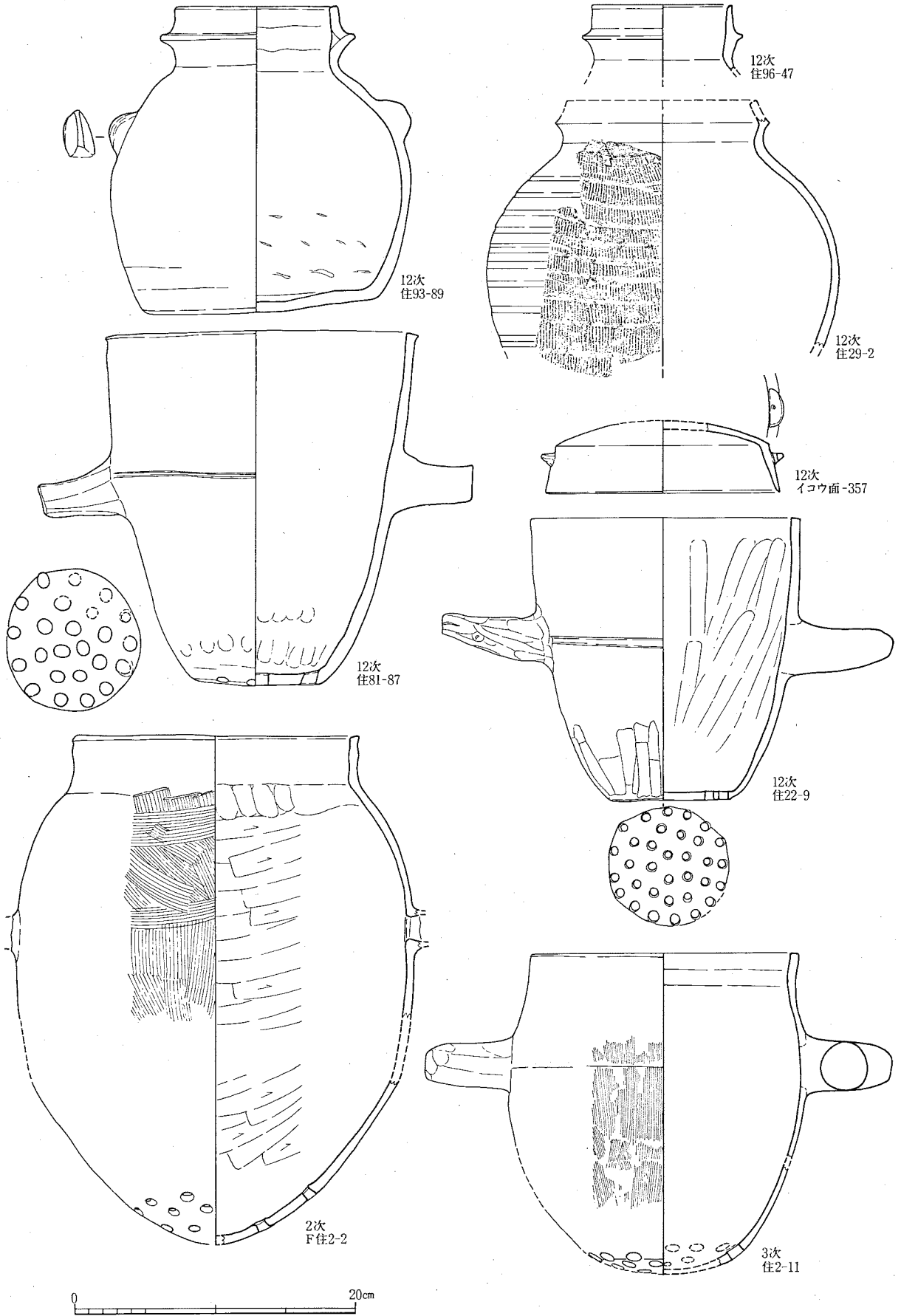
甌 12次22号竪穴住居跡9は直口で平底をなす甌で、底部にはやや不規則ではあるが同心円上に小孔を穿っている。把手の高さの器壁外面に浅い沈線が巡っており、あるいは把手の割付け痕か。黄褐色を呈し、軟質と言えるが焼成はやや堅緻。これと焼成、形態の類似するものに図示しなかった12次89号竪穴住居跡52がある。把手下面には乾燥時に把手が変形するのを防ぐために支えたと思われる棒状工具の小口痕が観察される。12次81号竪穴住居跡87は器形が12次22号竪穴住居跡9に類似するが、焼成は本遺跡出土の土師器とほとんど差が無く、淡黄褐色を呈する。

3次2号竪穴住居跡11は直口で、断面はレンズ状底を呈しているが、一番外周の孔の下に明確な稜が残っているので、12次22号竪穴住居跡9のような平底を意識したものと思われる。外面はハケメ、内面はケズリ後ナデで仕上げ、口縁部に丁寧な横ナデを施しているなど、調整は土師器と共通する。把手部の割り付け痕状沈線や把手下面の棒状工具痕は観察できない。土師器と変らない焼成で、淡黄褐色を呈す。

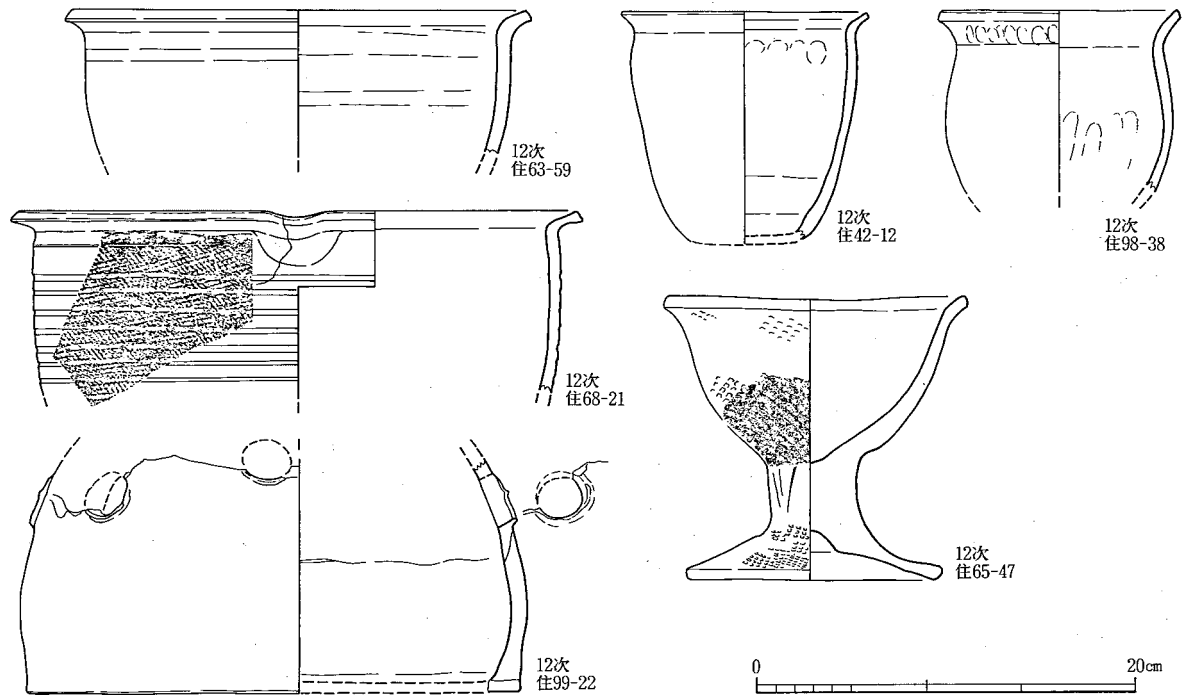
2次F区2号竪穴住居跡2は外面ハケメ、内面ケズリのもの。内傾する肩部から直立して立ち上がる口縁部、尖り気味の丸底が上述の個体と大きく異なっている。

鉢 12次6号竪穴住居跡27はわずかに口縁部が外反し、半球形を呈すると思われる胴部をなす。外面は粗い斜格子タタキ後沈線を巡らし、黄褐色軟質である。12次68号竪穴住居跡21もほぼ同様の器形、調整、色調のものであるが、片口をなしている。12次63号竪穴住居跡59は同様の器形であるが、内外丁寧なナデ仕上げ。淡橙褐色を呈し軟質であるが、土師器よりは良好な焼成。

軟質小形平底鉢 12次42号竪穴住居跡12は小形のバケツ状を呈する器形で、口縁は短く外反する。



第417図 西新町遺跡出土半島系土器 (2) (1/4)



第418図 西新町遺跡出土半島系土器（3）（1／4）

底部は欠損しているが、破損状況から平底をなすと考えられる。内外無文で赤褐色を呈し軟質と言えるがやや土師器より堅緻。12次98号竪穴住居跡38は底部を欠損するものの、やはり軟質小形平底鉢と思われる。口縁部外面ナデ、胴部内面ナデ上げ仕上げ。

高杯 12次65号竪穴住居跡47は深い鉢部にやや高い脚部のついたもの。外面に格子タタキを施している点で土師器とは異質であり、半島系土器と考えた。赤褐色を呈し、軟質で、明らかに在地の土師器とは焼成が異なっている。

その他 その他、注意される器形として、12次99号竪穴住居跡22がある。これは口縁部を欠損するが、平底から半球形に胴部が立ち上がり、肩部に直径3cm弱の焼成前円形穿孔を施した特徴的なものである。全形を知りえないことが残念であるが、土師器中には類例がないという消極的な理由に加えて、大きな平底をなす底部の造作は半島系二重口縁壺、両耳付壺と共通することから、半島系土器の可能性もあると思われる。焼成は土師器に類似し、淡黄褐色を呈す。図示はしていないが12次97号竪穴住居跡134もこれと類似するものか。

3. 西新町遺跡出土半島系土器の時期と系譜

前項でのべた半島系土器について、まず共伴する土師器からその時期を整理しておきたい。表4は第165～167図に図示した資料を含め、これまで報告された西新町遺跡の竪穴住居跡出土半島系土器の一覧表であり、右に各竪穴住居跡の出土土師器による時期比定の結果を示した。

これによると西新町遺跡出土の半島系土器中、最古のものは西新町3式前半の可能性のある2次D区1号住居跡出土両耳付壺であり、西新町3式後半の12次93号竪穴住居跡出土の二重口縁壺、2次D区8・17号竪穴住居跡からそれぞれ出土した軟質甌片、3次1号竪穴住居跡出土の瓦質繩蓆タタキ文壺、5次SC04出土の陶質格子タタキ文壺片がこれに継ぐ時期のものである。これらを除けば大半が西新町4式以降であり、器種も豊富となるので、半島系土器流入のピークは集落の展開の中

でも意外に新しい時期に集中している。なお、集落内の分布を見るとかねてからの指摘のとおり、遺跡の東部に集中しているが、これは半島系土器流入のピークの時期の集落の中心域の位置と符合していると評価できるだろう。また、12次調査区のみを取り上げても、調査区の西側よりは東側に多い傾向が明らかである。

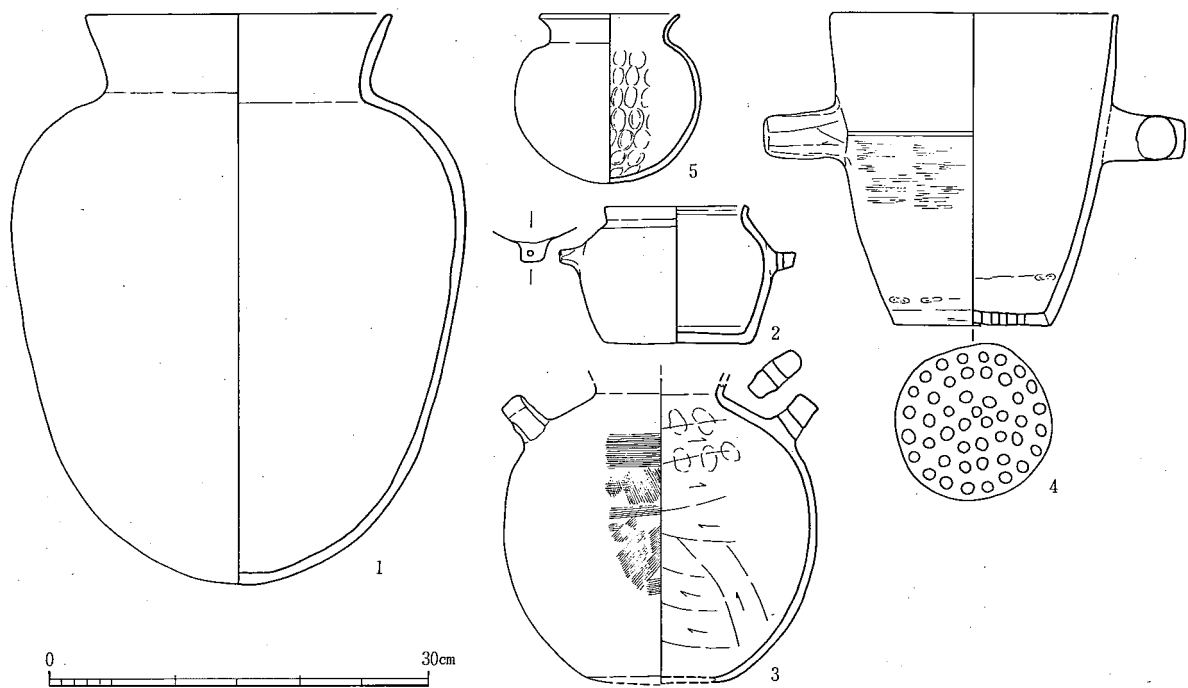
次にこれら半島系土器の類例（第419図）からその時期と系譜について考えてみたいが、もとより筆者は韓国考古学には不案内ではある。そのため韓国考古学におけるこれまでの研究史や近年の議論を系統的に整理して位置づけを行なうことができないので、調査中や報告書作成中に御教示をいただいたことや先学の研究を引用しながら述べてみたい。

タタキ文壺は偏球形の胴部、卵形の胴部の差、タタキ文様、焼成、色調など多様で、出土点数も多いが、十分に地域差、時期差については筆者の理解が十分でない。次に、3次5号竪穴住居跡出土の大形直口壺は武末純一氏〔2000〕により、土器等の物質文化に馬韓の伝統が根強く残るとされる全羅道地域を含めた百済系との指摘がすでになされている。具体的にどのような資料を指すか不明であるが、全北扶安竹幕洞遺跡出土土器〔国立全州博物館1994、p.88〕に形態、色調等が類似している（第419図1）。この土器については4世紀代に比定する見解があり〔兪炳夏1998；図6〕、時期的にも符合する。

耳付壺は慶尚道地域にも分布が知られているが、水平方向に広く、縦方向の穿孔を施した両耳付壺は、忠清道・全羅道を中心とした地域に分布するとされ、編年も行われている〔常松1984、金鐘萬1999〕。これらの研究によれば、西新町遺跡で見られる平底、丸底とも韓国では特に地域差、時

表5 西新町遺跡出土半島系土器一覧表

遺構番号	半島系土器点数	土師器時期	遺構番号	半島系土器点数	土師器時期
12次	陶質格子タタキ文壺1、陶質平行タタキ文壺1	4式後半	81住	軟質甌1、陶質格子タタキ文壺片1、瓦質壺口縁部片1	4式前半
2住	軟質斜格子タタキ文鉢片2、陶質壺頸部片1	4式前半	82住	陶質無文壺片1	4式後半
7住	陶質格子タタキ文壺1、陶質平行タタキ文壺1		86住	陶質無文壺1	4式前半
9住	軟質甌？把手片1	4式前半	87住	瓦質壺口縁部片1、陶質平行・格子タタキ文壺片1	
21住	陶質無文壺1、軟質両耳付壺1、陶質無文壺片1、軟質平行タタキ文壺片1、陶質格子タタキ文壺1、瓦質平行タタキ文壺片1	4式後半	88住	軟質平行タタキ文壺片1	4式前半
22住	軟質甌1	4式後半	89住	陶質平行タタキ文壺片5、軟質格子タタキ文壺片2、陶質無文壺片1、軟質甌1	4式前半
23住	瓦質平行タタキ文壺片1、瓦質平行・繩席タタキ文壺片1、無文タタキ文壺片1	4式後半	93住	黒色磨研両耳付二重口縁壺1	3式後半
29住	軟質平行タタキ・三角文二重口縁壺1、瓦質タタキ文壺片1		96住	軟質二重口縁壺片1	4式前半
30住	瓦質平行・格子タタキ文壺1、瓦質格子タタキ文壺片1、陶質斜格子タタキ文壺片2、陶質平行タタキ文壺片1、陶質繩席タタキ文壺片1	4式後半	97住	陶質平行タタキ文壺片1、瓦質平行タタキ文壺片1、陶質無文壺片1	4式後半
36住	瓦質平行・格子タタキ文壺片2、瓦質平行タタキ文壺片3、瓦質無文壺片1、軟質斜格子タタキ文壺把手鉢片1	4式後半	98住	軟質小形平底鉢片1	4式前半
37住	軟質平行タタキ文壺1	4式前半	99住	軟質平底有孔土器片1	4式前半
39住	陶質壺口縁部片1	4式後半	101住	陶質無文壺片1	4式前半
40住	軟質平行タタキ文壺片1、陶質格子タタキ文壺片1	4式後半	104住	瓦質無文壺片1	4式後半
42住	陶質繩席タタキ文壺片1、軟質小形平底鉢1	4式後半	115住	瓦質平行タタキ文壺片1	4式前半
43住	陶質平行タタキ文壺片1、瓦質格子タタキ文壺片1、陶質格子タタキ文壺片1、陶質無文壺片1	4式前半	121住	軟質甌？把手片1	4式後半
44住	陶質平行・格子タタキ文壺片1		128住	陶質無文壺片1、軟質斜格子タタキ文壺片1	4式後半
49住	陶質無文壺片1	3式後半	155住	軟質格子タタキ文壺片1	4式前半
50住	陶質耳付無文壺片1	4式前半	156住	瓦質平行・斜格子タタキ文壺片2	4式前半
63住	陶質鉢片1、軟質鉢片1、軟質格子タタキ文壺片2、陶質平行タタキ文壺片1、軟質甌把手片1、軟質両耳付壺1	4式後半	2次		
64住	瓦質平行タタキ文壺片1、瓦質鉢片1、軟質甌把手片1	4式前半	D1住	両耳付壺片1	3式前半
65住	軟質高杯1、軟質甌把手片1、軟質甌丸底部片1、軟質格子タタキ文壺片1	4式後半	D8住	軟質甌丸底片1	3式後半
68住	軟質斜格子タタキ文鉢片1	4式前半	D17住	軟質甌丸底片1	3式後半
70住	瓦質平行タタキ文壺片1		E2住	瓦質格子タタキ文壺片3	4式前半
72住	陶質直口壺口縁部片1、陶質格子タタキ文壺片1、軟質格子タタキ文壺片1、軟質斜格子タタキ文壺片1、瓦質平行タタキ文壺片1	4式前半	F2住	軟質甌1	4式前半
76住	軟質斜格子タタキ文壺片1	4式後半	3次		
77住	瓦質平行タタキ文壺片3、瓦質無文タタキ文壺片1、瓦質格子タタキ文壺片1	4式後半	1住	瓦質繩席タタキ文壺	3式後半
			2住	軟質平行タタキ文壺1、軟質甌1、軟質甌把手片1	4式前半
			3住	軟質無文大型直口壺1	4式後半
			4住	瓦質無文大型直口壺1	4式前半
			6住	軟質格子タタキ文壺片1、陶質格子タタキ文壺片1	4式前半
			4次		
			S C16	軟質甌？把手片1	4式前半
			S C39	陶質格子タタキ文壺1	4式後半
			5次		
			S C04	陶質格子タタキ文壺片1	3式後半
			S C06	陶質繩席タタキ文壺片1、陶質擬格タタキ文壺片1	4式後半
			S C07	陶質繩席タタキ文壺片1	4式前半



第419図 半島系土器の類例（1／6）

期差はないようである。12次21号竪穴住居跡79のような外面にタタキを残し平底をなすものの例は探しえなかったが、12次63号竪穴住居跡55は忠清南道舒川烏石里遺跡〔李南奭 1996〕から器形の類似するものが出土している（第419図2）。この烏石里遺跡は3世紀後半を中心とする墳墓とされている〔成正鏞 1998；91-6、成正鏞1999；156〕。

この両耳付壺の日本での出土例については早くに常松氏により集成が行われているが、その後、出土した早良平野での資料として福岡市野芥大藪遺跡 SK067出土資料〔山崎1998；26〕がある（第419図3）。内外の調整等は土師器と考えられるが、肩部に縦方向の穿孔を施した耳を貼付するとともに、同時期の在地系・畿内系土器では例の少ない平底になると思われる。大形である点、口縁部を欠損する点に難があるが、半島系の両耳付壺を意識して製作された可能性がある。共伴する土師器は西新町3式前半に平行すると考えられ、西新町出土例に先行する。

二重口縁壺もやはり忠清道、全羅道を中心に分布する器種である。特に全羅南道の栄山江流域に多く、3～4世紀代に盛行したとされる〔林永珍1998；286〕。林永珍氏によると口縁部の接続技法が型式変化のひとつの基準として挙げられ、共伴の土師器から考えるとあるいは12次93号竪穴住居跡89から12次96号竪穴住居跡47のような形態へと変化した可能性がある。韓国で出土している二重口縁壺は12次93号竪穴住居跡89のような平底のもの、12次29号竪穴住居跡2のような肩部に連続三角文を施文するものは少ないが、前者に類似するものとして全羅南道靈岩月松里出土品〔徐聲勳・成洛浚1986、林永珍1998；295〕が挙げられる。12次93号竪穴住居跡89と比べるとやや長胴であるが、大きな平底のもので、口縁部の作りには差異がある。

12次遺構面357の蓋は忠清道、全羅道に多い両耳付短頸壺あるいは二重口縁壺に伴うものと考えられる。金鐘萬氏〔1999〕によれば、この蓋は鏢状に突出した天井部外端に穿孔するものから、天井部外端の一部のみを耳状に突出させて穿孔するものへの変化が指摘できるという。12次遺構面357は外端よりやや下がったところに耳を貼付した形態で、韓国出土品に類例を探すことができなかった。ただ、これは焼成、色調とも在地生産された土師器とは異なるので、今後の韓国での出土を期待し

たい。

西新町出土の甑は平底のもの（12次22号竪穴住居跡9、12次81号竪穴住居跡87、12次89号竪穴住居跡52）、平底を意識したレンズ状底のもの（3次2号竪穴住居跡11）、丸底のもの（2次F区2号竪穴住居跡2など）に分けられる。平底のうち12次22号竪穴住居跡9、12次89号竪穴住居跡52は焼成も韓国出土甑と類似しており、搬入品の可能性が極めて高い。土師質に焼成された平底品の81号竪穴住居跡87、レンズ状底の3次2号竪穴住居跡11はこれら搬入品を模倣して、在地生産された可能性があるのではなかろうか。韓国出土例として全羅南道昇州大谷里トロン遺跡ソウル大調査区20号住居跡出土品など全羅道地域に類例があり（第419図4）、全羅道地域～慶尚南道西部地域は直口縁をなし、平底で同心円上に小孔を多数配列したの多いとする酒井清治氏の指摘〔1998；27-31〕とも符号している。

一方、伽耶地域は丸底で小孔を多数穿孔したの多いと酒井氏は指摘しているので、2次F区2号竪穴住居跡2などは伽耶系となる可能性を考慮せねばならないだろう。ただ、2次F区2号竪穴住居跡2の口縁部のつくりや内外の調整は土師器と共通性が高く、土師器甕と同様の技法で整形した後に穿孔したために丸底となったと説明できるかもしれない。他の丸底の甑片も土師器と共通の調整、焼成のものがほとんどである。この丸底の甑の系譜については、今後の西新町遺跡の調査の進展によって伽耶地域から搬入された丸底甑が出土すれば解決できるものと思われる。

これまで述べてきた無文直口壺、両耳付壺、二重口縁壺、蓋、平底甑は忠清道～全羅道に系譜が求められる可能性が高い。これに対して伽耶にあたる慶尚南道地域に由来する可能性がある器種が無文短頸壺である。これらの無文短頸壺は器形とともに、極めて堅緻な陶質焼成が大きな特徴となっている。このような器形、焼成自体、3～4世紀の全羅道・忠清道地域では例が少ないようである。これに対して釜山市老圃洞遺跡〔釜山大学校博物館1988〕、慶尚南道金海市礼安里遺跡〔釜山大学校博物館1993〕の考察などを参考にすると、慶尚南道地域では3世紀後半以降、陶質に焼成されて無文で球胴をなした壺が増加している。12次21号竪穴住居跡74に類似する例として、4世紀中葉とされる金海礼安里遺跡138号墳副塚出土遺物を挙げておきたい（第419図5）。

したがって、忠清道～全羅道との関連が考えられる器種が多いが、慶尚南道地域からも少なからずの土器が搬入されたり、在地の土器に影響を与えたと言えるだろう。また、筆者の能力不足もあり、ここで詳しく触れることができなかったタタキ文壺、鉢、軟質小形鉢平底鉢も微細な形態的変異、タタキ文様、焼成・色調に注意することによって、忠清道～全羅道地域と慶尚南道地域に区分できるのではないかとと思われる。今後の検討課題である。

なお、12次65号竪穴住居跡47のような形態の高杯については、韓国において形態的に類似するものは見つけられなかった。この高杯を半島系土器と考える根拠は格子目タタキ、焼成であるが、形態的には12次105号竪穴住居跡37のような土師器脚付鉢と類似している。したがって、これについては土師器を模倣して、渡来人が製作した製品の可能性を考慮する必要があるだろう。

4. おわりに

以上のように、西新町遺跡12次調査出土資料を中心として半島系土器の系譜について考えてみたが、2～5次出土資料をもとにした武末純一氏〔1996〕よる指摘を裏付けるように、そこに忠清道～全羅道地域に由来するもの、慶尚南道地域に由来するものの2種のあることが判明した。さらに、

12次調査では特に前者の地域の半島系土器の資料がまとまって出土したことが特筆されるだろう。これらの半島系土器は韓国出土資料と対比できる良好な例もあり、加えて土師器との共伴においても確実なものが多い。今後、これらの資料に基づいて、朝鮮半島と日本の3～4世紀土器編年の平行関係が議論できるものと考えられる。

しかしながら、多量の半島系土器が出土するにもかかわらず、同時期の慶尚道を中心に分布する高杯、器台、爐形土器、朝鮮半島南部全域の集落遺跡で煮沸具として使用されたと見られる軟質でタタキ仕上げの長胴甕など、現在まで出土が確認できない器種がある。西新町遺跡に搬入される半島系土器は一部の器種に限られた可能性があり、半島系土器の流入の原因を解明する糸口のひとつとなろう。これについては同じく朝鮮半島に起源をもつカマド、12次調査出土鋳型にみるようなガラス玉製作の展開などを参照しながら、どのような人によって半島系土器がもたらされ、どのように使用されたかの整理を踏まえて論じるべきであろう。

このような課題について、今後の西新町遺跡の調査の進展を期待するとともに、筆者個人としては玄界灘沿岸地域での同時期の半島系土器の類例、さらには韓国での類例についてさらに資料の収集を行なった上で、機会を改めて考えてみたいと思う。本稿での誤りや類例などの御教示をお願いしたい。

参考文献

- 酒井 清治 1998 「日韓の甕の系譜から見た渡来人」『榑崎彰一先生古稀記念論文集』真陽社 pp.27-38
- 武末 純一 1996 「西新町遺跡の竈」『碩啓尹容鎮教授停年退任記念論業』pp.599-615
- 武末 純一 2000 「北部九州の百済系土器-4・5世紀を中心に-」『福岡大学総合研究所報』第240号
(総合科学編3号) pp.99-114
- 常松 幹雄 1984 「浦志遺跡A地点出土の把手付壺形土器」『浦志遺跡A地点』前原市文化財調査報告書
第15集
- 金 鍾 萬 1999 「馬韓圏域出土両耳付壺小考」『考古学誌』第10輯 韓国考古美術研究所
釜山大学校博物館 1993 『金海禮安里古墳群』2 釜山大学校博物館遺蹟調査報告第15輯
- 釜山大学校博物館 1988 『釜山老圃道遺蹟』釜山大学校博物館遺蹟調査報告第12輯
- 徐聲勳・成洛浚 1986 「栄山江流域の甕棺調査資料」
『壺岩内洞里チョブソル古墳』国立光州博物館・全羅南洞・壺岩郡
- 成 正 鏞 1998 「錦江流域4～5世紀の墳墓および土器の様相と変遷」『百済研究』第28集 pp.65-134
- 成 正 鏞 1999 「3～5世紀における錦江流域における馬韓・百済墓制の様相」『古文化談叢』第43集
(亀田修一訳) pp.125-73
- 兪 炳 夏 1998 「扶安竹幕洞遺跡で進行した三国時代の海神祭祀」『扶安竹幕洞祭祀遺蹟研究』国立全州博物館
pp.187-250
- 李 南 爽 1996 『烏石里遺蹟』公州大学校博物館・韓国道路公社
- 林 永 珍 1998 「竹幕洞土器と栄山江流域土器の比較考察」『扶安竹幕洞祭祀遺蹟研究』国立全州博物館
- 山崎 龍雄 1998 『福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第581集
pp.281-96

第6章 おわりに

西新町遺跡12次調査は調査担当者一同にとって初めての本格的な砂丘遺跡の調査であり、なおかつ古墳時代、近世・近代の遺構が経験したことのない高い密度で検出された。現地での発掘調査、その後の報告書作成は非常に多くの困難を伴うものであり、調査や整理に参加された多くの方々の努力、修猷館高校の皆様の御協力なしには当然、成し遂げることができなかった。

今回の調査は県立高校敷地内であるために福岡県教育委員会が実施することとなったが、地元の福岡市教育委員会の文化財担当職員の皆様からは測量基準点、発掘作業員の募集にはじまり調査方法、遺跡の評価に至るまで、様々な形で御協力、御教示をいただいた。同じ福岡県内とは言え研究史的にも重要な西新町遺跡の調査であったので、担当者各自がかなりの緊張感をもって調査に臨んだつもりであるが、これまで実施されてきた福岡市教育委員会による西新町遺跡を始めとする福岡市内遺跡の調査の精度と比べると、今回の調査には多くの不十分な点を感じられ、悔いが残る。また、調査中、遺物整理中に来訪された日本・韓国の多くの研究者の方々からも貴重な御教示を頂いた。これら調査に様々な形でお力添え頂いた方々にここであらためてお礼を申し上げるとともに、御期待に沿えない調査、報告書作成となったことをお詫び申し上げたい。

さて、報告したように、今回の調査では多様な遺構、遺物が検出されたが、北部九州地域と朝鮮半島、中国大陸との関係を示唆するカマド付住居跡、半島系土器、ガラス玉鑄型、漢代貨幣などの出土は特筆されるものであり、本遺跡が半島、大陸への交通の拠点であったことを示唆するものである。また、160棟を超える竪穴住居跡、500箱を超える古墳時代土器と近世陶磁器を中心とした出土遺物は、交通の拠点としての西新町遺跡に多くの人々が集まり居住し、半ば都市的な景観を呈していたことを想像させる。

しかしながら、担当者の力量不足のために、報告書はとりあえずの事実報告に終始する結果となった。様々な角度からの西新町遺跡の歴史的な評価については、担当者の責任として我々も少しずつ行なっていきたいと思うが、今後の調査、研究の進展に委ねる部分が多い。本書には玉原石の自然科学的分析について唐木田芳文先生の玉稿を掲載することができたが、土器の胎土分析等、実施していない各種遺物の科学的分析があるとともに、時間的な制約のために近世・近代の遺構・遺物は概報程度の内容に留まらざるを得なかった。

幸い修猷館高校改築に伴う西新町遺跡の調査は今後も続く予定であり、それら報告書の余白を借りるなどして、少しずつ欠を補っていききたいと思う。今後もこれまでと変わらない御指導、御協力をおねがいして、筆をおくこととしたい。

圖 版



1 3区北1区近世遺構
全景(東から)



2 3区南3区近世遺構
全景(南から)



3 3区中3区近世遺構
全景(東から)



1 41号土坑(北から)



2 41号土坑鏡片
出土状況(東から)



3 48号土坑(西から)



1 2号土坑(北西から)



2 2号土坑獣骨出土
状況(北西から)



3 42号土坑(南から)



1 45号土坑(北から)



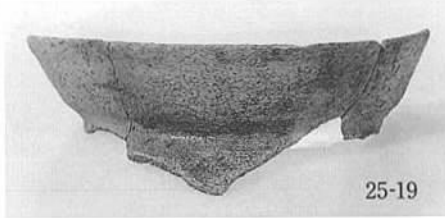
2 56号土坑(北から)



3 103号土坑(東から)



25-3



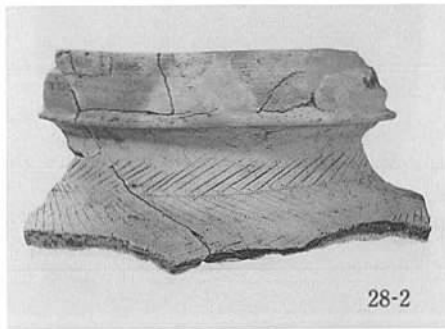
25-19



28-7



25-6



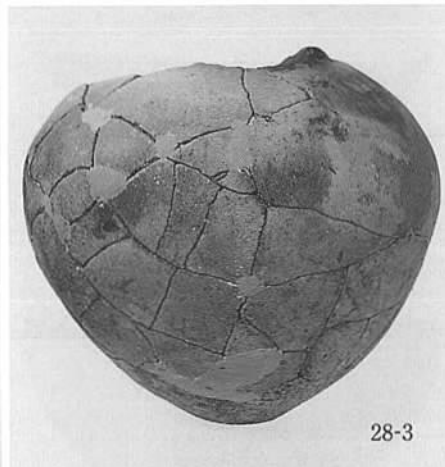
28-2



28-8



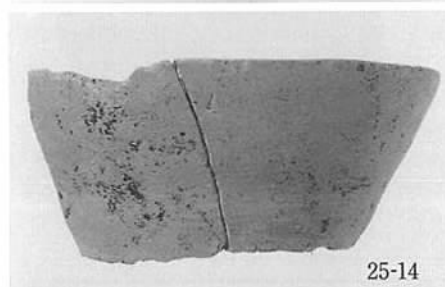
25-12



28-3



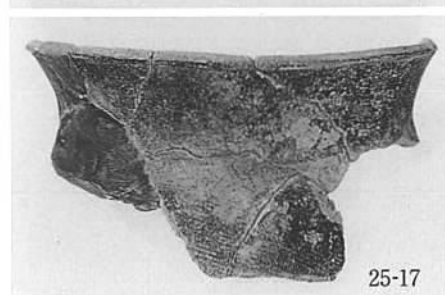
28-9



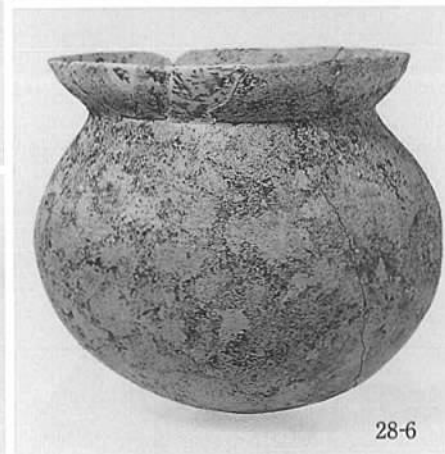
25-14



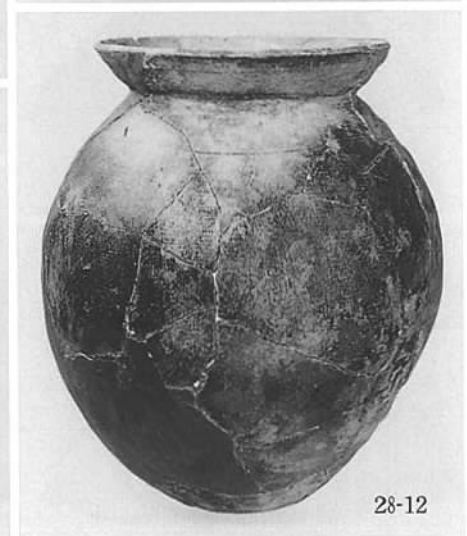
28-4



25-17

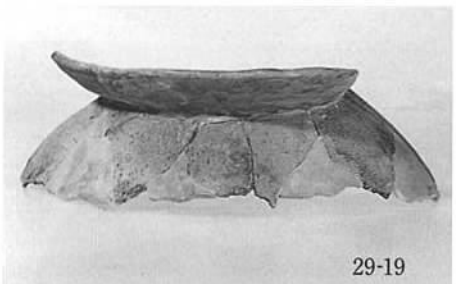


28-6

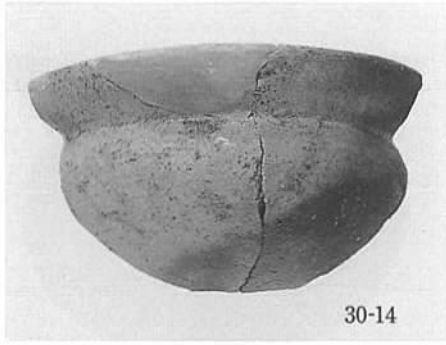


28-12

1 ~ 3 号竖穴住居跡出土土器



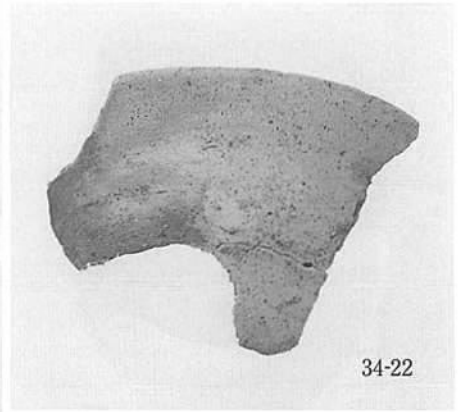
3·4号竖穴住居跡出土土器



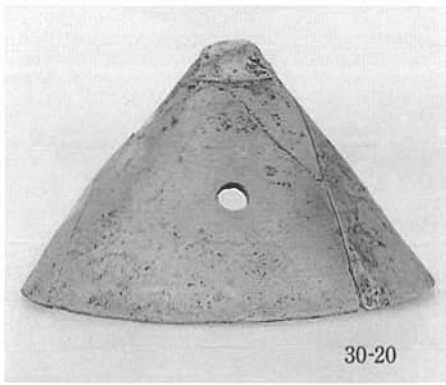
30-14



30-27



34-22



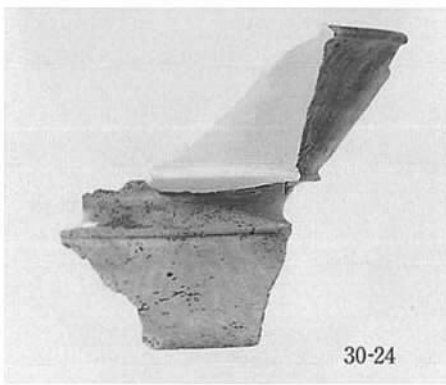
30-20



34-2



34-26



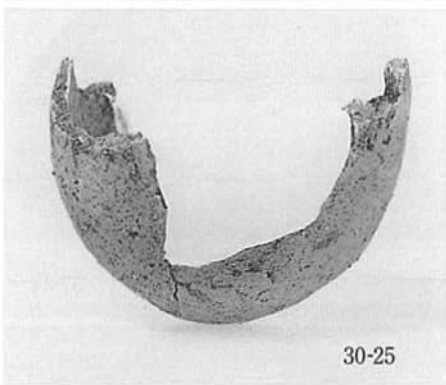
30-24



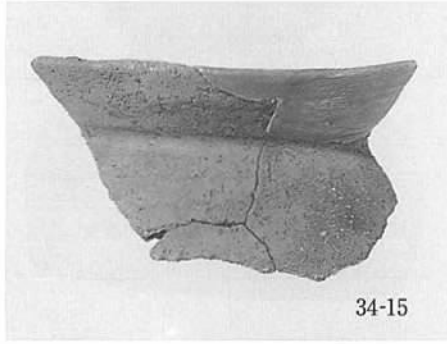
34-3



35-6



30-25



34-15



34-1

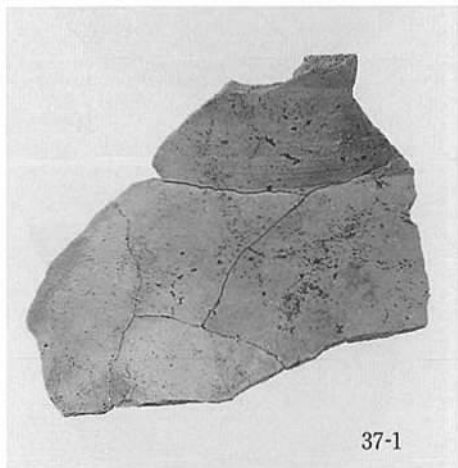


34-16



35-7

4 ~ 6 · 8 号竖穴住居跡出土土器



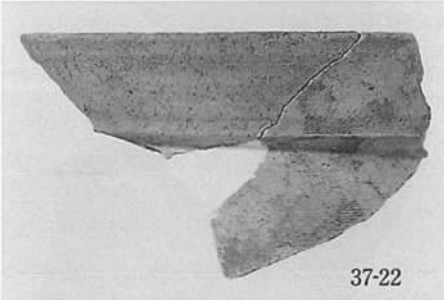
8·9号竖穴住居跡出土土器



37-18



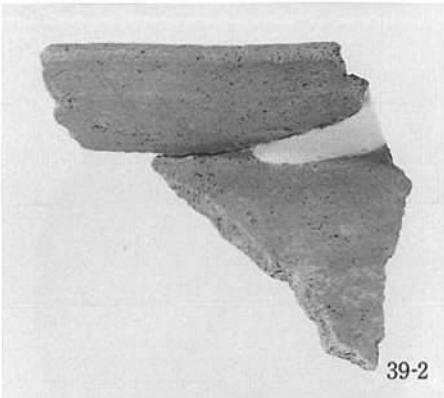
37-20



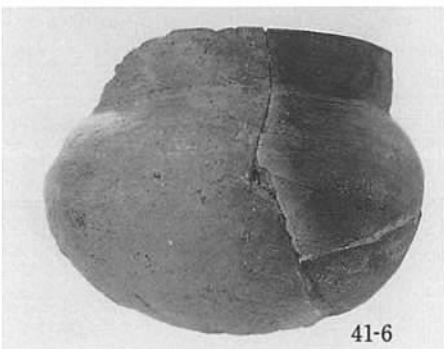
37-22



39-1



39-2



41-6



39-5



41-15



41-12



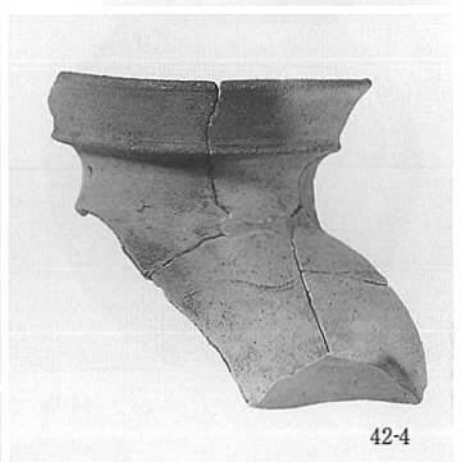
41-20



42-1



42-3



42-4



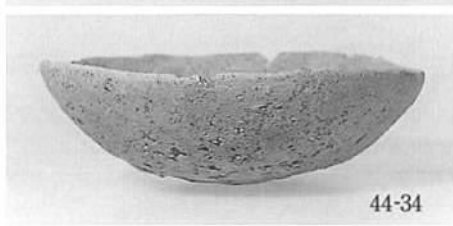
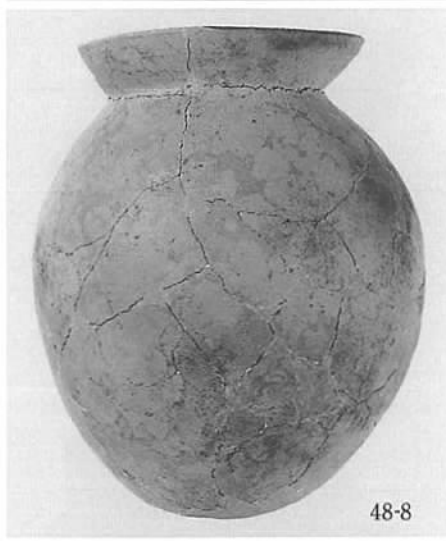
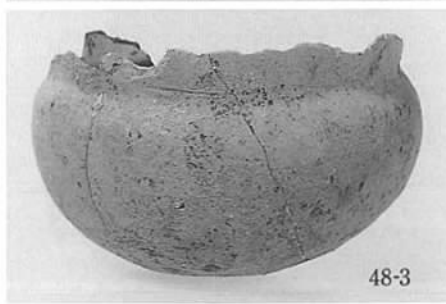
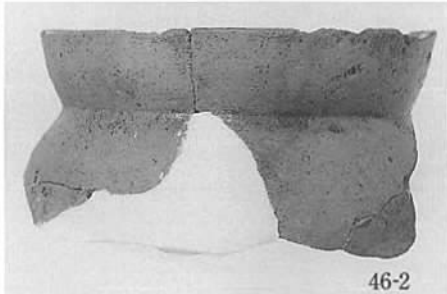
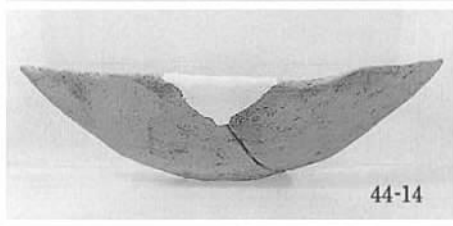
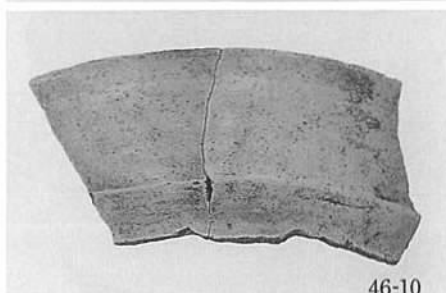
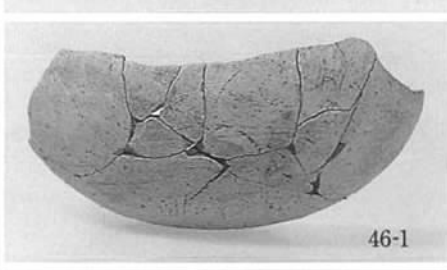
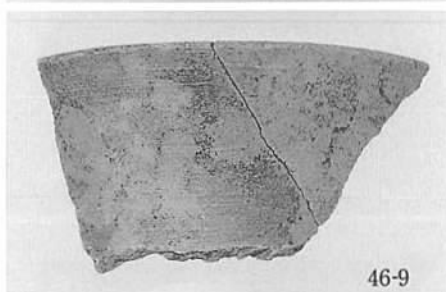
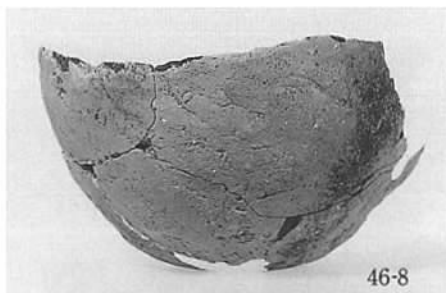
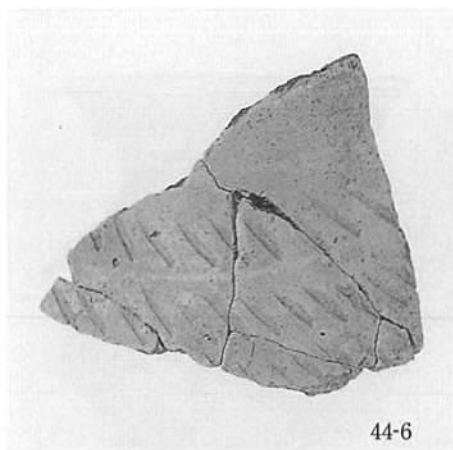
42-9



42-10



42-11



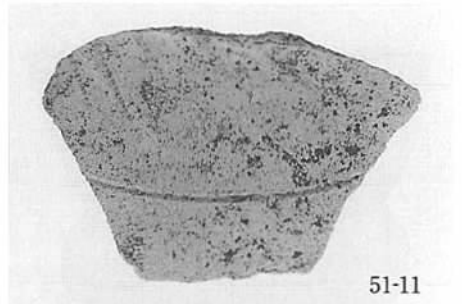
15·17·18号竖穴住居迹出土土器



48-14



49-12



51-11



48-20



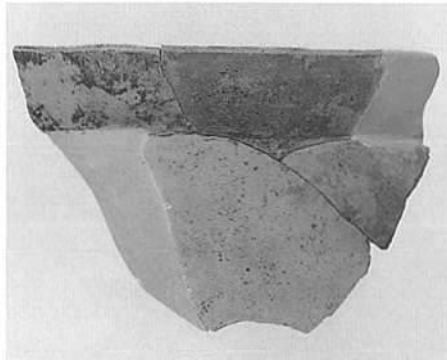
49-14



51-13



49-1



49-17



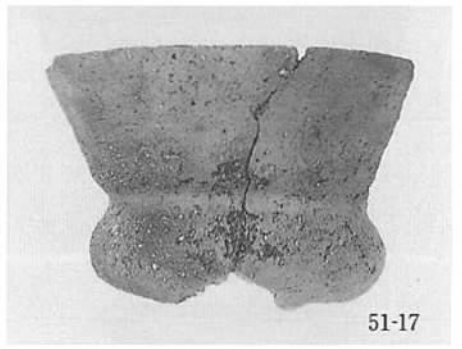
51-14



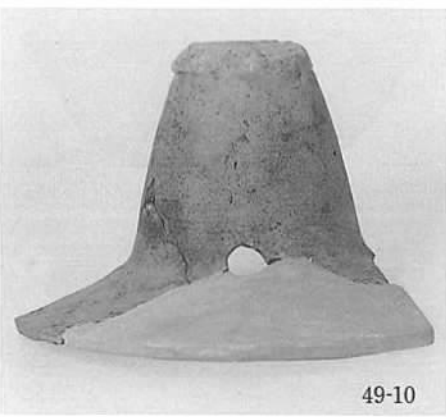
49-4



51-4



51-17



49-10

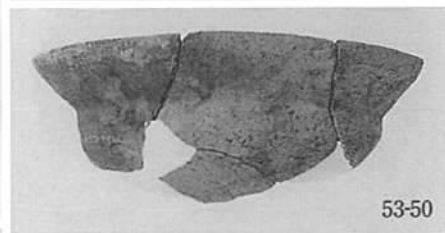
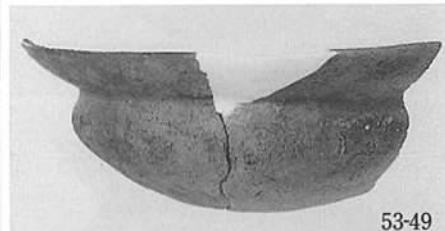
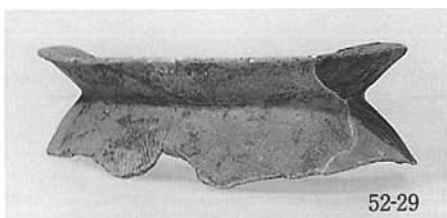


51-5

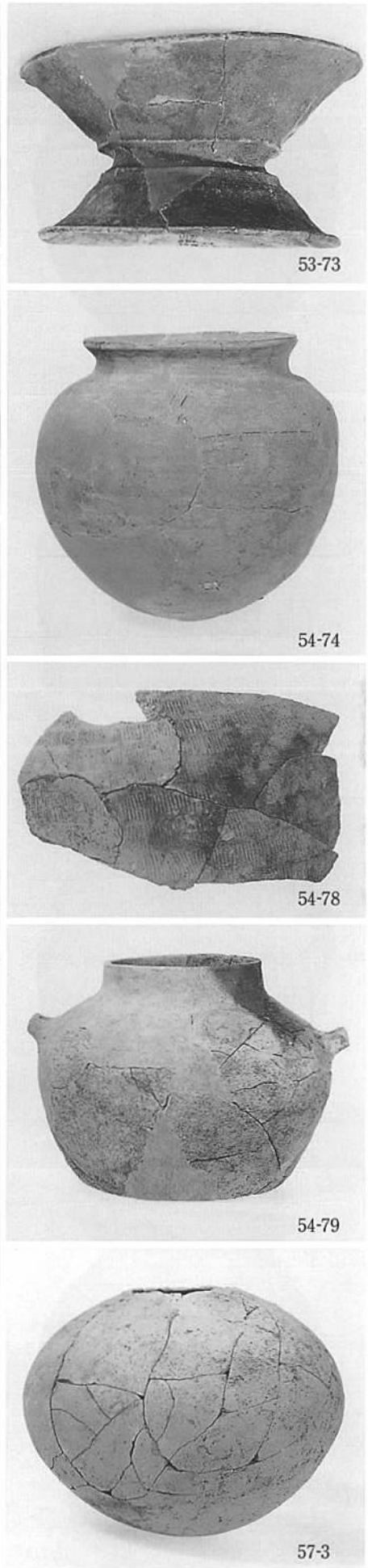
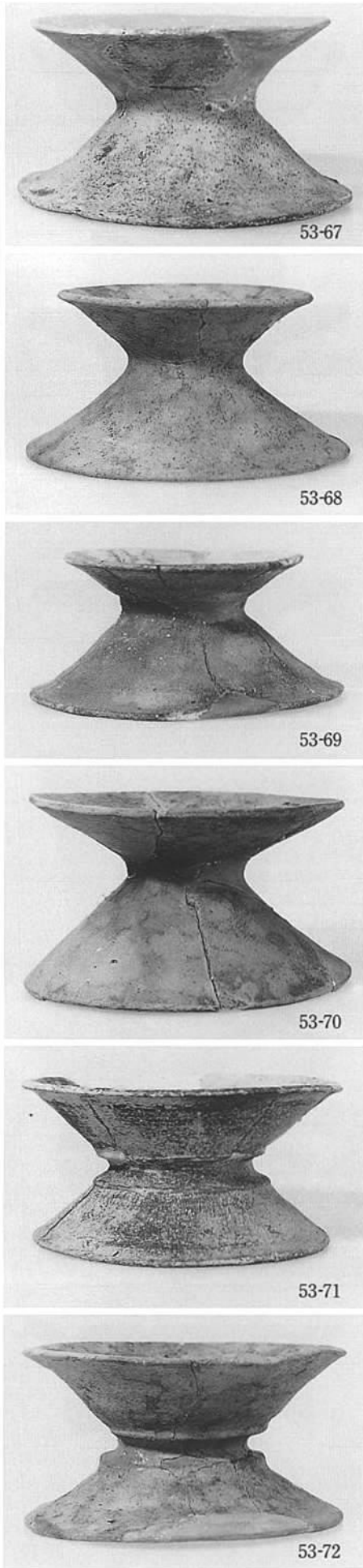
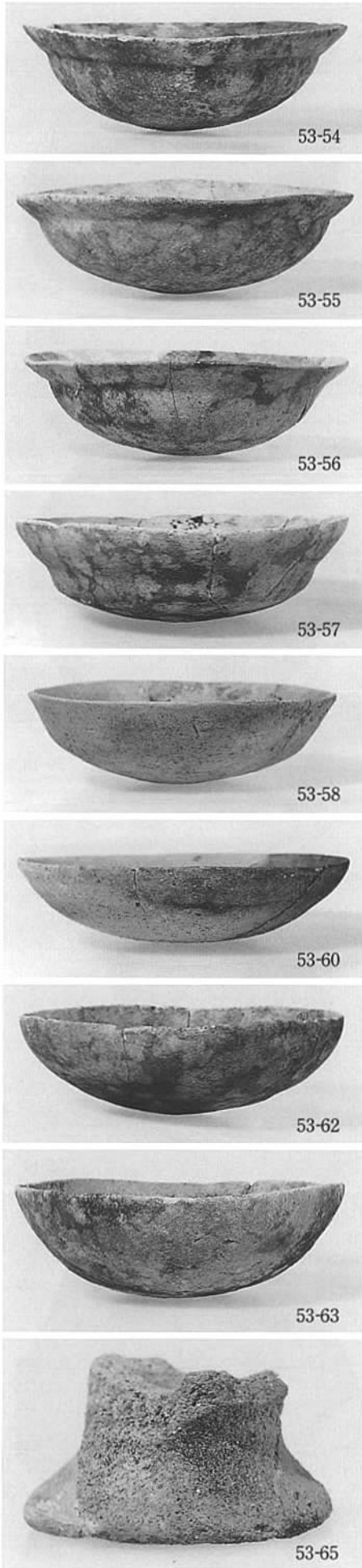


51-18

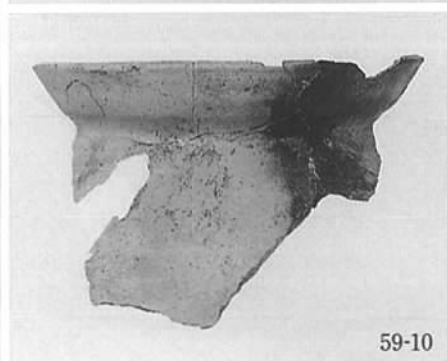
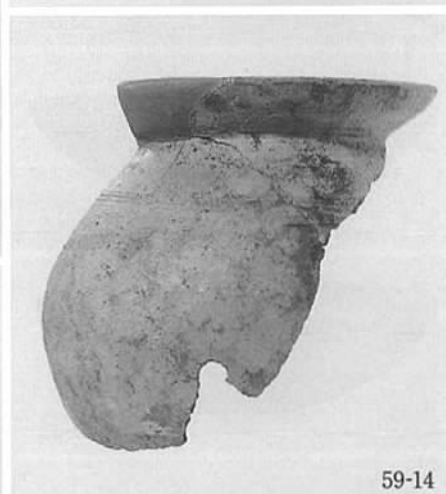
18·19·21号竖穴住居跡出土土器

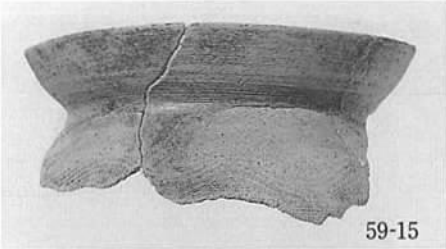


21号竖穴住居跡出土土器



21·22号竖穴住居跡出土土器





59-15



59-20



60-26



59-17



59-22



60-27



59-18



60-24



60-28



59-19



60-25

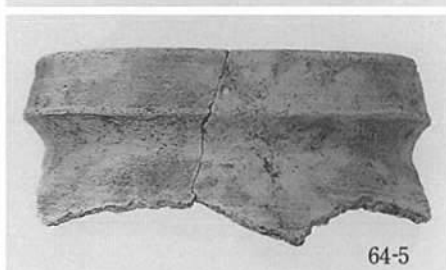
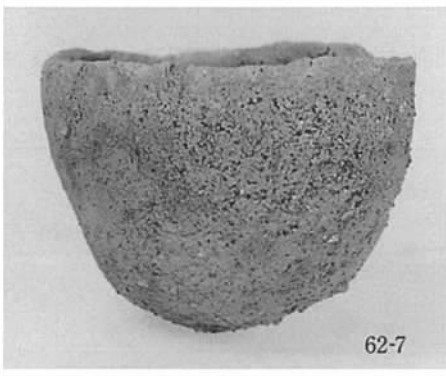
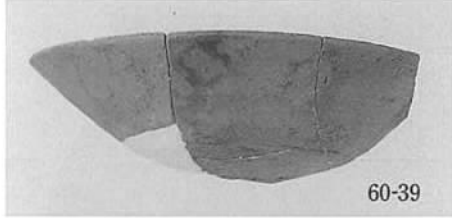
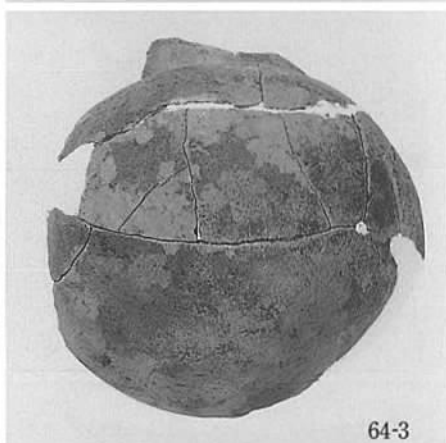
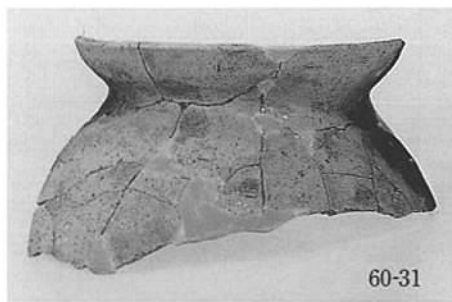


60-29

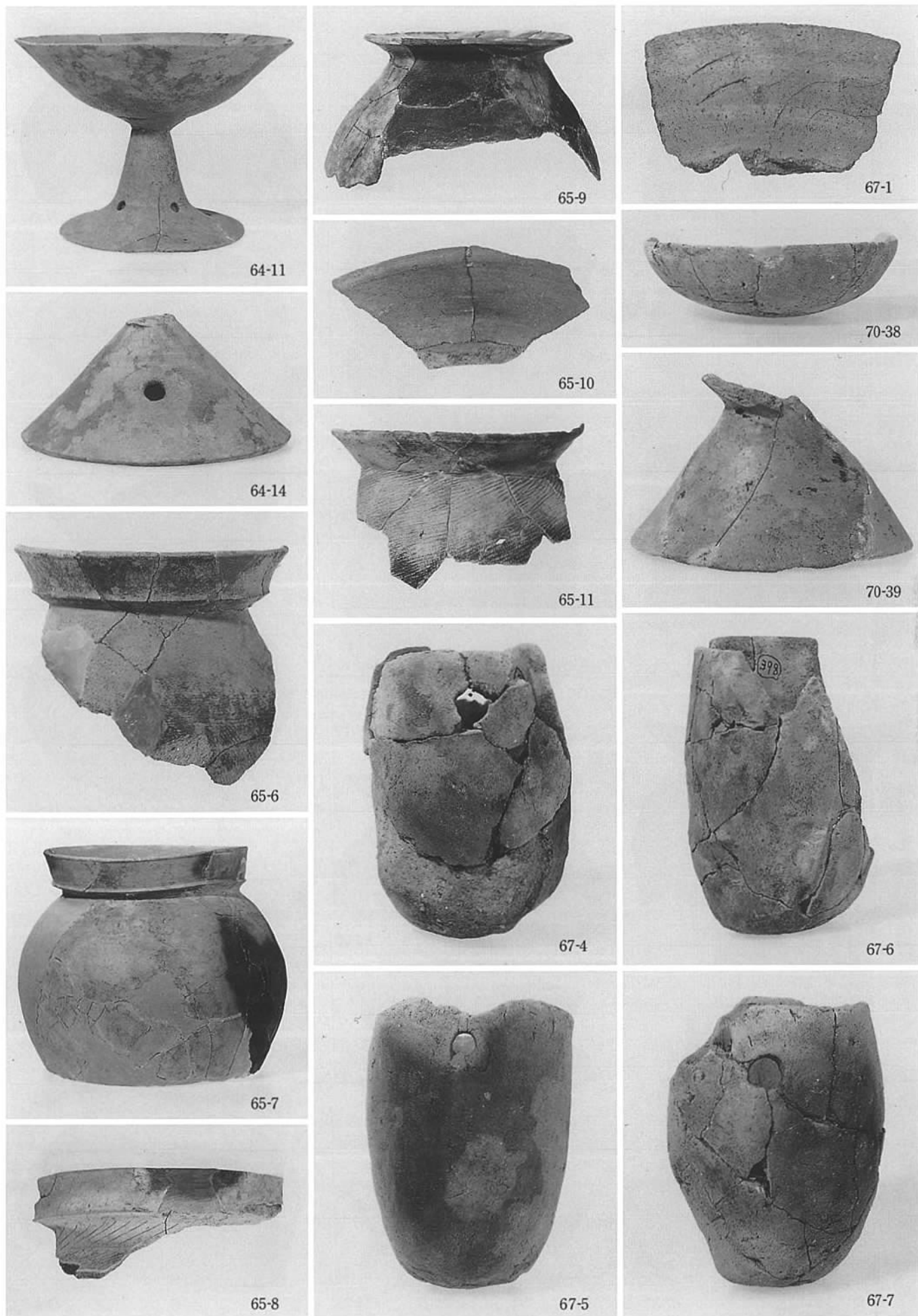


59-21

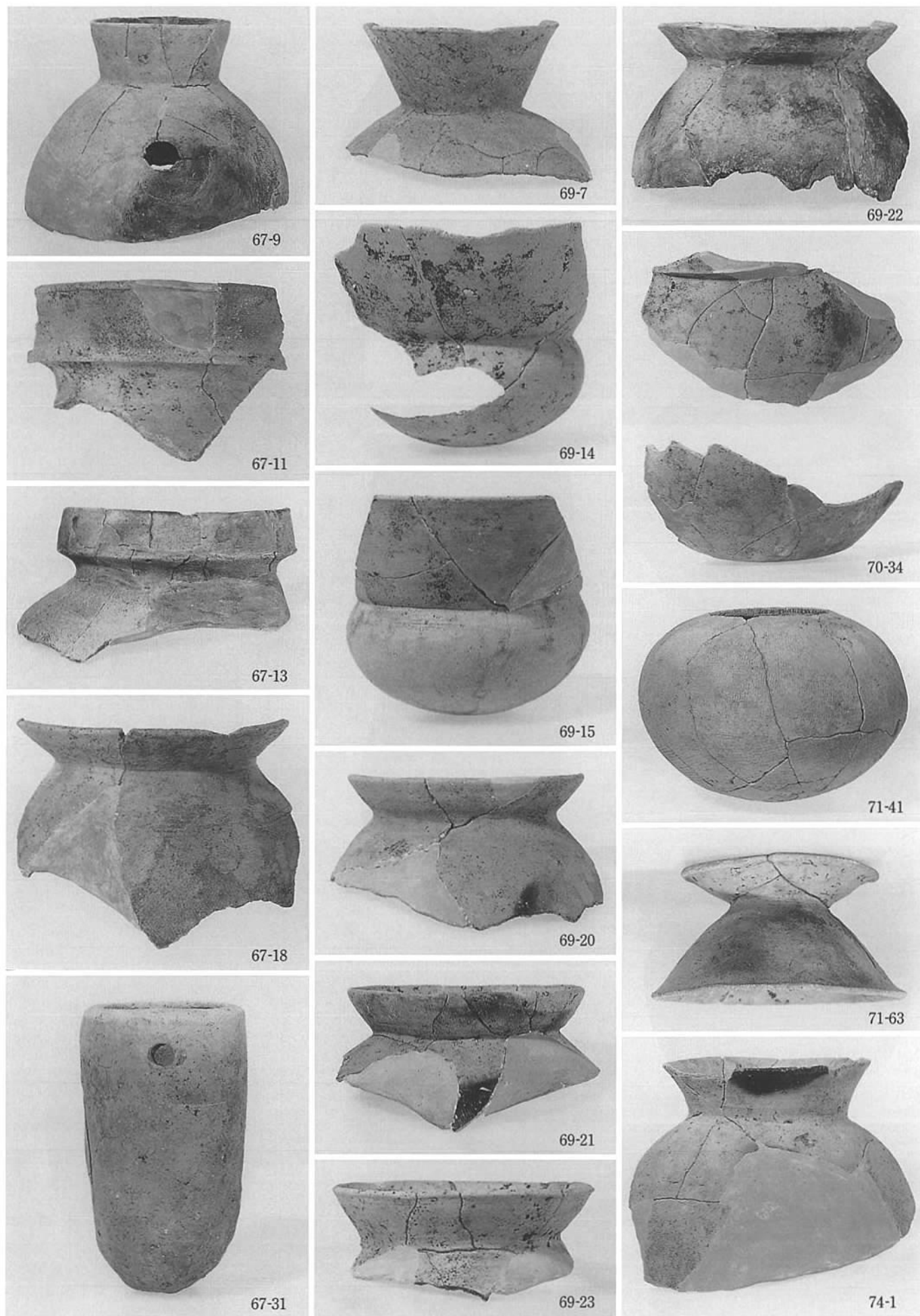
23号竖穴住居跡出土土器



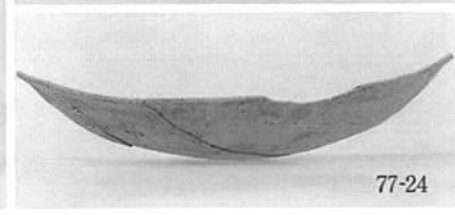
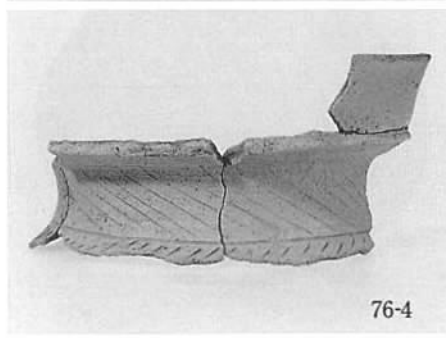
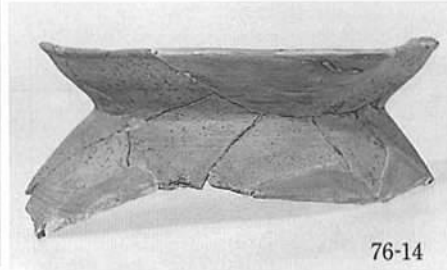
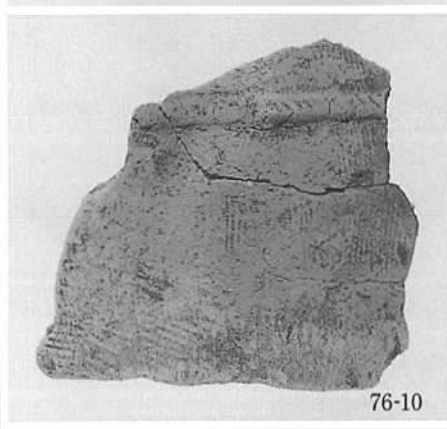
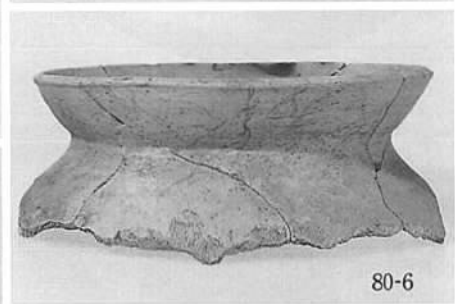
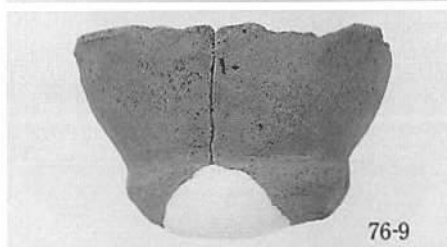
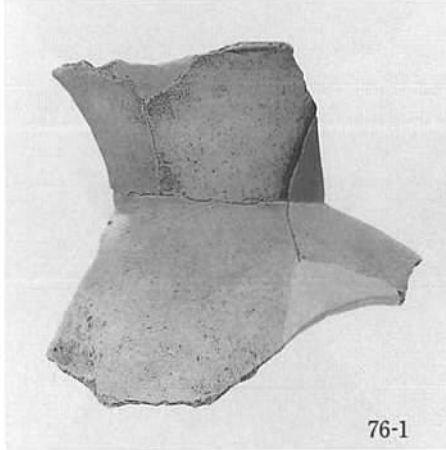
23 ~ 26 号竖穴住居跡出土土器



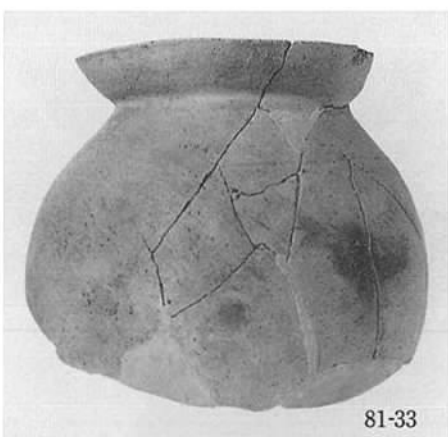
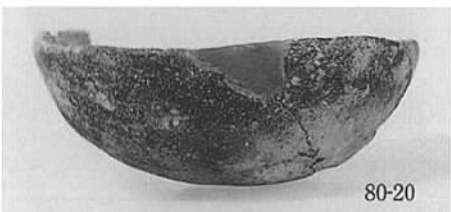
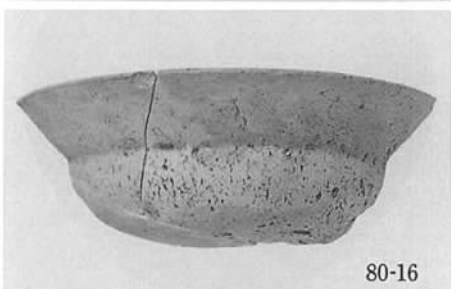
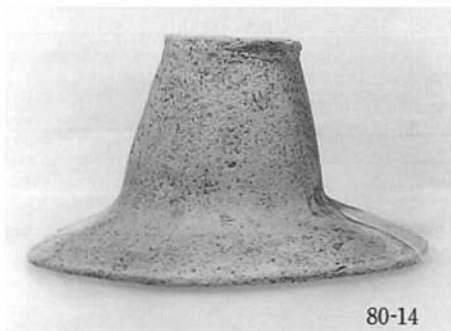
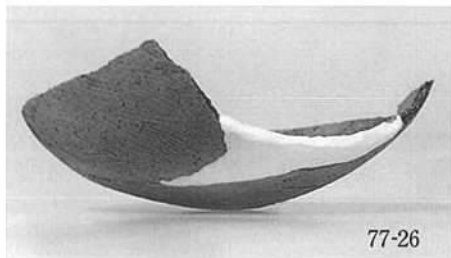
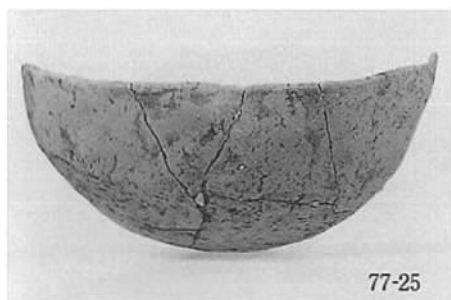
26·27·29·30号竖穴住居跡出土土器



29·30·35号竖穴住居跡出土土器



35～37号竪穴住居跡出土土器





85-13



91-7



94-9



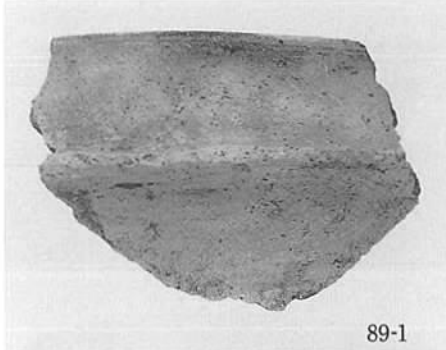
89-2



91-8



94-12



89-1



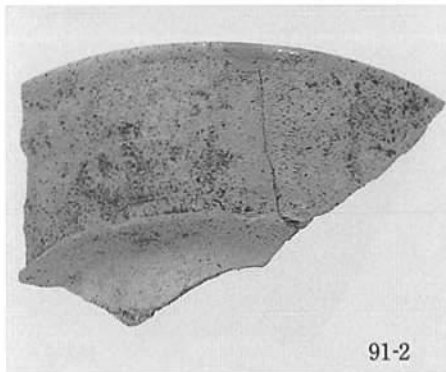
89-3



94-3



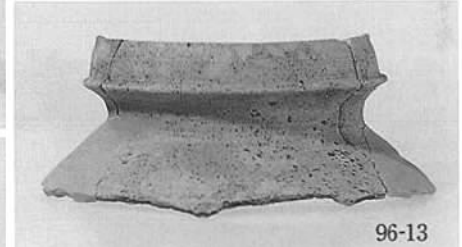
96-12



91-2



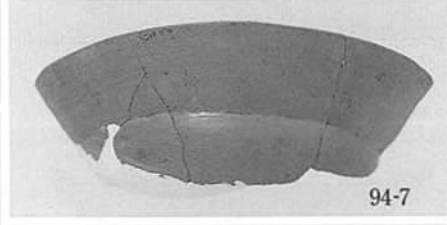
94-4



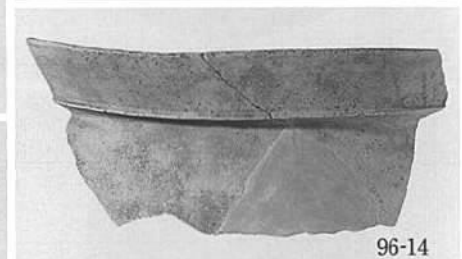
96-13



91-4



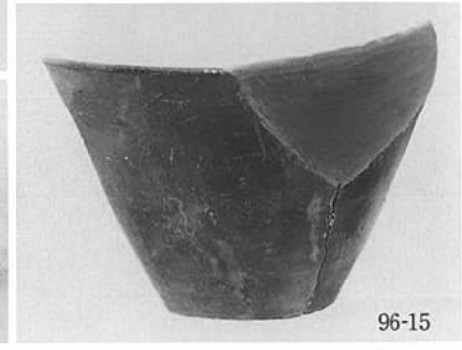
94-7



96-14

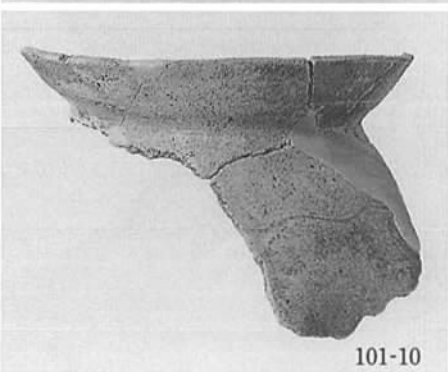
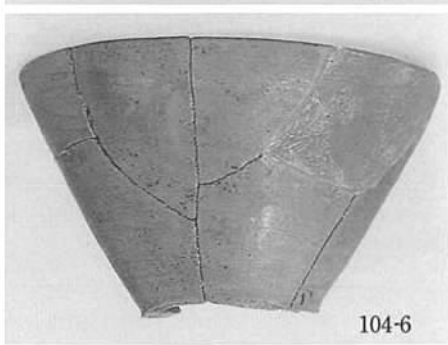
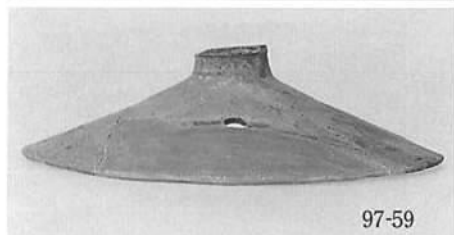
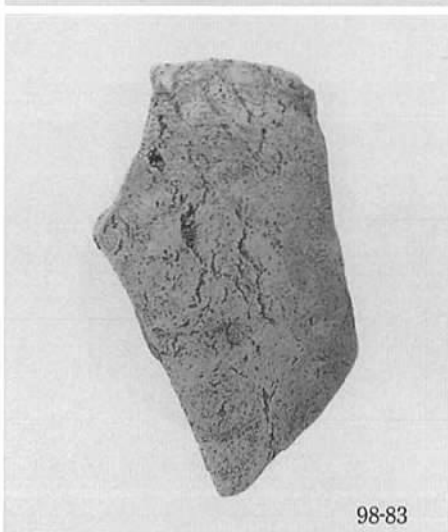
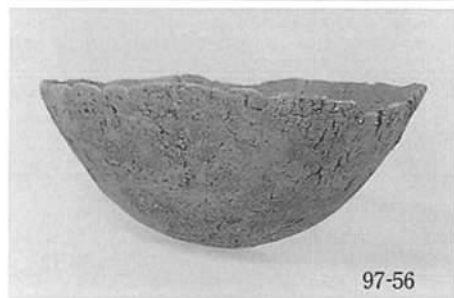
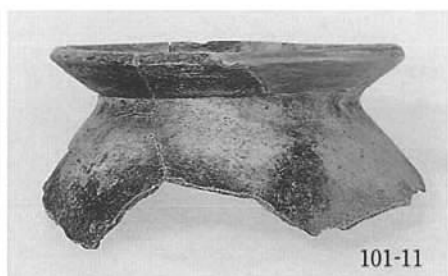


94-8

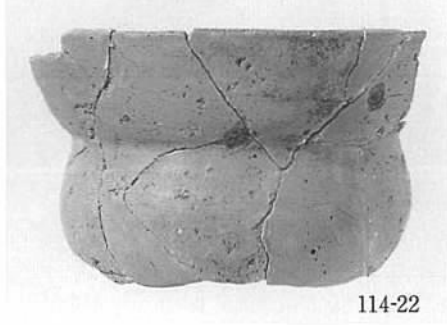
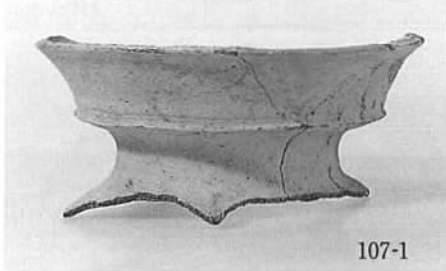
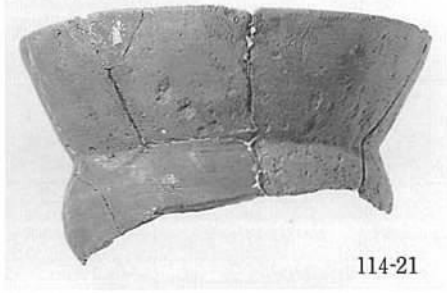
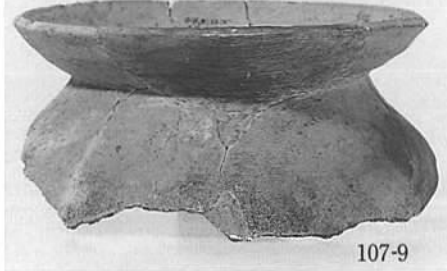
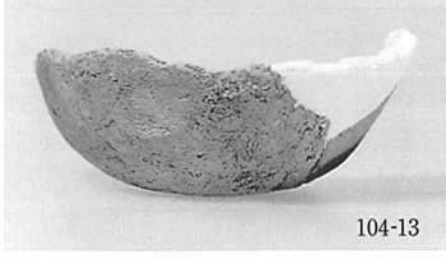
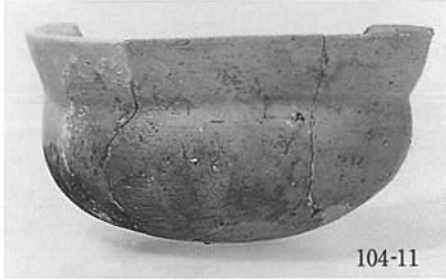


96-15

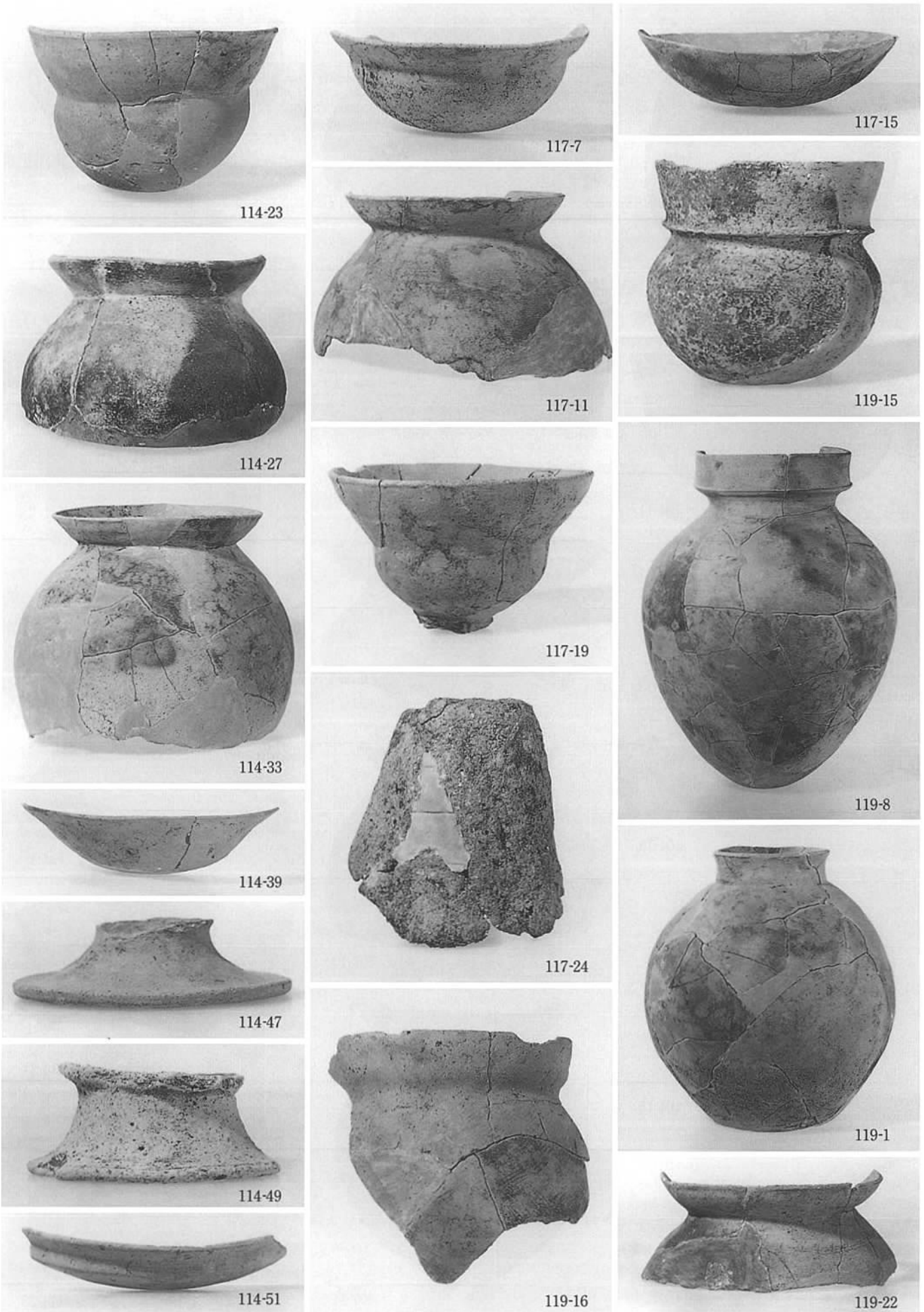
39 ~ 43 号竖穴住居跡出土土器



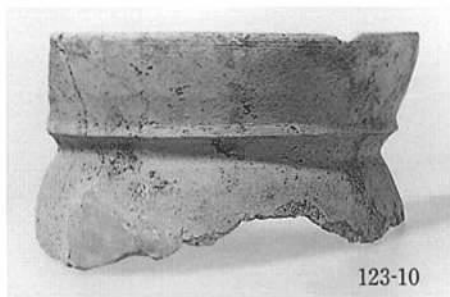
43 ~ 45 · 48 号竖穴住居跡出土土器



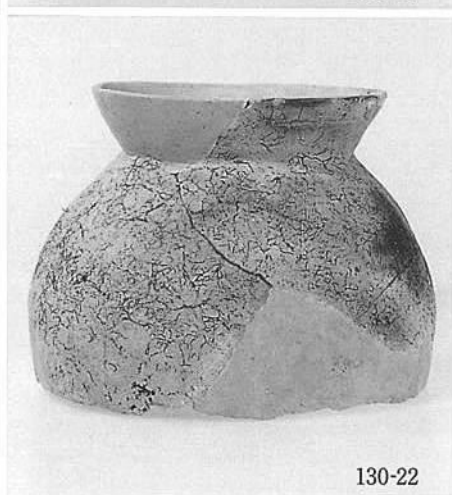
48·50·63号竖穴住居跡出土土器



63 ~ 65号竖穴住居跡出土土器



65·66·68·71号竖穴住居跡出土土器





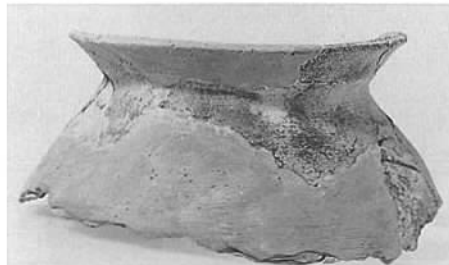
130-29



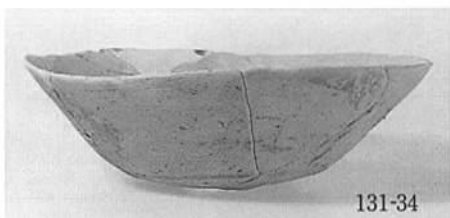
130-30



130-31



130-32



131-34



131-35



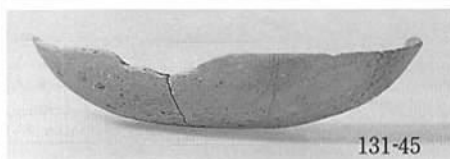
131-38



131-42



131-43



131-45



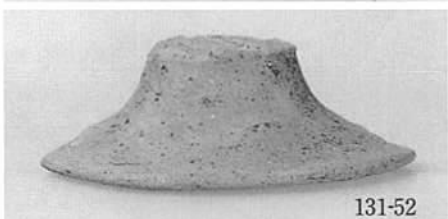
131-46



131-47



131-49



131-52



131-53



131-54

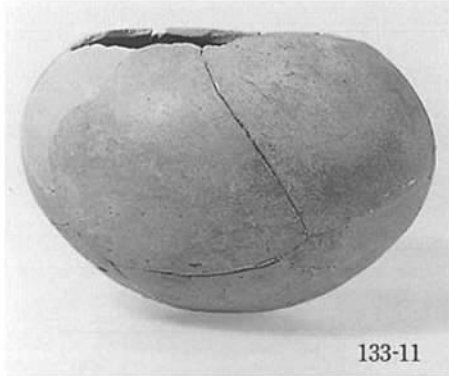


131-55



133-3

72·73号竖穴住居跡出土土器



72·74～76号竖穴住居跡出土土器



139-1



142-27



145-7



139-9



143-35



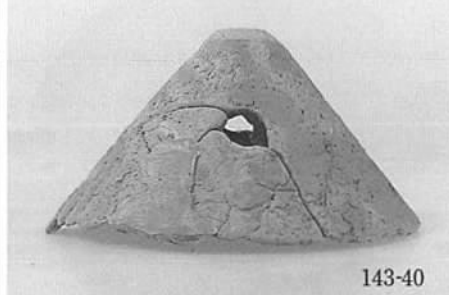
143-39



145-10



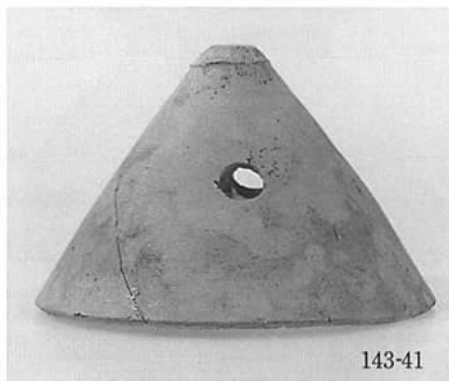
139-12



143-40



139-13



143-41



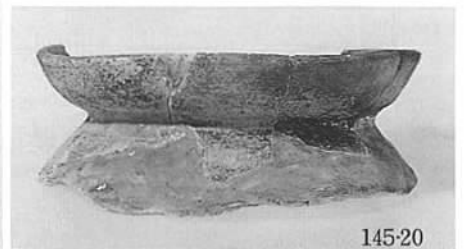
145-13



142-4



143-47



145-20



143-34



145-25

76 ~ 79号竖穴住居跡出土土器



79 ~ 81 号竖穴住居跡出土土器



152-27



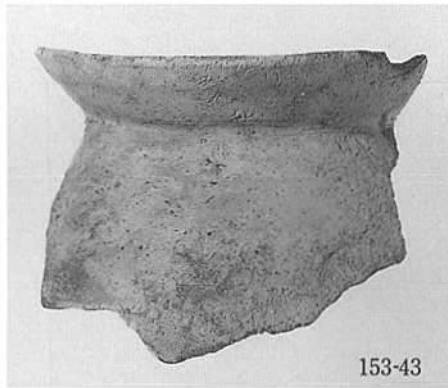
152-34



153-57



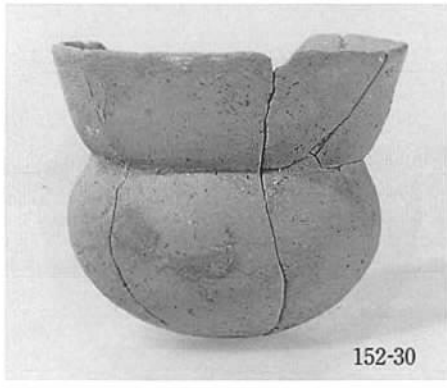
152-29



153-43



154-58



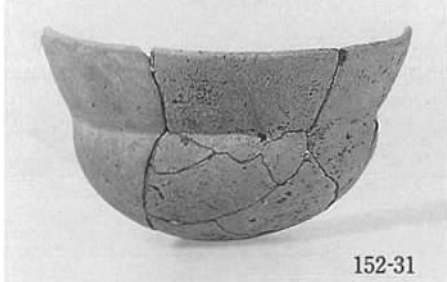
152-30



153-44



154-59



152-31



153-47



154-67



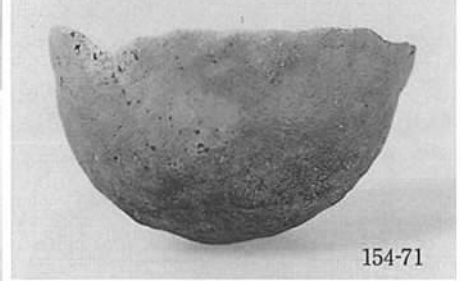
152-32



153-52



154-70

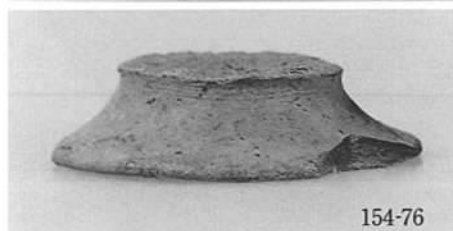


154-71

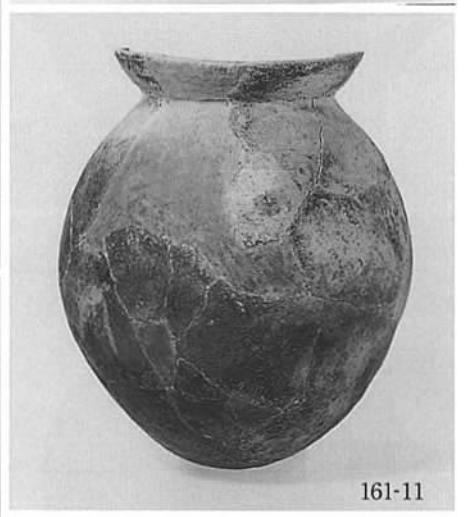
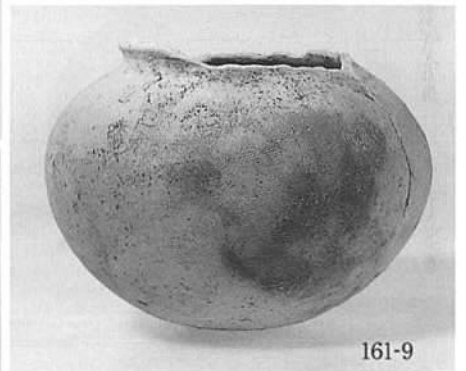
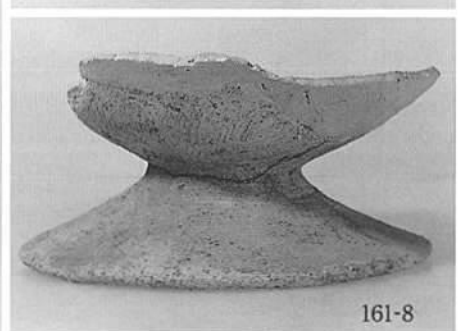
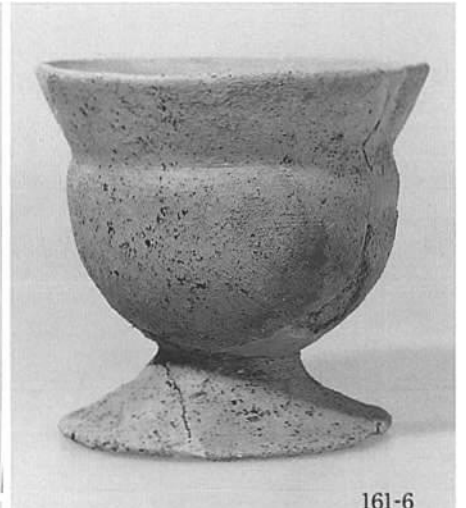


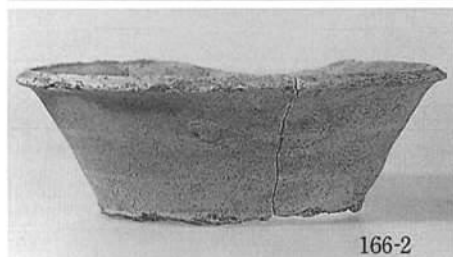
154-72

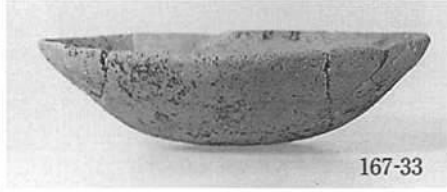
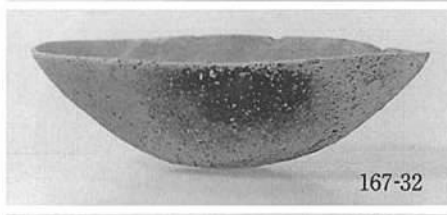
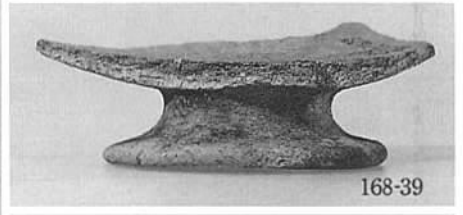
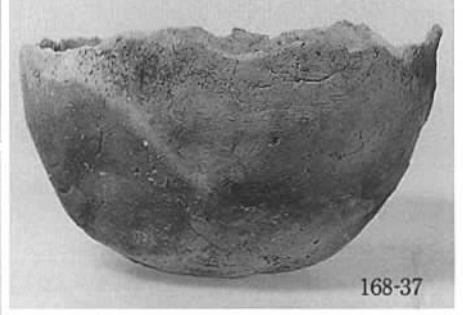
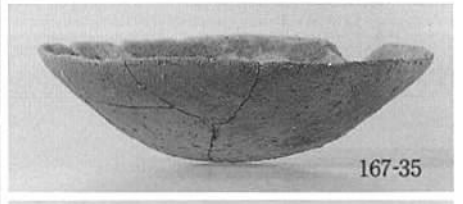
81号竖穴住居跡出土土器



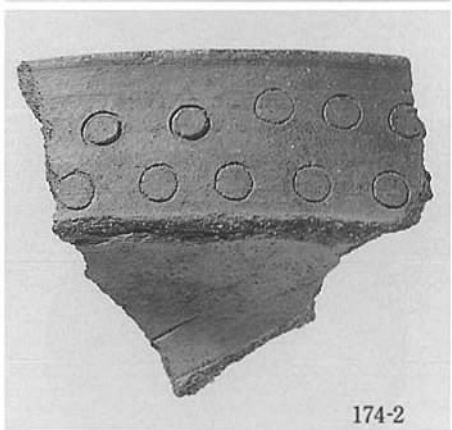
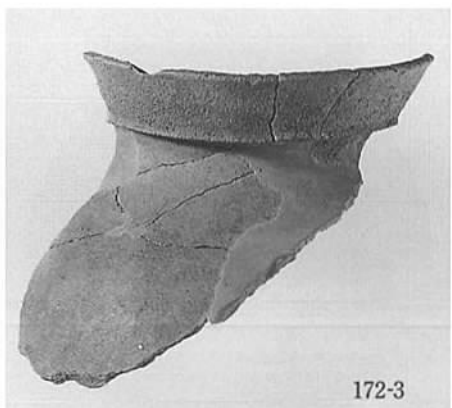
81·82号竖穴住居跡出土土器



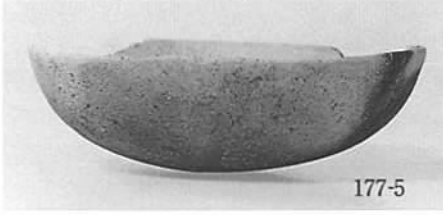
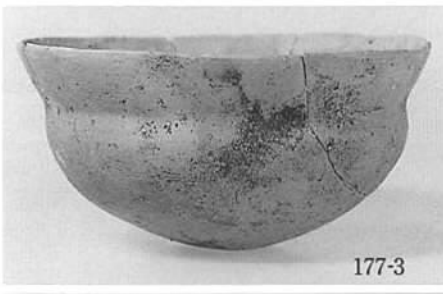
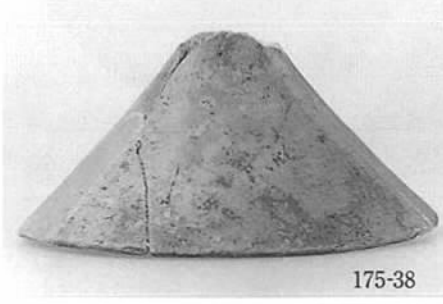
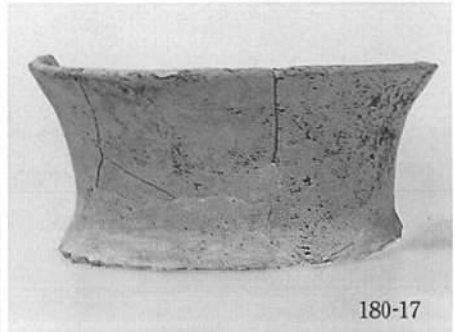




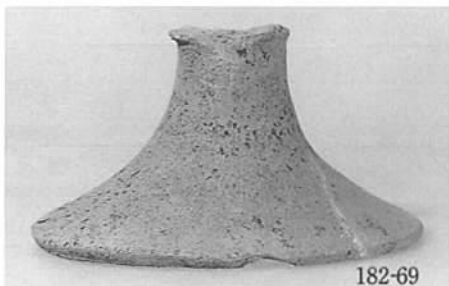
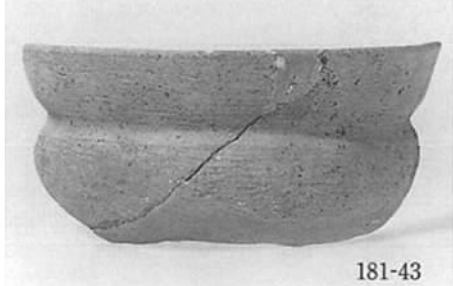
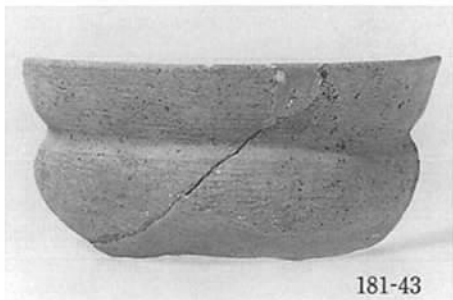
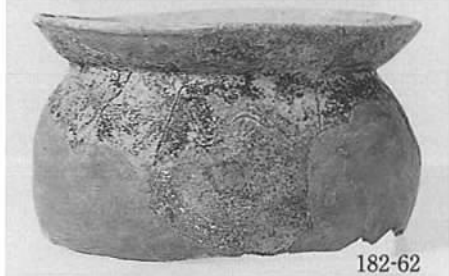
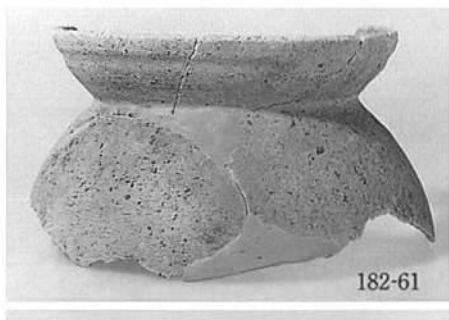
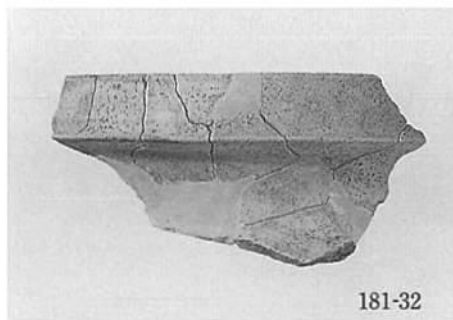
89号竖穴住居跡出土土器



89 ~ 91 号竖穴住居跡出土土器



91 ~ 93 号竖穴住居跡出土土器



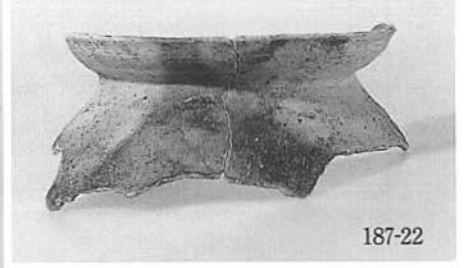
93号竖穴住居跡出土土器



183-89



185-3



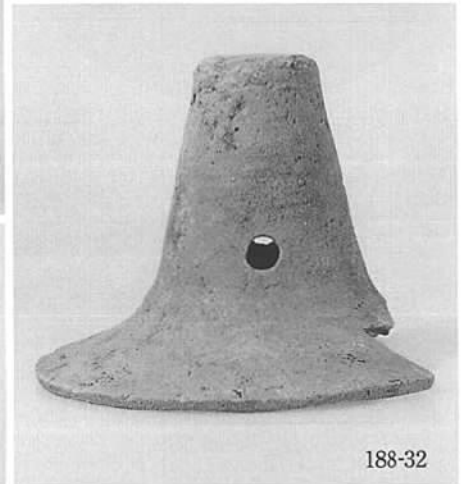
187-22



185-4



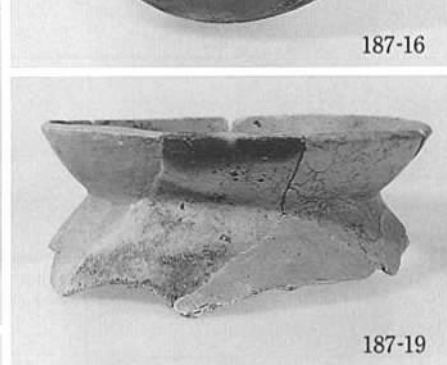
187-16



188-32



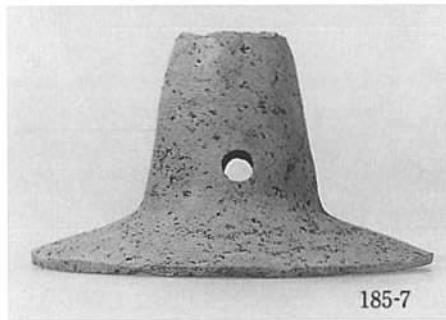
185-5



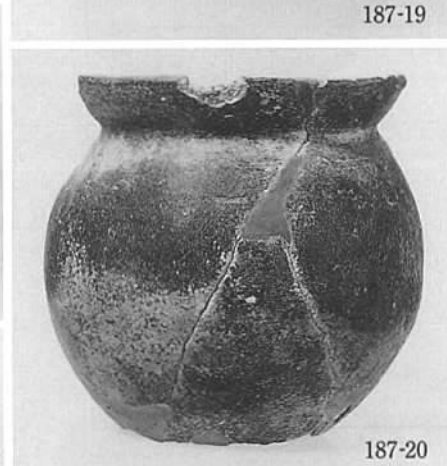
187-19



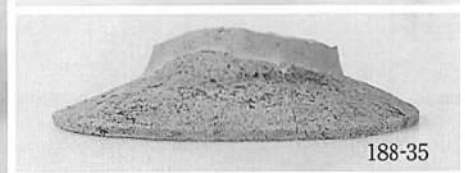
188-34



185-7



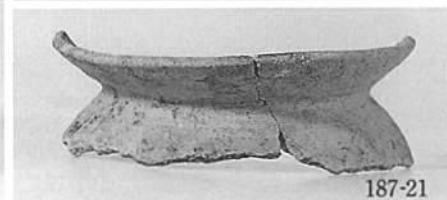
187-20



188-35



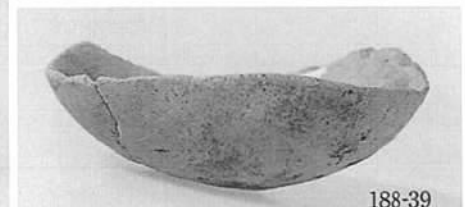
187-11



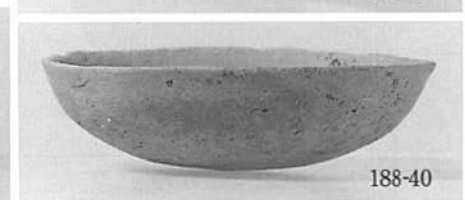
187-21



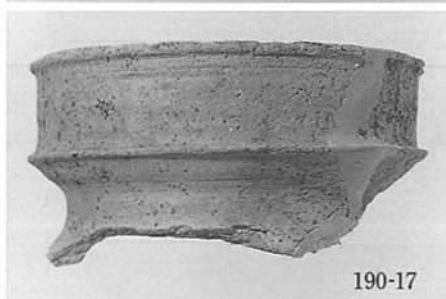
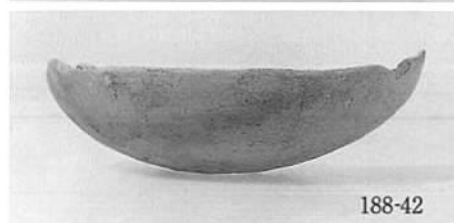
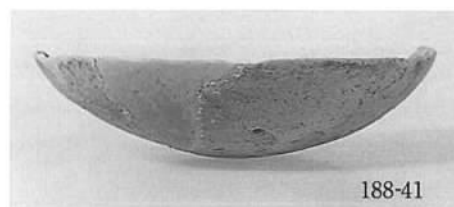
188-37

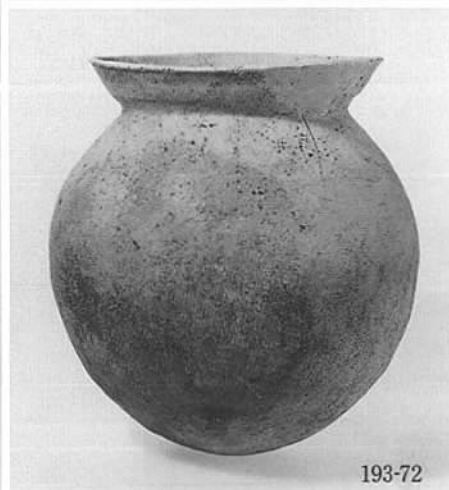


188-39

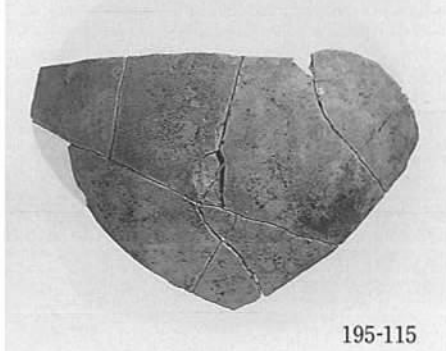
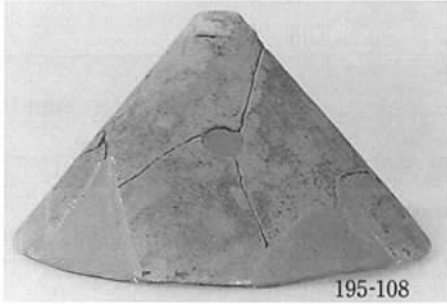
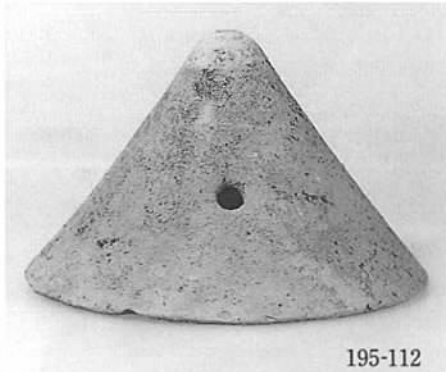
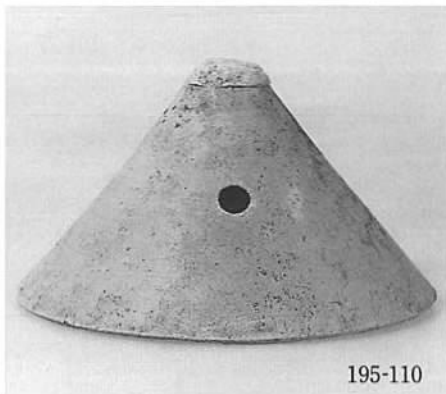
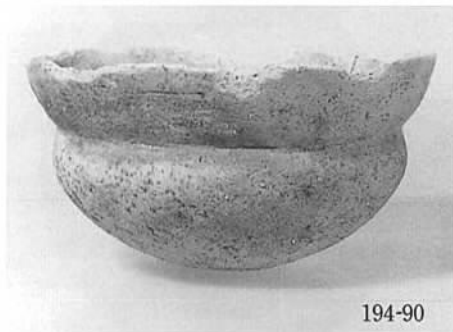
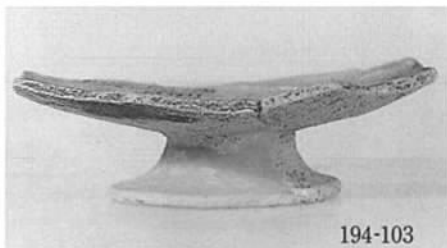


188-40

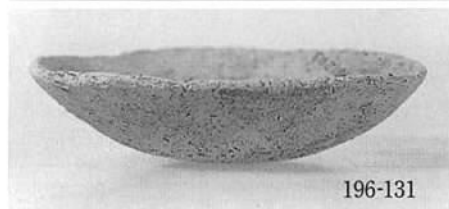
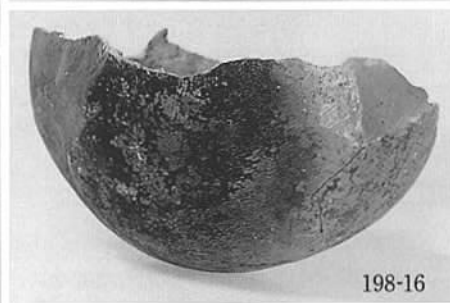
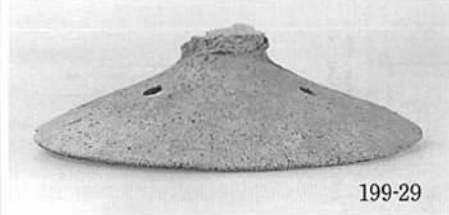
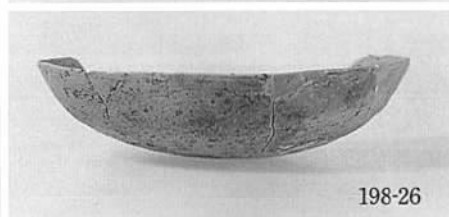




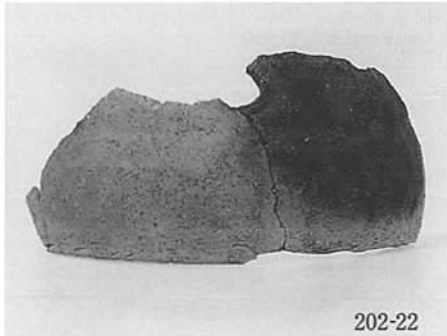
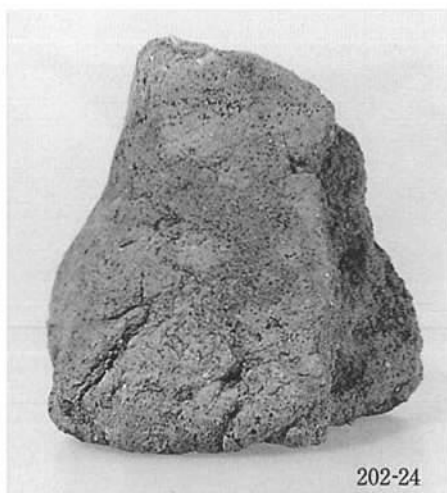
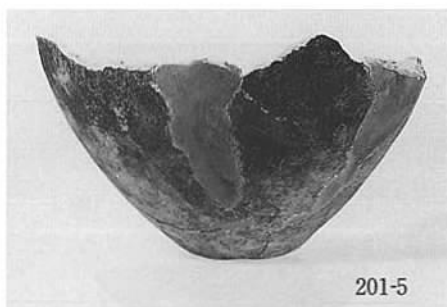
97号竖穴住居跡出土土器(1)

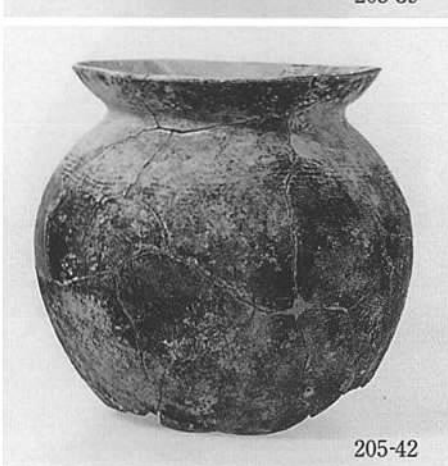
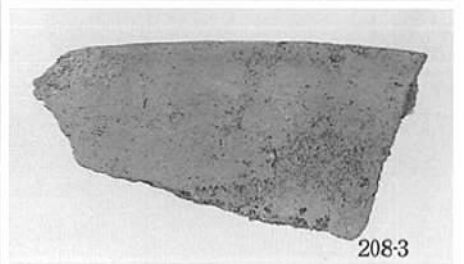
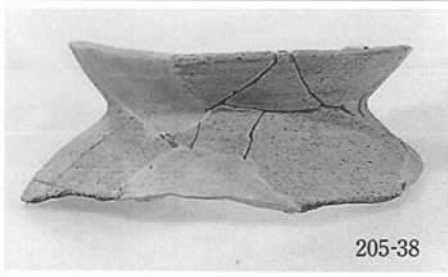
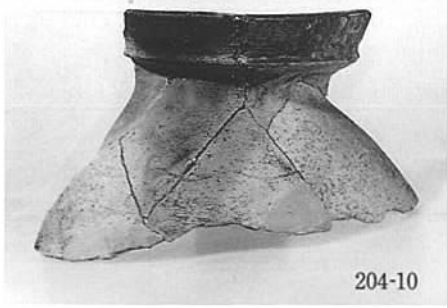
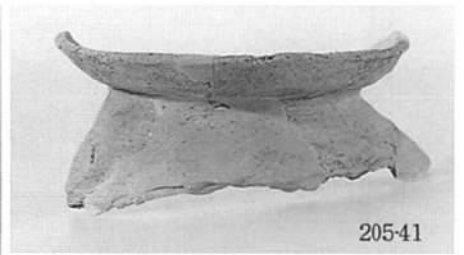


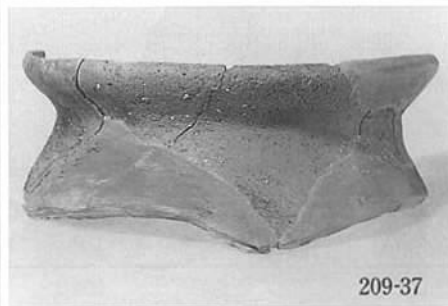
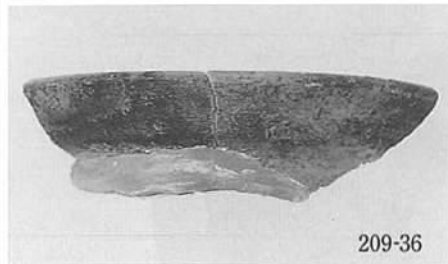
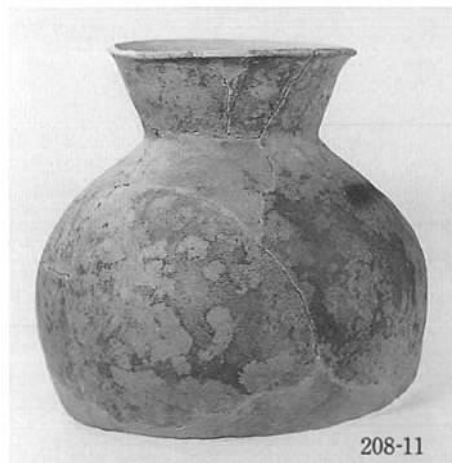
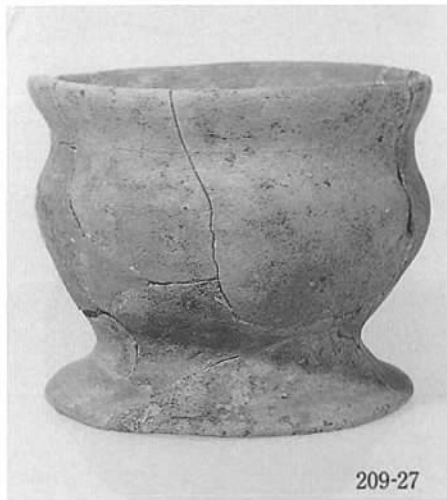
97号竖穴住居跡出土土器(2)



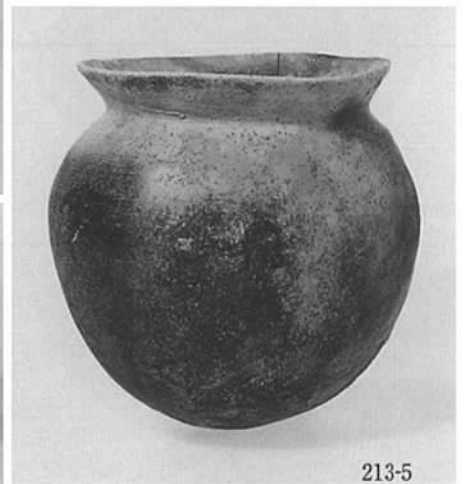
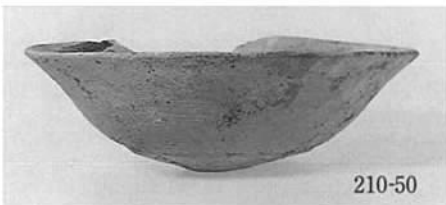
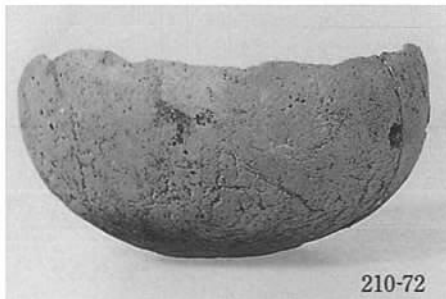
97·98号竖穴住居跡出土土器







101号竖穴住居跡出土土器



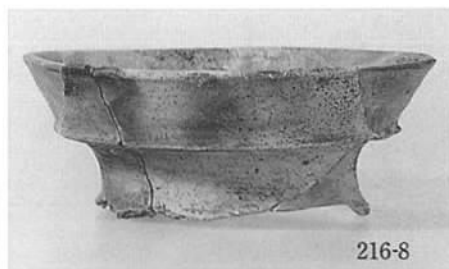
101・102号竖穴住居跡出土土器



213-6



214-12



216-8



213-7



216-2



216-16



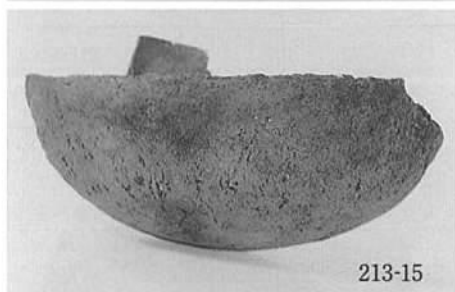
213-9



216-5



217-20



213-15



216-11



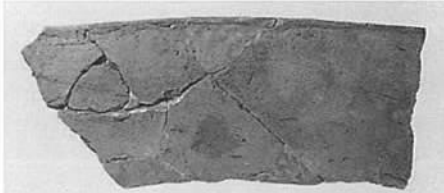
217-27

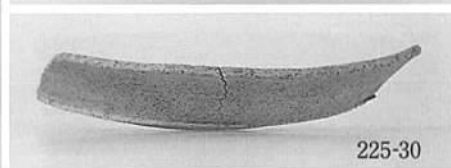


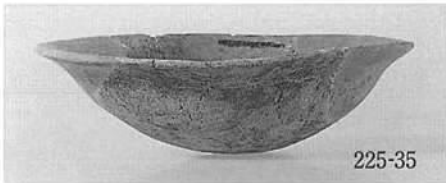
214-20



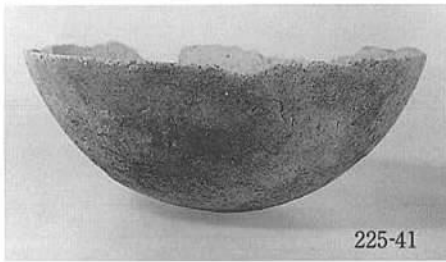
218-33







225-35



225-41



225-42



226-44



229-17



229-11



225-40



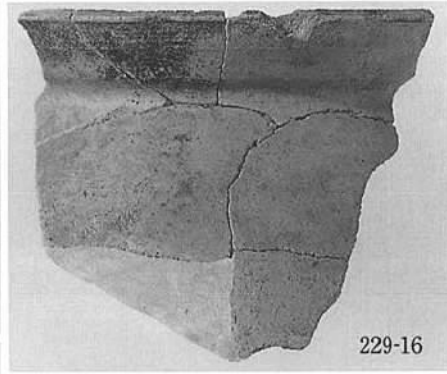
229-12



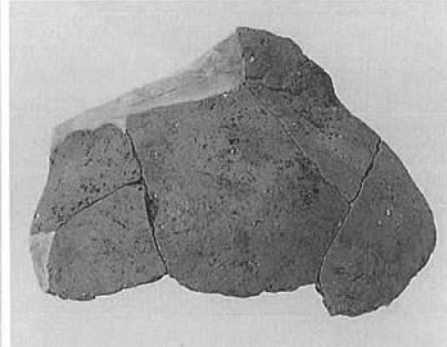
229-13



229-14



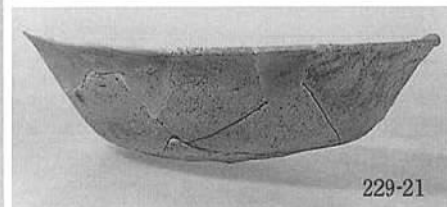
229-16



229-18



229-18



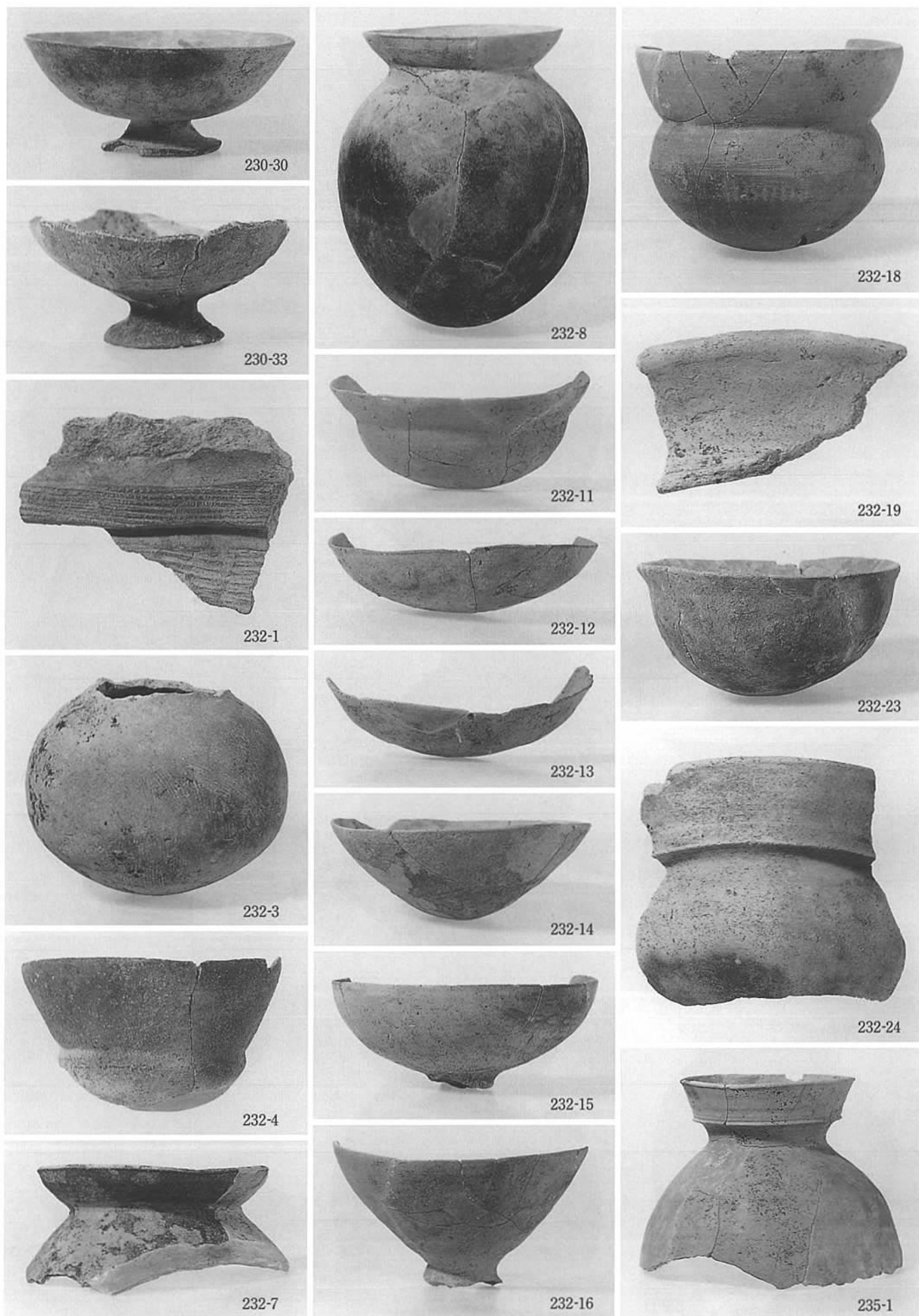
229-21



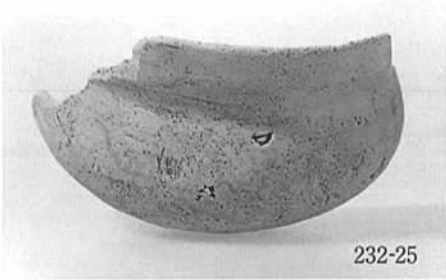
230-25



230-29



110 ~ 114 号竖穴住居跡出土土器



232-25



235-4



235-6



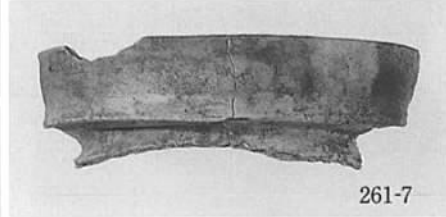
261-4



261-5



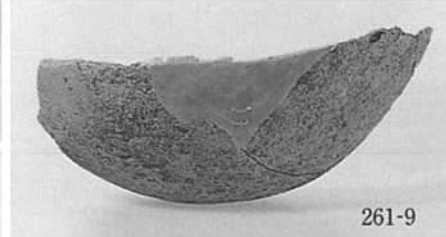
261-6



261-7



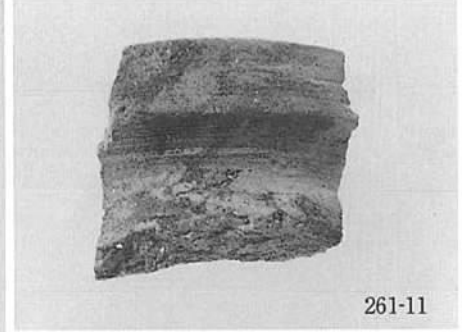
261-8



261-9



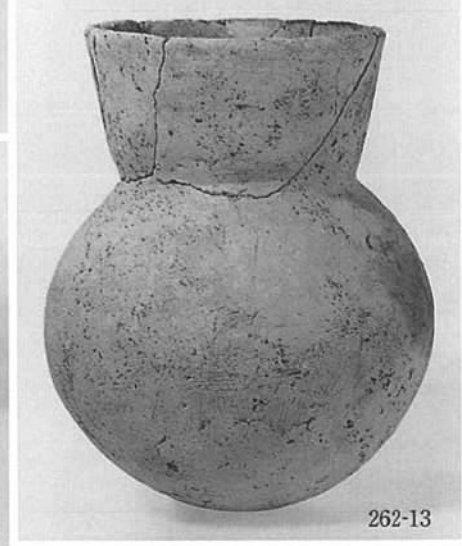
261-10



261-11



262-12



262-13



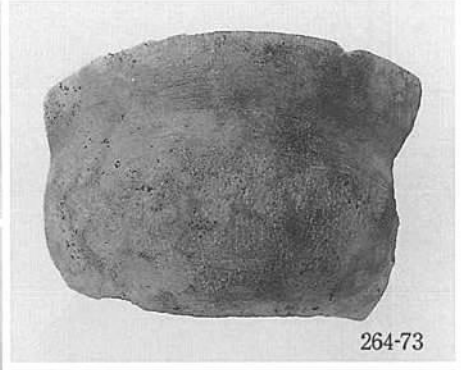
262-15



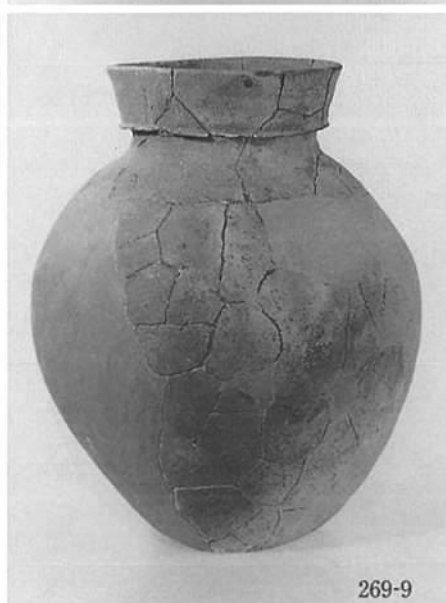
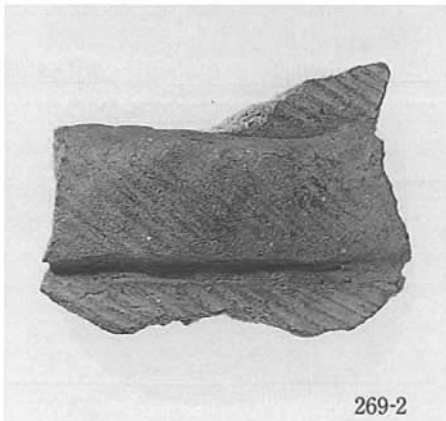
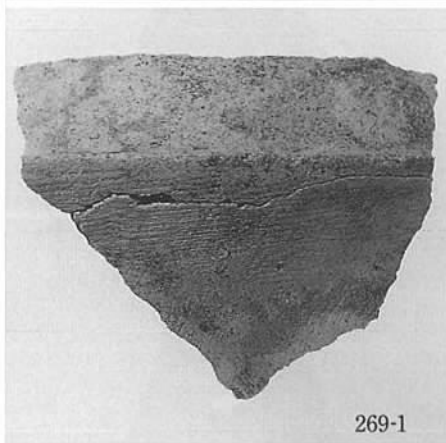
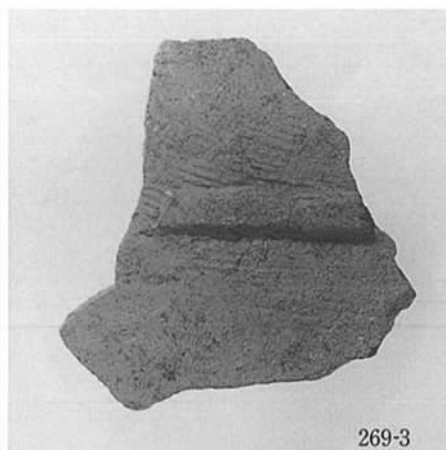
262-16

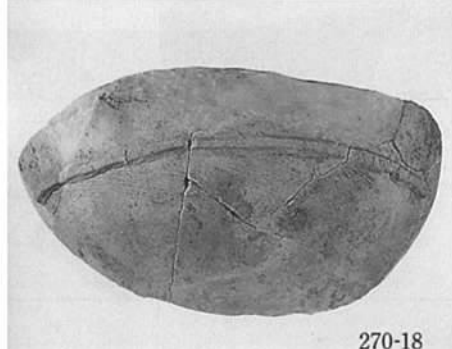
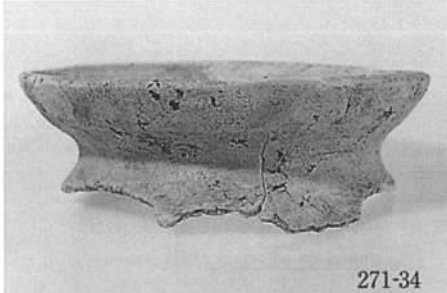
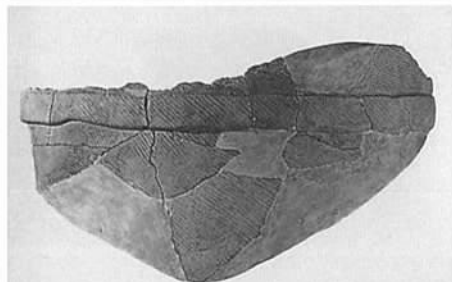
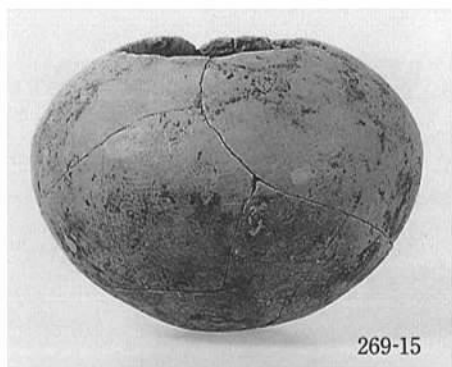


116号竖穴住居跡出土土器(1)



116号竖穴住居跡出土土器(2)





119号竖穴住居跡出土土器



119 ~ 121 号竖穴住居跡出土土器



277-61



279-18



280-29



277-67



279-19



280-31



279-13



280-20



280-32



279-17



280-28



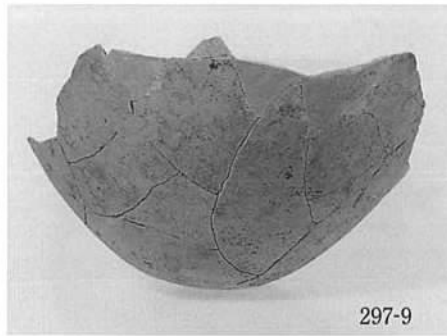
280-36



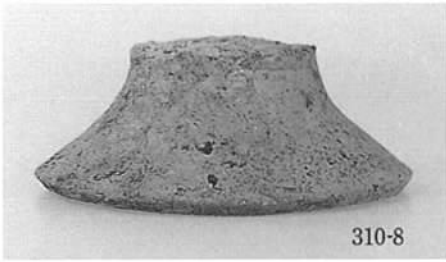
280-37



122 · 124 · 125 · 128 号竖穴住居跡出土土器







310-8



315-9



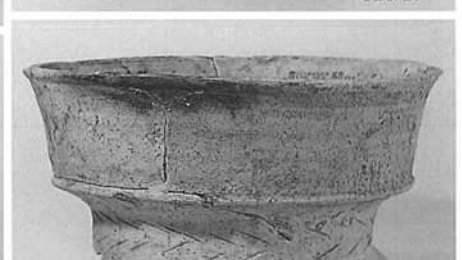
316-17



310-7



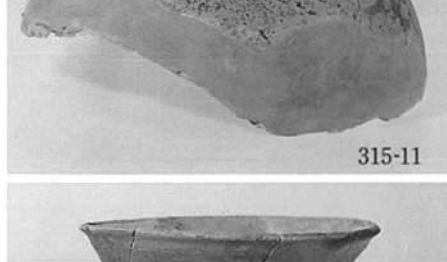
315-11



316-19



313-9



315-13



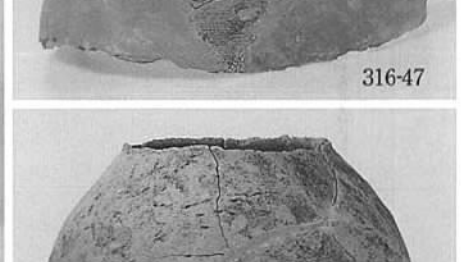
316-47



313-17



315-14



317-57



313-22



315-5



317-48



315-5



317-48



317-58



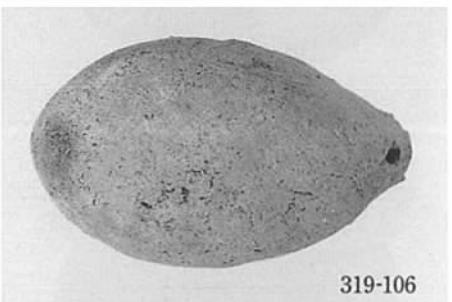
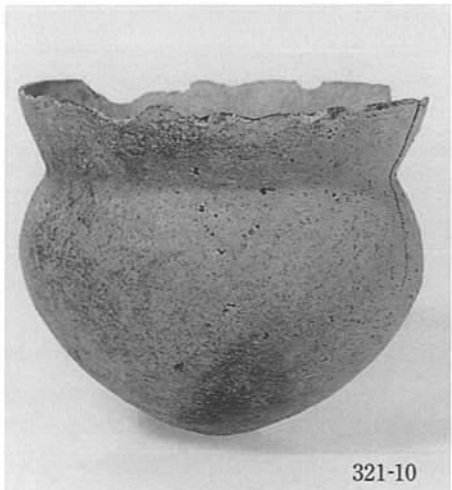
315-5

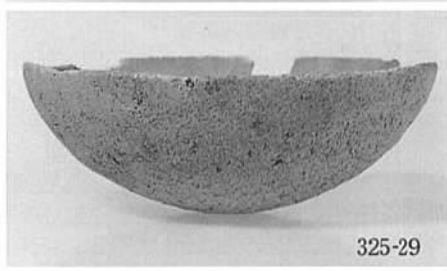
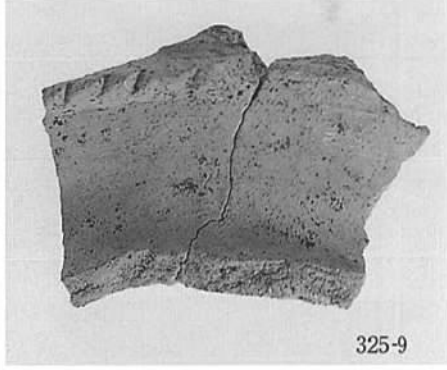
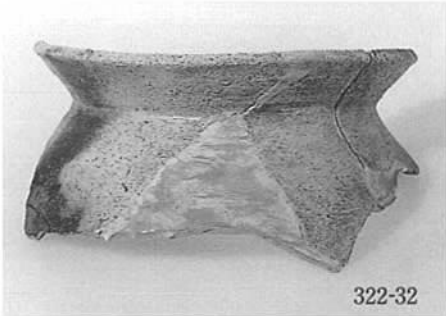


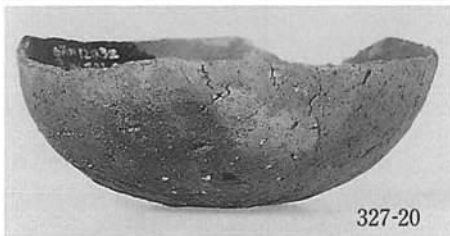
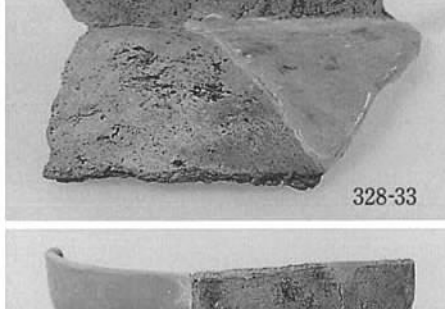
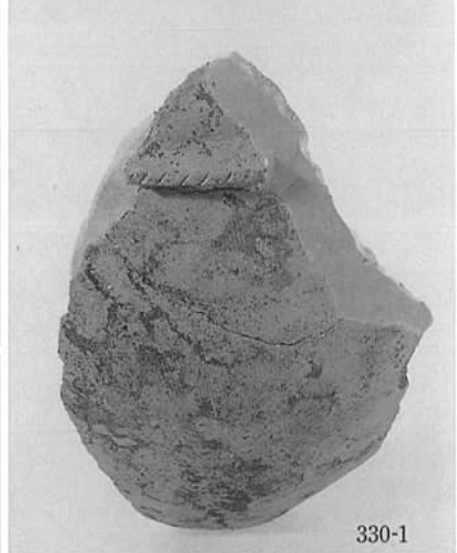
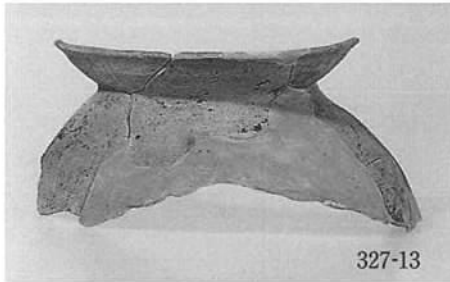
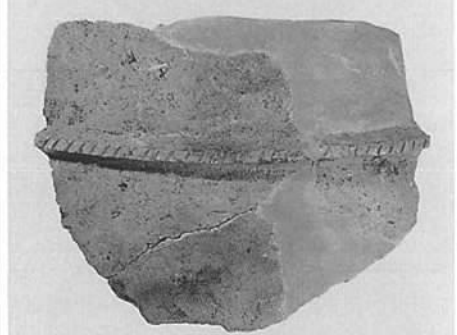
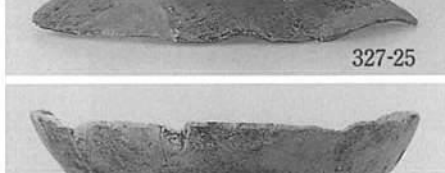
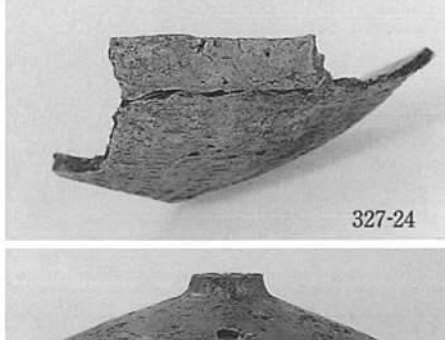
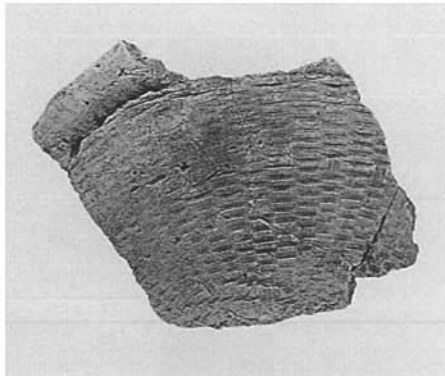
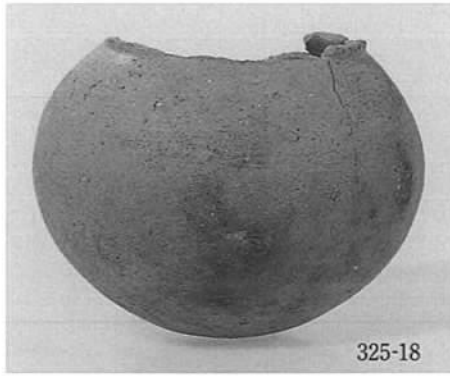
317-48



317-58









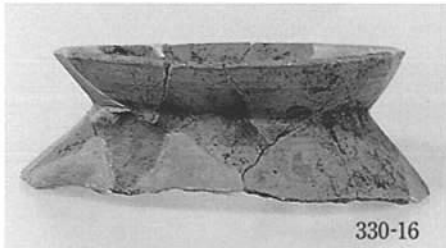
330-9



331-28



331-50



330-16



331-29



332-9



330-18



331-34



332-11



331-21



331-24

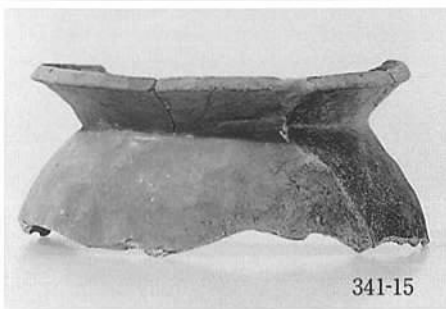
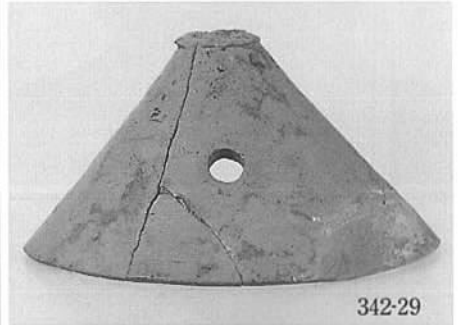


331-35

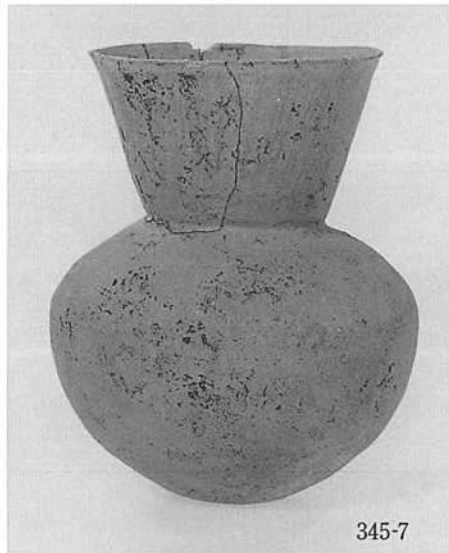
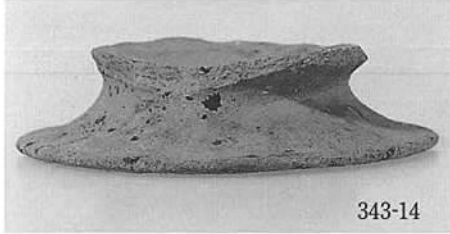


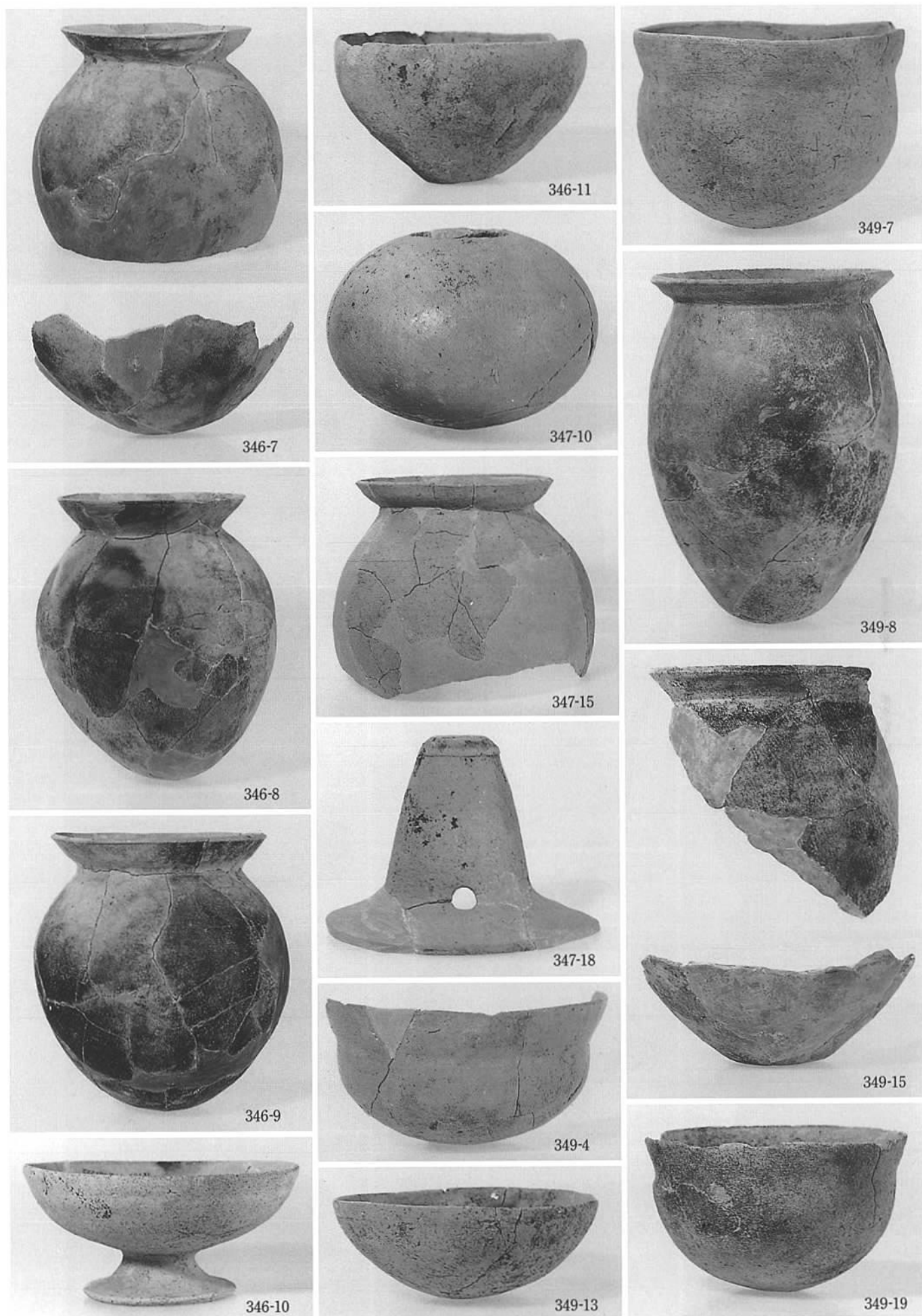
332-15



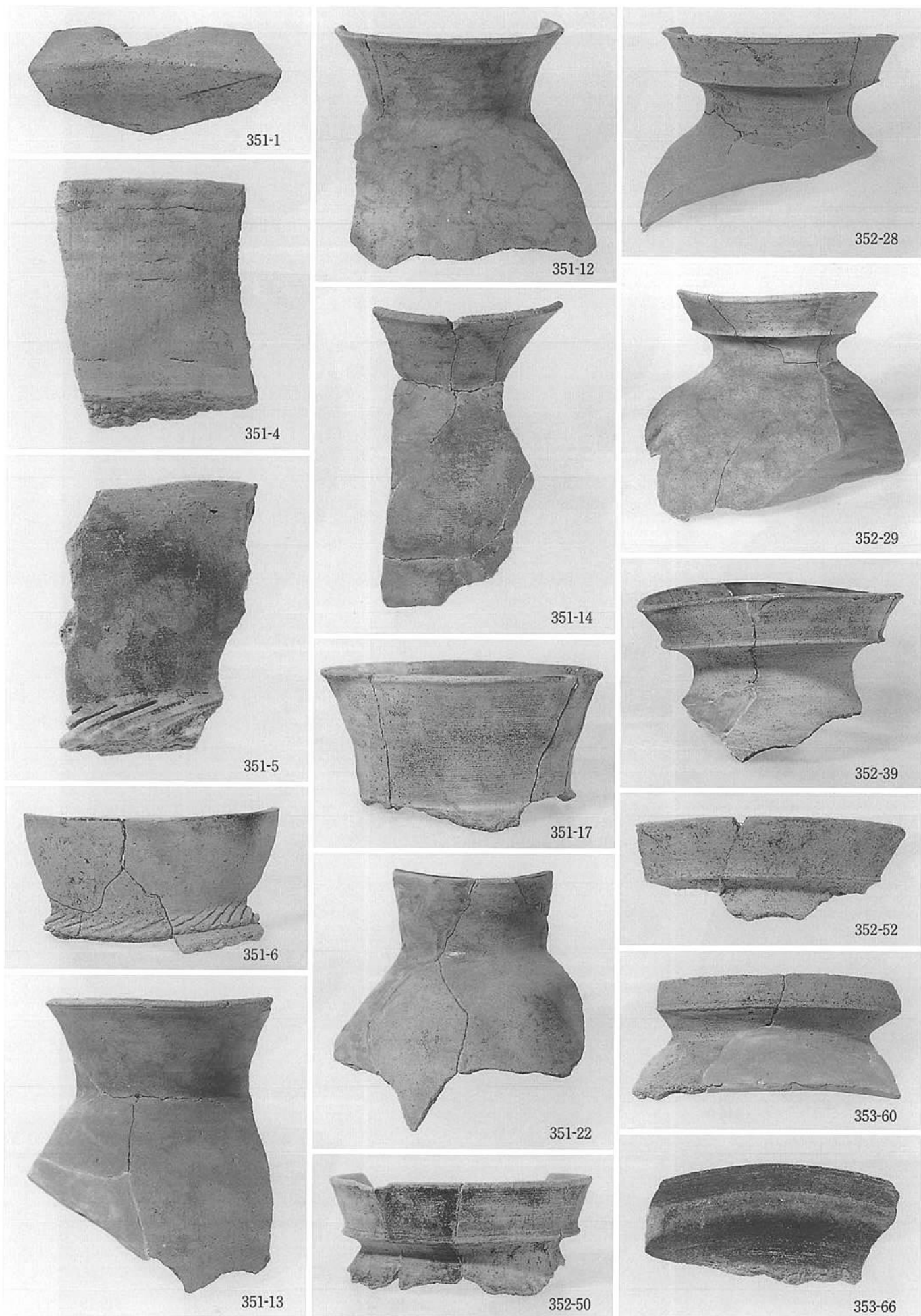


154 ~ 156 号竖穴住居跡出土土器

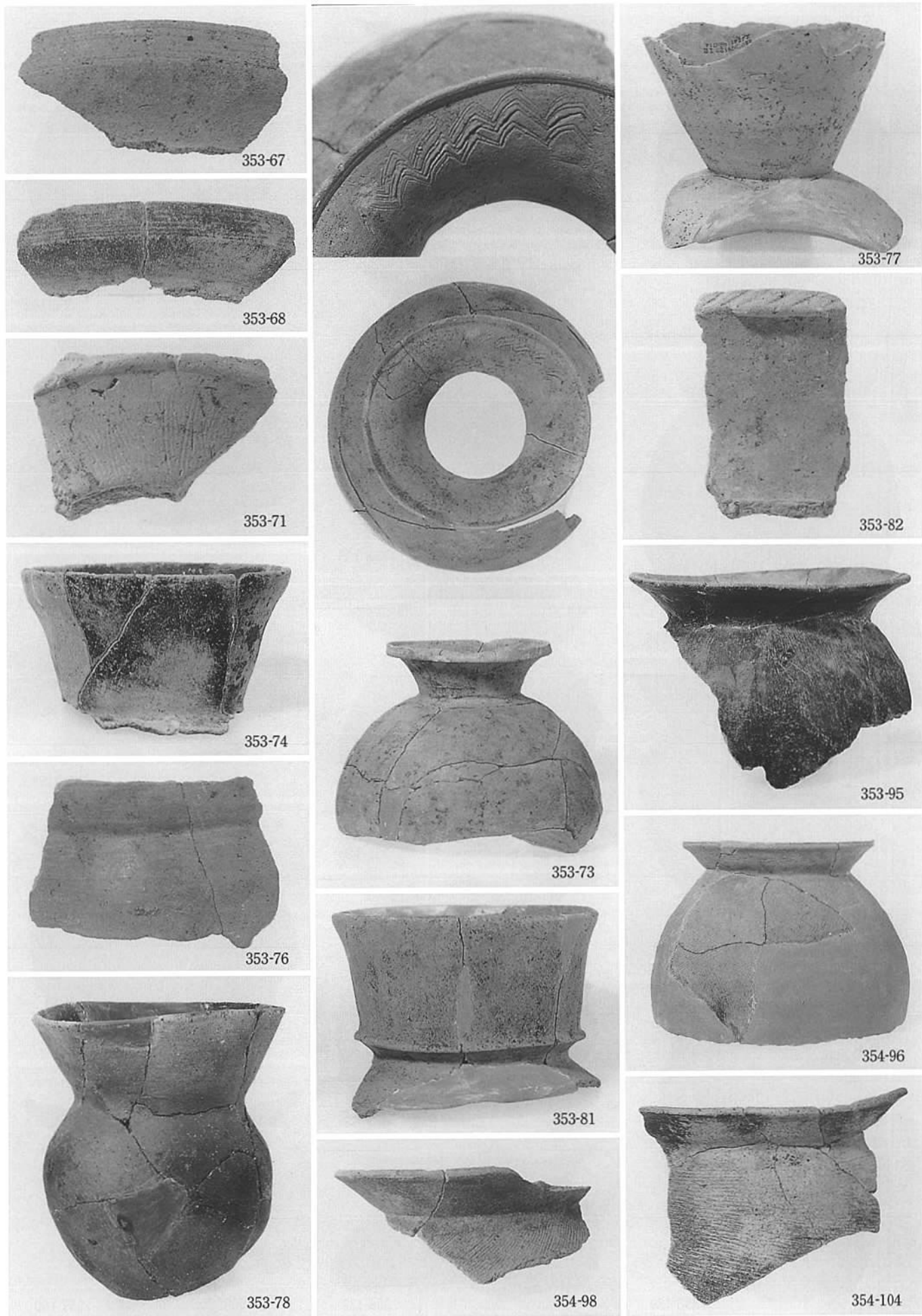




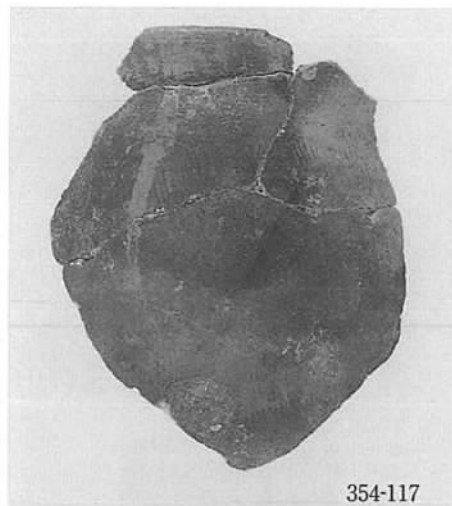
159 · 161 · 162 · 165 · 168 · 170 号竖穴住居跡出土土器



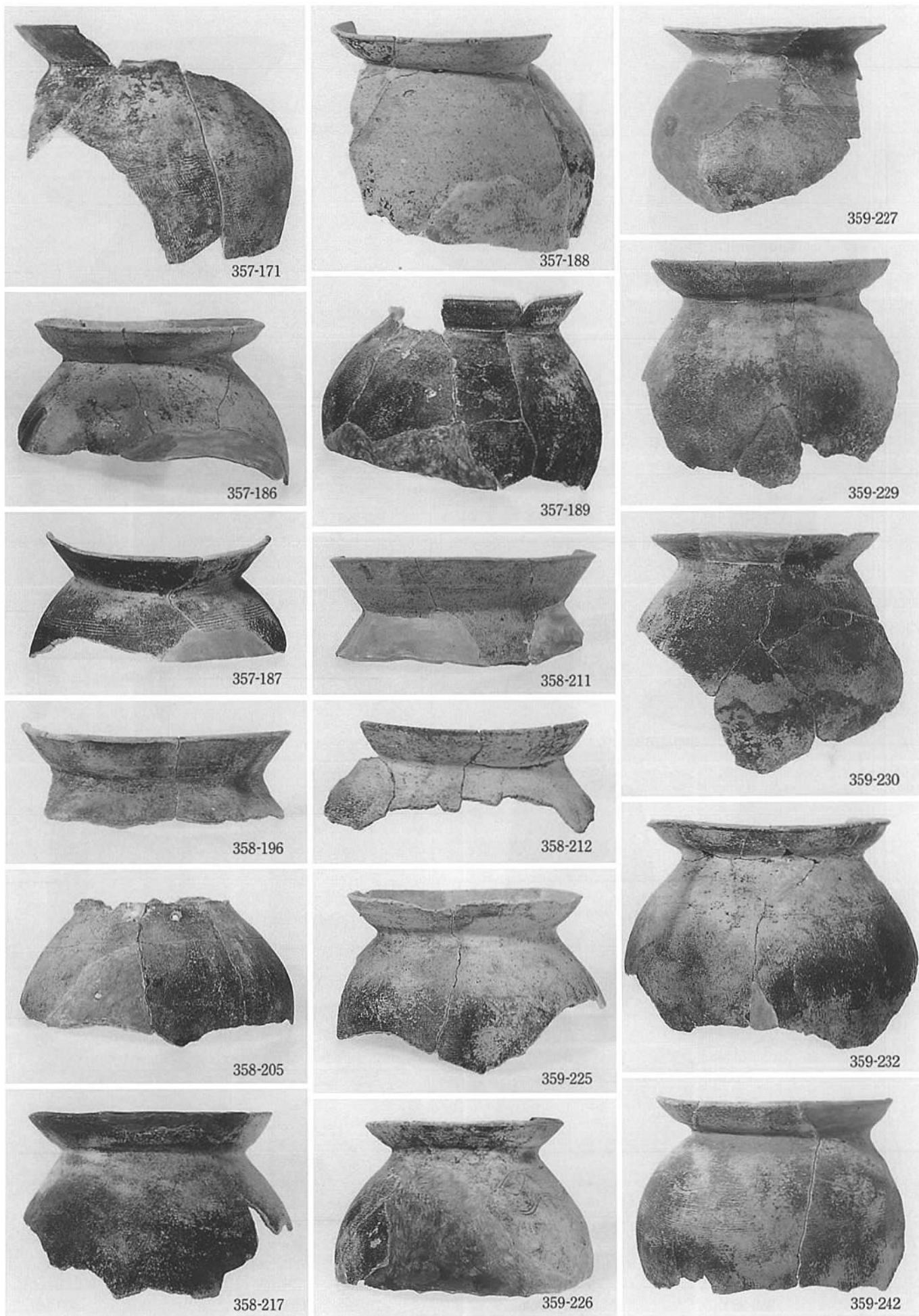
41号土坑出土土器（1）



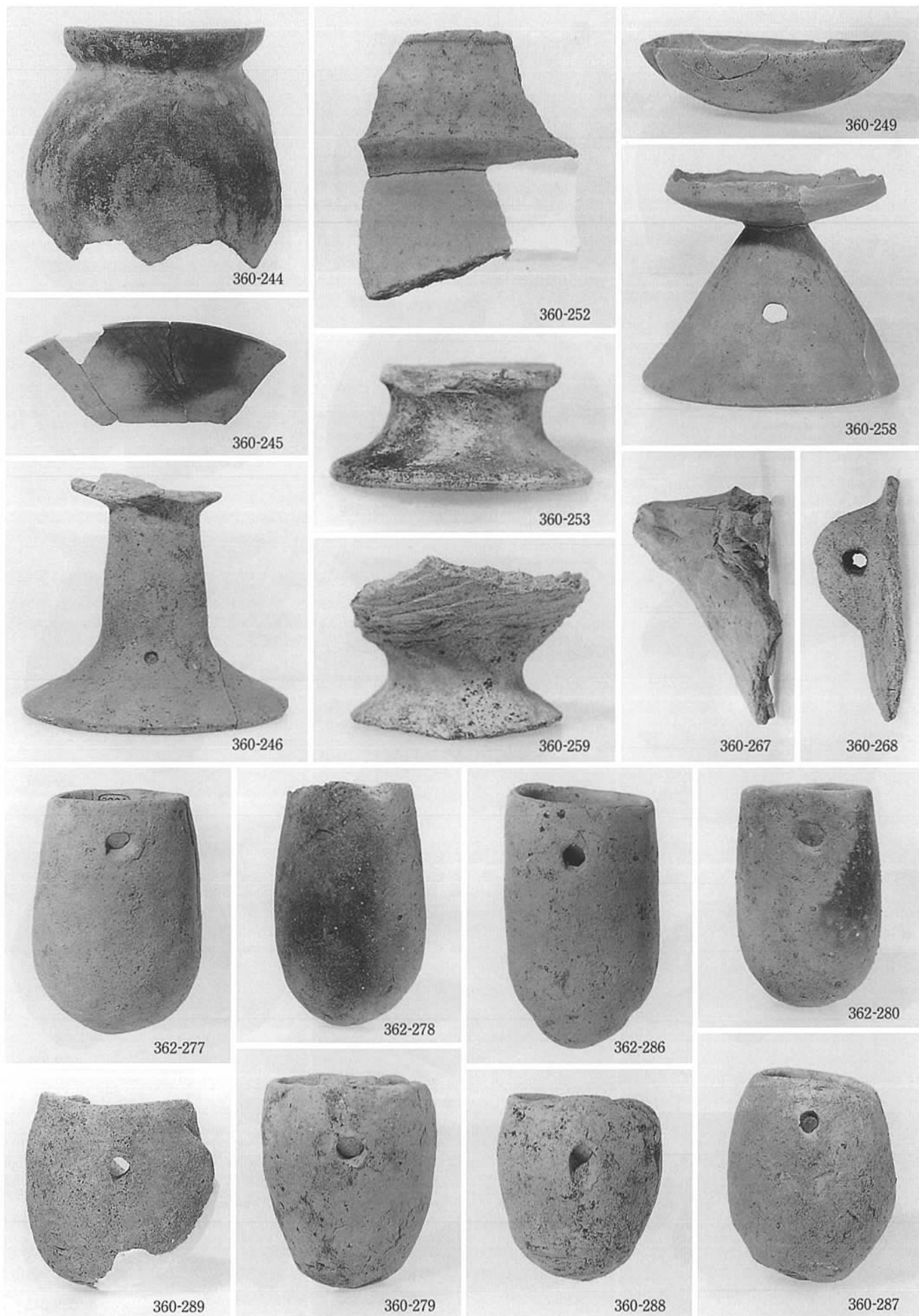
41号土坑出土土器(2)



41号土坑出土土器(3)



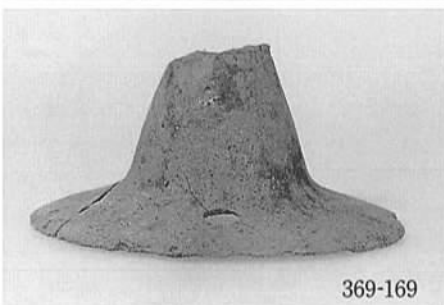
41号土坑出土土器(4)



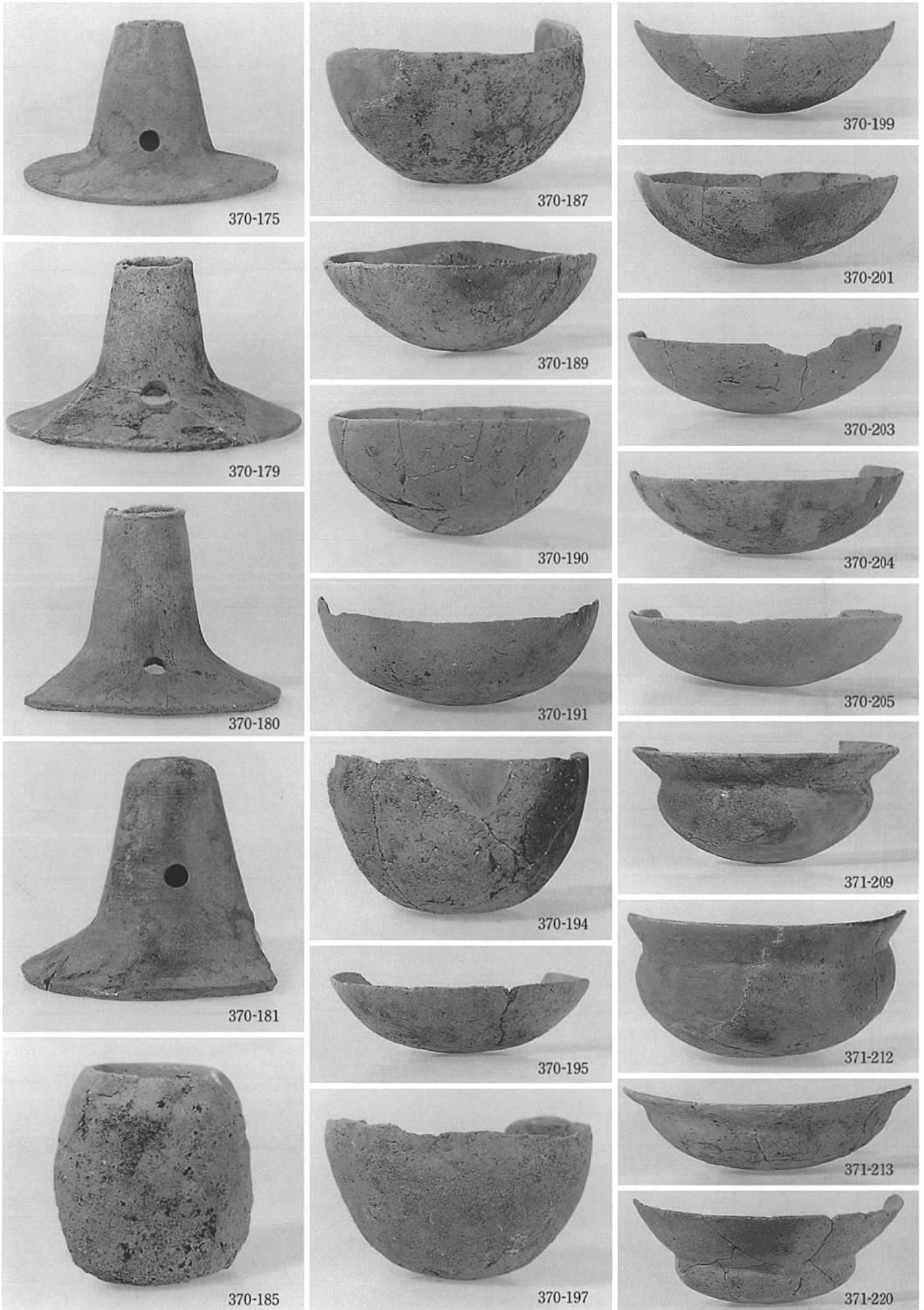
41号土坑出土土器(5)



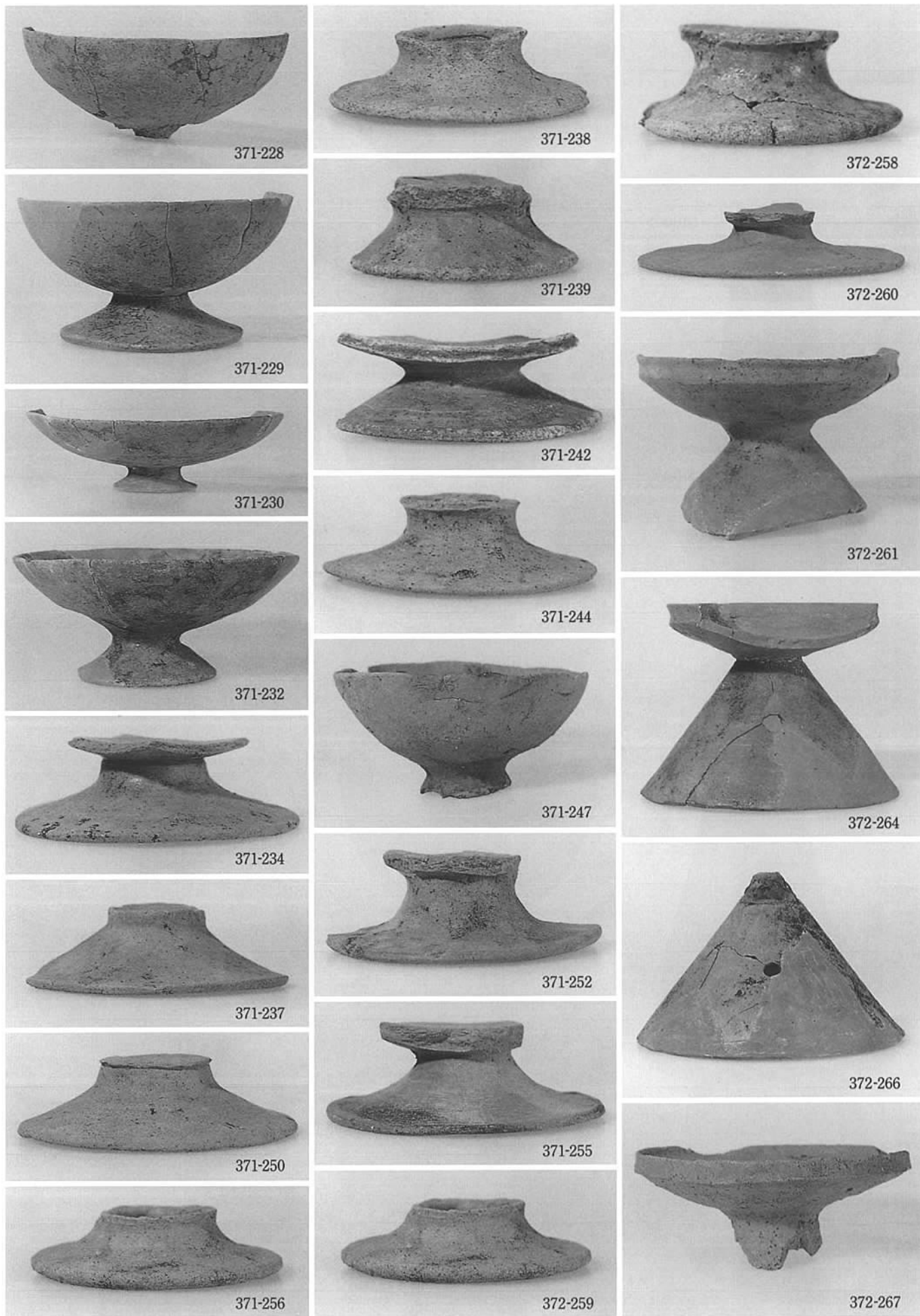
包含層・近世遺構等出土古墳時代土器 (1)



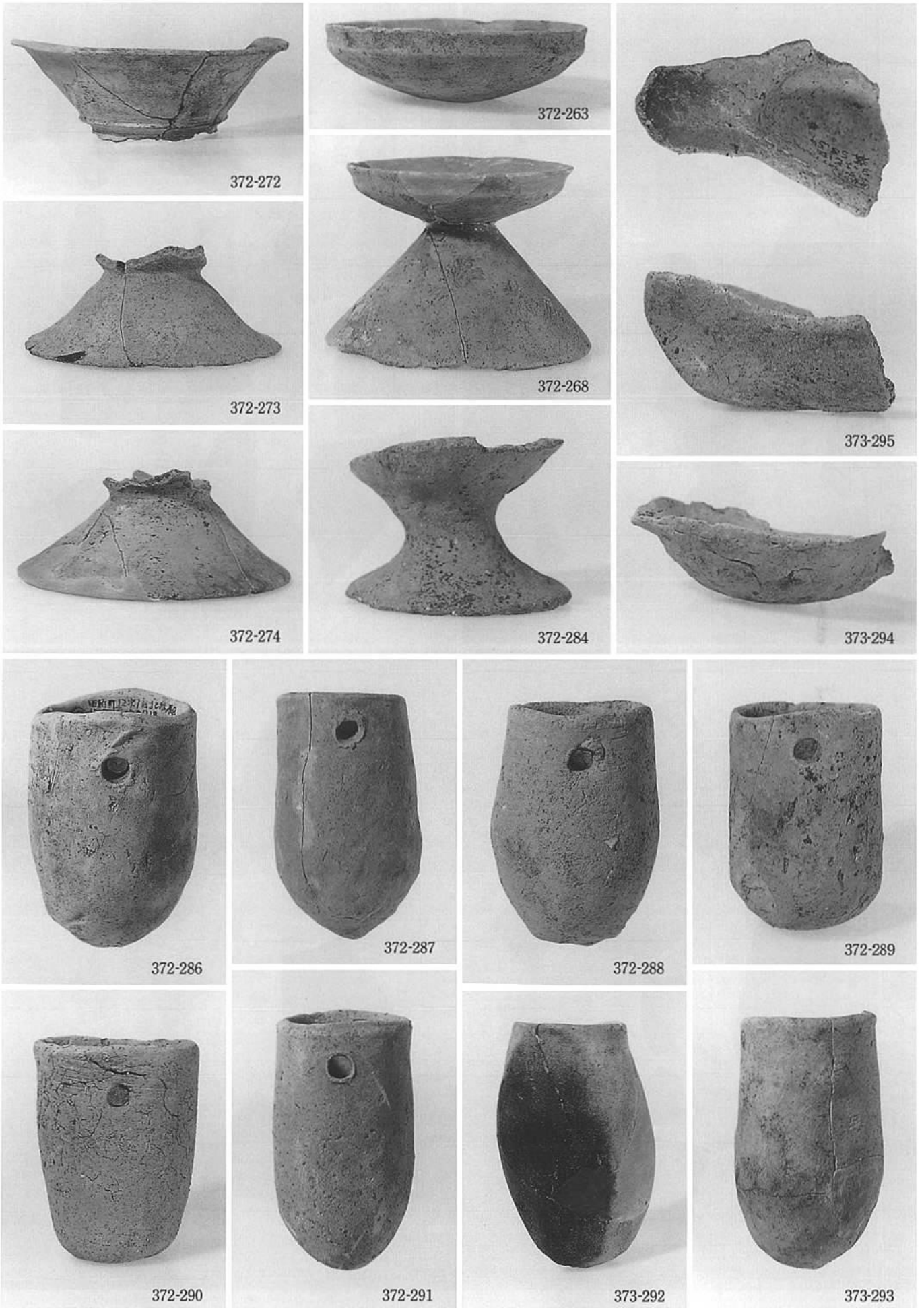
包含層・近世遺構等出土古墳時代土器（2）



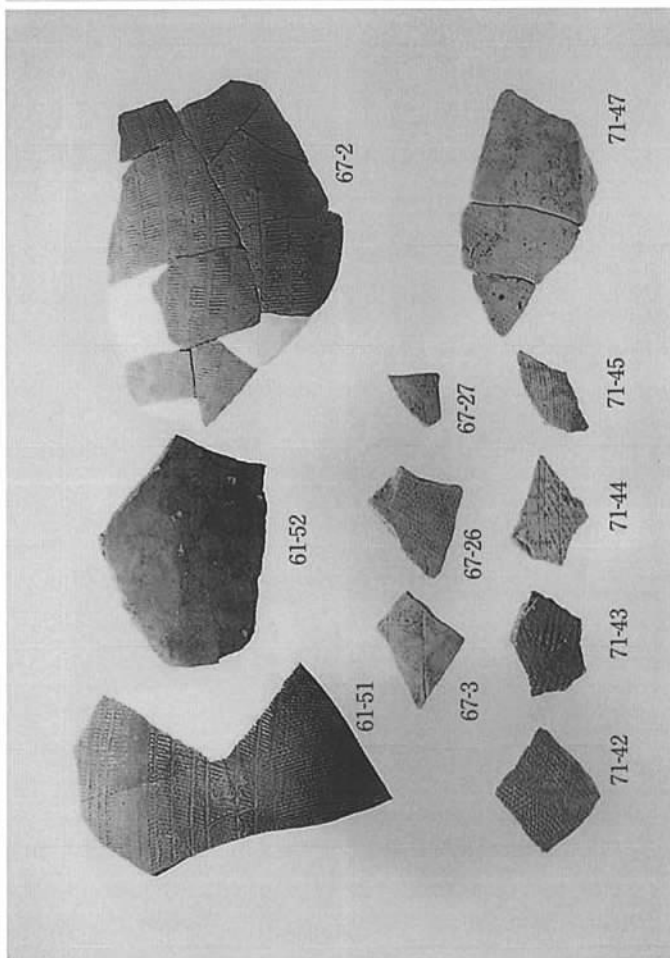
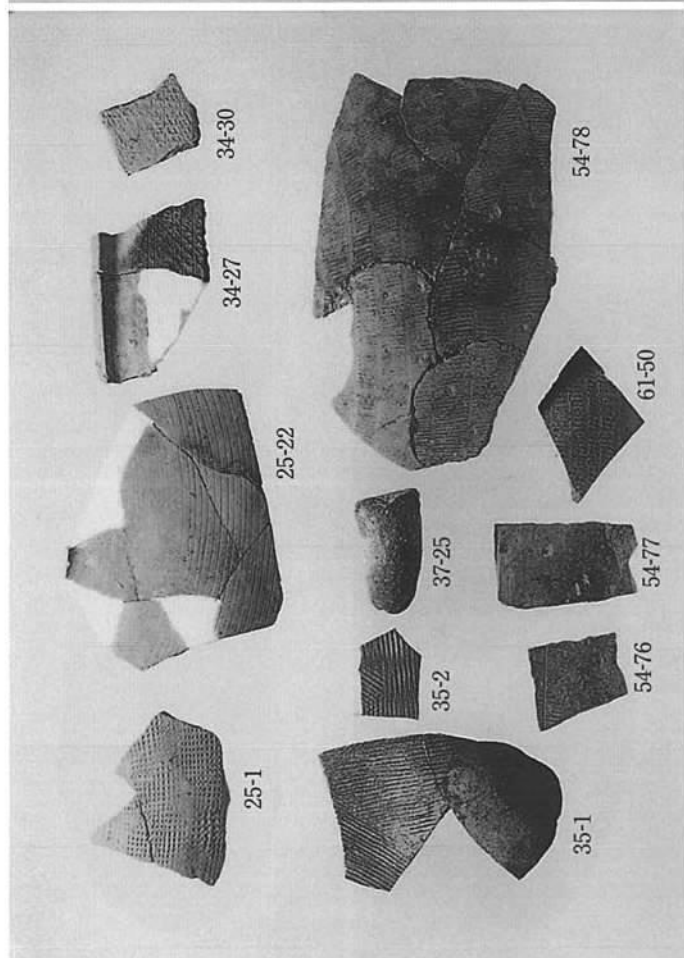
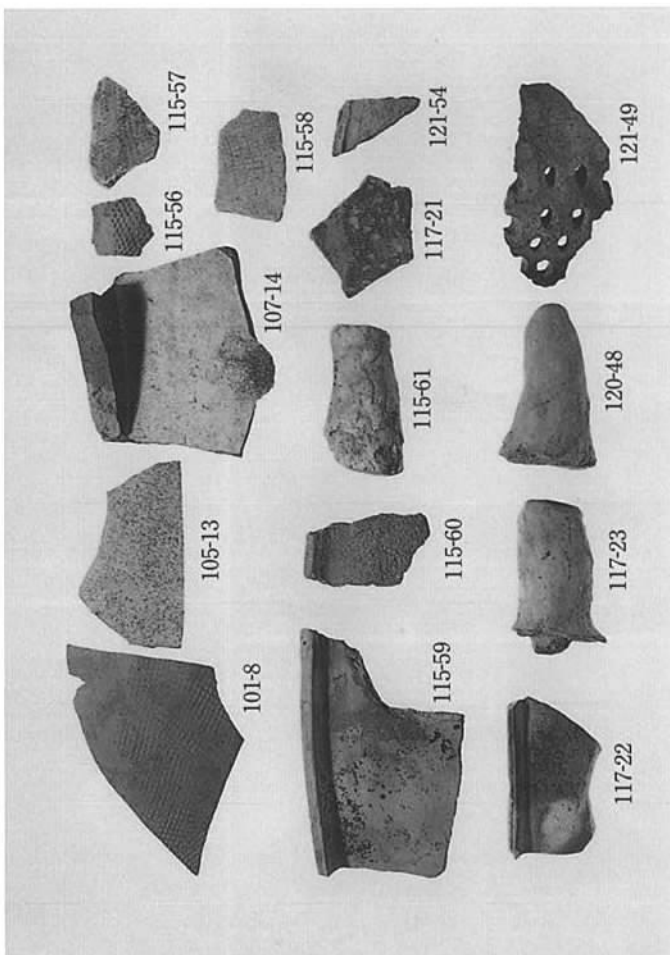
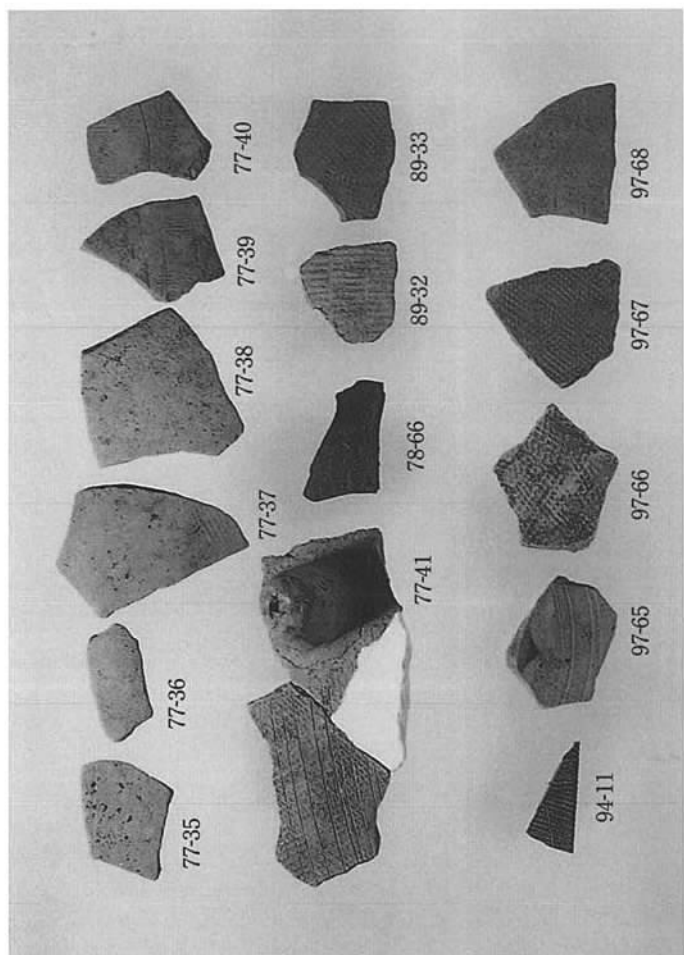
包含層・近世遺構等出土古墳時代土器（3）



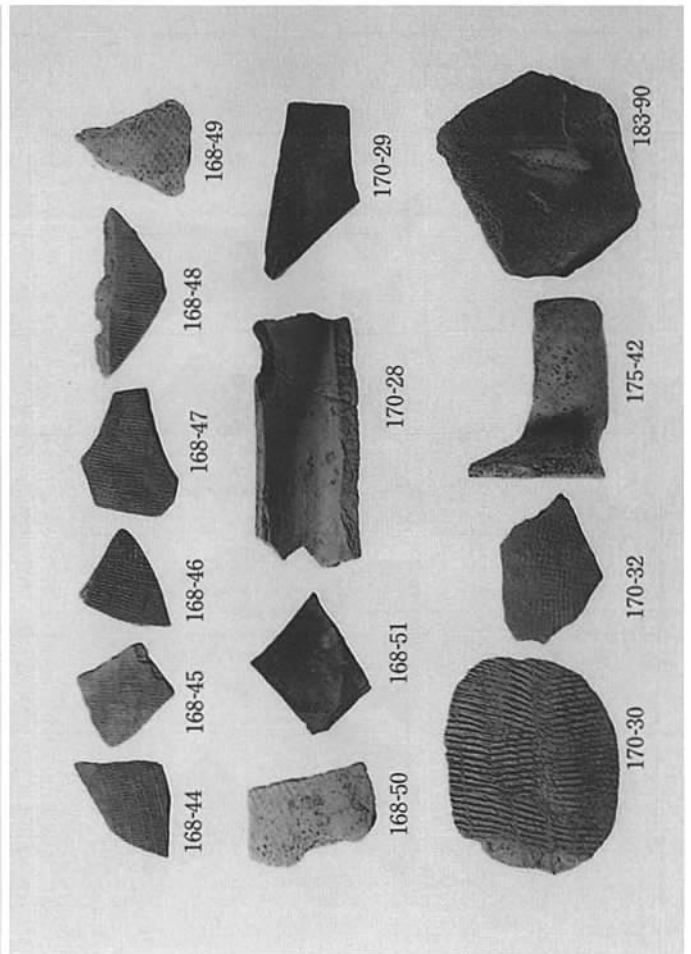
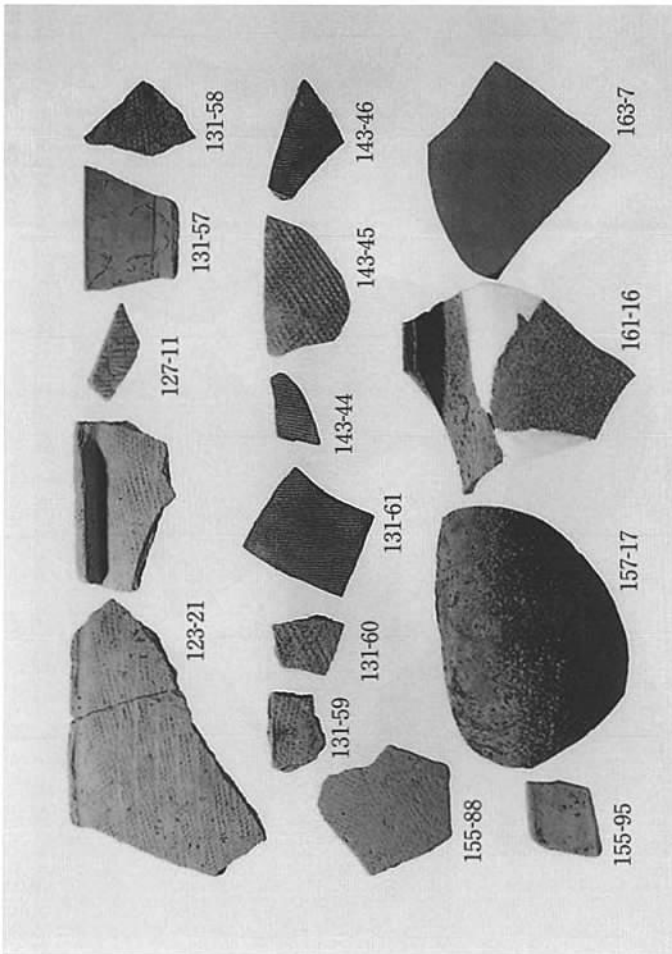
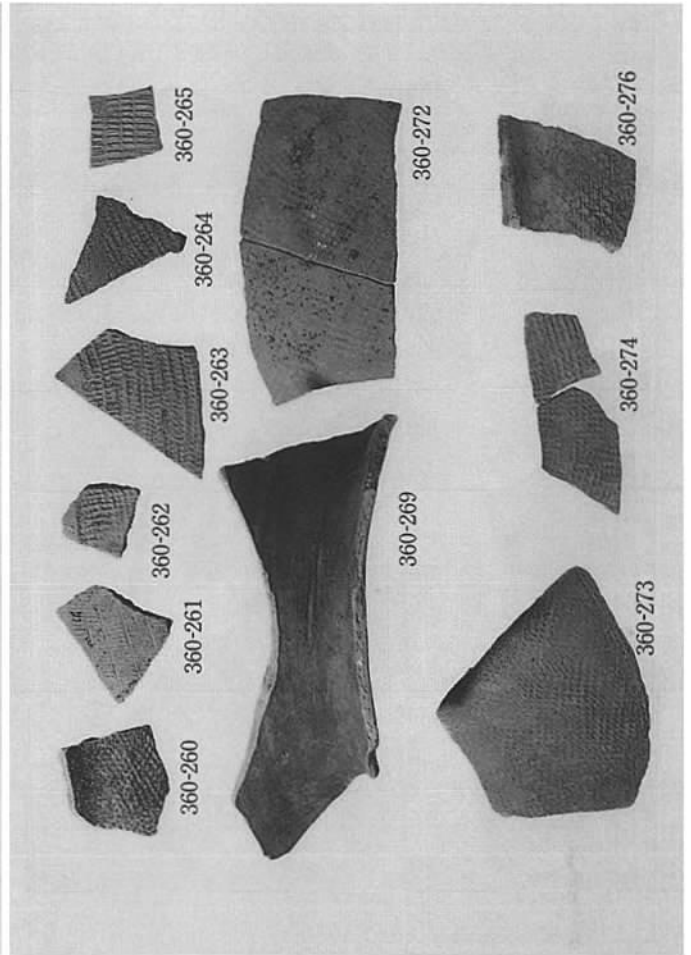
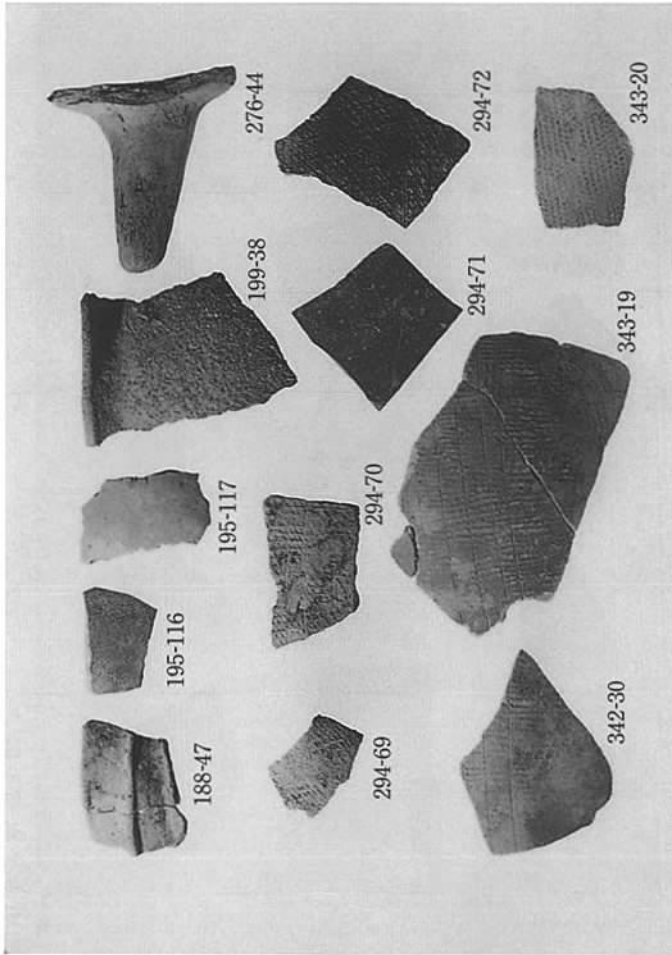
包含層・近世遺構等出土古墳時代土器（4）



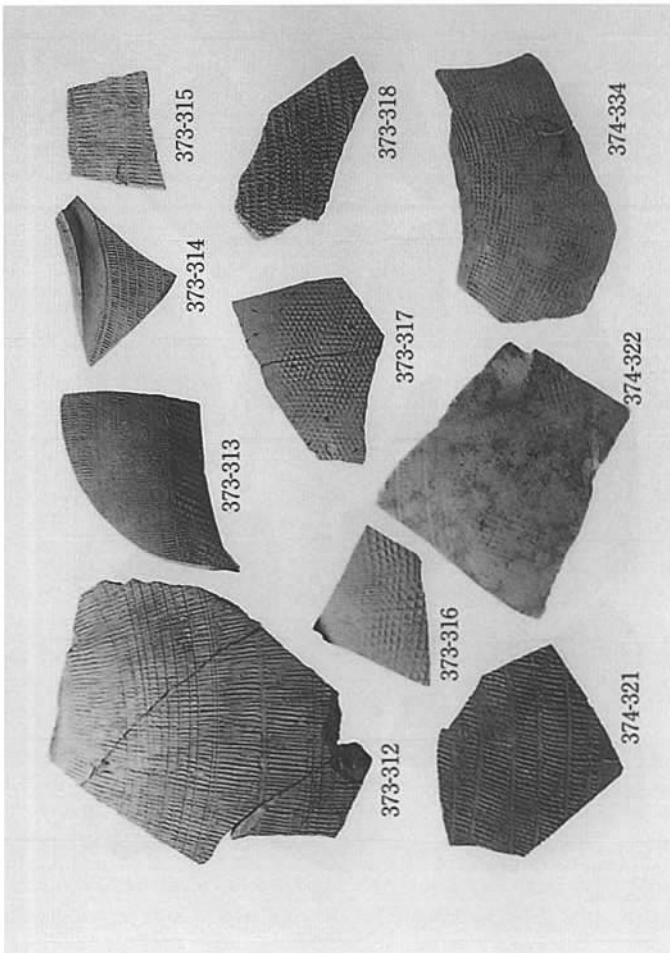
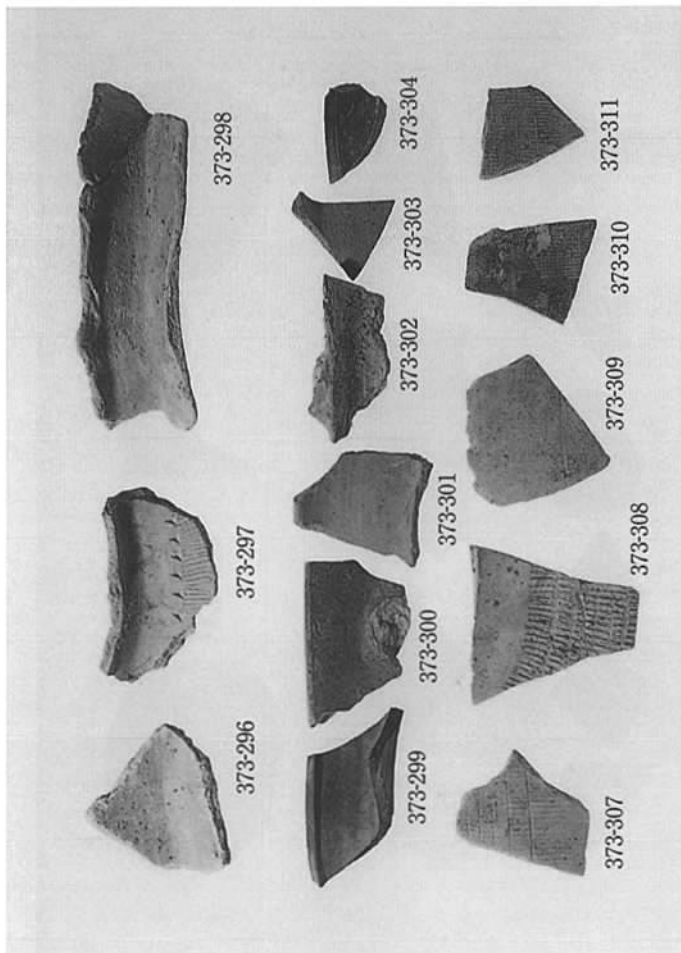
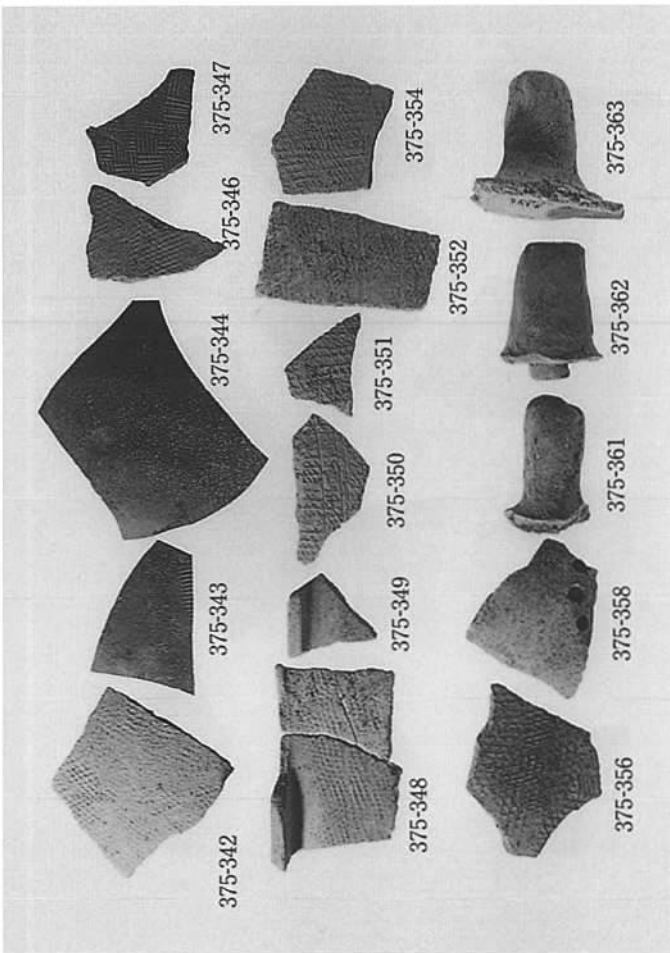
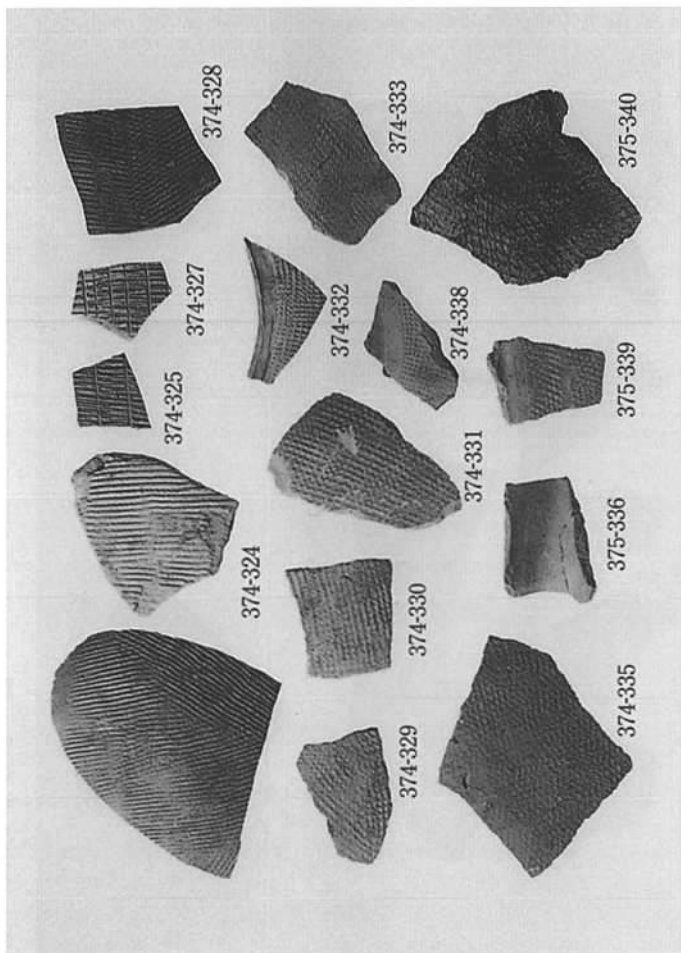
包含層・近世遺構等出土古墳時代土器（5）



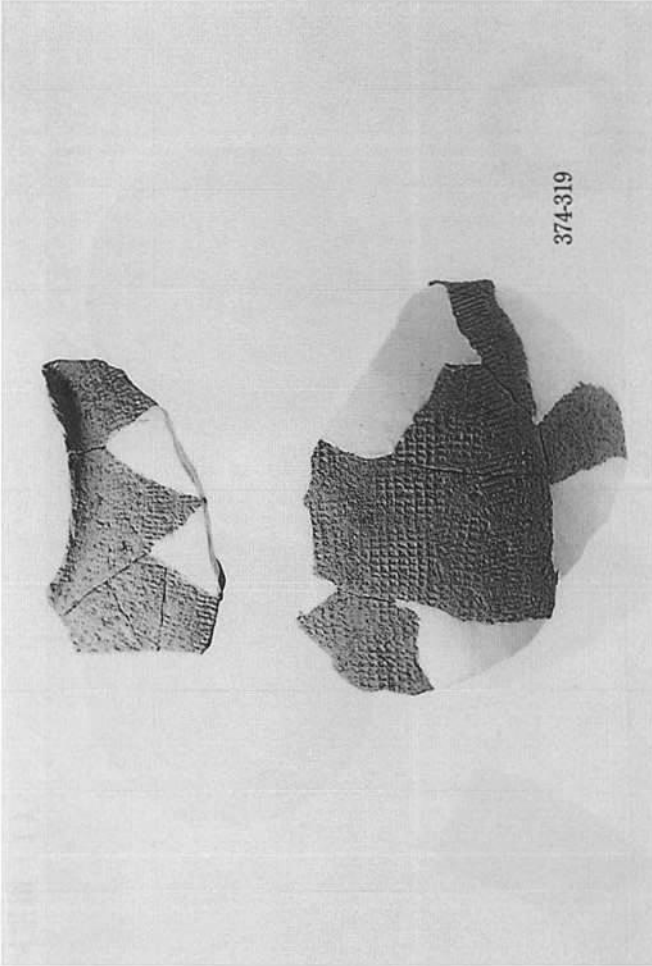
竖穴住居跡出土半島系土器 (1)



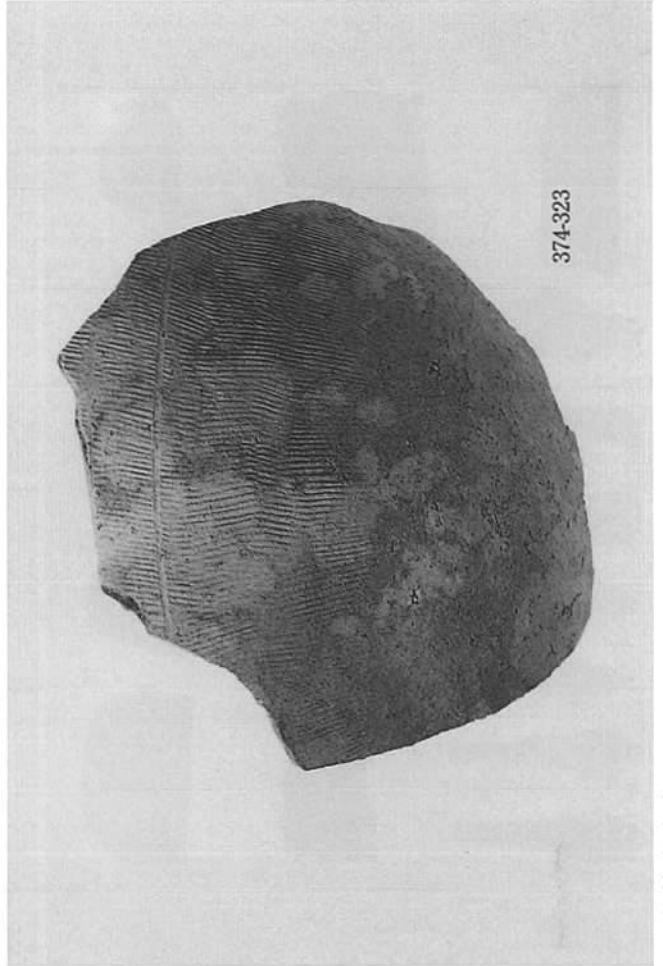
竖穴住居跡(2)・41号土坑出土半島系土器



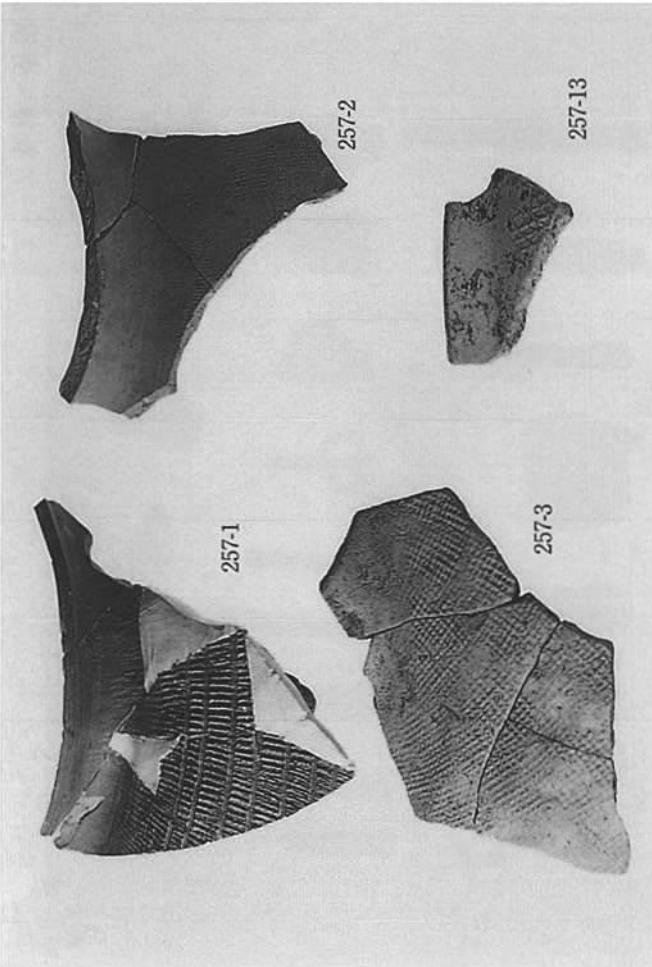
包含層・近世遺構等出土半島系土器



374-319



374-323

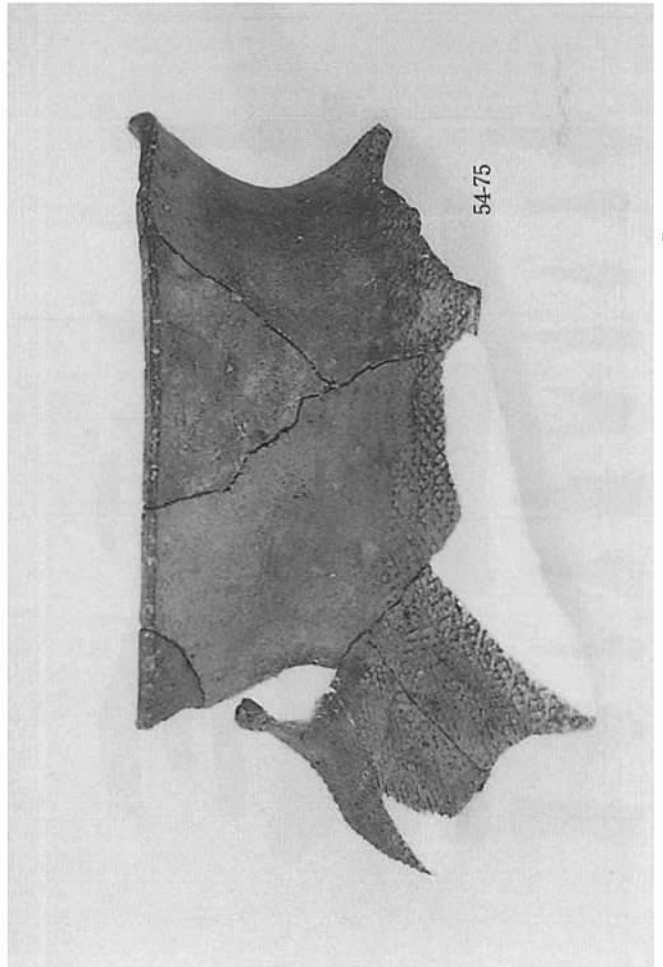


257-1

257-2

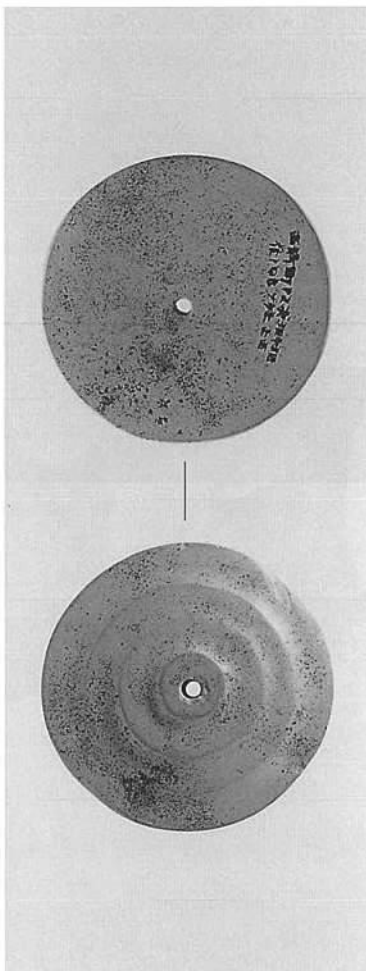
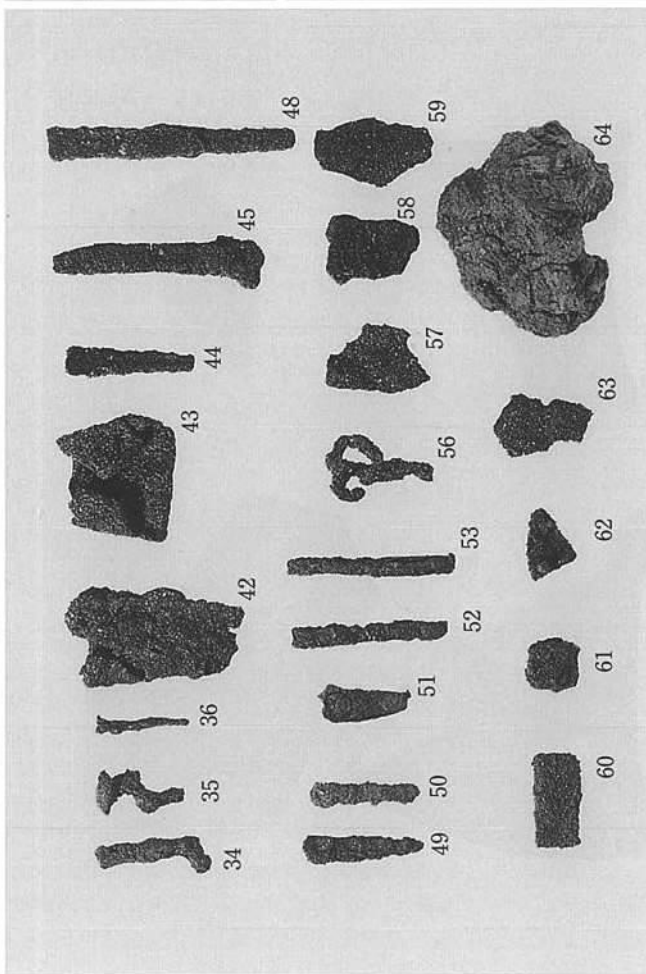
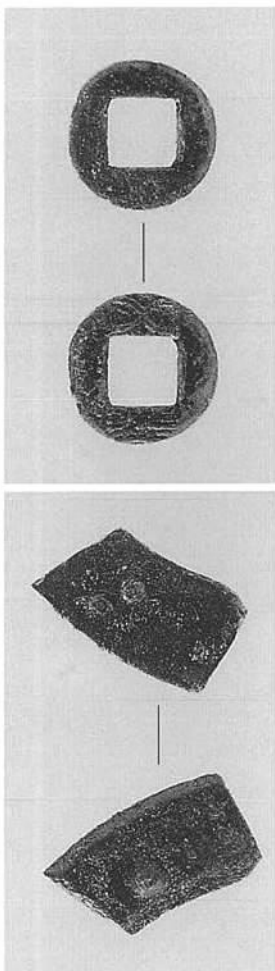
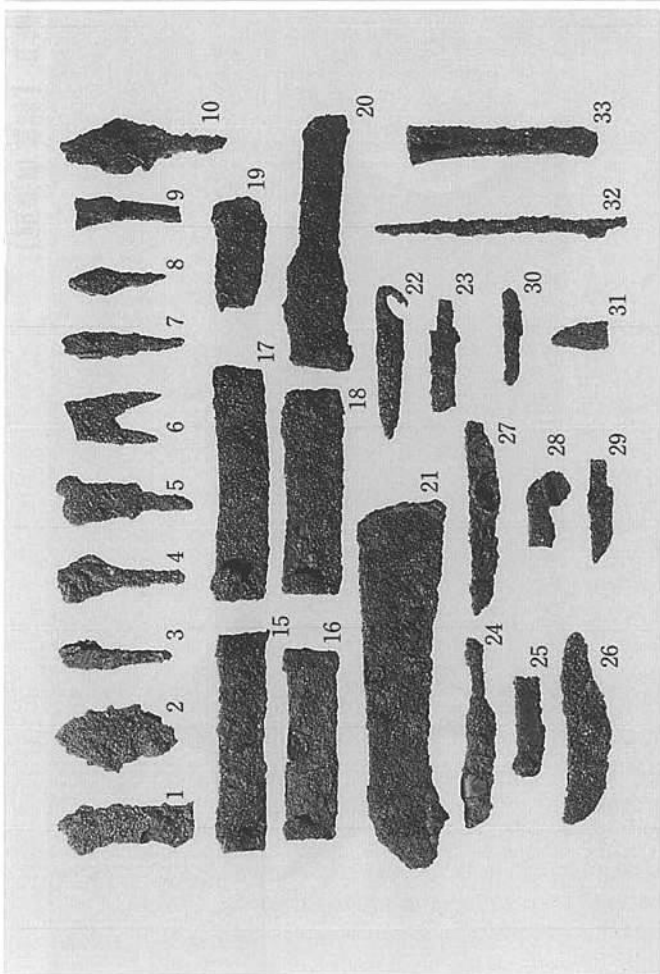
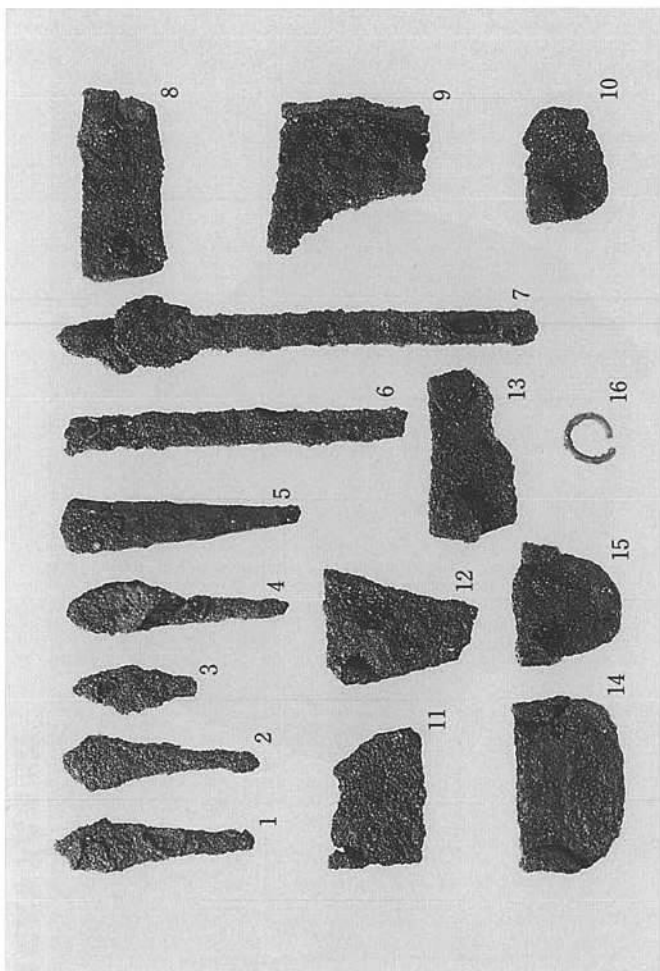
257-3

257-13

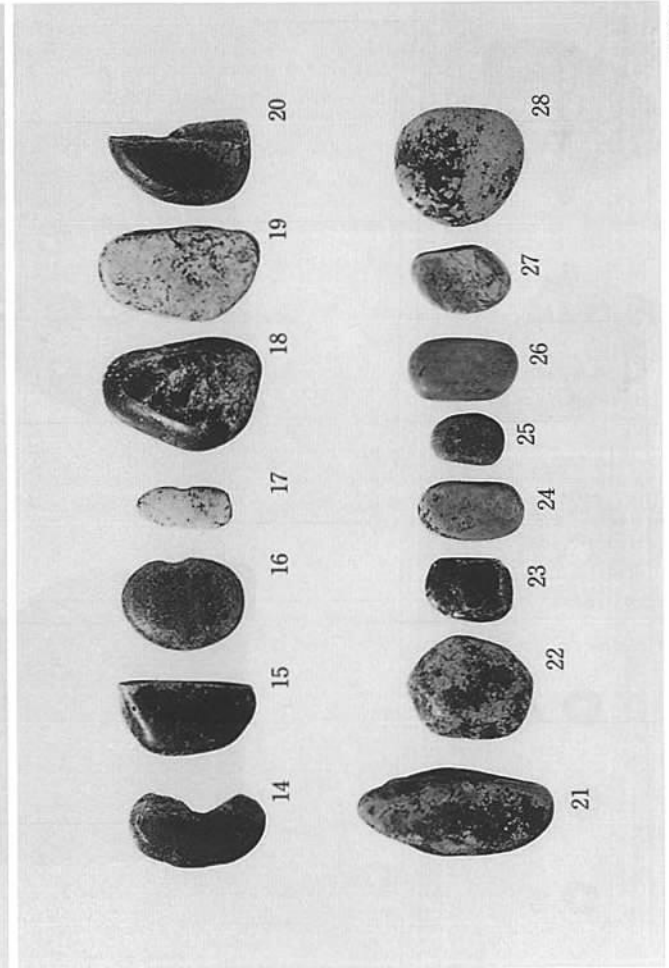
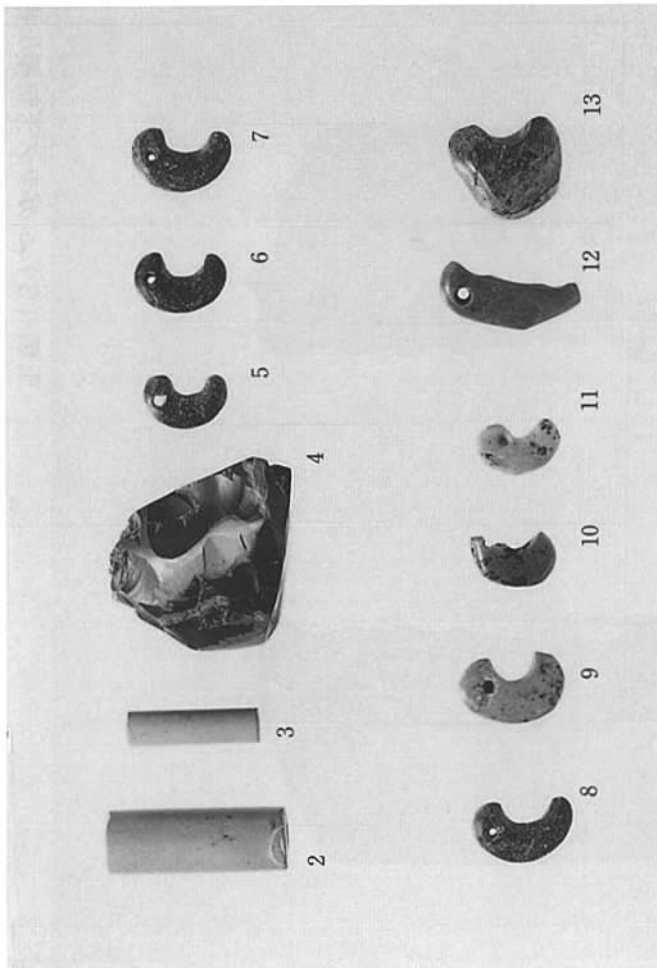
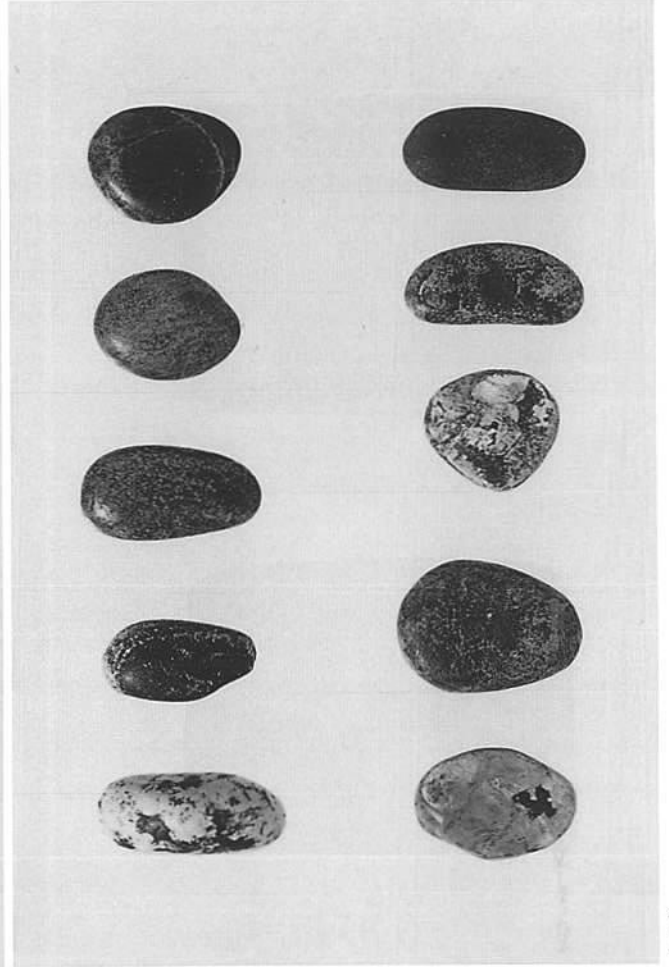
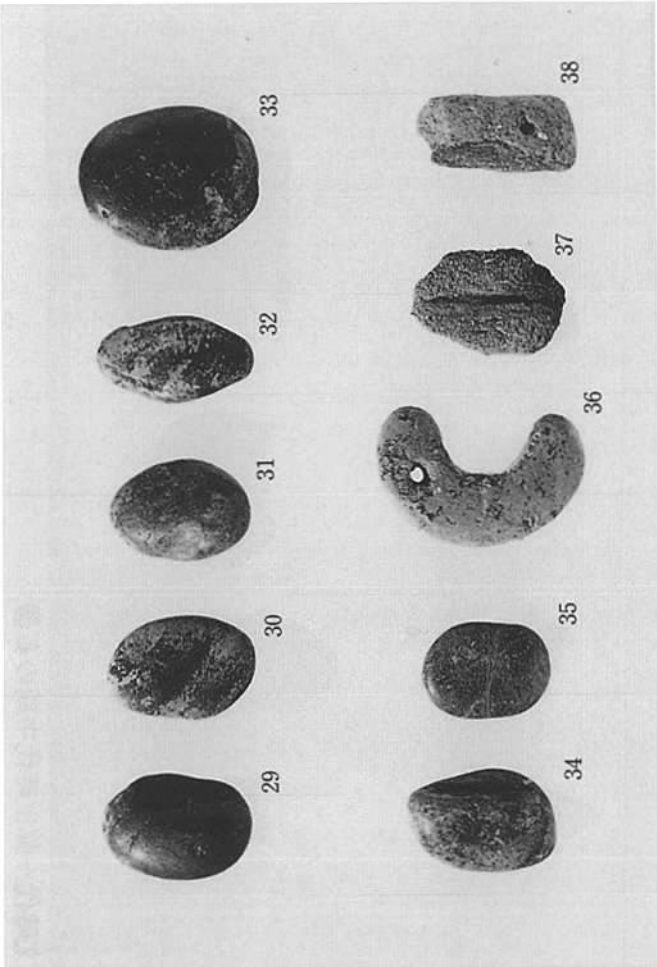


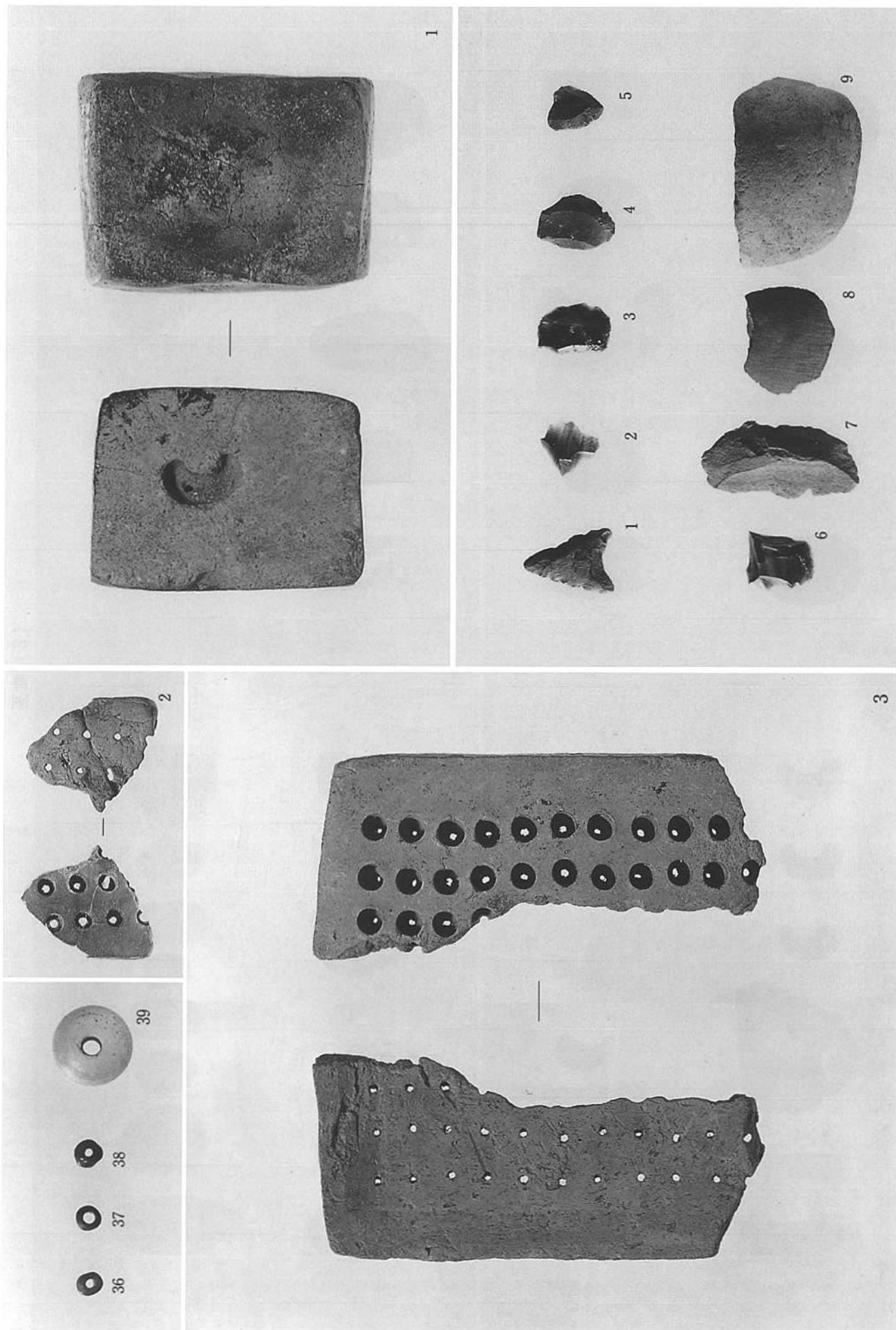
54-75

「西新町遺跡」Ⅱ補遺掲載等半島糸土器

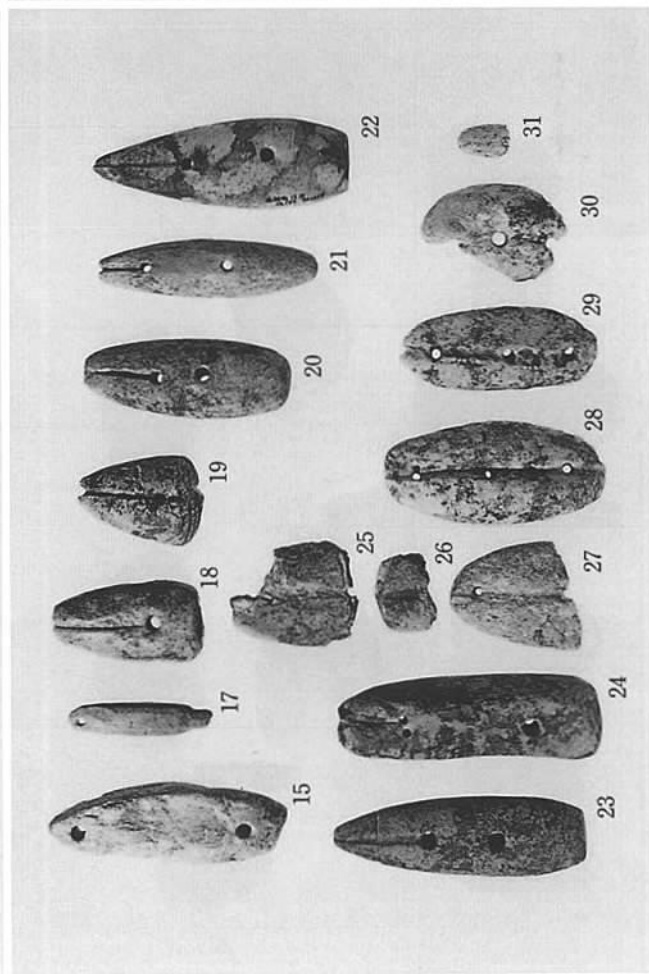
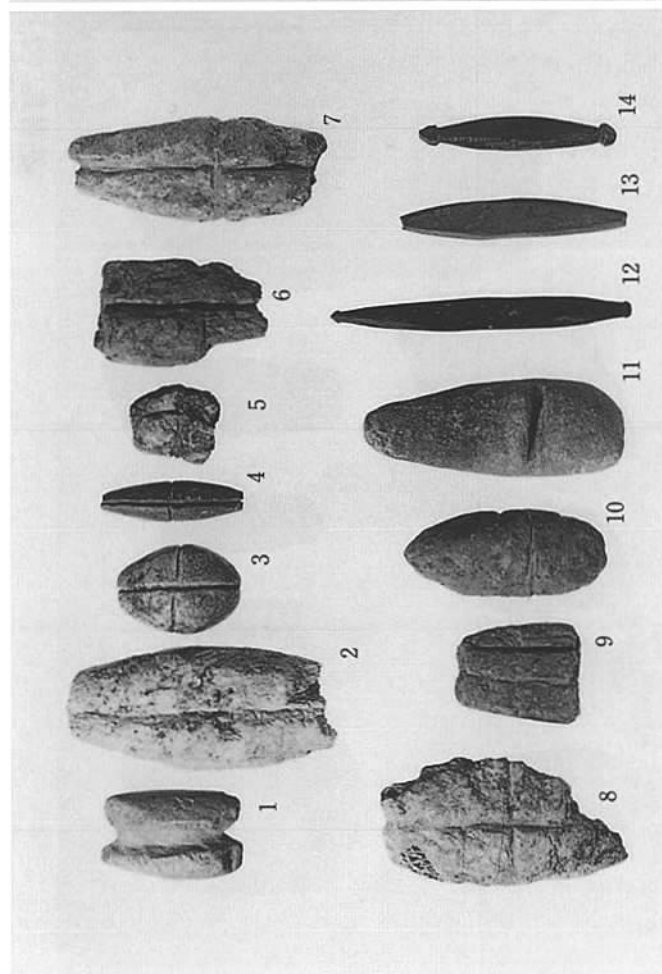
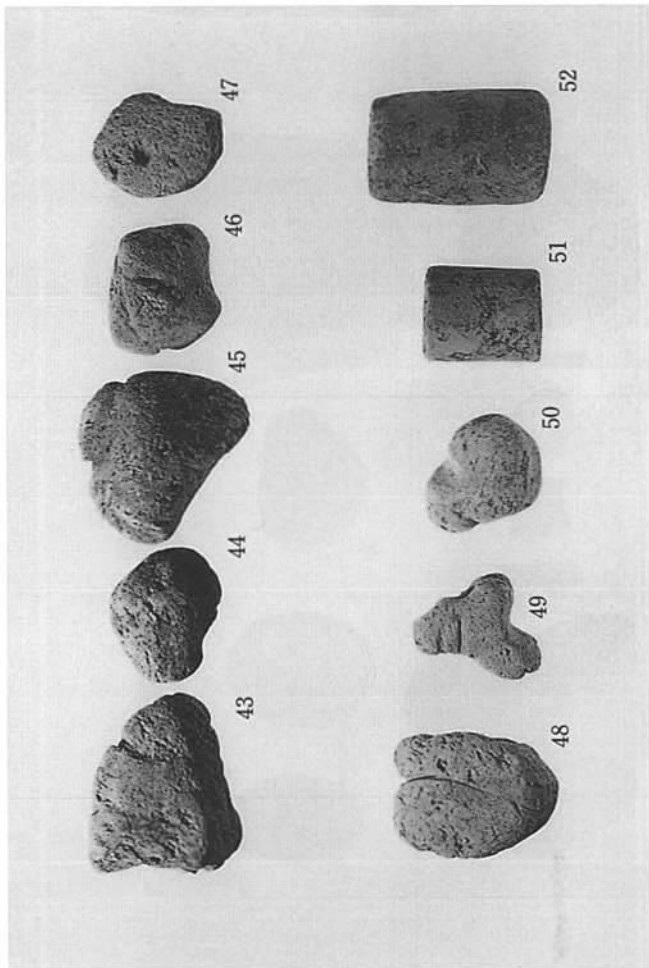
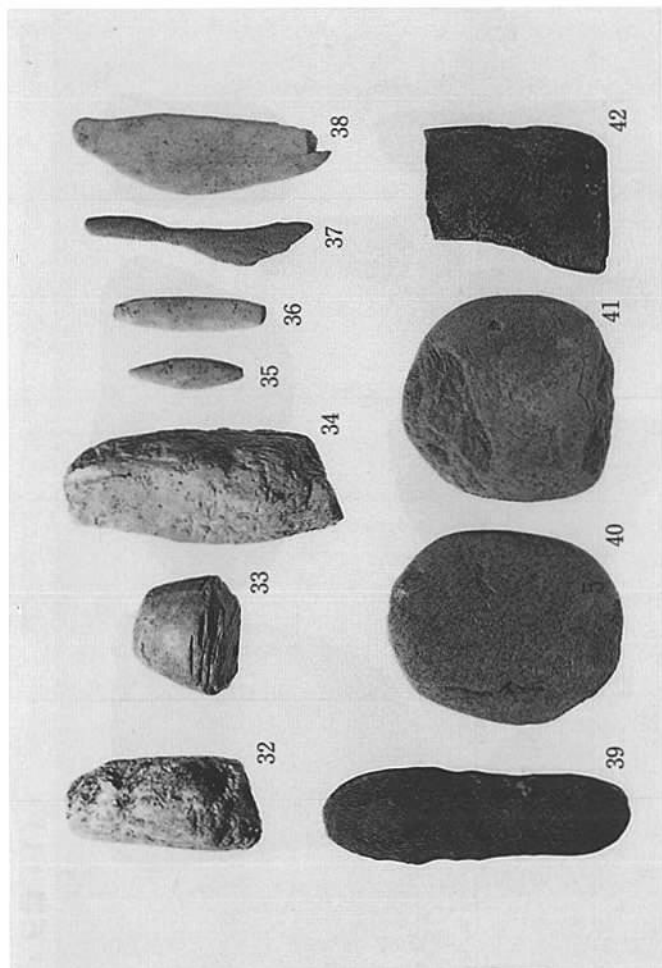


鉄器・青銅器・玉類 (1)

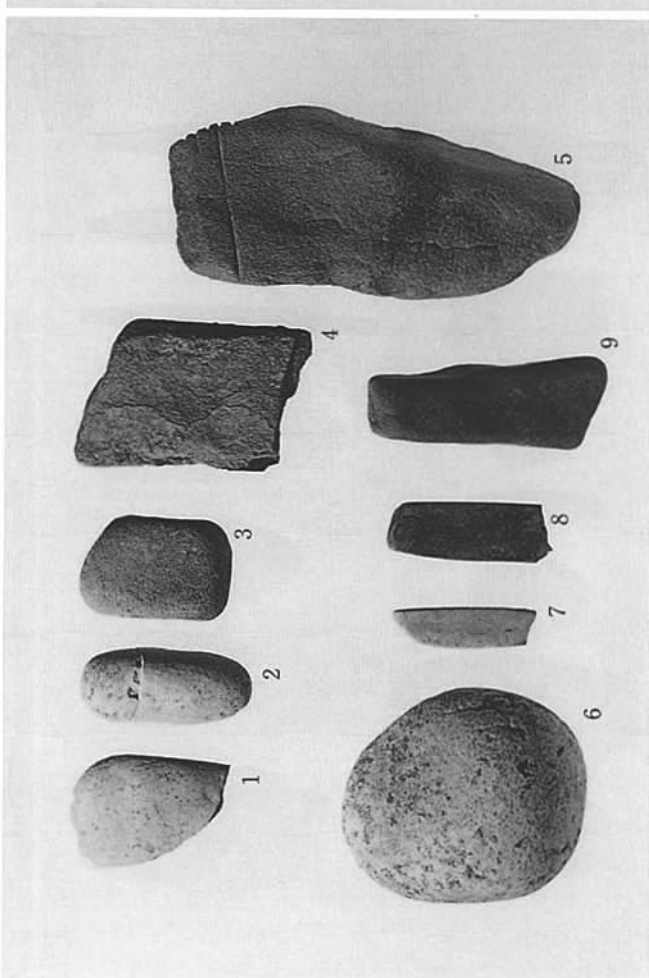
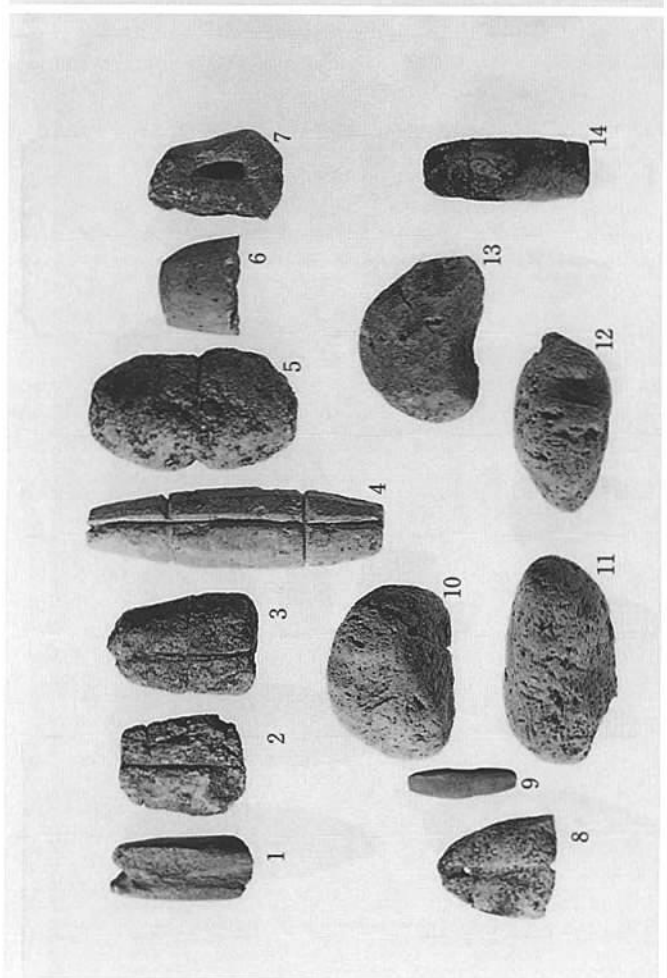
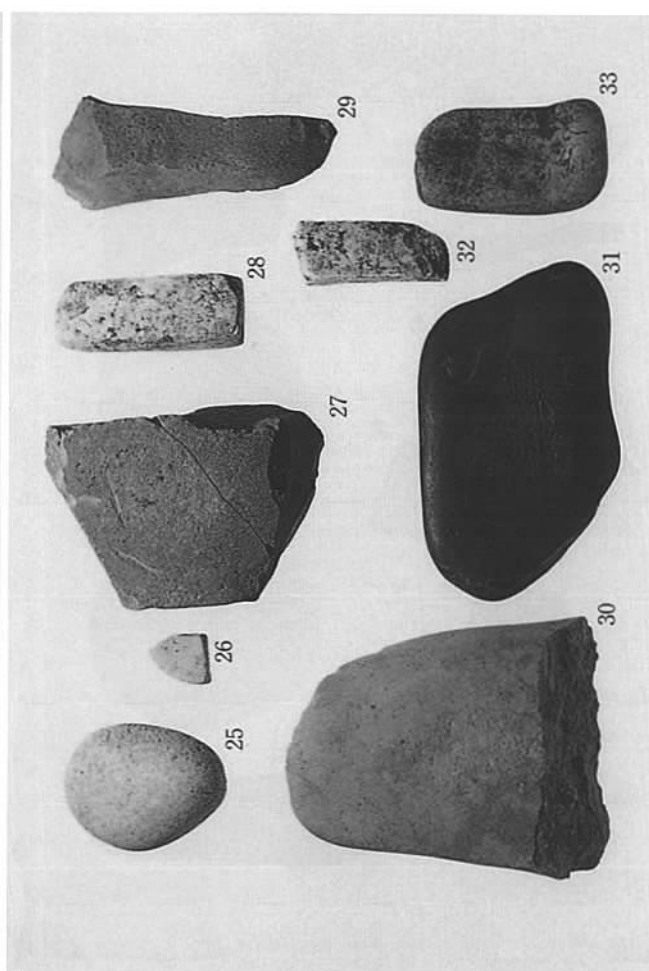
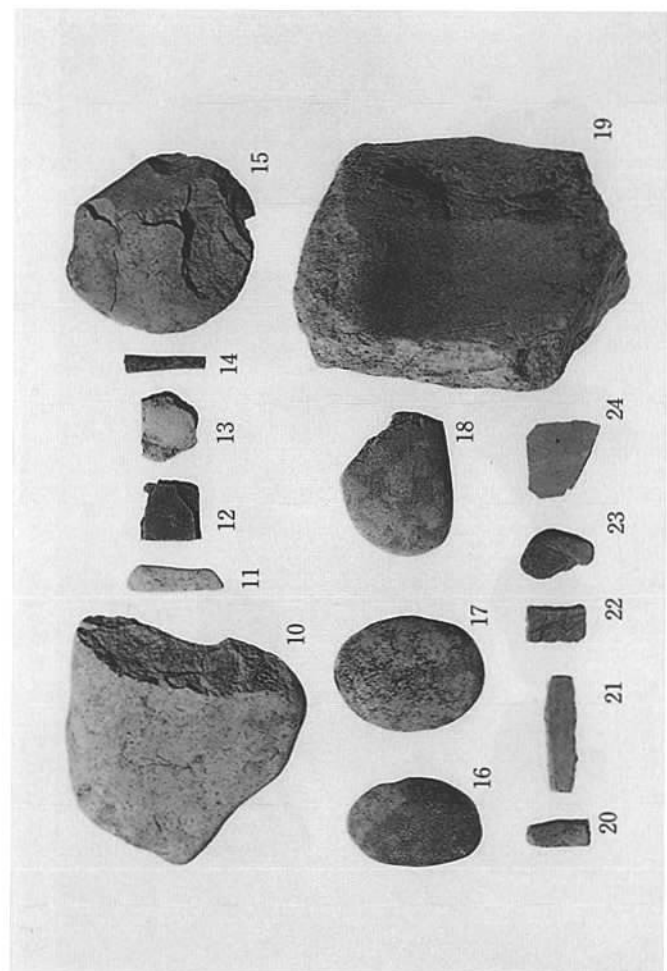




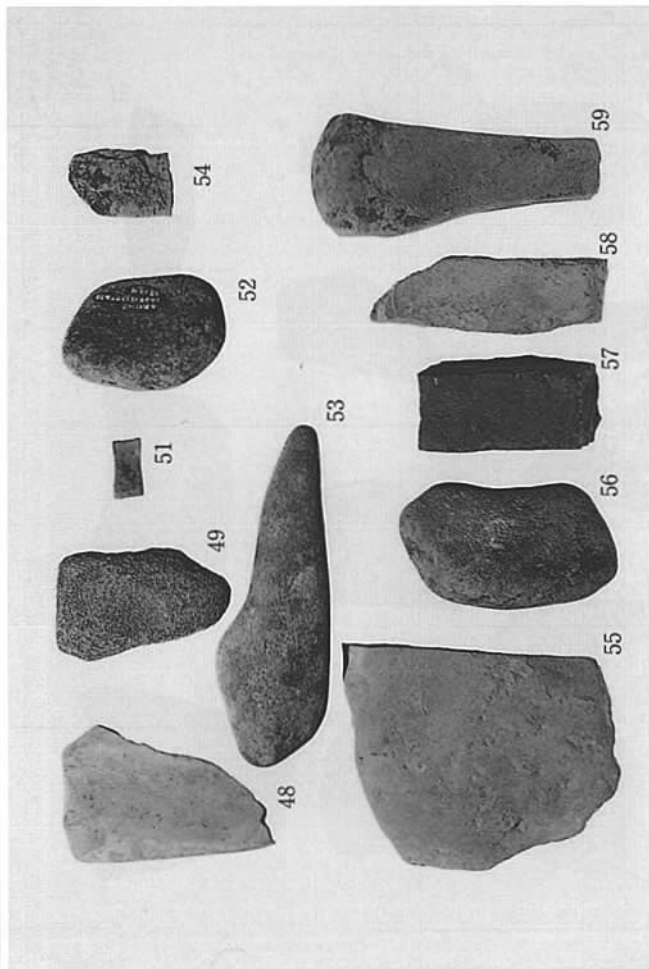
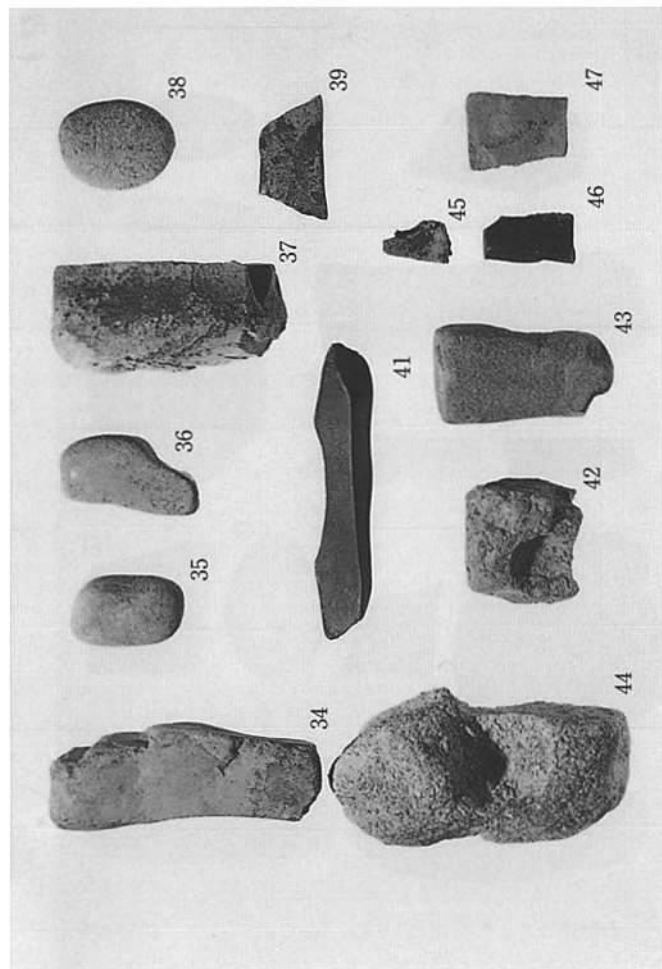
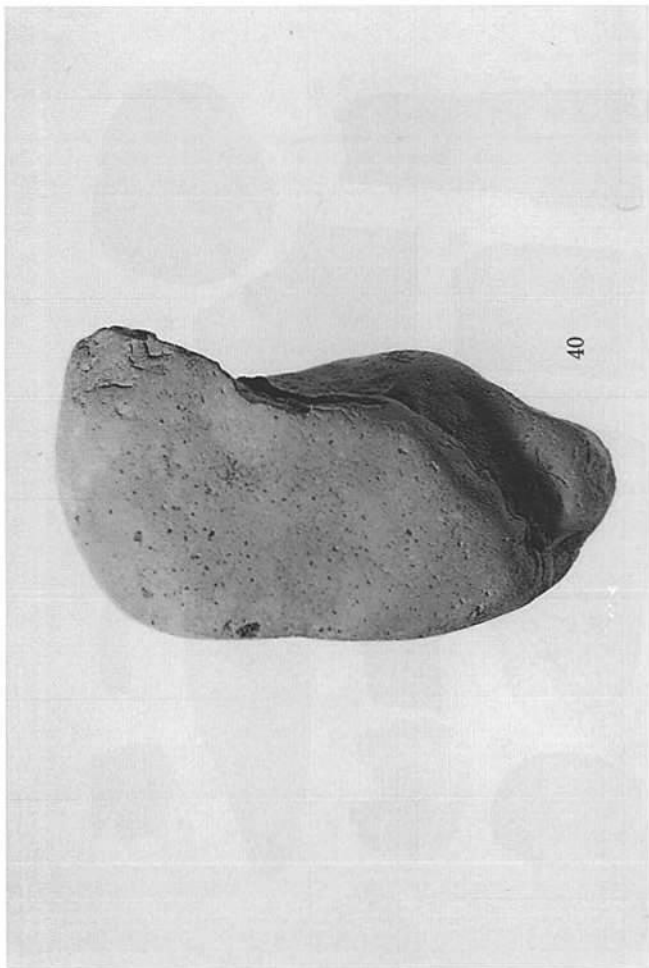
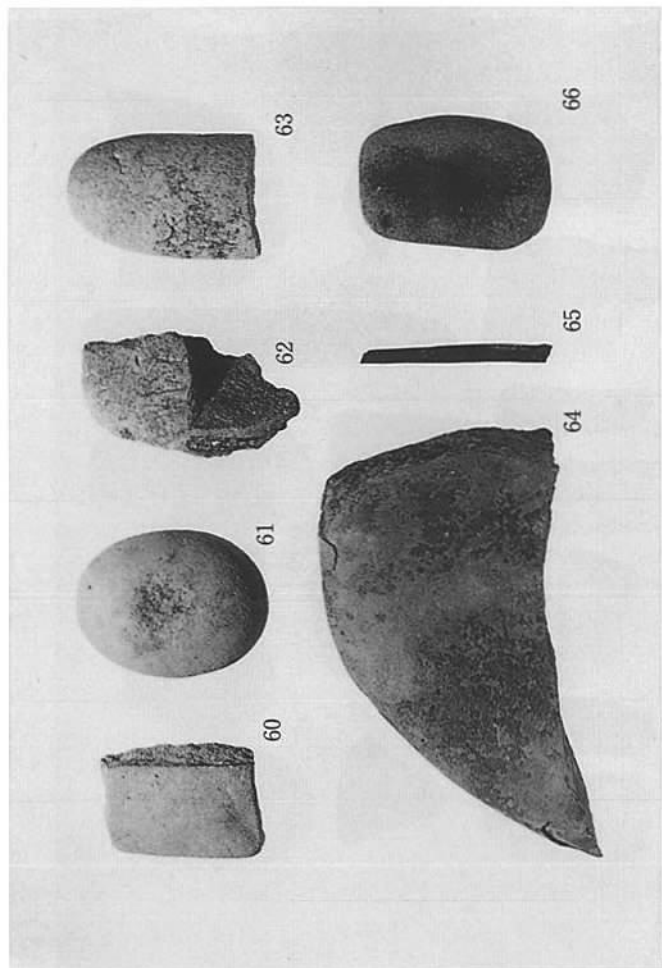
玉類 (3) ・ガラス玉鑄型・縄文時代～弥生時代中期の石器



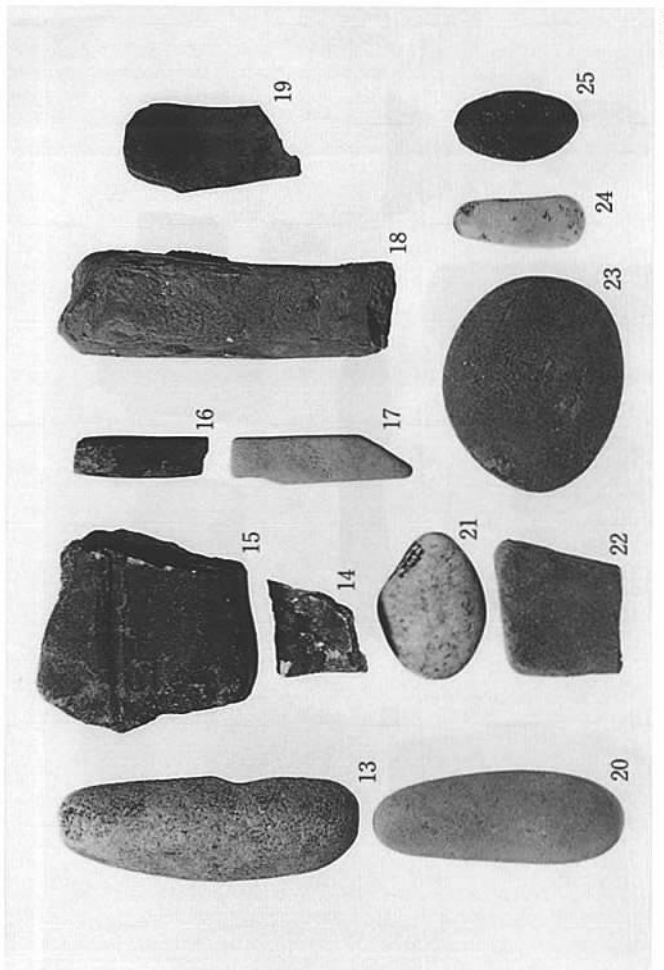
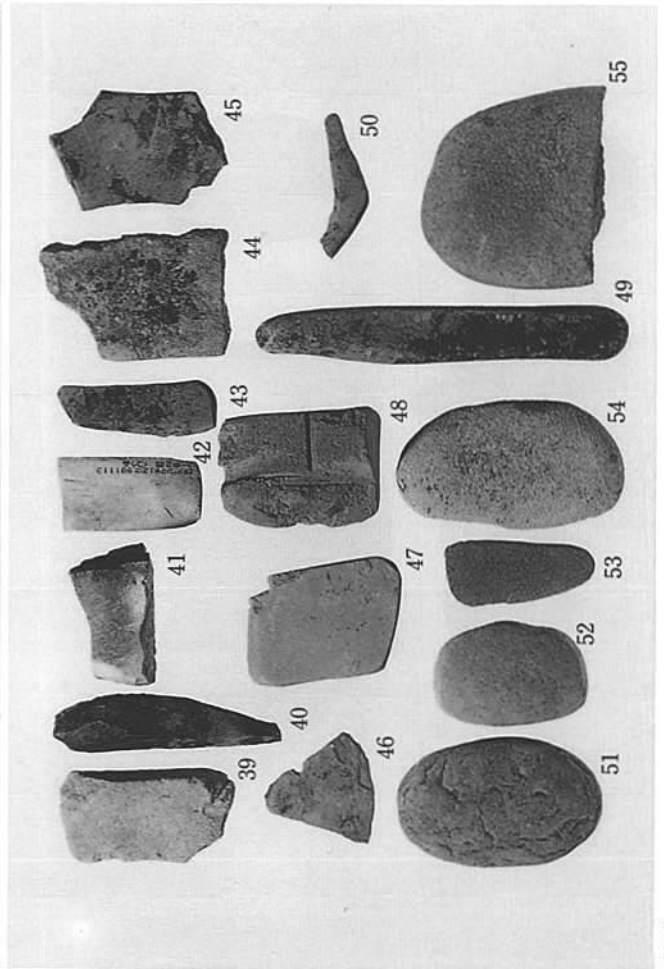
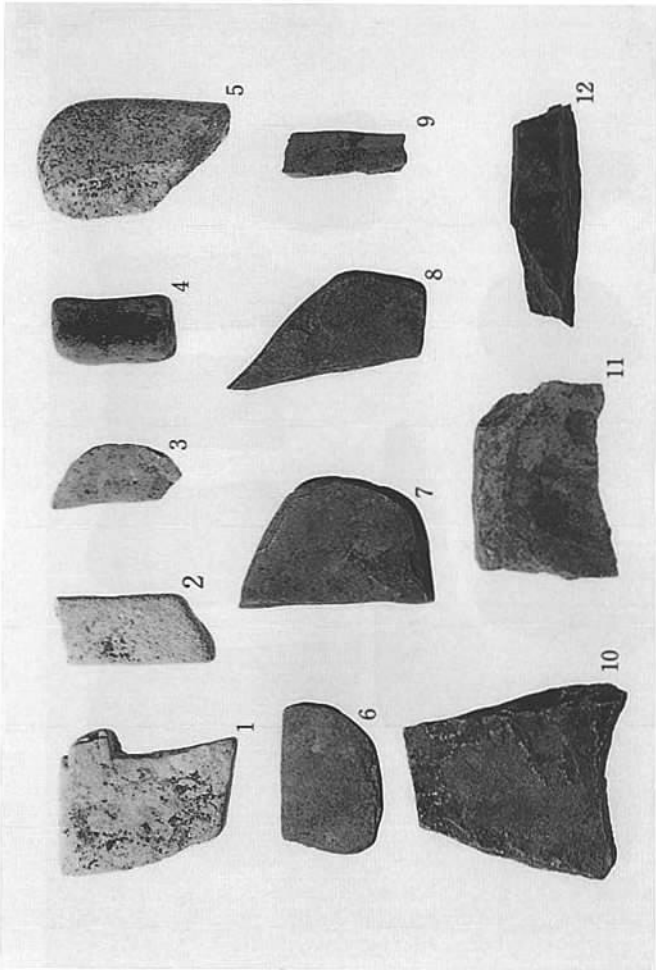
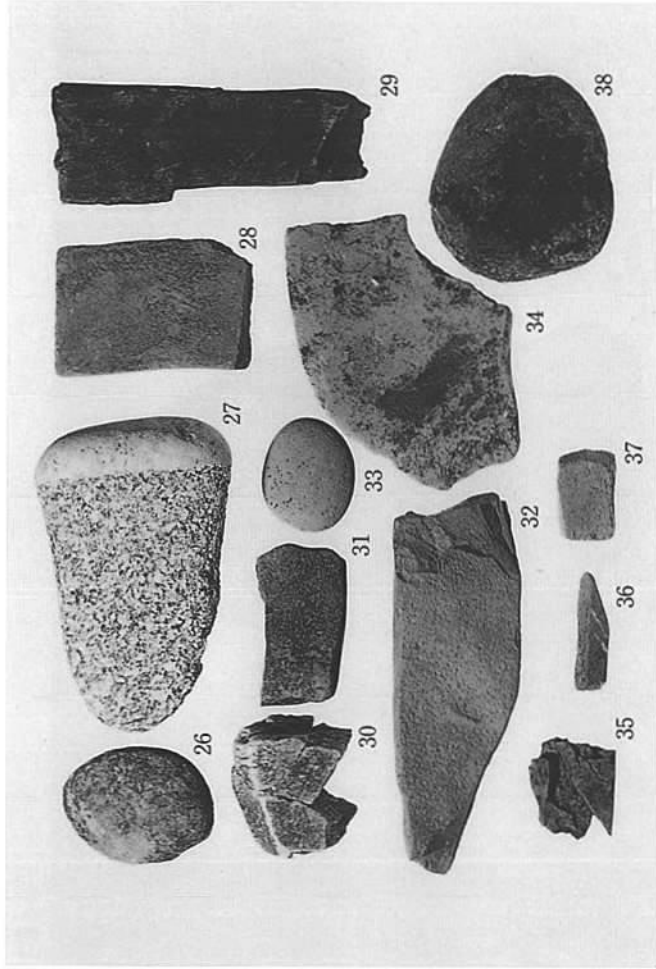
渔捞具 (1)

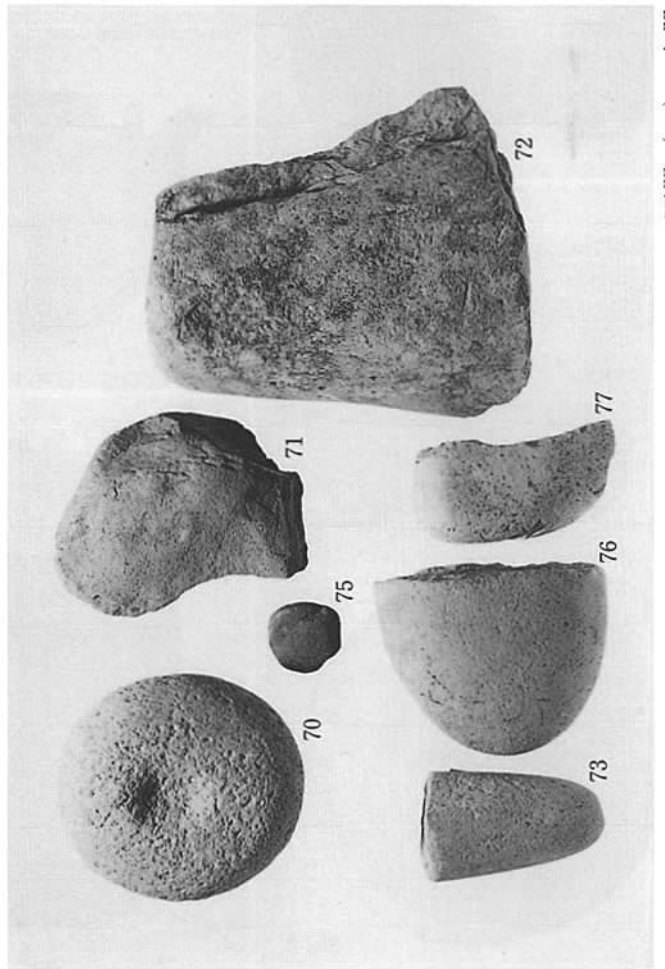
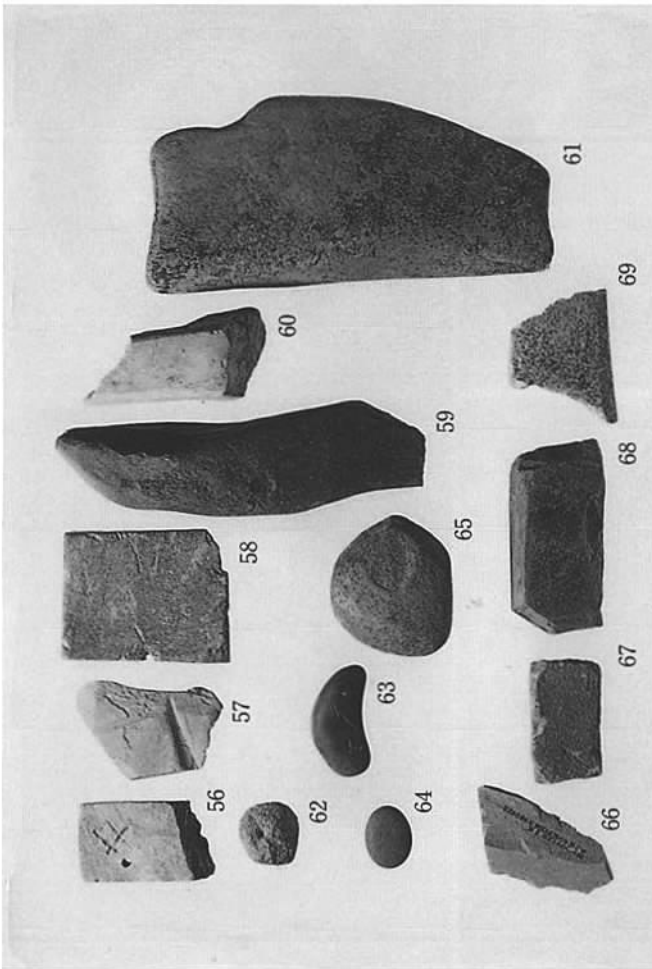
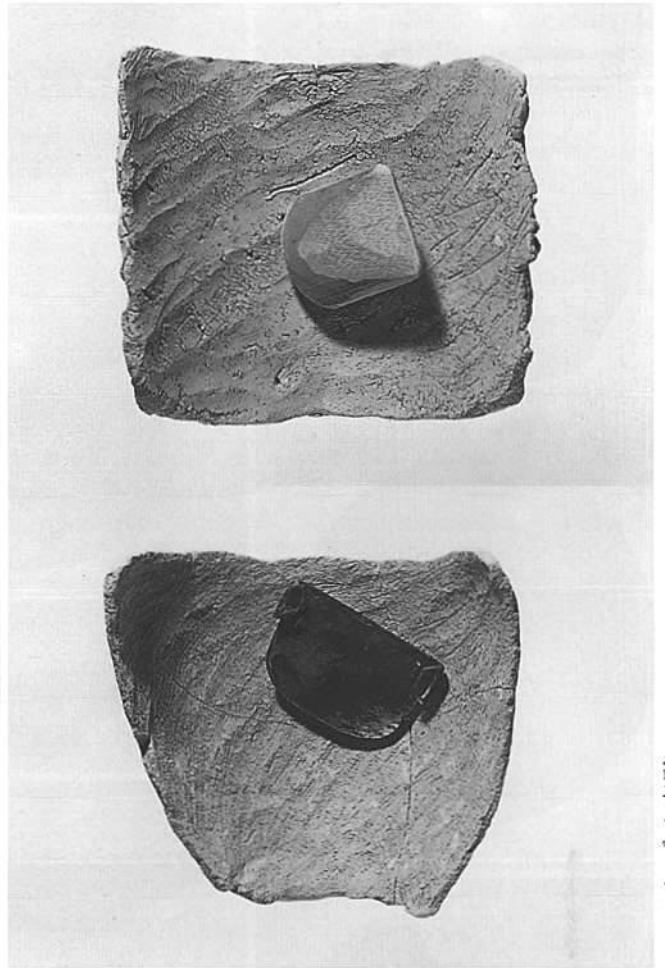
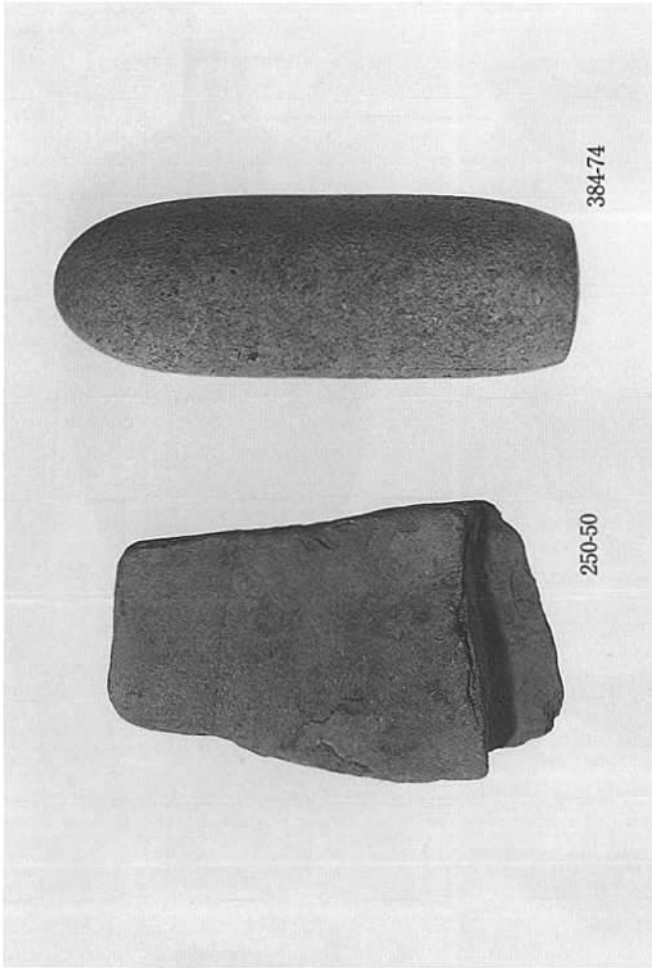


漁撈具(2)・石器(1)

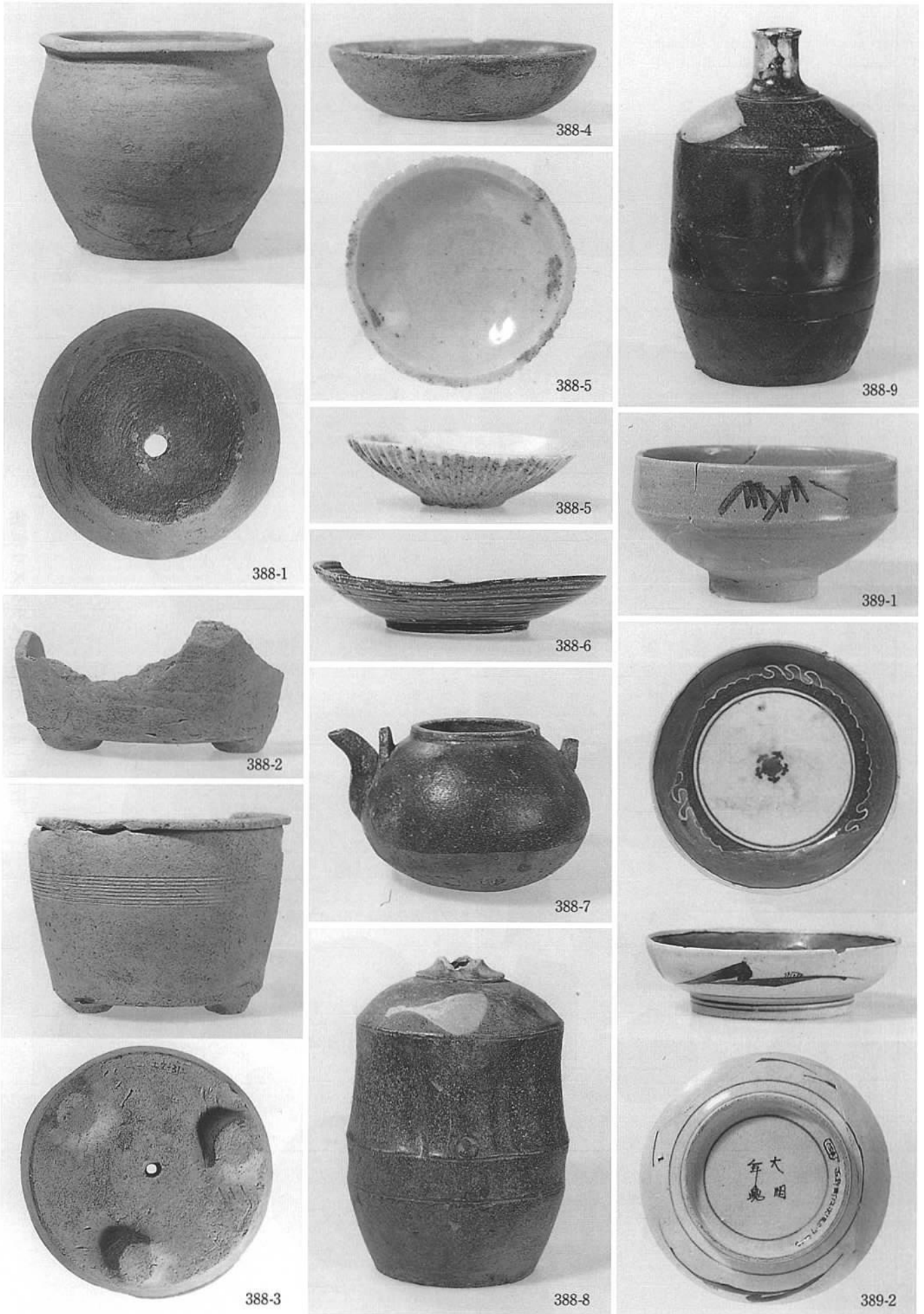


石器(2)





石器(4)・土器のヘラケズリ実験



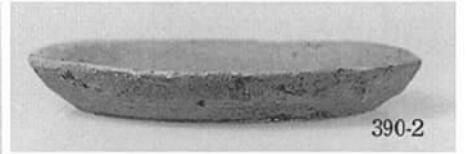
2·13号土坑出土遺物



389-3



389-4



390-2



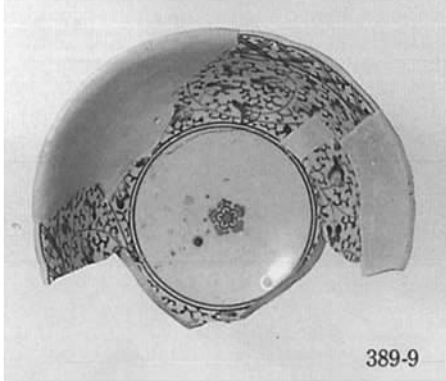
389-6



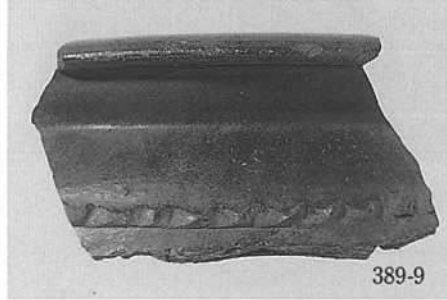
389-8



390-3



389-9



389-9



390-5



389-7



390-1



390-6



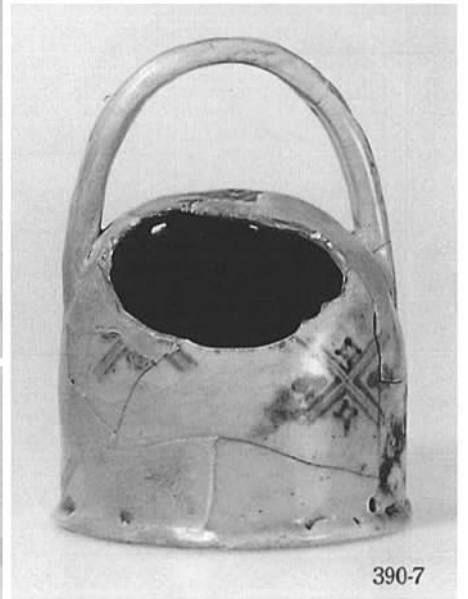
389-7



390-1



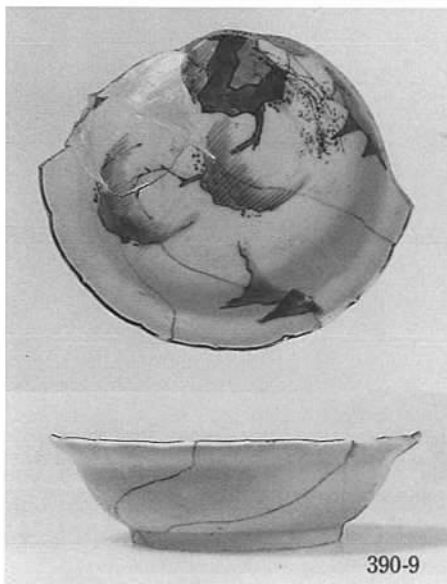
390-4



390-7



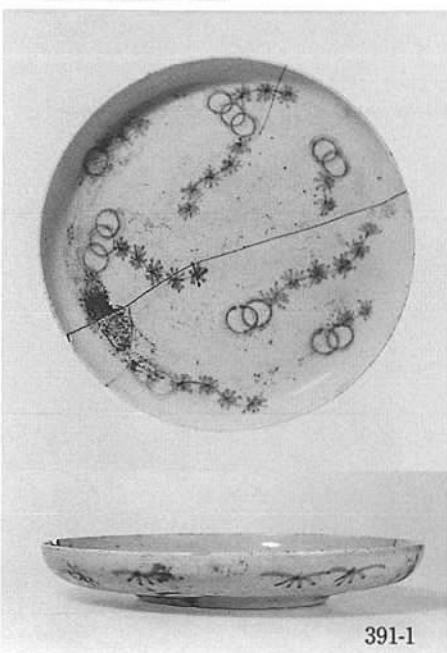
390-8



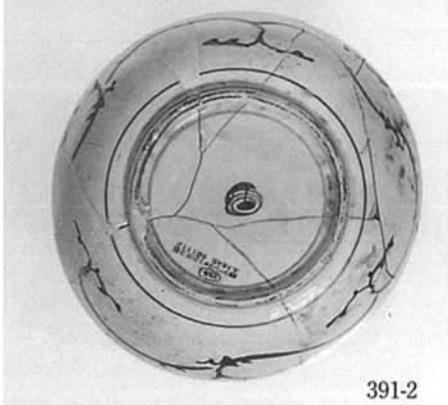
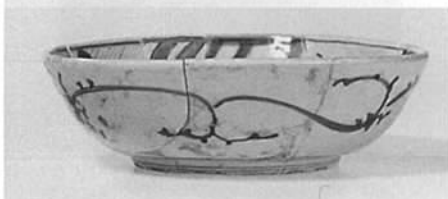
390-9



390-10



391-1



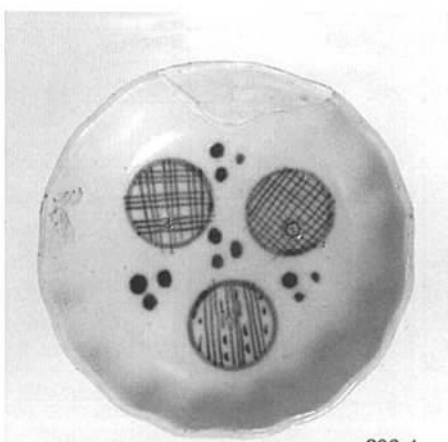
391-2



392-1



392-23



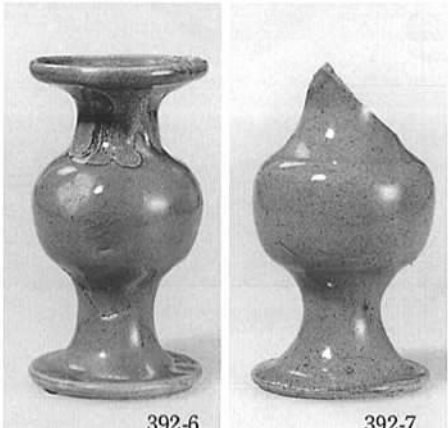
392-4



392-5



392-5



392-6

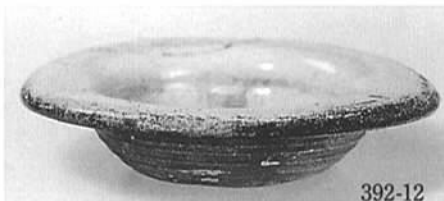
392-7



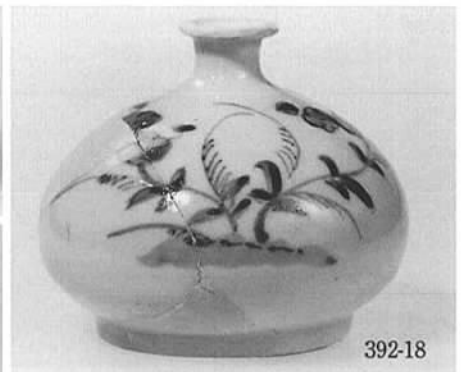
392-13



392-9



392-12



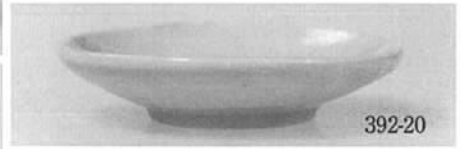
392-18



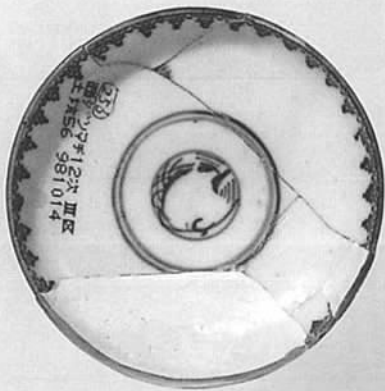
392-10



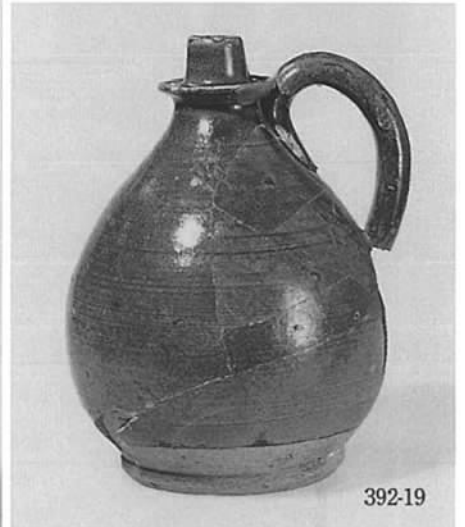
392-11



392-20



392-16



392-19



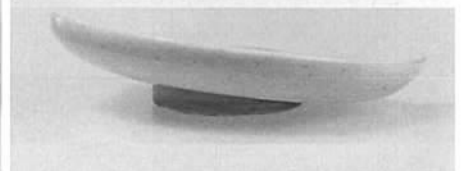
392-16



392-8



392-17



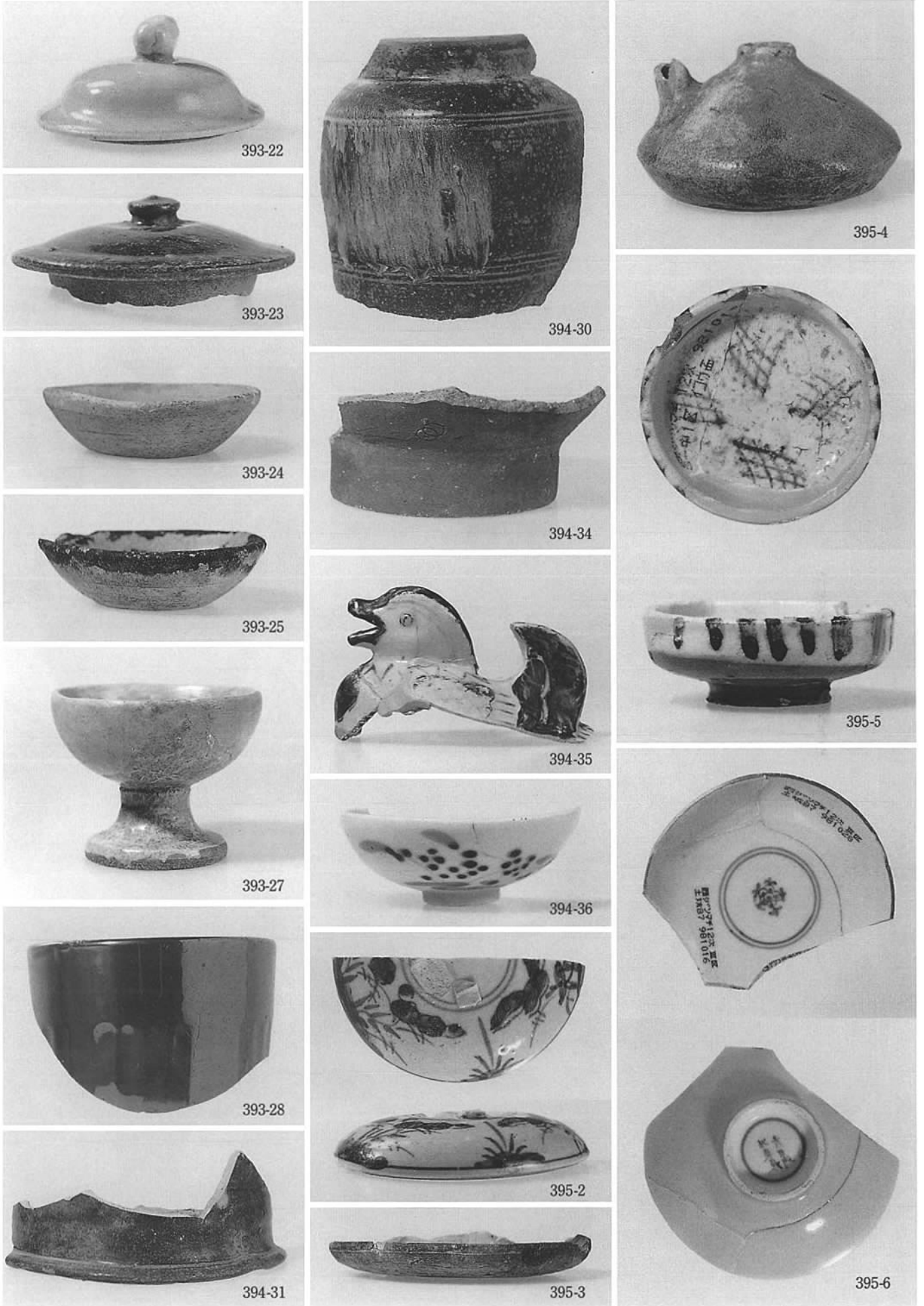
392-15



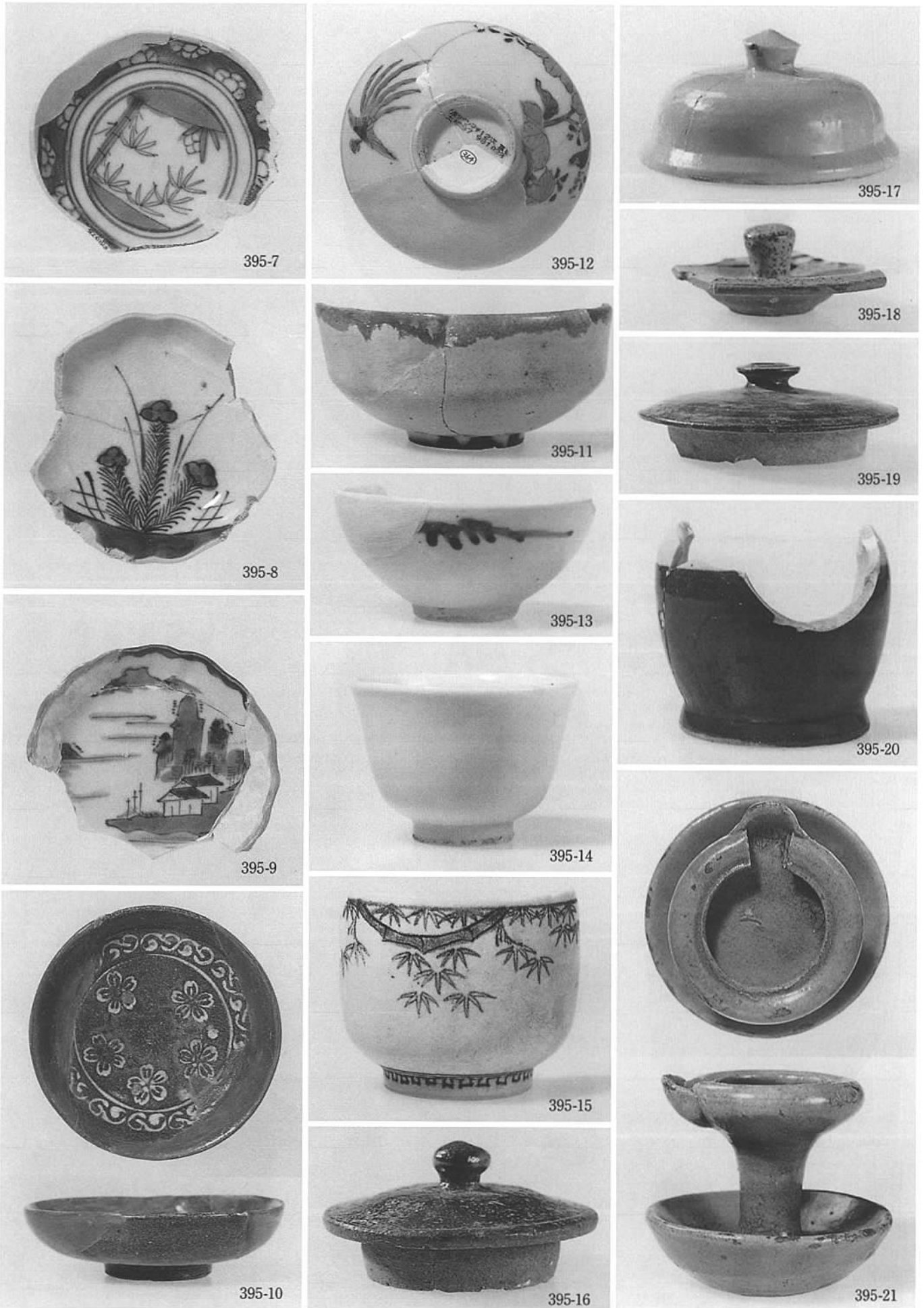
392-21



86号土坑出土遺物(1)



86号土坑(2)·87号土坑(1)·89·91号土坑(1)出土遺物



87号土坑出土遺物(2)



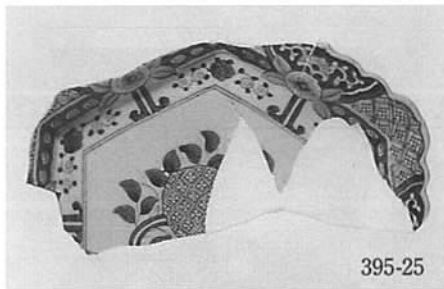
395-22



395-23



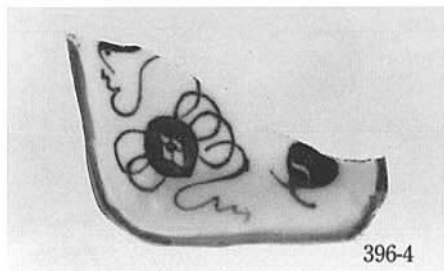
395-24



395-25



395-26



396-4



396-2



396-3



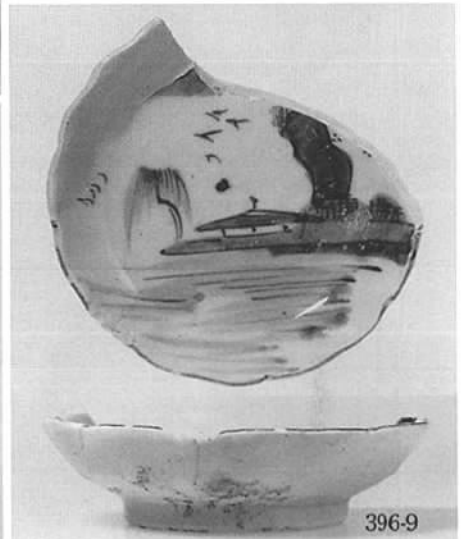
396-6



396-7



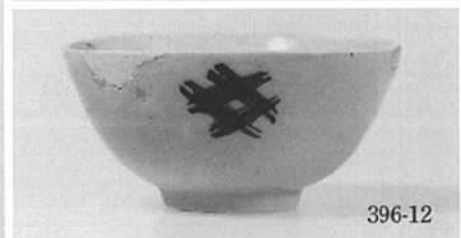
396-8



396-9



396-10

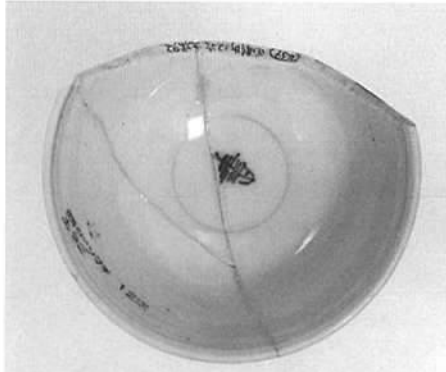


396-12



396-16

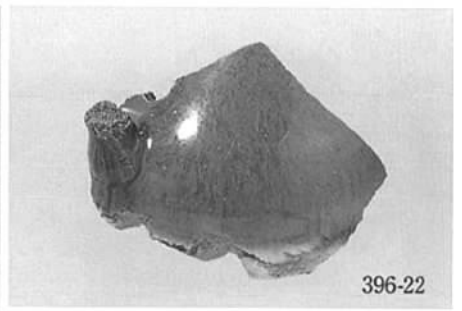
87号土坑(3)・92号土坑(1)出土遺物



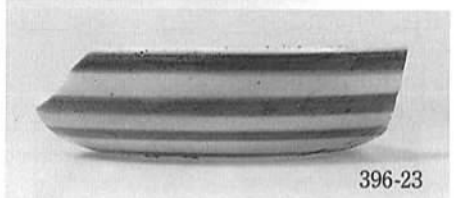
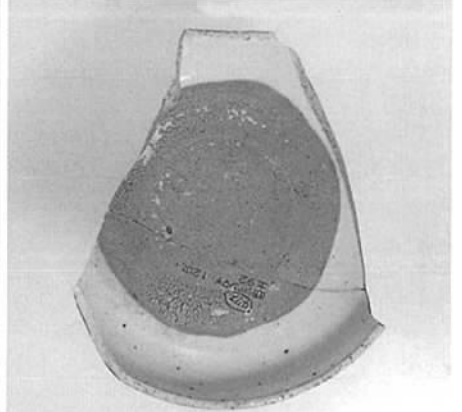
396-13



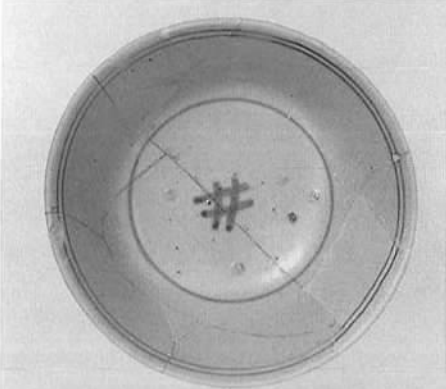
396-18



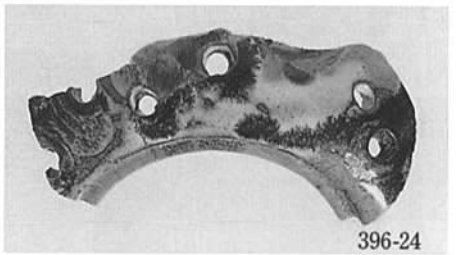
396-22



396-23



396-19



396-24



396-14



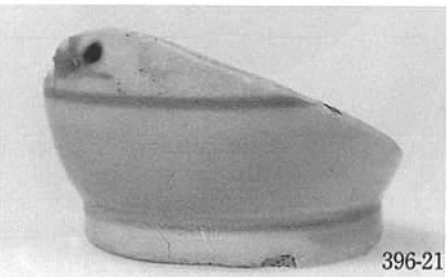
396-20



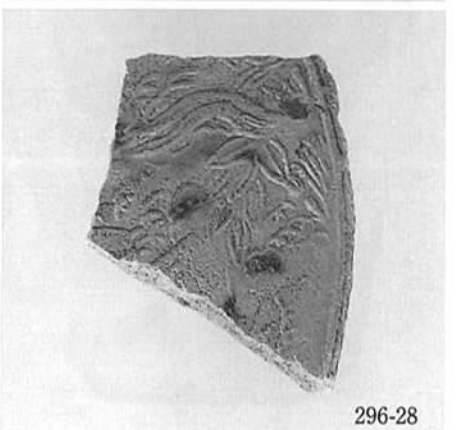
396-27



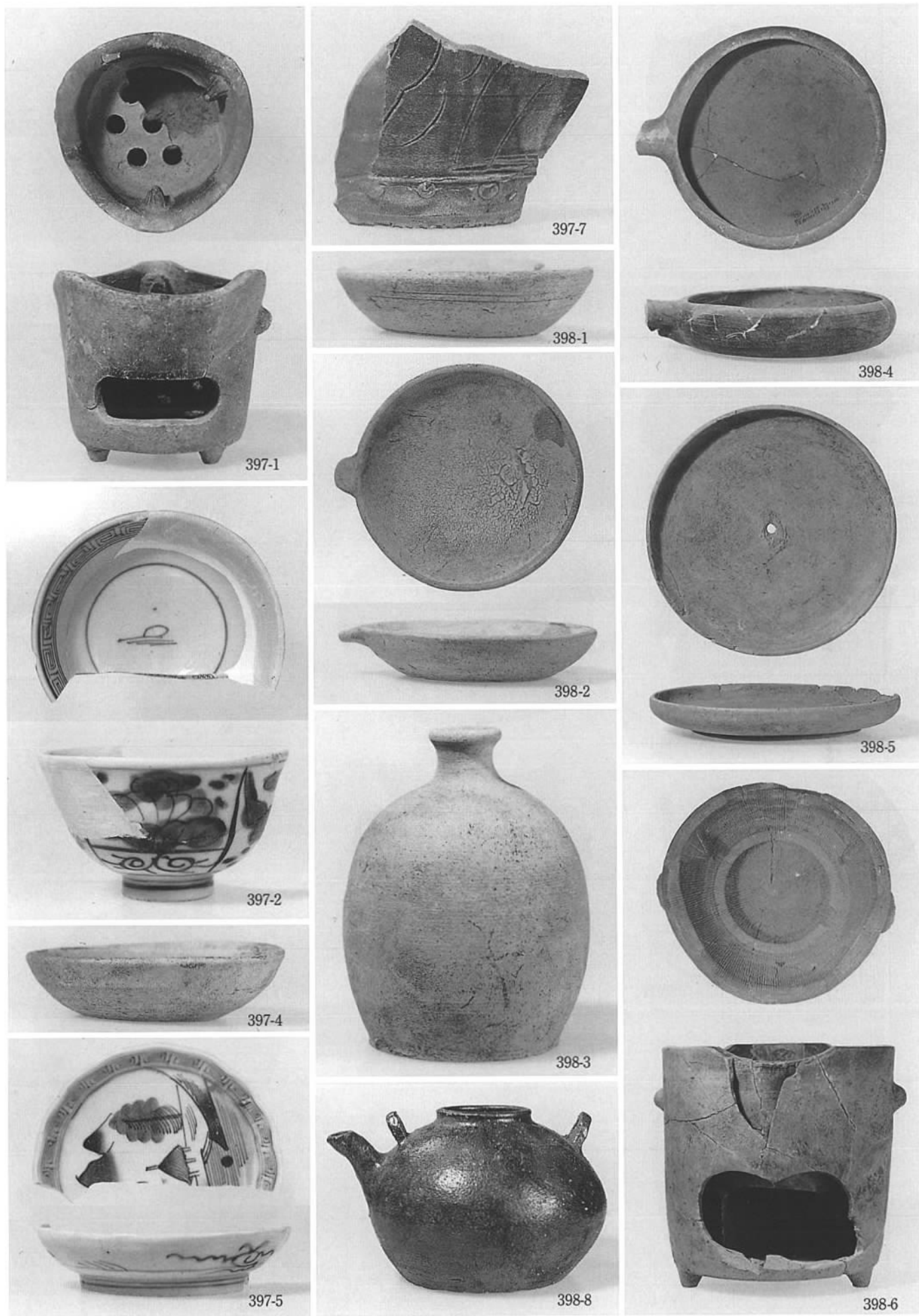
396-17



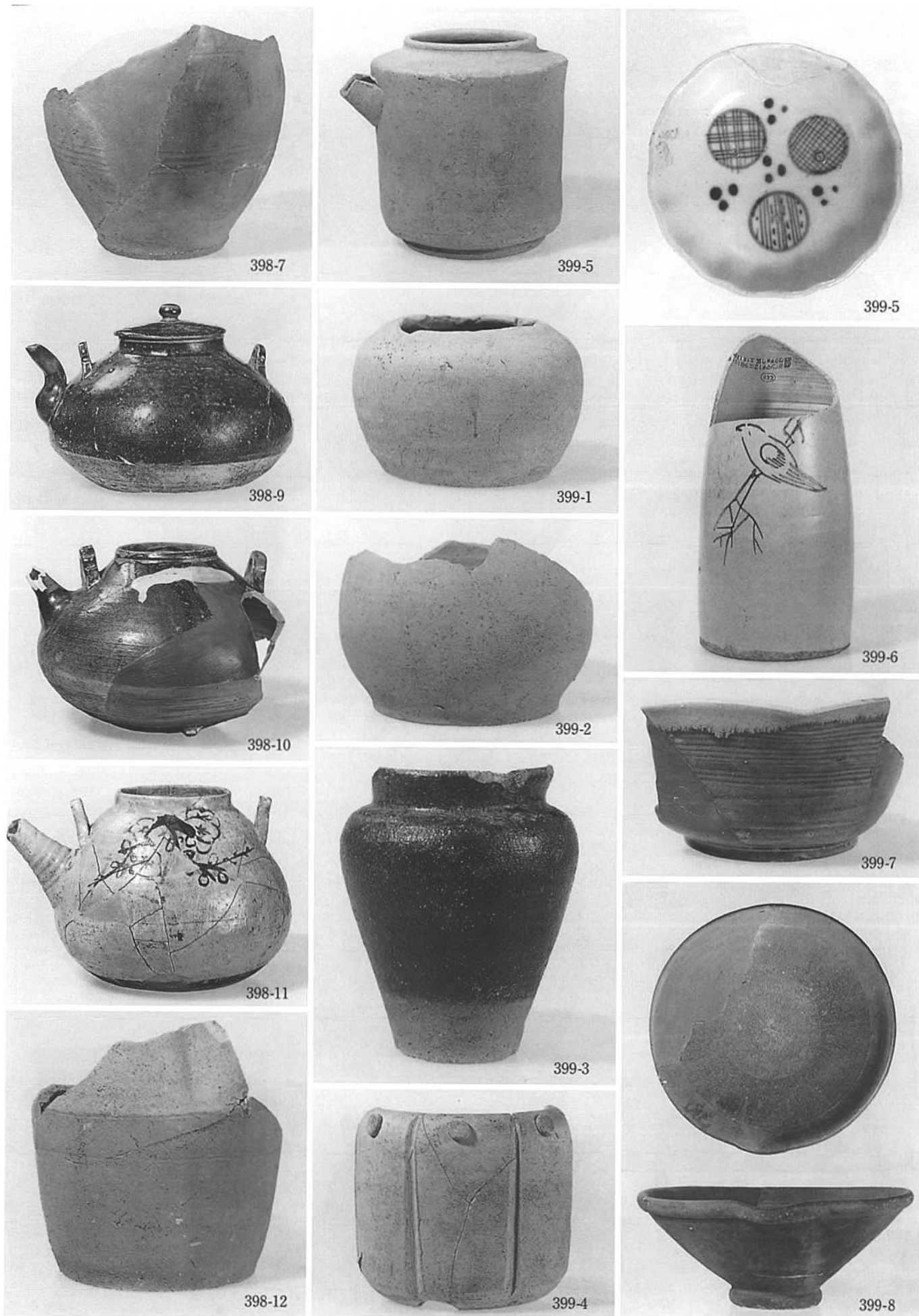
396-21



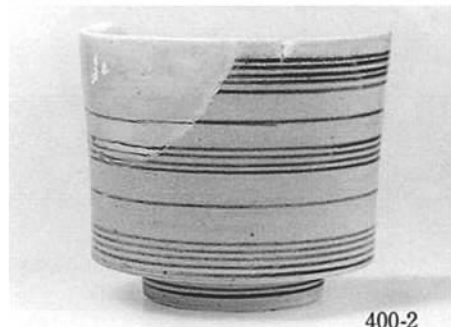
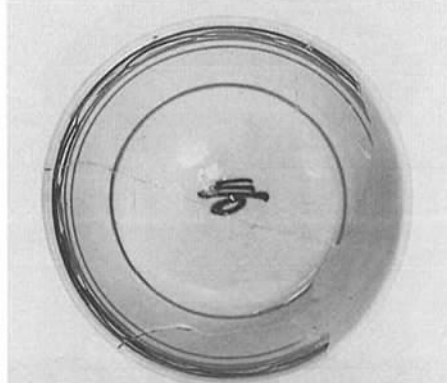
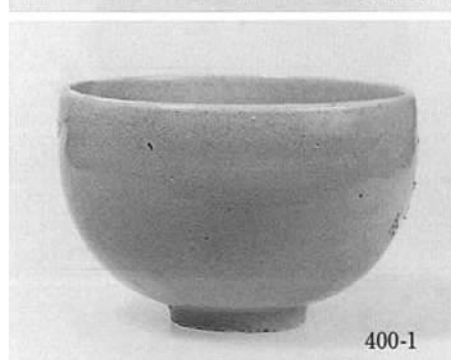
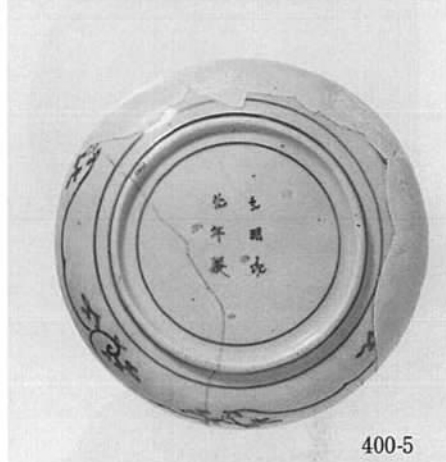
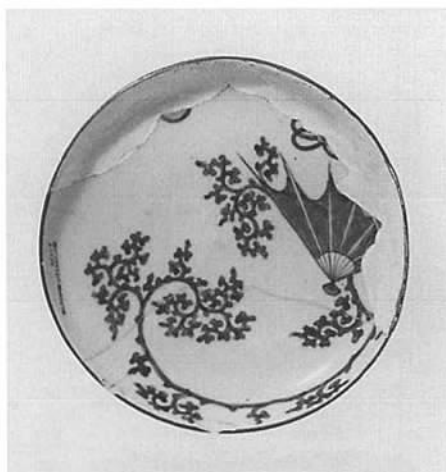
296-28



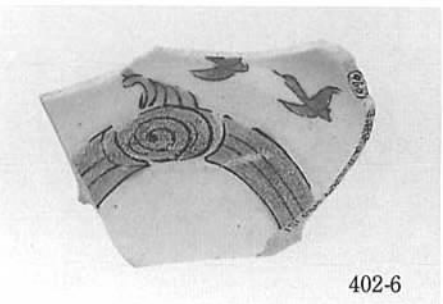
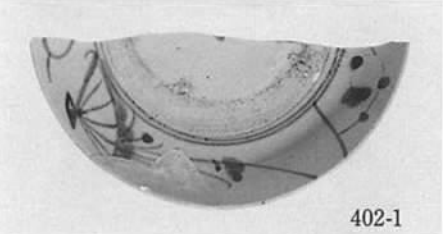
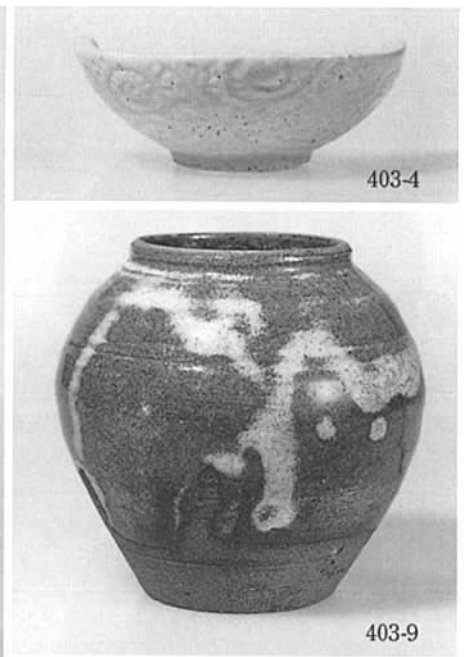
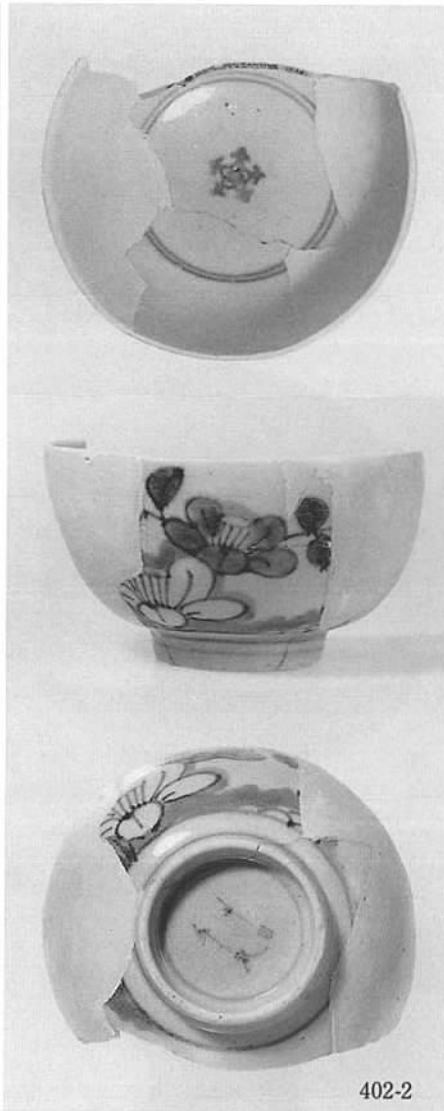
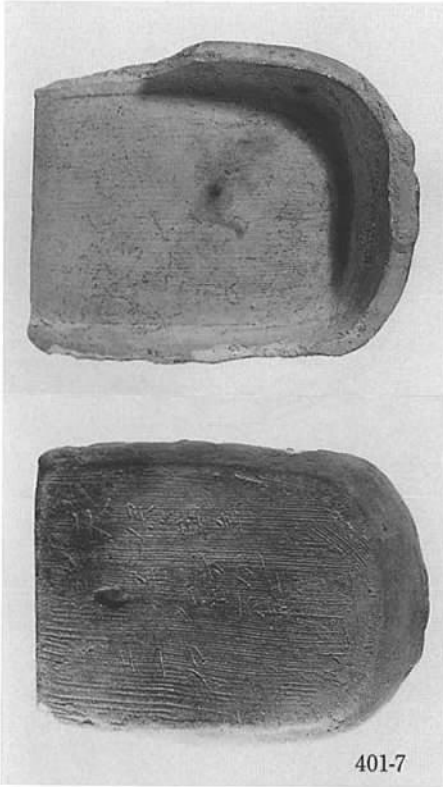
91号土坑(2)·93·101·103号土坑(1)出土遺物



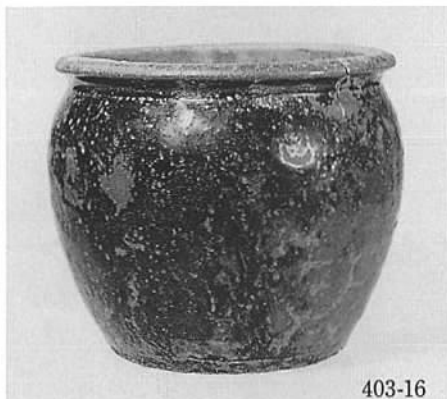
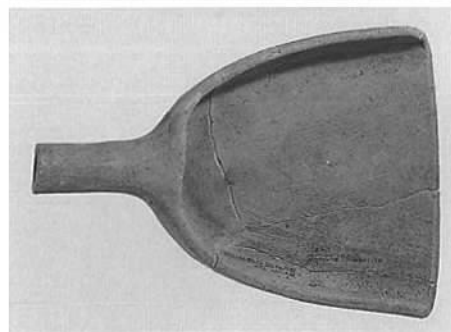
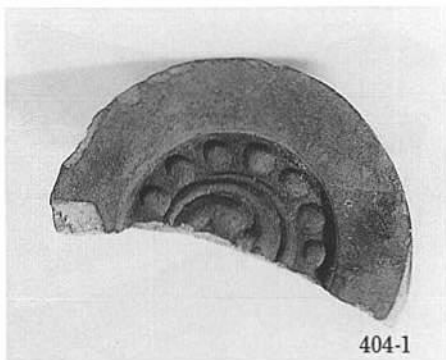
103号土坑(2)・129号土坑(1)出土遺物



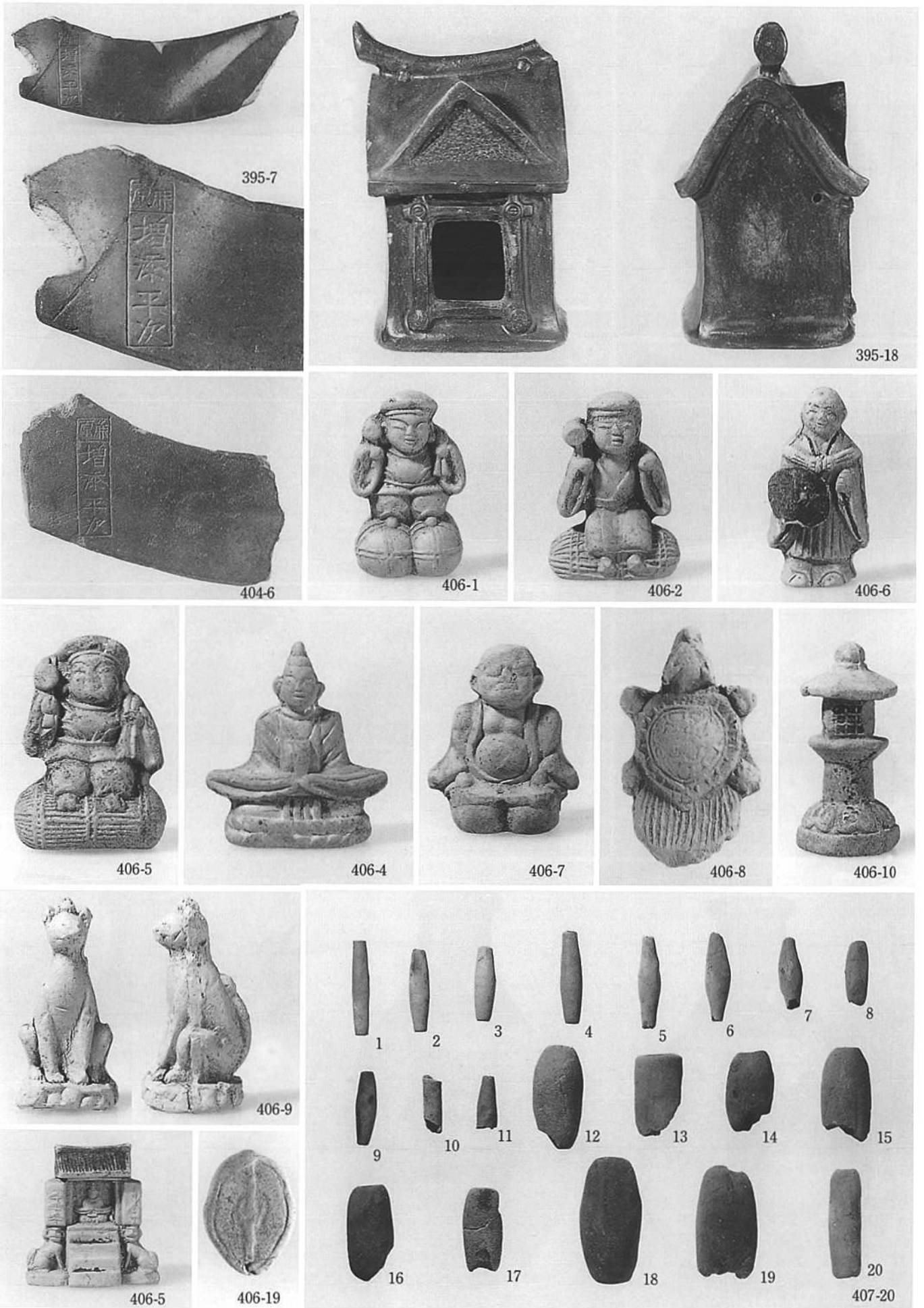
129号土坑(2)・139号土坑・その他土坑・溝・住居混入遺物



土坑・溝・住居混入・ピット・遺溝面出土遺物



出土瓦·遺構面出土遺物



瓦・土人形・玩具等出土遺物・近世土錘

報告書抄録

ふりがな	にしじんまちいせき							
書名	西新町遺跡Ⅲ							
副書名	県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告2							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第157集							
編著者名	重藤 輝行・森井 啓次・大庭 孝夫・唐木田 芳文							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東緯 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしじんまちいせき 西新町遺跡 12次	ふくおかし 福岡市 さわらくにしじん 早良区西新 6-1-10	401307	020240	33°	130°	19980422	5,214	学校 (県立修猷館 高等学校改築)
				34'	21'	}		
				50"	30"	19981228		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西新町遺跡 12次	集落跡	古墳	堅穴住居跡		土師器・鉄器・石器			
		近世 ～近代	土坑・校舎基礎石列		陶磁器・瓦・窯道具・ 土人形			

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年号 12	登録番号 2

西新町遺跡Ⅲ

福岡県文化財調査報告書 第157集

平成13年3月30日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社川島弘文社

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-41